

大阪大学大学院文学研究科

# 年報 2014

教育・研究(2012-2013年度)

定

一書生之面々、今更に金を行成に費す者

一初也、其語偏所而致、可謂也

一學法雅法、今更に、雅法に情、場也

一其お、之、彼、法、望、之、可、得、上、事

一南、病、持、病、之、事、也、今、更、に、病、守、之、事

一其、之、事、也、可、謂、也

一本業、書、精、之、事、也、今、更、に、善、術、詩、作

一澤、之、事、也、今、更、に、之、事、也、可、謂、也

一其、之、事、也、可、謂、也

一休、之、事、也、今、更、に、之、事、也、可、謂、也

一其、之、事、也、今、更、に、之、事、也、可、謂、也

一其、之、事、也、今、更、に、之、事、也、可、謂、也

大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

**大阪大学大学院文学研究科**

**年報 2014**

**教育・研究 (2012-2013 年度)**

**大阪大学大学院文学研究科**

**評価・広報室**

## 表紙解説

中井竹山筆「懷徳堂定書」

大阪大学懷徳堂文庫蔵

三〇・七×六六・四センチ

享保九年（一七二四）、大坂の有力町人によって創設された学問所懷徳堂は、江戸時代の後半、約百四十年間にわたって、日本近世の学術史と商道德の形成に大きな影響を与えた。大阪大学は、この懷徳堂を精神的源流と位置づけ、現在、文学研究科が（財）懷徳堂記念会と協力して、資料調査や公開講座の開催など、各種の社会教育活動を推進している。

本資料は、その懷徳堂の貴重資料の一つである。懷徳堂内に寄宿していた書生の生活態度について、第四代学主の中井竹山が安永七年（一七七八）に定めた規定である。毎月、五と十の付く休日に、寄宿生を講堂に集め、読み聴かせるのがきまりであったという。「箕踞偃臥」「無益の雑談」「昼寝宵寝」などを禁ずる一方、「手跡・算術・詩作・訳文」「和訳の軍書」「近代の記録物」など広範な学芸領域に関心を持つよう勸奨している。

同じく中井竹山が宝暦八年（一七五八）に掲げた「書生の交わりは貴賤・貧富を論ぜず同輩たるべき事」という開明的な懷徳堂の基本精神を受け継ぎ、総じて、学生相互の自律・自助を勧める内容となっている。

## 〔釈文〕

### 定

- 一 書生の面々互に申合せ行儀正敷相守り仮初にも箕踞偃臥等致す間布き事
  - 一 学談雅談の外、無益の雑談相い慎み、場所柄不相応の俗談、堅く停止と為すべき事
  - 一 当病持病等の子細も之が分無く昼寝宵寝は堅く無用と為すべき事
  - 一 本業出精の暇には、手跡・算術・詩作・訳文等、銘々の分相応に心懸け候て、間断之れ有る間布き事
  - 一 休日其の外閑暇の節に、和訳の軍書并に近代の記録物等心懸け読み申すべき事
  - 一 碁象棋謡等は世の交り并に学業退屈の氣を転じ候為に兼ねて差免じ之有り候へども休日の外は昼迄の内右様の雑芸に懸り候儀、無用と為すべき事
  - 一 銘々行届き申さざる事は、同輩の内より互に心を添へ切磋有るべきの事
  - 一 人の切磋を受け、却って立腹など致し候はば、傍人より早々その段、申し出るべき事
- 以上
- 安永七年戊ノ六月

# 年報2014

## 目次

大阪大学大学院文学研究科『年報 2014』の刊行に寄せて 和田章男	1
大阪大学大学院文学研究科『年報 2014』発刊の趣旨 評価・広報室	2

### 第1部 大阪大学大学院文学研究科および文学部における教育・研究活動の概要

1-1	学部・大学院の教育活動	4
1-2	教育・研究の支援体制	8
	研究推進室	8
	評価・広報室	10
	教育支援室	18
	国際連携室	23
	国際交流センター・留学生相談室	25
1-3	国際交流活動	27
1-4	外部資金の導入	31
1-5	エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）	34
1-6	多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム	35
1-7	頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム	36
1-8	卓越した大学院拠点形成支援プログラム	37
1-9	劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業 ー＜声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声＞芸術祭	43
1-10	懐徳堂研究センターの活動	46
1-11	埋蔵文化財調査室の活動	48
1-12	ハラスメント問題委員会の活動	51

### 第2部 各専門分野・コースにおける教育・研究活動の概要

2-1	哲学哲学史	55
2-2	現代思想文化学	69
2-3	臨床哲学	82
2-4	中国哲学	95
2-5	インド学・仏教学	106
2-6	日本学	114
2-7	日本史学	129
2-8	東洋史学	154
2-9	西洋史学	172
2-10	考古学	190

2-11	人文地理学	204
2-12	日本文学	210
2-13	比較文学	227
2-14	中国文学	238
2-15	国語学	245
2-16	英米文学	257
2-17	ドイツ文学	271
2-18	フランス文学	281
2-19	英語学	292
2-20	日本語学	301
2-21	美学・文芸学	321
2-22	音楽学・演劇学	338
2-23	美術史学	361
2-24	共生文明論	382
2-25	アート・メディア論	391
2-26	文学環境論	403
2-27	言語生態論	411
2-28	留学生専門教育	420
	編集後記	422

## 大阪大学大学院文学研究科 『年報2014』の刊行に寄せて

大阪大学文学研究科の教育研究活動の成果をまとめ、自己評価に役立てるための『年報』を隔年ごとに刊行しています。これまで6冊の『年報』を冊子体で刊行してきましたが、今年度からはウェブ上での公開に切替えることになりました。

第2期中期目標期間も後半に差しかかり、大学改革加速期間という位置付けのもと、スーパーグローバル大学の申請とも相俟って、教員の年俸制導入、海外短期留学を活発にするための学事暦の見直し、若手研究者・外国人教員の積極的採用、柔軟な人事制度、新たな入試制度の導入など、改革への動きが活発化し、大学改革は現在文字通り「加速」しています。今回刊行する『年報2014』が対象年度としている2012～2013年度は第2期中期目標期間の中盤の時期に当たります。本研究科のこの期間の教育研究活動を振り返るなら、「国際化」と「連携」がキーワードとして浮かび上がります。

2008年より始まったエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）の欧州域外協定校（2011年よりフル・パートナー）としての活動、また日独6大学学長会議（ヘキサゴン・プログラム）を起点とするISAPプログラムの協力大学としての活動も軌道に乗り、英語授業の開講、国際ワークショップの開催、学生・教員の派遣と受入れなど国際的連携・交流を活発に行っています。当該期間の2年間で、新たに海外の6大学と部局間交流協定を締結したことも、積極的な教育研究の国際化推進の結実です。

また、2010～2013年の3年間にわたって実施した「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」（日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」）により、総数142名の若手研究者及び学生を23の国・地域の大学・研究機関等へ調査・研究のため短期派遣した意義は大きく、組織として学生を海外派遣する気運が高まりました。同時期には「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」（日本学術振興会）によるイギリスへの1年間に及ぶ学生の派遣、また2012～2013年度には文部科学省の「卓越した大学院拠点形成支援補助金」によって多くの大学院生を国内外に研究調査のために派遣しました。

しかしながら、このような競争的外部資金には年限があります。継続的に学生の海外派遣・留学を支援するためには活用可能な自己資金も持つことが必要です。文学研究科・文学部「教育ゆめ基金」の大阪大学「未来基金」との統合は、寄附金増加に繋がり、学部学生の留学支援に活用することになりました。さらには大学院生の調査旅費や障害のある学生の支援等にも活用していくことを考えています。

研究・教育の国際化および連携強化の上で特筆すべきことは、「国際的社会連携型人文学研究教育クラスター」を創設したことです。国内外の大学・研究機関等とのより積極的な共同研究の推進を目的として、5件の共同研究を採択し、会議・セミナー等のための必要機材を備えた部屋を設けるとともに、学内の競争的資金「部局長裁量未来戦略経費」により支援することになりました。本研究科の大規模な共同研究を組織的に推進することに伴い、研究活動の可視化、および競争的外部資金獲得への準備態勢強化が可能になります。実際、共同研究の一つである「グローバルヒストリー研究」は全学の未来戦略機構の新しい研究部門として採択されることになりました。

地域との連携にも力を入れています。懐徳堂記念会、21世紀懐徳堂、同窓会などと連携して、多くの市民向け講座を開講し、「開かれた大学」としての役割を果たしています。なかでも特徴的な試みとして、文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」の補助金を受けて、「劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業」を実施し、地域の芸術関係の機関等と連携して実践的な社会人教育を展開しています。また、考古学講座が所蔵する野中古墳出土品である鉄製甲冑11セット等を、文化庁補助金、総長裁量経費及び部局の経費を用いて、保存修復作業を行いました。本出土品は重要文化財の候補となっており、その指定に向けて研究・修復作業を進展させたことは特筆に値するでしょう。

本研究科が擁する多彩な専門分野は、人文学の教育研究の重要な拠点を形成していることは確かですが、点を線に、線を面にすることによって、地域へそして世界へ、さらに開かれた知のネットワークを構築することをめざしています。

2014年9月

文学研究科長・文学部長  
和田 章男

# 大阪大学大学院文学研究科 『年報2014』 発刊の趣旨

大阪大学大学院文学研究科 評価・広報室

本書『年報2014』は、2012年度・2013年度の2年間における大阪大学大学院文学研究科および文学部の教育・研究活動について客観的にデータを集積し、その点検・評価、また今後の改革に当たっての基礎資料とすべくまとめられたものである。『年報』としては7冊目、継続的なデータ蓄積の期間としては16～17年目に当たる。

本書の構成は、これまで通り二部構成である。第1部「大阪大学大学院文学研究科および文学部における教育・研究活動の概要」は、文学研究科・文学部の教育および研究活動の全般に関わる事項を報告する。

第2部「専門分野・コースにおける教育・研究活動の概要」は、各専門分野・コースの教育・研究活動について、その特色、所定の項目ごとのデータ、および各専門分野・コースによる自己評価を提示する。

こうした資料の性質上、データを比較する上での質的連続性が重要であるので、上記の構成はもとより、データ収集の範囲や方法等に関しても、基本的には前号以前のものを踏襲している。しかしながら、大学を取り巻く状況の変化への適応のため、主として以下の2つの点で変更を加えているので、その点について、ここで説明しておきたい。

第一の大きな変更点は、冊子体による発行を取りやめ、電子ファイルでの公開のみとしたことである。これまでも『年報』は、その全号についてpdfファイル化したものを文学研究科ウェブサイト(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/>)を通して公開しているのであるが、これまでは冊子体に対する補助的役割のものと位置づけられてきた。しかし、文書の電子化はタブレットパソコンや電子書籍リーダー等の普及もあって近年加速的に進みつつあり、教育・研究や事務処理等、大学の諸活動においてそれら機器の活用はもはや当たり前のことになってきている。殊に『年報』のようなデータ集では、閲覧や過去のデータとの比較対照などの面で、電子データ化の利点が大きいのである。一方で、冊子体の発行は、印刷・製本、送付などに多額の費用を要し、送付先にも保管の負担をかけるものである。周知の通り、国立大学法人には経済的な合理化が年々強く求められている。そうした現状を踏まえ、より利便性が低いと考えられる冊子体の発行を取りやめることとしたものである。従前の冊子体に愛着がなおありの方もまたあろうが、こうした趣意、また状況についてご理解いただければ幸いである。

もう一つの大きな変更点は、人材養成に関わるデータの収集方法についての変更である。これまで、第2部「各専門分野・コースにおける教育・研究活動の概要」では、「I. 現在の組織 3. 修了生・卒業生」の表中「出身の研究者」において、当該年度中に学位を取得、ないし修了・卒業もしくは中途退学するなどし、かつ同年度中に常勤研究職への就職が決定した各専門分野・コース所属の正規学生の人数のみを示していた。また、「V. 基本情報 6. 専門分野出身の研究者」においては、上記に該当する者について、具体的にその氏名、終了課程、所属機関名、職名、就職年月を示していた。しかし、近年の一般的なあり方からすると、学位を取得するなどした同年度に即、常勤研究職を得ることは極めて稀であることから、過年度の学位取得者・修了者・卒業生などについても、当該年度に初めて常勤研究職を得た場合には、基本的にその情報を収集することにした。また、研究大学に対しては、以前に比してますます人材の流動性が求められている。本研究科でも、他大学で学位を取得したPD（ポストドクトラルフェロー）の受け入れや、本研究科で学位を取得した者の他大学でのPD採用がより増加しつつある。そうした人材の常勤研究職への就職もまた、本研究科における研究者人材養成の成果の重要な一端であることから、本号からは、その情報も併せて収集することとした。以上は研究者養成の現況に即した変更であり、その点についてはご理解を得られることと考えるが、前号までのデータとの対照の際にはご留意いただきたい。

次期には、国立大学法人の第2期中期計画が終盤を迎える。文学研究科にとっても極めて重要な節目を控えている今、本書を通して本研究科の教育・研究活動全般について広く知っていただき、忌憚のないご意見を頂戴して今後の糧とできれば、無上の幸いである。

# **第 1 部**

## **大阪大学大学院文学研究科および文学部 における教育・研究活動の概要**



\* コメントは、原則として2012年度および2013年度のデータに関するものであるが、『年報2012』に掲載されたそれ以前のデータも、参考のため提示しておいた。なお数値は原則として各年度4月1日のものである。

## 教育活動の基礎的データ

### 1. 大学院の教育活動

#### 1-1. 大学院博士前期・修士課程入学者

博士前期・修士課程の入学者数は減少傾向が続き、2009年度、2010年度には博士前期、修士課程ともに定員割れまで落ち込んだが、その後増加に転じ、2013年度には両課程ともに定員を満たす入学者をみるまで回復した。急激な定員割れに、一応歯止めがかかったように見える。ただ少子化と、構造的な不況がなお続くなか、全体として入学者数が減少傾向にあることは否めず、今後いかに学生を確保するかが最大の課題である。とくに問題として挙げられるのは、内部進学者が減少していることと、一年に2回、入試の機会を設けてはいるものの、秋入試合格者の他大学大学院（東大・京大のほか有力私大など）への流出が続いていることである。これらに対する早急な対策が必要である。

表 1-1-1 大学院(博士前期・修士課程)入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2004	77	7	15	99
2005	68	4	15	87
2006	61	3	9	73
2007	74	4	11	89
2008	70・18	4・3	10・0	84・21
2009	58・15	3・1	8・2	69・18
2010	48・12	4・2	6・2	58・16
2011	57・20	4・0	7・4	68・24
2012	50・13	5・2	11・3	66・18
2013	59・14	6・3	13・3	78・20

#### 1-2. 大学院博士前期・修士課程学生

2008年度の新専攻設置にともない増加した学生数は、それ以降、減少傾向を示した後、2012-2013年度には増加に転じている。ただ休学者数と留年者数の計の学生数に対する割合は、2012年度には博士前期課程で25%、修士課程で36%、2013年度には同じく29%と40%と高い割合となり、依然として改善の努力を要する状態が続いている。

表 1-1-2 大学院(博士前期・修士課程)の学生数、休学者数、留年者数、修了者数

年度	学生数	休学者数	留年者数	修了者数
2004	230	16	37	85
2005	223	23	39	100
2006	187	15	30	78

2007	193	21	31	59
2008	208・21	22・0	40・―	83・―
2009	188・39	18・0	40・10	77・11
2010	158・43	16・8	32・10	68・17
2011	158・49	17・8	32・9	60・10
2012	161・55	13・6	27・14	60・22
2013	173・50	21・8	29・12	68・19

### 1-3. 大学院博士後期課程入学者

2010年度には一旦大きく回復したものの、その後の減少傾向は続き2011年度から2013年度まで続けて定員割れかつ過去最少を更新している。社会人の入学状況については、従来とあまり変わることがなく、小規模な数に留まっている。外国人入学者数についても10人にも達しない状況が続いている。いずれの要素をみても定員以上の入学者の確保を図ることが課題となっているが、そのためには博士後期課程修了後の就職という、国家レベルで解決に当たらざるを得ない大きな難題を抱えている。

表 1-1-3 大学院(後期課程)の入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2004	45	5	15	65
2005	34	2	9	45
2006	44	3	9	56
2007	26	3	17	46
2008	30	4	13	47
2009	31	3	6	40
2010	36	4	8	48
2011	29	2	8	39
2012	27	4	4	35
2013	24	3	5	32

### 1-4. 大学院博士後期課程学生

学位論文提出者は、2010年度には前年に比べて半減、2011年度には大幅に増加したが、その後再び2010年と同水準となった。休学者数は大きな変化は認められず、学生数に対して2012年度で32%、2013年度では28%と高い水準で推移している。退学者についても大きな変化はなく、2012年度で14%、2013年度では13%とこの10年間の平均的な規模である。

問題は、学生数に比して、学位論文提出者数の率が低いことにあるが、この点は人文科学という研究分野の性格を考慮しながら、学生自身の研究能力の向上や教員の指導、研究環境の整備などの要因を探るとともに、課程修了後の身分・行き先の確保という深刻な問題をどのようにするのか、継続的に検討しなければならない。

表 1-1-4 大学院(後期課程)の学生数、休学者数、学位論文提出者数、退学者数

年度	学生数	休学者数	学位論文提出者数*	退学者数
2004	321	76	25	57
2005	294	77	28	36

2006	304	81	24	50
2007	290	93	41	46
2008	276	80	48(25)	46
2009	248	68	45(18)	23
2010	245	68	23(12)	40
2011	232	71	33(19)	37
2012	215	69	22(9)	31
2013	195	54	24(18)	26

(注)退学者には単位修得退学者をふくむ。\*( )内は単位修得退学者の論文提出数で内数。

## 1-5. 大学院研究生

2012年度・2013年度も、日本人・留学生ともに大学院研究生の数は、低い状態が続いている。とくに2013年度は過去10年間で最低の総数となった。ただし留学生について言うと、日本人学生数と同等もしくは凌駕する人数であり、研究生への希望者も少ないわけではないことが十分に考えられる。大学院で研究を続けてゆくだけの十分な能力がなく、研究生になれなかったケースも少なくない。研究生を院生への予備軍と見なすならば、今後、文学研究科として研究生をどのように受け入れて教育してゆくのか、検討してゆく必要がある。

表 1-1-5 大学院研究生数

年度	日本人	留学生	計
2004	20	2	22
2005	21	2	23
2006	14	7	21
2007	13	8	21
2008	8	9	17
2009	8	6	14
2010	6	5	11
2011	8	4	12
2012	5	8	13
2013	4	4	8

## 2. 学部の教育活動

### 2-1. 学部入学者

一般入試による入学は、過去10年間、定員(前期日程125名、後期日程40名、計165名)を5~10名程度上回る数で推移しており、大きな変化はない。外国人入学者は、2004年度から2005年度にかけては0名の状態であったが、2006年度以降、毎年入学者があり、2013年度では過去10年で最多の4名となった。

表 1-2-1 学部入学者数

年度	一般	外国人	計
2004	174	0	174
2005	174	0	174
2006	177	2	179
2007	173	1	174

2008	170	2	172
2009	171	3	174
2010	175	2	177
2011	171	1	172
2012	171	2	173
2013	172	4	176

## 2-2. 学部学生

学生数・卒業生数に大きな変化はない。休学者数は2008年度には減ったものの、翌2009年度には倍増し、その水準が多少の振り幅があるものの2012・2013年度と続いている。そのほかに、過去2年間の大きな変化はない。

表 1-2-2 学部の学生数、休学者数、留年者数、卒業生数

年度	学生数	休学者数	留年者数	卒業生数
2004	773	29	64	150
2005	791	35	87	179
2006	785	28	74	163
2007	793	31	84	188
2008	770	16	80	165
2009	779	34	84	166
2010	786	28	79	174
2011	777	30	73	165
2012	780	25	82	170
2013	776	34	79	193

## 2-3. 学部研究生

日本人、留学生とも、全体としては、2009年度までは漸減の傾向がうかがわれたが、2010-2011年度には回復し、その後2012-2013年度には再び減少もしくは横ばいの状態である。とくに留学生は、2011年度に激増した後減少したが2005-2006年度のレベルにまで戻ってきている。今後も、中国などアジアから多様な宗教・文化を背景にもつ留学生が増えることが予想でき、そうした学生のための環境作りも重要になっている。

表 1-2-3 学部研究生数

年度	日本人	留学生	計
2004	15	23	38
2005	12	14	26
2006	10	10	20
2007	9	10	19
2008	7	13	20
2009	2	8	10
2010	9	10	19
2011	8	20	28
2012	6	15	21
2013	5	18	23

## 研究推進室

### 組織・体制

研究推進室は、文学研究科の学生・教員の研究活動を推進するために、さまざまな形で研究環境の整備や研究遂行の支援を行う組織である。

研究推進室は文学研究科の教職員によって構成される。室長および副室長は、総務委員会の議を経て、研究科長より委嘱される。

研究推進室は、科研・共同研究部門、図書管理部門、紀要・論叢部門、懐徳堂部門の4部門より成り、各部門には室長が委嘱するチーフが置かれる。各部門の主な業務内容は次の通りである。

### 1. 科研・共同研究部門

- 1) 「文学研究科共同研究」の募集・選定、運営に関すること
- 2) 「公開研究会等への補助」の募集・選定、運営に関すること
- 3) 若手研究者のための「外国語論文発表補助」の募集・選定に関すること
- 4) 科研費その他の研究助成金等に関する公募情報の収集・提供および応募の支援に関すること
- 4) 教員・研究員の公募情報の収集・提供に関すること

### 2. 図書管理部門

- 1) 「学生自習室」の管理・運営および同室設置図書・機器の充実に関すること
- 2) 文学研究科の図書利用についての附属図書館との連絡・調整に関すること
- 3) 文学研究科「貴重資料室」の管理・運営に関すること

### 3. 紀要・論叢部門

- 1) 『大阪大学大学院文学研究科紀要』『待兼山論叢』の編集・発行および関連の諸問題の処理に関すること

### 4. 懐徳堂部門

- 1) 懐徳堂記念会業務の内、主として文学研究科に関わる業務に関すること
- 2) 文学研究科の附属施設である懐徳堂研究センターの業務に関すること

### 活動状況

1. 研究推進室関連ホームページを管理・運営し、研究推進のための情報提供を行った。
2. 文学研究科共同研究の募集・選定および運営に当たった（2012年度4件、2013年度4件採択）。また、公開研究会等への補助（文学研究科教員が中心となって開催する各種の公開研究会等の経費補助）を行った（2012年度7件、2013年度5件）。
3. 競争的外部資金に関する情報の収集・提供を行っ



<http://www.let.osaka-u.ac.jp/ja/about/facility/ppqld3>

たほか、日本学術振興会賞、日本学術振興会育志賞、石橋湛山新人賞、および大阪大学教員出版助成制度の候補者の選考・推薦を行った。

4. 科学研究費補助金の応募を支援する体制を整え、申請書作成セミナーの開催、申請時のアドバイスや申請書類のチェックを実施し、採択率の向上を図った。2013、2014の各翌年度における採択状況は次表の通りである。

年度	新規課題			新規課題＋継続課題	
	申請件数	採択件数	採択率(%)	交付件数	交付総額(円)
2013	43	33	77	92	224,110,000
2014	45	26	58	85	211,611,907

5. 日本学術振興会特別研究員の応募を支援する体制を整え、申請書作成セミナーを開催するとともに、申請時のアドバイスや申請書類のチェックを行った。
6. 文学部・文学研究科の教員、学生等が論文を執筆する際に必要となる著作権・肖像権等に関する留意点を解説した「著作権等に関するガイドライン」を作成し、公開した。
7. 文学研究科共同施設である学生自習室の効果的な運営につとめ、夜間および土曜日開室も実施した。
8. 附属図書館から依頼のあった各種調書の各専門分野・コース等への連絡・調整を行うとともに、研究科内図書業務を遂行し、雑誌・図書の利用を支援した。
9. 2009年度末に完成した文学研究科「貴重資料室」の管理・運営を進めた。
10. 『大阪大学大学院文学研究科紀要』第53巻、第54巻および『待兼山論叢』第46号、第47号を刊行した。
11. 若手研究者による研究成果の世界的な発信を奨励・支援するために、外国語論文発表補助（外国語論文や外国語による口頭発表の原稿のネイティブチェック費用の補助）を行った（2012年度12件、2013年度15件）。



日本学術振興会特別研究員  
申請書作成セミナー 2013年4月5日

(浜渦 辰二)

## 評価・広報室

### 組織・体制

評価・広報室は、2004年度の法人化に伴い、従来の企画・評価委員会と広報委員会を合わせて新たに設置された組織で、文学研究科・文学部の自己評価・外部評価と広報活動を担っている。

本室は、研究評価部門、教育評価部門、広報部門、ネットワーク部門の4部門によって構成され、室長を除く室員全員が、そのいずれかに所属している。研究評価部門は、教員・大学院生の研究業績をはじめとする各種データの収集や『年報』の刊行など、教育評価部門は、教育関係のアンケートやファカルティ・ディベロップメント（FD）の実施など、広報部門はオープンキャンパスの開催、高校生の大学見学や出張講義への対応、『文学研究科紹介』『文学部紹介』の刊行、文学研究科・文学部ホームページの運営など、また、ネットワーク部門は、部内サーバやネットワークの整備・運営などを担当している。

室長および副室長は、室全体の活動を統轄するとともに、全学基礎データの収集、外部評価、メディアラボの運営などの他、いずれの部門にも属さない仕事を担当している。各部門には、それぞれ部門チーフが置かれ、部門の活動を統轄している。また、教務補佐員1名、事務補佐員1名が配置され、室の事務全般を担当している。

(藤岡穰)

### 活動状況

## 1. 評価・広報室全般

### 1-1. 各部門の活動内容と会議（室会議、総務委員会）

本室は、研究評価部門、教育評価部門、広報部門、ネットワーク部門の4部門から構成されており、各部門の2年間の主な活動内容は、以下の通りである。

研究評価部門は、『大阪大学大学院文学研究科年報2012 教育・研究（2010-2011年度）』の編集と刊行を行った。また、教育評価部門はFDや大学院生を対象とする各種アンケートを実施した。広報部門は、学部紹介誌である『大阪大学文学部紹介』、研究科紹介誌である『大阪大学大学院文学研究科紹介』の編集・刊行をはじめ、文学部説明会や大学見学会の開催、高校への出張講義などを行った。さらに、ネットワーク部門とともに、HPの改編・維持・管理も行った。ネットワーク部門は、文学研究科サーバ、メールアカウント、LAN等の維持・管理にあたった。

本室の業務の決定は、基本的に室員全体が出席する全体会議で決定する。しかし、業務内容に応じて、各部門やその一部がそれぞれ独自に開催する部門会議や、外部評価や文学研究科サイトの刷新など特別な必要に応じて、所属部門を超えて選ばれた委員で構成される特別委員会の会議も重要な役割を担った。2012・2013年度は、全体会議は、原則として教授会の行われる日に定期的に開催され、他の会議は不定期に開催された。

なお、室長は、総務委員会において、本室に関わる事項の確認を行うとともに、総務委員会から本室への依頼事項を室に持ち帰り、室会議に諮った。副室長は、外部評価の責任者となり、2011年度に実施した外部評価への対応にあたった。

### 1-2. データ収集（全学基礎データ、教員基礎データ）と『年報』作成

全学規模の取り組みである「全学基礎データ」と「教員基礎データ」の収集については、教務補佐員、事務補佐員が担当し、その収集、データの整理などを行った。なお、「教員基礎データ」の収集は、「教員基礎データ」、『年報』、ReaDの三者に共通して利用できるデータベース作成用ソフトを利用しているが、この内ReaDについては2011年に運用を終了しており、2012-2013年度にはデータを提供していない。『年報』前号で指摘されたデータベース作成用ソフトの実情と合わない部分には適宜修正を加えている。

また、全学規模の取り組みである「部局別年度計画達成状況」に関するデータを教員と研究室から収集し整理し、報告した。内容からみて他の室の管掌である項目も含まれるが、データを提供する側と収集する側の双方の効率を鑑み、評価・

広報室でまとめて収集整理した後、当該部署へデータを提供する方式を 2013 年度に構築した。

このほか、文学研究科独自のものとして、2012 年度および 2013 年度においても引き続き、専門分野・コース別年度目標・達成状況シートを配布し、自己評価およびデータ収集を行った。

2012 年度には、これまで蓄積したデータに基づいて、自己評価書である『大阪大学大学院文学研究科年報 2012 教育・研究 (2010-2011 年度)』を刊行し、本研究科の専門分野・コース別の教育・研究状況とその自己評価を学内外に公開した。

(荒川正晴)

### 1-3. 年度計画・達成状況と評価・広報活動の概要

全学の中期目標・中期計画に基づいて定めた文学研究科の中期計画・中期目標の方針に則り、各年ともに年度計画の策定 (12 月) と達成状況の自己評価 (3 月) を行った。また、各年ともに全学基礎データの収集ととりまとめを行った。

2012 年度には 2010-11 年度の教育・研究活動、組織運営の自己評価書として『年報 2012』を刊行した。また、2011 年に実施した外部評価に基づいて自己点検と改善を行い、『外部評価報告書 2011 に応えて』を作成した。2013 年度にはそれらをホームページ上で公開するとともに、『年報 2014』のためのデータ収集、今後の外部評価等について検討を行った。2012 年度には 2011 年度に実施した博士前期課程と修士課程の大学院生を対象としたアンケート結果をもとに FD を開催し、かつアンケート結果をホームページ上 (部内限定) で公表した。また、2012 年度には博士後期課程の大学院生を対象にアンケートを実施し、2013 年度にその結果と対応状況をホームページ上 (部内限定) で公表した。

2012 年度には近年のホームページへの需要に応え、特に大学院志望者の増加を目的として、文学研究科・文学部のホームページを刷新した。サイト構造の見直し、検索機能の付加等によってユーザビリティを高めるとともに、担当者が編集可能なシステムを採用することによって更新業務の円滑化を図った。各年とも学生編集委員との共同による『文学部紹介』を作成した。オープンキャンパスはプログラムを改善し、事前予約制を導入するなど参加者の利便性を高め、高校等の見学会も積極的に受け入れた。さらに、2013 年度にはメディア・ラボと学生編集委員の協力を得て文学部紹介ビデオを改訂、製作し、以上により文学部の魅力を発信した。

なお、2013 年度にはスタッフとして事務補佐員 1 名が追加され、室体制が充実した。また、2013 年度にはメールサーバーをサイバーメディアセンターから情報推進部に移転することとなり、それに対応した。

(藤岡穰)

## 2. 研究評価部門

### 2-1. 年報

2012 年度に、過去 2 年間 (2010~2011 年度) における教育・研究活動の情報を収集整理した『大阪大学大学院文学研究科年報 2012』(A4 判頁。以下、『年報 2012』と略称) を刊行し、各教員および各専門分野、各室、事務局、学内の他部局、学外機関等に、450 冊あまりを配布した。基本的な体裁は過去の年報類に従った。第 1 部には研究科全体としての教育・研究活動に関する記事を、第 2 部には各専門分野・コース単位の活動をまとめた記事を、それぞれ掲載した。各専門分野・コースの記事では、組織・目標・活動の概要のほか、前々号・前号に引き続き、過去 2 年間の「自己点検・自己評価」を掲載することにより、これを作成する作業自体が自己点検の機会となるように考慮した。第 1 部では、当時プロジェクト期間途中であった「グローバル COE プログラム」の記事のほか、エラスムス・ムンドゥスと OVC のプロジェクト、さらに新たに始まった「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」と「卓越した大学院拠点形成支援補助金 (文化形態論専攻)」に関する記事が加わった。『年報 2012』は文学部・文学研究科の公式サイトにおいて PDF ファイルとして公開中である。なお、2012 年度末には『「大阪大学文学研究科外部評価報告書 2011」に応えて』も刊行され、これも公式サイトにおいて公開されている。



文学部・文学研究科公式 WEB サイトにて公開中



## 2-2. 専門分野・コース別年度目標

前記の『年報 2012』を 2012 年に刊行したことを受けて、各専門分野においてその後の改善状況の検証を行った。具体的には次期に刊行予定の『大阪大学大学院文学研究科年報 2014』に関して、早くも 2012 年度～2013 年度の評価用データを収集し、その収集を通じて、さらなる自己点検・評価を行うとともに、改善状況も検討した。また、専門分野・コースごとに、それぞれ年度当初に設定した年度目標に基づき、自己評価を実施した。具体的には、前記の『大阪大学大学院文学研究科年報 2014』に関するデータ収集プロセスの中で、各部署・専門分野における教育・研究・社会連携などの項目にわたる目標を示したうえで、それに関する活動の概要を報告し、あわせてさらなる自己評価・自己点検を実施した。このようにして、点検・評価・改善が連続して実行されていく動きが本格化し、実質性を持った自己点検・自己評価が実現することとなった。

## 2-3. 教員データ収集用エクセルシート

2007 年度以降、全学レベルの教員基礎データと文学研究科『年報』の作成用データを一括して収集するためのエクセルシートの運用を始めた。これ以降、全学の教員基礎データの公表フォーマットの変更に伴い、いくつかの修正を加えたりしてきた。このエクセルシートは、本研究科の教員情報収集の合理化に大いに役立ってきたと評価できよう。また、このシートに依拠するかたちで、新たに年報用原稿作成のためのシステムを構築した。

(荒川正晴)

## 3. 教育評価部門

2012 (平成 24)・2013 (平成 25) 年度に、評価・広報室ないしその教育評価部門が関わって行ったアンケートおよびファカルティ・ディベロップメント (FD) について、報告する。

### 3-1. アンケート

評価・広報室の教育評価部門は、2013 年 1 月 10 日～30 日に、博士後期課程の大学院生を対象に、授業改善を目的としたアンケートを実施して、アンケート対象学生 209 名のうちの 62 名から回答を得た (回答率 30%)。このアンケートの回答結果については、2013 年 10 月 24 日開催の教授会懇談会において討論し、2014 年 1 月に回答結果への対応状況を研究科ホームページの研究科内限定ページで公開した。

### 3-2. ファカルティ・ディベロップメント (FD)

2012 年 11 月 22 日、教育支援室と評価・広報室は FD 研修会を開催し、2011 年度に実施した博士前期課程・修士課程の学生を対象とするアンケートの結果について討議した。参加者は約 50 名であった。

また、2012 年 11 月 15 日、文学研究科・文学部は FD の一環として研究教育フォーラム (教員研究会) を開催し、その第一部では本研究科・桑木野幸司准教授が「思考の庭：知の編集空間としての初期イタリアの庭園」という題で、第二部では濱島敦俊名誉教授が「城隍から閻魔へー越境した神一」という題で講演を行い、質疑応答が交わされた。参加者は 53 名であった。

次年度の 2013 年 11 月 14 日、文学研究科・文学部は FD の一環として研究教育フォーラム (教員研究会) を開催し、その第一部では本研究科・市川明教授が「ブレヒトと広島・長崎：『ガリレイの生涯』の三つの稿について」という題で、第二部では辻成史名誉教授が「大阪大学によるトルコ地中海沿岸の遺跡調査：回想と展望」という題で講演を行い、質疑応答が交わされた。参加者は 36 名であった。

また、2014 年 1 月 23 日、教育支援室と評価・広報室は FD 講演会を開催し、大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室 URA チームの菊田隆氏と川人よし恵氏が「人文・社会科学研究をめぐる最近の動向」という題で講演を行い、質疑応答が交わされた。参加者は約 40 名であった。

(宇野田尚哉)

## 4. 広報部門

少子化とグローバル化が進み大学の再編が加速するなか、大学の広報が果たす役割はますます大きくなっている。とりわけ大学院の入学定員確保にも困難が続く状況にあって文学研究科の広報部門は、このような大学広報の役割をふまえて、とりわけ文学研究科・文学部から発信する情報がどのようなものであるべきかを常に意識し、研究と教育の現況を提供し続けるように努力してきた。以下では、冊子メディア、電子メディア（HP ほか）、オープンキャンパス・各種見学会に分け、それぞれのジャンルの活動について、2012年度から2013年度を概観し、その問題点と今後の展望を述べる。

### 4-1. 冊子メディア

文学部で広報活動の重要な一環として、毎年発行されてきた冊子『文学部紹介』がある。これは、全国各地の高校へ送付するとともに、大学説明会などで配布され、毎年5,500～6,000部を刊行し、文学部の研究と教育の現状や理念などを分かりやすく紹介したものである。

2013-2014年度版は、学生が編集委員として参加するという従来の方針を引き継ぎ、6名の学生が教員・スタッフと協力して編集にあたった。内容は、学生の視点から見やすく図式化されたカリキュラム構成や、学生対象のアンケート調査（「文学部実情調査」）、サークルやアルバイトを含めた生活についての記事（「文学部生のリアル」）、教育支援室、研究推進室、メディアラボなどの学生スペースの紹介（「使ってみよう！学生スペース」）、専修の学生の声の紹介（「研究室レポート」）など、学生の発想と工夫が随所に見られる冊子となった。

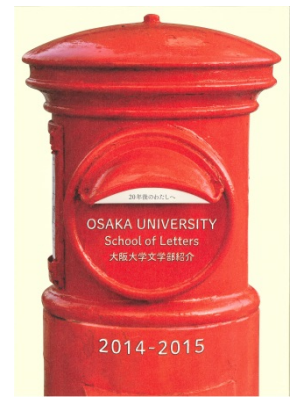
2014-2015年度版は、8名学生の編集委員が編集に加わった。今回も「専修語学選択の道」と題して語学選択について詳しく説明し、留学に関する情報と体験記のページ、大学入試の「合格体験記」、さらには資格取得についての体験記など、受験生や新入生にとって関心の高い情報を現場の学生が発信する形で多く載せている。もちろん、従来通りの専修紹介や教員紹介も掲載されており、全体では96ページの厚さとなった。

このような『文学部紹介』は、外からは見えにくい文学部の学生の生活ぶりを伝える、という本来の目的でももちろん重要な役割を果たしているが、同時に編集に加わった学生たちにとってはきわめて大きな教育的経験であり、さらに教員にとっても今日の学生の視点から文学部を見直す良いきっかけになっていると考えられる。

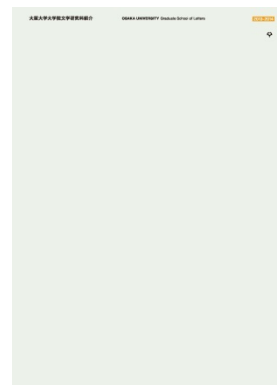
文学研究科については、『文学研究科紹介 2013-2014』を2,000部発行し、全国の大学等に送付した。体裁や内容は前号を引き継ぎ、各教員の研究紹介やメッセージを掲載するとともに、大学院サポート体制や就職状況など、学生にとって関心の大きい情報についても紙幅を割いている。

しかし、続く『文学研究科 2014-2015』は紙媒体での発行はとりやめとなった。大学院入学を志望する学生が主にHPから情報を得ている実情を汲んだ判断である。

なお、冊子ではないが、大学院、とくに入試に向けた広報として、メディアラボのデザインによるポスターの作成もおこなっている。



『大阪大学文学部紹介 2013-2014』 『大阪大学文学部紹介 2014-2015』



『大阪大学大学院文学研究科紹介 2013-2014』 大阪大学大学院文学研究科 入学者募集ポスター

### 4-2. 電子メディア

2012-2013 年度の広報活動として最も大きな仕事のひとつは、文学部公式サイト（以下 HP と略記）の全面的な更新であった。

大学と学部選択、及び大学院と研究科選択にあたって学生たちが参照する割合が最も大きいのが、文学部公式サイト(以下 HP と略記)であるが、今日、その役割はますます大きくなっている。ほとんどの新入生は HP を見て、詳しい情報を得ており、今後さらなる内容の充実が求められる媒体である。前記の『文学部紹介』が大阪大学文学部の受験を検討している学生にとって有益である一方、HP は大阪大学文学部に関心をもつきっかけ、入り口として、またグローバルな発信の拠点としての意味がより大きいと言える。(HP の具体的な刷新については、ネットワーク部門を参照)

### 4-3. オープンキャンパス・各種見学会

2012-2013 年度の広報活動として、第二に大きな変革のあったのは「オープンキャンパス」である。オープンキャンパスと各種見学会には、大阪大学の全学部が 8 月に行なう大学説明会の一環として文学部で行うものと、文学部独自に行なう文学部見学会あるいは教員が高校に出向く出張講義などがあるが、前者は大阪大学全体の動きと合わせて大幅な改革を行った。

毎年 8 月に行なわれてきた文学部「オープンキャンパス」(旧称「大学説明会」)には、これまで多くの高校生や父母が来られ、毎年千人前後の参加者を集めてきた。2012 年度からの大きな変更は、第一に運営方法の見直しと、第二にビデオなどを用いた映像による紹介である。まず、運営方法に関しては、本部や他学部の動きと連動して、①ウェブを利用したオープンキャンパス参加の事前登録制の導入、②模擬授業の拡充、③各ブロック代表による説明を室長による文学部概要説明に一本化し、運営方法における明快・簡潔化をはかった。それにより、プログラムは、学部長の挨拶、室長の「文学部概要説明」、在校生のスピーチを含む 1 時間で構成されることになった。文学部説明会と模擬授業は、2 回ずつ繰り返して行ったことによって、これまでのように説明会の教室に入れず別室でモニターのみで視聴するなど不評であった点を改善することができ、参加者にとってはより満足度の高いオープンキャンパスにすることができた。また、参加者からの疑問に対しては、別室を設けて質問に答えるなど理解を高める努力をしている。さらに、各研究室を開放し、自由に高校生に研究室の雰囲気味わってもらい貴重な機会なども提供している。

映像を用いた広報活動については、HP など含む広報活動全体に関わることであるが、2012-13 年度は従来の文学部紹介ビデオを修正し、新たに学生による文学部紹介ビデオを制作した。文学部紹介ビデオ旧バージョン(30 分)を見直し、古くなった情報(退職教員の登場や各専攻の教育・研究内容)を更新・削除して 20 分に短縮し、画面も見やすくするなどメディアラボの職員と広報チーフで相談しながら修正を行った。さらに、2012 年度からは新しく組織された学生映像制作委員が文学部の広報ビデオを制作、オープンキャンパスで上映した。学生の制作したビデオのなかでも教員インタビューの映像は非常にクオリティも高く、2013 年度から HP でも利用している。このように文学部が制作した公的なビデオと、毎年更新される学生制作のビデオの両方を用いることによって映像を用いた広報活動は多面的・多層的に展開することができた。

文学部独自の見学会は、希望する高等学校から学生部入試課入試企画係を通じて申し込みをもらい、評価・広報室で受け入れの可否を決定している。この見学会では、高校側の希望に合わせて柔軟にプログラムを組んで対応しているが、基本的には文学部紹介ビデオ(改変短縮版)を用いての全体の紹介、および模擬授業、そして研究室見学などが主なメニューである。見学に際してのアンケートは引き続き行っており、見学会終了後すぐに集計され、評価・広報室員に共有される体制となっている。



大阪大学文学部・文学研究科公式 HP  
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/>

2012年度には、大阪府立市岡高校、大阪府立天王寺高校、大阪市立咲くやこの花高校、大阪府立住吉高校、岡山県立岡山一宮高校、和歌山信愛女子短期大学附属高校、大阪府立池田高校、2013年度には、大阪夕陽丘学園高校、兵庫県立川西北陵高校、大阪府立市岡高校、金光八尾高校、三重県立木本高校、大阪府立天王寺高校、開明高校、和歌山信愛女子短期大学附属高校、石川県立金沢二水高校、大阪府立池田高校、大阪府立大手前高校の見学会受け入れを行った。このほか、教員の出張講義としては、2012年度に兵庫県立北摂三田高校に教員の派遣をした。これらの見学会や講義などでは、上記冊子媒体や募集要項などを提供して広報に努めている。



「オープンキャンパス」(2012年度)



「文学部見学会」(2013年度)

#### 4-4. 展望

以上のように、広報部門の活動は多岐にわたるが、課題は多い。学生編集委員を中心に企画・編集されてきた『文学部紹介』は内外から好評を博してきたが、人員スタッフ・財政的な困難から大幅な見直しを迫られることになった。その意味でも、HPを新しく更新することができたので、それをどのように活用運用していくかが課題である。グローバル化と同時に大学院の定員充足率が低下している現状から考えて、何を冊子体で伝え、何をポスターで訴え、何をHPで発信してゆくべきなのか、この大きな過渡期において、さらなる検証と実行が求められている。

ただし本来費用のかかる映像制作は、該当年度は担当者の専門性と合致したため修正作業や未経験者の学生指導を行うことができたが、今後継続できる保証はない。また、受験希望者、海外の留学希望者、在学生などをとりまく情報環境の変化などに伴い、視覚メディアを効果的に用い、英語で発信する必要に迫られており、今後の大きな課題である。

(北原恵)

## 5. ネットワーク部門

評価・広報室ネットワーク部門の主な業務は、文学研究科サーバ管理、教職員および学生へのメールアドレス管理、その他、研究科内ネットワーク設備の管理およびネットワーク・セキュリティの維持全般である。に加え、2012年度には文学研究科ウェブサイトの刷新を行った。以下に、「文学研究科ウェブサイト刷新」、「サーバ管理」「メールアドレス」および「ネットワークの維持」に分けて2年間の総括を行う。

### 5-1. 文学研究科ウェブサイト刷新

旧来、文学研究科・文学部から公式に提供するウェブ上の情報源としては、評価・広報室が作成する文学部・研究科サイトのほか、研究推進室、教育支援室、国際連携室がそれぞれ別個にウェブサイトを立てており、学内の組織を知悉していない閲覧者にとっては必要な情報が分散されており非常に不便であった。また各部署の担当者がそれぞれ別個にサーバに直接アクセスする形でサイトを管理・更新しているため、視覚的印象において統一感がないばかりでなく、誰がどのコンテンツについてどのようなアクセス権・編集権を持っているのかを一元的に把握することが事実上不可能であった。その弊を解消すべく、ウェブサイトの刷新事業を行った。

閲覧者の視点にたてば、4室のコンテンツの統合による情報の整理が眼目となる。編集・管理者の視点からは、CMS (Contents Management System) の導入により、デザイン上の統一性の向上、コンテンツごとの編集権限の管理の一元化、編集権限保持者のリモートアクセスによる編集作業の効率化と、公開権限の厳正化によるセキュリティの向上が眼目となる。

厳正なる審査を経て、CMS コミュニケーションズが刷新業務を委託した。刷新の具体的過程においては、閲覧者が把握しやすいコンテンツの再配置に加え、『文学部紹介』の学生制作ページからのコンテンツ移植や、英語版ページの拡充など、コンテンツの拡張も行った。管理・編集の権限に関して、旧来の4室のみならず、教務係、庶務係にも担当者を

おくことにより、事務系の情報をより正確かつ迅速にサイトに提供する体制が整った。

結果として旧来に比べ、サイト上の視覚的印象が向上し、情報へのアクセスが容易になっただけでなく、日常的な編集・管理作業が格段に効率的になった。

(輪島裕介)

## 5-2. 文学研究科サーバ管理

---

Web サーバには、文学研究科・文学部のホームページだけでなく、各講座・研究室・各教員のホームページ、教育支援室、研究推進室、国際連携室のホームページ、COE プログラム、アート・フェスティバル人材育成等のホームページなど、文学研究科・文学部の教育研究活動に関わる多くの情報が収められている。

学内のみならず、社会における IT への依存度が増せば増すほど、各種サーバの安定運用ということが求められるのであり、Web やメールが止まることで、さまざまな業務がたちまち大きな影響を受けることになるのである。しかも、外部からのアタックやウィルスメールなど、ネットワークに対する脅威への不安も日々高まる一方であり、セキュリティ保持の作業は、大変責任の重い業務である。ネットワーク部門では、Web サーバ、メールサーバ、ネームサーバを、サイバーメディアセンターによるホスティングサービスにて運営していたが、2013 年度にメールサーバを、本学情報推進部のサーバへと移行、2014 年度に Web サーバおよびネームサーバを本学情報推進部の管理下のサーバへと移行することで、これまで以上の安定性を保っている。一連の移行作業においては、基本ソフトウェアのバージョンアップおよび不要アカウントの整理もおこない、無駄なリソースをはぶくことで経費を削減し、今後数年間の運用にたえる環境を整えることになった。

## 5-3. メールアカウント

---

上に述べたように、文学研究科では、…@let.osaka-u.ac.jp のアカウントを発行している（サーバ管理自体はサイバーメディアセンターに委託、2013 年度より本学情報推進部に委託したが、メールアドレスの管理は引き続き、ネットワーク部門が行っている）。教員は全員、また文学研究科雇用の職員等もほぼ全員、このアカウントを利用している。なお、大学院生・研究生に対しては、教育システムによるメールが使えることから、研究科でのアカウント発行業務は停止することとなった。その結果、メールサーバのリソースを研究科スタッフに割り当てることで、メールサーバの安定した運営をおこなうことができるようになった。一方、メーリングリストの設定は増加しており、室・委員会等の運営だけでなく、教育と学生の連絡手段、さらには学生主体の研究会運営においても、メーリングリストの利用はもはや不可欠のものとなっており、新サーバではいままで以上に簡便なインターフェイスをつかった管理が可能となっている。

これだけメールの利用が必要不可欠のものとなった以上、もとめられるのは、安全・安心な運用である。即ち、サーバダウンの回避、ウィルスメール、スパムメール等の排除など、セキュリティと安定性の確保を意味する。サーバの維持については、前節に述べたとおりで、情報推進部によるホスティングサービスによって、より安定した運用がなされることとなった。

ウィルスメール対策についても、ODINS が提供するウィルス監視システムおよび情報推進部のウィルス管理システムと 2 重の監視を介することによって、かなり安全性が高まった。しかしながらこれも完全ではないため、引き続き、ユーザ端末におけるウィルスチェックなど、今後も油断なく続行していく必要がある。

## 5-4. ネットワークの維持

---

時折、ネットワークの不具合が生じる。端末がネットワークに繋がらない、あるいは極端に繋がりにくいなどの現象であるが、原因としては、端末の不具合、設定の誤り、通信機器やケーブルの不具合、ウィルスの感染等さまざまであり、その原因の特定が難しい。不具合が見出された際に、ODINS 機器の不具合であることが考えられれば ODINS による対応があるが、まずはネットワーク部門の教員が出向いて、原因の特定および問題解決にあたってきた。専門家ではない教員が、本来の教育・研究のための時間を割いて作業にあたることは、大変非効率的であった。こうした事態を改善するために、業者と契約し、ネットワーク不具合時には、問題の切り分けを依頼することができるようになっている。

2013年度には美学棟の改修にともない、ネットワーク配線の計画的な再敷設をおこなうことで、ネットワークトラブルが軽減された。その一方で、依然として旧式の機器が設置されている日本学棟では継続的にトラブルが発生している状況である。

## 5-5. 展望

---

すでに述べたように、Webサーバ、メールサーバ、ネームサーバは情報推進部のホスティングサービスに移行している。とはいえ、なお残る問題もあり、これを今後どのようにしていくかが一つの課題となる。ブロックごとにネットワークの管理責任者を設定して、問題が起きたら、まずはその中で対処していただくという管理方式を徹底していけば、ネットワーク部門の教員の負担もある程度軽減されるであろう。インターネットの維持・管理は、全てのユーザによる不断の努力が不可欠であるということ、文学研究科ユーザが自覚していくためにも、管理責任の分割は必要な方針であると考えられる。また Web やメールなどが授業や研究活動ならびに日常の業務に必要な不可欠なインフラであるという共通の認識はできているのであるから、ネットワークを専門的に管理統括する専門ないしは兼任の常勤スタッフを雇い入れるということも長期的な視野で検討する必要もある。

また、各ユーザが、必要な知識がないままネットワークに接続すると、問題が生じることがある。また著作権を侵害するようなダウンロードソフトウェアの使用も問題となっている。そのためにも、ネットワークについての情報提供がますます望まれる。研究科内向けのホームページに、ネットワークに関する情報をより多く載せるなどして、情報提供に努めているが、より一層の広報活動が必要となるであろう。

(吉田耕太郎)

## 教育支援室

### 組織・体制

教育支援室は、2012・2013年度も引き続き、以下の5つの部門に分かれて業務をおこない、室長（1名）および副室長（2名）で全体を統轄した。

- (1)教務・学位部門：部門チーフ、学位専門委員および室員
- (2)入試関連部門：部門チーフおよび室員
- (3)学習・生活支援部門：部門チーフおよび室員
- (4)就職支援部門：部門チーフおよび室員
- (5)共通教育部門：部門チーフおよび室員

このうち、教務・学位部門ならびに入試関連部門は、教務係と連絡をとりながら、所轄の学事業務を実施した。学習・生活支援部門、就職支援部門は、室窓口に配置された非常勤職員（2名）とともに各種の学習支援サービス業務をおこなった。共通教育部門は、全学教育推進機構との連絡を担当した。

各部門では、教授会開催日に定例会議を開催するほか、博物館実習委員会、教務係、庶務係、会計係とも連携して、機動的に日常業務を遂行した。また、隔週で室長、副室長、各部門チーフ、および教務係係員からなるチーフ会議を開催し、室全体の円滑な運営に努めた。

また、室内の学生用スペースでは、これまでと同様に、非常勤職員 2 名が窓口を担当して、常時学生からのリクエストや相談を受ける体制を維持するとともに、午後 5 時以後 7 時までは学生アルバイトを配置して、スペース利用の便を図った。同スペースにはコンピュータ端末 8 台を設置するほか、キャリア形成関連の書籍・雑誌などを常備し、また求人情報を掲示するなどして、学生の就職支援をおこなった。

さらに、非常勤職員により、室ホームページの維持・更新、ミーティングルームの管理、また授業用 AV 機器の貸し出しなどをおこなった。



教育支援室

### 活動状況

#### 1. 教育支援室全般

教育支援室の活動はルーティン的な学事業務にかかわるものが大半である。2012・2013年度における特記すべき取り組み等は、部門ごとに記す。

室全体としては、引き続き教務係および会計係と連携して、教室設備の更新などの教育環境の改善に取り組んだ。その結果、2013年度に芸術研究棟（旧美学棟）の耐震改修工事にともない、同棟内に講義室1室を増設した。また、日本学棟の多目的室を閉室とし、それに代わる学生の自主的な研究活動のためのスペースとして、新たに文法経講義棟1階にリサーチコモンズを設置した（実際の運用は2014年度から）。無線LAN設備を充実させることで、現在の社会情勢に対応する教育を実施できる設備環境も整えた。また、2012年度に全学の戦略的経費を利用して、日本学棟およびその周辺のバリアフリー化工事を実施した。

なお、2013年度に教育支援室主催のFD「人文・社会科学研究をめぐる最近の動向」を実施し、その後新たな試みとして当日問題となった人文科学評価の現状の改善に向けて、大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室URAチームと文学研究科教員との意見交換会を開いた。

（飯塚一幸）

## 2. 教務・学位部門

2012・2013年度において、教務・学位部門でおこなった特筆すべき取り組みは、以下の4点である。

### ① 授業科目および規程の整備

文学部・文学研究科で提供している科目のいっそうの可視化と体系化を図るため、2012年度新たに「外国語による発信力を育成する科目」のカテゴリーを設け、『学生便覧』でも別ページに掲載して、学生が国際的な発信能力の向上に取り組めるように工夫した。また、2013年度には同様の趣旨から、文学部規程および文学研究科規程を一部改正して、別表を専修・専門分野・コース毎の開講科目がわかる形式に改め、次年度の『学生便覧』に反映させることにした。

### ② 大学院における研究指導手続きの簡便化

大学院での研究指導に関わる「研究計画書」、「指導教員届」、「指導教員変更届」の書式を見直し、手続き自体を明瞭かつ簡便なものに改めることで、教員・学生の事務的負担の軽減に取り組んだ。

### ③ 文学部共通概説の実施内容の充実

1年次生に各専修に所属する学修システムの意義を早い段階から十分に理解させるため、2011年度から1学期開講の必修科目「文学部共通概説」において、ガイダンスと研究室訪問とを組み合わせ合わせたコンテンツを提供することにしたが、さらに文学部における学習姿勢に関する留意点の説明、および海外留学の情報提供を加え、その充実を図った。

### ④ 留学先での修得単位の認定手続きの整備

学生が休学期間中に留学先の大学で修得した単位を、本学部・研究科の単位として認定する手続きを整備し、認定作業のいっそうの円滑化を進めた。

これ以外に、全学的な制度の整備・変更に対応して、大阪大学未来基金専門教育優秀賞の選考基準の制定、博士学位申請手続きの変更、GPA制度の運用方法の決定などを行った。

（岡田裕茂・三谷研爾）

## 3. 入試部門

入試関連部門は、これまでどおり教務係と緊密に連携して、大学院入試および関連業務の計画、実施、改善などに取り組んだ。また、引き続き学部入試についても本部門で積極的に対応した。

2012・2013年度における重要な取り組みは、以下のとおりである。

### ① 大学院入試における著作権対応の厳格化

大学院入試問題に用いる引用等において、著作権に対する配慮が十分行われていなかったのではないかと認識に基づいて、本学・知的財産センターの助言を得つつ、書誌情報の示し方等の基準を見直した。また、受験生の入試問題閲覧の方法についても見直しを行った。

### ② 大学院入試の出題ミス防止策の強化

引き続き出題ミスを防ぐために、入試関連部門、研究科執行部、各専門分野・コースの3者による問題点検の体制を



強化し、点検回数を袋詰めでの最終点検を含めて計4回に増やすなどの対策を行った。

③ 大学院学生募集要項の見直し

複雑化した出願枠や入試方式が志願者に適切に理解されるよう、入学願書の体裁・文言等を細かくチェックし、必要な改訂を行った。

④ 学部入試制度改革にかんする検討

平成27年度以降の「高等学校学習指導要領改訂に伴う入試制度変更」への対応方式について入念に調査・検討し、部局と回答を行った。

⑤ 入試方法の適切性にかんする評価・検討

現行の学部入試、大学院入試の適切性を評価・検討するために、入試反省会（学部・大学院）、入試成績と卒業成績の相関性の調査（学部）、社会人特別選抜および留学生選抜による入学者へのアンケート調査（大学院）等を実施した。

（金水敏・清水康次）

## 4. 学習・生活部門

部門のルーティンとして、奨学金および奨学金返還免除関連、TA任用関連、インターンシップ関連、学習相談関連の各セクションについて担当者を定め、随時部門会議を開催するとともに、教務係・庶務係・会計係と連携して業務にあたった。

2010・2011年度の活動のうち、以下の3点を特記しておく。

① ガイダンスの拡充

例年通り大学院・学部の双方において新入生向けのガイダンスを実施し、単位履修方法や学生サポートの体制について説明したのに加えて、他大学出身の院生のみを対象とした「他大学から来た大学院新入生のためのガイダンス」を行い、図書館・生協・サイバーメディアセンター等、広く豊中キャンパス内の諸施設を紹介するとともに、文学研究科内の設備・サポート体制についてより詳細な情報提供を行った。

② 新制度のもとでのTA任用

2012年度から導入された新たなTA制度のもと、STA（シニア・ティーチングアシスタント）とJTA（ジュニア・ティーチングアシスタント）の二種に分けてTAの採用を行った。STAには授業の企画・立案にも関わるなど、より高度な補助業務を担当させることにより、キャリア形成教育の一環としての側面を強化した

STAの採用によって業務内容の多様化と様々なトラブルが予想されたため、TA研修会において、STAを経験した学生による講習の場を設け、新たに導入されたSTAに関してより理解が得られるよう図るとともに、新たにSTAに採用された学生については、全学で開催されるSTAのための講習会に全員出席させた。また、STAとそれを採用した教員を対象とするアンケートを行い、STA業務をより充実させるための一助とした。

さらに2012年度より、授業の単純な補助業務を担当するSA（スチューデント・アシスタント）を新たに設け、キャリア形成教育の多様化を図った。

③ 学習相談等の学生支援

「学習相談デスク」による学生のメンタルヘルスや専修決定、履修方法、進路相談など、学習上の悩みに対応する業務を行った。2012年度はのべ12件、2013年度はのべ16件の相談が寄せられた。

また、2012年度から学習障害を抱えた学生（学部1名）が在籍することになったため、当該専修・教育支援室および

学習相談ポスター

教務系の担当者が会合し、具体的な支援策について意見を交換した。2013年度からは聴覚障害を抱えた学生（大学院・学部各1名）が新たに在籍することになったため、当該専修・教育支援室・教務係およびキャンパスライフ支援センター障害学生支援ユニットの担当者が会合し、具体的な支援策について意見を交換した。上記聴覚障害学生2名に対する学習補助として、のべ73名による2514時間分のノートテイクを、また1名に対してのべ6名による69時間分の視聴覚教材文字起しを実施した。

毎年2回開催されるフロントスタッフ・ミーティングにおいて、他部局の学生支援担当者と情報交換し、複数部局の連携による支援のあり方を検討した。

2012年度に、保健センターの協力を得て、学生のメンタルヘルス・ケアをテーマにしたFD研修会「学生生活を支えるための教職員の関わり方を探る」を開催した。

(浅見洋二)

## 5. 就職支援部門

### ① 各種キャリア支援事業の実施

就職支援部門は2012・2013年度も、「就活サポート講座」（4回連続の就職セミナー）を軸に、各種のキャリア支援事業をおこなった。同講座のコンテンツは、昨今の就職状況全般の概観、就職活動スケジュール、自己分析・企業研究、エントリーシート対策、面接対策、公務員・教職志望者対策、合同企業説明会などである。

とりわけ12年度は、近年学生の関心が高い大学職員も含めて、公務員・教員の同窓生に、それぞれの職種について学生が志望するにあたっての留意点などを紹介していただいた。13年度は、新たな試みとして、低学年生向けに「働くこと」の意味を問う講座を実施した。また、就職内定学生数名に就職活動体験談を披露してもらっている。

さらに両年度とも、社会人学生教育支援基盤経費より資金を得て、13年度は特に正規の講座とは別に、文学研究科所属の現役の社会人学生および社会人学生修了者に、社会人学生としての経験談や就職上の問題点などについてディスカッションを行うといった企画を実施した。なお、面接対策については、これまでと同じく人間科学部学生支援室と連携して、合同模擬面接やグループディスカッションを実施した。

文学部単体主催での合同企業説明会も従来どおり行った。その他、文学部と関係の深い、あるいは学生の関心の高い企業が数社、単独で企業説明会を、就職支援部門の許可を得て開催した。

これまで通り、教育支援室にて必要な設備を整え、求人情報をはじめ、就職活動に有益な情報を提供し、メール配信を行った。

### ② 大学院進学&キャリアガイダンスの実施

引き続き、7月に大学院進学&キャリアガイダンスを実施した。これは、本研究科博士前期課程の修了者を講師に招き、それぞれの体験をふまえてそのキャリア形成の実際を語ってもらうことで、学部学生に大学院進学後の将来設計について検討を促すものである。参加者は40～60名で、大学院進学後のキャリアが多様化している現実を理解させるという点で、たいへん有意義であった。



大学院 進学&キャリアガイダンスポスター



2012 就活サポート講座  
「就活の春をひらく」(4月26日)

全学規模でさまざまな就職支援事業が展開されている現在、文学部・文学研究科の学生の特性とリクエストをふまえたサービスを提供する必要がある。

(須藤訓任)

---

## 6. 共通教育部門

本部門は、文学研究科の全学教育推進機構兼任教員3名で構成されている。うち2名が実施調整部に、1名（教育支援室副室長）が企画運営部に属し、大学全体の教育の質的向上を図っている。教育支援室における本部門の役割は、文学部に関わる共通教育関係の問題について検討するとともに、教育活動が円滑に行われるように尽力することにある。

現在、文学部は基礎教養教育科目だけでなく、専門基礎教育科目、現代基礎教育科目、基礎セミナーに多くの開講科目を提供しているが、全学に提供する科目の多様性を損なわず、その質を落とすことのないように、非常勤講師ではなく、専任教員が授業を担当するよう求められている。退職した教員の担当していた授業の継続など、難題を調整しつつ維持を図っている。

基礎セミナーは、少人数による対話・報告を重視した参加型の授業である。推進機構も開講に向けて力を入れている授業形態であるが、本部門からの開講募集も、これ以外の科目募集とは別の機会に行うことによって開講を促進し、文系部局としては比較的多くの基礎セミナーを提供することに成功している。専門教育との連繋では、専門基礎教育科目も引き続き、各専修から提供されている。

推進機構のFDであるが、2013年度、現代教養教育科目のFDを兼任教員の1名が担当した。前年度に引き続き、試験における不正防止をテーマとし、防止策など、さまざまな提言を集め、情報を共有することができた。これらは、専門教育の試験における不正防止にも役立てることが可能である。

(舟場保之)

---

## 7. 博物館実習委員会

博物館実習委員会では、毎年、博物館学（館園実習）と博物館学（学内実習）を実施しており、その他にも、学芸員資格取得に必要な科目を開講するために非常勤講師等の任用にかかわる交渉を行っている。館園実習は、2度の事前指導を行った後、2012年度、2013年度ともに大阪歴史博物館、大阪府立弥生文化博物館、大阪府立近つ飛鳥博物館、高島屋史料館の4館を受入機関として実施した。実習生の数は、2012年度が25名、2013年度が24名であった。学内実習は、大阪大学総合学術博物館の協力を得て実施した。実習生の数は、2012年度が35名、2013年度が39名であった。

(藤岡穰・高橋照彦)

## 国際連携室

### 組織・体制

室長 1 名、副室長 1 名、「連携推進部門」、「留学生受入部門」、「留学助成部門」、「エラスムス・ムンドゥス部門」の 4 部門の室員（各部門にチーフ 1 名を配置）、国際交流センター助教 1 名、同事務職員 1 名、および教務系の留学担当職員 2 名で室を構成し、活動を行う。

「連携推進部門」は部局間協定の締結・更新・終結のほか、外国の大学への教員の派遣、外国人招へい研究員の受入れ等を行い、海外の研究教育機関との交流をはかる。「留学生受入部門」は留学生の受入れと学習・生活支援、タンデム学習プロジェクトの運営等を担当する。「留学助成部門」は、グローニンゲン大学、マヒドン大学への夏期短期英語研修プログラムおよび協定校への交換留学プログラムを担当し、学生の海外派遣を促進する。「エラスムス・ムンドゥス部門」は、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム「ユーロカルチャー」の欧州域外フルパートナーとして、同プログラムに基づく学生・教員の受入れと派遣、英語コースの運営などを担当する。

さらに、国際連携室のもとに国際交流センター（室長および副室長がセンター長および副センター長を兼務）と留学生相談室を設置し、留学生の受入れ関連業務、留学生に対する学習・生活上のサポート、協定校での勉学を希望する日本人学生への広報活動やアドバイスを行うほか、タンデム学習プロジェクトやエラスムス・ムンドゥス・プログラムの運営補助、協定校との連絡・調整など、高度な実務を担当している。

### 活動状況

#### 1. 国際連携室全般

留学生数の増加と留学生経費の大幅な削減に同時に対応すべく、室予算の全般的な見直し、チューター制度の見直しとタンデム学習プロジェクトの構築などを行った。また、研究科の国際交流活動全般を幅広く広報することを目的とした『国際交流 Newsletter』を年 1 回刊行している。

「留学生のより高度な日本語による情報発信推進事業」により、外国人留学生特別経費の配分を 2012、2013 年度に受け、タンデム学習の充実、論文添削チューター制度の運用、外国人留学生の研究発表・論文執筆等の情報発信をサポートする等の事業を行った。また、2013 年度には総長裁量経費による「文学部・文学研究科正規留学生獲得に向けたプロモーション活動」として、東京・大阪で開催される国費留学生進学説明会へ担当者を派遣し、マンチェスター大学・ハイデルベルク大学でも進学のための説明を行った。

JASSO の留学生支援制度(短期派遣)が大幅に改訂され、奨学金の獲得がいっそう困難になっている現状を踏まえ、本学学生の海外留学の一助とすべく、部局独自の奨学金制度として、「教育ゆめ基金を利用した学部学生のための海外留学支援制度」を 2013 年度に発足した。

#### 2. 連携推進部門

1. 協定の締結。ウーディネ大学(イタリア)、カレル大学(チェコ)(以上、2012 年度)、エラスムス大学ロッテルダム(オランダ)、ウブサラ大学(スウェーデン)、国立台湾師範大学国僑院(台湾)、オロモウツ大学(チェコ)(以上、2013 年度)と部局間協定を締結した。また、ゲッティンゲン大学との部局協定は大学間協定となり、新たに締結し直した(2012 年度)。マンチェスター大学との部局協定を更新した(2013 年度)。

2. 外国人招へい研究員の受入れ。2012 年度 22 名、2013 年度 19 名を受け入れた。

3. ハイデルベルク大学日本学研究所が DAAD の資金によって 2011 年 10 月より開始した ISAP プログラムに協力して、2012 年度は教員 2 名を派遣し、3 名を受け入れ、2013 年度は教員 2 名を派遣し、2 名を受け入れた。

#### 3. 留学生受入部門

1. タンデム学習プロジェクトの新規開設。2012 年度、留学生へのサービス向上の試みとしてスタートした。タンデム

学習は、互恵性と学習者オートノミーという原則に基づき運用されるものであり、異なる言語を母語とする 2 人がパートナーとなり、互いの得意な言語を学び合うという学習方法である。この制度の運用のため、RA とアルバイトを雇用し、参加者募集のポスター掲示、HPでの情報提供から始めて、ガイダンスの開催、モニターリング、親睦会の開催、アンケート調査等を行って、学習効果の確認を行った。2012 年度は、33 組のタンデムペアが活動を行い、2013 年度は 30 組であった。学習希望言語に偏りがあることから、文学部・文学研究科内だけではなく、豊中地区の他部局や外国語学部でも広報活動を行い、マッチングが少しでもはかれるように現在も調整が行われているが、参加者の満足度は一様に高いものであり、今後も継続してプロジェクトを運用していくことが望まれる。

2. 留学生の受入れ。従来どおり、正規外国人学部留学生・(国費・私費)外国人研究生・交換留学生(部局間、大学間(部局分散、OUSSEP、Maple))、各種プログラム生の受入れ関連業務を行った。2012 年度は 162 名、2013 年度は 168 名の留学生が在籍した。

3. 他のルーティンワーク。奨学金推薦者の選考、メールマガジン『国際連携室便り』の編集・発行、来日後 1 年未満の留学生へのチューターの配置等、従来どおり実施した。

4. 交換留学生の受入れシステムの整備。交換留学生の受入れ手続きを簡素化し、応募書類の受付時期についても柔軟に対応することとし、また応募書類の内容改訂を行い、交換留学の受入プログラムに応じて必要となる情報を確認できるようにした。

5. 協定のない海外の大学からの大学院生の受入れシステムの運用。協定のない海外の大学からの大学院生を特別研究学生として受け入れる制度の運用を開始し、2012 年度、2013 年度ともに 2 名ずつの学生を受け入れた。

---

#### 4. 留学助成部門

1. 協定校への学生派遣。上記「3. 留学生受入部門」4 項記載のとおり、部局間協定校への学生派遣システムを整備し、年 2 回の募集を行って定期的・継続的に学生を派遣する制度を運用した。また、派遣生の選考に当たって、面接を実施した。

2. 留学案内の作成、留学説明会の開催。例年どおり、留学プログラム一覧を掲載したパンフレットを作成、配布した。また、2013 年度から学部独自の留学説明会を開始した。

3. 緊急連絡網の整備。海外に派遣した学生の緊急時に対応する緊急連絡網を整備した。

4. 夏期短期英語研修の運営と単位化。文系海外短期研修委員会と連携して、グローニンゲン大学・マヒドン大学での夏期短期英語研修プログラムの運営にあたった。また、その単位化に向けての検討を行った。

5. JASSO の留学生支援制度(短期派遣)に、2012 年度「外から見た人文学・人文学再発見に向けた留学プログラム」で応募し、2013 年度に追加採択となり、派遣留学生 1 名への奨学金給付が可能となった。

---

#### 5. エラスムス・ムンドゥス部門

1. ルーティンワーク。学生の受入れプログラムについて、5 科目から成る英語授業「世界の中の現代日本」(3 ヶ月)を計画・実施したほか、関連業務として、HP での情報提供、学生との各種連絡、宿舍の手配、講師の補充等を行った。同時に、希望する学生に対して日本語学習の機会を提供した。また先方への学生の派遣(推薦)について、学内で説明会を実施した。なお、2012 年度と 2013 年度はそれぞれ、4 名と 5 名の欧州からの学生を受け入れ、派遣については 2012 年度に 1 名を奨学生として派遣した。教員については、コンソーシアム校で開催されるマネージメントミーティングやインテンシブプログラムに 2012 年度 2 名、2013 年度 2 名を派遣したほか、招へい研究員として、2012 年度に 2 名、2013 年度に 1 名(もう 1 名は体調不良のため辞退)を受け入れた。

2. その他の対応。開講科目 15ECTS から 25ECTS への変更への対応や、欧州域外フルパートナーとしての参加など、当該プログラムへの積極的な参画を推し進めた。その他、新規開設が検討されている Ph.D. コースに参加するための準備も行った。

(岡田禎之)

## 国際交流センター・留学生相談室

### 組織・体制

国際連携室のもとに国際交流センターおよび留学生相談室を設置している。

国際交流センターは、センター長 1 名（国際連携室長兼任）、副センター長 1 名（同副室長兼任）、助教 1 名、事務職員 1 名で構成され、それに留学生専門教育教員 1 名が加わって、オリエンテーション、親睦パーティーといった各種行事の実施、エラスムス・ムンドゥス・プログラムや ISAP プログラムの運営補助、教務係や庶務係と連携して留学生および招へい研究員の受入れサポートなど、国際交流に関する様々な業務を担当している。

留学生相談室は、前記助教 1 名、事務職員 1 名、留学生専門教育教員 1 名によって運営されている。助教および事務職員は、留学生からの学習・研究、生活などについての様々な質問や相談の窓口となるほか、協定校をはじめとする海外の大学への留学についての情報を提供している。留学生専門教育教員は、論文作成法と実践専門日本語の授業を開講するほか、必要に応じて個人指導も行っている。

### 活動状況

#### 1. 留学生相談・留学相談

留学生相談室では、①留学生の学習・研究や生活についての質問・相談、②留学に関する質問・相談などに対応している。相談・質問等での訪問者数は、2012 年度約 600、2013 年度約 600。

① 留学生の学習・研究に関する相談・質問は留学生の種別によって異なる。交換留学生では、授業登録や単位の取得、成績についての質問が多く、研究生や正規生では、大学院入試、奨学金の応募情報についての一般的なことから、研究の方法や学位論文について、研究室の同輩・先輩に尋ねるべき専門分野・コースに関するものまでより幅広い質問・相談が寄せられる。長期にわたって在籍する正規生に特徴的な、休学・退学・転学といった修学制度については、教務係と連携のうえ対応している。また、例年特定の時期に寄せられる生活上の問い合わせとしては、在留資格の延長・変更手続きといった手続きについて、あるいは、生活用品の入手・処分方法や引越しに関する問い合わせがある。ときおり寄せられるのが医療機関の受診についての問い合わせである。質問・相談内容によって即答・即決がむずかしい場合は、1. 必要な情報の収集と提供を行う、2. 状況に応じて指導教員や学内外の専門の相談窓口との連携を図りながら対処する、3. 「大阪大学留学生支援フロントスタッフネットワーク」（留学交流に携わる学内の教職員で組織、年 4 回定例ミーティングを開催）を活用して適切な対処の方法を探る、といった仕方に対応している。

② 2012 年から 2013 年にかけては部局間協定校の新規締結・更新が 7 件あり、全学的に募集される学生の海外派遣プログラムや奨学金も格段に増加した。これに合わせ協定校への留学に関する質問・相談も増加傾向にある。教務係を通じて本部事務局から提供される留学関係情報の周知を図り、それぞれの相談・質問内容に応じて本部事務局や協定校などと連絡を取りつつ対応している。質問・相談内容は、留学先の選び方、申請時期等のスケジュール、交換留学等で利用・申請可能な奨学金、留学先の大学に提出すべき書類（申請書や推薦書）、ビザ申請・取得手続などについてである。

#### 2. その他の支援活動

1. 新規入学の留学生には在籍する研究室の学生がチューターとして配置されている。留学生が日本での、とりわけ、文学部・文学研究科での学生生活になじむためのサポートができるよう、チューターの新規採用者を対象に説明会を実施している。また、学位論文執筆者には、日本語の添削を目的とする「論文添削チューター」が配置されていたが、2012 年より「論文添削アルバイト」として制度が改められた。これにより在籍学生に限定されることなく、研究室の先輩などにも添削を依頼することが可能となった。

2. 国際教育交流センターや本部事務局で企画・実施される日本語や英語でのプログラム、ホストファミリープログラム、地域の学校の国際理解プログラム、留学生を対象とした学内外のイベントや課外活動、奨学金、寮に関する情報を提供し、必要に応じて申込み手続等を補助した。

3. エラスムス・ムンドゥス・プログラム、ISAP プログラムといった研究科で運営するプログラムについて、関係部門や事務部と連携しつつ、プログラムの運営をサポートした。

4. 学生派遣については、交換留学や短期語学研修、学内で実施されているプログラムをはじめ、海外の研究・教育機関への留学を希望する学生に関連情報を提供した。海外留学オリエンテーションや各種プログラムへの参加者を募るとともに、必要に応じて応募書類の作成補助などを支援した。また、2013 年より交換留学に参加する学部学生を対象とした留学支援として「ゆめ基金」の運営がスタートし、学生への募集案内から留学助成金の支給までをサポートをした。

### 3. 年間行事

留学受入れに関連しては以下の行事を実施した。

- ・新入留学生向けのオリエンテーション（4月、10月）
- ・タンデム学習（2012 年前期・後期、2013 年前期・後期）
- ・チューター説明会（2012 年 5 月、10 月、2013 年 4 月、10 月）
- ・浴衣教室（2012 年 7 月、2013 年 7 月）
- ・着物体験教室（2012 年 12 月、2013 年 12 月）

学生の留学支援については説明会を開催した。

- ・留学説明会（2013 年 5 月）
  - ・Erasmus Mundus Euroculture 奨学生説明会（2012 年 10 月、2013 年 10 月）
  - ・留学助成金「ゆめ基金」募集案内（2013 年 6 月、2014 年 2 月）
- 留学生だけでなく、文学部・文学研究科の学生、教職員との交流の機会として以下の企画を実施した。
- ・ランチタイム交流会（2012 年 5 月、2013 年 4 月）
  - ・ことばの教室 「英語セミナー」（全 4 回）（2013 年 2 月）  
「韓国語」（全 20 回）（2013 年）
  - ・音楽鑑賞「お琴と尺八のコンサート」（後援）（2012 年 11 月）
  - ・親睦パーティー（2012 年 11 月、2013 年 11 月）



オリエンテーション 2013 年 4 月



着物体験教室 2013 年 12 月



ことばの教室 2013 年 5 月



親睦パーティー 2012 年 11 月

### 4. 広報活動

文学部・文学研究科で実施する国際交流活動の記録・広報を目的に、『国際交流ニューズレター』を年 1 回刊行した（3 号、4 号）。また、文学部・文学研究科の学生が申請・利用できる留学・研修についての情報をまとめた冊子「Let's study abroad」を作成した。

（西田充穂）

## 客員研究員の受入れと本研究科教員の海外における研究活動

## 1. 外国人招へい研究員

出身国	2012年度		2013年度	
	人数	受け入れ専門分野・コース	人数	受け入れ専門分野・コース
中国	5	日本学、中国文学、国語学、日本語学2	9	東洋史学、日本学、日本文学3、中国文学2、日本語学、演劇学
韓国	3	日本学、国語学、日本語学	4	日本学、日本語学3
台湾			1	比較文学
シンガポール	1	演劇学		
インド			1	日本文学
アメリカ	4	西洋史学、人文地理学、日本文学、音楽学	1	日本文学
イギリス	1	フランス文学		
ドイツ	4	哲学哲学史、日本史学、西洋史学、日本文学		
フランス			1	フランス文学
イタリア	1	国語学		
ハンガリー	1	哲学哲学史		
ポーランド			1	美学
イスラエル	1	哲学哲学史		
ロシア	1	日本語学	1	日本語学
合計	22		19	

## 2. 教員の海外研究活動

	外国出張		海外研修	
	2012年度	2013年度	2012年度	2013年度
	28ヶ国・地域 延べ115名 (130件)	28ヶ国・地域 延べ120名 (140件)	11ヶ国・地域 延べ14名 (16件)	16ヶ国・地域 延べ19名 (29件)
中国・香港	21	24		
韓国	17	12	4	4
台湾	7	9	1	
タイ	5	7		3
シンガポール	1	3		
カンボジア	2	2		1
ベトナム		2		
インドネシア		1		
インド	3	5		1
アメリカ	15	13	2	1
カナダ	3	1	1	
メキシコ	1			
ブラジル	3			
チリ	1			
イギリス	9	17	1	1
フランス	2	5	1	6
ドイツ	13	13	2	2
アイルランド			1	



スイス		1	1	
イタリア	7	4		
スペイン		2		
ポルトガル		1		
ギリシャ		2		
チェコ	1			1
ブルガリア		1		
セルビア		1		
スロベニア				1
ハンガリー				1
オーストリア	2			1
ポーランド		5		
スウェーデン	3	1		
フィンランド	2	1		
ノルウェー	1			1
デンマーク		1		
ベルギー				1
オランダ	2	2	1	3
トルコ	2	1	1	
イラン	1			
サウジアラビア	1			
ヨルダン	1			
ロシア	1			1
オーストラリア	3	3		

## 留学状況および留学生の受入れ状況

### 1. 留学状況

#### 学生派遣

#### 2012年度

留学等による派遣は34名。交流協定による派遣は15名（部局間8名、大学間7名）

休学中の留学、海外渡航、国外研修は16名。

	件数		博士後期課程						博士前期課程				修士課程				学部			
			3年		2年		1年		2年		1年		2年		1年		4年		3年	
	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学
イギリス	5	2				1			1								2		2	1
アメリカ	2	3		2														1	2	
ドイツ	4	1	1						1				1				2			
オーストリア	2	1		1					2											
オーストラリア	1	1			1													1		
韓国		2		1																1
チェコ	1	1	1									1								
ベトナム	1	2							1	1								1		
中国		2		1										1						
インドネシア		1		1																
カナダ	1								1											
カンボジア		1																1		
タイ		2		1														1		
フランス	1		1																	
台湾	1		1																	
合計	19	19	4	7	1	1	0	0	6	1	0	1	0	2	0	0	4	5	4	2

## 2013年度

留学等による派遣は18名。交流協定による派遣は15名（部局間8名、大学間7名）

休学中の留学、海外渡航、国外研修は21名。

	件数		博士後期課程						博士前期課程				修士課程				学部					
			3年		2年		1年		2年		1年		2年		1年		4年		3年		2年	
	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学
イギリス	8	3	2	1									1				2	1	3	1		
アメリカ	3	5		3					1					1			1	1	1			
ドイツ	3	2	1	2					1								1					
フランス	1	2		1														1	1			
オーストリア	1	1						1	1													
韓国		2		1						1												
中国		2		1										1								
タイ		2		1															1			
チェコ	1	1	1									1										
トルコ		2																2				
フィリピン		1																		1		
オーストラリア	1																					1
インド		1																1				
カナダ		1																1				
合計	18	25	4	10	0	0	0	0	3	2	0	1	1	2	0	0	4	8	5	2	1	

## 大学で実施されている語学研修等参加者

	エセックス		モナシュ		グローニンゲン		マヒドン		ボローニャ		その他		合計	
	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部
2012年	-	3	-	6	-	4	-	1	1	0	1	1	2	15
2013年	1	4	-	3	-	4	-	0	1	3	1	4	3	18

## 2. 留学生の受入れ状況

### 留学生受入れ

課程		研究科						
		博士後期課程			博士前期課程		修士課程	
学年		3年	2年	1年	2年	1年	2年	1年
2012年		19	8	4	8	12	4	3
2013年		13	4	5	13	14	3	4
学年		学部						
		4年	3年	2年	1年			
2012年		3	2	1	2			
2013年		2	1	2	6			
		研究科			学部			
		研究生	特別研究学生	特別聴講学生	研究生	特別聴講学生		
2012年		9	6	14	23	14		
	部局間	-	1	5	-	0		
	大学間	-	4	9	-	14		
2013年		5	7	18	24	15		
	部局間	-	1	5	-	1		
	大学間	-	4	13	-	14		
	協定外	-	2	-	-	-		

## 留学生の出身国・地域

	2012年度	2013年度
	出身国・地域 23	出身国・地域 21
中国	50	56
韓国	28	30
台湾	11	11
タイ	1	1
シンガポール	1	
マレーシア	1	1
インドネシア	1	1
インド	2	1
アメリカ	5	2
カナダ	1	
メキシコ	1	1
ブラジル	3	3
アルゼンチン	1	1
フランス	3	4
ドイツ	9	11
イタリア	2	3
スペイン	1	
チェコ		1
ブルガリア		1
スロベニア	1	
ルーマニア		1
ポーランド	2	
スウェーデン		2
ベルギー	1	
オランダ	2	
ラトビア	1	
イラン		1
イスラエル		1
ロシア	4	3
合計	132	136

## OUSSEP, Maple の受入れ

	プログラム	OUSSEP		Maple	
		研究科	学部	研究科	学部
2012年		1	17	2	10
	部局間	0	0	1	1
	大学間	1	17	1	9
2013年		2	11	5	14
	部局間	0	0	2	6
	大学間	2	11	3	8

## 留学生の博士学位取得

留学生（元留学生）の博士号取得

専門分野	2012年度	2013年度
哲学哲学史		1
日本学		1
日本文学	5	3
比較文学	1	
日本語学		1
美学	1	
音楽学	1	
計	8	6

(西田充穂)

ここ数年来変わらぬことであるが、文学研究科では、教育・研究活動における外部資金の役割はますます大きくなっている。外部資金は種々のかたち、様々な機関のものが導入されており、その全容の把握は難しい。研究代表者となっている場合だけでなく、研究分担者となっている場合でもかなりの件数と金額が導入されていると考えられる。逆に研究代表者となっている場合でも、金額のすべてが文学研究科で支出されているわけではなく、他大学・他機関の研究分担者への配分金の存在もある。したがって、ここでは件数や金額が把握しやすい、文学研究科の構成員が代表者となって取得している外部資金についての概要を紹介しておきたい。なお、文学研究科の教員だけでなく、大学院生が獲得している外部資金も考慮に入れることとする。

\* コメントは、原則として2012年度および2013年度のデータに関するものであるが、『年報2012』に掲載されたそれ以前のデータも、参考のため提示しておいた。尚、表中2010年度と2011年度についての科研費予算総額と増減は、『年報2012』上に記載の該当項目に訂正を加えている。

## 1. 科学研究費

科学研究費の取得について件数、金額（直接経費のみ）の増減をまずみておくことにしたい。ここでは、日本学術振興会の特別研究員奨励費も含まれる。

表 1-4-1 取得された科学研究費の件数と金額変化およびその科研費予算総額との比較

年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度
件数	89	92	94	108	121	128
増減	1.29	1.03	1.02	1.15	1.12	1.06
金額(千円)	182,820	157,090	161,560	181,930	188,017	202,700
増減	1.32	0.85	1.03	1.13	1.03	1.08
科研費予算総額(億円)	1,932	1,970	2,000	2,633	2,566	2,381
増減	1.00	1.01	1.02	1.32	0.97	0.93

本表には表示されていないが、2004・2005年度において横ばいであった科学研究費の取得件数は、2006年度から上昇に転じ、2012・2013年度においても増加し続けている。また、2011年度に科研費の一部基金化されたため一時的に全体の予算総額が大幅に拡大するも翌年から微減しているが本研究科の取得金額は増大している。全体としての文学研究科における件数と取得総額の増加は、申請者の努力の反映であると考えられる。

表 1-4-2 取得された科研費の内訳

年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度
特定領域研究件数	3	3	1	0	0	0
同金額(千円)	18,200	16,900	7,300	0	0	0
基盤研究(A)	4	5	4	8	8	8
同金額(千円)	42,700	38,100	37,600	58,600	57,800	62,700
基盤研究(B)	18	14	14	14	16	15
同金額(千円)	63,500	44,400	50,400	44,400	49,200	42,700
基盤研究(C)	37	32	31	31	39	43
同金額(千円)	28,100	34,700	27,600	29,600	38,867	44,800

基盤研究(A)は、2010年度までの取得数は4・5件ほどであったが、2011年度から8件に倍増し2012・2013年度においても高い水準を維持している。なお、特定領域研究は2008年度より新規募集を行ってないため継続のみである。また、基盤研究(B)は、2009年度には件数・金額とも減少に転じ、2012年度は上昇したものの2013年度は減少しほぼ横ばい状態である。このほか、基盤研究(C)については、2009年度以降2011年度までは横ばいであったが2012・2013年度は上昇している。

## 2. その他の外部資金

科学研究費以外の外部資金もひきつづき極めて重要である。また、研究拠点形成費等補助金など近年始まった助成金制度や、各種財団などからの奨学寄附金も積極的に申請・受給している。この中には大学院生が取得しているものもあるが、その件数、金額ともに2012・2013年度に関しては増加している。ただし、大学院生が獲得した助成金については、会計担当部署が資金獲得者の自己申告により把握している数値に過ぎず、すべてを把握できているわけではない。さらに、2009年度から開始された組織的な若手研究員等海外派遣プログラム(OVC)により、また2010年度から頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラムが新たに採択されたことにより、院生らが若手教員やポスドクとともに海外調査に従事できる機会が一举に拡大したことも考慮しなければならないであろう。また、2012・2013年度に博士課程の院生が学修研究に専念する環境を整備するための卓越した大学院拠点形成支援補助金(若手研究者養成費)も大きい。なお2011年度から国宝重要文化財等保存整備補助金による事業、2013年度から文化芸術振興費補助金(大学を活用した文化芸術推進事業)が始まっている。

種類	件数と金額	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度
グローバル COE	件数	1	1	1	1	—	—
	金額(千円)	4,300 <sup>1</sup>	2,400 <sup>1</sup>	3,400 <sup>1</sup>	1,050 <sup>1</sup>	—	—
組織的な若手研究 員等海外派遣プロ ラム(OVC)	件数	—	1	1	1	1	—
	金額(千円)	—	936	28,697	30,558	25,109	—
優秀若手研究者 海外派遣事業	件数	—	1	—	—	—	—
	金額(千円)	—	4,722	—	—	—	—
研究拠点形成費等 補助金(海外先進 研究実践支援) <sup>2</sup>	件数	1	—	—	—	—	—
	金額(千円)	2,620	—	—	—	—	—
頭脳循環を活性化す る若手研究者海外派 遣プログラム	件数	—	—	1	1	1	—
	金額(千円)	—	—	11,574	23,797	20,347	—
国宝重要文化財等 保存整備補助金	件数	—	—	—	1	1	1
	金額(千円)	—	—	—	15,000	7,600	4,000
卓越した大学院拠点 形成支援補助金(研究 拠点形成費等補助金(若 手研究者養成費))	件数	—	—	—	—	1	1
	金額(千円)	—	—	—	—	10,640	7,650
文化芸術振興費補助 金(大学を活用した文 化芸術推進事業)	件数	—	—	—	—	—	1
	金額(千円)	—	—	—	—	—	10,000
各種財団などからの 研究助成金	件数	7	8	6	5	3	4
	金額(千円)	11,532	6,663	4,930	3,243	2,539	3,164
大学院生の獲得して いる研究助成金	件数	17	27	22	17	21	43
	金額	17,297 千円 13,000 USドル 10,920 フラン 5,220 ユーロ	21,145 千円 300,000 台湾ドル 3,900 ユーロ	10,255 千円 2,000 豪ドル 8,100 ユーロ	7,572 千円	12,426 千円	13,512 千円
受託研究	件数	2	1	1	1	0	2
	金額(千円)	10,976	2,200	1,950	1,870	0	4,794

1 文学研究科教員獲得分

2 大学教育の国際化推進プログラム

2008年4月より、正式にエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム(「ユーロカルチャー」)の圏外協定校としての活動を始めたが、2011年10月からはヨーロッパ圏外のフル・パートナーとして、他の3つの圏外校(メキシコ国立自治大学、インド・プーネ大学、米国・インディアナ=パーデュ大学インディアナポリス)とともにプログラムの運営により大きく関わることとなった。同プログラムは、欧州における高等教育機関同士の連携を強めるとともに相互間の流動性を高め、大学教育を国際化することを目的としており、英語を共通使用言語としている。ヨーロッパの大学のみならず、ヨーロッパ圏外の大学がパートナーとなって参加することによって、世界的な規模で展開する最先端教育プログラムである。本研究科は人文学分野における日本初めての同プログラム協定校となった。

国際連携室に設置されたエラスムス・ムンドゥス部門(EM部門)は毎年RA2名を受け入れ、プログラム運営を担当している(派遣学生および教員の宿舍の手配、ビザ申請、各種書類作成、シラバス作成、リーディング・テキストの選定・購入、本学からの派遣留学生の募集説明会・面接選考、本学からの教員派遣等)。例年10月~12月の3か月間、同コンソーシアムの学生最大5名を「特別聴講学生」として受け入れ、「世界の中の現代日本」をテーマとした英語による授業5科目(2012年度は「文化人類学」「現代日本思想論」「現代日本文化論」「比較芸術論」「日本現代史」)を10回にわたって開講し、25ECTS(10単位相当)を認定している。授業にはコンソーシアム所属学生以外の留学生や日本人学生も参加し、双方向性を保証するとともに、各授業においてフィールドワークを実施している。また、毎年ユーロカルチャー・コンソーシアム大学の教員1~2名を受け入れ、適宜助言を得て、改善に努めている。さらには日本語教育の専門家および大学院生の協力を得て、日本語学習の機会を提供することにより、短期間にもかかわらず高い教育効果をあげている。本研究科は、同プログラムの4校の圏外協定校の中でも常に高い評価を得ており、これまでのところ、欧州側での派遣留学先として希望する学生が最多である。

2012年度は、コンソーシアム大学から4名の学生を受け入れた(うち1名は体調不良のため途中帰国)。また、本プログラムに基づき、例年本学から学生1名を奨学生としてコンソーシアム大学に派遣しているが、残念ながら、2012年度に限っては、本学から推薦した学生がコンソーシアム本部での選考で不合格になってしまった。6月には、スペインのデウストで開催されたコンソーシアム全体会議に本研究科教員2名が参加し、プログラム運営の改善策について集中的に審議した。

2013年度には、コンソーシアム大学から5名の学生、および1名の教員の受入れ(当初2名の受け入れを予定していたが、1名が急病のため来日を取り消し)、本学学生1名の派遣、本研究科教員2名の派遣(6週間、4週間)を実施した。本研究科で開講するエラスムス・ムンドゥス英語授業に関して、前年度と同様に「世界の中の現代日本」という総タイトルのもと、「文化人類学」「現代日本思想論」「現代日本文化論」「比較芸術論」「日本現代史」を開講した(2012年度と同じ)。本年度も、プログラム主催者および受講生の要望を踏まえ、ヨーロッパと日本の関係に力点を置くよう配慮した。また6月にはクラカウ(ポーランド)で開催されたユーロカルチャー・コンソーシアム全体会議に本研究科教員2名が参加し、同プログラム実施の課題について意見交換を行った。

(山上浩嗣)

2009年度に本研究科が申請した「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」An overseas visiting program complex for multilingual and multicultural studies (略称：OVCプログラム)は、日本学術振興会の「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」に採択され、2010年2月11日から2013年2月10日にかけての3年間で、総数約150名の若手研究者等(講師、助教、ポスドク、大学院生、学部学生)を、渡航費・滞在費を給付の上、調査・研究のため海外に派遣するものである。

本プログラムは、異文化が混在し多文化化する現代世界において、真に国際的視野を有する若手研究者の育成を目的とし、世界の様々な国、地域で文献調査、フィールドワーク等を実施するとともに、国際的な学会・研究会等で成果を公表することをめざしている。

本プログラムは、A 横断的研究視察、B 共同プロジェクト、C 個人リサーチの3つの派遣タイプより構成されている。

#### A 横断的研究視察

海外での調査経験のない学部学生・博士前期課程(修士課程)在籍者を主な対象とし、各視察5名程度を募集。およそ1週間にわたって、教員の引率・指導のもとに、各図書館・資料館の概要・利用方法を学ぶとともに、参加者の研究テーマに基づき、資料調査を実践した。

2012年度 派遣先：1カ国(台湾・中央研究院等) 派遣者：6名(博後3名、博前2名、学部1名)

#### B 共同プロジェクト

引率教員の指導、および助教、ポスドクの補佐を受けつつ、海外の大学等と共同でワークショップ、インターンシップ、フィールドワーク等をおよそ1週間にわたって実施。各プロジェクトの成果は、冊子体の報告書として公表した。

2012年度 ①「日欧ワークショップおよびフィールド調査による古墳文化研究の国際化推進事業」(イギリス・セインズベリー日本芸術研究所等)、派遣者：5名(助教1名、博後1名、博前3名)；②第二言語教育における学習者オートノミーに関する学会参加と日本語学習者向けワークショップの共同企画」(ニュージーランド・クライストチャーチおよびウェリントン)、派遣者5名(PD1名、博後2名、博前2名)

#### C 個人リサーチ

博士後期課程在籍学生、ポスドク、助教、講師を対象とし、海外研究機関等で研究・資料調査・フィールドワーク等を実施。大学院生は15日間、若手研究者(ポスドク、助教、講師)は60日間以上の日程で、毎年合計30名程度を派遣した。国際学会等での成果発表をめざした。

2012年度 ①若手研究者 派遣先：12カ国(中国、台湾、インド、ベトナム、イギリス、フランス、イタリア、ドイツ、オーストリア、アメリカ合衆国、ブラジル、オーストラリア) 派遣者：24名(講師2名、助教4名、PD18名)；②大学院生(博後) 派遣国：6カ国(中国、イギリス、フランス、スペイン、グルジア、アメリカ合衆国) 派遣者：10名

本プログラムの最終年度にあたる2012年度は15カ国に総数56名を派遣した。派遣者は研究成果の報告書を提出し、年数回実施している報告会で研究分野を超えて意見交換を行うとともに、国際的な学会や研究会、学術誌において外国語で研究成果の発表を行った。

3年間で23カ国に合計142名の若手研究者および大学院生・学部学生を海外に派遣したことにより、学生の間にも海外調査への積極性が強まるとともに、本研究科においてもその他の外部資金や寄附金等を活用して学生を海外へ派遣する気運が一層高まったことも本事業の成果である。

(和田章男)



2010年度に本研究科が申請した「アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる21世紀の地平」Art and Design in Asia - from British and Japanese perspectives - (略称：頭脳循環プログラム)は、日本学術振興会の「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」に採択され、2010年10月15日から2013年3月31日までの約2年半で、計6名の若手研究者等(准教授、ポスドク、大学院生)を、渡航費・滞在費を給付の上、調査・研究のためロンドンに長期派遣した。また、計6名の特任研究員が学内で関連研究に従事した(同プログラムは2011年度以降「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」として実施されている)。本プログラムは、ロンドンの関連3研究機関と提携し、国際共同研究ネットワークの核となる優れた研究者を育成し、我が国の学術の振興を計ることを目的として実施され、本学文学研究科から若手派遣者を、本研究で日本と対をなす拠点国であると同時に、学術研究ネットワークの世界的中心の一つであるイギリス(ロンドン)に派遣し、さまざまな課題に挑戦する機会を提供する取り組みである。以下の3研究機関に各2名を約1年間、時期を変えて派遣し、継続的に研究を推進した。

- ◇ 王立美術大学 (The Royal College of Art, London) : イギリスの美術教育の最高学府にあたる大学院大学で、1837年創設の官立デザイン学校を前身とし、その歴史からも、アートとデザイン双方の研究の世界的拠点となっている。下記のヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、自然史博物館、科学博物館、王立音楽大学、ロイヤル・アルバート・ホールなどが集中する、ロンドンの文教地区、サウス・ケンジントンの一角をなしている。
  - ◇ ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館 (The Victoria and Albert Museum, London) : 上記官立デザイン学校の教育用コレクションや世界初の万博である1851年ロンドン博出展品等を基礎に創設されたミュージアムを前身とする、大英博物館と並ぶ大規模な美術館で、別称 National Museum of Art and Design が示すように、本研究の対象であるアートとデザインの研究部門がともに充実した、国立の研究機関である。国立美術図書館 (National Art Library) を併設し、イギリスのアートとデザインの研究には不可欠の美術館・図書館でもある。
  - ◇ ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院 (The School of Oriental and African Studies, University of London) : 1916年に創設された、アジア・アフリカ研究の世界的拠点の一つで、SOAS として知られる。上記の2機関が全世界を対象としながらもアートとデザインに特化しているのに対して、SOAS はアジア・アフリカに特化しているが、人文・言語・社会の全般に及ぶ総合的研究機関である。ロンドン大学に属し、南に大英博物館、北に大英図書館がある、サウス・ケンジントンと並ぶロンドンの文教地区、ブルームズベリーに位置する。
- これら3研究機関と共同で、以下の3つの国際ワークショップをロンドンで開催した。

- 第1回国際ワークショップ (ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館) 2011年7月22-23日  
「New Perspectives on Asian Design and its Histories: Geographies, Chronologies, Methodologies」をテーマに開催。
- 第2回国際ワークショップ (ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院) 2012年3月2-3日  
「Approaching Art and Design from Asia: Questions of Method, Between Art and Design」をテーマに開催。
- 第3回国際ワークショップ (王立美術大学) 2013年2月22日  
「Global Perspectives on Colour」をテーマに開催。

頭脳循環プログラム「アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる21世紀の地平」の研究成果は、主担当及び担当研究者、派遣研究者、特任研究員の計15名が国際会議や国内の諸学会で個別に発表するとともに、研究報告集としてもまとめられ、全体を総括する国内研究報告会が2013年3月19日に文学研究科で開催された。また、2016年を目指して、本研究実施の背景の一つであった百科事典「The Encyclopedia of Asian Design」全4巻(英文)の刊行準備がロンドンで進められており、そこにも派遣研究者や特任研究員は協力し、本研究の社会的かつ国際的還元が行われている。

(藤田治彦)

**概要**

本研究科は、平成 24-25 年度研究拠点形成等補助金（卓越した大学院拠点形成支援補助金）により、2本のプログラムにより事業を展開した。

文化形態論専攻が中心となって実施したプログラムでは、文学研究科内に事務局を置き、平成 24 年度から新規に事業を展開した。

また、人間科学研究科と協同で取り組んできたグローバル COE プログラムに後続する「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」では、文化形態論専攻とともに、文化表現論専攻が中心となって実施にあたった。

**卓越した大学院拠点形成支援補助金（文化形態論専攻）****1. プログラムの趣旨と運営体制**

プログラム名 「平成 24-25 年度研究拠点形成等補助金（卓越した大学院拠点形成支援補助金）」（文化形態論専攻）  
 担当部局 大阪大学大学院文学研究科文化形態論専攻  
 期間 平成 24 年 12 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

**1. プログラムの趣旨**

先進諸国に比べて日本では、博士号取得者が少なく博士課程への進学者数も減少傾向であることが問題視されている。また国際社会において新たな価値の創造や変革をうながす人材の獲得競争が激しくなる状況のなか、大阪大学の全学的指針「大阪大学グラウンドプラン」においても、研究面での海外の学術機関との連携強化、国際的に通用する研究者の育成等が目標として設定された。他方、文学研究科においても、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）の域外協定校として国際化を推進しているところであり、さらに本研究科に所属する若手研究者および大学院生を一定期間海外の大学、研究機関、資料館、図書館等に派遣し、研究を進展させ、英語だけでなく「多言語」、特定の文化だけでなく「多文化」を視野に入れる「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」を実施してきた。

この卓越プログラムも、文化形態論専攻に限定しながらも、博士後期課程在籍の大学院生の海外での研究・調査、研究集会での報告、翻訳の補助、自主企画セミナーなどを支援するものであり、本プログラム期間中あるいは終了後に外国語による論文執筆を奨励しつつ、国際的に通用する研究者の養成を目的としている。

**2. 支援対象者の選考と運営体制**

支援対象者を選ぶにあたって、研究科内で公募を行い、研究目的・計画や成果の予想などを詳細に記述させるとともに、専門家以外の者にも理解可能な記述を求める書類審査、および 3～4 名の運営委員による審査を実施することにより厳正な選考を行った。

**3. プログラム担当者**

（平成 24 年度）

## ◇学内教員

◎荒川正晴 文学研究科教授（東洋史学）  
 秋田茂 文学研究科教授（西洋史学）

片山剛 文学研究科教授（東洋史学）

桃木至朗 コミュニケーションデザイン・センター教授

#### ◇事務スタッフ

西田有利子 文学研究科教務職員

尾上輝美

文学研究科事務補佐員

（平成 25 年度）

#### ◇学内教員

◎荒川正晴 文学研究科教授（東洋史学）

秋田茂 文学研究科教授（西洋史学）

片山剛 文学研究科教授（東洋史学）

桃木至朗 文学研究科教授（東洋史学）

#### ◇事務スタッフ

西田有利子 文学研究科教務職員

小菅雅行

文学研究科事務補佐員

## 2. プログラム実施の概要

### 1. 派遣プログラム

（平成 24 年度）

文化形態論専攻博士後期課程在籍の大学院生が、国内外の大学、研究機関、図書館等で研究調査を実施するとともに、研究成果を国際的な学会・研究会等での口頭発表、外国語による論文発表を奨励することにより、国際的に通用する研究者の育成を目的として、若手研究者（大学院博士課程後期学生）を国内外に派遣した。結果として、国内 8 名、外国派遣 11 名を派遣することができた。活動の詳細は、HP に掲げる各派遣者の報告書を参照されたい。

（平成 25 年度）

文化形態論専攻博士後期課程在籍の大学院生が、国内外の大学、研究機関、図書館等で研究調査を実施するとともに、研究成果を国際的な学会・研究会等での口頭発表、外国語による論文発表を奨励することにより、国際的に通用する研究者の育成を目的として、若手研究者（大学院博士課程後期学生）を国内外に派遣した。結果として、国内 9 名、外国派遣 11 名を派遣することができた。また、学会・研究会等での口頭報告については、報告内容の翻訳の補助を行うとともに、院生自身に自らの企画によるセミナーを開催させるなど、発信の場を拡大したり、そのスキルを高めたりする機会を作った。活動の詳細は、前年度と同様に HP に掲げたので、各派遣者の報告を参照されたい。

## 3. 活動報告

### 1. 平成24年度

本事業による派遣地域・派遣国・派遣者数および地域別派遣者数の割合は以下の通りである。アジア地域へ 5 名、ヨーロッパ（ドイツ・スイス・フランス）地域へ 5 名、北米地域へ 1 名、国内 8 名派遣した。

#### 派遣地域・派遣国・派遣者数

地域 (派遣者数)	派遣国	派遣者数	地域 (派遣者数)	派遣国	派遣者数
アジア	台湾	1	ヨーロッパ	ドイツ	3
	中国	3		ドイツ・スイス	1
	フィリピン	1		フランス	1
			日本	国内	8
米	アメリカ合衆国	1		合計	19

### 専門分野別派遣者数

本事業による派遣者の所属専門分野・コースは以下の通りである。

専攻	専門分野	件数	
文化形態論	哲学・哲学史	4	19
	臨床哲学	1	
	インド学・仏教学	2	
	日本学	1	
	日本史学	4	
	東洋史学	5	
	西洋史学	2	

### 専門分野別研究用事務機器の割合

本事業による研究拠点整備のための事務機器等申請許可は以下の通りである。

専攻	専門分野	件数	
文化形態論	哲学・哲学史	1	7
	臨床哲学	1	
	インド学・仏教学	1	
	日本学	1	
	日本史学	1	
	東洋史学	1	
	西洋史学	1	

## 2. 平成25年度

### ○調査研究・研究会参加

#### 派遣地域・派遣国・派遣者数

本事業による派遣地域・派遣国・派遣者数および地域別派遣者数の割合は以下の通りである。アジア地域へ6名、北米地域へ1名、ヨーロッパ地域へ4名、国内へ9名派遣した。

派遣地域	派遣国	派遣者数	派遣地域	派遣国	派遣者数
アジア	中国	3	ヨーロッパ	ドイツ	1
	フィリピン	1		オランダ・イギリス	1
	韓国	1		イタリア	1
	台湾	1		スイス	1
				国内	日本
北米	アメリカ合衆国	1		合計	20

### 専門分野別派遣者数

本事業による派遣者の所属専門分野・コースは以下の通りである。

専攻	専門分野	件数	
文化形態論	日本学	8	20
	日本史学	4	
	東洋史学	4	
	西洋史学	2	
	哲学哲学史	2	

## ○自主企画セミナー

### 専門分野別企画者数

本事業におけるセミナー企画者の所属専門分野・コースは以下の通りである。

専攻	専門分野	件数	
文化形態論	臨床哲学	1	3
	現代思想文化学	1	
	哲学哲学史	1	

## ○翻訳補助

### 専門分野別翻訳補助対象者数

本事業における翻訳補助対象者の所属専門分野・コースは以下の通りである。

専攻	専門分野	件数	
文化形態論	東洋史学	1	1

(荒川正晴)

## コンフリクトの人文国際研究教育拠点

### 1. プログラムの趣旨と運営体制

プログラム名	「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」 (英語名：A Research Base for Conflict Studies in the Humanities)		
担当部局	人間科学研究科、文学研究科		
代表者	平野俊夫（学長）		
期間	平成24年12月10日～平成25年3月31日および平成25年4月26日～平成26年3月31日		
交付金額（文学研究科分）	平成24年度 18,471,220円	但し、特任研究員雇用、RA雇用、RA資料購入費として	
	平成25年度 2,310,000円	但し、RA雇用経費として	

### 1. プログラムの目標・活動

本事業の目的は、グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」（平成19～23年度）の成果を継承し、さらに発展させることにある。人間科学研究科の人間科学専攻とグローバル人間科学専攻、および文学研究科の文化形態論専攻と文化表現論専攻に属する若手研究者が「グローバルな次元におけるコンフリクト」という問題について調査研究を推進できる教育研究環境を整備し、調査研究の実施を支援することによって、優秀な若手研究者を育成するのがその狙いである。

具体的には以下の四つの事業を柱とした。1) 先端的な情報技術を使用し、インターアクティブなセミナーやワークショップが実施できる教育環境を整備する。2) コンフリクト研究に従事している優秀な後期課程大学院生をRAに、博士修了者であるが常勤職・非常勤職に就いていない優秀な若手研究者を特任研究員と特任助教に雇用し、研究に専念させる（RAについては、文学研究科関係で平成24年度20人、平成25年度8人の博士後期課程院生が雇用された）。3) 後期課程大学院生を対象に、調査研究、インターンシップ、研究集会参加、セミナー等企画実施の4分野で競争的資金を用意し、採択者に4分野の事業を実施させる。4) 実施担当者および両研究科4専攻の教員は、後期課程大学院生と若手研究者が実施する調査研究を指導・支援する。

本事業を遂行するために、平成24年度から人間科学研究科内にデータ分析支援部門とフィールドワーク支援部門からなる「大学院研究支援オフィス」を設け、後期課程大学院生の研究能力をグレードアップし、人文・社会科学においてグロ

ーバル標準に達した研究者を養成することを目指した。データ分析支援部門では、高度化する人文・社会学のデータ（とりわけ統計データ）分析を踏まえて、国際基準に合致した国際比較データ分析と英語での研究発表を促進し、フィールドワーク支援部門では、広い意味での質的調査（参与観察、会話分析、国内外の地域調査、インタビュー）について、調査対象の選定、調査方法の精緻化、調査にともなう研究倫理の問題に関する適切な指導・助言を行い、エビデンスにもとづく研究を促進した。

なお、以上の諸事業に関する意思決定を担う機関としては、実施担当者から構成される運営委員会を設置してこれにあたった。

## 2. プログラム実施担当者

### 人間科学科

小泉潤二（平成24年度のみ）

栗本英世

辻大介

中川敏

志水宏吉

ヴォルフガング・シュヴェントカー

友枝敏雄

牟田和恵

中村安秀

平沢安政

渥美公秀

### 文学研究科

工藤眞由美

圀府寺司

伊東信宏

三谷研爾

金水敏

中岡成文

橋本順光（平成25年度より）

## 3. 助成事業（文学研究科関係分）

### 調査研究

#### （平成24年度）

- ◆奥村京子（文化表現論専攻）調査課題「社会主義体制下における諸コンフリクトの表現としての《アトモスフェール》研究」、支給総額700,000円、調査先スイス、調査期間H25.1.18～H25.2.19
- ◆酒井雅史（文化表現論専攻）調査課題「滋賀県長浜市方言の待遇表現形式の形態統語的記述と運用の規範に関する調査・研究」、支給総額340,420円、調査先滋賀県、調査期間H25.1.26～H25.1.27およびH25.2.4～H25.3.6
- ◆原田走一郎（文化表現論専攻）調査課題「消滅の危機に瀕した方言に対するコミュニティの意識に関する調査と方言の記録作成 —八重山黒島におけるフィールドワーカー」、支給総額700,000円、調査先沖縄県、調査期間H24.12.17～H25.3.18
- ◆樋口騰迪（文化表現論専攻）調査課題「階層間の相剋と混淆としてのシャンソン」、支給総額633,880円、調査先フランス、調査期間H25.2.12～H25.3.10

#### （平成25年度）

- ◆神崎舞（文化表現論専攻）調査課題「カナダ演劇におけるシェイクスピア—フランス語圏と英語圏の葛藤と調停—」、支給総額556,000円、調査先カナダ、調査期間H25.8.6～H25.8.24
- ◆山田晃子（文化表現論専攻）調査課題「20世紀初頭の英国におけるキモノブームの背景に関する調査」、支給総額560,000円、調査先イギリス、調査期間H25.9.18～H25.10.29

- ◆青木裕介（文化表現論専攻）調査課題「マルグリット・デュラス、*Hiroshima mon amour*（ヒロシマ 我が愛）の生成研究」、支給総額563,838円、調査先フランス、調査期間H26.1.12～2.2
- ◆内藤貴夫（文化表現論専攻）調査課題「19世紀末英国のイーストエンド探訪記に見る貧困表象の変化とコンフリクトの相関研究」、支給総額394,580円、調査先イギリス、調査期間H26.1.24～2.8
- ◆中山龍一（文化表現論専攻）調査課題「『パン・アメリカ主義』のイメージ：F.ルーズヴェルトの善隣外交政策と1940年代初頭の壁画制作」、支給総額444,260円、調査先アメリカ、調査期間H26.2.10～2.28
- ◆久岡加枝（文化表現論専攻）調査課題「スターリン期（1930年～40年代）グルジアの民族・文化政策がもたらした『男声合唱』をめぐる文化コンフリクト」、支給総額700,000円、調査先グルジア、調査期間H25.11.24～H26.2.25
- ◆内藤貴夫（文化表現論専攻）調査課題「19世紀末の日英における貧困表象のコンフリクトとその相関研究」、支給総額165,610円、調査先神奈川県、調査期間H26.3.2～3.16
- ◆奥村京子（文化表現論専攻）調査課題「G・リゲティの往復書簡—社会主義体制下における諸コンフリクト」、支給総額429,800円、調査先スイス、調査期間H26.3.1～H26.3.15
- ◆樋口騰迪（文化表現論専攻）調査課題「20世紀パリに於ける「中世風シャンソン」に関する一次資料調査—Yvette Guilbertに於けるナショナリズムとコンフリクトの発現を中心に—」、支給総額473,450円、調査先フランス、調査期間H26.3.1～H26.3.15
- ◆康 盛国（文化表現論専攻）調査課題「対馬藩藩儒・雨森芳洲の研究—九州大学所蔵、芳洲の随筆や外交関係資料の調査」支給総額48,140円、調査先福岡県、調査期間H26.3.10～H26.3.12

#### 研究集会参加

##### （平成25年度）

- ◆津田雅之（文化表現論専攻）、研究集会の名称 Islands and Continents: (Re)Constructions of Identity (5th REELC-ENCLS Congress) / 26-28 September 2013 / Madeira University, Madeira University and Réseau Européen d'Études Littéraires Comparées / European Network for Comparative Literary Studies (REELC-ENCLS)、支給総額223,000円、出張期間H25.9.24～9.30
- ◆水田博子（文化表現論専攻）、研究集会の名称 The 19th International Congress of Aesthetics / 21-27 July 2013 / Auditorium Maximum of the Jagiellonian University, Krakow, Poland / International Association for Aesthetics、支給総額176,000円、出張期間H25.7.21～7.28
- ◆康 盛国（文化表現論専攻）、研究集会の名称第37回国際日本文学研究集会／国文学研究資料館（東京都）、支給総額32,730円、出張期間H25.11.30～12.1

#### セミナー等企画実施

##### （平成24年度）

- ◆講演会（申請者：橋本順光）講師：堀内真由美、講演タイトル「世紀転換期の日英における移動と衝突 - 諜報と教育を中心に」実施日時H. 25. 2. 6、13:10～14:40会場、大阪大学文学部大会議室
- ◆ワークショップ（申請者：橋本順光）講師：森田良成特任研究員、高橋綾特任助教）、タイトル「人文学における映像とフィールドワークの可能性」実施日時H. 25. 3. 27、13時～17時、会場、CSCDオレンジショップ

（伊東信宏）

## 目的と概要

本プログラムは、演劇、音楽、美術、アート、パフォーマンスなど多岐に亘っている現代芸術を広くカバーして、特定の芸術ジャンルに専門的になるのではなく、どのような芸術ジャンルにも対応できるような人材育成を行うことを狙いとして構想し、平成25年度文化庁「大学を活用する文化芸術推進事業」に申請し、採択された。

大阪大学文学研究科芸術系ブロックが中心になり、大阪大学のコミュニケーションデザイン・センター、国際公共政策研究科、総合学術博物館と共同して、能勢浄りシアター、吹田市文化会館メイシアター、尼崎青少年創造劇場、ザ・フェニックスホール、京都国立博物館、京都工芸繊維大学美術工芸資料館といった芸術諸機関と連携して、芸術祭を企画運営する人材育成を実践的に行なうことを目的に、能勢浄りシアター、吹田市文化会館メイシアター、尼崎青少年創造劇場、ザ・フェニックスホール、京都国立博物館、京都工芸繊維大学美術工芸資料館等の芸術諸機関と連携して、演劇・音楽・ダンス・美術等の多ジャンルの7科目22コマの実践的授業を開講した。

これらの芸術諸機関のアドバイザーと事業担当で「アート・フェスティバル人材育成推進協議会」を2回開き、具体的に専門的な助言をうけた。この助言も生かしながら、プログラムで実施した科目において、広く「ジェネラリストとしての専門家」の育成に努めることができた。また、大学が企画運営するフェスティバルであり、芸術祭を通して研究するという「リサーチとしての芸術祭」という新しい取組も本プログラムの狙いであった。この点でも、金沢大学、ベルリン自由大学、京都造形芸術大学等の人文研究者、また演劇研究者、舞踊研究者、美術館キュレーターなど高度専門職業人を多く招へいして、ワークショップやセミナーにおいて受講生と議論を重ねて人文学と芸術との相互作用を促進することができた。

研修の受講者は、芸術系諸機関で働く人々など社会人を中心にして広く公募し、37名を受講生として受け入れた。受講生（フェスティバル・フェロー）は、各事業担当者と「フェスティバル企画運営委員会」を組織して、各種セミナーやワークショップを受講し、同時に各科目に実践的にかかわり、共同作業をしながら、フェスティバルを企画運営した。フェスティバル・フェローは、以下に記す7つの研修科目を受講しつつ、各芸術事業に関わり、またフェスティバル全体の運営に携わった。

### ①「フェスティバルの企画運営と実際」

各事業を統括するテーマの「統括ワークショップ」と各事業間を通底させる「インタラクティブ・セミナー」を開催した。平成25年9月14日に大阪大学でオープニング・セミナーを開催し、文化行政担当者と芸術家によるセミナーを通して文化行政や芸術機関の役割・現状について理解を深めた。平成26年3月21日に大阪大学で開催したクロージング・シンポジウムでは、本事業の統括を行った。

### ②「市民参加型演劇の制作と上演」

吹田市文化会館メイシアターという市民文化ホールと連携し、地域住民をオーディションし、実際に作品制作にかかわることで、地域の記憶をテーマにした作品上演を行う「吹田メイシアター×大阪大学 オリジナル地域伝承劇の企画」を実施した。4回のセミナーとワークショップを行い、劇場と大学と地域をつなぐマネージメント人材を育成する事業を行った。

### ③「国際的パフォーマンスの制作とワークショップ」



フランス人振付家レジヌ・ショピノが、オセアニア地域の踊り手たちと共同制作するダンス公演と、英国の演出家・俳優クリッシー・ティラーのワークショップとを行い、国際的芸術祭にも通暁するアートマネジメント人材の教育をした。

④「リサーチとしてのアート・ワークショップ」

国際的なツーリング・パフォーマンス集団 PortB の主催者高山明、ドイツ演劇翻訳者林立騎、学芸員鷲田めろろ、ダンス研究家古後奈緒子等を講師に招き、「アートと社会における〈参加〉をめぐるリサーチ・プロジェクト」のワークショップを4回行い、芸術と社会との関係について理解を深め、参加型芸術祭をどうやって作り上げていくか問題点を探った。

⑤「レクチャー・コンサートの企画運営」

大阪大学が所有する 1920 年製ピアノ（ベーゼンドルファー）を用いて音楽における響きとその記憶のあり方をテーマとするレクチャー・コンサートをザ・フェニックスホールとの連携で開催した。平成 25 年 11 月 30 日のワークショップで広報や演奏会当日までの準備上の問題点を議論し、それをふまえて平成 26 年 1 月 26 日にコンサートを受講生とともに開催した。

⑥-1「美術と絵画資料の展覧会企画と運営 西洋美術関連（Aプログラム）」

20 世紀の前衛芸術の資料と記憶をめぐる企画展のためのセミナー「具体・ワークショップ」を平成 26 年 2 月 15 日、22 日に開催した。展覧会企画には選択と分類が重要であることを学んだ。

⑥-2「美術と絵画資料の展覧会企画と運営 日本美術関連（Bプログラム）」

江戸時代の絵画についての土居次義の詳細な資料と関連の絵画を使った「土居次義記憶と絵画」展を京都国立博物館、京都工芸繊維大学美術工芸資料館と連携して開催すべく、平成 25 年 10 月 26 日と平成 26 年 3 月 9 日にワークショップを開催し、受講生のアイデアを募りながら土居ノートの具体的な活用方法を考えた。

⑦「サイトスペシフィック・パフォーマンスの方法と実践」

大阪という場所性を演劇と演劇祭に具体化していくために、大阪という「場所」の持つ記憶、歴史性、特性をいかに芸術と結び付けていくかを考えるサイトスペシフィック・パフォーマンスに関するセミナーを、能勢浄りシアター、劇団維新派と連携して行った。平成 25 年 10 月 5 日に劇団維新派「犬島」公演に参加、主催者のレクチャーを受け、アートとしてのサイトスペシフィックについて学んだ。平成 26 年 1 月 18 日には能勢浄りシアター公演に参加し、地域の場所性を活かしたアートマネジメントの理解を深めた。



(パンフレット 2013 年度)

## 成果と将来

フェスティバル・フェローは、各事業担当者が推進する個別の事業に適宜参加するとともに、事業担当者が公開で行う「インタラクティブ・セミナー」に出席し、プログラム履修を進め、年度末にレポートを提出した。事業への貢献度、出席率、レポートを総合的に判断し 15 名のフェスティバル・フェローに修了証を授与した。



講師によるレクチャーを受ける受講生たち  
(犬島にて 2013/10/5)

アートマネジメント人材育成の目標として、特定の専門分野ではなく、どのような芸術ジャンルにも対応できる人材育成を行うこととした。本プログラムでは、まず芸術関係諸機関等に勤務する者や勤務を希望する社会人 37 名を受講生に採用した。オープニング・セミナーには 24 名が参加、アーティストと文化行政統括者、事業担当者のセミナーを開き、芸術祭の在り方や問題点を学んだ。レジヌ・ショピノのダンス公演とクリッシー・ティラーのワークショップには 29 名が参加、国際的公演の企画運営の方法を学んだ。「リサーチとしてのアート・ワークショップ」には 49 名が参加、アーティスト・哲学者・美学者とのワークショップで芸術と地域社会との多

様な関係を学んだ。レクチャー・コンサートには 23 名が参加、コンサートの企画運営を学んだ。展覧会企画と運営には 30 名が参加、展覧会の企画を学んだ。維新派犬島公演と能勢浄るりシアターには 39 名が参加、レクチャーとワークショップで、サイトスペシフィック・パフォーマンスの理論と実践について学んだ。市民参加型芸術の制作と上演には 36 名が参加、市民参加型芸術の全体像と在り方を学んだ。クロージング・シンポジウムには 13 名が参加、アーティストの講演、受講生の報告、事業担当者と受講生の議論により、7 科目 22 コマの授業を振り返りながら、多ジャンルの芸術を通底する様々な声を通して、幅広く芸術一般を扱う時の考え方と方法について総合的に学ぶことができた。また大学知も併せて学ぶことで、単に個別のアートマネジメントの技術のみならず、その芸術のマネジメントには何よりも人文学的な問題意識と理念が必要であることも学ぶことができた。

平成 25 年度の成果を踏まえて、平成 26 年度にも申請を行った。採択され、現在平成 26 年度事業を推進中である。

(永田靖)

## 1. 懐徳堂研究センターの目的と意義

2009年5月、旧「懐徳堂センター」が改組され、新たに「懐徳堂研究センター」が発足した。

その目的を、センター規定はこう明記する。「懐徳堂研究センターは、文学研究科の教育研究理念に沿って、懐徳堂に関わる調査・研究・広報の拠点としての役割を果たし、これを通じて本研究科の発展に寄与することを目的とする」と。その目的を達成するために、以下のような業務を行うこととした。

- (1) 懐徳堂に関わる調査・研究、資料の収集・作成（デジタルコンテンツを含む）
- (2) 『懐徳堂研究』（年一回定期）、パンフレット、ニューズレター（不定期）等の広報媒体の編集・刊行
- (3) 懐徳堂研究の総合サイト「WEB 懐徳堂 (<http://kaitokudo.jp/>)」の管理運営
- (4) 学内外における懐徳堂資料の展示、講演会などの開催
- (5) 懐徳堂記念会の事業に関わる資料調査等の協力
- (6) 本学附属図書館および総合学術博物館の業務に関わる懐徳堂関係資料の調査等の協力

このうち、(1) の調査・研究およびデジタルコンテンツの制作は、本センターの基幹事業であり、当該期間中にも大きな活動成果を上げている（詳細は下記の2参照）。また(2)の『懐徳堂研究』は、旧来のセンターが刊行してきた『懐徳堂センター報』を継承しつつ、装いを新たに創刊することになったものである。『懐徳堂センター報』は、センターの活動報告と論考で構成されており、論考はいずれも学術的に高い価値を持つものであったが、「センター報」という名称が、広報誌や内部雑誌ではないのかという印象をも与えてきた。そこで、『懐徳堂研究』は「研究」を全面に押しだし、全国で唯一、懐徳堂の研究を専門に取り扱う学術雑誌として創刊されたのである。

## 2. デジタルコンテンツの制作

センターの活動を特徴づけるものの一つにデジタルコンテンツの制作がある。2012年度～2013年度にかけては、次のようなコンテンツを制作し、懐徳堂研究の総合サイト「WEB 懐徳堂(<http://kaitokudo.jp/>)」に公開した。

- ・2013年3月：デジタルコンテンツ「西村天囚書簡」……西村天囚と中井木菟麻呂は、明治2年（1869）に閉校となった懐徳堂の復興に尽力した人物で、彼らの運動により、新たに新学舎「重建懐徳堂」が建設された。その当時の両者のやりとりを記した27通の書簡を、本コンテンツでは、書簡の画像、翻刻文、解説によって公開する。書簡の内容をより深く理解できるよう工夫されている。
- ・2014年3月：デジタルコンテンツ「懐徳堂考」（上）……江戸時代の懐徳堂の創立から閉校までの約140年間の歴史を通覧した西村天囚『懐徳堂考』は、今日においても懐徳堂研究の最も基本的な文献としての価値を持っている。本コンテンツでは、本文の画像とともに翻刻文テキストも表示可能であり、両者を対照させながら本文を閲覧することができる。また、本文検索機能やテキストの複写機能を備えることで、大いに研究に資するコンテンツとなっている。

## 3. 諸活動

- (1) 刊行物の発刊

2012年度：『懐徳堂研究』第4号、ニューズレター第4号の刊行。

2013年度：『懐徳堂研究』第5号、ニューズレター第5号の刊行。

なお、『懐徳堂研究』とニューズレターのバックナンバー（刊行後1年を経過したもの）は、懐徳堂研究センターHPからPDFファイルとしてダウンロードできるように設定している。

（2）ホームページの更新……旧「懐徳堂センター」時代から引き継がれていたホームページを一新した。センターの諸活動を分かりやすく紹介するほか、懐徳堂研究関係資料を公開し、またセンター刊行物のバックナンバーをPDFファイルで提供するなど、大幅なリニューアルを完成した（<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitoku-c/>）。

（3）大阪大学中之島センターにおけるレプリカ展示……懐徳堂文庫の貴重資料である入徳門聯、天図などのレプリカを、中之島センター1階ロビーにて常設展示している。

#### 4. 運営上の課題

2009年5月に懐徳堂研究センターが発足してから、センター実務は、センター長、研究員、職員が担当することとなったが、センター長・研究員は、いずれも文学研究科教員が兼務し、職員も非常勤であることから、上記のような膨大な業務を専任で担当する人員がないという大きな問題を抱えている。

センターの活動は、2011年度制作のデジタルコンテンツ『画本大阪新繁昌詩』が、2012年6月7日付け読売新聞に取り上げられ、また、2013年には「中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会」で、湯浅邦弘（センター長）「書簡と扇のデジタルアーカイブ」が優秀学術論文賞を受賞するなど、高い学外評価を受けている。また、2013年10月には韓国釜山大学の金声振学長が懐徳堂研究センターを訪問、同年11月には、韓国江商高等学校より10名が、「商業」を考える一環として懐徳堂を見学するなど、近年、国内だけでなく、海外においても懐徳堂への関心が高まりをみせている。にもかかわらず、センター発足以来、予算は毎年減少しており、2014年度は定期刊行物である「ニューズレター」の発刊を見送らざるをえないなど、諸活動の維持に課題を残している。

さらに、懐徳堂文庫資料は、現在、大阪大学図書館に収蔵されており、その調査・研究に文学研究科は多大な貢献をしてきている。ただ本来、図書館が担うべき懐徳堂文庫の資料整理、複写・転載願いに対する審査業務などが、ほとんど懐徳堂研究センターに委託されている。これは、図書館に、貴重資料を管理運営する組織やスタッフが存在しないことによるが、膨大な資料を抱えながら、学内に専任スタッフがいないことは、資料サービスという対外的観点からも大きな問題であると言える。

（湯浅邦弘）

### 活動の概要とその特色

2012年度・2013年度の専任スタッフは中久保辰夫助教の1名である。室長として永田靖文学研究科長、兼任として文学研究科の福永伸哉教授、高橋照彦准教授の2名が業務を担った。

大阪大学構内には多くの遺跡が存在している。豊中キャンパスはその全域が待兼山遺跡として遺跡台帳に登録されており、2009年度には吹田キャンパスにおいて遺物の出土があり、あらたに山田丘遺跡として遺跡台帳に登録されることとなった。また、大阪大学中之島センターでは、江戸時代の久留米藩蔵屋敷の発掘調査を実施した。こうした遺跡や遺跡から出土した遺物は、1950年に施行された文化財保護法の規定により国民共有の財産・文化財として保護・活用をはかる対象とされている。大阪大学では、文化財保護法の規定に基づき、キャンパス内の遺跡の保全と建物計画などの調整を行うために、全学委員会として埋蔵文化財調査委員会を設置しており、その委員会の指導の下、埋蔵文化財調査室が構内遺跡の調査にあっている。

2012年度・2013年度は吹田・豊中キャンパスを中心に建物の改修および耐震補強、新設工事が著しく増加し、工事着手前の試掘および立会調査は以下に報告した件数を実施している。また、調査で発見された出土品については、洗浄、接合、実測等の整理作業をすすめ、その成果の一部を『大阪大学埋蔵文化財調査室年報』3として刊行した。さらに大阪大学総合学術博物館修学館3階にて公開している出土品の解説、市民講座等への出張講義等、アウトリーチ活動にも力を注ぎ、精力的な活動を実施している。

### 現在の組織

教授 2(兼任2) 准教授 1(兼任1) 助教 1

教授：永田 靖(兼任)、福永 伸哉(兼任)

准教授：高橋 照彦(兼任)

助教：中久保辰夫

### 組織の活動

#### 1. 発掘調査

2012・2013年度は、以下の埋蔵文化財調査を実施した。

【2012年度】

- ・吹田地区
- 7月4日 (医) 高圧ボンベ庫新営工事に係わる立会調査
- 7月10日 接合研駐車場整備・宅地造成に係わる立会調査(1)
- 7月24日 (微研) 南館新営工事に係わる立会調査
- 7月31日 (歯病) 本館(A棟)新営に係わる立会調査
- 8月8日 生物学国際交流センター新営工事に係わる立会調査
- 8月29日 (核物) AVFサイクロトロン棟改修その他電気設備工事に係わる立会調査
- 9月27日 接合研駐車場整備・宅地造成に係わる立会調査(2)
- 9月28日 (吹田) 高圧ケーブル改修に係わる立会調査
- 11月19日 (工) ロボット収蔵庫取説に伴う基礎工事に係わる立会調査
- 1月8日～10日 (工) 総合研究棟新営に係わる試掘調査
- 1月23日 最先端医療融合イノベーションセンター新営に係わる立会調査(1)

3月8日 犬飼池周辺舗装工事に係わる立会調査

・豊中地区

10月2～4日 文理融合型総合研究棟新営工事に係わる試掘調査  
11月14日 福利会館改修その他工事に係わる立会調査  
10月10日 (豊中) 高圧ケーブル改修工事に係わる立会調査(1)  
10月15日 (豊中) 高圧ケーブル改修工事に係わる立会調査(2)  
1月9日 マグネット移設その他工事に係わる立会調査  
1月26日 外灯設置に係わる立会調査

・箕面地区その他

11月28・29日 (宮山) 清明寮耐震改修その他に係わる試掘調査  
3月4日 (箕面) 道路案内標識取設その他工事に係る立会調査

【2013年度】

・吹田地区

4月10日 最先端医療融合イノベーションセンター新営に係わる立会調査(2)  
5月12日 (吹田) 高圧ケーブル改修に係わる立会調査  
5月28日 看護師寮改修工事に係る立会調査  
8月22日 (薬) 実験研究棟新営工事に係る立会調査  
10月1・2日 サイバーメディアセンターITコア新棟造営工事に係る試掘調査  
10月3・4日 (物質・生命科学) 超高压電子顕微鏡センター新棟造営工事に係る試掘調査  
11月13日 (社研) A棟改修工事に係る立会調査  
1月9日 (工) 高圧ガスボンベ庫新営工事に係る立会調査  
2月8日 ライフライン再生(ガス設備等)吹田団地ガス配管敷設替工事に係る立会調査

・豊中地区

5月23日 美学棟改修工事に係る立会調査(1)  
7月1・3・4日 美学棟改修工事に係る立会調査(2)  
7月11日 明道館前高圧ケーブル改修工事に係わる立会調査  
7月24日～8月13日・9月25日 阪大坂下駐輪場改修工事にともなう試掘調査  
12月13日 多目的倉庫新営その他工事に係る立会調査  
12月17日 極限量子科学研究センター新営その他工事(1)  
12月24日 極限量子科学研究センター新営その他工事(2)  
2月13日 (豊中) 弓道場改修工事に伴う立会調査  
2月13日 (豊中) 図書館改修工事に伴う立会調査

・箕面地区

2月3日 (箕面) 箕面キャンパス学生寮配管工事に伴う立会調査  
2月6日 津雲台合同宿舍屋外給水管改修工事に係る立会調査

## 2. 広報・埋蔵文化財の公開

### 【2012年度】

旧制浪速高等学校同窓会 講師（中久保）  
埋蔵文化財調査室ニュースレター第8号の発行（中久保）  
国立民俗博物館 2012年度博物館学習中コース研修の案内（中久保）  
朝日カルチャーセンター芦屋教室 講師（中久保）  
豊中歴史同好会 講師（中久保）  
大阪府茨木高校 構内遺跡・博物館展示の案内（中久保）

### 【2013年度】

よみうり天満橋文化センター 講師（中久保）  
国立民族学博物館 2013年度博物館学集中コースの案内（中久保）  
21世紀懐徳堂アカデミックッキング 講師（中久保）  
豊中歴史同好会 博物館展示の案内（中久保）  
『大阪大学埋蔵文化財調査室年報』3の刊行（中久保）

## 今後の課題

大阪大学構内における開発と埋蔵文化財の保護の両立をめざし、施設部をはじめとする関係部局と密接に連絡をとり、円滑な運営を目指す。しかしながら、開発件数の増加により2012年度・2013年度におこなわれた埋蔵文化財調査は35件を数え、現有体制で対応することには困難が生じつつある。調査量の増大に効率良く対応できる体制をつくることが急務となっている。

待兼山遺跡は近年の調査成果により、これまで知られていた弥生時代から古墳時代のみならず、古代、中世、近世各時代の遺構・遺物の様相が判明してきた。しかし、発見された膨大な出土品の歴史的意義については、いまだ不明な点が多い。今後の調査や整理作業では、これらを学術的に解明したうえで、地域の歴史を復元することに努めたい。

吹田キャンパスに所在する山田丘遺跡に関しては、継続的な調査の実施により、旧地形および地層の堆積状況、そして大規模造成の範囲を把握しつつある。今後も調査を継続することにより、キャンパス内における埋蔵文化財包蔵の有無を確認し、将来的には開発行為に対し、柔軟な対応がはかることができるよう努めたい。

アウトリーチ活動にも引き続き力を注いでいきたい。大阪大学総合学術博物館や地域の文化財関係者と密接に連携し、学校教育、市民講座の場を活用してアウトリーチ活動をさらに進めていく予定である。

（中久保辰夫）

**組織・体制**

前身の性差別問題委員会を改組・改称し、2010年11月に設置。2011年4月より、本格的に活動を開始。性差別問題委員会同様、研究科長直属の委員会として組織されている。委員は、委員長1名（主として、セクシュアル・ハラスメントを担当）、副委員長1名（主として、アカデミック・ハラスメントおよびパワー・ハラスメントを担当）を除く全員が相談員を兼ね、学生・教職員からのセクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメント問題にかかわる相談に当たる。

2012年度：委員会メンバー14名(女性7名、男性7名)。

2013年度：委員会メンバー14名(女性6名、男性8名)。

**活動状況****2012年度実績**

1. 学部・大学院新入生オリエンテーションで委員会活動について説明。パンフレット「やめよう・とめようセクシュアル・ハラスメント」を新入生に配布。(4月)
2. 新入生と在学生のためのセクシュアル・ハラスメント防止対策説明会を開催。講師：中嶋雅美さん（大阪大学セクシュアル・ハラスメント相談室 専門相談員）演題：「大学でのセクシュアル・ハラスメントについて」(4月)
3. 各専修・専門分野・コースでのガイダンス時に、セクシュアル・ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットを学生に配布。(4月)
4. セクシュアル・ハラスメント相談員研修会（全学）へ参加。(7月)
5. キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク第17回全国集会（京都で開催）に、委員4名が参加。(9月)
6. 教職員向け研修会を開催。講師：吉武清實さん（東北大学高等教育開発推進センター学生生活支援部・学生相談室、東北大学教授）演題：「ハラスメント防止へ留意したいこと ～要注意の教員行動～」(11月)
7. パンフレット「ハラスメントはやめよう！！ やめよう・とめよう ハラスメント」を作成。(3月)。
9. 年間相談・対処件数は0件。ただし、個人的に対処したものあり。

**2013年度実績**

1. 学部・大学院新入生オリエンテーションで委員会活動について説明。パンフレット「ハラスメントはやめよう！！ やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。(4月)
2. 新入生と在学生のためのハラスメント防止対策説明会を開催。講師：濱田綾さん（大阪大学セクシュアル・ハラスメント相談室 専門相談員）演題：「ちょっと知ってほしい、ハラスメントのこと」(4月)
3. 各専修・専門分野・コースでのガイダンス時に、ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットを学生に配布。(4月)
4. 工学研究科新任者研修会にて、前委員長が「ハラスメント問題の基礎知識」を講演。(5月)
5. ハラスメント相談員研修会（全学）へ参加。(7月)
6. TA研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(10月)
7. 文学研究科・文学部ハラスメント防止に関する教職員研修会 講師：牟田和恵さん（大阪大学大学院人間科学研究科



教授) 演題:「先生、その言動はセクハラです!」(1月)

8. パンフレット「ハラスメントはやめよう!! やめよう・とめようハラスメント」改訂版(大型化・レイアウトの刷新・学外情報の訂正)を作成。(3月)
9. 年間相談・対処件数は0件

(出原隆俊)

## **第 2 部**

**各専門分野・コースにおける**

**教育・研究活動の概要**

## 【凡 例】

- I. 現在の組織については、2014年4月1日を基準とし、この時点での教員および在学生の現員を示す。また修了生・卒業生については、2012年度(2013年3月修了・卒業)および2013年度(2014年3月修了・卒業)について記す。
- II. 大学院生の研究業績、受賞等は、2012年度～2013年度に在籍した者が、2012年度～2013年度中に発表あるいは授与されたものについて記す。また2012年度～2013年度におこなわれた学位授与について、課程博士と論文博士にわけて記載する。
- III. 教員の研究活動については、原則として2014年4月1日現在各専門分野・コースに属している現員のものを示す。研究業績については2012年度～2013年度に発表されたものを記載する。2012年度～2013年度中に、本研究科大学院生であったものが本研究科教員になった場合には、その大学院生時代に発表した研究業績をあわせて記入する(この場合には大学院生の研究業績の欄にも同じ業績が示される)。なお受賞については2012年度～2013年度にかぎらず記載する。
- IV. 教員による競争的外部資金の獲得については、原則として2014年4月1日現在各専門分野・コースに属している現員が代表者になっているもので、2012年度～2013年度の間に配分を受けたものを記す。
- V. 教員による学会役員等の引きうけ状況については、2014年4月1日現在各専門分野・コースに属している現員が、2012年度～2013年度の間に引きうけ、あるいは遂行した任務に関して記す。

## 2-1 哲学哲学史

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：上野 修、入江 幸男

准教授：舟場 保之

助教：野々村 梓

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
25	9	12	0	2	0	1	0

\*うち留学生 2 名、社会人学生 1 名

\*\*哲学・思想文化学専修として

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	7	3	2	0
2013	13	1	1	1
計	20	4	3	1

\*哲学・思想文化学専修として

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

学部と大学院でそれぞれ以下の具体的な目標を掲げた。【学部】1年生対象の基礎セミナーを行う。/専修決定の期間に、専修独自のガイダンスを行う。/哲学の基本文献読解のための演習を学部生向けに開講し、基礎学力を養成する。/卒業論文を提出する予定の学生に対しては、研究発表を行わせ、論文を仕上げられるように指導する。【大学院】修士・博士論文作成のための十分な個別指導を行う。/研究テーマに関連した論文紹介などを含む研究発表を行わせ、その記録をHPにアップする。/博士後期課程の学生には、『メタフュシカ』およびその他の学術誌への投稿に向けた指導を行う。/学生の外国語力向上のために、英語による授業を複数開講し、授業外での指導も行う。また、院生および学生の哲学に対

する関心をいっそう深化させるためのワークショップを開催する。

## 2. 研究

現代思想文化学専門分野との共同で、欧文学術誌として *Philosophia OSAKA* 第 8 号、第 9 号を刊行し、Web 上に公開する。/現代思想文化学専門分野および臨床哲学専門分野との共同で、論文集『メタフシカ』第 43 号、第 44 号を刊行し、Web 上に公開する。/現代思想文化学専門分野との共催で、研究会 *handai metaphysica* の研究例会をそれぞれの年度内に 2 回程度、計 4 回程度行う。/現代思想文化学専門分野との共同で、外国人哲学研究者を招聘し、講演会を開催するとともに、スタッフが海外で研究発表を行う。

## 3. 社会連携

現代思想文化学専門分野との共同で、開局された HP 上の<ビデオ・メタフシカ>から、さまざまな情報を発信する。/現代思想文化学専門分野との共同で、世界哲学の日に記念イベントを実施する。

# Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

各種論文作成のためのさまざまな個別指導を行い、卒業論文および修士論文の題目のみならず大学院生の研究発表の記録も HP 上に公開した。/学部生と大学院生が学問的な交流をもてるように、共通の演習および講義を行うとともに、大学院生の論文作成演習への学部生の参加を促した。/基礎セミナーを開講した。/専修独自のガイダンスについては、2012 年度は開催したが、2013 年度は、文学部全体の専修決定支援システムが整備されたためとりやめた。/英語による授業を複数開講し、学生たちの英語によるディスカッション能力と作文能力の向上を図った。/第 2 外国語の学習補助を授業外で行った。/2012 年度、当専修に新しく加わった学部生と院生を歓迎して、新入生歓迎イベント PFB を行った。/院生および学生の哲学に対する関心を深化させるための哲学ワークショップを 4 回開催した。目標は達成されたと考える。

## 2. 研究

現代思想文化学専門分野との共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第 8 号、第 9 号を刊行し、海外主要大学および国内主要大学に送付した。また、現代思想文化学専門分野および臨床哲学専門分野との共同で論文集『メタフシカ』第 43 号、第 44 号を発刊し、国内主要大学に送付した。これらはどちらも、Web 上での公開も行っている。この 2 年間に国内外の研究者らを招いた *handai metaphysica* 特別講演会を 3 回、また *handai metaphysica* 研究例会を 2 回開催した。またスタッフが参加する科研関連の研究会として、外国人研究者を招いた講演会を 2 度開催した。院生を含めたスタッフが国際共同研究会で発表し、欧文論文を発表した。目標は達成されたと考える。

## 3. 社会連携

HP 上に開局された<ビデオ・メタフシカ>から、各スタッフの授業紹介等を発信した。現代思想文化学専門分野との共同で、世界哲学の日記念企画を実施した。そのうち 1 回は、日にちはずれるが、海外からの研究者による公開講演会とした。目標は達成されたと考える。

# Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

前記の活動の結果、博士論文・修士論文・卒業論文いずれでも、比較的水準の高い成果がでた。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。在学中の学生に関しても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

## 2. 研究

外国および国内での学会発表、および欧文誌と和文誌による研究成果の国内外への発信という目標はほぼ達成された。また学会や研究会の積極的な開催に関しても、目標はほぼ達成された。

## 3. 社会連携

前記の活動を踏まえて自己評価すれば、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

# V. 基本情報(2012年度～2013年度)

## 1. 博士学位授与

### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	0	0	0
2013	1	0	1
計	1	0	1

### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

提出者：Luke, Malik, 論文題目：Dualism, Kripke's Modal Argument, Private Knowledge, and Other Problems

審査教員（主査）：入江幸男教授、（副査）：上野修教授、舟場保之准教授、中山康雄教授（人間科学研究科）

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	0(0)	2(2)	3(3)	0(0)	1(0)	6(5)
2013	1(1)	1(1)	1(1)	0(0)	1(0)	4(3)
計	1(1)	3(3)	4(4)	0(0)	2(0)	10(8)

括弧内は査読付き論文数。

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	1	5	10	0	0	16
2013	2	8	11	0	0	21
計	3	13	21	0	0	37

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

## (1)論文

【2012年度】

〔博士後期〕

田中悠介「ベルクソンの直観概念—共感と神秘的経験—」『待兼山論叢』第46号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-15, 2012/12

野々村梓「公理としての「能動・受動」—デカルト『情念論』第1部第1項について—」『哲学の探求』第39号, 哲学若手研究者フォーラム, pp.97-109, 2012/5

原田淳平「真理の多元主義は包括的真理をどのように扱うのか」『待兼山論叢』第46号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 17-32, 2012/12

藤野幸彦「スピノザ『エチカ』における個物の定位—その本質と現実存在について—」『メタフュシカ』第43号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 39-52, 2012/12

嘉目道人「超越的論証・遂行的矛盾・直観主義論理」『メタフュシカ』第43号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 63-74, 2012/12

Luke Malik「What Tomoko does know: A Normal and Simple Solution to the Problem of Logical Omniscience」『メタフュシカ』第43号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 53-61, 2012/12

【2013年度】

〔博士後期〕

小田裕二郎「スピノザ『エチカ』における人間本性の型」『哲学の探求』第40号, 哲学若手研究者フォーラム, pp.163-173, 2013/5

小竹陽介「事物の本質と定義—スピノザ『エチカ』における事物の本質に関する一問題について」『メタフュシカ』第44号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 43-53, 2013/12

藤野幸彦「神の存在・本質・力能—スピノザ『エチカ』におけるその同一性と原因の一義性—」『待兼山論叢』第47号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 35-49, 2013/12

嘉目道人「「理性の事行」の(不)可能性—道徳法則の意識をめぐるカントとフィヒテの差異—」『倫理学研究』第43号, 関西倫理学会編, 晃洋書房, pp.80-90, 2013/6

## (2)口頭発表

【2012年度】

〔博士前期〕

阿部倫子「可能的な物体と現実世界の物体の違いについて」日本ライプニッツ協会第4回大会, 東京女子大学, 2012/11/4

小田裕二郎「直説法と命令法(スピノザとカントの倫理学)」第8回哲学ワークショップ, 大阪大学文学研究科本館 2F 大会議室, 2013/1/26

小田裕二郎「自由意志の否定と倫理学—『エチカ』第4部読解—」, 2012年度哲学若手研究者フォーラム, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2012/7

小田裕二郎「命法なき規範はいかにして可能か」第7回哲学ワークショップ, 大阪大学文学研究科本館 2F 大会議室, 2012/7/7

〔博士後期〕

小竹陽介(文献紹介)「シャントル・ジャケ著『永遠の相の下に: スピノザにおける時間・持続・永遠性概念の研究』(Jacquet, Chantal: *Sub Specie Aeternitatis: Étude des concepts de temps, durée et éternité chez Spinoza*, Paris: Édition Kimé, 1997), 第16回 *handai metaphysica* 研究例会, 大阪大学文学研究科本館 4F 講義室 461 教室, 2013/3/8

須賀佳苗「『人倫の形而上学』「法論」における法の法則と生得的権利について」近代倫理学研究会, 早稲田大学, 2012/7/28

野々村梓「デカルトにおける「能動・受動」概念」京都哲学史研究, 京都大学楽友会館, 2012/4

原田淳平「真理概念はデフレ化することができるのか」応用哲学会第4次研究大会, 千葉大学, 2012/4

- 藤野幸彦「<善>/<悪>概念の解体と再構築の諸相—スピノザの場合/ニーチェの場合—」第7回哲学ワークショップ, 大阪大学文学研究科本館 2F 大会議室, 2012/7/7
- 藤野幸彦「スピノザ『エチカ』における様態概念の解釈—ベネットの“Field metaphysic”をめぐって—」スピノザ協会 第61回研究会「個物をめぐって」, 明治大学, 2013/3
- 藤野幸彦「スピノザ『エチカ』における個物の定位—その本質と現実存在について—」, 第16回 *handai metaphysica* 研究例会, 大阪大学文学研究科本館 4F 講義室 461 教室, 2013/3/8
- 嘉目道人「What is the Unlimited Communication Community? Transcendental Pragmatics as Cotemporary Fichteanism」, 11<sup>th</sup> Biennial Meeting of North American Fichte Society, ラヴァル大学 (カナダ), 2012/5/19
- 嘉目道人「「究極の根拠付け」か「生活世界の人倫性」か—討議倫理をめぐるアーペルとハーバーマスの論争—」日本哲学会第71回大会, 大阪大学, 2012/5/12
- 嘉目道人「超越的論証・遂行的矛盾・直観主義論理」第16回 *handai metaphysica* 研究例会, 大阪大学文学研究科本館 4F 講義室 461 教室, 2012/3/8
- 米田恵「人権に関する異文化横断的討議」(研究集会)「人権概念を問う—グローバル化によるコンフリクト状況の中で—」哲学的人権概念研究会, 早稲田大学戸山キャンパス第7会議室 (39号館6階), 2013/3/7
- Luke Malik「What Tomoko does know: A Normal and Simple Solution to the Problem of Logical Omniscience」第16回 *handai metaphysica* 研究例会, 大阪大学文学研究科本館 4F 講義室 461 教室, 2013/3/8
- 【2013年度】**
- 〔博士前期〕
- 下山惣太郎「ルーマンにおけるシステムの閉じと意味に関する研究」第4回ルーマン研究会, 中央大学, 2014/2
- 下山惣太郎「ルーマンにおける社会の存在論的地位」第86回日本社会学会大会, 慶応義塾大学, 2013/10
- 下山惣太郎「実体の区別とルーマンにおけるオートポイエシス」2013年度哲学若手研究者フォーラム, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2013/7
- 仲宗根勝仁「二次意味論にもとづくチャーマーズのフレーゲの意味論について」2013年度哲学若手研究者フォーラム, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2013/7
- 仲宗根勝仁「二次意味論—その思想と枠組み」第9回哲学ワークショップ, 大阪大学待兼山会館 2F 会議室, 2013/6/29
- 〔博士後期〕
- 阿部倫子 (文献紹介) オハド・ナハトミ著『ライブニッツ形而上学における可能性・活動・個性』(Ohad Nachtomy, Possibility, Agency, and Individuality in Leibniz's Metaphysics, Springer, 2012)第17回 *handai metaphysica* 研究例会, 大阪大学待兼山会館 2F 会議室, 2014/3/10
- 大塚高弘 (文献紹介) リチャード・メイソン著『スピノザの神 : 哲学的研究』(Richard Mason: The God of Spinoza: A Philosophical Study, Cambridge University Press, 1997)第17回 *handai metaphysica* 研究例会, 大阪大学待兼山会館 2F 会議室, 2014/3/10
- 大塚高弘・小田裕二朗 (パネルディスカッション)「主体はどこに在るか—ヒュームあるいはラカン—」第10回哲学ワークショップ, 大阪大学文学部本館 2F 大会議室, 2014/1/13
- 大塚高弘「『神学政治論』におけるモーゼの律法の位置づけをめぐって」スピノザ協会第62回大会, 大阪大学豊中キャンパス, 2013/9
- 小田裕二朗 (文献紹介) シャンタル・ジャケ著『スピノザにおける活動力の表現』(Jaquet, Chantal: Les expressions de la puissance d'agir chez Spinoza, Publications de la Sorbonne, 2005)第17回 *handai metaphysica* 研究例会, 大阪大学待兼山会館 2F 会議室, 2014/3/10
- 小田裕二朗「スピノザ『エチカ』における欲望 *cupiditas* の変容」関西倫理学会 2013年度大会, 立命館大学, 2013/11
- 小竹陽介「La certitude et l'éternité chez Spinoza」, Congrès Collaboratoire de Philosophie et de Littérature: La recherche «Mondialisée» du point de vue de la Culture Française (卓越した大学院拠点形成支援補助金) 大阪大学豊中キャンパス, 2014/3/29



- 小竹陽介「事物の本質と定義—スピノザ『エチカ』における事物の本質に関する一問題について」第 17 回 handai metaphysica 研究例会, 大阪大学待兼山会館 2F 会議室, 2014/3/10
- 小竹陽介「精神の永遠な部分と身体の本質—『エチカ』第 5 部定理 22,23 について」スピノザ協会第 62 回大会, 大阪大学豊中キャンパス, 2013/9
- 原田淳平「What Do We Use “Truth” For? —Criticizing Horwich’s Minimalism」第 23 回世界哲学学会アテネ大会 XXIII World Congress of Philosophy, アテネ大学 (ギリシア), 2013/8
- 原田淳平「真理はいかにして多元的でありうるのか—真理の多元主義自体の多元性を検討する—」2013 年度哲学若手研究者フォーラム, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2013/7
- 原田淳平・藤野幸彦 (パネルディスカッション)「真理のプリミティビストとしてのスピノザとホーウィッチ—真理論は存在論から独立しうるか—」第 9 回哲学ワークショップ, 大阪大学待兼山会館 2F 会議室, 2013/6/29
- 藤野幸彦「スピノザ『エチカ』における様態概念の定位—偶有性概念への反駁として—」, 関西哲学学会第 66 回大会, 大阪大学豊中キャンパス, 2013/10
- 嘉目道人 'Globalization and the Ideal Communication Community: From a transcendental-Pragmatic Point of View', The HeKKSaGOn Students Workshop, ハイデルベルク大学ヤスパース・センター112 教室, 2013/9/10
- 嘉目道人 'Fichtean Intellectual Intuition Revisited: On the agent's knowledge in Transcendental Pragmatics' 第 23 回世界哲学学会アテネ大会 XXIII World Congress of Philosophy, アテネ大学 (ギリシア), 2013/8
- 米田恵 (文献紹介) ユルゲン・ハーバーマス著「人権に関する異文化横断的ディスカルス」; ヴォルフガング・R・ケーラー著「人権への権利」(Jürgen Habermas, Der interkulturelle Diskurs über Menschenrechte, in: Hauke Brunkhorst, Wolfgang R.Köhler und Matthias Lutz-Bachmann (Hg.), Recht auf Menschenrechte, Suhrkamp, 1999, S.216-227, Wolfgang R. Köhler, Das Recht auf Menschenrechte, in: Recht auf Menschenrechte,S.106-124.), 第 17 回 handai metaphysica 研究例会, 大阪大学待兼山会館 2F 会議室, 2014/3/10

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2012 年度】

[博士後期]

- 小竹陽介 (文献紹介)「シャンタル・ジャケ著『永遠の相の下に:スピノザにおける時間・持続・永遠性概念の研究』(Jacquet, Chantal: *Sub Specie Aeternitatis: Étude des concepts de temps, durée et éternité chez Spinoza*, Paris: Édition Kimé, 1997)『メタフシカ』第 43 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編, pp. 131-137, 2012/12

【2013 年度】

[博士後期]

- 阿部倫子 (文献紹介) オハド・ナハトミ著『ライプニッツ形而上学における可能性・活動・個性』(Ohad Nachtomy, Possibility, Agency, and Individuality in Leibniz's Metaphysics, Springer, 2012)『メタフシカ』第 44 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編, pp.113-119, 2013/12
- 小田裕二郎 (文献紹介) シャンタル・ジャケ著『スピノザにおける活動力の表現』(Jaquet, Chantal: *Les expressions de la puissance d'agir chez Spinoza*, Publications de la Sorbonne, 2005)『メタフシカ』第 44 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編, pp.121-126, 2013/12
- 大塚高弘 (文献紹介) リチャード・メイソン著『スピノザの神 : 哲学的研究』(Richard Mason: *The God of Spinoza: A Philosophical Study*, Cambridge University Press, 1997)『メタフシカ』第 44 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編, pp.121-126, 2013/12
- 米田恵 (文献紹介) ユルゲン・ハーバーマス著「人権に関する異文化横断的ディスカルス」; ヴォルフガング・R・ケーラー著「人権への権利」(Jürgen Habermas, Der interkulturelle Diskurs über Menschenrechte,in: Hauke Brunkhorst, Wolfgang R.Köhler und Matthias Lutz-Bachmann (Hg.), Recht auf Menschenrechte, Suhrkamp, 1999, S.216-227, Wolfgang R. Köhler, Das Recht auf Menschenrechte, in: Recht auf Menschenrechte,S.106-124.)『メタフ

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計1名)

2013年度 PD: 1名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計2名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2013年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

平光 哲朗 博士後期課程修了、神戸学院大学人文学部、講師、2012/4

野々村 梓 博士後期課程単位修得退学、大阪大学、助教、2013/4

重田 謙 博士後期課程修了、長岡技術科学大学、准教授、2013/12

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 10名

2012年度: 3名 2013年度: 7名

<内訳> 技術職 3名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 1名 中・高等学校の教員 1名  
その他 4名

\*学部卒業者については現代思想文化学との合計で記載。

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 5名

2012年度: 1名 2013年度: 4名

### 9. 刊行物

2012年度 『メタフェシカ』第43号、*Philosophia OSAKA*, No. 8

2013年度 『メタフェシカ』第44号、*Philosophia OSAKA*, No. 9

### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

第66回関西哲学会大会 (於、大阪大学・豊中キャンパス) 2013年10月19日・20日

ジャン＝クレ・マルタン氏講演会「様態とは何か—ドゥルーズの仕事におけるスピノザの特異性」

2013年2月27日

於: 大阪大学待兼山会館2F会議室

科研シンポジウム「近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」

2012年11月25日

於：大阪大学文学部 2F 大会議室	
「カントにおけるスピノザ問題」(科研研究会)	2012年11月24日
於：大阪大学待兼山会館 2F 会議室	
ザントカウレン教授講演会「ヤコービの「スピノザとアンチ／スピノザ」	2012年11月4日
於：大阪大学大学院文学研究科本館 4F 講義室 461 教室	
「現代思想のトラウマとしてのスピノザ」(科研研究会)	2012年5月19日・20日
於：大阪大学待兼山会館 2F 会議室・大阪大学大学院文学研究科 2F 大会議室	
第 71 回日本哲学会大会 (於、大阪大学・豊中キャンパス)	2012年5月12日・13日
スピノザ協会事務局	2007年4月～2013年3月

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第 17 回 handai metaphysica 研究例会 (2014 年 3 月 10 日、大阪大学待兼山会館 2F 会議室)。

【第 1 部】 10 時 00 分～12 時 05 分 【第 2 部】 13 時 00 分～17 時 50 分

【第 1 部】

阿部倫子 (哲学哲学史博士後期課程) : オハド・ナハトミ著『ライブニッツ形而上学における可能性・活動・個性』  
(Ohad Nachtomy, *Possibility, Agency, and Individuality in Leibniz's Metaphysics*, Springer, 2012.)

小田裕二郎 (哲学哲学史博士後期課程) : シャンタル・ジャケ著『スピノザにおける活動力の表現』

(Jaquet, Chantal: *Les expressions de la puissance d'agir chez Spinoza*, Publications de la Sorbonne, 2005.)

大塚高弘 (哲学哲学史博士後期課程) : リチャード・メイソン著『スピノザの神 : 哲学的研究』

(Richard Mason: *The God of Spinoza: A Philosophical Study*, Cambridge University Press, 1997)

戸谷洋志 (現代思想文化学博士後期課程) : ヴォルフガング・エーリッヒ・ミュラー著『ハンス・ヨナス—責任の哲学者』

(Mueller, Wolfgang Erich: *Hans Jonas: Philosoph der Verantwortung*, WBG, Darmstadt, 2008)

米田恵 (哲学哲学史博士後期課程) : ユルゲン・ハーバーマス著「人権に関する異文化横断的ディスクルス」; ヴォルフガング・R・ケーラー著「人権への権利」

【第 2 部】

井西弘樹 (現代思想文化学博士後期課程) : 認識とカーニエーチェ『曙光』における同情と「認識の情熱」の関係について—

小竹陽介 (哲学哲学史博士後期課程) : 事物の本質と定義—スピノザ『エチカ』における事物の本質に関する一問題について

和泉悠 (メリーランド大学) : *Contextualism and Japanese Knowledge Attributions*

平光哲朗 (神戸学院大学) : ベルクソンにおける直観を構成するものとしての人格について

舟場保之 (哲学哲学史准教授) : 「任意の、いつでも解散できる」会議へ向けての考察

参加者 17 名。

第 16 回 handai metaphysica 研究例会 (2013 年 3 月 8 日、大阪大学大学院文学研究科本館 4F 講義室 461)。

発表者 : 井西弘樹 (現代思想文化学博士後期課程) : アルドー・ヴェントゥレリ著『ニーチェにおける芸術、学問、歴史』(Aldo Venturelli : *Kunst, Wissenschaft und Geschichte bei Nietzsche*, Monographien und Texte zur Nietzsche-Forschung, Bd. 47, de Gruyter, 2003)、小竹陽介 (哲学哲学史博士後期課程) : シャンタル・ジャケ著『永遠の相の下に : スピノザにおける時間・持続・永遠性概念の研究』(Jaquet, Chantal [1997] *Sub Specie Aeternitatis: Etude des concepts de temps, duree et eternite chez Spinoza*, Paris: Edition Kime)、藤野幸彦 (哲学哲学史博士後期課程) 「スピノザ『エチカ』における個物の定位 —その本質と現実存在について—」、Luke Malik (哲学哲学史博士後期課程) *What Tomoko does know: A Normal and Simple Solution to the Problem of Logical Omniscience*、嘉目道人 (哲学哲学史博士後期課程) 「超越論的論証・遂行的矛盾・直観主義論理」。参加者 19 名。

第17回 handai metaphysica 特別講演会 (2013年11月30日、大阪大学大学院文学研究科中庭会議室)。

発表者: George di Giovanni (Professor of Philosophy, McGill University, Canada)

タイトル: The Kantian Legacy: Fichte's Wissenschaftslehre and Hegel's Logic

発表者: Daniel Breazeale (Professor of Philosophy, University of Kentucky, USA)

タイトル: Against Nature? On the Status and Meaning of the Natural World in J. G. Fichte's early Wissenschaftslehre

参加者16名。

学生が、英語を使用した「人文系学問の研究会」(Laboratory of Thinking, 3月15日、大阪大学)を、またフランス語を使用した「哲学と文学の共同コンgres」(La Recherche <<Mondialisée>> du point de vue de la Culture Française 3月29日、大阪大学)を、それぞれ開催した。

第16回 handai metaphysica 特別講演会 (2012年8月10日、大阪大学待兼山会館2F会議室)。

発表者: 樽井正義 (慶應義塾大学・教授)。タイトル: カントにおける普遍性。参加者18名。

第15回 handai metaphysica 特別講演会 (2012年6月12日、大阪大学待兼山会館2F会議室)。発表者: DR. RACHEL ALBECK-GIDORN (Bar-Ilan University)、The Influence of Spinoza's Thought on the Modern Jewish Culture 参加者15名。

## 12. 教員の研究活動(2012年度~2013年度の過去2年間)

### 1. 上野修教授

1951年生。1982年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。大阪大学助手、山口大学助教授、同教授を経て、2004年4月から現職。専攻: 哲学哲学史。

#### 1-1. 論文

上野修 「真理・意味・主体—デイヴィドソンの根元的解釈とラカン」『ジャック・ラカン研究』(日本ラカン協会), 9+10, pp. 214-235, 2012/12

上野修 「デカルトは矛盾しているか?—心身の実体的区別と合一—」『待兼山論叢』(大阪大学大学院文学研究科), 46, pp. 1-17, 2012/12

上野修 「ヴェイユとスピノザー酷薄の哲学のための覚書」『季報唯物論研究』121, 季報『唯物論研究』刊行会, pp. 10-15, 2012/11

上野修 「十七世紀は終わらない(様相の十七世紀—哲学史のワンダーランド最終回)」『本』432, 講談社, pp. 2-6, 2012/7

上野修 「スピノザ『エチカ』の〈定義〉」『アルケー』(関西哲学会), 20, pp. 42-53, 2012/7

上野修 「魂の深さ、世界の深さ—ライプニッツ(五)(様相の十七世紀—哲学史のワンダーランド24)」『本』431, 講談社, pp. 2-6, 2012/6

上野修 「連続体の迷宮—ライプニッツ(四)(様相の十七世紀—哲学史のワンダーランド23)」『本』430, 講談社, pp. 2-6, 2012/5

上野修 「ここが最善世界であるかのように—ライプニッツ(三)(様相の十七世紀—哲学史のワンダーランド22)」『本』429, 講談社, pp. 2-6, 2012/4

#### 1-2. 著書

上野修 『哲学者たちのワンダーランド—様相の十七世紀』講談社, 276p., 2013/11

上野修他(共著) 『現代社会学事典』弘文堂, p.725,1179,1302, 2012/12

上野修他(共著) 『哲学の挑戦』春風社, pp. 39-69, 2012/11

上野修 『ライプニッツ読本』法政大学出版局, pp. 208-218, 2012/10

上野修他(共著) 『西洋哲学史 III 「ポスト・モダン」のまえに』講談社, pp. 195-252, 2012/6

### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 1-4. 口頭発表

---

上野修 「ラカンのスピノザ(予備的考察)」フランス・エピステモロジーの伏流としてのスピノザ第1回研究会, フランス・エピステモロジーの伏流としてのスピノザ研究会, 大阪大学, 2013/12

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2013年度～2015年度、基盤研究(B) 一般、代表者:上野修

課題番号:25284006

研究題目:フランス・エピステモロジーの伏流としてのスピノザ

研究経費:2013年度 直接経費 1,700,000円 間接経費 510,000円

研究の目的:

フランス・エピステモロジー(科学認識論)と呼ばれる哲学的系譜にはスピノザ主義の伏流が存在すると見られる。これを洗い出すことによって、(1)エピステモロジーの系譜の複雑に入り組んだ多層性を整理し、エピステモロジーの意義を理解するための一つの文脈を与える。(2)と同時に、エピステモロジーの暗黙の参照項として伏在するスピノザ哲学そのもののもつ可能性を明確にする。

1-6-2. 2010年度～2012年度、基盤研究(B) 一般、代表者:上野修

課題番号:22320007

研究題目:近現代哲学における虚軸としてのスピノザ

研究経費:2012年度 直接経費 2,600,000円 間接経費 780,000円

研究の目的:

本研究は、西洋近現代哲学思想の形成にスピノザ思想が与えた影響について、影響作用史的視点から明らかにする。「神即自然」の哲学者スピノザ(1632-1677)の登場はヨーロッパを震撼させ、彼の名はひとつの躓きとなった。「スピノザ主義」という呼称は学派の理念や方法を意味するよりは、むしろ何らかの忌避と抵抗、あるいは畏怖を交えた魅惑を伴うある種のアノマリーの符牒として機能してきたのである。このようなスピノザ哲学の特異な影響作用力に注目し、近現代哲学思想の形成史を縦断するいわば「虚の軸」としてスピノザのプレゼンスを明らかにすること、これが本研究の目的である。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本哲学会・推薦理事, 2013年6月～現在に至る

日本ライブニッツ協会・理事, 2012年4月～現在に至る

日本哲学会・評議員, 2011年6月～現在に至る

西日本哲学会・評議員, 2010年12月～現在に至る

日本哲学会・編集委員, 2009年7月～2013年5月

関西哲学会・委員, 2007年10月～現在に至る

スピノザ協会・運営委員, 1989年3月～現在に至る

## 2. 入江 幸男 教授

1953年生。1983年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。大阪大学助手、大阪樟蔭女子大学講師、同助教授、大阪大学助教授を経て、2003年10月から現職。専攻:哲学哲学史。

### 2-1. 論文

---

入江幸男 「『意識の事実』(1810)と知識学の関係——あるいは、アポステリオリな知とアプリオリな知——」『フィヒテ研究』21, 日本フィヒテ協会, pp. 39-53, 2013/11

入江幸男 「『ベルリン期における知識学への準備講義』報告」『フィヒテ研究』21, 日本フィヒテ協会, pp. 21-24, 2013/11

入江幸男 「意味の全体論とフィヒテの知識学」『フィヒテ研究』(日本フィヒテ協会), 20, pp. 17-30, 2012/11

### 2-2. 著書

---

Irie, Yukio, Jürgen Stollzenberg, Vadim Murskiy 他(共著), *Fichtes späte Wissenschaftslehre*, Verlag der Russische Christliche Hunaitäre Academy, pp. 272-282, 2012/11

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

### 2-4. 口頭発表

---

Irie, Yukio, “The Self-reflectiveness of Society -- Nationalism, Idealism, and Social Constructionism --”, HeKKSaGOn Presidents’ Meeting, The Session of Social Science and Cultural Translation, HeKKSaGOn Consortium, Göttingen University, 2013/9

入江幸男 「討議倫理学から問答論的アプローチへ向けて」久高科研研究会, 琉球大学法文学部, 2013/3

Irie, Yukio, “A Proof of Collingwood’s Thesis”, Philosophische Seminar Heidelberg University, Heidelberg University, 2012/12

Irie, Yukio, “Die große Veränderung der Geisteswissenschaften und Sozialwissenschaften in Japan nach 1990”, Institut für Japanologie Universität Heidelberg, Universität Heidelberg, 2012/12

入江幸男 「翻訳の不可能性」, 翻訳学科, Universität Heidelberg, 2012/12

入江幸男 (招待講演)「徹底的に純粋な観念論の限界——フィヒテが知の外部に絶対者を想定する理由——」同志社大学文学部哲学科 パネルディスカッション『フィヒテ後期知識学における絶対者と知』, 同志社大学文学部哲学科, 2012/12

入江幸男 「『意識の事実』と知識学の関係——あるいは、アポステリオリな知とアプリオリな知の関係」シンポジウム「ベルリン期における知識学への準備講義」, 日本フィヒテ協会, 神戸市立工業高等専門学校, 2012/11

Irie, Yukio, “Semantic Holism and Fichte’s Wissenschaftslehre”, The VIII International Fichte Kongress, The International Fichte Association, Bologna University, 2012/9

Irie, Yukio, (パネリスト)“Philosophy in Japan after WWII”, the Pacific Division of APA in Seattle, the Pacific Division of APA, Westin Seattle Hotel (USA, シアトル市), 2012/4

Irie, Yukio, “Semantic Holism and Fichte’s Wissenschaftslehre”, The Inaugural Conference For Kant, Fichte, and The Legacy of German Idealism, Department of Philosophy, Nebraska University at Omaha, Nebraska University at Omaha, 2012/4

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

入江幸男 第1回フィヒテ協会賞(研究奨励賞), フィヒテ協会, 1995/11

### 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2013 年度～2015 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:入江幸男

課題番号:25370018

研究題目:分析哲学とドイツ観念論の連携およびそのグローバルな意義

研究経費:2013 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

近年、分析哲学からのドイツ観念論の再評価が注目を集めている。中でもピッツバーグ大学のブランダムとマクダウェルによるカントとヘーゲルの再評価は、現代哲学にとって重要な意味を持っており、彼らがドイツ観念論を援用しながら主張している新しいタイプの意味の全体論と価値実在論を検証することが第一の課題である。第二の課題は、意味の全体論や価値の実在論は、言語の理解や価値認識にとどまらず、文化の理解全体にもかかわる主張であるので、この成果をグローバル化の時代における文化の理論の基礎理論へと展開することである。

2-6-2. 2010 年度～2012 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:入江幸男

課題番号:22520023

研究題目:意味の全体論とドイツ観念論

研究経費:2012 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

意味の全体論を最初に主張した哲学者としてのヘーゲルの読み直しと再評価が、ピッツバーグ大学の R.ブランダムと J.マクダウェルを中心に活発に行われている。ただし彼らの論証方法は、フィヒテの超越論的な論証にせよ、ヘーゲルの弁証法にせよ、現代の分析哲学での論証方法とは異なっている。そして、それゆえにこそドイツ観念論の議論が、現代の意味論、認識論、存在論に大いに貢献できる点があり、それを追究することが目的である。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本哲学会・理事, 2011 年 7 月～2013 年 5 月

日本哲学会・評議員, 2011 年 5 月～現在に至る

日本フィヒテ協会・賞選考委員, 2010 年 3 月～2013 年 3 月

関西哲学会・委員, 2004 年 11 月～現在に至る

日本フィヒテ協会・常任委員, 1999 年 11 月～現在に至る

## 3. 舟場 保之 准教授

1962 年生。1992 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。立命館大学嘱託講師を経て、2004 年 4 月から現職。専攻:哲学哲学史。

### 3-1. 論文

---

Funaba, Yasuyuki, "Sind Menschenrechte als moralische Rechte oder als juristische Rechte zu verstehen?" *Philosophia OSAKA*, Nr. 9, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 81-90, 2014/3

舟場保之 「「任意の、いつでも解散できる」会議へ向けての考察」『メタフィシカ』第 44 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 1-12, 2013/12

Funaba, Yasuyuki, "Humanitäre Intervention und Menschenrechte" *Philosophia OSAKA*, Nr. 8, Philosophy and History of

Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 53-61, 2013/3

Funaba, Yasuyuki, “Gibt es Sätze, die zwar in thesi, aber nicht in hypothesi gelten?

Klugheit bei Kant” *PHRONÉSIS-PRUDENTIA-KLUGHEIT Das Wissen des Klugen in Mittelalter, Renaissance und Neuzeit*, Alexander Fidora, Andreas Niederberger, Merio Scattola, Porto, pp. 307-317, 2013/3

### 3-2. 著書

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

舟場保之, 久高将晃(共訳)(翻訳、カール=オットー・アーペル著)「超越論的語用論とは何か?」『超越論的語用論とは何か?』梓出版社, pp. 80-192, 2013/6

加藤泰史, 御子柴善之, 舟場保之他(共訳)(翻訳、アルブレヒト・ヴェルマー)「倫理学と対話」加藤泰史(監訳)『倫理学と対話』法政大学出版局, pp. 64-147, 2013/4

舟場保之, 寺田俊郎(監訳)(翻訳、W. ケアスティング)「自由の秩序 —カントの法および国家の哲学—」『自由の秩序 —カントの法および国家の哲学—』ミネルヴァ書房, pp. 1-415, 2013/1

加藤泰史, 日暮雅夫, 舟場保之他(共訳)(翻訳、ナンシー・フレイザー、アクセル・ホネット)「再配分か承認か?」加藤泰史(監訳)『再配分か承認か?』法政大学出版局, pp. 117-181, 2012/10

舟場保之(コラム)「批判の可能性を考える」有福孝岳、牧野英二(編)『カントを学ぶ人のために』世界思想社, pp. 19-20, 2012/5

### 3-4. 口頭発表

舟場保之 「「任意の、いつでも解散できる」会議へ向けての考察」第17回 handai metaphysica 研究例会, handai metaphysica, 大阪大学, 2014/3

Funaba, Yasuyuki, “Zur kognitivistischen Moraltheorie von Jürgen Habermas”, Konferenz: Was heißt Transzendentalpragmatik?, 超越論的語用論研究会, 琉球大学, 2014/3

舟場保之 「ゲオルク・コーラーにおける人権概念」研究集会「人権概念を考察する」哲学的人権概念研究会, 早稲田大学, 2013/12

舟場保之 「『道徳論の体系』(1812)における「わかっちゃいるけどやめられない」の不可能性について」日本フィヒテ協会第29回大会シンポジウム: フィヒテの道徳論, 日本フィヒテ協会, お茶の水女子大学, 2013/11

Funaba, Yasuyuki, “Sind Menschenrechte moralisch oder juristisch zu verstehen?”, 7. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium, Menschenrechte im Zeitalter der Globalisierung II, Europazentrum der Waseda-Universität, Bonn, GERMANY, 2013/8

舟場保之 「世界内政治。責任の限界と脱国家化 政治と人権の関係を定めるいくつかの可能性について」研究集会「人権概念を問う —グローバル化によるコンフリクト状況の中で—」哲学的人権概念研究会, 早稲田大学戸山キャンパス, 2013/3

舟場保之 「法を道徳によって根拠づけることの問題性について —アーペルとハーバーマスの議論を手がかりに—」『超越論的語用論における究極的根拠付け』超越論的語用論研究会, 琉球大学, 2013/3

Funaba, Yasuyuki, “Humanitäre Intervention und Menschenrechte”, 6. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium, Menschenrechte im Zeitalter der Globalisierung II, Europazentrum der Waseda-Universität, Bonn, GERMANY, 2012/8

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

舟場保之 大阪大学共通教育賞(2005年度前期), 大阪大学全学教育推進機構, 2005/11

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし



### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本フイテテ協会・委員, 2013年3月～現在に至る  
日本カント協会・編集委員, 2012年6月～現在に至る  
日本カント協会・常任委員, 2012年4月～現在に至る  
日本哲学会・編集委員, 2009年7月～2013年6月  
日本カント協会・委員, 2007年4月～現在に至る  
日本フイテテ協会・会計監査, 2007年3月～2013年2月

## 4. 野々村 梓 助教

1981年生。2013年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。2013年4月より現職。専攻:哲学哲学史。

### 4-1. 論文

---

野々村梓「魂の内的葛藤について—デカルト『情念論』第47項—」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 47, pp. 19-34, 2013/12

### 4-2. 著書

---

なし

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 4-4. 口頭発表

---

なし

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-2 現代思想文化学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 1 教授 兼任1 准教授 兼任1 講師 0 助教 0

教授：須藤 訓任

教授：望月 太郎 (海外拠点本部所属・兼任)

准教授：中村 征樹 (全学教育推進機構所属・兼任)

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
25	3	5	0	0	4	1	0

\*うち留学生 1 名、社会人学生 1 名

\*\*哲学・思想文化学専修として

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	7	1	1	1
2013	13	4	0	0
計	20	5	1	1

\*哲学・思想文化学専修として

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

学部と大学院でそれぞれ以下の具体的な目標を掲げた。【学部】1年生対象の基礎セミナーを行う。/専修決定の期間に、専修独自のガイダンスを行う。/哲学の基本文献読解のための演習を学部生向けに開講し、基礎学力を養成する。/卒業論文を提出する予定の学生に対しては、研究発表を行わせ、論文を仕上げられるように指導する。【大学院】修士・博士論文作成のための十分な個別指導を行う。/研究テーマに関連した論文紹介などを含む研究発表を行わせ、その記録をHPにアップする。/博士後期課程の学生には、『メタフュシカ』およびその他の学術誌への投稿に向けた指導を行う。/

学生の外国語能力向上に向けて、英語授業を複数開講し、修行外での指導も行う。また、院生および学生の哲学に対する関心をいっそう深化させるためのワークショップを開催する。

## 2. 研究

哲学哲学史専門分野との共同で、欧文学術誌として *Philosophia OSAKA* 第 8 号、第 9 号を刊行し、Web 上に公開する。/哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野との共同で、論文集『メタフシカ』第 43 号、第 44 号を刊行し、Web 上に公開する。/哲学哲学史専門分野との共催で、研究会 *handai metaphysica* の研究例会をそれぞれの年度内に 2 回程度、計 4 回程度行う。/哲学哲学史専門分野との共同で、外国人哲学研究者を招聘し、講演会を開催するとともに、スタッフが海外で研究発表を行う。

## 3. 社会連携

哲学哲学史専門分野との共同で、開局された HP 上の〈ビデオ・メタフシカ〉から、さまざまな情報を発信する。/哲学哲学史専門分野との共同で、世界哲学の日に記念イベントを実施する。

# Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

各種論文作成のためのさまざまな個別指導を行い、卒業論文および修士論文の題目のみならず大学院生の研究発表の記録も HP 上に公開した。/学部生と大学院生が学問的な交流をもてるように、共通の演習および講義を行うとともに、大学院生の論文作成演習への学部生の参加を促した。/基礎セミナーを開講した。/専修独自のガイダンスについては 2012 年度は開催したが、2013 年度は文学部全体での専修決定支援システムが整備されたため取りやめた。/英語による授業を複数開講し、学生たちの英語によるディスカッション能力と作文能力の向上を図った。/第 2 外国語の学習補助を授業外で行った。/2012 年度、当専修に新しく加わった学部生と院生を歓迎して、新入生歓迎イベント PFB を行った。/院生および学生の哲学に対する関心を深化させるための哲学ワークショップを 4 回開催した。目標は達成されたと考える。

## 2. 研究

哲学哲学史専門分野との共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第 8 号、第 9 号を刊行し、海外主要大学および国内主要大学に送付した。また、哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野との共同で論文集『メタフシカ』第 43 号、第 44 号を発刊し、国内主要大学に送付した。これらはどちらも、Web 上での公開も行っている。この 2 年間に国内外の研究者らを招いた *handai metaphysica* 特別講演会を 3 回、また *handai metaphysica* 研究例会を 2 回開催した。またスタッフが参加する科研関連の研究会として外国人研究者を招いた講演会を 2 度開催した。院生を含めたスタッフが国際共同研究会で発表し、欧文論文を発表した。目標は達成されたと考える。

## 3. 社会連携

HP 上に開局された〈ビデオ・メタフシカ〉から、各スタッフの授業紹介等を発信した。哲学哲学史専門分野との共同で、世界哲学の日記念企画を実施した。そのうちの一回は日にちはずれるが海外からの研究者による公開講演会とした。目標は達成されたと考える。

# Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

前記の活動の結果、課程博士論文・修士論文・卒業論文いずれでも、比較的水準の高い成果が得た。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。在学中の学生に関しても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

## 2. 研究

外国および国内での学会発表、および欧文誌と和文誌による研究成果の国内外への発信という目標はほぼ達成された。また研究会の積極的な開催に関しても、目標はほぼ達成されたと考えられる。

## 3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

# V. 基本情報(2012年度～2013年度)

## 1. 博士学位授与

### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	1	0	1
2013	0	0	0
計	1	0	1

### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

平野一比古「ベルクソンにおける自由と直観について—「働く」時間と否定の力を通して— (La liberté et la puissance de l'intuition chez Bergson : À travers le temps qui «agit» et la force de negation)」2012/9

主査：望月太郎、副査：上野修、ミシェル・ダリシエ（同志社大学）

（トゥールーズ第2大学との日仏国際共同後見に係る審査においては主査：Jean-Christophe Goddard (L'Université de Toulouse II) / Taro Mochizuki, 副査：上野修、Michel Dalissier (同志社大学)、Paul-Antoine Miquel (L'Université de Nice))

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	1(1)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	2(2)
2013	3(2)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	4(3)
計	4(3)	0(0)	2(2)	0(0)	0(0)	6(5)

括弧内は査読付き論文数。

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	6	5	0	0	11

2013	0	5	9	0	0	14
計	0	11	14	0	0	25

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1) 論文

【2012年度】

〔博士前期〕

戸谷洋志「生命は生きる「べき」か？—H・ヨナスにおける生命の価値の基礎付け—」『文学と環境』第15号, ASLE-Japan/文学・環境学, pp.29-38, 2012/8

〔博士後期〕

谷山弘太「道徳の批判とは何か？—ニーチェ『道徳の系譜』第一論文における道徳の記述と批判の関係性に関する考察—」『メタフシカ』第43号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.23-38, 2012/12

【2013年度】

〔博士後期〕

井西弘樹「認識とカ—ニーチェ『曙光』における同情と「認識の情熱」の関係について—」『メタフシカ』第44号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.29-42, 2013/12

戸谷洋志「新陳代謝の現象学—ハンス・ヨナスにおける自己と他者の境界—」『文学と環境』第16号, ASLE-Japan/文学・環境学会, pp.33-43, 2013/10

〔その他〕

生島弘子「後期ニーチェ思想における身体からのキリスト教批判」『倫理学研究』第43号, 関西倫理学会, pp.102-112, 2013/6

武田宙也(研究ノート)「ポイエーシスとプラクシスのあいだ——エリー・デューリングのプロトタイプ論」『REPRE』第18号, <http://repre.org/repre/vol18/note/03/>, 表象文化論学会, 2013/5

### (2) 口頭発表

【2012年度】

〔博士前期〕

糸谷哲郎「超訳系哲学とは何か」第7回哲学ワークショップ, 大阪大学文学研究科本館 2F 大会議室, 2012/7

戸谷洋志「生命圏に対する人間の責任の基礎—ハンス・ヨナスにおける生命論の展開—」ASLE-Japan/文学環境学会第18回全国大会, 近畿大学, 2012/9

戸谷洋志「超訳系哲学とは何か」第7回哲学ワークショップ, 大阪大学文学研究科本館 2F 大会議室, 2012/7

山本哲哉「命法なき規範はいかにして可能か」第7回哲学ワークショップ, 大阪大学文学研究科本館 2F 大会議室, 2012/7

山本哲哉「生成と存在、あるいは物語としての歴史と出来事としての歴史」哲学若手研究者フォーラム, 東京, 2012/7

〔博士後期〕

生島弘子「後期ニーチェ思想における身体からのキリスト教批判」関西倫理学会, 信州大学, 2012/11

井西弘樹「ニーチェ『人間的、あまりに人間的』における認識・自由・正義について」ICU 哲学研究会, 国際基督教大学 ダイアログハウス国際会議室, 2013/3

井西弘樹「《文献紹介》アルドー・ヴェントゥレリ著『ニーチェにおける芸術、学問、歴史』 Aldo Venturelli: *Kunst, Wissenschaft und Geschichte bei Nietzsche*, Monographien und Texte zur Nietzsche-Forschung, Bd. 47, de Gruyter, 2003.」第16回 handai metaphysica 研究例会, 大阪大学大学院文学研究科本館 4F 講義室 461 教室, 2013/3

谷山弘太「道徳の批判とは何か？—ニーチェ『道徳の系譜』第一論文における道徳の記述と批判の関係性に関する考察—」

日本ショーペンハウアー協会 第18回ニーチェ・セミナー, 龍谷大学 深草キャンパス 22号館 106教室, 2012/12

谷山弘太「<善>/<悪>概念の解体と再構築の諸相 —スピノザの場合/ニーチェの場合—」第7回哲学ワークショップ、大阪大学、2012/7

谷山弘太「歴史的批判と必然性の認識—『人間的、あまりに人間的』より—」日本ショーペンハウアー協会 第17回ニーチェ・セミナー、大学セミナーハウス、2012/5

【2013年度】

〔学部〕

戸谷洋志、吉田絵弥「現代社会における倫理への懐疑の克服をめぐる—ヨナスとハーバーマス」第9回哲学ワークショップ、大阪大学、2013/6

〔博士前期〕

Yamamoto, Tetsuya "Nietzsche lit Nietzsche—la nécessité de la lecture cyclique chez Nietzsche, selon B. Pautrat." Congrès Collaboratoire de Philosophie et de Littérature. Organisateur: Yosuke Kotake., (但し、実際の発表では題目を修正し、"La machine nietzschéenne et la lecture cyclique, anachronique et historique chez Nietzsche—selon Bernard Pautrat, Versions du soleil" とした。) Université d'Osaka, 2014/3

山本哲哉 "Can Globalists read Nietzsche 'well'?—or the possibility of 'Alter-Globalism' suggested by Nietzsche." 文芸学研究会、大阪大学、2013/12

Yamamoto, Tetsuya "Can Globalists read Nietzsche 'well'?—the possibility of 'Alter-Globalism'". HeKKSaGOn Student Workshop. Organiser: Prof. Harald Fuess, Chair of "Cultural Economic History" at the Cluster and Scientific Coordinator of HeKKSaGOn at Heidelberg University, Heidelberg University, 2013/9

Yamamoto, Tetsuya "Can Globalists read Nietzsche 'well'?" Shifting Paradigms?—How the Humanities and Social Sciences Approach the Social and Cultural Changes in the Age of Globalisation. Organiser: the Symposium of Humanities and Social Sciences of HeKKSaGOn University Consortium & Graduate School of Letters Osaka University, Osaka University, 2013/5

〔博士後期〕

井西弘樹「認識とカーニーチェ『曙光』における同情と「認識の情熱」の関係について—」第17回 handai metaphysica 研究例会、大阪大学、2014/3

井西弘樹「中期ニーチェにおける正義論」関西哲学会第66回大会、大阪大学、2013/10

戸谷洋志「ヴォルフガング・エーリッヒ・ミュラー著『ハンス・ヨナス — 責任の哲学者』」第17回 handai metaphysica 研究例会、大阪大学、2014/3

戸谷洋志、青木健太、堀松辰彦「死をめぐる思想」第10回哲学ワークショップ、大阪大学、2014/1

戸谷洋志「ハンス・ヨナスにおける乳飲み子の機能について」関西哲学会第66回大会、大阪大学、2013/10

戸谷洋志「「乳飲み子」を「見る目」—ハンス・ヨナスの責任倫理学における認識論」関西大学生命倫理研究会第20回研究会、関西大学、2013/7

戸谷洋志、吉田絵弥「現代社会における倫理への懐疑の克服をめぐる—ヨナスとハーバーマス」第9回哲学ワークショップ、大阪大学、2013/6

戸谷洋志「H・ヨナスの責任倫理学におけるコミュニケーション論的基礎付けの可能性について」応用哲学会 第5回年次研究大会、南山大学、2013/4

〔その他〕

生島弘子「価値創造と哲学」第十回ニーチェ研究者の集い、大阪大学、2013/9/28

生島弘子「知恵と生、ツァラトゥストラの二人の女 —後期ニーチェ思想で構想される哲学者像—」日本哲学会第72回大会、お茶の水女子大学、2013/5/11

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2012年度】

[博士後期]

井西弘樹(文献紹介)「アルドール・ヴェントウレリ著『ニーチェにおける芸術、学問、歴史』 Aldo Venturelli: *Kunst, Wissenschaft und Geschichte bei Nietzsche*, Monographien und Texte zur Nietzsche-Forschung, Bd. 47, de Gruyter, 2003.」『メタフシカ』第43号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.123-129, 2012/12

【2013年度】

[博士後期]

戸谷洋志(文献紹介)「ヴォルフガング・エーリッヒ・ミュラー著『ハンス・ヨナス — 責任の哲学者』」『メタフシカ』第44号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.133-140, 2013/12

戸谷洋志「ダイオウグソクムシ「No.1」の絶食」*ASLE-Japan Newsletter*, No. 34, ASLE-Japan/文学・環境学会, p.5, 2013/6

[その他]

武田宙也(著書)『フーコーの美学——生と芸術のあいだで』人文書院, 314頁, 2014/3

武田宙也(新刊紹介)「國分功一郎『ドゥルーズの哲学原理』」『REPRE』第19号、

<http://repre.org/repre/vol19/books/01/04.php>、表象文化論学会、2013/10

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計1名)

2013年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計1名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

2013年度 学部: 0名 大学院: 2名 (計2名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 10名

2012年度: 3名 2013年度: 7名

<内訳> 技術職 3名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 1名 中・高等学校の教員 1名  
その他 4名

\*学部卒業者は哲学哲学史との合計で記載。

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2012年度：0名　2013年度：0名

## 9. 刊行物

2012年度　『メタフュシカ』第43号、*Philosophia OSAKA*, No. 8

2013年度　『メタフュシカ』第44号、*Philosophia OSAKA*, No. 9

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

第71回日本哲学会大会　2012年5月12日・13日

於：大阪大学豊中キャンパス

「現代思想のトラウマとしてのスピノザ」(科研研究会)

2012年5月19日・20日

於：大阪大学待兼山会館2F会議室・大阪大学文学部2F大会議室

サントカウレン教授講演会「ヤコービの「スピノザとアンチ／スピノザ」

2012年11月4日

於：大阪大学文学部461講義室

「カントにおけるスピノザ問題」(科研研究会)

2012年11月24日

於：大阪大学待兼山会館2F会議室

科研シンポジウム「近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」

2012年11月25日

於：大阪大学文学部2F大会議室

ジャン＝クレ・マルタン講演会「様態とは何か―ドゥルーズの仕事におけるスピノザの特異性」

於：大阪大学待兼山会館2F会議室

2013年2月27日

第10回ニーチェ研究者の集い

於：大阪大学待兼山会館2F会議室

2013年9月28日

第66回関西哲学会大会

2013年10月19日・20日

於：大阪大学豊中キャンパス

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第16回 *handai metaphysica* 研究例会 (哲学哲学史専門分野と共催)

2013年3月8日

発表者：井西弘樹 (現代思想文化学博士後期課程)：アルド・ヴェントゥレリ著『ニーチェにおける芸術、学問、歴史』(Aldo Venturelli: *Kunst, Wissenschaft und Geschichte bei Nietzsche*, Monographien und Texte zur Nietzsche-Forschung, Bd. 47, de Gruyter, 2003)、小竹陽介 (哲学哲学史博士後期課程)：シャンタル・ジャケ著『永遠の相の下に：スピノザにおける時間・持続・永遠性概念の研究』(Jaquet, Chantal [1997] *Sub Specie Aeternitatis: Etude des concepts de temps, durée et éternité chez Spinoza*, Paris: Edition Kime)、藤野幸彦 (哲学哲学史博士後期課程)「スピノザ『エチカ』における個物の定位 ―その本質と現実存在について―」、Luke Malik (哲学哲学史博士後期課程) What Tomoko does know: A Normal and Simple Solution to the Problem of Logical Omniscience, 嘉目道人 (哲学哲学史博士後期課程)「超越論的論証・遂行的矛盾・直観主義論理」

於：大阪大学大学院文学研究科本館4F講義室461、参加者19名。

第17回 *handai metaphysica* 研究例会 (2014年3月10日、大阪大学待兼山会館2F会議室)。

【第1部】10時00分～12時05分【第2部】13時00分～17時50分

【第1部】

阿部倫子 (哲学哲学史博士後期課程)：オハド・ナハトミ著『ライブニッツ形而上学における可能性・活動・個性』(Ohad Nachtomy, *Possibility, Agency, and Individuality in Leibniz's Metaphysics*, Springer, 2012.)

小田裕二郎 (哲学哲学史博士後期課程)：シャンタル・ジャケ著『スピノザにおける活動力の表現』

(Jaquet, Chantal: *Les expressions de la puissance d'agir chez Spinoza*, Publications de la Sorbonne, 2005.)

大塚高弘 (哲学哲学史博士後期課程)：リチャード・メイソン著『スピノザの神：哲学的研究』



(Richard Mason: *The God of Spinoza: A Philosophical Study*, Cambridge University Press, 1997)

戸谷洋志 (現代思想文化学博士後期課程) : ヴォルフガング・エーリッヒ・ミュラー著『ハンス・ヨナス — 責任の哲学者』

(Mueller, Wolfgang Erich: *Hans Jonas: Philosoph der Verantwortung*, WBG, Darmstadt, 2008)

米田恵 (哲学哲学史博士後期課程) : ユルゲン・ハーバーマス著「人権に関する異文化横断的ディスカルス」; ヴォルフガング・R・ケーラー著「人権への権利」

(Juergen Habermas, Der interkulturelle Diskurs ueber Menschenrechte, in: Hauke Brunkhorst, Wolfgang R.Koehler und Matthias Lutz-Bachmann (Hg.), *Recht auf Menschenrechte*, Suhrkamp, 1999, S.216-227, Wolfgang R. Koehler, Das Recht auf Menschenrechte, in: *Recht auf Menschenrechte*, S.106-124.)

## 【第2部】

井西弘樹 (現代思想文化学博士後期課程) : 認識と力 — ニーチェ『曙光』における同情と「認識の情熱」の関係について —

小竹陽介 (哲学哲学史博士後期課程) : 事物の本質と定義 — スピノザ『エチカ』における事物の本質に関する一問題について —

和泉悠 (メリーランド大学) : Contextualism and Japanese Knowledge Attributions

平光哲朗 (神戸学院大学) : ベルクソンにおける直観を構成するものとしての人格について

舟場保之 (哲学哲学史准教授) : 「任意の、いつでも解散できる」会議へ向けての考察

参加者 17 名。

第 15 回 handai metaphysica 特別講演会 (哲学哲学史専門分野と共催)

2012 年 6 月 12 日

発表者 : DR. RACHEL ALBECK-GIDORN (Bar-Ilan University) , The Influence of Spinoza's Thought on the Modern Jewish Culture

於 : 大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 15 名。

第 16 回 handai metaphysica 特別講演会 (哲学哲学史専門分野と共催)

2012 年 8 月 10 日

日

発表者 : 樽井正義 (慶応義塾大学・教授)、「カントにおける普遍性」

於 : 大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 18 名。

第 17 回 handai metaphysica 特別講演会 (2013 年 11 月 30 日、大阪大学大学院文学研究科中庭会議室)。

発表者 : George di Giovanni (Professor of Philosophy, McGill University, Canada)

タイトル : The Kantian Legacy: Fichte's Wissenschaftslehre and Hegel's Logic

発表者 : Daniel Breazeale (Professor of Philosophy, University of Kentucky, USA)

タイトル : Against Nature? On the Status and Meaning of the Natural World in J. G. Fichte's early Wissenschaftslehre

参加者 16 名。

新入生歓迎イベント PFB (哲学哲学史専門分野と共催)

2012 年 4 月 19 日

「哲学が日常に役立つのか。」「桜はなぜ美しいのか。」

於 : 大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 16 名。

第 7 回哲学ワークショップ

2012 年 7 月 7 日

テーマ : 「<善>/<悪>概念の解体と再構築の諸相 — スピノザの場合/ニーチェの場合 —」

発表者 : 藤野幸彦 (博士後期課程) ・ 谷山弘太 (博士後期課程)

テーマ : 「命法なき規範はいかにして可能か」

発表者 : 小田裕二郎 (博士前期課程) ・ 山本哲哉 (博士前期課程)

テーマ : 「超訳系哲学とは何か」

発表者 : 戸谷洋志 (博士前期課程) ・ 糸谷哲郎 (博士前期課程)

於：大阪大学大学院文学研究科本館 2F 大会議室、参加者 18 名。

#### 第 8 回哲学ワークショップ

2013 年 1 月 26 日

テーマ：「規範はどのようにして基礎付けられるのか——ハーバーマス対ロールズ——」

発表者：浜辺章（高校教員）・吉田絵弥（哲学・思想文化学 3 年生）

テーマ：「直接法と命令法（スピノザとカントの倫理学）」

発表者：小田裕二郎（博士前期課程）・久保啓文（哲学・思想文化学 4 年生）

テーマ：「超訳系哲学とは何か」

発表者：糸谷哲郎、戸谷洋志

於：大阪大学大学院文学研究科本館 2F 大会議室、参加者 17 名（内、外部 4 名）。

#### 2012「世界哲学の日」記念セミナー：須藤訓任著『ニーチェの歴史思想』を読む

2012 年 11 月 17 日

特定質問者：竹内綱史（龍谷大学講師）

於：文学研究科中庭会議室、参加者 17 名。

ダレル・ラトキン博士（米国スタンフォード大学）公開講演会：「ヨーロッパ史のなかの占星術 中世・ルネサンスから近代へ」（Astrology in the Middle Ages, the Renaissance and Early Modern Europe—A Reappraisal）2013 年 7 月 24 日

於：大阪大学・全学教育推進機構総合棟 1 スチューデント・コモンズ 2 階セミナー室 1、参加者約 60 名

## 12. 教員の研究活動(2012 年度～2013 年度の過去 2 年間)

### 1. 須藤 訓任 教授

1955 年生。1983 年京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士(文学)(京都大学)。大谷大学助教授、同教授を経て、2004 年 10 月より現職。専攻：西洋近現代哲学。

#### 1-1. 論文

須藤訓任 「思想の歪曲としての「カへの意志」—エリーザベト・ニーチェの場合」『メタフィシカ』第 43 号，大阪大学大学院文学研究科哲学講座，pp. 1-22, 2012/12

須藤訓任 「「正義」について—ニーチェとハイデガー」 *Heidegger-Forum*, (ハイデガー・フォーラム), vol. 6, pp. 83-91, 2012/9  
Suto, Norihide, "Ist Ordnung ohne Transzendenz möglich? Eric Voegelin und die Demokratie", Peter J. Opitz, *Voegelianana Occasional Papers*, (Voegelin-Zentrum für Politik, Kultur und Religion), 89, pp. 7-31, 2012/8

#### 1-2. 著書

なし

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

須藤訓任(訳) 「フロイト全集第15巻」岩波書店，pp. 299-425, 2012/5

#### 1-4. 口頭発表

須藤訓任，竹内綱史，五郎丸仁美他 座談会：ニーチェは今、どのように読まれているか，(『現代思想』第 41 巻第 2 号，pp. 178-200, 2013/2)

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

関西哲学会・委員, 2007年11月～現在に至る

## 2. 望月 太郎 教授

1962年生。1991年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程哲学哲学史専攻中退。博士(文学)(大阪大学、1997年)。徳島大学、東海大学を経て、1998年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2004年4月、大阪大学大学教育実践センター助教授。2006年11月、大阪大学大学教育実践センター教授、2012年4月、大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:フランス哲学、現代思想、社会思想、高等教育論。

### 2-1. 論文

---

望月太郎 「「3.11」あるいは「フクシマ」後の世界を生きる—悲観主義と楽観主義のあいだで」『アルケー』(関西哲学会), 21, 京都大学学術出版会, pp. 26-36, 2013/6

望月太郎 「パターナリズムと市民社会」『日本の科学者』(日本科学者会議), 483-4月号, 本の泉社, pp. 32-37, 2013/4

渡部昭男, 日永龍彦, 望月太郎(共著) 「高等教育における「無償教育の漸進的導入」に係る韓国の動向」シリーズ「大学評価を考える」編集委員会(編)『高等教育における「無償教育の漸進的導入」—授業料半額化への日韓の動向と連帯—』(大学評価学会), 6, 晃洋書房, pp. 69-82, 2013/3

### 2-2. 著書

---

細川孝, 渡部昭男, 望月太郎他(共著) 『「無償教育の漸進的導入」と大学界改革(第3章:カンボジアにおける高等教育の量的拡大と授業料高騰の問題)』晃洋書房, pp. 53-64, 2014/3

早田幸政, 望月太郎(共編著) 『大学のグローバル化と内部質保証—単位の実質化, 授業改善, アウトカム評価—』晃洋書房, 121p., (第1章、第2章、第3章、第5章), 2012/4

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 2-4. 口頭発表

---

Mochizuki, Taro, “Paternalism and Civil Society”, Joint Chulalongkorn University and American University of Sovereign Nations, Dialogue on Bioethics: How can we shape an Ethical Future, EUBIOS, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand, 2014/1

Kanit Sirichan, Young E Lee, Mochizuki, Taro, “Different Perspectives on Teaching Critical Thinking and Reasoning”, Roundtable on Critical Thinking and Philosophical Practice, Department of Philosophy, Faculty of Arts, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand, 2013/12

Mochizuki, Taro, “A Philosopher’s Defeat in World War II: Tanabe Hajime’s Conversion to Shin Buddhism in ‘Philosophy as Metanoetics’”, International Conference on Origins and Destinies of Cultures, Assumption University, Bangkok, Thailand, 2013/6

Mochizuki, Taro, Peter Harteloh, Tetsuya Kono 他, “Creating a New Philosophy Program in a University in Cambodia: Mater of

Arts Program in Philosophical Practice”, The 13th Science Council of Asia Conference and International Symposium: Roles of Science in Asia: Facing the Challenges of AEC 2015, Science Council of Asia, Queen Sirikit National Convention Centre, Bangkok, Thailand, 2013/5

望月太郎 「3.11 後の世界を生きる—悲観主義と楽観主義のあいだで—」関西哲学会第 65 回大会課題研究発表: 科学技術文明と哲学知, 関西哲学会, 名古屋大学, 2012/10

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2012 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 望月太郎

課題番号: 24520015

研究題目: 平和構築のための哲学実践

研究経費: 2012 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

2013 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

平和構築のための哲学実践のメソッド、教材とカリキュラムの開発を通して発展途上国における高等教育の発展と人材開発に寄与することを目的とする。期待される具体的な成果は、アジア地域における「平和」をテーマとした批判的思考教育のための教科書の作成、哲学実践を体系的に学ぶためのセミナーとワークショップの開催、カンボジアの大学における平和構築のための哲学実践マスターコースの開設である。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本科学者会議・常任幹事・事務局次長・国際部部長, 2011 年 5 月～現在に至る

大学評価学会・理事, 2006 年 3 月～2014 年 3 月

日仏哲学会・理事, 2001 年 9 月～2013 年 9 月

## 3. 中村 征樹 准教授

1974 年生。2005 年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(博士(学術))。東京大学大学院工学系研究科助手、文部科学省科学技術政策研究所研究官、大阪大学大学教育実践センター准教授を経て、2012 年 4 月より大阪大学全学教育推進機構准教授。2007 年 11 月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻: 科学技術社会論、科学技術コミュニケーション、科学技術倫理、科学技術史。

### 3-1. 論文

---

中村征樹 「ドーピング問題から考える(連載「社会のなかの科学技術」第 6 回)」『Rimse』7, 一般財団法人理数教育研究所, pp. 33-35, 2014/2

中村征樹 「科学技術の二面性—デュアルユース問題(連載「社会のなかの科学技術」第 5 回)」『Rimse』6, 一般財団法人理数教育研究所, pp. 17-19, 2013/11

中村征樹 「サイエンスカフェ(連載「社会のなかの科学技術」第 4 回)」『Rimse』5, 一般財団法人理数教育研究所, pp. 21-23, 2013/8

東島仁, 中村征樹(共著)「英国の自閉症スペクトラム障害研究における当事者集団の参画」『年報 科学・技術・社会』(科学社会学会), 22, pp. 109-123, 2013/7

中村征樹「トランス・サイエンス(連載「社会のなかの科学技術」第3回)」『Rimse』4, 一般財団法人理数教育研究所, pp. 21-23, 2013/5

Ryuma Shineha, Nakamura, Masaki(共著),“Diversity in STS Communities: A Comparative Analysis of Topics”*East Asian Science, Technology, and Society: an International Journal*, 7-1, Duke University Press, pp. 145-158, 2013/3

Nakamura, Masaki, J. Higashijima, Y. Miura et al.,(共著),“Public opinions regarding the relationship between Autism Spectrum Disorders and society: social agenda construction via science cafe and public dialogue using questionnaires”*Journal of Science Communication*, 11-4, <http://jcom.sissa.it/archive/11/04/Jcom1104%282012%29A03>, 2012/12

中村征樹, 東島仁, 中川智絵他(共著)「自閉症研究と社会にまつわる多様な市民間の対話の試み」『科学技術コミュニケーション』11, 北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット(CoSTEP), pp. 28-43, 2012/6

### 3-2. 著書

---

大阪大学ショセキカプロジェクト, 中村征樹(編)『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』大阪大学出版会, i-v, 2014/2

中村征樹, 神里達博, 調 麻佐志他(編)『ポスト3・11の科学と政治』ナカニシヤ出版, i-x, pp. 83-86, 280-287, 2013/1

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 3-4. 口頭発表

---

中村征樹「「ビブリオバトルの挑戦」第43回近畿学校図書館研究大会:分科会「ビブリオバトルの挑戦」, 京都府学校図書館協議会/近畿学校図書館連絡協議会/(公社)全国学校図書館協議会, 同志社大学, 2013/8

中村征樹「「ポスト3・11の科学技術社会論:『ポスト3・11の科学と政治』(仮)の出版にあたって」科学技術社会論学会第11回年次研究大会, 科学技術社会論学会, 総合研究大学院大学, 2012/11

中村征樹(パネリスト)「『次世代の視点』から見る『日本のSTS』の将来」科学技術社会論学会第11回年次研究大会:ナイトセッション「STSの多様性と日本のSTSの方向性」, 科学技術社会論学会, 総合研究大学院大学, 2012/11

Nakamura, Masaki,“Machine as Human, Human as Machine: A Historical Perspective”, Workshop on Robot Anthropology: Emergent Technologies and Questions of Human Sciences, Bielefeld University, 2012/8

中村征樹「ドイツ若手アカデミーの挑戦とグローバルヤングアカデミー」日本教育学会第71回大会, 日本教育学会, 名古屋大学, 2012/8

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本学術振興会「科学者の行動規範」に基づく研修プログラム作成協力者会議・委員, 2014年2月～現在に至る

文部科学省「研究活動の不正行為への対応のガイドライン」の見直し・運用改善等に関する協力者会議・委員, 2013年11月～現

在に至る

特定非営利活動法人 ratik・理事, 2013 年 5 月～現在に至る

日本サイエンスコミュニケーション協会・国際連携委員, 2012 年 5 月～現在に至る

日本学術会議若手アカデミー委員会学術の未来検討分科会・委員, 2012 年 3 月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2011 年 10 月～現在に至る

日本学術会議若手アカデミー委員会・委員, 2011 年 10 月～現在に至る

化学史学会・評議員, 2011 年 1 月～2012 年 12 月

科学技術社会論学会・理事, 2005 年 4 月～現在に至る

大学評価学会・理事, 2004 年 4 月～現在に至る

日仏教育学会・編集委員, 2003 年 9 月～現在に至る

## 2-3 臨床哲学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：浜渦 辰二

准教授：本間 直樹

助教：稲原 美苗

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
26	10	16	0	0	5	0	0

※うち留学生 3 名, 社会人学生 6 名

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	4	5	3	0
2013	12	6	0	2
計	16	11	3	2

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

当分野は、現代社会において大小さまざまな問題（例えば、科学技術、医療／看護／介護、教育、環境、アート／メディア／パフォーマンス、ジェンダー／セクシュアリティなど）について考えるために、(1)近代西洋／日本の倫理思想・道徳理論や現代の社会哲学・文化理論を学びながら、問題の定式化・分析を行うための方法論の探究、(2)当事者・関係者とともに、それぞれのおかれた具体的な文脈に即して問題を掘り起こし、考察するための哲学的対話法やコミュニケーション方法の調査・開発、また、(3)学内外のさまざまな研究者・実践家と連携しつつ、社会で現実に機能し得る研究活動プランの作成と遂行、および共同研究プロジェクトの推進、この3点を基本姿勢としている。

上記の基本姿勢に基づき、教育に関しては、臨床哲学という新しい理念を学生に理解させ、参与させることを目標とした。「臨床哲学講義」等の授業を通して、過去の哲学思想を振り返りつつ、臨床哲学の理念を所属の全教員及び学生とと

もに明確にすることを目指した。また分科会形式をとる授業を設定することで、学生に部分的にイニシアティブを任せるなど、学生の自主性を促進することを目標とした。また、外国語（主として英語）の発信能力を組織的に養成することを、さらに、生命・医療の倫理学および人間学については、先端的テーマに関する教育を提供することを目標とした。

## 2. 研究

教育と同様の基本姿勢に基づきつつ、研究に関しては、文献研究および哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行うことを目標とした。また、そのような研究活動に学生も積極的に参加させることでインターンシップにもつながる経験が積めることも目標とした。さらに、任意団体「café philo」と連携して、定期的に哲学カフェを開催し、哲学的対話の文化を社会に浸透させることを目標とした。共同研究については、引き続き CSCD と連携してサイエンスショップなど各種の調査研究の実施を目標とした。さらに、学内に結成されている医療人文学研究会と共催で研究会を開き、医療人類学・医療社会学・医療倫理学の諸分野と連携してとりわけ医療・看護・介護関係の共同研究を推進することを目標とした。

## 3. 社会連携

社会連携については、当分野の活動全般が現代社会での事象を対象とすることを基本姿勢としていることから、教育・研究両分野において社会との連携を充実化させることを目標とした。すでに言及しているが、大学外の様々な職業や立場の市民との協力によって研究活動を実施すると同時に、そういった研究活動に学生を従事させ、かつ部分的にはあるがイニシアティブをとって学生に研究を遂行させることでその教育的な意義も視野に入れた。また、そういった研究活動の成果を報告書や研究室紀要、HP など様々な媒体を用いて発信することを目標とした。さらに、京阪電鉄なにわ橋駅にある「アートエリア B1」など大学外の場所で、任意団体「café philo」と連携しながら、研究活動に関係する事柄について各種のイベントを実施することでじかに市民との交流を図ることを目標とした。また、大阪大学中之島センターでは、「ケアの臨床哲学」研究会の主催により、年 3～4 回の「高齢社会を考える」シリーズのシンポジウムを行い、各分野の専門家と市民との意見交換の場を作ることを目標とした。

# Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

「臨床哲学講義」等の授業を通して、過去の哲学思想の振り返りに基づく臨床哲学の理念の明確化を実施した。分科会形式をとる授業では、学生が積極的にイニシアティブをとり、学生の自主性を促進することに成功している。それらの成果として、学生がグループを形成して学外におけるワークショップに積極的に取り組んだり、哲学カフェを企画運営したり、身近なところで「臨床哲学」的なテーマを開拓してそれを研究的なものに結びつけたりしている。外国語の発信能力の養成についても、英語のみで行う授業を開講し、他の教員も任意の参加者として効率的な学習をサポートしたり、授業外で希望の学生を募り英会話のトレーニングを行ったりして対応した。

## 2. 研究

文献研究を中心として哲学・倫理学の研究を推進する傍ら、大学の内外で様々な職業や立場の市民と協力しつつ、哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行った。これらは企業・自治体・NPO などからも注目を集めた。また、これらの研究・実践活動には学生も積極的に参加して、オン・ザ・ジョブ・トレーニング的な、またインターンシップにもつながる経験を積んだ。さらに、任意団体「café philo」と連携して、定期的に哲学カフェを開催し、哲学的対話の文化を社会に浸透させるよう努めている。またそのような活動の成果を用いつつ、京都の洛星高校でこれまで 9 年間にわたり、学生を巻き込んで、あるいは学生の企画運営を監督しつつ、哲学の授業を行った。共同研究については、卓越した大学院拠点形成支援補助金「文化形態論研究に向けた派遣プログラム」の活動に当分野の学生が参加することにより調査研究を実施したほか、引き続き CSCD と連携してサイエンスショップなど各種の調査研究につながる活動を行った。さらに、大阪大学医療人文学研究会と共催で研究会を開き、医療人類学・医療社会学・医療倫理学の諸分野と連携してとりわけ医



療・看護・介護関係の共同研究を推進した。

### 3. 社会連携

社会連携については、これもすでに上記の教育・研究活動のおおよそが学外諸団体や市民との連携によって成立していることから明らかであるだろう。研究活動として CSCD と連携したサイエンスショップの実施、洛星高校など学外での哲学の授業の実施、「アートエリア B1」等での研究会の開催など大学の内外を越境する研究に従事し、かつそのような研究に学生もイニシアティブをとって従事するよう促し、かつそれに成功した。また、中之島センターでは、「ケアの臨床哲学」研究会の主催により、年 3～4 回の「高齢社会を考える」シリーズのシンポジウムを行い、毎回 100 人程度の参加者があり、各分野の専門家と市民との意見交換の場を作ることに成功した。

## IV. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

### 1. 教育

臨床哲学の理念の理解と同時にその明確化の過程に積極的に関与することを教育の目標としたのであるが、それについては大学内での授業および大学外と連携した活動への従事という点で、両者ともその目標は達成できたものと考えている。

### 2. 研究

学内外と連携した諸々の研究、およびその研究成果を広く社会に発信するという点など、いずれの目標も達成されたものと考えている。

### 3. 社会連携

上記の教育・研究に関する記述と同じく、社会との連携に関する目標も十分に達成されたものと考えている。また、社会からの認知および反響もえられた。

## V. 基本情報(2012 年度～2013 年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	0	0	0
2013	2	0	2
計	2	0	2

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

中村剛 「福祉哲学の継承と再生—社会福祉の経験をいま問い直す—」 2013 年 9 月

主査：浜渦辰二 副査：中岡成文，秋山智久

東暁雄 「科学と法におけるシステム論の現代的射程」 2014 年 3 月

主査：中岡成文 副査：浜渦辰二，本間直樹

### 2. 大学院生等による論文発表等

## 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	0(0)	0(0)	5(5)	2(0)	2(0)	9(5)
2013	0(0)	0(0)	8(8)	0(0)	0(0)	8(8)
計	0(0)	0(0)	13(13)	2(0)	2(0)	17(13)

括弧内は査読付き論文数。

## 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	2	5	6	1	0	14
2013	1	6	4	2	0	13
計	3	11	10	3	0	27

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1) 論文

#### 【2012年度】

〔博士前期〕

川崎唯史「安心について——創造的な対話のために」『臨床哲学』, 第14-2号, pp. 39-55, 2013/3

萱間隆・田口了麻, 「心理主義の限界とアーキテクチャの可能性」『2012年 社会情報学会 (SSI) 学会大会研究発表論文集』, pp.237-242, 2012/9

〔博士後期〕

正置友子 「幼い子どもたちが『ひとなる』過程で—絵本を聴くということ」『上方芸能』185号, pp. 30-36, 2012/9

正置友子 「『ピーターラビットのおはなし』世界で一番長生きしている絵本のおはなし」(連載「絵本を読む」4)『書評』138号, 関西大学生生活共同組合『書評』編集委員会, pp. 246-255, 2012/10

Kasch, Franziska 「病気の作り方—現代日本におけるメタボ対策の根拠をめぐって—」『メタフュシカ』43, pp. 75-86, 2012/12

中西チヨキ 「病いの子どもとともに生きる母の変容—苦しみと感謝をとおして—」『臨床哲学』, 第14-2号, pp.21-38, 2013/3

徐 静文 「中国におけるターミナルケアの歴史と現在」『メタフュシカ』43, pp.87-103, 2012/12

山口弘多郎 「フッサールの科学論 —『危機』書の再考—」『メタフュシカ』43, pp.105-116, 2012/12

中川雅道 「探究が導くその先へ—P4C のつくりかた」『子どものための哲学教育研究』千葉大学大学院人文社会科学研究所, 研究プロジェクト報告書, 第255集, pp. 129-138, 2013/2

#### 【2013年度】

〔博士後期〕

東暁雄 「法システムと正義の概念」『待兼山論叢』第47号, 哲学篇 pp.52-66, 2013/12

Kasch, Franziska 「Der aktuelle Übergewichtsdiskurs in Japan」『OAG Notizen』, pp. 11-26, 2013/5

徐静文 「日本人と中国人の死生観を読み解く——文化の違いに基づき, 実践調査を参考に」『臨床哲学』, 第15-1号, pp.35-54, 2013/9

- 徐静文 「中国におけるターミナルケアの発展を制約する要因についての試論」『臨床哲学』, 第 15-2 号, pp.39-56, 2014/3
- 高山佳子 「ジェンダーの視点から見たギリガンのケアの倫理におけるパラダイムシフトの意義—生活世界を生きる人間の学としての倫理学に向けて」『臨床哲学』, 第 15-2 号, pp.2-19, 2014/3
- 中川雅道 「学校で、セーフな場で、共に考える—p4c ハワイの実践から」『メタフュシカ』 44, pp. 55-65, 2013/12
- 前原なおみ 「『おだやかな死』を再考する」『メタフュシカ』 44, pp. 67-80, 2013/12
- 正置友子「日本における子どもの絵本の歴史—千年にわたる日本の絵本の歴史 絵巻物から現代の絵本まで— その 1. 平安時代から江戸時代まで」『メタフュシカ』 44, pp. 81-98, 2013/12

## (2) 口頭発表

### 【2012 年度】

〔博士前期〕

KAWASAKI Tadashi (川崎唯史), *Calling and Response in Reprise: An Intersubjective Approach to Merleau-Ponty's Philosophy of Arts*, 6th Symposia Phaenomenologica Asiatica, 於 : 香港中文大学, 2012/8/3

川崎唯史 「雰囲気と促し——メルロ=ポンティ『知覚の現象学』における「社会的なもの」の諸相」, 日本現象学会第 34 回研究大会, 於 : 東北大学, 2012/11/17

川崎唯史 「安全から安心へ——創造的な対話に向かって」, 第 31 回臨床哲学研究会, 於 : 大阪大学中之島センター, 2013/1/20

川崎唯史 「メルロ=ポンティの他者論再考——『知覚の現象学』を中心に」, 第 42 回臨床実践の現象学研究会, 於 : 大阪大学, 2013/2/2

田口了麻・山下悠, 「新興ニュータウンにおける複合型商業施設の役割」, 日本社会学会 2012 年度大会, 於 : 札幌学院大学, 2012/11/3

萱間隆・田口了麻, 「心理主義の限界とアーキテクチャの可能性」, 社会情報学会 2012 年度大会, 於 : 群馬大学, 2012/9/16  
〔博士後期〕

正置友子 「子どもたちと絵本の扉をひらく—幼い子どもたち (0~3 歳) は, 絵本にどのように出会い, 絵本をどのように取り込んでいくのか, また, 幼い身体のみか絵本はどのように働くのか—」 臨床哲学研究会 於 : 大阪大学 2012/4/8

正置友子 「子どもがはじめてひとりで橋を渡るとき—リミナリティ論をもとに」 絵本学会第 15 回大会 於 : 熊本県山鹿市八千代座, 2012/6/2

正置友子 「Liminality, Passage from one status to another」 国際児童図書評議会 (IBBY) 第 33 回大会 於 : インペリアル・カレッジ・ロンドン, 2012/8/24

東暁雄 「行為と責任」 日本現象学・社会科学会 2012 年度大会, 於 : 神戸大学, 2012/12/2

東暁雄 「行為論における責任概念についての一考察」 法理学研究会, 於 : 同志社大学, 2013/2/23

Kasch, Franziska 「Der aktuelle Übergewichtsdiskurs in Japan」 講演会, 於 : OAG ドイツ東洋文化研究協会, 2013/3/27

徐静文 「中国におけるターミナルケアの歴史と現在」 第 30 回臨床哲学研究会, 於 : 大阪大学中之島センター, 2012/10/21

中川雅道 「P4C の授業」 日本道德教育方法学会平成 24 年度夏季研究会, 於 : 名城大学附属高等学校, 2012/8/26

### 【2013 年度】

〔博士前期〕

KAWASAKI Tadashi, 「Two or More?: On Merleau-Pontian Conception of Intersubjectivity」, エラスムス・ムントゥス・ユーロフィロソフィー第 2 回大阪大学学生ワークショップ, 於 : 大阪大学, 2013/5/25

川崎唯史 「ケアと自然——日常のセルフケアから出発して」, 第 II 期第 4 回「ケアの現象学」研究会, 於 : 大阪大学, 2013/6/29

KAWASAKI Tadashi, 「What is Historical Action? A Merleau-Pontian Perspective」, 7th Symposia  
Phaenomenologica Asiatica, Chinese University of Hong Kong, 2013/7/31

川崎唯史「社会的な生とその悲劇——メルロ=ポンティにおける社会性の問題」, メルロ=ポンティ・サークル, 於: 筑  
波大学東京キャンパス, 2013/9/21

金和永 「「アイデンティティ」と、悼みの分配」, 第32回臨床哲学研究会, 於: 大阪大学中之島センター, 2013/6/16

服部圭祐「〈間柄〉の三つの側面からみる和辻倫理学——和辻哲郎『倫理学』の理論構造——」, 関西倫理学会2013年  
度大会, 於: 立命館大学, 2013/11/2

青木健太「死へ臨む存在 『存在と時間』における死の分析」, 第10回哲学ワークショップ, パネルディスカッション  
「死を巡る思想」, 大阪大学文学部本館2F大会議室, 2014/1/13

〔博士後期〕

前原なおみ「地域見守り活動における個人情報共有を困難にする要因」第26回日本看護福祉学会, 於: 久留米大学,  
2013/7/7

前原なおみ「地域づくりにおける地域包括支援センター専門職の関わりへの構造—個人情報共有の関わりから—」第55  
回日本老年社会科学学会, 於: 大阪国際会議場, 2013/6/4

前原なおみ「大阪市立住之江特別支援学校 子どもとともにいのちを考える」講演会 於: 大阪市立住之江特別支援学  
校, 2013/7/13

前原なおみ 第13回近畿介護支援専門員研究大会 大阪大会シンポジスト, 於: 大阪国際会議場, 2014/3/21

正置友子 「『いないいないばあ』(松谷みよ子文 瀬川康男絵 童心社 1967)を通して絵本表現の可能性を考える—  
「ばあ」で「生」が始まり, 「いないいない」で「生」を終える—」第16回絵本学会大会 於: 静岡文化芸術大学 2013/6/15

正置友子「絵本が育てる物語力」第23回日本乳幼児教育学会 於: 千葉大学教育学部 西千葉キャンパス 2013/11/24

### (3) その他(書評・翻訳など)

#### 【2012年度】

〔博士前期〕

浜渦辰二(監訳)・川崎唯史 《翻訳》 カーリン・ダールバリ 「患者に焦点を当てることは生活世界に焦点を当てるこ  
とである——ケア学というパースペクティブ」『看護研究』, 医学書院, 第45巻第5号, pp. 439-449, 2012/8

川崎唯史・金和永・服部圭祐・山口弘多郎他「臨床哲学ネットワーク 分科会自己言及班ワーキングペーパー」『臨  
床哲学』, 第14-2, pp. 105-123, 2013/3

〔博士後期〕

正置友子《翻訳》ジェーン・ドゥーナン 『絵本の絵を読む』 灰島かり・川端有子(共訳者), 玉川大学出版部, 2013/3

正置友子(共著) 「乳幼児期の読書」, 『年報こどもの図書館 2007-2011 2012年版』, 児童図書館研究会編, 日本  
図書館協会, pp. 128-138, 2012/10

正置友子(共著) 「子どもの成長と読書」, 『学んだ, 広げた, 「学校図書館」—「考える会・近畿」20年—』, 学校  
図書館を考える会・近畿, pp. 35-40, 2012/10

川崎唯史・金和永・服部圭祐・山口弘多郎他「臨床哲学ネットワーク 分科会自己言及班ワーキングペーパー」『臨  
床哲学』, 第14-2, pp. 105-123, 2013/3

#### 【2013年度】

〔博士前期〕

川崎唯史(共著)「淀川キリスト教病院における臨床倫理検討会について」『臨床哲学』第15-2号, pp.118-30, 2014/3

〔博士後期〕

高山佳子《翻訳》リサ・フォークマーソン・シェル 「位置づけられた身体をもつことと家(ホーム)がもつ意味—フェ  
ミニスト現象学の視点から」浜渦辰二(共訳者)『臨床哲学』第15-2号, pp.74-95, 2014/3

山口弘多郎《翻訳》ディーター・ローマー 「数学における非言語的思考」浜渦辰二(共訳者)『臨床哲学』第15-2号,

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

中川雅道 「子どもの哲学の可能性」第21回上廣道德教育賞佳作 上廣倫理財団 2013年度

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2013年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2013年度 学部:1名 大学院:1名 (計2名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3名

2012年度:0名 2013年度:3名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 3名  
その他 0名

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2012年度:0名 2013年度:0名

### 9. 刊行物

2012年度 『臨床哲学 vol.14-1』 『臨床哲学 vol.14-2』 『臨床哲学のメチエ vol.18』 『臨床哲学のメチエ vol.19』

2013年度 『臨床哲学 vol.15-1』 『臨床哲学 vol.15-2』 『臨床哲学のメチエ vol.20』

### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

第28回臨床哲学研究会	2012年4月8日
第29回臨床哲学研究会	2012年7月8日
第30回臨床哲学研究会	2012年10月21日
第31回臨床哲学研究会	2013年1月20日
第32回臨床哲学研究会	2013年6月16日
第33回臨床哲学研究会	2013年12月7日
第34回臨床哲学研究会	2014年3月23日

### 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

大阪大学医療人文学研究会との共催で研究会を年にそれぞれ3回程度開いている。

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 浜渦辰二教授

1952年生。1984年、九州大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位修得退学。文学博士(九州大学)。1989年、九州大学文学部助手。1991年、静岡大学人文学部助教授。1996年、同教授。2008年4月より現職。専攻:哲学/倫理学/臨床哲学。

#### 1-1. 論文

浜渦辰二 「ケアの現象学にむけて一現象学の可能性をめぐって(二)一」『哲学論文集』(九州大学哲学会), 49, 九州大学哲学会, pp. 109-126, 2013/9

浜渦辰二 「ケアを支えるシステムについての一考察」『文化と哲学』(静岡大学哲学階), 30, 静岡大学哲学会, pp. 39-56, 2013/9

#### 1-2. 著書

なし

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

浜渦辰二(共訳)「リサ・フォークマーソン・シエル「位置づけられた身体をもつことと家(ホーム)がもつ意味—フェミニスト現象学の視点から」」(共訳)『臨床哲学』52-2, pp. 74-95, 2014/3

浜渦辰二(共訳)「ディーター・ローマー「数学における非言語的思考」」(共訳)『臨床哲学』52-2, pp. 101-117, 2014/3

#### 1-4. 口頭発表

浜渦辰二 (パネリスト)「北欧における看取りをめぐる状況—と、その周辺の欧州視察報告2—」第6回研究会, 科研「欧州看取り科  
研」, 上智大学, 2014/3

浜渦辰二 (招待講演)「“リビングウィル”について、法制化されたドイツの事情を聞きます」, フォアベルク, フォアベルク神戸,  
2014/2

浜渦辰二 (招待講演)「生きるということ—禅と臨床哲学の立場から自らの生老病死を考える—」日本クラブ講演会, デュッセルド  
ルフ日本クラブ, DeJaK-友の会, デュッセルドルフ日本クラブ会館, 2013/11

Hamauzu, Shinji, (招待講演)“Caring und Phänomenologie – Aus der Sicht von Husserls Phänomenologie der Intersubjektivität”,  
Internationale Tagung des Husserl-Archivs Köln im Zusammenarbeit mit der Deutschen Gesellschaft für phänomenologische  
Forschung, Husserl-Archiv Köln, ケルン大学(ドイツ), 2013/9

浜渦辰二 (招待講演)「二・五人称の医療」とは」第268回川崎医学会講演会, 川崎医科大学 川崎医学会, 川崎医科大学,  
2013/8

浜渦辰二 (パネリスト)「ケアの現象学と人称性」第4回「ケアの現象学」研究会, 科研「ケアの現象学の具体的展開と組織化」, 大  
阪大学, 2013/6

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2013年度～2015年度、基盤研究(B) 海外、代表者:浜渦辰二

課題番号:25300019

研究題目:北欧の在宅・地域ケアに繋がる生活世界アプローチの思想的基盤の解明

研究経費: 2013 年度 直接経費 4,300,000 円 間接経費 1,290,000 円

研究の目的:

北欧諸国は福祉とケアの先進国として知られ、ノーマライゼーションの理念やスウェーデン・モデルの主導価値は紹介されているものの、ネオリベラリズムの影響後も生き延びているその思想的・哲学的背景は十分明らかにされていない。これまでの我々の研究は、北欧諸国の福祉とケアの現場でそれがどう生かされているかを学術的に調査するなかで、一方で在宅・地域ケアの実践の浸透と、他方で生活世界アプローチという理論とに、共鳴関係を見いだしてきた。それを踏まえて、両者の関係が単なる偶然ではない繋がりを持っていることを学際的に調査・解明することが、新しい研究の課題となる。わが国でも超高齢社会に対応する「在宅医療・介護」が推し進められるなかで、その思想的基盤を固めるためにも、本研究は大いに貢献することが期待される。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2013 年度～2015 年度、3：受託研究、助成金獲得者: 浜渦辰二

助成金名: 課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業(実社会対応プログラム)

研究題目: ケアと支えあいの文化を地域コミュニティの内部から育てる臨床哲学の試み

助成団体名: 日本学術振興会

助成金額: 2013 年度 直接経費 2,884,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

少子・高齢化社会のなかでは、勝ち抜き競争型の文化ではなく、ケアと共助・互助という支え合いの文化が大切になってきた。そしてそれを育てることこそが、リスク社会に対処するための対策になることを、まずは阪神淡路大震災において、さらに東日本大震災の惨劇の経験から、私たちは学んできた。

そうした時代背景と社会的変遷のなかで、生と知を根本で結びあわせる哲学探究を通して、研究者が人文・社会諸科学の研究者とともに地域コミュニティに関与し、コミュニティ構成員とともに学問知を鍛え直し、ケアと支え合いの文化をコミュニティ自体のなかに育て、個人とコミュニティの双方をエンパワーする臨床型プログラムを移植する。社会の痛苦の現場と学術研究の叡智の現場とを恒常的に結ぶ、そんな臨床的学術研究のしくみが確実に本国に定着することを求め、この研究課題を提案したい。

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学研究倫理委員会・委員, 2013 年 9 月～現在に至る

九州大学哲学会・委員, 2005 年 4 月～現在に至る

日本現象学会・委員, 2000 年 4 月～現在に至る

西日本哲学会・委員, 2000 年 4 月～現在に至る

静岡大学哲学会・幹事, 1991 年 4 月～現在に至る

## 2. 本間 直樹 准教授

1970 年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科哲学講座助手、同講師を経て、2005 年 4 月に大阪大学コミュニケーションデザイン・センター講師に着任し、文学研究科を兼任。2006 年 4 月より現職。専攻: 哲学/倫理学/臨床哲学。

### 2-1. 論文

久保田テツ, 本間直樹(共著)「アートナーチャー」コミュニケーションデザイン・センター(編)『Communication-Design』(Humanities Therapy Project), 10, コミュニケーションデザイン・センター, pp. 23-35, 2014/3

Homma, Naoki, "Clinical Philosophy, a Challenge in Osaka University: Its Educational Program and Key Notions for the Practice" Young E. Rhee(編) *Humanities Therapy*, (Humanities Therapy Project), 4, Kanwon National University, pp. 143-153, 2013/12

本間直樹, 辻明典, 荻野亮一(共著)「映像記録を活用して対話経験を理解する大阪府立池田高等学校での対話授業の試みか

ら」コミュニケーションデザイン・センター(編)『Communication-Design』9, コミュニケーションデザイン・センター, pp. 43-57, 2013/9

高橋綾, 本間直樹(共著)「震災について対話する〈こどもの哲学〉の可能性」コミュニケーションデザイン・センター(編)『Communication-Design』9, コミュニケーションデザイン・センター, pp. 21-41, 2013/9

本間直樹「話す、自分を見せる、変わる—対話から場を考える」臨床哲学研究会(編)『臨床哲学』(臨床哲学研究会), 15-1, 臨床哲学研究会, pp. 86-94, 2013/9

Homma, Naoki, “A Community Approach to the Philosophical Practice” Lou Marinoff(編) *Philosophical Practice*, (The American Philosophical Practitioners Association), 7-3, pp. 1041-1049, 2012/11

本間直樹「哲学者の実践としての〈探究のコミュニティ〉」臨床哲学研究室(編)『臨床哲学』(臨床哲学研究会), 14-1, pp. 16-31, 2012/9

## 2-2. 著書

なし

## 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

## 2-4. 口頭発表

Homma, Naoki, (招待講演)“Clinical Philosophy program of Osaka University”, International Conference on Humanities Therapy: Educational Programs of Humanities Therapy, Humanities Therapy Project, Kangwon National University, 2013/5

本間直樹 (招待講演)「考える人は美しい」日本哲学会第72回大会:哲学教育ワークショップ, 日本哲学会, お茶の水女子大学, 2013/5『プログラム・予稿集』pp. 22-23, 2013/5

本間直樹 (招待講演)「話す、自分を見せる、変わる—対話から場を考える—」ヒューマンコミュニケーション基礎研究会:場のデザイン, 電子情報通信学会, ホテルウェルシーズン浜名湖, 2013/3

高橋綾, 本間直樹「哲学対話とセルフケア—震災後の生活や社会についての中高生の対話リレーから」アートミーツケア学会 2012年大会, アートミーツケア学会, 愛媛大学, 2012/12

Homma, Naoki, (招待講演)“A Community Approach to the Philosophical Practice”, The International Conference on Philosophical Practice: The Multiplicity of Therapeutic Practice in Philosophy and Humanities, The International Conference on Philosophical Practice, Kangwon National University (South Korea), 2012/7

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2013年度~2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者:本間直樹

課題番号:25350931

研究題目:対話による〈探究のコミュニティ〉形成を通じた場のセーフティに関する研究

研究経費:2013年度 直接経費 1,500,000円 間接経費 450,000円

研究の目的:

〈探究のコミュニティ〉は、子どもたちが身体と声による対話活動によって、互いの多様な感情的・知的表現を認め合い、セーフティをともに支えあうことによって、さまざまな創造的な関係や活動を生み出す実践である。この〈探究のコミュニティ〉の形成を通じた場のセーフティとはいかなるものか、それはコミュニティの参加者によってどのように感じとられ、どのような事象と具体的に結びついているのか、場のセーフティはどのような概念によって記述されるのか、についてアクションリサーチ、映像による質的研究、海外



事例調査などを通して明らかにする。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

アートミーツケア学会・理事, 2006年10月～現在に至る

## 3. 稲原 美苗 助教

1972年生。英国国立ハル大学大学院哲学研究科博士課程修了。Ph.D in Philosophy(ハル大学)。2012年、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属「共生のための国際哲学研究センター(UTCP)」上廣特任研究員。2013年4月より現職。専攻:哲学／倫理学／臨床哲学。

### 3-1. 論文

Inahara, Minae, “The Disabled Body, the Able-bodied Form: A Feminist Exploration of Dialogue between Beauvoir and Fanon”『待兼山論叢 哲学篇』47, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-17, 2013/12

Inahara, Minae, “The Sound of Pain: Embodied Subjectivity and Onomatopoeic Expressions in Japanese”『臨床哲学』15-1, 大阪大学大学院文学研究科 臨床哲学研究室, pp. 55-69, 2013/10

稲原美苗 「障害とアブジェクション—「受容」と「拒絶」の狭間」『UTCP-Uehiro Booklet, 「共生のための障害の哲学: 身体・語り・共同性をめぐって」』2, 東京大学大学院総合文化研究科附属 共生のための国際哲学研究センター 上廣共生哲学寄附研究部門, pp. 11-25, 2013/10

Inahara, Minae, “The rejected voice: towards intersubjectivity in speech language pathology” *Disability & Society*, 28-1, Routledge, pp. 41-53, 2013/1

Inahara, Minae, “The Voice of Pain: The Semiotic and Embodied Subjectivity” S. Gonzalez-Arnal, G. Jagger and K. Lennon(編) *Embodied Selves*, Palgrave Macmillan (London), pp. 180-195, 2012/12

稲原美苗 「痛みの現象学—身体化された語り」『メルロ=ポンティ研究』(メルロ=ポンティサークル), 16, pp. 41-61, 2012/9

### 3-2. 著書

石原孝二, 稲原美苗(共編) 『UTCP-Uehiro Booklet, 「共生のための障害の哲学: 身体・語り・共同性をめぐって」』2, 東京大学大学院総合文化研究科附属 共生のための国際哲学研究センター 上廣共生哲学寄附研究部門, 231p., 2013/10

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

河野哲也, 松葉祥一, 稲原美苗他(共訳)(翻訳) 「スティル・ライヴズ: 脊髄損傷と共に生きる人々の物語」『スティル・ライヴズ: 脊髄損傷と共に生きる人々の物語』法政大学出版局, pp. 374-414, 2013/9

稲原美苗(翻訳) (複数項目) 日本特殊教育学会, 前川 久男 『障害百科事典』丸善出版, ・アウグスティヌス 第I分冊 P.12, ・アリストテレス 第I分冊 P.49, ・クラウディウス, 皇帝 第I分冊 P.400, ・説明的正当性理論 第III分冊 P.1172, ・疎外 第III分冊 P.1197, ・ソクラテス 第III分冊 P.1201, ・デイドロ, ドゥニ 第III分冊 P.1278, ・ヒポクラテス 第III分冊 P.1430, ・ホメーロス 第IV分冊 P.1543, ・スエトニウス, 『ローマ皇帝伝』からの抜粋 第V分冊 P.1945, 2013/1

### 3-4. 口頭発表

稲原美苗 「フェミニスト現象学の見地から考える身体障害とその経験—哲学的当事者研究の可能性—」日本大学人文科学研究 所哲学ワークショップ第5回「フェミニスト現象学」, 日本大学, 2014/3

- Inahara, Minae, “A Manifesto for Ability Studies: Exploring Tojisha-Kenkyu and Disability”, The Joint Seminar hosted by the School of Behavioural, Cognitive and Social Science and the School of Health, University of New England, 2014/2
- 稲原美苗, 文元基宝「歯科医療の中の当事者研究—専門知と当事者の知をつないで—」第 33 回臨床哲学研究会, 大阪大学中之島センター, 2013/12
- 稲原美苗「アートによる問題の外在化と当事者研究—表現する自己と表現される自己の狭間で」最先端ときめき研究推進事業「バイオサイエンスの時代における人間の未来」第 45 回ときめきセミナー, 大阪大学大学院人間科学研究科, 2013/12
- 稲原美苗「障害当事者から観た『ピノキオ』:スペクテイターシップと語り」第 4 回ナラティブと質的研究会「病の語りと当事者性」, 大阪大学大学院人間科学研究科, 2013/10
- Inahara, Minae, “The Disabled Body, the Able-bodied Form: A Feminist Exploration of Dialogue between Beauvoir and Fanon”, 22nd World Congress of Philosophy, University of Athens, School of Philosophy, 2013/8
- Inahara, Minae, “障害のある身体、健全な形:ファノンとボーヴォワールの対話についてのフェミニズム的探究”, 最先端ときめき研究推進事業「バイオサイエンスの時代における人間の未来」第 40 回ときめきセミナー, 大阪大学大学院人間科学研究科, 2013/7
- Inahara, Minae, “A Feminist Exploration of the Cyborg Body: Physical Disability and Technology”, Feminist Technoscience and Theory of the Body: Cases from Japan, Sweden and [elsewhere], the Centre for Gender Research, Uppsala University, 2013/3
- Inahara, Minae, “A Feminist Exploration of the Cyborg Body: Physical Disability and Technology”, 第 1 回「障害の哲学」国際会議:障害学と当事者研究—当事者研究の国際化に向けて, 共生のための国際哲学研究センター(UTCP), 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部, 2013/3
- 稲原美苗「SF 映画と身体障害:障害者のスペクテイターシップ」UTCP 講演会, 共生のための国際哲学研究センター(UTCP), 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部, 2013/3
- Inahara, Minae, “The struggle for citizenship: the case of disabled people”, 日独共同大学院プログラムの春季合同セミナー, 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部, 2013/3
- 稲原美苗「脳性マヒの特性と障害者歯科治療の必要性—当事者の視点から」四国地域障害者歯科医療推進協議会第 3 回講演会, 徳島大学歯学部, 2013/3
- 稲原美苗「共生のための障害の哲学(2) 痛みについて」EALAI・UTCP 主催冬学期テーマ講義「共生のレッスン 東アジアの磁場から」, 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部, 2012/12
- 稲原美苗「「失敗いっぱい、幸せいっぱい」—構音しょうがいのある私が海外へはばたいたい」しょうがい学生支援室・講演, 立教大学 しょうがい学生支援室, 立教大学, 2012/12
- Inahara, Minae, “When and Where Is My Body Normal? : A Topographic Analysis of the Able-bodied World”, ICU Faculty Development Seminar, 国際基督教大学, 2012/12
- 稲原美苗「障害学を知ろう」静岡県現任保育士研修 2012年秋季, 静岡市、掛川市、下田市、浜松市、三島市、富士市で講演—計 6 回, 2012/10
- 稲原美苗「拒絶される声:間主観的言語障害学の可能性と当事者研究」「共生のための障害の哲学」シンポジウム 専門知と当事者研究をつないで, 共生のための国際哲学研究センター(UTCP), 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部, 2012/7
- 稲原美苗「障害とアブジェクション」「共生のための障害の哲学」第1回研究会, 共生のための国際哲学研究センター(UTCP), 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部, 2012/6

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2013 年度～2015 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:稲原美苗  
課題番号:25370010

研究題目:哲学的当事者研究:身体障害者のための自助プログラムの構築

研究経費:2013年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

研究の目的:

当事者研究は、障害当事者が「苦労の主人公」として、類似した障害をもつピア(仲間)とともに自らの生きづらさや脆弱性について「研究」をすることによって、「自分を助けていく」取り組みとして考えられてきた。これに対して、本研究は、哲学カウンセリングを応用し、当事者が自らの障害を日常的に考察するだけでなく、障害がその当事者の行動や生き方にどのように影響を与えるのかということを哲学的に研究する新たな自助実践プログラムを構築する。それによって、これまで医療的にも社会福祉的にも保護の客体として位置づけられてきた障害者を社会の成員として捉え直す哲学的理論・実践、哲学的当事者研究を提起する。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

当事者性を考える研究者の会・世話人, 2013年6月～現在に至る

## 2-4 中国哲学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 1 准教授 0 講師 1 助教 1

教授：湯浅 邦弘

講師：辛 賢

助教：中村 未来

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
4	3	1	0	0	1	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 1 名

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	1	0	0	1
2013	2	1	0	0
計	3	1	0	1

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

学部生については、①中国哲学の基礎知識と思想史全般の流れを理解するよう指導する。②文献資料を読むための必要な技術など、基礎的な調査能力について指導する。大学院生については、①各研究主題に関する専門知識及び資料分析の方法を習得できるよう指導する。②国内外の学会での積極的な研究発表（口頭発表・論文の投稿）を奨励する。学部生・大学院生共通の教育目標としては、①論文作成に備え、随時個別指導を行う。②修了（卒業）後の進路について随時相談を行い、それぞれの希望に応じた柔軟な対策・指導を行う。③研究室 HP の更新に努めるなど、学生に対する教育・研究情報の公開を進める。

#### 2. 研究

本研究室は、全国でも数少ない中国哲学研究の拠点として定評を得ている。特に、新出土文献の研究と懐徳堂の研究は、本研究室の研究活動の両輪となっている。そこで、①新出土文献の研究を推進し、海外学術調査を進め、その成果を国内外の学会で発表する。②大阪大学中国学会の事務局として、『中国研究集刊』を刊行する。③懐徳堂研究会の事務局として、懐徳堂文庫資料の調査研究を進め、その成果を報告書にまとめて刊行する、などを目標として掲げた。

### 3. 社会連携

社会連携の一環として、国際学術交流を推進し、また、財団法人懐徳堂記念会の事業に協力することを目標として掲げた。具体的には、①北京大学が推進している「儒蔵」編纂事業に協力し、懐徳堂の中井履軒による四書注釈書の研究・翻刻を進めて公開する。②中国や台湾の大学と共催して国際学会を開催する。③懐徳堂アーカイブ講座（懐徳堂記念会）の開催準備を進め、運営に協力する、などである。

## Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

### 1. 教育

大学院・学部ともにそれぞれの必要な知識や研究方法について習得するよう、指導を行った。大学院生に関しては、国内外の研究交流会および学会において、口頭発表や論文の投稿を行えるよう指導した。一方、学部指導においては、資料の解説に必要な基本知識・調査技術などについて指導を行った。進路についても、随時相談に乗り、その結果、それぞれの希望する道に進むことができた。なお、懐徳堂事業や中国出土文献に関する研究情報について、研究室 HP に公開し、随時更新を行った。

### 2. 研究

新出土文献研究については、研究室に事務局を置く中国出土文献研究会（旧戦国楚簡研究会）が、上海博物館、殷墟博物館、香港中文大学などへ赴き、学術調査を行った。研究室編集の学術誌『中国研究集刊』は期間中に第 54 号～第 57 号を刊行した。懐徳堂文庫の調査研究については、その成果の一部を『懐徳堂研究』第 4 号および第 5 号に掲載した（湯浅）。また、教員は、科研費補助による研究成果として口頭発表または学術論文として研究報告を行った。特に、湯浅教授は、中国・台湾で開催された国際学会において 2 年連続で研究発表を行った。大学院生も、懐徳堂文庫資料の調査研究を精力的に進めた。

### 3. 社会連携

具体的な成果として、①北京大学が推進している「儒蔵」編纂事業に協力し、懐徳堂の中井履軒による四書注釈書の研究・翻刻を進め、北京大学（儒蔵編纂委員会）に提供した。②懐徳堂デジタルアーカイブ「西村天四書簡」および「懐徳堂考」の制作に協力した。また、湯浅教授は、懐徳堂研究の成果について新聞社から取材を受け、その内容が文化欄に掲載された。

## Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

### 1. 教育

目標に沿って着実な教育がなされていると自己評価できる。具体的には、(1)竹簡・帛書など新出土資料を精力的に取り上げたこと、(2)中国古代思想を中心に、近世および日本漢学に至る幅広い時代を対象としたこと、(3)「懐徳堂文庫」の整理・調査、およびそのデジタル・コンテンツ化と公開を行ったこと、などである。また、名古屋大学の中国学関係研究室との定期的な研究交流はすでに 10 回を超えたが、これも、学生の学力向上に資するものとして評価できる。

### 2. 研究

設定した研究目標に従い、研究が円滑かつきわめて生産的に実施されていると自己評価できる。特に、新出土文献の研究と懐徳堂の調査・研究は、全国的に見ても本研究室の特色として認知されるに至っている。

### 3. 社会連携

国際学術交流は、儒蔵の編纂協力や国際学会の共催という形で十分に達成できたと自己評価できる。また、当研究室の伝統として、懐徳堂事業への積極的な関わりがあるが、この点も、教授・学生とも全面的な協力に努めており、研究室の組織的な社会貢献が充分になされていると自己評価できる。

## V. 基本情報(2012年度～2013年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	1	0	1
2013	0	0	0
計	1	0	1

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

金城未来「中国新出土文献の研究—上博楚簡・清華簡・銀雀山漢簡—」2013/3

主査：湯浅邦弘 副査：高橋文治、荒川正晴

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	2(2)	1(1)	1(0)	2(0)	0(0)	6(3)
2013	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	0(0)	1(0)
計	2(2)	1(1)	1(0)	3(0)	0(0)	7(3)

括弧内は査読付き論文数。

#### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	0	3	0	0	3
2013	0	0	1	0	0	1
計	0	0	4	0	0	4

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

【2012年度】

〔博士前期〕

金城未来・柁島雅弘・中菌潤・佐藤由隆・大山千尋「新出土資料関係文献解題（十一）」、『中国研究集刊』（大阪大学中国学会），第54号，pp. 88-105, 2012/6

湯浅邦弘・野口眞戒・柁島雅弘・大山千尋「[研究史展望] 懐徳堂研究の新展開」、『待兼山論叢』（哲学篇）（大阪大学文学会），第46号，pp19-33, 2012/12

野口眞戒・柁島雅弘「懐徳堂関係研究文献提要（二十九）」『懐徳』（懐徳堂記念会），第81号，pp.45-51，2013/1

〔博士後期〕

金城未来・柁島雅弘・中菌潤・佐藤由隆・大山千尋「新出土資料関係文献解題（十一）」『中国研究集刊』（大阪大学中国学会），第54号，pp. 88-105, 2012/6

金城未来「第五章 韓非子—法家思想の大成者—」湯浅邦弘編著『名言で読み解く中国の思想家』（ミネルヴァ書房），pp. 99-124, 2012/8/25

金城未来「上博楚簡『成王既邦』積読」『中国研究集刊』（大阪大学中国学会），第55号，pp. 111-128, 2012/12

【2013年度】

〔博士前期〕

柁島雅弘・野口眞戒・井上まゆ子「懐徳堂関係研究文献提要（三十）」『懐徳』（懐徳堂記念会），第82号，pp.46-53，2014/1

〔博士後期〕

柁島雅弘・野口眞戒・井上まゆ子「懐徳堂関係研究文献提要（三十）」『懐徳』（懐徳堂記念会），第82号，pp.46-53，2014/1

### (2)口頭発表

【2012年度】

〔博士後期〕

金城未来「上博楚簡『成王既邦』に見える周公旦像」中国出土文献研究会(第48回研究会)，2012/7

金城未来「上博楚簡『成王既邦』に関する一考察」中国出土文献研究会(第49回研究会)，2012/8

金城未来「『清華大学蔵戦国竹簡〔叁〕』所収文献概要」中国出土文献研究会(第50回研究会)，2013/3

【2013年度】

〔博士後期〕

柁島雅弘「清華簡『赤★（鳥+咎）之集湯之屋』」第12回大阪大学・名古屋大学中国学研究交流会，2013/11

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2012年度】

〔学部生〕

佐藤由隆「【書評】『懐徳堂考』」懐徳堂研究センター『懐徳堂研究』，第4号，pp105-114，2013/2

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

【2012年度】

〔学部生〕中菌潤，文学部賞，大阪大学，2012年度

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD : 0名 DC2 : 1名 DC1 : 0名 (計1名)  
2013年度 PD : 0名 DC2 : 0名 DC1 : 0名 (計0名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部 : 0名 大学院 : 1名 (計1名)  
2013年度 学部 : 0名 大学院 : 0名 (計0名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

清水(上野)洋子, 博士後期課程, 福山大学, 講師, 2013/4  
中村(金城)未来, 博士後期課程, 大阪大学, 助教, 2013/4

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名  
2012年度 : 0名 2013年度 : 1名  
<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名  
その他 0名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名  
2012年度 : 0名 2013年度 : 0名

## 9. 刊行物

2012年度 『中国研究集刊』第54号、第55号 刊行  
2013年度 『中国研究集刊』第56号、第57号 刊行

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

懐徳堂研究会(研究会、研究会開催・事務局引受) 2000年～現在に至る  
中国出土文献研究会(2010年10月、戦国楚簡研究会を改称。研究会、研究会開催・事務局引受) 1998年～現在に至る  
大阪大学中国学会(学会、事務局引受) 1984年～現在に至る

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第48回中国出土文献研究会(於大阪大学中国哲学資料室) 2012年 7月15-16日  
第49回中国出土文献研究会(於上海新協通国際大酒店:5階3号会議室) 2012年 8月27日  
第50回中国出土文献研究会(於中国・武漢大学簡帛研究中心会議室) 2012年 8月29日  
第11回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会(大阪大学大学院文学研究科:大会議室) 2012年 11月24日  
第51回中国出土文献研究会(於大阪大学中国哲学資料室) 2013年 3月19日  
中国古算書研究会と中国出土文献研究会との共同主催で、陳偉氏(武漢大学歴史学院院長)  
による学術講演会「里耶秦簡から見た秦代行政と算術」を開催(於大阪産業大学梅田サテライトキャンパス)  
2013年 4月21日



第 52 回中国出土文献研究会(於上海新協通國際大酒店(中国上海)第三會議室)	2013 年 8 月 27 日
第 53 回中国出土文献研究会(於鄭州中州國際飯店(中国河南省)會議室)	2013 年 8 月 29 日
第 13 回懷德堂研究会(於大阪大学附属図書館・大阪大学文学部中庭會議室)	2013 年 9 月 9 日
第 12 回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会(名古屋大学文学部：一二七講義室)	2013 年 11 月 2 日
第 14 回懷德堂研究会(於大阪大学文学部中庭會議室)	2013 年 12 月 15 日
第 54 回中国出土文献研究会(於島根大学教育学部五一九研修室)	2013 年 12 月 21-22 日
曹方向氏(安陽師範学院文学院)による国際學術講演会「戰國文字中的「京」及相關問題」 を開催(於大阪大学待兼山會館特別室)	2014 年 1 月 22 日

## 12. 教員の研究活動(2012 年度～2013 年度の過去 2 年間)

### 1. 湯浅 邦弘 教授

1957 年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。文学博士(大阪大学、1997 年)。北海道教育大学講師、島根大学助教授、大阪大学助教授を経て、2000 年 4 月現職。2013 年 7 月、2013 年中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会「優秀學術論文賞」受賞、2011 年 7 月、大阪大学功績賞(社会・国際貢献部門)受賞。専攻：中国哲学／中国古代思想史／懷德堂研究。

#### 1-1. 論文

- 湯浅邦弘「書簡と扇のデジタルアーカイブ—大阪大学懷德堂文庫の取り組み—」懷德堂研究センター『懷德堂研究』(懷德堂研究センター), 懷德堂研究センター, pp. 3-11, 2014/2
- 湯浅邦弘「岳麓秦簡『占夢書』の思想史的位置」大阪大学中国学会『中国研究集刊』57, 大阪大学中国学会, pp. 100-115, 2013/12
- 湯浅邦弘「銀雀山漢墓竹簡「論政論兵之類」考釋」周鳳五『先秦文本及思想之形成・發展與轉化』国立台湾大学出版中心, pp. 679-698, 2013/12
- 湯浅邦弘「先秦兵学の展開—『銀雀山漢墓竹簡[貳]』を手がかりとして—」中国社会科学院歴史研究所・財団法人東方学会『中国新出資料学の展開』(中国社会科学院歴史研究所・財団法人東方学会), 汲古書院, pp. 67-79, 2013/8
- 湯浅邦弘「上博楚簡『舉治王天下』の古聖王伝承」大阪大学中国学会『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 56, 大阪大学中国学会, pp. 43-65, 2013/6
- 湯浅邦弘「懷德堂デジタルアーカイブの展開」懷德堂研究センター『懷德堂研究』(懷德堂研究センター), 4, 懷德堂研究センター, pp. 3-13, 2013/2
- 湯浅邦弘「上博楚簡『顔淵問於孔子』と儒家系文献形成史」大阪大学中国学会『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 55, 大阪大学中国学会, pp. 40-53, 2012/12
- 湯浅邦弘(共著)「中国新出簡牘學術調査報告—上海・武漢・長沙—」大阪大学中国学会『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 55, 大阪大学中国学会, pp. 129-149, 2012/12
- 湯浅邦弘「興軍之時—關於銀雀山漢墓竹簡《起師》—」武漢大学簡帛研究中心(編)『簡帛』7, 上海古籍出版社, pp. 219-233, 2012/10
- 湯浅邦弘「日本漢学与朱子学—江戸時代大阪「懷德堂」的學術—」陳来(編)『哲学与時代：朱子学国際學術研討會論文集』華東師範大学出版社, pp. 438-443, 2012/9
- 湯浅邦弘「幕末の漢文力」中野三敏・楠元六男(共編)『江戸の漢文脈文化』竹林舎, pp. 121-140, 2012/4

#### 1-2. 著書

- 湯浅邦弘『孫子』NHK出版, 95p., 2014/3
- 湯浅邦弘(監修)『孫子叢書全 25 卷』大空社, 2013/6

湯浅邦弘(監修)『菜根譚叢書全 25 卷』大空社, 2012/10

湯浅邦弘『中國出土文獻研究—上博楚簡與銀雀山漢簡』台湾・花木蘭文化出版社, 157p., 2012/9

湯浅邦弘(編)『名言で読み解く中国の思想家』ミネルヴァ書房, 376p., pp. 4-27, 298-304, 345-362, 2012/8

### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

湯浅邦弘(参加記)『『老子』研究の最前線—「簡帛《老子》」与道家思想国際学術研討会』参加記—東方書店(編)『東方』395, 東方書店, pp. 2-7, 2013/12

湯浅邦弘(共著)(報告)「中国新出簡牘学術調査報告—上海・武漢・長沙—」大阪大学中国学会(共著)『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 55, 大阪大学中国学会, pp. 129-149, 2012/12

湯浅邦弘(解説)「森三樹三郎『墨子』(ちくま学芸文庫)」筑摩書房『墨子』筑摩書房, pp. 291-302, 2012/10

湯浅邦弘(学会参加記)「中国昆明から発信するデジタルアーカイブ」東方書店(編)『東方』379, 東方書店, pp. 2-5, 2012/9

### 1-4. 口頭発表

湯浅邦弘「懷徳堂学派の『論語』解釈—「異端」の説をめぐって—」第四回日本研究年会国際学会, 日本研究年会, 台湾大学, 2013/11

湯浅邦弘「北大簡《老子》的特質—結構、文章及詞彙—」簡帛《老子》與道家思想国際学術研討会, 北京大学出土文献研究所, 北京大学, 2013/10

湯浅邦弘「書簡与扇的数字图书馆—大阪大学懷徳堂文库的相关措施—(書簡と扇のデジタルアーカイブ—大阪大学懷徳堂文库の取り組み—)」2013 年中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会, 清華大学図書館・香港大学図書館ほか, 甘肅省敦煌市太陽大酒店, 2013/7

湯浅邦弘「上博楚簡『舉治王天下』的堯舜禹傳說」「先秦兩漢出土文獻與學術新視野」國際研討会, 台湾大学, 台湾大学, 2013/6

湯浅邦弘「日本儒教と大阪懷徳堂」《儒教的新復興》儒教文化圈国際学術会議, 成均館大学, 成均館大学, 2012/11

湯浅邦弘「産学協同で進める文化財のデジタルアーカイブ—大阪大学懷徳堂文库の取り組み—」第 14 回図書館総合展フォーラム, 図書館総合展, パシフィコ横浜, 2012/11

湯浅邦弘「儒教空間—懷徳堂—」傳統與開拓: 朱子學國際学術研討会, 湖南大学, 湖南大学, 2012/10

湯浅邦弘「日本江戸时代历史資料的数字图书馆(Digital Archive)—大阪大学懷徳堂文库の発展—」2012 年中文デジタルパブリッシング・デジタルライブラリー国際シンポジウム, 清華大学図書館・香港大学図書館ほか, 昆明泰麗国際酒店国際会議庁, 2012/6

湯浅邦弘「漢代における『論語』の伝播(關於漢代的『論語』傳播)」東アジア文化交渉学会第 4 回国際学術大会, 東アジア文化交渉学会, 韓国・高麗大学, 2012/5

湯浅邦弘「先秦兵学の展開—『銀雀山漢墓竹簡[貳]』を手がかりとして—」第四回日中學者中国古代史論壇, 東方学会, 日本教育会館, 2012/5

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

湯浅邦弘 大阪大学総長表彰, 大阪大学, 2013/10

湯浅邦弘 2013 年中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会「優秀学術論文賞」, 中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会, 2013/7

湯浅邦弘 大阪大学功績賞(社会・国際貢献部門), 大阪大学, 2011/7

湯浅邦弘 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学共通機構, 2003/12

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2009 年度～2013 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 湯浅邦弘

課題番号:21320012

研究題目:戦国楚簡と先秦思想史に関する総合的研究

研究経費: 2012年度 直接経費 2,200,000円 間接経費 660,000円

2013年度 直接経費 3,300,000円 間接経費 990,000円

研究の目的:

本研究は、現在、中国古代思想史研究の分野で世界的に注目を集めている戦国楚簡の解読を進め、中国古代思想史、特に先秦思想史の形成と展開を明らかにすることを目的とする。具体的には、現在順次刊行が進められている『上海博物館蔵戦国楚竹書』(馬承源主編、上海古籍出版社)に基づいて、それぞれの新出土文献を、思想史・文字学の専門家からなる共同研究によって解読し、また、中国・台湾などで活発な活動を続けている出土文献関係の学会・研究会と学術交流を進める。従来の通説に大幅な修正を加えた、新しい中国古代思想史の記述を行いたい。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本中国学会・評議員, 2013年4月～現在に至る

中国出土文献研究会・会長, 2012年4月～現在に至る

東方学会・学術委員(東方学査読委員), 2011年7月～現在に至る

全国漢文教育学会・理事, 2005年4月～現在に至る

日本道教学会・理事, 2004年4月～現在に至る

懐徳堂研究会・代表, 2000年4月～現在に至る

中国出土資料学会・理事, 1989年4月～現在に至る

## 2. 辛賢講師

1967年、韓国ソウル生。2002年、筑波大学大学院哲学・思想研究科博士課程修了。博士(文学)。日本学術振興会外国人特別研究員(筑波大学)を経て、2004年4月現職。専攻:中国哲学、易学哲学史。

### 2-1. 論文

---

辛賢「邵雍の皇極経世とその背景—理数を求めて—」三国志学会編『林田慎之介博士傘寿記念 三国志論集』(三国志学会), pp. 321-352, 2012/10

### 2-2. 著書

---

辛賢(編)『知のユーラシア4 宇宙を駆ける知—天文・易・道教』明治書院, 2014/1

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

辛賢(訳注)『朱子語類』巻第一百 邵子之書 訳注(その一)『大阪大学大学院文学研究科紀要』53, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-40, 2013/3

### 2-4. 口頭発表

---

辛賢「漢代経学の相貌—宇宙論的「知」の形成—」SYMPOSIUM II 中国思想史の基礎:第57回国際東方学会議, 東方学会, 日本教育会館(東京), 2012/5

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

辛賢 日本中国学会賞, 日本中国学会, 2001/10

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2011年度～2013年度、基盤研究(C) 一般、代表者:辛賢

課題番号:23520053

研究題目:宋代易学の再検討—象数学派を中心に—

研究経費: 2012年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

2013年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

今井宇三郎『宋代易学の研究』(1958)以来、半世紀もの間、手薄となっている宋代易学史を再検討し、今井の段階で及ばなかった儒・道教の両面における術数学の成果を総合し、新たな宋代易学史の構築を目指す。「古易」と「新易」が交差する唐宋に焦点を当て、両代における漢易術数の波及、その展開の様相を考察し、宋学における「数」「象」の哲学的意味について分析を試みる。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本道教学会・理事, 2012年1月～現在に至る

日本中国学会・広報委員会委員, 2007年4月～現在に至る

三国志学会・評議員, 2006年7月～現在に至る

## 3. 中村 未来 助教

1984年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学博士(大阪大学、2012年)。2013年4月より現職。専攻:中国古代理想史／新出土文献研究

### 3-1. 論文

中村未来「上博楚簡『成王既邦』の思想的特質——周公旦像を中心に」大阪大学中国学会『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 57, pp. 145-169, 2013/12

中村未来「清華簡『説命』の文献的特質——天の思想を中心に」大阪大学大学院文学研究科『待兼山論叢』(大阪大学大学院文学研究科), 47, pp. 1-15, 2013/12

中村未来「上博楚簡『成王既邦』釈読」大阪大学中国学会『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 55, pp. 111-128, 2012/12

### 3-2. 著書

湯浅邦弘, 末永高康, 中村未来他(共著)『名言で読み解く中国の思想家』ミネルヴァ書房, pp. 99-124, 2012/8

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中村未来(参加記)「『二〇一三年中文数字出版与数字図書館(CDPDL)国際研討会』参加記」東方書店『東方』329, 東方書店, pp. 12-16, 2013/10

中村未来(提要)『清華大学蔵戦国竹簡〔参〕』所収文献概要」大阪大学中国学会『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 56, 大阪大学中国学会, pp. 122-145, 2013/6

中村未来, 梶島雅弘, 中藺潤他(共著)(提要) 清華大学出土文献研究与保護中心編・李学勤主編『清華大学藏战国竹簡(壹)』、朱漢民・陳松長主編『岳麓書院藏秦簡(壹)』、銀雀山漢墓竹簡整理小組編『銀雀山漢墓竹簡(貳)』大阪大学中国学会『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 54, 大阪大学中国学会, pp. 88-93, 2012/6

### 3-4. 口頭発表

中村未来 「清華簡『周公之琴舞』考」中國出土資料學會 平成25年度大会(第三回例会), 中國出土資料學會, 於日本女子大学, 2014/3

中村未来 「清華簡『周公之琴舞』研究狀況紹介」中国出土文献研究会・第54回研究会, 中国出土文献研究会, 於島根大学教育学部, 2013/12

中村未来 「清華簡『説命』の文獻特質—以天的思想爲中心」“簡帛文獻與古代史”學術研討會暨第二屆出土文獻青年學者論壇, 復旦大學歷史學系・復旦大學出土文獻與古文字研究中心, 於復旦大学, 2013/10

中村未来 「大阪学問所「懷徳堂」の知とそれを支える人々」大阪大学公開講座:“大阪<ひと・まち>未来”, 大阪大学 広報・社会学連携オフィス 社会学連携課, 於大阪大学中之島センター, 2013/10

中村未来 「清華簡『説命』の文獻的特質—天の思想を中心に」中国出土文献研究会・第51回研究会, 中国出土文献研究会, 於中州國際飯店(中国鄭州), 2013/8

中村未来 「日本漢籍数字图版的公开状况及其意义」2013年中文数字出版与数字図書館(CDPDL)國際研討會, 清華大学図書館・香港大学図書館・敦煌研究院・中国学術期刊電子雜誌社, 於敦煌太陽大酒店會議廳, 2013/7

中村未来 「清華簡『説命』初読」東亜文化交渉学会第五屆年次大会:描かれる新しい世界:東アジアの歴史・文化と未来, 東アジア文化交渉学会, 於香港城市大学, 2013/5

中村未来 「『清華大学藏战国竹簡(叁)』所収文獻概要」中国出土文献研究会・第50回研究会, 中国出土文献研究会, 於大阪大学中国哲学資料室, 2013/3

中村未来 「上博楚簡「成王既邦」に関する一考察」中国出土文献研究会・第49回研究会, 中国出土文献研究会, 於上海新協通國際大酒店:5階3号會議室, 2012/8

中村未来 「上博楚簡「成王既邦」に見える周公旦像」中国出土文献研究会・第48回研究会, 中国出土文献研究会, 於大阪大学中国哲学資料室, 2012/7

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

中村未来 2013年中文数字出版与数字图书馆国际研讨会・優秀論文賞, 清華大学図書館・香港大学図書館・敦煌研究院・中国学術期刊電子雜誌社, 2013/7

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2013年度~2014年度、若手研究(スタートアップ)、代表者:中村未来

課題番号:25884040

研究題目:新出土文献の読解を通して探る中国古代思想の形成と展開

研究経費:2013年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本研究は、近年相次いで発見されている中国古代の新出土文献を対象とする。传世文献に加えて新出土文献を積極的に取り上げ読解することにより、従来、資料的制約により不明であった古代思想史の空白を埋め、その変遷過程を明らかにすることを目的とする。

特に、戦国時代の楚地域(現在の湖北省)より出土した竹簡群には、『詩経』や『書経』などの經典類や、楚地関連文献が多く含まれている。本研究において、それらの文献を個別的・文献学的視点から検討することにより、佚書や異本整理などの基礎的研究が飛躍的に進むことが見込まれる。さらに、新出土文献および传世文献双方の読解を通して、古代思想を総合的視点から検討し直すことにより、中原地域より傍流視され、依然として曖昧な部分の多い楚地域における文化や思想的特色の解明にも寄与し得る

ものと考える。

**3-7. その他の外部資金の受け入れ状況**

---

なし

**3-8. 外部役員等の引き受け状況**

---

なし

## 2-5 インド学・仏教学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 1 准教授 0 講師 1 助教 0

教授：榎本 文雄

講師：堂山英次郎

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
2	1	2	0	0	3	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 1 名

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	1	1	0	1
2013	1	1	1	0
計	2	2	1	1

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

学部生と大学院生の学問的な相互交流を促進できるような授業形態をとること、またインド学・仏教学関係の学会・研究会等の情報を収集して学生に周知し、研究意欲の高揚をはかることに力を置き、以下の更なる目標を設定した：学部では2年次生向けの専門語学と講義の授業を開講し、基礎的な知識や学力の充実を、また3年次以上の学生に向けては原典輪読の授業を開講し、研究資料の読解やその利用法のスキルアップを目標とした。4年次生には、卒業論文作成のための論文作成指導の授業を設定した。大学院では、修士論文及び博士論文の作成演習の授業を開講し、資料の解読と論文作成の指導に重点を置くとともに、学会での口頭発表や学術誌への投稿論文作成の奨励と指導を目標とした。また、各種研究助成に関する情報の入手につとめ、研究の経済的基盤を支援することも目標として掲げた。

#### 2. 研究

教員・大学院生ともに、学内・学外の研究会には積極的に参加すること、また国内外の研究機関及び研究者との交流・協力を教員が主導して促進することを目標とした。

### 3. 社会連携

教員は積極的に一般向けの講演や著作を行うこと、及び学会等において役員等の責務を果たすことを目標として掲げた。

## Ⅲ. 活動の概要(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

設定した目標に向けて講義・演習を行ない、学部生の二次文献も含めた読解力の向上のため、授業・授業外での指導に多くの時間をかけた。また学問的な相互交流を促進するために、論文作成演習の授業を有効に使い、書評発表などの新たな形を定着させ、教員、大学院生、学部生の垣根を超えた全員参加型の議論・情報交換の場を、より一層充実させた。この間、特筆すべきこととして、博士後期課程の大学院生 2 名が「卓越した大学院拠点形成支援補助金」の配分を受け創価大学国際仏教学高等研究所で開催された研究会に参加し(2013年3月)、同じく博士後期課程の大学院生 1 名が日本学術振興会の特別研究員(DC)に採用され、さらに2014年度にはもう1名(DC)採用されることが内定したことを挙げておく。一方2012年度からは、教員1名の受け入れで日本学術振興会特別研究員(PD)が1名研究室に加わり、学生間の交流や授業の更なる活性化につながった。

### 2. 研究

学内外の研究会・学会へは、教員及び学生の多くが積極的に参加し、また国内外の研究者・学術機関との交流も活発に行なった。教員も学生も、積極的に学会発表及び学術雑誌への投稿を行った。そのうち特記すべき活動は以下の通りである。教員1名は2011年度に引き続き、他研究者による科学研究費の研究分担者として、本専門分野の招へい研究員、本専門分野出身の本学・他大学の非常勤講師、さらに本専門分野の大学院生(内、1名は2013年度から日本学術振興会特別研究員(DC))と協力し、インド仏教の基本的術語の基準訳語集を構築するための基礎作業を続行し、2013年度にその成果を冊子の形で出版した。別の教員1名及び日本学術振興会特別研究員1名(PD)は、「2012年度多言語多文化研究に向けた複合派遣プログラム(OVC):個人リサーチ型」による若手研究員の海外派遣に採用され、同年秋から冬にかけて、それぞれ英国ケンブリッジ(Ancient India and Iran Trust)及び米国ケンブリッジ(ハーヴァード大学)を訪れ、いずれも第一線で活躍する研究者のもとで研究を大きく進展させる機会を得た。後者の教員はその際、訪問先機関からの依頼を受け招待講演を行った。一方、上記の特別研究員(PD)は、この海外での研究を取り込む形で、長年取り組んできた博士論文を完成させ、博士(文学)の学位を東北大学より取得した。また同教員及び同特別研究員は、2014年1月にインド共和国ケーララ州コジコデで行われた国際学会において、それぞれ30分の口頭発表を行った。

### 3. 社会連携

教授会メンバーの教員はいずれも「日本印度学仏教学会」等で、理事・評議員等の職務を遂行している。この間特筆すべきこととして、教授会メンバーの教員1名が、京都大学文学研究科で外部評価委員会委員を務め(2012年12月)、東京大学で開催された公開シンポジウムにおいて閉会の辞を述べ(2013年11月)、東京大学文学部・人文社会系研究科で集中講義を行ったこと(2013年12月)が、また別の教員1名が上記インドでの国際学会において査読委員を務めたことが挙げられる。

## Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

前記の活動の結果、学部生の原典及び二次文献の読解力に向上が見られた。また、多彩かつ風通しのよい演習授業を行



なった結果、卒業論文あるいは修士論文が、程度の差こそあれ幅広い視点や掘り下げた議論で構成されるようになった。また、とりわけ、博士後期課程の学生 2 名が「卓越した大学院拠点形成支援助成金」の採択を受けたこと、また日本学術振興会特別研究員 (DC) に 2 名が採用されたことは特筆すべき事態である。これらのことは、当研究室が設定した教育目標を十分に達成した結果の具体的な顕れとして、客観的に見て評価できることであろう。当分野は古典文献の読解が中心であり、レベルアップやその速度には個人差がある。しかし、学生 1 人 1 人に合った指導が行き届くように目配りをした結果が、全体のレベルアップにつながったと考えられる。目標の達成とともに、上記の方針を継続すべきものとして確認できたことも評価できよう。

## 2. 研究

各教員がそれぞれ、国内外の学会への出席、研究者・学術機関との交流に努め、また学会発表や学術誌への投稿も積極的に行っており、全体として目標を達成したと考えられる。とりわけ海外との交流や国際学会への参与に関しては、特に目覚ましい成果があったと言える。

## 3. 社会連携

一般向けの講演・著作においても、学会等における役員の責務遂行においても、目標は達成されたと言える。特に、シンポジウム開催への関与・協力という点では、大きな成果をあげたと考えられる。一方、今後学会や研究会などの主催という点では、更なる積極的な役割を担う余地を残している。

# V. 基本情報(2012 年度～2013 年度)

## 1. 博士学位授与

### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	1	0	1
2013	0	0	0
計	1	0	1

### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

[2012 年度]

池田宣幸「ヤジュルヴェーダ・サンヒターのブラーフマナの記述を中心とするヴァーチャペーヤ祭の研究」2013/3

主査: 堂山英次郎 副査: 榎本 文雄, 福永 伸哉

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	1(1)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	2(2)
2013	2(2)	2(0)	0(0)	0(0)	0(0)	4(2)

計	3(3)	2(0)	1(1)	0(0)	0(0)	6(4)
---	------	------	------	------	------	------

括弧内は査読付き論文数。

## 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	2	3	0	0	5
2013	0	1	1	0	2	4
計	0	3	4	0	2	9

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

【2012年度】

〔博士後期〕

富田真理子「涅槃の諸相と初期仏教経典 —abhinibbuta 複合語と parinibbuta を含む経典について—」『日本佛教学会年報』(日本佛教学会), 第77号, pp. 1-27 (L), 2012/7

古川洋平「五蓋を捨離するということ」『待兼山論叢 (哲学篇)』(大阪大学文学会), 第46号, pp. 49-64, 2012/12

【2013年度】

〔博士後期〕

名和隆乾「patti (prāpti) の用例と訳例」『Buddhakośa Newsletter』(科学研究費補助金プロジェクト: 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集 (パウッダコーシャ) の構築), No.3, pp.7-14, 2013/12

名和隆乾「A Study on Rebirth Expressions: Gabbassa avakkanti and gandhabba」『印度學佛教學研究』(日本印度学仏教学会), 62巻3号, pp.1167-1172, 2014/3

古川洋平「パーリ註釈文献における saddhā の一側面 —okappanasaddhā に注目して—」, 『東洋哲学研究所紀要』(東洋哲学研究所), 第29号, pp.(39)-(57), 2014/2

古川洋平「パーリ文献の saddhā (確信)」, 『仏教文化研究論集』(東京大学仏教青年会), 第17号, 「śraddhā / saddhā の訳語をめぐって」第1節, pp.7-16, 2014/3

### (2)口頭発表

【2012年度】

〔博士後期〕

名和隆乾「Nidānasamyukta 20 に於ける遺体供養について」日本佛教学会, 2012年度学術大会, 於花園大学, 2012/9/14

古川洋平「初期仏教における修行道の研究 —「五蓋の除去」に注目して—」, 第45回中央アジア学フォーラム, 於大阪大学, 2012/7/28

古川洋平「初期仏教における信の諸相」, 2012年度東洋哲学研究所第一部門研究会, 於創価大学, 2012/9/15.

古川洋平「saddhā について」仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集 (パウッダコーシャ) の構築 (科学研究費補助金・基盤研究(S)), 2012年度第二回研究会, 於東京大学, 2013/3/16

古川洋平「パーリ仏教註釈文献中に見られる saddhā の分類検討」, 第28回東洋哲学研究所学術大会, 於創価大学, 2013/3/24

【2013年度】

〔博士後期〕

名和隆乾「誕生表現に関する一考察 — gabbhāvakkanti と gandhabba —」日本印度学仏教学会第 64 回学術大会, 島根県民会館, 2013/8/31

名和隆乾「patti (prāpti) の用例と訳例」Bauddhakośa : 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集 (パウツダコーシャ) の構築 (科学研究費補助金 (基盤(S)) プロジェクト) 公開シンポジウム: 仏教用語の淵源をこえて —パウツダコーシャの課題と展望—, 東京大学山上会館, 2013/11/30

古川洋平「パーリ仏教における信の一側面 —okappanasaddhā に注目して—」東洋哲学研究所 6 月度研究部員会, 於創価大学, 2013/6/18

古川洋平「パーリ文献の saddhā」Bauddhakośa : 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集 (パウツダコーシャ) の構築 (科学研究費補助金 (基盤(S)) プロジェクト) 公開シンポジウム: 仏教用語の淵源をこえて —パウツダコーシャの課題と展望—, 於東京大学, 2013/11/30

### (3) その他(書評・翻訳など)

【2013 年度】

[博士後期]

榎本文雄 (代表), 河崎 豊, 名和隆乾, 畑 昌利, 古川洋平 『ブツダコーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—パウツダコーシャ III』, [インド学仏教学叢書 17], 山喜房 仏書林, 2014/3/31

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2013 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2013 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2012 年度～2013 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

梶原 三恵子 博士後期課程、東京大学、准教授、2012/4

河崎 豊 招へい研究員、大谷大学、助教、2012/4

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012 年度～2013 年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2012 年度 : 0 名 2013 年度 : 0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名  
その他 0 名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2012 年度 : 0 名      2013 年度 : 0 名

## 9. 刊行物

2012 年度    なし

2013 年度    なし

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

1998 年度より 4 ヶ月に 1 回「中央アジア学フォーラム」(東洋史学専門分野と共同で主催)

## 12. 教員の研究活動(2012 年度～2013 年度の過去 2 年間)

### 1. 榎本 文雄 教授

1954 年生。京都大学文学部卒、京都大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学。文学修士(京都大学)、博士(文学、京都大学)。京都大学助手、華頂短期大学専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999 年 8 月現職。専攻:インド仏教学。

#### 1-1. 論文

榎本文雄「devarāja について」肥塚隆(編)『南アジアおよび東南アジアにおけるデーヴァラージャ信仰とその造形に関する基礎的研究』大阪大学, pp. 7-11, 2013/3

榎本文雄「漏」井上ウイマラ, 葛西賢太, 加藤博己(共編)『仏教心理学キーワード事典』春秋社, p. 50, 2012/5

#### 1-2. 著書

榎本文雄他(共編著)『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語』山喜房佛書林, 261p., 2014/3

榎本文雄『不殺生(アヒンサー)の動機・理由——インド仏教文献を主資料として——』龍谷大学現代インド研究センター, 34p., 2013/4

榎本文雄他(共編)『パーリ学仏教文化学』26, パーリ学仏教文化学会, 258p., 2012/12

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

榎本文雄(コメント)「セッション No. 1 の発表に対するコメント」『日本佛教学会年報』(日本佛教学会), 78, pp. 215-220, 2013/8

榎本文雄尾崎雄二郎, 笠沙雅章, 戸川芳郎(編)『中国文化史大事典』大修館書店, (辞典項目)「阿含経」, p.4; 「求那跋陀羅」, p.274, 2013/4

#### 1-4. 口頭発表

榎本文雄「devarāja について」第 65 回東南アジア彫刻史研究会, 大阪人間科学大学, 2012/12

榎本文雄(招待講演)「不殺生(アヒンサー)の動機・理由——インド仏教文献を主資料として——」龍谷大学現代インド研究センター(RINDAS)2012 年度第 7 回伝統思想研究会, 龍谷大学現代インド研究センター, 龍谷大学, 2012/11

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

東方学会・監事, 2009年9月～現在に至る

日本西蔵学会・委員, 2005年10月～現在に至る

仏教史学会・評議員, 2003年11月～現在に至る

インド思想史学会・理事, 2003年4月～現在に至る

パーリ学仏教文化学会・理事, 1999年4月～現在に至る

日本仏教学会・理事, 1996年4月～現在に至る

日本印度学仏教学会・理事, 1996年4月～現在に至る

## 2. 堂山英次郎講師

1972年生。大阪外国語大学外国語学部卒, 東北大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(東北大学), 博士(文学, 東北大学)。京都大学人文科学研究所助手を経て, 2004年4月現職。2007年日本南アジア学会第1回学会賞受賞, 2008年第50回日本印度学仏教学会賞受賞。専攻: インド・イラン学, 比較歴史言語学。

### 2-1. 論文

---

Dōyama, Eijirō, “Indo-Iranian *mans d<sup>h</sup>ā* —A morphological study—” *Tokyo University Linguistic Papers* (TULIP) 33, pp. 83–98, 2013/1

堂山英次郎, 「胎児がしゃべる」, 加藤浩(編)『2011年度大阪大学大学院文学研究科共同研究成果報告書「神話表象のアレゴリズム研究 —文学・哲学・レトリックに即して—」』, pp. 25–58, 2012/2 (2012/7)

### 2-2. 著書

---

なし

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 2-4. 口頭発表

---

Dōyama, Eijirō, “A syntactic and semantic study of Indo-Iranian *mans-d<sup>h</sup>ā*”, The 6th International Vedic Workshop 2014, Kozhikode (Calicut), Kerala, India, 2014/1.

堂山英次郎, 「Vādhūla-Śrautasūtra 10.8.14-28 と TB 1.7.10.5-6」, 京都大学人文科学研究所共同研究班「灌頂と即位の文化史」研究会(於京都大学人文科学研究所), 2013/6.

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

堂山英次郎, 平成20年度国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 大阪大学, 2009/2

堂山英次郎, 第50回日本印度学仏教学会賞, 日本印度学仏教学会, 2008/9

堂山英次郎, 日本南アジア学会第 1 回学会賞, 日本南アジア学会, 2007/10

堂山英次郎, 印度学宗教学会第 3 回学会賞, 印度学宗教学会, 2006/6

**2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)**

---

なし

**2-7. その他の外部資金の受け入れ状況**

---

なし

**2-8. 外部役員等の引き受け状況**

---

インド思想史学会・監事, 2013 年 4 月～現在に至る

日本印度学仏教学会・評議員, 2004 年 7 月～現在に至る

印度学宗教学会・評議員, 2004 年 6 月～現在に至る

## 2-6 日本学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 4 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：川村 邦光、杉原 達、平田 由美、北原 恵

准教授：宇野田尚哉

助教：林 葉子

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
62	10	26	0	4	0	1	1

※うち留学生 16名、社会人学生 7名

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	21	8	5	0
2013	23	7	4	2
計	44	15	9	2

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

教育について掲げた目標は、以下の6点である。①卒業論文・修士論文・博士論文作成について、日本学教員全員によって指導に取り組み、無理なく論文を完成させることができるようにシステムを充実させる(論文完成までのシステム充実)。②個別学術論文の作成について、テーマに応じて他大学の研究者も含めて議論する場を更に組織する(他大学との連携)。③大学関係者以外の場における議論の場を設け、異領域とのコミュニケーション能力の向上を図る(大学外との連携)。④海外の大学や機関と連携して発表・交流の機会を創出し研究室として支援する(海外の大学・機関との連携)⑤学部生・院生による自発的な研究会活動を進めるための指導をおこなう(自主的活動の推進)。⑥自発的なパンフレットや情報発信を促進するための指導を更に強化する(メディアの創造)。総じて他機関との交流やコミュニケーションにかかわる環境の整備、ならびに能力の開発が目標となった。

## 2. 研究

研究について掲げた目標は、以下の 3 点である。①大小さまざまなシンポジウムや公開の研究会を組織し、その成果を『日本学報』において発信する（『日本学報』の活用とその内容の充実）。②個々の論文作成に当たり、日本学の中で議論を共有すべく討議の機会を設ける（研究に関わる討議空間の創出）。③他大学、大学以外の研究機関、個人などとの研究上の連携を更に強化する（研究ネットワークの強化）。総じて、個々の研究テーマに即した形で柔軟に研究環境が構築できる体制を目指し、課題牽引型の研究形態とそのための環境整備を重点的に行った。

## 3. 社会連携

社会連携について掲げた目標は、以下の 2 点である。①研究会を非専門家や市民とともにおこなう。その際、共通の課題を設定する。②学生・大学院生の活動の評価において、社会における活動を重視する。社会連携については、恒常的な研究会、あるいはシンポジウム等のイベントの計画過程に市民の参加を求めた点にある。またその際、公立ミュージアムや、NPO、NGO をはじめとする学外組織や、在野の研究グループとの密接な連携がポイントになった。またこうした連携は上記の研究形態とも密接に関わる。

# Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

卒業論文・修士論文・博士論文の作成についての指導において、より充実した開かれた環境が達成されつつある。具体的には複数の演習を通じて論文作成をバックアップする体制が強化された。また、領域横断的なカリキュラムである「日本学方法論の会」において、学外者とのコミュニケーションも深まった。特に注目すべきは、2012 年度から「日本学学生企画補助金」の制度を設けて学生主導のシンポジウムや講演会を経済的に支援し、それによって複数の学生による企画が実現したことである。2013 年度からは、院生と学部生が共催する研究会も始動し、ともに自発的な議論の場を持つようになった。また、院生の海外での国際発表の機会を増やすために、2011 年度からオーストラリア国立大学（ANU）主催のサマースクールでの院生の参加・発表を支援してきた。他にもマンガやアニメといったポピュラーカルチャーにかかわる学生や院生による研究の自主的な情報発信も、随時おこなわれている。以上を鑑み、目標はおおむね達成されたと考える。

## 2. 研究

上記の「日本学方法論の会」の成果を、『日本学報』において特集として発信した。京都大学や立命館大学、神戸大学といった関西圏の大学との連携も一層深まりつつある。また、京都国際マンガミュージアム、兵庫県立歴史博物館などに就職している修了生たちとの情報交換も拡大し、見学会なども随時おこなっている。演習以外の研究会も多く開催され、他大学、他研究機関のハブとして日本学の場が機能しつつある。以上を鑑み、おおむね目標は達成されたと考える。

## 3. 社会連携

研究会やシンポジウムには、他大学の研究者以外にも市民が多く参加している。また大阪で活動する NPO や NGO のグループとの連携も深まり、恒常的な人的交流が行なわれている。さらに恒例となりつつある原田神社秋季例大祭への参加は、地域貢献として、地元でも評価されつつある。以上を鑑み、目標はおおむね達成されたと考える。

# Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

教育に関わる上記の活動により、卒業論文・修士論文・博士論文において、高い水準の維持と創造的なテーマ設定の深



化がすすんだ。また、海外との学術交流も活発に行い、国際日本学研究会の開催（2012年度韓国）や、「東アジアの視覚文化とジェンダー」プロジェクト（文学研究科研究推進室の助成）によるシンポジウム開催や韓国の大学との学術交流は、特筆される教育活動の成果を挙げることができたと言える。また、学部生も含めて、複数の自主的な研究会組織が生まれ、文字通り議論の場としての日本学が構築されてきている。個々の研究もこうした複数の研究組織により生み出され維持されている。こうしたなかで育まれた議論のスキルや問題設定能力は、研究関係職のみならず出版やマスコミをはじめ多様な職種においても評価されている。以上から、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

## 2. 研究

研究に関わる上記の活動により、博士論文の執筆ならびにその出版物としての刊行がすすんだ。また他の個人研究においても多くの研究成果が公表され高い評価を受けている。研究環境については、議論のハブとしての役割は定着し、学外、非専門家との恒常的なネットワークも拡大した。こうした研究環境が個々の研究に反映されていったものと考えられる。以上より、おおむね研究についても目標は達成されたと自己評価できる。

## 3. 社会連携

社会連携に関わる上記の活動により、市民の研究会やシンポジウムへの参加はもとより、大阪で活動するNPOやNGOならびに在野の研究グループとの恒常的な連携がすすんだ。またこうした社会連携が、上記の教育活動や研究活動とも有機的に連携しはじめている。以上より、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

# V. 基本情報(2012年度～2013年度)

## 1. 博士学位授与

### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	0	0	0
2013	2	0	2
計	2	0	2

### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

沈正明「よそ者の想像－ナショナリズムに抗する読みの実践－」2013/9

主査：川村邦光 副査：杉原達、富山一郎

鄭祐宗「解放後在日朝鮮人の政治社会史」2014/3

主査：杉原達 副査：川村邦光、宇野田尚哉

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	8(8)	10(5)	1(0)	1(0)	2(0)	22(13)

2013	4(4)	8(5)	0(0)	1(0)	5(0)	18(9)
計	12(12)	18(10)	1(0)	2(0)	7(0)	40(22)

括弧内は査読付き論文数。

## 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	7	9	3	1	0	20
2013	3	3	0	0	1	7
計	10	12	3	1	1	27

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1) 論文・単行本

【2012年度】

〔博士前期〕

- 小野絢子「民藝運動の中の女性」『Cultures/Critiques』4, 国際日本学研究会, pp. 115-129, 2012/10/20
- 中川健一「『新聞学研究』創刊号など新聞学研究会草創期の活動について」『ジャーナリズム研究関西の会 2012 年会報』, ジャーナリズム研究関西の会, pp.30-35, 2013/2/7
- 中川健一「人権問題に関する 2011 年度の新聞報道について」『人権年鑑 2013』, 部落解放・人権研究所, pp.175-179, 2013/3/31
- 西井麻里奈「『聖地』・慰霊碑・クリアランス—広島戦後史再考—」『Cultures/Critiques』 冬季臨時増刊号, 国際日本学研究会, pp.167-189, 2013/1/31
- 西井麻里奈「韓国人原爆犠牲者慰霊碑と『聖地』の論理—『聖地ヒロシマ』をめぐる一考察—」『日本学報』32, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.67-86, 2013/3/18
- 西井麻里奈「コメント：記録映像と立場性—『記憶』との対話をめぐって—」『日本学報』32, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.47-53, 2013/3/18
- 布山美慕「読書のインタラクティブな行為の可能性—我を忘れる読書—」『Cultures/Critiques』4, 国際日本学研究会, pp.97-114, 2012/10/20
- 三浦詩織「報告：『聴き耳』を問う—他人の『話』に耳を傾ける学問のために—」『日本学報』32, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 123-129, 2013/3/18
- 山本潤子「コメント：歴史としての巡回展—絵画としての『原爆の図』—」『日本学報』32, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.23-27, 2013/3/18
- 〔博士後期〕
- 荒川裕紀「十日戎開門「神事」の創造—「門開け」から「神事」へ— 高度経済成長以降の日本文化のあり方に関する一考察」『北九州工業専門学校研究報告』第46号, pp. 57-66, 2013/1/31
- 柿田肇「春日野八千代の歩み 点景としての記憶を交えて」青弓社編集部編『追悼 春日野八千代 永遠の白バラのプリンスに捧ぐ』, 青弓社, pp. 59-78, 2012/12/1
- 柿田肇「報告：『阪大で原爆について語る会』」『日本学報』32, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.113-121, 2013/3/18
- 染川清美「あるディアスポラの知識人による台湾独立運動—張継昭(Andy Chang)と『台北俳句会』の事例をもとにして—」『Cultures/Critiques』4, 国際日本学研究会, pp.33-72, 2012/10/20
- 戸田弘子「〈生と死〉という視点」『人間性心理学ハンドブック』, 人間性心理学会, 創元社, pp.252-259, 2012/9/20

- 戸田游晏（弘子）「『社会貢献』と日本仏教—寺族：寺という「場所」に生きること—」『臨床心理学研究』50-1, 日本臨床心理学会, pp.63-79, 2012/9
- 戸田游晏（弘子）「モノたちとの共生と癒し・パネルの主旨とまとめ」『宗教研究』86-3, 日本宗教学会, pp.100-103, 2013/3/30
- 土井智義「米軍統治期の「琉球列島」における「外国人」（「非琉球人」）管理体制の側面—1952年7月実施の永住許可措置を中心として—」, 『沖縄県公文書館研究紀要』15, 沖縄県公文書館, pp.33-50, 2013/3/30
- 中西美穂「アルマ・キント」, 北原恵編『日本学叢書4 アジアの女性身体はいかに描かれたか 視覚表象と戦争の記憶』, 青弓社, pp.271-274, 2013/1/23
- パイエ由美子「合気道の源流をめぐる言説について」『Cultures/Critiques』4, 国際日本学研究会, pp.73-96, 2012/10/20
- フィリップ・モッタ「半田知雄著『移民の生活の歴史』の成立を巡る一考察」『日本学報』32, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.87-107, 2013/3/18
- 黛友明「神事芸能とその実践—伊勢大神楽講社加藤菊太夫組の事例から—」『待兼山論叢』46, 大阪大学大学院文学研究科, pp.45-64, 2012/12/25
- 林暁淳「台湾の家庭アルバムの様相に関する考察」『Cultures/Critiques』冬季臨時増刊号, 国際日本学研究会, pp.97-123, 2013/1/31
- 【2013年度】
- 〔博士前期〕
- 金ジュナ「1970年代沖縄における韓国人季節労働者の導入と生活—石川真生撮影の写真を手がかりに—」北原恵・科学研究費補助金基盤研究（B）報告書『「移動」から見た女性美術家と視覚表象の研究』, pp.69-87, 2014/3/31
- 金ジュナ「国境を超える女性たちの声を掘り起こす—「丹波マンガンとじん肺の記録」から学んだこと」勝村誠監修, 草地康子・李順連編著『丹波マンガン じん肺と鉱山労働者たちの軌跡』NPO 法人丹波マンガン記念館, pp. 32-34, 2014/3
- 湯天軼「そのたびごとに、始まりの地平—中国における日本サブカルチャー受容の現象学的研究序説—」『Cultures/Critiques』5, 国際日本学研究会, pp.3-37, 2013/12/28
- 西井麻里奈（樋口浩造と共著）「証言：日中戦下南京の日本軍慰安所—松下富貴楼・土地所有者の記憶 解説及び注記」『愛知県立大学日本文化学部論集（歴史文化学科編）』5, 愛知県立大学日本文化学部, pp.7-49, 2014/3
- ファクンド・ガラシーノ「他者表象における自己規定と暴力の所在—*Around the World with General Grant*における天皇表象から」『Cultures/Critiques』5, 国際日本学研究会, pp.88-106, 2013/12/28
- ファクンド・ガラシーノ「明治前期の他者認識を巡って: U. S. グラント一行訪問に錯綜する眼差しから」『日本学報』33, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.181-202, 2014/3/15
- 〔博士後期〕
- 荒川裕紀「昭和晩期以降における十日戎開門神事の変遷—新聞資料、インタビュー、参与観察を通じて—」『北九州工業専門学校研究報告』第47号, pp. 71-80, 2014/1/31
- 石山祥子「〈能を舞う農民〉の発見—黒川能をめぐる真壁仁の思想と実践」『Cultures/Critiques』5, 国際日本学研究会, pp.107-127, 2013/12/28
- 徐潤雅「抑圧される者を描くということ—1970~1980年代の『韓国』と富山妙子」北原恵・科学研究費補助金基盤研究（B）報告書『「移動」から見た女性美術家と視覚表象の研究』, pp.69-87, 2014/3/31
- 謝花直美「ペルリに重ねる『復興』と『親善』—占領下沖縄人の主体性を巡る政治—」『日本学報』33, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.181-202, 2014/3/15
- 鄭弁芸「重層する「外地」における妾—植民地・台湾の『陳夫人』—」『日本学報』33, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.31-52, 2014/3/15
- 富永悠介「宮城菊と鄭用錫の出会い—その経験のゆくえと基隆「水産」地域の暮らし」『日本学報』33, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.7-30, 2014/3/15
- 中西美穂「フェミ x アート アルマ・キントの〈参加型アート〉はコミュニティを力づける。」『女たちの 21 世紀』76,

特定非営利活動法人アジア女性資料センター, pp.74-76, 2013/12/25

中西美穂『「アジアをつなぐわたしたちがつなぐ ワークショップとフォーラム」レポート—アートの現場における『わたしたち』考察の手がかりとして—』北原恵・科学研究費補助金基盤研究(B)報告書『『移動』から見た女性美術家と視覚表象の研究』, pp.69-87, 2014/3/31

中山良子「不純異性交遊で補導される女学生の登場—『乙女の性典』と『少年の補導』」『Cultures/Critiques』5, 国際日本学研究会, pp.71-87, 2013/12/28

フィリップ・モッタ「半田知雄における移民のなやみ—ブラジル日系社会史の語りと移民の戦争経験を中心に—」『待兼山論叢』47, 大阪大学大学院文学研究科, pp.19-37, 2013/12/25

黛友明「芸能・共同体・関係性—伊勢大神楽の事例を通じて—」『日本学報』33, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.155-180, 2014/3/15

黛友明「伊賀見・門僕神社の獅子舞」「菅野・四社神社の獅子舞」『奈良県の民俗芸能』(奈良県教育委員会民俗芸能悉皆調査報告書), pp.766-783, pp.784-797, 2014/3

## (2)口頭発表

【2012年度】

〔博士前期〕

布山美慕「物語読書 読書の現象学—ヴォルフガング・イーザーから」国際日本学研究会第6回学術大会, 大阪大学, 2012/4/2

〔博士後期〕

荒川裕紀「発展途上国からみるキャリア教育と国際理解教育を結ぶ—考察—」JICA教師海外研修アドバンスコースから—」日本国際理解教育学会, 埼玉大学, 2012/7/15

荒川裕紀「ハワイにおけるボンダンスの現在—多文化共生社会ハワイ州マウイ島から見えてくるもの—」第一回東西大学校日本研究センター・国際日本学研究会合同学術大会, 東西大学校(韓国・釜山), 2012/9/14

荒川裕紀「Education for International Understanding in College of Technology」The International Symposium on Advances in Technology Education (ISATE2012), 北九州国際会議場, 2012/9/20

荒川裕紀「JICA高校生実体験プログラムに関する—考察— A Perspective from JICA's "Real Experience Program" for High School Students」韓国国際理解教育学会, 京仁教育大学校, 2012/11/10

柿田肇「戦後の思想としての青年会議所活動」同時代史学会, 千葉大学, 2013/2/8

徐潤雅「運動の場における美術作品—富山妙子の韓国関連作品とその批評をめぐる—」第一回東西大学校日本研究センター・国際日本学研究会合同学術大会, 東西大学校(韓国・釜山), 2012/9/14

中西美穂「Alma Quinto's HOUSE OF COMFORT ART PROJECT」, 第17回フィリピン研究全国フォーラム, 京都大学稲盛財団記念館, 2012/7/14

黛友明「演じられる「伊勢大神楽」—伊勢大神楽講社の活動から—」日本民俗学会, 成城大学, 2012/5/8

フィリップ・モッタ『『移民の生活の歴史』から見えてくるブラジル日系社会史—コロニア史をかたる半田知雄の歴史観』, 2012年度アジア・ディアスポラ研究会, 立命館大学, 2012/6/27

鎌倉祥太郎「日本の学生運動が出会ったアジア」, 第一回東西大学校日本研究センター・国際日本学研究会合同学術大会, 東西大学校(韓国・釜山), 2012/9/14

鎌倉祥太郎「高野実と民族言説—戦後総同盟を中心に—」日本思想史学会, 松山大学, 2012/10/28

張懐文「女性演劇としての歌仔戲の歴史」国際日本学研究会第6回学術大会, 大阪大学, 2012/4/2

鄭弁芸「重層する「外地」における妾」植民地主義研究会, 立命館大学, 2013/2/11

土井智義「米軍統治期の「琉球列島」における「国民」／「外国人」編制をめぐる一側面—第一次出入管理令(米国民政府令第93号)の成立までを中心として—」, 「米軍統治期沖縄をめぐる人種化、(脱)主体化、社会運動—横断的空間における権力と抵抗」研究会, 一橋大学, 2013/2/23

戸田弘子「心の近代 habitus 五元格子分析表—臨床場面で出会う「宗教性」解析のための五つの尺度—」日本心理臨床学会, 愛知学院大学, 2012/9/14

戸田弘子「生死に寄り添う臨床—3. 1 1 後の時代へ—」日本人間性心理学会, 宇部フロンティア大学, 2012/9/23

戸田游晏(弘子)「モノたちとの共生きと癒し—臨床と仏道の環境観—」日本宗教学会, 皇学館大学, 2012/9/9

戸田弘子「加持祈祷と精神療法—非・人間との互惠性に基づく治療—」日本仏教心理学会, 龍谷大学大宮キャンパス, 2012/12/8

平田祐子「秘書の歴史的考察—秘書的役割を担う支配脇—」日本国際秘書学会, 東京大学, 2012/11/17

【2013年度】

〔博士前期〕

猪岡叶英「大正区のウチナンチュにおける長寿祝いに関する一考察」京都民俗学会, 佛教大学, 2013/12/1

ファクンド・ガラシーノ「他者表象における自己規定と暴力の所在—*Around the World with General Grant*における天皇表象から」国際日本学研究会第7回学術大会, 大連民族学院, 2013/8/27

〔博士後期〕

荒川裕紀「福男競争から福男『選び』へ—兵庫県西宮神社における十日戎開門神事の現代的変遷」国際日本学研究会第7回学術大会, 大連民族学院, 2013/8/27

中西美穂「移住者による芸術事業運営—フィリピン・バギオのNGO コーディリエラ・グリーン・ネットワークの活動を中心に—」日本アートマネジメント学会第15回全国大会, 九州大学大橋キャンパス, 2013/12/8

中西美穂「自然災害にアートを通して関わること—フィリピンの美術家・アルマ・キントの活動事例から—」API フェローセミナー「フィリピン台風被災地と支援活動の現状・課題〜フィリピン台風被災地支援のために〜」京都大学東南アジア研究センター, 2014/3/2

黛友明「芸能習得の語りにおける過去と現在—伊勢大神楽の芸人に着目して」国際日本学研究会第7回学術大会, 大連民族学院, 2013/8/27

弓谷葵「〈共同体〉論としての和辻倫理学」日本思想史学会, 東北大学川内北キャンパス, 2013/10/19

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2013年度】

〔博士後期〕

川崎智子(アリソン・ルイス編, 川崎良孝・久野和子・福井佑介と共訳)「図書館と中立性」『京都図書館情報学研究会』2013/10/1

澤田正太郎「書評 子安宣邦『日本人は中国をどう語ってきたか』(青土社、2012年)」『Cultures/Critiques』5, 国際日本学研究会, pp.181-185, 2013/12/28

黛友明「書評 亀井好恵『女相撲民俗誌 越境する芸能』」民俗芸能学会編『民俗芸能研究』56, pp.91-96, 2014/3

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 RPD:0名 PD:0名 DC2:4名 DC1:0名 (計4名)

2013年度 RPD:0名 PD:0名 DC2:4名 DC1:0名 (計4名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部:1名 大学院:1名 (計2名)

2013年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

林葉子 博士後期課程修了, 大阪大学大学院文学研究科, 助教, 2013/4

永岡崇 博士後期課程修了, 南山大学宗教文化研究所, 研究員, 2013/4

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2012年度：1名 2013年度：0名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名  
その他 0名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2012年度：0名 2013年度：0名

## 9. 刊行物

2012年度 『日本学報』31,32, 『Cultures/Critiques』3,4, 冬季臨時増刊号

2013年度 『日本学報』33, 『Cultures/Critiques』5

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際日本学研究会・事務局

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

【2012年度】

1、日本学方法論の会 (担当 宇野田尚哉)

日付・場所 2012年11月10日 待兼山会館会議室

テーマ 被爆体験とその表象

報告者 岡村幸宣、イトウソノミ

コメンテーター 山本潤子(大阪大学大学院生)、西井麻里奈(大阪大学大学院生)

2、国際日本学研究会第6回学術大会 (担当 川村邦光)

日付・場所 2012年4月2日 待兼山会館会議室

3、第1回東西大学校日本研究センター・国際日本学研究会合同学術大会 (担当 川村邦光)

日付・場所 2012年9月14日 東西大学校 (韓国・釜山)

4、大阪大学・高麗大学 (韓国) 日本学国際研究交流 (担当 北原恵)

日付・場所 2013年1月11日 待兼山会館会議室

記念講演 「近代日本時事漫画でみる韓日関係史 (1876-1910)」

講師 韓程善 (高麗大学国際大学院准教授)

院生発表 チョン・ミンヒ (鄭溍睿、高麗大学国際大学院生)、イ・チホン (李志薫、高麗大学国際大学院生)、ノ・ダヨン (盧多英、高麗大学国際大学院生)、ソ・ユリ (徐有利、高麗大学国際大学院生)

コメンテーター：日本学講座の大学院生

【2013年度】

1、日本学方法論の会（担当 杉原達）

日付・場所 2013年7月3日 待兼山会館会議室

テーマ 越境と文化

報告者 富永悠介(大阪大学大学院生)、鄭卉芸(大阪大学大学院生)、上地美和

コメンテーター 廣岡浄進、林葉子、平田由美

2、日本学方法論の会（担当 宇野田尚哉）

日付・場所 2013年11月3日 奈良教育大学

テーマ グローバル冷戦と文化—広島／日本／東アジアから考える—

報告者 鳥羽耕史、川口隆行

コメンテーター 徐潤雅(大阪大学大学院生)、キアラ・コマストリ(大阪大学大学院生)

3、国際日本学研究会第7回学術大会（担当 川村邦光）

日付・場所 2013年8月27日 大連民族学院（中国・大連）

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 川村 邦光 教授

1950年生。1984年東北大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士(東北大学)。天理大学文学部助教授、同教授を経て、1997年10月現職。専攻:民俗学／宗教学／民衆思想史。

#### 1-1. 論文

---

川村邦光「災厄と弔いをめぐる断想」『治療の聲』17, 星和書店, pp. 13-20, 2012/10

川村邦光「四国遍路の途上にて」『日本オーラルヒストリー研究』(日本オーラルヒストリー学会), 8, pp. 17-30, 2012/9

#### 1-2. 著書

---

川村邦光(共著)『富士山の近代とディスコース』『現代思想』40-14, 青土社, pp. 64-76, 2013/10

川村邦光(共著)『鎮魂のゆくえ』岩波講座日本の思想 5巻, 岩波書店, pp. 265-292, 2013/9

川村邦光『弔い論』青弓社, 356p., 2013/2

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

#### 1-4. 口頭発表

---

なし

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2010年度～2012年度、基盤研究(C) 一般、代表者:川村邦光

課題番号:22520821

研究題目:東アジアにおける家族写真の歴史民俗学的研究

研究経費: 2012 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

日本・沖縄、また韓国や台湾、中国などの東アジアの家族写真を比較研究して、各地域の家族写真に現れた類似点や相違点を明らかにし、歴史的に家族写真がどのように作成され、どのような民俗的慣行として存続してきたのか、各地域の家族写真の独自性や共通性を探究し考察することが、本研究の目的である

#### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2. 杉原 達 教授

1953 年生。1975 年京都大学経済学部卒業。1977 年大阪市立大学大学院経済学研究科前期博士課程修了。博士(経済学)。1977-91 年、関西大学経済学部助手、専任講師、助教授、教授を経て、1992 年大阪大学文学部助教授、1997 年同教授、1998 年大阪大学大学院教授。専攻: 日本学/文化交流史。

#### 2-1. 論文

---

杉原達 「越境と文化」大阪大学大学院文学研究科日本学研究室(編)『日本学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), 33, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 1-6, 2014/3

#### 2-2. 著書

---

なし

#### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

杉原達 「書評: 徐勝『東アジアの国家暴力と人権・平和』かもがわ出版、2011 年」立命館大学法学会(編)『立命館法学』(立命館大学法学会), 13, 立命館大学法学会, pp. 636-640, 2012/8

杉原達 「戦争と人の移動」, 吉原和男, 蘭信三(共著)『人の移動事典』丸善出版, pp. 56-57, 2013/11

#### 2-4. 口頭発表

---

杉原達 「近現代大阪の中のアジア—朝鮮半島からの人の移動を中心に」立命館大阪プロムナードセミナー, 大阪大学 21 世紀懐徳堂・立命館大学文学部・立命館大阪オフィス, 立命館大阪キャンパス, 2012/12

杉原達 「越境と文化—問題提起」, 2013 年度・日本学方法論の会「越境と文化」, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, 大阪大学待兼山会館, 2013/7

#### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

#### 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---



なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 3 平田 由美 教授

1956年生。大阪外国語大学外国語学研究所修士課程日本語学専攻修了。博士(文学)(京都大学、2002)。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:日本文学・文化研究/ジェンダー研究。

### 3-1. 論文

---

平田由美 「越境の語りに耳を傾ける」『日本学報』33, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 83-90, 2014/3

平田由美 「“他者”の場所——「半チョッパリ」という移動経験」伊豫谷・平田編『「帰郷」の物語／「移動」の語り』平凡社, pp. 27-55, 2014/1

### 3-2. 著書

---

伊豫谷登士翁, 平田由美(共編著) 『「帰郷」の物語／「移動」の語り——戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』平凡社, 333p., 2014/1

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

平田由美(翻訳) テッサ・モーリス＝スズキ「越境する記憶——映画・植民地主義・冷戦」『「帰郷」の物語／「移動」の語り』平凡社, pp. 267-291, 2014/1

### 3-4. 口頭発表

---

平田由美 (招待講演)「メディア・民族・ジェンダー:東アジアの《近代》と女性表象」日本研究人文講座, ソウル大学校人文大学, 2014/3

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

平田由美 第15回女性史青山なを賞, 東京女子大学女性学研究所, 2000/11

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2013年度～2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者:平田由美

課題番号:25370414

研究題目:移動する作家たちの東アジア:交渉の場としての文学運動

研究経費:2013年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

本研究は、20世紀東アジアにおける文化活動を領土越境的な相互行為として調査分析し、国家や民族といった集团的帰属関係とは異なった、多様な社会関係から生まれる文学の可能性を開示することを目的とする。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 4. 北原 恵 教授

1956年生。大阪大学経済学部卒業。同志社大学大学院文学研究科(美學及び芸術學)修了、東京大学大学院総合文化研究科博士課程(表象文化論)満期退学、学術博士(東京大学)。2001年甲南大学文学部助教授、2004年同教授、2008年大阪大学准教授、2012年同教授。専攻:表象文化論/ジェンダー研究。

### 4-1. 論文

---

北原恵 「戦後天皇「ご一家」像の創出と公私の再編」大阪大学文学研究科『大阪大学文学研究科紀要』54巻, 大阪大学文学研究科, pp. 25-83, 2014/3

北原恵 「「慰問」する天皇とジェンダー :一近代天皇制と病院慰問の歴史」インパクト出版会『インパクション』193号, インパクト出版会, pp. 110-117, 2014/1

北原恵 「作者不詳の戦争画——戦時下南京を描いた絵を追って」インパクト出版会『インパクション』192号, インパクト出版会, pp. 76-85, 2013/11

北原恵 「アジアをつなぐ一境界を生きる女たち 1984-2012 展」リア制作室『REAR』30号, リア制作室, pp. 150-154, 2013/8

北原恵 「不確かな立ち位置の集合体——阪田清子のアート」インパクト出版会『インパクション』190号, インパクト出版会, pp. 140-154, 2013/6

北原恵 「『美』の実践的見直し 学芸員の仕事とジェンダー 『アジアをつなぐ一境界を生きる女たち』展企画者、小勝禮子さんに聞く」『インパクション』188, インパクト出版会, pp. 144-157, 2013/1

北原恵 「『女性』がつなぐ、アジア・美術・周縁の人々『アジアをつなぐ一境界を生きる女たち』展企画者、小勝禮子さんに聞く」『インパクション』187, インパクト出版会, pp. 162-175, 2012/10

北原恵 「ハルモニ達とともに、日本大使館を見つめ続ける——ソウル「平和の碑」慰安婦像の制作者に聞く」『インパクション』185, インパクト出版会, pp. 162-173, 2012/6

### 4-2. 著書

---

北原恵, 徐潤雅, 金ジュナ他(監修) 『「移動」から見た女性美術家と視覚表象の研究』科研基盤(B)「「移動」から見た女性美術家と視覚表象の研究」, pp. 1-10, 34-39, 117-126, (一部英語), 2014/3

北原恵 『アジアの女性身体はいかに描かれたか 視覚表象と戦争の記憶』青弓社, 304p., 2013/1

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 4-4. 口頭発表

---

北原恵 (招待講演)「脱軍事化した天皇身体と慰問するジェンダー——敗戦・被災の「危機」のなかで」ジェンダー史学会設立10周年記念大会記念シンポジウム:軍事化とジェンダー, ジェンダー史学会, 一橋大学, 2013/12

北原恵 「「アジアをつなぐ展」の特徴と意義」シンポジウム「アジアの女性アートを考える」, 栃木県立美術館, 栃木県立美術館, 2013/2

北原恵 「一枚の絵との出会い——長谷川春子作、ハノイ風景、1939年」シンポジウム「発掘、戦時下に描かれた絵画」, 丸木美術館, 丸木美術館, 2012/9

北原恵 「長谷川春子と戦争——従軍女性画家は何を描いたのか?」女性史総合研究会7月例会, 女性史総合研究会, 京都市

男女共同参画センター・ウィングス京都, 2012/7

北原恵 「「移動」から見る女性美術家」アジア・表象・移動共同研究会, 共催: 科研「「移動」から見る女性美術家」(代表・北原恵)  
& ANU College of Asia and the Pacific, オーストラリア国立大学, 2012/7

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

4-6-1. 2011年度～2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者:北原恵

課題番号:23310191

研究題目:「移動」から見た女性美術家と視覚表象の研究

研究経費: 2012年度 直接経費 4,500,000円 間接経費 1,350,000円

2013年度 直接経費 4,500,000円 間接経費 1,350,000円

研究の目的:

美術(史)研究で周縁化されてきた女性アーティストに焦点を絞り、ジェンダーと「移動」の視点から、戦時中の女性画家の移動や、移民として国外に出た女性美術家について調査研究を行うものである。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

イメージ&ジェンダー研究会・事務局, 2008年4月～現在に至る

### 5. 宇野田 尚哉 准教授

1967年生。1993年大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了、96年同後期課程単位修得退学。博士(文学)。2000年神戸大学国際文化学部講師、01年同助教授、07年同大学院国際文化学研究科准教授。2010年より現職。専攻:日本思想史。

#### 5-1. 論文

---

宇野田尚哉 「趣旨説明」大阪大学大学院文学研究科日本学研究室『日本学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), 33, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 91-95, 2014/3

宇野田尚哉 「研究会を終えて」大阪大学大学院文学研究科日本学研究室『日本学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), 33, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 153-154, 2014/3

宇野田尚哉 「書評根津朝彦著『中央公論』と「風流夢譚」事件:「論壇」・編集者の思想史」日本思想史学会『日本思想史学』(日本思想史学会), 45, 日本思想史学会, pp. 250-255, 2013/10

宇野田尚哉 「趣旨説明」大阪大学大学院文学研究科日本学研究室『日本学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), 32, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 1-4, 2013/3

宇野田尚哉 「研究会を終えて」大阪大学大学院文学研究科日本学研究室『日本学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), 32, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 61-65, 2013/3

中村泰, 宇野田尚哉(共著) 「紫色の砂漠」はレトリックではなかった」原爆文学研究会(共著)『原爆文学研究』(原爆文学研究会), 11, 原爆文学研究会, pp. 137-140, 2012/12

#### 5-2. 著書

---

なし

### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 5-4. 口頭発表

---

なし

### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 5-8. 外部役員等の引き受け状況

---

松江市史専門部会近世史部会・専門委員, 2010年6月～現在に至る

## 6. 林 葉子 助教

1973年生。2008年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。大阪大学大学院文学研究科日本学研究室教務補佐員を経て、2013年4月より現職。専攻:ジェンダー史、キリスト教交流史

### 6-1. 論文

---

林葉子 「(帝国＝家庭)の「外」に人の暮らしを見いだすということ(特集「越境と文化」)』『日本学報』33, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 79-82, 2014/3

林葉子 「研究会参加記2:ジェンダー研究の視点から(特集「グローバル冷戦と文化—広島／日本／東アジアから考える—)」』『日本学報』33, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 151-152, 2014/3

林葉子 「廃娼運動の日英関係史についての基礎的研究—イギリスのWCTUおよび救世軍の廃娼運動関連の史料調査を中心に」『多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム 派遣成果最終報告書(平成21年度～平成24年度)』大阪大学大学院文学研究科, pp. 201-202, 2013/3

### 6-2. 著書

---

なし

### 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

林葉子(書評)「山崎明子／黒田加奈子／池川玲子／新保淳乃／千葉慶『ひとはなぜ乳房を求めるのか—危機の時代のジェンダー表象』』『文化／批評 cultures/critiques』(国際日本学研究会), 4, 国際日本学研究会, pp. 159-165, 2012/10

### 6-4. 口頭発表

---

Hayashi, Yoko, "The Influence of British Movement against Licensed Prostitution upon Japanese Society in the Meiji Era

(1868-1912)", International Conference 'Women's Histories: the Local and the Global', International Federation for Research in Women's History & Women's History Network, Sheffield Hallam University, UK, 2013/8

#### 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

6-6-1. 2013年度～2014年度、研究活動スタート支援、代表者:林葉子

課題番号:25883005

研究題目:国境を越える性の売買と国際的廃娼運動-日英帝国関係史を中心に

研究経費:2013年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

帝国日本における買売春の法的規制をめぐる思想の形成過程を、イギリス帝国の廃娼運動との関係に着目して歴史的に検証する。廃娼運動が理念的な問題にとどまらず、国境を越えて性の売買を行う人々の移動の主要な原因となっていたことに着目し、廃娼運動の国際的ネットワークの形成が買売春の法的規制にかかわる政策に及ぼした影響力についての世界史的・総体的把握をめざす。

#### 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-7 日本史学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 4 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：平 雅行、村田 路人、飯塚 一幸、川合 康

准教授：市 大樹

助教：北泊謙太郎

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
54	16	14	0	2	6	1	2

※うち留学生 5 名、社会人学生 3 名

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	11	4	6	1
2013	19	5	3	2
計	30	9	9	3

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

大学院においては、①授業としての修士・博士論文作成演習に加え、学会報告や投稿論文作成のための個別指導をすること、②講義・演習によって史料の分析能力を養うとともに、史料調査等を積極的に実施することによって、史料の調査・収集・整理・分析能力を育成すること、③フィールドワーク・研究室旅行の実施、自治体史編纂事業への協力を通じて、実践的な史料調査能力の養成を期すこと、④個別指導をおこなって留学生の研究能力の養成につとめること、などを目標とした。学部においては、①講義・演習を通して、論文・史料の読解能力の養成をはかるとともに、課題追究能力を涵養すること、②卒業論文では、史料および先行研究等の情報収集とその整理、的確な課題設定と論理の展開能力を実践的に鍛えること、③フィールドワーク・研究室旅行の実施、自治体史編纂事業への協力を通じて、実践的な史料調査能力の養成を期すこと、などを目標とした。

## 2. 研究

- ①上記の教育活動と連動させながら、個々人の研究能力を高めることに加えて、②学会活動にも積極的に参加すること、③国内外の共同研究を推進すること、などを目標とした。

## 3. 社会連携

- ①歴史学が抱える諸問題、歴史学に期待される諸課題（文化遺産保存問題、教科書・教育問題など）に的確に応じる努力をすること、②自治体史や教科書の編纂等に協力すること、などを目標に掲げた。

# Ⅲ. 活動の概要(2012年度～2013年度)

## 1. 教育

- (1) 各時代（古代・中世・近世・近代）で開講されている講義によって、日本史研究の基礎的知識の伝授に努めた。また卒論演習・大学院演習・修士論文作成演習・博士論文作成演習などの場におけるきめ細かな指導により、論文作成能力の向上を図った。7月に院生報告会、10月に卒論・修論発表会を開催し、4年生・院生が日本史研究室構成員全員の前で研究発表をする機会を設けた。また、歴史学方法論講義において、日本史・西洋史・東洋史などの枠を超えて最新の歴史学の方法論に触れる機会を設け、歴史教育論演習では高校の現職教員とともに歴史教育のあり方を探求した。さらに、藤井譲治氏・今西一氏という学界の第一人者に、その研究成果を学生・院生に講演していただく場を設けた。
- (2) 各時代で開講されている史料講読演習によって、史料解釈能力や古文書解読能力の育成に努めた。また多数開講した演習を通じて、先行研究への批判的態度や史資料を徹底して収集する姿勢を培うとともに、プレゼンテーション能力を養った。
- (3) 春の新入生歓迎小旅行、秋の研究室旅行、近世古文書演習における古文書調査合宿を通じて、フィールドワークの方法や、実践的な古文書の整理作業能力を取得させた。また自治体史編纂事業への協力を通じて、現地調査・史料整理の実践的能力を養成した。
- (4) 増加しつつある留学生の研究能力のレベルアップに努めた。

## 2. 研究

- (1) 日本史学専門分野の構成員は、それぞれの分野で各自の研究を進めるかわら、『岩波講座 日本歴史』（岩波書店）『講座明治維新』（有志舎）をはじめとする講座・通史の編集・執筆や、『大系真宗史料』（法蔵館）、『寺院法』（集英社）、『吉田清成関係文書』（思文閣出版）、『杉田定一関係文書史料集』（大阪経済大学日本経済史研究所）といった史料集の編纂など、学界の共有財産の蓄積や基礎的研究の充実のための諸活動に、積極的に参画した。また、多くが高校日本史の教科書を執筆し、歴史教育にも寄与した。さらに、本専門分野が所蔵または保管している旧摂津国住吉郡平野郷町含翠堂（土橋家）文書、旧摂津国鳴下郡沢良宜浜村高島家文書、旧摂津国住吉郡北田辺村三枚家文書、旧摂津国住吉郡猿山新田奥田家文書の整理・研究をおこなった。具体的には、古文書演習や講義と有機的に関連させつつ、これら古文書の目録作成や内容分析を進めるとともに、兩年ともその成果の一端を、大学行事である「いちょう祭」において披露した。同じく本専門分野が所蔵している会沢正志斎書簡について、科研に応募したところ採択され（「会沢正志斎書簡の研究」、代表飯塚一幸）、史料集刊行に向けて大学院演習の中で解説・校正作業を行った。
- (2) 学会活動については、日本史研究会、大阪歴史学会、大阪歴史科学協議会、史学研究会、史学会、仏教史学会、続日本紀研究会、メトロポリタン史学会、条里制・古代都市研究会などの学会・研究会の委員等を担うなど、学会運営に積極的に関わり、日本史学界の研究の推進に大きく寄与している。上記のうち、大阪歴史学会の事務局（2012年6月～）および大阪歴史科学協議会の編集事務局（2008年6月～現在）を本専門分野で引き受けた。
- (3) 国際的な研究活動としては、武田佐知子教授が、香港大学金鐘海センターにて、「講演および対論 文化を着る一衣

服をめぐる日本と中国の交流史」に参加し、服飾史研究家の李美賢氏との対論をおこなった。

- (4) つぎに国内での学際的な共同研究は、以下のとおりである。平雅行教授は「根来寺史の総合的研究に基づく中世後期寺院社会像の再構築」(代表山岸常人)に参加したほか、研究集会「戦後歴史学と日本仏教」(代表オリオン・クラウタウ)で「井上光貞一落伍した名門子弟と中下級貴族」と題し報告を行った。飯塚一幸教授は、大阪大学歴史教育研究会(代表堤一昭)、軍港都市史研究会(代表上山和雄)、吉田清成関係文書研究会(代表山本四郎)、「第一次世界大戦後の世界秩序の変容と日本」(科研、京都大学、代表伊藤之雄)に参加した。川合康教授は、「板碑造立の視点」(府中市郷土の森博物館、代表深澤靖幸)に参加したほか、「文化現象としての源平盛衰記」(科研、國學院大學、代表松尾葦江)で「源平」の京武者と治承・寿永の内乱」と題し報告を行った。市大樹准教授は「古代における文字文化の形成過程の基礎的研究」(国立歴史民俗博物館、代表平川南)、「東アジア木簡学の確立」(科研、奈良大学、代表角谷常子)、「東アジアにおける日本墨書土器データベースの構築」(科研、明治大学、代表吉村武彦)、「古代寺院の儀礼・経営に関する分野横断的比較研究」(科研、京都府立大学、代表菱田哲朗)、「5～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究」(科研、大阪大学、代表藤岡穰)、「日本古代宮都周辺地域における分野横断的比較研究」(科研、大阪大学、代表高橋照彦)、「最新の研究成果にもとづく大学教養課程世界史教科書の作成」(科研、大阪大学、代表桃木至朗)などに参加した。

### 3. 社会連携

- (1) 文化遺産保存問題や博物館問題など、歴史学が直面する諸問題に、誠実に取り組んだ。また、講演活動を通じて、研究成果を社会に還元する活動に精力的に取り組んだ。このほか、町おこしグループと連携して、堺市中区兒山家文書などの歴史資料を調査・整理したり、『日本書紀』を読む会のボランティア講師などもおこなっている。
- (2) 『三重県史』『大阪狭山市史』『摂津市史』『茨木市史』『枚方市史』『八尾市史』『三田市史』『福岡市史』などの自治体史編纂事業に協力し、地域社会に新しい歴史像を提示しつつある。
- (3) 旧摂津国住吉郡北田辺村三枚家文書および旧摂津国住吉郡猿山新田奥田家文書を日本史研究室として整理・研究するとともに、北田辺地域において「古文書を読む会」を開くなど、その成果を地域住民と共有する取り組みを行った。

## IV. 自己点検・自己評価(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

日本史学専門分野のスタッフは、古代から近代まで日本史の全時代をカバーしており、学生・院生に対して、行き届いた教育をおこなうことができた。従来確保されていた非常勤講師の割り当てがなくなってしまうが、講座運営費で2 Semester分を確保することによって、これまでの体制を維持した。また西洋史・東洋史の教員や高等学校の現職教員と連携して、幅広く歴史教育のあり方を考える機会を設けた。こうした正規の授業以外にも、院生報告会、卒論・修論発表会を実施したほか、第一線の研究者をお招きして最新の研究成果に触れる機会を設けた。これらの教育活動に力を入れた結果、卒業論文・修士論文いずれにおいても、個人差はあるものの比較的水準の高い成果をあげることができ、また課程博士取得者を送り出すことができた。このほか、現地調査や古文書の整理・調査などにも力を入れ、実践的な能力を育成することができた。本研究室の卒業生・修了生は、博物館・資料館の学芸員、自治体史の調査員などの仕事に従事する者が少なくなく、即戦力として通用する能力は各方面から高く評価されている。以上の点を総合的に判断して、所期の目標は達成できたと考える。

### 2. 研究

科学研究費などの外部資金を獲得して個人研究を進めるかわら、学会共有財産の蓄積に関わる仕事や、国内外の学際的な共同研究に積極的に参画することによって、それぞれの分野で着実な成果をあげることができた。また上記の教育活動と連動させながら、日本史学専門分野が保管している古文書の研究を進め、基礎的な研究成果をあげることができた。また本専門分野の構成員は、教員はもちろんのこと、院生も学会の委員として積極的に参加することによって、日本にお



ける学術・研究活動の推進に大きく寄与することができた。日本学術振興会研究員の採択率を上げることなどの課題は残ったものの、以上の点を総合的に判断して、全体的な目標はほぼ達成されたと考える。

### 3. 社会連携

上記のような学会活動などに参加することによって、歴史学が直面する諸問題に誠実に取り組み、日本史研究者としての責務を果たすことができた。また研究成果を学会内部に留めるのではなく、講演や執筆活動を通じて市民に広く発信することができた。さらに歴史資料の調査・整理をおこなうにあたり、町おこしグループと連携することによって、研究成果を共有することに一定の成果をあげることができた。また教員や多くの院生が自治体史の編纂事業に協力し、新たな地域社会像の構築に向けて努力した。これらの活動を総合的に判断して、社会連携の目標についても十分に達成されたと考える。

## V. 基本情報(2012年度～2013年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	1	0	1
2013	2	0	2
計	3	0	3

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

- 芳澤 元 「室町時代の禅宗と文化受容」 2013/3  
 主査：平 雅行 副査：川合 康、村田路人
- 久保田裕次 「近代日本における対中国借款の研究」 2014/3  
 主査：飯塚一幸 副査：村田路人、川合 康
- 中村 翼 「東アジア海域交流と鎌倉幕府」 2014/3  
 主査：平 雅行 副査：川合 康、市 大樹

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	6(6)	2(0)	0(0)	0(0)	1(0)	9(6)
2013	10(10)	1(0)	0(0)	0(0)	9(0)	20(10)
計	16(16)	3(0)	0(0)	0(0)	10(0)	29(16)

括弧内は査読付き論文数。

#### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	2	28	17	11	0	58
2013	0	35	20	10	0	65
計	2	63	37	21	0	123

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (1)論文

##### 【2012年度】

##### 〔博士前期〕

内田敦士「景雲一切経の写経・勘経事業と称徳・道鏡政権」『続日本紀研究』※399, 続日本紀研究会, pp.1-18, 2012/8

内田敦士「南京三会の成立」明治大学大学院文学研究科編『2012年度明治大学大学院学内 GP 〈他大学大学院との研究交流プログラム〉明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』, 明治大学大学院文学研究科, pp.142-150, 2013/3

##### 〔博士後期〕

久野 洋「小西新右衛門家の近代—新出史料を用いて—」『地域研究いたみ』42, 伊丹市立博物館, pp.69-85, 2013/3

前田英之「平家領の形成と領有構造」『史学雑誌』※121-8, 史学会, pp.35-59, 2012/8

正岡義朗「豊臣期「取次」論の現状と課題」『史敏』※通巻10(村田修三先生古稀記念号(3)), 史敏刊行会, pp.96-106, 2012/6

森脇崇文「豊臣期宇喜多氏の構造的特質」『待兼山論叢〈史学篇〉』46, 大阪大学文学会, pp.27-52, 2012/12

柳沢菜々「律令国家の山野支配と家産—「林」をてがかりとして—」『ヒストリア』※235, 大阪歴史学会, pp.66-84, 2012/12

柳沢菜々「園池司の職掌と内膳司への併合」『日本歴史』※775, 日本歴史学会, pp.1-14, 2012/12

芳澤 元「室町期禅宗の習俗化と武家社会」『ヒストリア』※235, 大阪歴史学会, pp.87-111, 2012/12

##### 【2013年度】

##### 〔博士前期〕

今井貴之「2013年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(1)「外交における「翻訳」—日本史を世界史から見直す—」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ10』, 大阪大学歴史教育研究会, pp.5-20, 2014/3

※清水香穂氏・福村一弥氏・岡田陽平氏・西山真吾氏との共著

今井貴之「律令制下の天皇改葬」明治大学大学院文学研究科編『2013年度大学院学内 GP 〈他大学大学院との研究交流プログラム〉明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』, 明治大学大学院文学研究科, pp.81-86, 2014/3

蒲谷和敏「2013年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(2)「「国語」形成の比較史—スペインと中国を事例に—」, 『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ10』, 大阪大学歴史教育研究会, pp.21-45, 2014/3

※郭溟寧氏・高岡萌氏・松村悠也氏・山田耕一郎氏との共著

川口敬義「2013年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(3)「地名の変遷に見る文字・言語—本質論を超えて—」, 『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ10』, 大阪大学歴史教育研究会, pp.46-68, 2014/3

※永山愛氏・遠藤総史氏・村上広大氏・渋谷武弘氏との共著

清水香穂「2013年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(1)「外交における「翻訳」—日本史を世界史から見直す—」, 『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ10』, 大阪大学歴史教育研究会, pp.5-20, 2014/3

※今井貴之氏・福村一弥氏・岡田陽平氏・西山真吾氏との共著

高岡 萌「2013年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(2)「「国語」形成の比較史—スペインと中国を事例に—」, 『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ10』, 大阪大学歴史教育研究会, pp.21-45, 2014/3

※郭溟寧氏・蒲谷和敏氏・松村悠也氏・山田耕一郎氏との共著

- 永山 愛「2013年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(3)「地名の変遷に見る文字・言語—本質論を超えて—」  
『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ10』,大阪大学歴史教育研究会, pp.46-68, 2014/3  
※川口敬義氏・遠藤総史氏・村上広大氏・渋谷武弘氏との共著
- 福村一弥「2013年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(1)「外交における「翻訳」—日本史を世界史から見直す—」  
『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ10』,大阪大学歴史教育研究会, pp.5-20, 2014/3  
※今井貴之氏・清水香穂氏・岡田陽平氏・西山真吾氏との共著  
〔博士後期〕
- 加藤伸行「明治中期における蚕糸業規制の導入と関西蚕糸業」『社会経済史学』※79-1, 社会経済史学会, pp. 85-99, 2013/5  
加藤伸行「明治中期西日本地域における養蚕伝習所の活動と養蚕技術」『歴史と経済』※221(通巻56-1), 政治経済学・  
経済史学会, pp.32-40, 2013/10
- 島津 毅「中世の葬送と遺体移送—「平生之儀」を中心として—」『史学雑誌』※122-6, 史学会, pp.1-33, 2013/6  
島津 毅「中世における葬送の時刻—「夜の葬送」とその変化—」『ヒストリア』※242, 大阪歴史学会, pp.1-29, 2014/2  
島津 毅「平安時代における葬送とその変化—中国および儒教思想との関係を通して—」明治大学大学院文学研究科編  
『2013年度大学院学内GP(他大学大学院との研究交流プログラム)明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学  
との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』,明治大学大学院文学研究科, pp.87-90, 2014/3
- 長谷川裕峰「中世山門研究における本末関係論の意義—「宗派史観」の再評価を目指して—」『新しい歴史学のために』※  
282, 京都民科歴史部会, pp.80-90, 2013/5
- 東野将伸「近世後期の寺院頼母子と檀家—備中国後月郡の寺院を題材に—」『岡山地方史研究』※131, 岡山地方史研究会,  
pp.28-53, 2013/12
- 久野 洋「明治期における苗木業の展開と園芸農家久保武兵衛—農商務技師との関わりを中心に—」,『地域研究いたみ』  
43, pp.64-88, 2014/3
- 平井 誠「明治前期における萩城址の跡地利用—士族層の動向を中心として—」『ヒストリア』※242, 大阪歴史学会,  
pp.30-55, 2014/2
- 前田英之「平家政権の成立と宇佐宮領」『鎌倉遺文研究』※32, 鎌倉遺文研究会, pp. 28-49, 2013/10  
前田英之「国家的収取における本所沙汰と平家政権」『ヒストリア』※241, 大阪歴史学会, pp. 64-92, 2013/12
- 李 宣玕「明治前期の地域社会と小学校—大阪府島下郡を事例として—」『史敏』※通巻11, (2013夏号), 史敏刊行会,  
pp.110-124, 2013/7

## (2) 口頭発表

### 【2012年度】

〔学部生〕

- 今井貴之「日唐喪葬令の比較研究」大阪大学考古学・古代史合同研究会(歴史媒体の差異をめぐる史論会),大阪大学考  
古学・古代史合同研究会,大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2012/11/14
- 釜谷周子「律令制下の産業と流通」大阪大学考古学・古代史合同研究会(歴史媒体の差異をめぐる史論会),大阪大学考  
古学・古代史合同研究会,大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2012/7/9
- 田中 光「三重県における地方改良運動—林野整理事業の検討を中心に—」第8回地域史卒論報告会,歴史資料ネットワ  
ーク・神戸史学会,兵庫勤労市民センター/兵庫県神戸市, 2013/3/9  
〔博士前期〕
- 糸川風太「近世紀州藩領内における浦々伝達形態の一考察—浦触を中心として—(卒論報告会)」大阪歴史学会近世史部  
会,大阪歴史学会,キャンパスポート大阪/大阪府大阪市, 2012/4/28
- 糸川風太「近世紀州藩領内における浦々伝達形態の一考察—浦触を中心として—」大阪歴史科学協議会若手研究者問題関  
心報告,大阪歴史科学協議会,キャンパスポート大阪/大阪府大阪市, 2012/9/8

- 内田敦士「国家統合論理としての仏教と神祇祭祀」大阪大学考古学・古代史合同研究会（歴史媒体の差異をめぐる史論会），大阪大学考古学・古代史合同研究会，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2012/5/14
- 内田敦士「出雲地域の宗教と社会」日本古代文物を対象とした日本史学・美術史学・考古学の領域横断的研究，日本古代文物を対象とした日本史学・美術史学・考古学の領域横断的研究，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2012/9/26
- 内田敦士「南京三会の成立」明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム，明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2013/1/14
- 内田敦士「南京三会の成立」古代の文字と文物の研究会，古代の文字と文物の研究会，愛知大学／愛知県豊橋市，2013/3/16
- 尾崎真理「畿内における備荒貯蓄制度の実態と特質—摂津国八部郡花熊村を中心に—（卒論報告会）」大阪歴史学会近世史部会，大阪歴史学会，キャンパスポート大阪／大阪府大阪市，2012/4/28
- 尾崎真理「畿内における備荒貯蓄制度の実態と特質—摂津国八部郡花熊村を中心に—」大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告，大阪歴史科学協議会，キャンパスポート大阪／大阪府大阪市，2012/9/8
- 國土仁風「空海の山林観と社会認識」続日本紀研究会，続日本紀研究会，アウィーナ大阪／大阪府大阪市，2012/7/20
- 福島彰人「戦間期日本における警察制度改革論—警察権委譲問題を中心に—（卒論報告会）」日本史研究会近現代史部会・大阪歴史学会近代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会，日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会，日本史研究会事務所会議室／京都府京都市，2012/8/18
- 福島彰人「戦間期日本における警察制度改革論—警察権委譲問題を中心に—」大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告，大阪歴史科学協議会，キャンパスポート大阪／大阪府大阪市，2012/9/8
- 〔博士後期〕
- 久保田裕次「第一次世界大戦期における対中国借款と日中関係—西原借款を中心に—」多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム（OVCプログラム）平成24年度「横断的研究視察」「個人リサーチ報告会」，多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム（OVCプログラム），大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2012/11/2 ※多賀良寛・藤本真名美・田由甲・久野洋・佐藤由隆氏とで、中央研究院等（台湾）の横断的研究視察の共同研究報告
- 島津 毅「中世葬送の担い手とその変化—僧俗分業体制と死穢深化説の再考—」日本史研究会中世史部会，日本史研究会，日本史研究会事務所会議室／京都府京都市，2012/11/27
- 島津 毅「論評：三枝暁子『比叡山と室町幕府—寺社と武家の京都支配—』第三部「本末関係と中世身分制」」大阪歴史科学協議会前近代史部会，大阪歴史科学協議会，キャンパスポート大阪／大阪府大阪市，2012/12/6
- NAKAMURA, Tsubasa 「The development of Song-Japan trade and the Buddhist network in maritime Asia」第2回アジア世界史学会（AAWH），アジア世界史学会，梨花女子大学／大韓民国ソウル特別市，2012/4/28
- 中村 翼「鎌倉時代の宗像社と幕府勢力」日本史史料研究会，日本史史料研究会，日本史史料研究会石神井公園研究センター／東京都練馬区，2012/9/1
- 中村 翼「退耕行勇と鎌倉幕府」史学会2012年度大会，史学会，東京大学／東京都文京区，2012/11/11
- 中村 翼「宗像氏業考—鎌倉中期における筑前国宗像社の再編—」鎌倉時代研究会，鎌倉時代研究会，京都大学／京都府左京区，2012/11/26
- 中村 翼「日宋貿易における古代と中世—渡邊誠『平安時代貿易管理制度史の研究』の書評として—」続日本紀研究会，続日本紀研究会，アウィーナ大阪／大阪府大阪市，2012/12/14
- 中村 翼「日元交流史研究の視角（第1回大会準備報告）」大阪歴史学会中世史部会，大阪歴史学会，キャンパスポート大阪／大阪府大阪市，2013/2/8
- 中村 翼「日元貿易と禅文化—モンゴルの衝撃をめぐる—」平成21～25年度科学研究費助成事業・基盤研究（S）「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」第2回若手研究者交流会，平成21～25年度科学研究費助成事業・基盤研究（S）「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」第2回若手研究者交流会，大阪大学／大阪府豊中市，2013/2/11

- 中村 翼「南宋～元代の浙江地域を中心とする日中仏教界の人的交流からみた日本禅宗形成過程の再検討」多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム (OVC プログラム) 平成 24 年度「共同プロジェクト」「個人リサーチ」報告会, 多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム (OVC プログラム), 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2013/3/6
- 中村博司「戦国合戦図屏風を読む (第 1 回)」NHK 講座, NHK 講座, NHK 梅田文化センター/大阪府大阪市, 2012/4/19
- 中村博司「戦国合戦図屏風を読む (第 2 回)」NHK 講座, NHK 講座, NHK 梅田文化センター/大阪府大阪市, 2012/5/17
- 中村博司「戦国合戦図屏風を読む (第 3 回)」NHK 講座, NHK 講座, NHK 梅田文化センター/大阪府大阪市, 2012/6/21
- 中村博司「報告: 古活字本「天正記」第 5 (I オ～II オ)」天正記を読む会例会, 天正記を読む会, 龍谷大学図書館/京都府京都市, 2012/7/17
- 中村博司「豊臣期大坂城の本丸石垣について—「中井家本丸図」再考—, 日本古城友の会例会, 日本古城友の会, 大阪府中央区民センター/大阪府大阪市, 2012/8/5
- 中村博司「太閤記のさまざま—実録から伝説へ—」特別展「演じられた戦国—絵本太功記の世界—」記念講演, 特別展「演じられた戦国—絵本太功記の世界—」記念講演, 長浜曳山博物館/滋賀県長浜市, 2012/10/13
- 中村博司「秀吉の大坂築城と平野」平野区誌連続講座, 平野区誌連続講座, 平野区民センター/大阪府大阪市, 2012/10/21
- 中村博司「「石切」の技術と系譜—中世から近世へ—」小豆島 石の文化シンポジウム, 小豆島 石の文化シンポジウム, 旧福田小学校体育館/香川県小豆郡小豆島町, 2012/11/18
- 中村博司「「大坂の陣」を考える」歴史探訪シンポジウム「大坂冬の陣・夏の陣」, 柏原の郷土史を語る会, リビエールホール/大阪府柏原市, 2013/2/23
- 中村博司「報告: 古活字本「天正記」第 6 (30 ウ～31 ウ)」天正記を読む会例会, 天正記を読む会, 龍谷大学図書館/京都府京都市, 2013/3/20
- 中村博司「大坂城の石垣から見た聚楽第の石垣」《聚楽城 (聚楽第) はなぜ大事か》を考える市民講演会, 西陣歴史の町協議会・京都歴史地理同考会, 聚楽会館/京都府京都市, 2013/3/30
- 東野将伸「幕末維新期の地域金融構造と領主権力—備中一橋領を題材に—」日本史研究会近世史部会・大阪歴史学会近世史部会合同修論報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2012/7/20
- 東野将伸「豪農金融と地域社会—摂津国島下郡沢良宜濱村高島家を中心に—」大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, 福島区民センター/大阪府大阪市, 2012/7/21
- 東野将伸「19 世紀の豪農・名望家の経営・政治動向と金融ネットワーク—備中国後月郡築瀬村本山成家を中心に—」大阪歴史科学協議会前近代史部会・帝国主義研究部会合同部会, 大阪歴史科学協議会, 浪速区民センター/大阪府大阪市, 2012/10/4
- 東野将伸「幕末維新期の豪農金融と地域金融組織—備中一橋領を題材に—」近世史フォーラム 11 月例会, 近世史フォーラム, 学習院大学/東京都豊島区, 2012/11/17
- 東野将伸「近世後期の頼母子講運営と豪農・豪農商—備中国後月郡・小田郡を題材に—」岡山地方史研究会 2 月例会, 岡山地方史研究会, 岡山大学/岡山県岡山市, 2013/2/9
- 東野将伸「幕末維新期の畿内社会と権力—上田長生著『幕末維新期の陵墓と社会』(思文閣出版、2012 年) 第 1 部第 1 章、第 2 部第 3 章の書評を通じて—, 大阪歴史学会近世史部会・大阪歴史科学協議会前近代史部会合同書評会, 大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会, キャンパスポート大阪/大阪府大阪市, 2013/2/22
- 久野 洋「近代日本における「対外硬」派に関する研究」多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム (OVC プログラム) 平成 24 年度「横断的研究視察」「個人リサーチ」報告会, 多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム (OVC プログラム), 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2012/11/2 ※多賀良寛・藤本真名美・田由甲・久保田裕次・佐藤由隆氏とで、中央研究院等 (台湾) の横断的研究視察の共同研究報告
- 久野 洋「名望家・小西新右衛門の近代—新出史料を用いて—」伊丹市立博物館平成 24 年度秋期企画展開連講座, 伊丹市立博物館平成 24 年度秋期企画展開連講座, 伊丹市立博物館/兵庫県伊丹市, 2012/11/17

- 久野 洋「三村昌司氏の業績について（2013 年度大会報告者業績検討会）」日本史研究会近現代史部会，日本史研究会、日本史研究会事務所会議室／京都府京都市，2013/2/10
- 前田英之「荘園制成立期の領有問題と平家政権（第 1 回大会準備報告）」大阪歴史学会中世史部会，大阪歴史学会，キャンパスポート大阪／大阪府大阪市，2013/1/25
- 前田英之「平家政権の荘園制運用と領有構造（第 2 回大会準備報告）」大阪歴史学会中世史部会，大阪歴史学会，キャンパスポート大阪／大阪府大阪市，2013/3/23
- 本井優太郎「櫻澤誠氏の業績について（2012 年度大会報告者業績検討会）」日本史研究会近現代史部会，日本史研究会、日本史研究会事務所会議室／京都府京都市，2012/4/22
- 本井優太郎「2012 年度大会近現代史部会共同研究報告の反省について」日本史研究会近現代史部会，日本史研究会，日本史研究会事務所会議室／京都府京都市，2012/12/16
- 森脇崇文「宇喜多秀家の分国運営」歴史講演会「宇喜多氏研究の最前線—宇喜多秀家の実像に迫る—」，歴史講演会「宇喜多氏研究の最前線—宇喜多秀家の実像に迫る—」，岡山県立図書館／岡山県岡山市，2012/10/7
- 柳沢菜々「律令国家の山野用益と供御（第 3 回大会準備報告）」続日本紀研究会，続日本紀研究会，アウィーナ大阪／大阪府大阪市，2012/5/18
- 柳沢菜々「律令制下における山野の用益と供御（第 4 回大会準備報告）」続日本紀研究会，続日本紀研究会，アウィーナ大阪／大阪府大阪市，2012/6/15
- 柳沢菜々「律令制下における山野の用益と家産（2012 年度大会報告 [古代史部会・部会報告]）」大阪歴史学会古代史部会（続日本紀研究会），大阪歴史学会，大阪商業大学／大阪府東大阪市，2012/6/24
- 柳沢菜々「青木遺跡」日本古代文物を対象とした日本史学・美術史学・考古学の領域横断的研究，日本古代文物を対象とした日本史学・美術史学・考古学の領域横断的研究，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2012/10/17
- 芳澤 元「室町社会における禅林の雅俗世界（第 3 回大会準備報告）」大阪歴史学会中世史部会，大阪歴史学会，キャンパスポート大阪／大阪府大阪市，2012/5/18
- 芳澤 元「室町期禅宗の習俗化と武家社会（2012 年度大会報告 [中世史部会・部会報告]）」，大阪歴史学会中世史部会，大阪歴史学会，大阪商業大学／大阪府東大阪市，2012/6/24
- 芳澤 元「日本中世ぼちたま物語—ひとと動物の社会生活史—（講演）」大阪大学総合学術博物館サイエンスカフェ第 94 回，大阪大学総合学術博物館，大阪大学総合学術博物館待兼山修学館／大阪府豊中市，2012/8/25
- 李 宣玕「COMMENT : Modernization in Asia and "Political Space"」第 2 回アジア世界史学会（AAWH），アジア世界史学会，梨花女子大学／大韓民国ソウル特別市，2012/4/28

#### 【2013 年度】

〔学部生〕

緒方美咲「近世中後期における商家女性の生活と役割—和歌山の豪商の事例を通じて—」第 9 回地域史卒論報告会，歴史資料ネットワーク・神戸史学会，兵庫勤労市民センター／兵庫県神戸市，2014/3/22

〔博士前期〕

今井貴之「日唐喪葬令比較からみる律令国家形成過程」日本史研究会古代史部会・続日本紀研究会合同 2013 年度卒業論文大報告会，日本史研究会・続日本紀研究会，関西学院大学大阪梅田キャンパス／大阪府大阪市，2013/6/2

今井貴之「10～11 世紀の丹波国と撰閥家」考古学・古代史合同研究会（歴史媒体の差異をめぐる史論会），考古学・古代史合同研究会（歴史媒体の差異をめぐる史論会），大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2013/7/10

今井貴之「『日本後紀』輪読：弘仁三年九月丙子条～同年九月壬午条」続日本紀研究会 2013 年 10 月例会，続日本紀研究会，アウィーナ大阪／大阪府大阪市，2013/10/4

今井貴之「律令制下の天皇改葬」明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム，明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2014/1/12

今井貴之「外交における「翻訳」—日本史を世界史から見直す—」大阪大学歴史教育研究会第 75 回例会，大阪大学歴史

教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2014/1/18

※清水香穂氏・福村一弥氏・岡田陽平氏・西山真吾氏とのグループ報告

尾崎真理「畿内幕領における代官所の地方支配」岡山地方史研究会 7 月例会, 岡山地方史研究会, 岡山大学/岡山県岡山市, 2013/7/20

尾崎真理「近世中後期における幕領支配と地域社会—大坂代官の支配替をめぐる—」畿内近国史研究会, 畿内近国史研究会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2013/12/7

小野公三「長州戦争時撰津国幕領における人足・兵賦の徴発と村方の対応—撰津国高槻藩預所を事例として—」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, キャンパスポート大阪/大阪府大阪市, 2014/2/28

蒲谷和敏「第一次大戦期における工業化と地域社会—尼崎築港問題を事例に— (第 1 回卒業論文報告会)」日本史研究会近現代史部会・大阪歴史学会近代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2013/5/3

蒲谷和敏「第一次大戦期における工業化と地域社会—尼崎築港問題を事例に—」大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央/大阪府大阪市, 2013/9/14

蒲谷和敏「『国語』形成の比較史—スペインと中国を事例に—」大阪大学歴史教育研究会第 74 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2013/12/21

※郭溟寧氏・高岡萌氏・松村悠也氏・山田耕一郎氏とのグループ報告

川口敬義「室町殿の行列—義持・義教期を中心に—」日本史研究会中世史部会・大阪歴史学会中世史部会合同卒論報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2013/7/14

川口敬義「地名変遷にみる文字・言語」大阪大学歴史教育研究会第 75 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2014/1/18 ※永山愛氏・遠藤総史氏・村上広大氏・渋谷武弘氏とのグループ報告

國原卓哉「戦国期細川氏権力と撰津守護代」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 大阪市立男女共同参画センター/大阪府大阪市, 2013/11/15

清水香穂「近世中後期における大坂道修町薬種商の朝鮮薬種取引」大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央/大阪府大阪市, 2013/9/14

清水香穂「近世後期における大坂道修町薬種商の朝鮮薬種取引」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, キャンパスポート大阪/大阪府大阪市, 2013/9/20

清水香穂「外交における『翻訳』—日本史を世界史から見直す—」大阪大学歴史教育研究会第 75 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2014/1/18 ※今井貴之氏・福村一弥氏・岡田陽平氏・西山真吾氏とのグループ報告

高岡 萌「明治・大正期の育英事業—佐賀県育英会創立過程を中心に— (第 1 回卒業論文報告会)」日本史研究会近現代史部会・大阪歴史学会近代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2013/5/3

高岡 萌「『国語』形成の比較史—スペインと中国を事例に—」大阪大学歴史教育研究会第 74 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2013/12/21 ※郭溟寧氏・蒲谷和敏氏・松村悠也氏・山田耕一郎氏とのグループ報告

高岡 萌「書評: 清水唯一朗『近代日本の官僚』—教育史の観点から—」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, 大淀コミュニティセンター/大阪府大阪市, 2014/2/27

田邊 旬「箱根権現絵巻の世界」平成 25 年度山北町歴史講座, 山北町歴史講座, 山北町立中央公民館/神奈川県足柄上郡山北町, 2014/1/26

永山 愛「中世における領主と地域住人」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, キャンパスポート大阪/大阪府大阪市, 2013/7/6

永山 愛「南北朝期の市庭禁制—安芸国沼田市庭の再検討—」中世都市史・流通史懇話会 2013, 中世都市史・流通史懇話会 2013, キャンパスプラザ京都/京都府京都市, 2013/8/28

- 永山 愛「鎌倉～南北朝期における地域と武家領主—小早川市庭禁制の再検討—」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, キャンパスポート大阪/大阪府大阪市, 2013/9/13
- 永山 愛「地名変遷にみる文字・言語」大阪大学歴史教育研究会第 75 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2014/1/18 ※川口敬義氏・遠藤総史氏・村上広大氏・渋谷武弘氏とのグループ報告
- 永山 愛「中世後期武家領主論の現状と課題」日本史研究会中世史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2014/3/22
- 福村一弥「天正十年代における上杉景勝の政治的位置—東国との関わりを中心に—」大阪歴史学会近世史部会卒論報告会, 大阪歴史学会, キャンパスポート大阪/大阪府大阪市, 2013/4/27
- 福村一弥「外交における「翻訳」—日本史を世界史から見直す—」大阪大学歴史教育研究会第 75 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2014/1/18  
※今井貴之氏・清水香穂氏・岡田陽平氏・西山真吾氏とのグループ報告  
〔博士後期〕
- 内田敦士「撰関期の国家的法会体系（古代史サマーセミナー準備報告）」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウイーナ大阪/大阪府大阪市, 2013/7/26
- 内田敦士「撰関期の国家的法会体系—三会の成立を中心に—」第 41 回古代史サマーセミナー, 古代史サマーセミナー, ホテル竹島/愛知県蒲郡市, 2013/8/25
- 内田敦士「古代文字世界への招待」「文字のチカラ展」総合発表会, 「文字のチカラ展」総合発表会, 名古屋市博物館/愛知県名古屋市, 2014/1/19
- 片山早紀「伊能忠敬の測量事業と淀川・神崎川」おおさかふみんネット生涯学習広域講座（三島ブロック）, おおさかふみんネット生涯学習広域講座, 摂津市立コミュニティプラザ/大阪府摂津市, 2014/2/28
- 加藤伸行「日露戦後養蚕業発展の制度的基盤—西日本地域を中心に—」横浜近代史研究会, 横浜近代史研究会, 横浜開港資料館/神奈川県横浜市, 2014/3/21
- 島津 毅「平安時代における葬送とその変化—中国および儒教思想との関係を通して—」明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2014/1/17
- 高木純一「戦国期守護の軍事行動と地域社会—『政基公旅引付』を用いて—」大阪歴史学会中世史部会・大阪歴史科学協議会前近代史部会, 大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会, キャンパスポート大阪/大阪府大阪市, 2013/4/26
- 高木純一「山城国上久世荘における東寺の支配体制と村の荘務関与」日本史研究会中世史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2014/2/18
- 中村博司「大坂築城とだんじり」だんじり祭 in 大阪城 2013 実行委員会, だんじり祭 in 大阪城 2013 実行委員会, 追手門学院大阪城スクエア本館/大阪府大阪市, 2013/8/27
- 中村博司「大阪城の魅力と「大坂」時代」平成 25 年度大東市立公民館主催事業, 平成 25 年度大東市立公民館主催事業, 大東市立総合文化センター/大阪府大東市, 2013/9/24
- 中村博司「豊臣秀吉と宇治」史跡宇治川太閤堤保存整備フォーラム 2013, 史跡宇治川太閤堤保存整備フォーラム 2013, 宇治市生涯学習センター/京都府宇治市, 2013/10/20
- 中村博司「黒田官兵衛の出自とその青年時代」よみうり文化講座『伊丹城と黒田官兵衛』第 1 回, よみうり文化講座, よみうり伊丹文化センター/兵庫県伊丹市, 2013/10/26
- 中村博司「大坂城の公儀普請と芦屋」秋の公民館講座—芦屋から大坂城の謎を解く」, 「秋の公民館講座—芦屋から大坂城の謎を解く」, 芦屋市立公民館/兵庫県芦屋市, 2013/11/14
- 中村博司「羽柴秀吉との出会い」よみうり文化講座『伊丹城と黒田官兵衛』第 2 回, よみうり文化講座, よみうり伊丹文化センター/兵庫県伊丹市, 2013/12/21
- 中村博司「「大坂遷都論」再考—羽柴秀吉の政権構想をめぐって—」大阪歴史学会中世史・近世史合同部会, 大阪歴史学会, 淀川区民センター/大阪府大阪市, 2014/1/31



- 中村博司「大坂冬の陣・夏の陣」阪南大学創立 50 周年記念学術シンポジウム 2014, 阪南大学創立 50 周年記念学術シンポジウム 2014, 天王寺区役所講堂／大阪府大阪市, 2014/2/15
- 中村博司「羽柴秀吉の天下取り」よみうり文化講座『伊丹城と黒田官兵衛』第 3 回, よみうり文化講座, よみうり伊丹文化センター／兵庫県伊丹市, 2014/2/22
- 東野将伸「幕末維新期の資金循環構造と中間支配機構—備中一橋領掛屋を題材に—」畿内近国史研究会 7 月例会, 畿内近国史研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2013/7/7
- 東野将伸「幕末維新期の資金循環構造と中間支配機構—備中一橋領掛屋を題材に—」第 52 回近世史サマーセミナー, 近世史サマーセミナー, アーブしが滋賀県青年会館／滋賀県大津市, 2013/7/13
- 東野将伸「論評：中川すがね「田沼期の金融政策と本両替仲間」」畿内近国史研究会 10 月例会, 畿内近国史研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2013/10/6
- 東野将伸「幕末維新期の資金循環構造と掛屋—備中一橋領を題材に—」歴史学研究会近世史部会, 歴史学研究会, 東京大学福武ホール／東京都文京区, 2013/11/7
- 東野将伸「業績検討：藤田和敏『近世郷村の研究』(吉川弘文館、2013 年) 第 2 編「鎮守と郷」を中心に」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 大阪市立大学文化交流センター／大阪府大阪市, 2013/12/12
- 東野将伸「近世後期～明治期の地方金融組織と経済的有力者—備中国南西部を題材に—」大阪歴史学会近代史部会, 大阪歴史学会, エル・おおさか／大阪府大阪市, 2013/12/20
- 東野将伸「山本太郎氏の業績検討—著書第 1 章・第 2 章を中心に—」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 大阪市立大学文化交流センター／大阪府大阪市, 2014/1/24
- 東野将伸「近世身分論の現状と課題—塚田孝『近世大坂の非人』の書評を通じて—」大阪歴史科学協議会前近代史部会, 大阪歴史科学協議会, キャンパスポート大阪／大阪府大阪市, 2014/3/17
- 久野 洋「明治期地方都市政治史研究の視角—岡山市上水道敷設問題をとおして—」岡山地方史研究会 4 月例会, 岡山地方史研究会, 岡山大学／岡山県岡山市, 2013/4/27
- 久野 洋「地域政党「鶴鳴会」の成立—明治期地方政治史研究の一視角—」関西近現代史合同部会・近現代史サマーセミナー, 日本史研究会近現代史部会・大阪歴史学会近代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 宿泊研究センターアジアの風／岡山県岡山市, 2013/8/31
- 前田英之「平家政権と荘園制」中世文化史研究会, 中世文化史研究会, 大阪大学豊中キャンパス／大阪府豊中市, 2013/4/14
- 前田英之「中世前期の荘園制と国家的収取体制 (第 3 回大会準備報告)」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, キャンパスポート大阪／大阪府大阪市, 2013/5/17
- 前田英之「国家的収取における本所沙汰と平家政権 (2013 年度大会報告 [中世史部会・部会報告])」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 甲南大学岡本キャンパス／兵庫県神戸市, 2013/6/30
- 前田英之「中世摂関家研究の成果と課題」日本史研究会中世史部会大会報告サブグループ, 日本史研究会, 機関紙会館 5F 大会議室／京都府京都市, 2013/11/9
- 本井優太郎「戦後地域社会における基地問題の形成と展開—伊丹航空基地とその周辺地域を事例に—」日本史研究会近現代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2013/4/25
- 本井優太郎「書評：木村哲也『駐在保健婦の時代 1942-1997』」関西近現代史合同部会・近現代史サマーセミナー, 日本史研究会近現代史部会・大阪歴史学会近代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 宿泊研究センターアジアの風／岡山県岡山市, 2013/9/1
- 柳沢菜々「「勅旨」と天皇家家産」日本史研究会古代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2013/11/18
- 柳沢菜々「1 月例会コメントにむけて」大阪歴史科学協議会前近代史部会, 大阪歴史科学協議会, キャンパスポート大阪／大阪府大阪市, 2013/12/16
- 柳沢菜々「大阪歴史科学協議会 2014 年 1 月例会「吉田晶氏と古代史研究・戦後歴史学」コメント」大阪歴史科学協議会

1月例会, 大阪歴史科学協議会, 大阪歴史博物館／大阪府大阪市, 2014/1/25

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2012年度】

〔博士前期〕

内田敦士「出雲地域の宗教と社会」大阪大学大学院文学研究科日本史研究室編『日本古代文物を対象とした日本史学・美術史学・考古学の領域横断的研究成果報告書』, 大阪大学大学院文学研究科日本史研究室, pp.16-21, 2013/3

内田敦士「見学所見：出雲国新造院と国分寺」大阪大学大学院文学研究科日本史研究室編『日本古代文物を対象とした日本史学・美術史学・考古学の領域横断的研究成果報告書』, 大阪大学大学院文学研究科日本史研究室, p.87, 2013/3

國原卓哉「部会ニュース(中世史部会)：2011年6月中世史部会報告要旨(卒業論文報告会)」, 『日本史研究』597, 日本史研究会, pp.104-105, 2012/5

國原卓哉「部会ニュース(中世史部会)：2011年11月中世史部会丸山裕之報告討論要旨」, 『日本史研究』602, 日本史研究会, p.86, 2012/10

國土仁風「質疑・討論(2012年度大阪歴史学会大会古代史部会柳沢菜々「律令国家の山野支配と家産―「林」をてがかりとして―」報告討論要旨)」『ヒストリア』235, 大阪歴史学会, pp.85-86, 2012/12

國土仁風「部会ニュース(古代史部会)：2011年6月古代史部会報告要旨(卒業論文大報告会)」, 『日本史研究』605, 日本史研究会, pp.96-97, 2013/1

國土仁風「2013年3月特別研究会参加記」大阪大学大学院文学研究科日本史研究室編『日本古代文物を対象とした日本史学・美術史学・考古学の領域横断的研究成果報告書』, 大阪大学大学院文学研究科日本史研究室, pp.36-37, 2013/3

前端麻未「大阪歴史学会委員会報告(2012年度第1回)」, 『ヒストリア』235, 大阪歴史学会, pp.290-291, 2012/12

※飯塚一幸氏との共同執筆

前端麻未「大阪歴史学会委員会報告(2012年度第2・3回)」, 『ヒストリア』236, 大阪歴史学会, pp.170-172, 2013/2

※飯塚一幸氏との共同執筆

満田 雅「木下藤吉郎に宛てた昭元の書状について―元亀年間の京都の政治状況―」, 『織豊期研究』※14, 織豊期研究会, pp.59-65, 2012/10

〔博士後期〕

久保田裕次「第一次世界大戦期における対中国借款と日中関係―西原借款を中心に―(平成24年度「横断的研究視察」中央研究院等派遣研究報告)」大阪大学大学院文学研究科多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム(OVCプログラム)事務局編『組織的な若手研究者等海外派遣プログラム 多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム 派遣成果最終報告書(平成21年度～平成24年度)』, 大阪大学大学院文学研究科多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム(OVCプログラム)事務局, pp.50-51, 2013/3

久保田裕次「長江流域利権をめぐる近代日英関係に関する研究(平成23年度「個人リサーチ」(大学院生)派遣研究報告)」大阪大学大学院文学研究科多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム(OVCプログラム)事務局編『組織的な若手研究者等海外派遣プログラム 多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム 派遣成果最終報告書(平成21年度～平成24年度)』, 大阪大学大学院文学研究科多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム(OVCプログラム)事務局, pp.163-164, 2013/3

高木純一「部会ニュース(中世史部会)：2012年1月中世史部会田中誠報告討論要旨」, 『日本史研究』604, 日本史研究会, pp.80-81, 2012/12

中村 翼「書評：渡辺滋著『古代・中世の情報伝達』―「史料論の東西」によせて―」, 『歴史科学』208, 大阪歴史科学協議会, pp.23-33, 2012/4

中村 翼「部会ニュース(中世史部会)：2011年6月中世史部会亀ヶ谷憲史・松井直人報告討論要旨」, 『日本史研究』598, 日本史研究会, pp.88-89, 2012/6

- 中村 翼「部会ニュース(中世史部会)：2011年8月中世史部会現地見学会報告」,『日本史研究』601, 日本史研究会, pp.89-90, 2012/9
- 中村 翼「2011年4月例会「テーマ：史料論の東西」彙報」,『歴史科学』211, 大阪歴史科学協議会, pp.64-66, 2013/1
- 中村 翼「南宋～元代の浙江地域を中心とする日中仏教界の人的交流からみた日本禅宗形成過程の再検討(平成24年度「個人リサーチ」(大学院生)派遣研究報告)」大阪大学大学院文学研究科多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム(OVCプログラム)事務局編『組織的な若手研究者等海外派遣プログラム 多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム 派遣成果最終報告書(平成21年度～平成24年度)』, 大阪大学大学院文学研究科多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム(OVCプログラム)事務局, pp.225-227, 2013/3
- 中村博司「研究ノート：古活字本「天正記」第四の改訂文と註解」,『国史学研究』36, 龍谷大学国史学研究会, pp.109-131, 2013/3 ※著者は「天正記」を読む会。中村氏は「はじめに」の執筆と本文のとりまとめ。
- 中村博司「史料紹介：古活字本「天正記」第五」,『国史学研究』36, 龍谷大学国史学研究会, pp.132-153, 2013/3 ※著者は「天正記」を読む会。中村氏は「はじめに」の執筆と本文のとりまとめ。
- 中村博司「特別解説：4 近世の城 徳川期大坂城」日本城郭協会監修『日本城郭検定公式問題集 日本100名城編』, 学研, pp.36-63, 2012/8
- 中村博司「「石切」の技術と系譜—中世から近世へ—」,『小豆島 石の文化シンポジウム』レジュメ集, 小豆島町企画財政課, pp.43-58, 2012/11
- 久野 洋「部会ニュース(近現代史部会)：2011年10月近現代史部会報告」,『日本史研究』599, 日本史研究会, pp.87-88, 2012/7
- 久野 洋「江戸を席卷する「下り酒」」松永和浩編『ものづくり 上方“酒”ばなし』, 大阪大学出版会, pp.45-55, 2012/10 ※松永和浩氏との共同執筆
- 久野 洋「巨大ビール工場の出現—吹田村醸造所—」松永和浩編『ものづくり 上方“酒”ばなし』, 大阪大学出版会, pp.57-62, 2012/10
- 久野 洋「古文書の醍醐味」,『友の会だより』39, 伊丹市立博物館友の会, p.3, 2013/2
- 久野 洋「日米友好の桜100周年記念協賛事業 平成24年度春期テーマ展『旧村シリーズ 新田中野～西野・中野・東野の歴史～』」,『地域研究いたみ』42, 伊丹市立博物館, pp.113-119, 2013/3
- 久野 洋「近代日本における「対外硬」派に関する研究(平成24年度「横断的研究視察」中央研究院等派遣研究報告)」大阪大学大学院文学研究科多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム(OVCプログラム)事務局編『組織的な若手研究者等海外派遣プログラム 多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム 派遣成果最終報告書(平成21年度～平成24年度)』, 大阪大学大学院文学研究科多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム(OVCプログラム)事務局, pp.54-55, 2013/3
- 東野将伸「質疑・討論(2012年度大阪歴史学会大会近世史部会河野未央報告討論要旨)」,『ヒストリア』, 235, 大阪歴史学会, pp.213-214, 2012/12
- 本井優太郎「部会ニュース(近現代史部会)：2011年10月近現代史部会久野洋報告討論要旨」,『日本史研究』599, 日本史研究会, pp.88-89, 2012/7
- 柳沢菜々「2・11建国記念の日「不承認」大阪府民のつどい開催記録」,『ヒストリア』231, 大阪歴史学会, pp.139-140, 2012/4
- 柳沢菜々「律令制下における山野の用益と家産(2012年度大会[古代・部会報告]要旨)」,『ヒストリア』232, 大阪歴史学会, pp.97-98, 2012/6
- 柳沢菜々「青木遺跡」大阪大学大学院文学研究科日本史研究室編『日本古代文物を対象とした日本史学・美術史学・考古学の領域横断的研究成果報告書』, 大阪大学大学院文学研究科日本史研究室, pp.27-35, 2013/3
- 柳沢菜々「見学所見：青木遺跡出土木簡見学雑見」大阪大学大学院文学研究科日本史研究室編『日本古代文物を対象とした日本史学・美術史学・考古学の領域横断的研究成果報告書』, 大阪大学大学院文学研究科日本史研究室, pp.88-89, 2013/3

- 芳澤 元「室町期の禅林と社会 (2012 年度大会 [中世・部会報告] 要旨)」,『ヒストリア』232, 大阪歴史学会, pp.101-102, 2012/6
- 芳澤 元「報告：大阪府立中之島図書館の転用問題について」,『ヒストリア』235, 大阪歴史学会, pp.288-289, 2012/12  
※企画委員会名で掲出
- 【2013 年度】
- 〔学部生〕
- 田中 光「地域史卒論報告会に参加して」,『史料ネット News Letter』74, 歴史資料ネットワーク, p.7, 2013/12  
〔博士前期〕
- 尾崎真理「文化の成り立ちと政治権力の関係—18～19 世紀の近代国家形成期を中心に—」大阪大学歴史教育研究会編『最新の研究成果にもとづく大学教養課程用世界史教科書の作成 (大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ 9) (平成 23—25 年度科学研究費補助金・基盤研究(A)・課題番号 23242034)』, 大阪大学歴史教育研究会, pp.1-19, 2013/7  
※小田歩氏・真嶋宣明氏と共同執筆
- 尾崎真理「西の名湯、有馬の湯」「新右衛門、江戸店へ」伊丹市立博物館編『平成 25 年夏季企画展 江戸の旅人 (解説資料第 65 号)』,伊丹市立博物館, pp.15-16, 2013/7
- 尾崎真理「質疑・討論 (2013 年度大阪歴史学会大会近世史部会報告三田智子「十九世紀泉州南王子村の村落構造」報告 討論要旨)」,『ヒストリア』241, 大阪歴史学会, pp.147-149, 2013/12
- 尾崎真理「翻刻：大坂町奉行引越旅中之部」大阪市史編纂所編『大阪市史史料第七十九輯 大坂町奉行着任関係史料』, 大阪市史料調査会, pp.48-65, 2014/1
- 高岡 萌「大阪歴史学会委員会報告 (2012 年度第 11 回)」,『ヒストリア』240, 大阪歴史学会, pp.128-129, 2013/10  
※飯塚一幸氏・前端麻未氏との共同執筆
- 高岡 萌「大阪歴史学会委員会報告 (2013 年度第 1・2 回)」,『ヒストリア』241, 大阪歴史学会, pp.126-127, 2013/12  
※飯塚一幸氏との共同執筆
- 高岡 萌「大阪歴史学会委員会報告 (2013 年度第 3・4 回)」,『ヒストリア』242, 大阪歴史学会, pp.126-127, 2014/2  
※飯塚一幸氏との共同執筆
- 高岡 萌「大阪歴史学会委員会報告 (2013 年度第 5・6 回)」,『ヒストリア』243, 大阪歴史学会, pp.103-104, 2014/4  
※飯塚一幸氏との共同執筆
- 高岡 萌「江藤新平—佐賀の乱に死す—」,『別冊歴史 REAL 敗者たちの幕末維新』, 洋泉社, pp.82-83, 2014/3
- 田邊 旬『史料が語るエピソード日本史 100 話』, 小径社, pp.18-21, 24-25, 28-29, 96-97, 106-107, 112-115, 118-121, 2013/4
- 田邊 旬「東国武士」朝日新聞社編『週刊新発見！日本の歴史 06 鎌倉時代 1 源頼朝と武家政権の模索』, 朝日新聞出版, pp.16-18, 2013/8
- 永山 愛「第 51 回中世史サマーセミナー参加記」,『歴史学研究月報』, 647, 歴史学研究会, pp.4-5, 2013/11
- 永山 愛「質疑・討論 (2013 年度大阪歴史学会大会中世史部会中村翼「日元貿易期の海商と鎌倉・室町幕府」報告討論 要旨)」,『ヒストリア』, 241, 大阪歴史学会, pp.120-121, 2013/12
- 前端麻未「大阪歴史学会委員会報告 (2012 年度第 4・5 回)」,『ヒストリア』237, 大阪歴史学会, pp.148-149, 2013/4  
※飯塚一幸氏との共同執筆
- 前端麻未「大阪歴史学会委員会報告 (2012 年度第 6・7 回)」,『ヒストリア』238, 大阪歴史学会, pp.102-103, 2013/6  
※飯塚一幸氏との共同執筆
- 前端麻未「大阪歴史学会委員会報告 (2012 年度第 8・9 回)」,『ヒストリア』239, 大阪歴史学会, pp.115-116, 2013/8  
※飯塚一幸氏との共同執筆
- 前端麻未「大阪歴史学会委員会報告 (2013 年度第 10・11 回)」,『ヒストリア』240, 大阪歴史学会, pp.128-129, 2013/10  
※飯塚一幸氏との共同執筆 (第 11 回は高岡萌氏も)
- 〔博士後期〕

- 中村博司「研究ノート：古活字版『天正記』第五の改訂文と註解」、『龍谷日本史研究』37, 龍谷大学日本史学研究会, pp.129-176, 2014/3 ※著者は「天正記」を読む会。中村氏は全体の校閲を担当。
- 中村博司「史料紹介：国立公文書館所蔵 古活字版『天正記』第六」、『龍谷日本史研究』37, 龍谷大学日本史学研究会, pp.177-200, 2014/3 ※著者は「天正記」を読む会。中村氏は全体の校閲を担当。
- 東野将伸「博物館・展示会めぐり：岡山県立記録資料館平成24年度企画展「おかやまの名物・名産」」、『岡山地方史研究』129, 岡山地方史研究会, pp.46-48, 2013/5
- 東野将伸「書評：福澤徹三『一九世紀の豪農・名望家と地域社会』」、『ヒストリア』238, 大阪歴史学会, pp.79-87, 2013/6
- 東野将伸「書評：上田長生『幕末維新期の陵墓と社会』」、『歴史科学』214, 大阪歴史科学協議会, pp.36-43, 2013/10
- 東野将伸「部会ニュース(近世史部会)：2012年7月近世史部会報告要旨」、『日本史研究』613, 日本史研究会, pp.95-96, 2013/9
- 東野将伸「研究報告書(「平成24年度懐徳堂研究出版助成報告「幕末維新期の農村地域における金融システムと豪農の社会・経済的役割についての研究」)」、『懐徳』82, 財団法人懐徳堂記念会, pp.57-58, 2014/1
- 東野将伸「研究報告：「幕末維新期の頼母子講運営と豪農の社会・経済的役割—備中国後月郡・小田郡を題材に—」」, 『平成24年度「文化形態論研究に向けた派遣プログラム」(卓越した大学院拠点形成支援補助金)研究報告』大阪大学大学院文学研究科編, 大阪大学大学院文学研究科, pp.29-31, 2013/4
- 久野 洋「研究報告：「明治期における犬養毅の政治活動」」, 『平成24年度「文化形態論研究に向けた派遣プログラム」(卓越した大学院拠点形成支援補助金)研究報告』大阪大学大学院文学研究科編, 大阪大学大学院文学研究科, pp.33-35, 2013/4
- 本井優太郎「部会ニュース(近現代史部会)：2012年1月近現代史部会塩原佳典報告討論要旨」、『日本史研究』608, 日本史研究会, p.84, 2013/4
- 本井優太郎「部会ニュース(近現代史部会)：2012年3月研究会「大都市における警察行政と地域社会・地域支配—戦前期の東京と大阪の研究—」報告討論要旨」, 『日本史研究』612, 日本史研究会, pp.93-94, 2013/8
- 前田英之「研究報告：「平家滅亡後における平家領(平家没官領)の推移と荘園制の展開」」, 『平成24年度「文化形態論研究に向けた派遣プログラム」(卓越した大学院拠点形成支援補助金)研究報告』大阪大学大学院文学研究科編, 大阪大学大学院文学研究科, pp.31-33, 2013/4
- 前田英之「部会ニュース(中世史部会)：2012年1月中世史部会報告要旨」, 『日本史研究』609, 日本史研究会, pp.83-84, 2013/5
- 前田英之「平家政権と荘園制(2013年度大会[中世・部会報告]要旨)」, 『ヒストリア』238, 大阪歴史学会, pp.93-94, 2013/6
- 柳沢菜々「2011年11月例会「テーマ：国家と社会の類型的特質を考える」彙報」, 『歴史科学』212, 大阪歴史科学協議会, p.56, 2013/5

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD：1名 DC2：1名 DC1：2名 (計4名)

※PD：後藤敦史、DC2：柳沢菜々、DC1：中村翼・高木純一

2013年度 PD：1名 DC2：1名 DC1：1名 (計3名)

※PD：久保田裕次、DC2：柳沢菜々、DC1：高木純一

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部：0名 大学院：0名 (計0名)

2013年度 学部：1名 大学院：0名 (計1名) ※鈴木秋葉(短期留学)

## 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

大田壮一郎 博士後期課程、奈良大学文学部史学科、准教授、2013/4  
後藤 敦史 博士後期課程、大阪観光大学、専任講師、2013/4  
松永 和浩 博士後期課程、大阪大学総合学術博物館、特任講師、2013/4  
上田 長生 博士後期課程、金沢大学、准教授、2013/7  
中村 翼 博士後期課程、大阪大学、助教、2014/10

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業等で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 7 名

2012年度：4名 2013年度：3名

<内訳> 2012年度 技術職 1名(システムエンジニア、ヤフー株式会社)  
中・高等学校の教員 2名(同志社中学校・高等学校、京都府立園部高等学校)  
学芸員 1名(北九州市立自然史・歴史博物館)  
2013年度 中・高等学校の教員 1名(明星中学校・高等学校)  
学芸員 2名(山梨県立博物館、島根県立古代出雲歴史博物館)

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2012年度：0名 2013年度：0名

## 9. 刊行物

2012年度 『史友会会報』第27号(待兼山史友会編、同、2012年12月)  
2013年度 『史友会会報』第28号(待兼山史友会編、同、2013年12月)

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「大阪歴史科学協議会」(学会、編集事務局引き受け) 2008年6月～現在に至る  
「大阪歴史学会」(学会、事務局引き受け) 2012年6月～現在に至る

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

研究室例会(1998年度～2013年度)

- ・「軍役論と惣無事令論—無きものを無きと論証すること—」 2013年1月16日  
発表者：藤井讓治先生(京都大学名誉教授)
- ・「宗教」概念の誕生—島地黙雷におけるヨーロッパ体験と土着的遺産— 2013年3月4日  
発表者：ハンス・マーティン・クレーマ氏(ハイデルベルグ大学教授)
- ・「国民国家論と「日本史」」 2014年1月22日  
発表者：今西 一氏(小樽商科大学特任教授)

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

## 1. 平雅行教授

1951年生。1981年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学博士(大阪大学)。京都橘女子大学、関西大学、大阪大学助教授を経て1996年1月より現職。専攻:日本中世史/古代中世仏教史。

### 1-1. 論文

---

平雅行 「親鸞の二人の伯父」『伝道』81, 浄土真宗本願寺派伝導部, pp. 43-47, 2014/3

平雅行 「善光寺と女人罪業観」『歴史における周縁と共生』思文閣出版, pp. 13-36, 2014/3

平雅行 「専修念仏の弾圧をめぐって」『仏教史学研究』(仏教史学会), 56-1, pp. 38-64, 2013/11

平雅行 「親鸞のあゆみと民衆」『ともしび』732, 真宗大谷派教学研究所, pp. 1-9, 2013/10

平雅行 「「親鸞」の誕生」『伝道』80, 浄土真宗本願寺派伝導部, pp. 53-57, 2013/9

平雅行 「鎌倉の顕密仏教と幕府」『京都女子大学宗教・文化研究所紀要』26, pp. 81-105, 2013/3

平雅行 「寛喜の大飢饉と親鸞」『伝道』79, 浄土真宗本願寺派伝導部, pp. 56-60, 2013/3

平雅行 「出家入道と中世社会」『大阪大学大学院文学研究科紀要』53, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-46, 2013/3

平雅行 「聖覚と親鸞」『伝道』78, 浄土真宗本願寺派伝導部, pp. 49-53, 2012/9

平雅行 「中世成立期の王権と宗教」『日本史研究』601, 日本史研究会, pp. 46-62, 2012/9

平雅行 「建永の法難と九条兼実」今井雅晴先生古稀記念論文集編集委員会『中世文化と浄土真宗』思文閣出版, pp. 113-134, 2012/8

平雅行 「法然と顕密体制」『仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書』38, pp. 1-9, 2012/5

### 1-2. 著書

---

なし

### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

平雅行(辞書) 「親鸞」『日本思想史事典』東京堂出版, pp. 258-259, 2013/9

### 1-4. 口頭発表

---

なし

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

平雅行 大阪大学共通教育賞, 大阪大学共通教育, 2006/11

平雅行 大阪大学共通教育賞, 大阪大学共通教育, 2003/12

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2010年度~2013年度、基盤研究(C) 一般、代表者:平雅行

課題番号:22520666

研究題目:中世社会における「出家入道」の基礎的包括的研究

研究経費: 2012年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

2013年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

家督を保持したまま出家する(出家入道)は、世界史的にみても、また日本の歴史においても、日本中世のみにみられる習俗である。この(出家入道)の実態を解明することによって、中世社会の構造的特質や、日本中世仏教の特徴を明らかにする。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

仏教史学会・会長, 2013年11月～現在に至る

仏教史学会・評議員, 1999年10月～2013年11月

史学研究会・評議員, 1990年5月～現在に至る

## 2. 村田 路人 教授

1955年生。1977年大阪大学文学部史学科卒業。1981年大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程中途退学。文学博士(大阪大学、1994年)。大阪大学文学部助手、京都橘女子大学文学部専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、2002年4月より現職。専攻:日本近世史。

### 2-1. 論文

---

村田路人 「江戸時代の大和川治水と堺奉行所」堺都市政策研究所『フォーラム堺学』19, 堺都市政策研究所, pp. 45-83, 2013/3

村田路人 「大和川付替の治水史的意義」大阪商業大学商業史博物館『大阪商業大学商業史博物館紀要』13, 大阪商業大学商業史博物館, pp. 59-67, 105-111, 2012/10

村田路人 「近世治水史研究の新たな試み—堤外地政策から治水をみる—」大阪歴史科学協議会『歴史科学』209, 大阪歴史科学協議会, pp. 45-62, 2012/5

村田路人 「河村瑞賢の治水事業」学士会『学士会会報』894, 学士会, pp. 46-51, 2012/5

村田路人 「小倉宗『江戸幕府上方軍事機構の構造と特質』報告批判」日本史研究会『日本史研究』596, 日本史研究会, pp. 42-46, 2012/4

### 2-2. 著書

---

荻原永遠男, 藪田貫, 村田路人他(共編著)『大阪狭山市史』第一巻本文編通史, 大阪狭山市役所, pp. 248-297, 330-354, 2014/3

村田路人, 服部敬, 飯塚一幸他(共編著)『新版 郷土枚方の歴史』枚方市, pp. 104-202, 2014/3

脇田修, 大山喬平, 村田路人他(共著)『日本史B』実教出版, pp. 154-213, 2014/1

勝山清次, 平雅行, 村田路人他(共著)『日本史B教授用指導書』実教出版, p. 177, 2014/1

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

村田路人 「The History and Spirit of Osaka」『OSAKA UNIVERSITY PROSPECTUS』2014, Osaka University, p.6-7, 2014/3

村田路人, 廣川和花(共著)「解説」アン・ジャンネッタ著、廣川和花・木曾明子訳『種痘伝来』岩波書店, pp. 205-213, 2013/12

村田路人(史料紹介)「周防国都濃郡下松町飯田家文書七点の紹介—適塾生飯田柔平関係文書その他—」適塾記念会『適塾』(適塾記念会), 45, 適塾記念会, pp. 93-107, 2012/12

藪田貫, 村田路人(共著)(学界動向)「2011年の歴史学界—回顧と展望—、近世「総論」」史学会『史学雑誌』(史学会), 121-5, 史学会, pp. 109-111, 2012/5

### 2-4. 口頭発表

---

なし

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし



## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2012年度～2014年度、基盤研究(C) 一般、代表者:村田路人

課題番号:24520747

研究題目:享保改革期幕府開発・治水政策の研究

研究経費:2012年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

2013年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究は、享保改革期において、幕府がどのような開発政策および治水政策をとったのか、両者の関係はどのようなものであったのかについて、堤外地(堤防と堤防とに挟まれた地)政策という新たな観点を取り入れ、享保改革期の幕府政治史との関わりにおいて検討しようとするものである。あわせて、この作業を通じ、長らく停滞の感がある享保改革研究を、方法論的提起も含め、新たな段階に引き上げることをも目的としている。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

文化審議会・専門委員, 2014年3月～現在に至る

歴史科学協議会・理事, 2013年11月～現在に至る

摂津市文化財保護審議会・委員, 2013年7月～現在に至る

豊中市歴史的文化的文書審議会・委員, 2012年10月～2013年8月

大阪歴史科学協議会・委員長, 2012年6月～現在に至る

吹田市立博物館協議会・委員, 2011年11月～現在に至る

島本町文化財保護審議会・委員, 2008年10月～現在に至る

吹田市文化財保護審議会・委員, 2003年11月～現在に至る

## 3. 飯塚 一幸 教授

1958年生。1988年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学修士(京都大学、1985年)。舞鶴工業高等専門学校専任講師、佐賀大学助教授、大阪大学准教授を経て、2010年1月より現職。専攻:日本近代史。

### 3-1. 論文

---

飯塚一幸 「佐賀の乱後の憂国派」『待兼山論叢』(大阪大学文学会)47, pp. 1-23, 2013/12

飯塚一幸 「日清戦争論の現在」『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会, pp. 214-238, 2013/3

飯塚一幸 「初期議会と民党」『講座明治維新5 立憲制と帝国への道』有志舎, pp. 53-86, 2012/11

飯塚一幸 「高校日本史教科書の改定を巡って考えたこと」『大阪の歴史教育』(大阪歴史教育者協議会)45, pp. 3-18, 2012/5

### 3-2. 著書

---

飯塚一幸 (監修)『佐賀近代史年表大正編 大正元年8月～大正2年12月』佐賀大学地域学歴史文化研究センター, 160p. 2014/3

飯塚一幸他 (共著)『日本史B』実教出版社, pp. 218-275, 2014/1

飯塚一幸 (監修)『新修摂津市史史料集1 昭和28年台風13号災害写真集』摂津市, 66p. 2013/10

飯塚一幸他 (共編著)『杉田定一関係文書史料集』第二巻, 大阪経済大学日本経済史研究所, 350p. 2013/3

飯塚一幸他 (共編)『吉田清成関係文書』五書類編1, 思文閣出版, 567p. 2013/2

飯塚一幸他（共著）『図説京丹後市の歴史』京丹後市，pp. 99-103, 105-115, 117-123, 125-134, 2012/10

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

飯塚一幸（辞典項目）「秀島家良」『明治時代史辞典』第三巻，吉川弘文館，p. 227, 2013/2

飯塚一幸（辞典項目）「島義勇」「鍋島直大」「鍋島直彬」『明治時代史辞典』第二巻，吉川弘文館，p. 192, p. 976-977, 2012/7

### 3-4. 口頭発表

---

飯塚一幸「地域社会における近代法の受容」歴史学研究会総合部会：法と人権の歴史を再考する—日本・アジア・ヨーロッパの事例から—，歴史学研究会，慶應義塾大学，2014/3

飯塚一幸「地域社会の変容と地方名望家」大阪歴史科学協議会 2013 年 5 月例会，大阪歴史科学協議会，大阪市西区民センター，2013/5

飯塚一幸（招待講演）『『維新雑誌』の可能性』『新修福岡市史』資料編近現代1刊行記念シンポジウム：福岡発・明治維新へのまなざし～『維新雑誌』とその時代～，福岡市博物館市史編さん室，福岡市博物館，2012/9

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2011 年度～2013 年度、基盤研究(B) 一般、代表者：飯塚一幸

課題番号：23320136

研究題目：会沢正志齋書簡の研究

研究経費：2012 年度 直接経費 1,800,000 円 間接経費 540,000 円

2013 年度 直接経費 1,700,000 円 間接経費 510,000 円

研究の目的：

大阪大学文学研究科日本史研究室が所属する湯浅文庫に含まれている、後期水戸学を代表する儒者会沢正志齋の書簡約 400 通を翻刻し、史料集として刊行するとともに、そこで得られた新知見を活用して、戦後地方史の領域に押し込められてしまった幕末水戸藩について、政治史・思想史双方の視角から分析を行う。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

史学研究会・評議員，2013 年 6 月～現在に至る

大阪歴史学会・事務局長，2012 年 6 月～現在に至る

## 4. 川合 康 教授

1958 年生。1987 年、神戸大学大学院文化学研究科博士課程単位修得退学。文学博士（神戸大学、1994 年）。樟蔭女子短期大学助教授、東京都立大学准教授、日本大学教授を経て、2012 年 4 月より現職。専攻：日本中世史。

### 4-1. 論文

---

川合康「平清盛 —「おごれる」権力者の実像—」『中世の人物 京・鎌倉の時代編 第一巻』清文堂出版，pp. 269-303, 2014/3

川合康「鎌倉幕府の成立を問い直す」『歴史地理教育』815，歴史教育者協議会，pp. 10-17, 2014/2

川合康「治承・寿永の内乱と鎌倉幕府の成立」『岩波講座日本歴史 第6巻 中世1』株式会社岩波書店，pp. 61-96, 2013/12

川合康 「鎌倉幕府の成立時期を再検討する」『じつきょう地歴・公民科資料』76, 実教出版株式会社, pp. 7-10, 2013/2

川合康 「京武者論と平氏権力」『史友会会報』27, 待兼山史友会, pp. 7-12, 2012/12

川合康 「秩父平氏と葛西氏 —鎌倉幕府成立史の観点から—」埼玉県立嵐山史跡の博物館・葛飾区郷土と天文の博物館(編)『秩父平氏の盛衰』勉誠出版株式会社, pp. 215-235, 2012/5

#### 4-2. 著書

---

川合康(共著)『高校日本史 B 教授用指導書』実教出版株式会社, pp.50, 260, 2014/3

川合康(共著)『大阪狭山市史 第一巻 本文遍 通史』大阪狭山市役所, pp. 131-146, 2014/3

川合康(共著)『高校日本史 B』実教出版株式会社, pp.52-73, 96, 2014/1

川合康(共編著)『週刊 新発見日本の歴史06 源頼朝と武家政権の模索』朝日新聞出版, 全体の責任編集, 執筆 pp. 4-6, 8-15, 2013/8

#### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

#### 4-4. 口頭発表

---

川合康 (招待講演)「源平」の京武者と治承・寿永の内乱」共同研究[「文化現象としての源平盛衰記」研究—文芸・絵画・言語・歴史を総合して—]公開講演会, 共同研究[「文化現象としての源平盛衰記」研究—文芸・絵画・言語・歴史を総合して—], 國學院大學, 2012/11

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

4-6-1. 2011年度～2014年度、基盤研究(C) 一般、代表者:川合康

課題番号: 23520833

研究題目:『平家物語』成立圏の歴史学的研究

研究経費: 2012年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

2013年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究は、従来、国文学研究で歴大な研究成果が積み重ねられてきた『平家物語』の成立に関して、治承・寿永内乱史研究の成果に基づいて新たな視点から検討を行うものである。具体的には、『平家物語』の「原構想」の中核にある「鹿ヶ谷事件」譚の展開を、鎌倉時代の文献・諸史料のなかに探るとともに、『平家物語』との相互交渉のなかで成立したと推定される同時代の文学作品などを収集・検討することによって、『平家物語』の原型が成立した時期やその「成立圏」を、歴史学的に解明することが目的である。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本史研究会・編集委員, 2013年10月～現在に至る

河内長野市文化財保護審議会・委員, 2012年11月～現在に至る

メトロポリタン史学会・委員, 2005年4月～現在に至る

## 5. 市大樹 准教授

1971年生まれ。2000年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学、2001年)。奈良文化財研究所研究員、同主任研究員を経て、2009年4月より現職。日本学術振興会賞(2012)、日本学士院学術奨励賞(2012)、濱田青陵賞(2013)。専攻:日本古代史。

### 5-1. 論文

市大樹 「難波長柄豊碕宮の造営過程」武田佐知子編『交錯する知 衣装・信仰・女性』思文閣出版, pp. 285-303, 2014/3

市大樹 「大化改新と改革の実像」大津透編『岩波講座 日本歴史2』岩波書店, pp. 253-286, 2014/3

市大樹 「日本古代木簡の視覚機能」角谷常子編『東アジア木簡学のために』汲古書院, pp. 151-175, 2014/3

市大樹 「都の中の文字文化」国立歴史民俗博物館・平川南編『古代日本と古代朝鮮の文字文化交流』大修館書店, pp. 30-51, 2014/3

市大樹 「国分寺と木簡」須田勉・佐藤信編『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館, pp. 167-187, 2013/1

市大樹 「御食国志摩の荷札と大伴家持の作歌」神野志隆光・芳賀紀雄編『万葉集研究』33, 塙書房, pp. 207-260, 2012/5

市大樹 「平城宮木簡にみえる古代の色」丸山伸彦編『日本史色彩事典』吉川弘文館, pp. 247-249, 2012/4

### 5-2. 著書

市大樹他(共編著)『週刊日本の歴史 10 飛鳥時代2 飛鳥・藤原京の理想と現実』朝日新聞出版社, pp. 4-15, 2013/9

市大樹 『飛鳥の木簡－古代史の新たな解明－』中央公論新社, 303p., 2012/6

### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

市大樹(書評)「犬飼隆『木簡による日本語書記史【2011増訂版】』」『木簡研究』34, 木簡学会, pp. 225-234, 2012/12

### 5-4. 口頭発表

市大樹 (招待講演)「木簡からみた藤原宮」飛鳥・藤原の宮都とその関連遺跡群を知ろう、学ぼう講演会:飛鳥・藤原の宮都とその関連遺跡群を知ろう、学ぼう, 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館, 奈良県立橿原考古学研究所, 2014/3

市大樹 (招待講演)「木簡からみた日本の古代社会」古代史セミナー3月講座, 横浜市古代史セミナー運営委員会, かなざわプラザホール, 2014/3

市大樹 (パネリスト)「木簡から見た7世紀後半の東海地方と飛鳥」古代東海の文字世界」シンポジウム:古代東海の文字世界, 名古屋市立博物館, 名古屋市立博物館, 2014/2

市大樹 (基調講演)「日本古代駅伝制度の特質－日唐比較と山陽道－」第15回播磨考古学研究会集:播磨国の駅家を探る, 播磨考古学研究会, 姫路市教育会館, 2014/2

市大樹 (パネリスト)「日本古代交通制度の特質と運用実態－関の通行行政をめぐる－」大阪歴史科学協議会 12月例会:古代東アジアにおける交通と国家, 大阪歴史科学協議会, 弁天町市民学習センター特別会議室, 2013/12

市大樹 (基調講演)「木簡から日本古代国家の成立過程を考える」第26回濱田青陵賞授賞式・記念シンポジウム:解き明かされる「国家の原像」, 岸和田市・岸和田市教育委員会・朝日新聞社, 岸和田市立文化会館ホール, 2013/9

市大樹 (招待講演)「古代の旅と駅」齋宮歴史博物館講演会, 齋宮歴史博物館講演会, 齋宮歴史博物館, 2013/7

市大樹 (招待講演)「奈良・平安時代の摂津－摂津食河辺郡猪名所地図から－」豊中歴史同好会例会, 豊中歴史同好会, ルンオーレ・ホール, 2013/3(『つどい』304, pp. 1-6, 2013/5)

市大樹 (パネリスト)「都の中の文字文化」国立歴史民俗博物館国際シンポジウム:古代日本と古代朝鮮の文字文化交流, 国立歴史民俗博物館, イイノホール, 2012/12(『古代日本と古代朝鮮の文字文化交流』pp. 24-30, 2012/12)

市大樹 (招待講演)「聖武天皇の東国行幸」木津川市ふれあい文化講座, 木津川市, いずみホール, 2012/9

市大樹 (招待講演)「飛鳥の木簡を読む」三輪山セミナー, 大神神社, 大礼記念館(大神神社内), 2012/9

#### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

市大樹 濱田青陵賞, 岸和田市・朝日新聞社, 2013/9

市大樹 大阪大学総長奨励賞(研究部門), 大阪大学, 2012/7

市大樹 日本学士院学術奨励賞, 日本学士院, 2012/2

市大樹 日本学術振興会賞, 日本学術振興会, 2012/2

#### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

5-6-1. 2010年度～2012年度、基盤研究(C) 一般、代表者:市大樹

課題番号:22520667

研究題目:木簡・正倉院文書・編纂史料の相互比較による日本古代文書論の再構築

研究経費:2012年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究は、「日本古代文書論の再構築」を目的として、主として奈良時代の行政文書に焦点を定めて、木簡、正倉院文書、編纂史料の相互比較をおこなうものである。すなわち、〈文書の機能〉〈紙と木の使い分け〉〈文書伝達と口頭伝達との関係〉の3点に注意しながら、日本古代の行政システムを具体的に再現し、従来の文書様式論に変わる新たな枠組みをつくることを目指す。

5-6-2. 2013年度～2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者:市大樹

課題番号:25370771

研究題目:東アジアにおける日本古代文書論の再構築

研究経費:2013年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

本研究では、奈良時代から平安時代にいたる行政文書に焦点を定めて、木簡、古文書、編纂史料、古記録の相互比較をおこなう。〈文書の機能〉、〈紙と木の使い分け〉、〈文書伝達と口頭伝達との関係〉に注意しながら、日本古代の行政システムの構造とそその変質過程を具体的に再現し、従来の文書様式論に変わる新たな枠組みの構築を模索する。以上の考察にあたっては、その模範となった中国・韓国など古代東アジアの行政文書にも広く目配りし、次なる目標とする「東アジア古代文書論」を構築するための布石とする。

#### 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 5-8. 外部役員等の引き受け状況

---

古代文化刊行委員会・編集参与, 2010年4月～現在に至る

大阪歴史学会・編集委員, 2009年6月～現在に至る

続日本紀研究会・編集委員, 2006年6月～現在に至る

### 6. 北泊 謙太郎 助教

1971年生。1995年、大阪大学文学部史学科国史学専攻卒業、1997年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(史学専攻、日本史学専門分野)修了、2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化形態論専攻、日本史学専門分野)単位修得退学。修士(文学、大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科ティーチング・アシスタント(1997年6月～1998年2月)。2001年より現職。専攻:日本史学/日本近現代史。

## 6-1. 論文

北泊謙太郎「近代日本における「兵士」の誕生—兵営内教育と戦場での兵士—」木戸衛一(編)『平和研究入門』(大阪大学出版会), 大阪大学出版会, pp. 13-26, 2014/3

## 6-2. 著書

北泊謙太郎, 木戸衛一, 長野八久他(共著)『平和研究入門』大阪大学出版会, pp. 13-26, 2014/3

## 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

北泊謙太郎(記録)「二. 一一集会—各地の記録(大阪)」歴史科学協議会(編)『歴史評論』(歴史科学協議会), 759, 歴史科学協議会, pp. 108-109, 2013/7

北泊謙太郎(記録)「金沢陸軍墓地とその歴史的位置づけをめぐる」旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会(編)『会報真田山』(旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会), 34, 旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会, 本康宏史「慰霊空間」としての野田山陸軍墓地」(旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会第16回ミニ報告会の記録)p. 2, 2013/4

北泊謙太郎(研究報告)「植民地期台湾における徴兵制施行の基礎的研究」大阪大学大学院文学研究科多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム(略称:OVCプログラム)事務局(編)『組織的な若手研究者等海外派遣プログラム 多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム 派遣成果最終報告書(平成21年度～平成24年度)』大阪大学大学院文学研究科多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム(略称:OVCプログラム)事務局, 平成24年度「個人リサーチ」(若手研究者)派遣研究報告 pp. 179-180, 2013/3

## 6-4. 口頭発表

北泊謙太郎「徴兵援護・兵事奨励組織から教育的修養組織へ—成立期在郷軍人会の特質をめぐる—」大阪歴史科学協議会 帝国主義研究部会12月部会, 大阪歴史科学協議会, 大阪市北区民センター, 2013/12

北泊謙太郎「平和博物館展示のオルタナティブ—ピースおおさか展示リニューアル基本設計「中間報告」をめぐる—」ピースおおさか学習会, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立城北市民学習センター, 2013/11

北泊謙太郎「観光だけでは分からない台湾—日本統治期台湾の「遺産」—」JASSサイエンスカフェ(第27回), 日本科学者会議, JASS(日本セカンドライフ協会)十三事務局, 2013/2

北泊謙太郎「大阪大学の入学式・卒業式での国旗掲揚を考える」阪大9条の会緊急集会, 阪大9条の会, 大阪大学共通教育講義棟A102講義室, 2013/2

## 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

## 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 6-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪歴史科学協議会・編集委員長, 2012年6月～現在に至る

歴史科学協議会・全国委員, 2012年6月～現在に至る

大阪歴史学会・会計監査, 2011年6月～2013年6月

## 2-8 東洋史学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：片山 剛、荒川 正晴、桃木 至朗

准教授：田口 宏二郎

助教：岡田 雅志

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
27	9	10	1	0	1	7	0

※うち留学生 11 名、社会人学生 0 名

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	8	1	0	1
2013	4	4	1	0
計	12	5	1	1

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

大学院の教育においては、以下の 6 項目を目標とする。①修士・博士論文作成演習を行い、教員および院生同士からの批評を糧にして水準向上をめざす。2012年度は博士論文 1 本、修士論文 1 本、2013年度は博士論文 1 本、修士論文 4 本を提出させる。②東洋史学研究分野独特の伝統として、全教員・院生・学部生が参加する合同演習と通称する演習の場において、博士後期課程の院生には学部生向けに数種類の東洋史入門講義を数年サイクルで交互に担当させ、教育者として独立する際の訓練を行う。③本研究分野の教員が主催する国内学会の企画・実施、また中心メンバーとして開催している研究会の運営、あるいは雑誌の編集に院生を積極的に関わらせることによって、研究者として就職する際の有利な条件作りをする。④教員が科研費などによって実施する海外現地調査ないし文書調査に、できるだけ多くの博士後期課程の院生を帯同して訓練する。⑤学内外で開催される各種関連学会や研究会のいずれかにおいて、毎年 1 回は発表するように

する。⑥専門教育と連動するかたちで、阪大が進めている新しい世界史教育の試みに参加させ、深い専門性と広い視野の両方を備えられるようにする。

また学部教育においては、以下の4項目を目標とする。①2年次生向けの漢文演習を2種類開講し、卒業論文執筆のための基礎となる漢文史料読解能力の充実をはかる。3年次生、4年次生についてもしかるべき漢文の授業を開講する。②中央アジア史・中国史・東南アジア史の3分野別に学部生向けの英語論文を読む演習を開講し、外国語を含む先行研究論文の批判的かつ精密な読み方の訓練を行うと共に、卒業論文作成に向けての能力を涵養する。③東洋史専修独特の伝統として、全教員・院生・学部生が参加する合同演習と通称する演習の場において、学部生に積極的に質問させるようなシステムの構築を行い、それを実行する。さらにこの合同演習を通じて、他大学には見られない学部生と大学院生との学問的連携体制を構築する。④学内外で開催される関連学会や研究会に積極的に参加する習慣をつけさせる。

## 2. 研究

教員では毎年1人平均で単著論文ないしそれに匹敵する内容のもの1本を発表することを目標とする。ただし東洋史学分野では印刷・編集などの関係で毎年確実に1本という目標はそもそも無理なので、実際には3年に3本を目標とする。本分野の単著論文とは、理科系の共同論文の少なくとも5本程度、一般的には10本程度、さらに場合によっては20本以上に相当する時間と労力を要するものである。博士後期課程の院生では2年に1本の単著論文ないし研究動向・書評の投稿を目標とする。また教員全員が新規ないし継続中の科学研究費に関わる海外現地調査ないし文書調査、ならびにそれと連動する研究を行う。研究代表者になっていない教員の場合は、新たに科学研究費・財団研究助成を申請する。このほか国際学会・国内学会のオルガナイザーないし発表者として活動するとともに、専門雑誌の編纂に携わり、関係分野の日本優位に尽力することも目標とする。

## 3. 社会連携

全国の高校歴史教員と協力して運営している大阪大学歴史教育研究会の活動をさらに発展させ、世界史教育のさらなる改善をはかるとともに、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることを目標とする。また自らの研究成果を社会に還元できる機会である、社会人向けの講演・講義を積極的に引き受けることも目標とする。

# Ⅲ. 活動の概要(2012年度～2013年度)

## 1. 教育

合同演習および中央アジア史・中国史・東南アジア史の各種ゼミにおいて、学部生・院生の教育が当初の予定に沿って着実に進められた。こうした学内での順調な教育を反映して、2012年度においては卒業論文8本、修士論文1本、博士論文1本を提出させることができた。加えて、院生の論文発表は全7件にのぼり、学会・研究会（国際会議：第2回アジア世界史学会（AAWH、ソウル・梨花女子大学）、国内会議：野尻湖クルルタイ・中央アジア学フォーラム・大阪大学歴史教育研究会・中国前近代ジェンダー史ワークショップなど）における発表は、全15回にもおよんでいる。片山は文学研究科の「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」中の「横断的研究視察（台湾／中央研究院、故宫博物院等）」の引率教員として大学院生5名・学部生1名の台湾における11日間の調査研究活動を指導するとともに、科研費による台北の国史館での資料調査に学部生1名を帯同し、資料調査の方法と地図類を解像度の高い画像で撮影する技法を習得させた。さらに荒川は夏季に新疆の草原調査と河西のオアシス調査を行った際に、それらに院生・学生計4名を参加させ、現地調査の経験を積ませた。また桃木は、冬のベトナム山岳部の交通ルート調査に院生・学生計4名を参加させ、ベトナムでの歴史調査の基礎訓練をおこなった。留学状況としては、中国史の院生1名が1年半の国費留学を終えて帰国し、東南アジア史の院生2名が年度末にインドネシア・ベトナムからそれぞれ帰国した。さらに中国史・中央アジア史の院生6名は、文学研究科の「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」や「卓越した大学院拠点形成支援補助金」を利用して、それぞれ中国本土や少数民族自治区、さらにはヨーロッパで調査研究を行った。また専門教育と並



んで桃木を中心とした世界史教育の取り組みも順調に進み、学部生・院生に幅広い視野をもたせることに寄与した。

次に2013年度においても、卒業論文4本、修士論文4本（うち2本は学術誌への投稿を予定）を提出させることができたが、博士論文は社会人院生が勤務の多忙のため提出を次年度に延期した。加えて、院生の論文発表は全9件にのぼり、学会・研究会における発表は、国際会議報告3件（中国語2件、英語1件）を含め全28回にもおよんでいる。留学では学部生が1名、フィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学に留学した。また、片山は科研費による台北の国史館における資料調査に学部生1名を帯同し、同じく資料調査の方法と地図類を解像度の高い画像で撮影する技法を習得させた。桃木は、冬のベトナム山岳部の交通ルート調査に院生・学生計5名を参加させ、ベトナムでの歴史調査の基礎訓練をおこなった。さらに、文学研究科文化形態論専攻に支給された「卓越した大学院拠点形成支援」および文学研究科と人間科学研究科に支給された「卓越した大学院拠点形成支援」の経費を利用して、博士後期課程在籍の院生2名を中国の上海および福建に派遣し、調査・研究に従事させた。加えて小林節太郎記念基金「外国人留学生研究助成プログラム」を利用して、院生1名が中国福建省の調査を行った。また博士前期課程院生1名が、台湾教育部主催の日本と台湾の大学院生交流事業及び本学グローバルコラボレーションセンター企画の台湾フィールドスタディに参加し、日本ならびに台湾の大学院生との研究交流を進めた。その他、専修・専門分野内での教育と並んで、桃木を中心とした歴史学と世界史教育を見直す取り組みも順調に進み、学部生・院生に幅広い視野と問題意識をもたせることに寄与した。桃木・荒川はこの関連で、他の3名の共著者らとともに、新しい大学教養課程用世界史教科書の編纂をおこなった（2014年4月刊行）。

## 2. 研究

2012年度では、片山、荒川、桃木はそれぞれ、科研研究プロジェクトの代表者として、学内外の分担者・協力者を率いて各自の研究計画を遂行するなど、着実に研究成果を挙げている。また研究論文の執筆および学会発表に関しては、概ね当初の目標を達成している。片山は、歴史学界の活性化に向けたメッセージ1点を全国学会誌に掲載し、大学院生向けの中国地域研究の講義テキスト1点を共著として出版したほか、中国語による口頭発表（8月東華大学）と招待講演（12月南京大学）を行った。荒川は、英語1点、中国語1点の論文を公表したほか、内陸アジア史学会大会と大阪大学桜花会において招待講演をし、さらに中国前近代ジェンダー史ワークショップにおいて研究発表を行った。桃木は英語1点、日本語2点の論文を公刊したほか、秋田茂と共編著でグローバルヒストリーの論集を出版し、AAWH（パネル2つを主催）など国際会議で3件の研究発表をおこなった。田口は日本語論文を3点公刊するとともに、海外の研究者を招いたセミナーを2回開催、いずれもディスカッションをつとめた。なお、11月に予定された上海での研究集会は、日中関係の悪化を承けて中止となった。赤木（2013年度まで助教）は、英語1点、日本語1点の論文、また学界動向と書評を各1点（ともに日本語）を公表した。さらに、国内での研究報告を3点おこなった。また海外調査では、片山は、科研の代表者として台北・南京・広東での資料調査および農村実地調査を組織して実施するとともに、科研の分担者としてアメリカの議会図書館（LC）および国立公文書館（NARA）での資料調査を行った。荒川は8月に天山ユルドゥス草原の景観調査をし、引き続き9月にはトゥルファンおよび河西において文書と遺跡の実地調査を行った。桃木は冬季にベトナム山地の交通ルート調査を実施、赤木は夏季に中国新疆の天山山脈バインブラク草原および焉耆オアシスの周辺遺跡を調査した。

次に2013年度では、片山は、日本語の論文1篇を公刊し、既発表の日本語論文2本が中国で翻訳・刊行されたほか、科研課題に関する口頭報告を2回行い、これらを収載した『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』第5号（130ページ）を編集・刊行した。また、第16回〈大阪大学—上海交通大学学術交流セミナー〉（歴史分科会としては第3回）と科研費課題に関するワークショップを主宰したほか、田口を助けて明清史研究合宿2013を開催した。荒川は、英語1点、日本語1点の論文を公刊したほか、英語の書評1点、および国際シンポジウム「広域アジアにおける大谷光瑞の活動」や大阪歴史科学協議会、『日本古代の外交文書』出版記念シンポジウムで講演を行った。また科研の最終年度として、科研調査を総括する、中央アジア出土公文書に関する国際ワークショップを主催した。桃木は、シンガポール・東南アジア研究所から共編著の海域アジア史の論集（英語）を刊行したほか英語論文1本を公表した。またタンロン遺跡保存プロジェクトに関連した国際会議で、ベトナム語での発表を2回行い、冬季には北部ベトナム山地の歴史調査を実施した。さらに歴史教育関連で、東方学会の学術大会においてアジア史教育に関するシンポを組織した。田口は、日本語論文

を1点、訳註を1点公刊するとともに、日本語・中国語で計4件の口頭報告をおこなった。また、夏には明清史研究合宿を組織し、100名を超える歴史・経済・地理学研究者間の交流に努めた。さらに国内で行われた国際・国内研究会に参加、4件のディスカッサントを務めた。出土文書研究会の開催にも協力、本学の学生を引率して広範な議論の場形成に尽力した。赤木は、夏季に新疆トゥルファン地区・甘肅省敦煌で中央アジア出土唐代公文書の調査・研究を行った。また、9月に開催された中央アジア出土公文書に関する国際ワークショップで、唐代公文書制について報告したほか、日本語で4点の論文を公表した。

以上のほか両年度を通じて、中央アジア学フォーラム、海城アジア史研究会（2013年12月に韓国・木浦において設立20周年記念シンポを開催した）などが予定通り開かれるとともに、その運営を主導することによって、自己の研究のみならず、我が国の学界全体の研究水準向上に貢献した。また荒川は『内陸アジア言語の研究』を編纂し、この分野の日本優位に尽力した。

### 3. 社会連携

2012年度は、桃木は全国の高校歴史教員と協力して運営している大阪大学歴史教育研究会の活動をさらに発展させ、荒川がこれを補佐した。具体的には、歴史教育研究会の月例会（特別例会も3回開催）のほかに、神奈川・北海道・京都の高校歴史教員の研究活動、大阪府高齢者大学校の世界史講座（通年）などに協力し、世界史教育に関わる高大連携・社会連携を積極的に推進した。また片山は、史学会の評議員として、若手の歴史研究者を対象とする学会賞の新設など、日本における歴史学の次世代への継承や学界の活性化に向けた提言を行うとともに、京都大学人文科学研究所 共同利用・共同研究拠点共同研究委員会委員として、当該研究所における共同研究のあり方のより一層の展開を提言した。荒川は、懐徳堂記念会の運営委員として、春・秋季講座の実施に尽力した。さらに桃木は熊本県、宮城の高校教員研究会などで計6件の講演をおこなったほか、日本学術会議連携会員として、同史学委員会での高校新科目「歴史基礎」の検討に参加した。またタンロン皇城遺跡の調査保存に関する日越合同専門家委員会委員として、8月のハノイ・ワークショップの運営協力その他の活動をおこなった。

また続く2013年度に、片山は引き続き史学会の評議員ならびに京都大学人文科学研究所 共同利用・共同研究拠点共同研究委員会委員として日本における人文学、とりわけ歴史学のより一層の展開に向けた提言を行い、とくに史学会については、2014年度からの史学会賞創設に結びつけた。荒川は、NPO法人「シニア自然大学校」の「自然と文化科」主催の公開講演会に招待され、シルクロードに関する講演を行った。荒川はまた、財団法人懐徳堂記念会の運営委員として運営にあたった。桃木は、全国歴史教育研究協議会大会での記念講演のほか、新設の堺市「日本と世界が会うまち」プロジェクトでも中高生発表の審査委員長、市民向けの講演などをおこなった。ほかに荒川と協力した大阪大学歴史教育研究会の月例会等の取り組み、日本学術会議連携会員としての活動、東方学会での東アジア史教育シンポのコーディネート、同志社大学グローバル地域文化学会と九州歴史科学研究会シンポでの講演、大阪府立天王寺高校「文系課題研究」の指導など、歴史教育に関する活動を続けた。またタンロン遺跡保存プロジェクト委員としてもユネスコ信託基金プロジェクト最終年の取りまとめに当たった。

## IV. 自己点検・自己評価(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

教育目標として掲げた諸項目は、何れについても順調に行われた。とくに教育の中心となる合同演習による学部生・院生の教育は当初の予定に沿って着実に進められ、中央アジア史・中国史・東南アジア史の3分野に分かれての各種ゼミでも目標通りの進歩が見られた。こうした学内での順調な教育を反映して、卒業論文12本、修士論文5本、博士論文1本を提出させることができた。何れの論文も高いレベルで作成されている。また院生の査読付き全国学会誌を中心とする論文発表および、国際学会を含む学会・研究会における口頭報告も、教員の指導のもとに順調に行われた。これらの点から判断して、所期の目標は達成できたと評価したい。

## 2. 研究

教員・大学院生の研究論文の執筆および学会発表に関しては、概ね当初の目標を達成している。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

## 3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

# V. 基本情報(2012年度～2013年度)

## 1. 博士学位授与

### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	1	0	1
2013	0	0	0
計	1	0	1

### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

伊藤一馬「北宋の軍事政策と東部ユーラシア情勢」2013/2

主査：荒川正晴 副査：片山剛、桃木至朗、田口宏二郎

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	2(2)	2(1)	1(0)	0(0)	2(0)	7(3)
2013	2(2)	2(1)	5(0)	0(0)	0(0)	9(3)
計	4(4)	4(2)	6(0)	0(0)	2(0)	16(6)

括弧内は査読付き論文数。

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	3	4	8	0	0	15
2013	3	4	21	0	0	28
計	6	8	29	0	0	43

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

## (1)論文

【2012年度】

〔博士前期〕

YOSHIKAWA Kazuki, “Foreign Trade of Vietnam during the Fifteenth through Seventeenth centuries,” in *Osaka University Research Project of History Education, Working Paper Series No. 8: Papers presented at the Second AAWH (Asian Association of World Historians)* [大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ8——第2回 AAWH (アジア世界史学会) 報告集——], Osaka University, pp.164-174, 2012/12 (査読無し)

〔博士後期〕

伊藤一馬「黒水城出土「宋西北辺境軍政文書」——概要と研究状況——」『内陸アジア言語の研究』27, pp. 161-180, 2012/8 (査読有り)

中村武司・伊藤一馬・後藤敦史・中尾恭三・秋田茂「新しい世界史」の運動と歴史学研究『西洋史学』246, pp. 55-66, 2012/9 (査読有り)

伊藤一馬「北宋陝西地域の将兵制と地方統治体制」『待兼山論叢』史学篇 46, pp. 1-24, 2012/12 (査読無し)

ITO Kazuma, “Military and Diplomatic Policy during the Song Dynasty: Eastern Eurasia in the 10th-13th Century,” 『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ』8, pp. 82-90, 2012/12 (査読無し)

TIAN, Youjia “Revisiting Fujian in the Late Song Dynasty Period: a Study of the Coastal Area in Fujian as a Geographic Boundary Prior to the Building of Walled Cities in the Early Ming Dynasty”, 『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ』8, pp. 101-122, 2012/12 (査読無し)

布和「李鴻章と近代琉球をめぐる日清交渉 ——1880年までの時期を中心に——」*Journal of the School of Liberal Arts* 4, School of Liberal Arts, Ohkagakuen University (桜花学園大学学芸学部), pp. 47-60, 2013/3 (査読無し)

【2013年度】

〔博士前期〕

遠藤総史・川口敬義・渋谷武弘・永山愛・村上広大「地名の変遷に見る文字・言語一本質論を超えて」『大阪歴史教育研究会成果報告書シリーズ』10, pp. 46-67, 2014/3 (査読無し)

今井貴之・岡田陽平・清水香穂・西山真吾・福村一弥「外交における「翻訳」—日本史を世界史から見直す—」『大阪歴史教育研究会成果報告書シリーズ』10, pp. 5-20, 2014/3 (査読無し)

岡野翔太「神戸中華同文学校のあゆみ」『聞き書き・関西華僑のライフヒストリー』第5号, pp. 127-130, 2013/12 (査読無し)

郭湜寧・蒲谷和敏・高岡萌・松村悠也・山田耕一郎「「国語」形成の比較史—スペインと中国を事例に—」『大阪歴史教育研究会成果報告書シリーズ』10, pp. 21-45, 2014/3 (査読無し)

小田歩・眞嶋宣明・尾崎真理「文化の成り立ちと政治権力の関係——18～19世紀の近代国家形成期を中心に」『大阪歴史教育研究会成果報告書シリーズ』9, pp. 1-19, 2013/7 (査読無し)

〔博士後期〕

多賀良寛「阮朝治下ベトナムにおける銀流通の構造」『史学雑誌』123-2, pp.1-34, 2014/2 (査読有り)

新見まどか「唐後半期における平盧節度使と海商・山地狩猟民の活動」『東洋学報』第95巻第1号, pp. 59-88, 2013/6 (査読有り)

新見まどか「唐代河北藩鎮に対する公主降嫁とウイグル」『待兼山論叢』史学篇 47, pp. 25-51, 2013/12 (査読無し)

旗手瞳「吐蕃の吐谷渾支配とガル氏」『史学雑誌』123-1, pp. 38-63, 2014/1 (査読有り)

## (2)口頭発表

【2012年度】

〔博士前期〕

遠藤総史「環王期チャンパーの内陸性に関する一考察」海域アジア史研究会 (大阪府・大阪大学), 2012/7/28

- 多賀良寛 「19世紀ベトナムにおける銀流通の構造と変容—阮朝の成立からピアストル本位制の確立まで」東南アジア学会関東例会（東京都・東京外国語大学サテライトキャンパス），2012/5/26
- 上田 新也・元廣 ちひろ 「村落文書よりみた阮朝期フエ北郊の村落社会」（パネル発表「ベトナム中・南部集落の形成と歴史的展開：フエ都城北郊域とドンタップムオイ開拓村域の比較」：フエ・セッション），東南アジア学会第87回研究大会（京都府・京都文教大学），2012/6/3
- YOSHIKAWA Kazuki, “Foreign Trade of Vietnam during the Fifteenth through Seventeenth centuries,” The Second Congress of the Asian Association of World Historians (Seoul, Ewha Woman University) 2012/4/29  
〔博士後期〕
- 石川禎仁 「10世紀・敦煌オアシスの農地と人びと——敦煌文献にみえる索氏一族の活動を手がかりに——」第49回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会），（長野県・藤屋旅館），2012/7/16
- 伊藤一馬 「書評：羽田正『新しい世界史へ』」大阪大学歴史教育研究会特別例会（大阪府・大阪大学），2012/4/7
- ITO Kazuma, “Military and Diplomatic Policy during the Song Dynasty: Eastern Eurasia in the 10th-13th Century”, The Second Congress of the Asian Association of World Historians (Seoul, Ewha Woman University) 2012/4/28
- 伊藤一馬 「北宋の武人と軍事集団——「蕃将」と「将門」をめぐって——」第153回宋代史談話会（大阪府・大阪市立大学），2012/12/22
- 伊藤一馬 「宋代史の視点から——近年の研究状況を踏まえて——」大阪大学歴史教育研究会特別例会（與那覇潤『中国化する日本』合評会），（大阪府・大阪大学），2013/2/9
- 猪原達生 「中国・朝鮮のジェンダー——近世の宗族と女性を中心に——」大阪大学歴史教育研究会第62回例会（大阪府・大阪大学），2012/7/21
- 猪原達生 「唐代における宦官の婚姻と家族形成について」第一回中国前近代ジェンダー史ワークショップ（東京都・東洋文庫），2012/9/5
- TIAN, Youjia “Revising Fujian in the Late Song Dynasty Period: a Study of the Coastal Area in Fujian as a Boundary that Did Not Become a Walled City until the Early Ming Dynasty”, The Second Congress of the Asian Association of World Historians (Seoul, Ewha Woman University), 2012/4/28
- 新見まどか 「唐代河南の藩鎮と海商・山地狩猟民の活動—平盧節度使を中心に—」宋代史談話会（大阪府・大阪市立大学），2013/1/26
- 旗手瞳 「吐谷渾からアシャ国（'A zha yul）へ—7～9世紀の青海省東北地域」第49回野尻湖クリルタイ（長野県・藤屋旅館），2012/7/16
- 旗手瞳 「吐蕃統治下の吐谷渾国とガル氏肅清事件」中央アジア学フォーラム（大阪府・大阪大学），2012/12/22
- 【2013年度】  
〔博士前期〕
- 遠藤総史 「北宋のチャンパー認識」第1回若手アジア史論壇関西西部会（大阪府・大阪大学），2013/8/13
- 遠藤総史 「北宋のチャンパー認識と、チャンパーの政治外交的位置付け」第161回宋代史談話会（大阪府・大阪市立大学），2013/10/26
- 遠藤総史・川口敬義・渋谷武弘・永山愛・村上広大 「地名変遷にみる文字・言語」大阪大学歴史教育研究会第75回例会（大阪府・大阪大学），2014/1/18
- 遠藤総史 『『粵甸幽霊集』にみるジェンダー観—占城妃媚醜の描かれ方—』海域アジア史研究会（大阪府・大阪大学），2014/2/22
- 今井貴之・岡田陽平・清水香穂・西山真吾・福村一弥 「外交における「翻訳」—日本史を世界史から見直す—」大阪大学歴史教育研究会第75回例会（大阪府・大阪大学），2014/1/18
- 岡野翔太 「日本における台湾系華僑総会—大阪中華総会を例に—」神阪京華僑口述記録研究会（兵庫県・神戸華僑歴史博物館），2013/10/6

- 岡野翔太「兵庫県台湾同郷会の成立と中華民国の動揺」神阪京華僑口述記録研究会（兵庫県・神戸華僑歴史博物館）  
2013/12/7
- 郭湊寧・蒲谷和敏・高岡萌・松村悠也・山田耕一郎「「国語」形成の比較史—スペインと中国を事例に一」大阪大学歴史教育研究会第74回例会（大阪府・大阪大学），2013/12/21
- 吉川和希「黎朝前期ベトナムの官僚制確立に関する一考察—黎希葛碑文の分析を通して—」中国四国歴史学地理学協会（徳島県・鳴門教育大学），2013/6/9
- 阿久根晋・吉川和希「ベトナム史研究におけるポルトガル語史料の可能性——アントニオ・カルディン『栄光の日本管区におけるイエズス会の闘い』の1648年鄭阮戦争関連記事を例に——」海域アジア史研究会（大阪府・大阪大学），2013/6/22
- 吉川和希「15世紀後半における中越間の使節往還—1475年ベトナム使節の雲南到来とその背景—」海域アジア史研究会（大阪府・大阪大学），2014/2/22  
〔博士後期〕
- 猪原達生「唐代宦官制度における中使就任者の実態に関する一考察—内養と供奉官の比較から—」第1回若手アジア史論壇関西部会（大阪府・大阪大学），2013/8/13
- 多賀良寛「19世紀ベトナムにおける銀納制の展開」東南アジア学会第89回研究大会（鹿児島県・鹿児島大学郡元キャンパス），2013/6/1
- 多賀良寛「19世紀ベトナムにおける小額貨幣流通の展開—銅銭と垂鉛銭の問題を中心に—」第44回西日本貨幣史研究会（兵庫県・甲南大学岡本キャンパス），2013/6/9
- 多賀良寛「近世ベトナムにおける銀山開発とベトナム銀の対中流出—東アジア銀流通圏におけるベトナム銀の意義—」明清史研究合宿2013（大阪府・パナソニックリゾート大阪），2013/8/7
- 多賀良寛「十九世紀ベトナムにおける穀物流通の展開—ベトナム阮朝の漕運制度を中心に—」第111回史学会東洋史部会（東京都・東京大学本郷キャンパス），2013/11/10
- 田由甲「明代以降、福建省沿海地域の〈境〉について」「近現代中国における社会経済制度の再編」共同研究班研究会（京都府・京都大学人文科学研究所），2013/6/14
- 田由甲「甘棠堡の誕生—嘉靖後期から万暦前期までの一閩東沿海農村聚落像」2013年度第1回中国近世近代史研究会（大阪府・大阪市立大学），2013/6/29
- 田由甲「民国20年代晋江县安海镇的〈境〉和編查保甲」第16回大阪大学—上海交通大学学術交流セミナー（大阪府・大阪大学），2013/10/23【中国語発表】
- 富田暁「インドネシア西カリマンタン州におけるアジア・太平洋戦争の記憶・語り・表象—ポンティアナック事件を中心に—」第20回多文化間精神医学会 シンポジウム10 戦争とポストコロニアル・トラウマ（栃木県・栃木県総合文化センター），2013/6/15
- TOMITA Aki（富田暁）“How the Indonesian people commemorate the 'Massacre' Incident?: --- the Japanese Occupation and its aftermath in West Kalimantan (ex-Dutch East Indies), ” Workshop on COLONIAL/IMPERIAL ENCOUNTERS IN WARTIME AND POSTWAR ASIA -Light and Darkness (UK, London School of Economics), 2013/9/18
- 新見まどか「唐代河北藩鎮と公主降嫁——ウイグルとの関連を中心に」第45回東洋史研究会（福岡県・福岡大学），2013/9/8
- 新見まどか「唐代河北藩鎮をめぐる公主降嫁とウイグル」第162回宋代史談話会（大阪府・大阪市立大学），2013/11/30
- 新見まどか「書評：馮金忠（著）『唐代河北藩鎮研究』（2012年9月、北京、科学出版社）」第49回中央アジア学フォーラム（大阪府・大阪大学），2013/12/14
- 西田祐子「唐前半期における蕃将と蕃兵——契苾氏と涼州の契苾集団を中心に——」中央ユーラシア学研究会（大阪府・大阪大学），2013/11/28
- 西田祐子「唐太宗・高宗期における親衛集団と左右両翼体制」第37回遼史を読む会（兵庫県・関西大学）2014/2/13.
- 旗手瞳「吐谷渾慕容氏の東遷—慕容曦皓墓誌の検討を通じて—」第49回中央アジア学フォーラム（大阪府・大阪大学），

2013/12/14

藤澤聖哉「清末民国時期区域認識和図、圩的残存」第16回大阪大学—上海交通大学学術交流セミナー（大阪府・大阪大学），2013/10/23【中国語発表】

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2013年度】

〔博士後期〕

井上徹・辻高広・山本一・田由甲・申斌（共著）『『撫粵政略』都市関係史料集』（井上徹・辻高広共編）大阪市立大学文学研究科, p. 30, 2014/3

新見まどか「書評：馮金忠『唐代河北藩鎮研究』『史泉』第119号, pp. 17-23, 2014/1（査読有り）

布和（訳）『中国都市史』（斯波義信著）北京大学出版社, 257p., 2013/10（『中国都市史』（東京大学出版会, 2002年）の中国語訳）

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD: 3名 DC2: 3名 DC1: 1名（計7名）

2013年度 PD: 3名 DC2: 2名 DC1: 2名（計7名）

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部: 0名 大学院: 3名（計3名）

2013年度 学部: 1名 大学院: 0名（計1名）

## 6. 専門分野出身の研究者

（大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について）

坂尻彰宏 招へい研究員 大阪大学全学教育推進機構 准教授 2012/4

向正樹 招へい研究員 同志社大学グローバル地域文化学部 准教授 2013/4

山本明志 招へい研究員 大阪国際大学国際コミュニケーション学部 講師 2013/4

岡田雅志 招へい研究員 大阪大学文学研究科助教 2014/4

宮内肇 学振特別研究員 立命館大学文学部 准教授 2014/4

横山政子 博士後期課程修了 志學館大学人間関係学部 准教授 2014/4

## 7. 専門分野出身の高度職業人

（2012年度～2013年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 2名

2012年度: 1名 2013年度: 1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名  
その他 0名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 8 名

2012 年度 : 4 名      2013 年度 : 4 名

## 9. 刊行物

2012 年度

- ・『内陸アジア言語の研究』第 27 号(中央ユーラシア学研究会), 2012 年 8 月, 180p.
- ・荒川正晴(編)『東ユーラシア出土文献研究通信 第 3 号』(2010-2013 年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書), 2013 年 3 月, 103p.
- ・桃木至朗(編)『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ 7』(2011 年度-2013 年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書), 大阪: 大阪大学文学研究科, 2012 年 6 月, 306p.
- ・桃木至朗(編)『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ 8 Papers presented at the Second AAWH (Asian Association of World Historians), Seoul: Ewha Womans University, April 27-29, 2012』(2011 年度-2013 年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書), 大阪: 大阪大学文学研究科, 2012 年 12 月, 247p.

2013 年度

- ・片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』第 5 号、大阪大学文学研究科、2014 年 3 月、130 ページ (2013 年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 中間報告書)
- ・『内陸アジア言語の研究』第 28 号(中央ユーラシア学研究会), 2013 年 9 月, 170p.
- ・桃木至朗(編)『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ 9』(2011 年度-2013 年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書), 大阪: 大阪大学文学研究科, 2013 年 7 月, 42p.
- ・桃木至朗(編)『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ 10』(2011 年度-2013 年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書), 大阪: 大阪大学文学研究科, 2014 年 3 月, 156p.

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

- ・中央ユーラシア学研究会(荒川研究室に事務局)
  - 1) 『内陸アジア言語の研究』の編集・出版
  - 2) 中央アジア学フォーラムの開催; 会場は大阪大学文学部で年 2~3 回  
参加人数は毎回 35 名~45 名, 参加者の所属機関は延べ約 30

2012 年度 2012 年 7 月 28 日(第 45 回)、2012 年 12 月 22 日(第 46 回)、2013 年 3 月 30 日(第 47 回)

2013 年度 2013 年 9 月 21-22 日(第 48 回)、2013 年 12 月 14 日(第 49 回)、2014 年 3 月 29 日(第 50 回記念国際大会)
- ・海城アジア史研究会(桃木研究室に事務局; 会場は大阪大学文学研究科)  
参加人数は毎回 10 名~30 名、参加者の所属機関は延べ約 20

2012 年度 2012 年 5 月 19 日、2012 年 7 月 28 日、2012 年 9 月 19 日、2012 年 10 月 8 日、2012 年 11 月 24 日、2013 年 1 月 26 日、2013 年 3 月 23 日 2011

2013 年度 2013 年 5 月 12 日、2013 年 5 月 25 日、2013 年 6 月 22 日、2013 年 9 月 7 日、2013 年 10 月 15 日、2013 年 10 月 19 日、2013 年 11 月 23 日、2014 年 2 月 22 日

\*海城アジア史研究会創立 20 周年記念シンポジウム 2013 年 12 月 2 日(韓国・木浦で木浦大学島嶼文化研究院と共催、参加約 40 人)

- ・大阪大学歴史教育研究会(会の運営に参加; 会場は大阪大学文学研究科)  
参加人数は毎回 30 名~40 名, 参加者の所属機関は延べ約 120

2012 年度 2012 年 4 月 7 日、2012 年 4 月 21 日、2012 年 5 月 19 日、2012 年 6 月 16 日、2012 年 7 月 21 日、2012 年 10 月 20 日、2012 年 11 月 17 日、2012 年 12 月 15 日、2012 年 1 月 19 日、2012 年 2 月 9 日、2013



年3月2日、2013年3月6日

2013年度 2013年4月20日、2013年5月18日、2013年6月18日、2013年7月20日、2013年10月19日、  
2013年11月16日、2013年12月21日、2014年1月18日、2014年2月1日、2014年3月16日

・明清史研究合宿2013 2013年8月7-9日 約100名

・大阪大学-上海交通大学 学術交流セミナー 2013年10月23日（於大阪大学豊中キャンパス）20名

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 片山剛教授

1952年生。1981年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。文学修士（東京大学）。1981年高知大学人文学部講師、1984年同助教授、1989年大阪大学文学部助教授、1996年同教授を経て、1998年4月より大学院文学研究科教授。専攻：中国近世／近代史。

#### 1-1. 論文

片山剛「20世紀前半、長江中洲の開発をめぐる社会史：南京江心洲の場合」森時彦(編)『長江流域社会の歴史景観』京都大学人文科学研究所, pp. 103-126, 2013/10

片山剛「対自然的擁有形態の多重結構」日本人間文化研究機構現代中国区域研究項目(編)『当代日本中国研究』1(歴史・社会), 社会科学文献出版社, pp. 200-225, 2013/9

片山剛「華南地方社会と宗族——清代珠江三角洲的地縁社会、血縁社会、図甲制」森正夫等(編)『明清時代史の基本問題』商務印書館, pp. 422-449, 2013/8

片山剛「漢族と非漢族をめぐる史実と言説：広東省を中心に」大阪大学中国文化フォーラム(編)『現代中国に関する13の問い——中国地域研究講義』大阪大学中国文化フォーラム, pp. 3-25, 2013/3

#### 1-2. 著書

片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』5, 大阪大学文学研究科片山剛研究室, 130p., 2014/3

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

片山剛(コラム)「歴史学の醍醐味をどう伝えるか」史学会(編)『史学雑誌』122-3, 史学会, pp. 35-37, 2013/3

#### 1-4. 口頭発表

片山剛「20世紀前半、長江中洲の開発と開発農民の具体像：南京付近の中洲を中心に」京都大学人文科学研究所共同研究：近代中国における社会経済制度の再編, 村上衛, 京都大学, 2014/1

片山剛(基調講演)「20世紀前半、長江中洲の開発と開発農民の具体像：南京付近の中洲を中心に」第4回ワークショップ：近代東アジア土地調査事業研究：近代東アジア土地調査事業研究, 片山剛, 大阪大学, 2013/12(『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』5, pp. 39-57, 2014/3)

片山剛(招待講演)「珠江三角洲地区漢族裔民社会的誕生及其特質」南京大学歴史学系海外学者講演シリーズ, 南京大学歴史学系(中国), 南京大学(中国), 2012/12

片山剛(招待講演)「開荒、環境保護、地主と農民：以二十世紀的前半期南京市江心洲為例」第六屆現代中国社会變動与東亜新格局国際学術討論会：中国社会變動与東亜新格局, 東華大学歴史学系(台湾)、大阪大学中国文化フォーラム(日本)、南開大学歴史学院(中国)、東華大学(台湾), 2012/8

## 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2011年度～2014年度、基盤研究(A) 一般、代表者:片山剛

課題番号:23242043

研究題目:中国における土地領有の慣習的構造と土地制度近代化の試み

研究経費: 2012年度 直接経費 5,300,000円 間接経費 1,590,000円

2013年度 直接経費 5,300,000円 間接経費 1,590,000円

研究の目的:

第一に、近代中国における土地の調査・整理事業と土地制度近代化の試みについて、主に1930年代中葉～40年代後半の南京市の土地調査・整理事業を対象に考察する。これを通じて、20世紀前半の中国大陸における土地制度のあり方を、古代から現在に至る中国史上のなかに定位するとともに、近代東アジア諸地域と対比した位置づけも行う。第二に、伝統中国における「土地の近代的所有」の範疇に収まらない事象に関する知見を、土地調査事業時に報告された事例の解析と、当該事例に即して実施する農村古老への採訪調査とによって実証的かつ具体的に提示する

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

一般財団法人東方学会・地区委員, 2011年7月～現在に至る

公益財団法人史学会・評議員, 2001年10月～現在に至る

## 2. 荒川 正晴 教授

1955年生。1986年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程中退。文学博士(大阪大学)。早稲田大学非常勤講師、大阪大学文学部助教授を経て、2001年4月より現職。(財)東洋文庫研究員。専攻:中央アジア古代史。

### 2-1. 論文

---

Arakawa, Masaharu, "The Transportation of Tax Textiles to the North-West as part of the Tang-Dynasty Military Shipment System" Helen Wang *Journal of the Royal Asiatic Society*, (The Royal Asiatic Society), 23-2, The Royal Asiatic Society, pp. 245-261, 2013/4

Arakawa, Masaharu, "Chinese Research on Sources Excavated from Turfan Archeological Sites" HAMASHITA Takeshi *Asian Research Trends*, 7, The Toyo Bunko, pp. 19-40, 2012/12

荒川正晴「英国図書館蔵和田出土木簡の再研究—以木簡内容及其性質を中心」朱玉麒『西域文史』(北京大学中国古代史研究中心・新疆師範大学西域文史研究中心), 6, 科学出版社, pp. 33-46, 2012/4

### 2-2. 著書

---

なし

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

荒川正晴「インド・イラン起源の諸宗教と中国」『歴史と地理』, 664, 山川出版社, pp. 1-13, 2013/5

Arakawa, Masaharu (Book review), "The Silk Road: A New History. By Valerie Hansen. New York: Oxford University Press, USA, 2012.", Akinobu Kuroda, *International Journal of Asian Studies*, (Institute for Advanced Studies on Asia), 11-1, Cambridge University Press, pp. 89-90, 2014/1

## 2-4. 口頭発表

荒川正晴 (招待講演)「唐朝の対外交流と通行証」古代東アジア・東ユーラシアの対外交通と文書, 国書研究会, 国学院大学, 2014/1

荒川正晴 (招待講演)「唐帝国の中央アジア支配とキャラヴァン交易の変質」大阪歴史科学協議会 12月例会「交通と国家」, 大阪歴史科学協議会, 大阪市弁天町市民学習センター, 2013/12

荒川正晴 (招待講演)「李柏文書研究の現段階 -主に古文書研究の立場から-」国際シンポジウム「広域アジアにおける大谷光瑞の活動」, 科研(代表:柴田幹夫), 西本願寺・伝道院, 2013/10

荒川正晴 (招待講演)「敦煌文書に見る妻の離婚、娘の財産相続」中国前近代ジェンダー史ワークショップ, 中国前近代ジェンダー史学会, 日本大学, 2013/1

荒川正晴 (招待講演)「前近代中央アジアの国家と交易」内陸アジア史学会大会, 内陸アジア史学会大会, 北海道大学, 2012/11(『内陸アジア史研究』28, pp. 192-193, 2013/3)

荒川正晴 (招待講演)「シルクロードと日本-来世観の伝播を中心に-」桜花会講演会, 大阪大学工学部桜花会, 大阪大学, 2012/11

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

荒川正晴 大阪大学共通教育賞, 大阪大学共通教育機構, 2010/11

荒川正晴 流沙海西奨学会賞, 流沙海西奨学会, 1986/12

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010年度～2013年度、基盤研究(A) 海外、代表者:荒川正晴

課題番号:22251008

研究題目:シルクロード東部の文字資料と遺跡の調査-新たな歴史像と出土史料学の構築に向けて-

研究経費: 2012年度 直接経費 9,000,000円 間接経費 2,700,000円

2013年度 直接経費 4,900,000円 間接経費 1,470,000円

研究の目的:

トルファン・敦煌・ハラホト地域は、出土文字資料の宝庫として内容・数量ともに群を抜いており、近年においても重要な文字資料の発見が続いている。そうした新出文字資料は一応、中国の研究者により公開が進められているが、なお十分には利用されていない。というのも、これらの文字資料を利用するためには、まず資料の出土現場に赴き、現地において資料を「史料」として利用するための前提作業を行う必要があるからである。すなわち新出の資料はいうまでもなく、既出資料であり、その写真・図像が公表されているものであっても、現場における実見調査を通じて文字資料の古文書学・文献学的データを収集するとともに、それらがどのような場で如何にして出土したのか見きわめる必要がある。以上の手続きを踏まえてはじめて、文字資料を用いる上での必須要素、資料の作成過程やそれ自体がもつ性格や機能、さらには現在にいたるまでの各資料の伝来の過程を明らかにすることができる。当地の既出文字資料に関する資料集が出版され、その文面だけを解釈してみても、対象とする文字資料を理解したことには全くなならない。歴史の現実を直接伝える大量の歴史資料が存在しながら、それが編纂物のように「史料」として容易に利用できない所以である。

そのため本研究は、シルクロード東部の出土文字資料と関連遺跡に対する現地調査を通じて、当該地域の新たな歴史像の構築に寄与するとともに、出土文字資料に関する知識を整理し体系立てる「出土史料学」の基盤を確立し、出土資料を「史料」として一般化させることを目指している。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

内陸アジア史学会・副会長・理事, 2013年4月～現在に至る

東方学会・学術委員, 2011年9月～現在に至る

## 3. 桃木 至朗 教授

1955年生。京都大学文学部卒、同大学院文学研究科単位取得退学。論文博士（文学、広島大学）。大阪外国語大学専任講師（ベトナム語）、大阪大学教養部助教授、同文学部助教授（いずれも東洋史学）などをへて2001年から現職（2010-12年度はコミュニケーションデザイン・センターと兼任）。現在、日本学会会議史学委員会連携会員。専攻：東南アジア史／アジア海域史／歴史教育。

### 3-1. 論文

---

Momoki, Shiro, "A Spatial Analysis of Thăng Long Capital During the Lý Period Through Re-Exploitation of Written Sources" *TRaNS: Trans -Regional and -National Studies of Southeast Asia*, Vol. 2, issue 1, Institute of East Asian Studies, Sogang University, pp. 61-78, 2014/1

Momoki, Shiro, "Local Rule of Đại Việt under the Lý Dynasty: Evolution of a Charter Polity After the Tang-Song Transition in East Asia," Asian Association of World Historians(編) *The Asian Review of World Histories*, vol.1, no. 1, pp. 45-84, 2013/3

桃木至朗 「アジアから全体史を見る／語る」『歴史評論』(歴史科学協議会), 748, pp. 42-49, 2012/8

### 3-2. 著書

---

Fujita Kayoko, Momoki, Shiro, Anthony Reid(共編著), *Offshore Asia: Maritime Interactions in Eastern Asia before Steamships*, Institute of Southeast Asian Studies, Singapore, 344p., pp. 1-15, 16-52, 2013/9

秋田茂, 桃木至朗(共編著) 『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会, 305p., pp. 9-43, 107-143, 2013/3

Nguyễn Quang Ngọc, Momoki, Shiro(共編著), *日越タンロン関連研究論文集 Nhật-Việt tuyển tập bài viết nghiên cứu Hoàng thành Thăng Long*, National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo, 383p., 日越対訳, pp. 355-378, 2012/7

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

桃木至朗 「羽田正『新しい世界史へ』」『歴史評論』753, 歴史科学協議会, pp. 102-103, 2013/1

### 3-4. 口頭発表

---

桃木至朗 「世界史教育と地域史教育」同志社大学グローバル地域文化学会第一回大会, 同志社大学グローバル地域文化学会, 同志社大学, 2013/12(『GR-同志社大学グローバル地域文化学会紀要』2, pp. 4-13, 2014/3)

桃木至朗 「大学の専門教育・教員養成教育の刷新 - 歴史教育における高大連携の新しいかたち-」シンポジウム「新しい歴史教育の挑戦」, 九州歴史科学研究会, 福岡大学, 2013/12

Momoki, Shiro, (ベトナム語発表) “Ban lịch sử (phía Nhật) đã chú ý đến những vấn đề gì của Thăng Long?”, Hội thảo khoa học: Những thành tựu hợp tác Việt Nam – Nhật Bản từ Dự án Quy hoạch Di sản UNESCO/Nhật Bản “Bảo tồn Di sản Văn hóa Thăng Long – Hà Nội”, Trung tâm Bảo tồn di sản Thăng Long – Hà Nội, 2013/9

Momoki, Shiro, (ベトナム語発表) “ “Nói lại” và “so sánh” lịch sử Nhật Bản với lịch sử Việt Nam”, International Conference: “History, Culture and Cultural Diplomacy – Revitalizing Vietnam-Japan Relations in the New International Context”, University of Social Sciences and Humanities, Vietnam National University, Hanoi, 2013/9

桃木至朗「高大連携でつくる新しい歴史教育～普通の教員が教えられる東南アジア史に向けた取り組みから」第52回大会:転換期の歴史教育とは, 全国歴史教育研究協議会, 横浜市:ワークピア横浜, 2013/8

桃木至朗「日本のある大学における「東洋史」専門教育の再建～「阪大史学の挑戦」を牽引する東洋史学専門分野～」国際シンポジウム:東アジア関係学の構想, 名古屋大大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター, 名古屋大学, 2013/2

Momoki, Shiro, (ベトナム語発表)“Cung Thánh Từ, chế độ thượng hoàng và khu cung cấm của Thăng Long thời Trần”, Hội thảo quốc tế về Việt Nam học lần thứ tư: Việt Nam trên đường hội nhập và phát triển bền vững, Viện Khoa học Xã hội Việt Nam, Hội trường Quốc tế Mỹ Trì, 2012/11

桃木至朗「21世紀の世界史教育と東南アジア史」京都府高等学校地理歴史科・公民科研究会創立20周年記念講演会, 京都府高等学校地理歴史科・公民科研究会, 京都キャンパスプラザ, 2012/10

桃木至朗「東北地方でわざわざ東南アジア史を学ぶ意味を明示できる歴史学と歴史教育は可能か?」宮城県高等学校社会科(地歴科・公民科)教育研究会歴史部会, 仙台第二高等学校, 2012/8

Momoki, Shiro, (ベトナム語発表)“So sánh kinh thành Thăng Long thời Lý-Trần với một số đô thành Đông Á – Đông Nam Á”, Tọa đàm khoa học: Về khu trung tâm hoàng thành Thăng Long, Quỹ tín thác UNESCO-Nhật Bản, Trung tâm Bảo tồn Di sản Thăng Long – Hà Nội, 2012/8 (Tọa đàm khoa học: Về khu trung tâm hoàng thành Thăng Long, pp. 26-32, 2012/8)

桃木至朗「高大連携で大学の歴史教育を変える新しい挑戦」熊本県高等学校教育研究会地歴・公民部会 2012年度総会, 熊本県高等学校教育研究会地歴・公民部会, 熊本市青年会館, 2012/5

Momoki, Shiro, (パネル・コーディネーターおよび報告)“Changing Local Administrative Units in Đại Việt under the Trần Dynasty (1226-1400): A Process of Localization of the Tang-Song Modeled Administrative System in an East Asian “Charter Polity””, Second Congress of AAWH: Panel: Central Government and Local Rule in “Small Empires” Surrounding China during the Period of Tang-Song Transition, Asian Association of World Historians (AAWH), Ewha Womans University, Seoul, 2012/4(*JSPS Grant-in Aid for Scientific Research (A): Vietnamese History Seen From the Mountains, Working Paper*, No. 1, pp. 57-84, 2013/2)

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2011年度～2013年度、基盤研究(A) 一般、代表者:桃木至朗

課題番号:23242034

研究題目:最新の研究成果にもとづく大学教養課程用世界史教科書の作成

研究経費:2012年度 直接経費 10,000,000円 間接経費 3,000,000円

2013年度 直接経費 13,200,000円 間接経費 3,960,000円

研究の目的:

全国の高校・大学教員と協力し、大学院生も巻き込んだ月例会および作業部会を通じて、(1)大阪大学史学系が重点課題としてきた諸テーマに加え、新しい歴史教育に必須な文理融合などのテーマ群について、教員用(高大両用)の解説、教材、用語集を作成し、その内容や実践報告も含め、可能な部分は海外や、来日した留学生に向けても発信する。(2)それらの内容と、他大学の教養歴史教育や世界の歴史教育の状況の調査研究をふまえて、大学教養課程向けの世界史教科書を作成する。(3)以上の取り組みを通じて、教職免許用の教育内容や歴史研究法の改善をはかる。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本学術会議・連携会員, 2011年10月～現在に至る

東方学会・評議員, 2011年9月～現在に至る

東南アジア学会・教育・社会連携担当理事, 2011年1月～2012年12月

文化遺産国際協力コンソーシアム・東南アジア専門委員会委員, 2006年12月～現在に至る

アジア太平洋フォーラム・淡路会議事務局・アジア太平洋研究賞審査委員, 2004年4月～現在に至る

## 4. 田口 宏二郎 准教授

1971年生。1999年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）（大阪大学）。2003年大阪大学文学研究科助手、2004年追手門学院大学文学部講師、2008年追手門学院大学国際教養学部准教授を経て、2012年4月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻：中国近世史。

### 4-1. 論文

---

田口宏二郎 「(訳註)曹溶『明漕運志』(二)」『アジア学科年報』(追手門学院大学アジア学会), 7, 追手門学院大学国際教養学部アジア学科, pp. 61-84, 2013/12

田口宏二郎 「「北京人」と上海人」追手門学院大学国際教養学部アジア学科『アジアの都市と農村』和泉書院, pp. 259-291, 2013/10

田口宏二郎 「ハードボイルドな中国社会経済史」『中国研究月報』(一般社団法人 中国研究所), 67-3, 一般社団法人 中国研究所, pp. 24-35, 2013/3

田口宏二郎 「明代河北の農業経済と大運河」『東洋史研究』(東洋史研究会), 71-4, pp. 28-63, 34⑤, 2013/3

田口宏二郎 「(訳註)曹溶『明漕運志』(一)」『アジア学科年報』(追手門学院大学アジア学会), 6, 追手門学院大学国際教養学部アジア学科, pp. 70-90, 2012/12

### 4-2. 著書

---

なし

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 4-4. 口頭発表

---

田口宏二郎 (パネリスト)「1930-40年代南京の不動産登記と抵押」ワークショップ近代東アジア土地調査事業研究, 大阪大学文学研究科, 2013/12(『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』5, pp. 35-38, 2014/3)

田口宏二郎 (パネリスト)「土地他項権利証明書存根」, 中央ユーラシア比較法制度史研究会, 静岡市産学交流センター, 2013/11

田口宏二郎 (パネリスト)「南京国民政府時期、首都空間での土地登記」共同研究班「近現代中国における社会経済制度の再編」, 京都大学人文科学研究所, 2013/10

田口宏二郎 (パネリスト)「南京国民政府土地登記政策与地権制度」大阪大学・上海交通大学学術交流会, 大阪大学文学研究科, 2013/10

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2012年度～2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者:田口宏二郎

課題番号:24520817

研究題目:明清代河北の地域構造に関する歴史社会学的研究

研究経費:2012年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2013年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

14世紀以降、中国の首都として長期的に政治的・軍事的中心となった北京の周辺地域を、特にその経済的側面から分析することを目的とする。とりわけ、南方地域より年間数十万トンにもものぼる穀物を北京へ輸送しつづけたことが、周辺地域の要素賦存や流通構造にいかなる規定性を与え、さらには北京を理想的中心とする世界像とどのような相関性を示したか、明らかにする。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

### 5. 岡田 雅志 助教

1977年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。大阪大学大学院文学研究科特任研究員、帝塚山大学非常勤講師を経て、2014年より現職。専攻:近世東南アジア史。

#### 5-1. 論文

Okada, Masashi, "The Trade in Vietnamese Cinnamon and the Circulation of Herbs in Japan during from the 17th to the 19th Centuries" *Osaka University Research Project of History Education Working Paper Series*, 8, Osaka University Research Project of History Education, pp. 240-246, 2012/12

岡田雅志「タイ族ムオン構造再考:18-19世紀前半のベトナム、ムオン・ロー盆地社会の視点から」『東南アジア研究』50-1, 京都大学東南アジア研究所, pp. 3-38, 2012/7

#### 5-2. 著書

なし

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岡田雅志(翻訳、原著者・原題(英語)):George Bryan Souza, "Global Commodities and Commerce in the Early Modern World: the case of Sri Lankan Cinnamon)" 「ジョージ・スーザ「近世におけるグローバル商品と交易—セイロン・シナモンの事例」」秋田茂(編)『アジアから見たグローバル・ヒストリー』ミネルヴァ書房, pp. 118-147, 2013/11

岡田雅志「(書評)榎永真佐夫『黒タイ年代記—「タイ・プー・サク」』(叢書 知られざるアジアの言語文化 5)東京:雄山閣、2011、163p.」『東南アジア研究』50-2, 京都大学東南アジア研究所, pp. 314-317, 2013/1

岡田雅志(翻訳、原著者・原題(全てベトナム語)):Đỗ Văn Ninh, "Những hiểu biết mới về thành Thăng Long", Bùi Minh Trí, Tổng Trung Tín, "Giá trị nổi bật toàn cầu, tính chân thực và tính toàn vẹn khu trung tâm Hoàng thành Thăng Long – Hà Nội: từ phân tích, đánh giá di tích khảo cổ học", Đinh Văn Thuận, Nguyễn Địch Dỹ, "Đặc điểm môi trường địa chất – cổ địa lý Holocene giữa – muộn khu Hoàng thành Thăng Long – Hà Nội)" 「ドー・ヴァン・ニン「タンロン城に関するいくつかの新発見」、ブイ・ミン・チー、トン・チュン・ティン「タンロン-ハノイ皇城中心区の突出したグローバルな価値、真実性及び完全性:考古学遺跡の分析と評価か

ら, ディン・ヴァン・トゥアン、グエン・ディック・ジー「タンロン-ハノイ皇城区の完新世中～後期における地質・古地理学的環境の特徴」友田正彦、佐藤桂、新免歳靖(共編)『日越タンロン城関連研究論集:ユネスコ日本信託基金タンロン・ハノイ文化遺産群の保存事業』東京文化財研究所, pp. 19-25, 151-161, 219-226, 2012/7

#### 5-4. 口頭発表

岡田雅志「都市としてのムアン:東南アジア山地世界における都市化とネットワーク」第16回関西比較中世都市研究会, 関西比較中世都市研究会, 大阪市立大学, 2013/11

岡田雅志「タイダム(黒タイ)とタイソンダムの間:移動・拡散とエスニック・アイデンティティ」第24回百越の会, 国立民族学博物館, 2013/7

岡田雅志「世界史教育における空間認識の現状と課題:高校世界史教科書所載の地図の検討から」大阪大学歴史教育研究会第67回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 2013/3

岡田雅志「辺境から『世界史』を眺める:ベトナム・タイバック山地地域史からの試み」科研「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」(平成21-25年度、基盤研究(S)課題番号21222001、代表:羽田正)・大阪大学歴史教育研究会共催若手研究者交流会第2回, 大阪大学, 2013/2

岡田雅志「18世紀における中越境界地域の社会変容:諒山・高平地方における藩臣集団の形成をめぐって」第110回史学会研究大会・東洋史部会, 史学会, 東京大学, 2012/11(『史学雑誌』122-1, pp. 106-107, 2013/1)

岡田雅志「近世ベトナム社会における肉桂の生産・流通とその意義」2012年度中国四国歴史学地理学協会研究大会・東洋史部会, 中国四国歴史学地理学協会, 広島経済大学, 2012/6

Okada, Masashi, "They are from Muang Thaeng or Dien Bien Phu? : Memory of Migration History and Cross-border Identity through the case of Thai Song Dam in Thailand", Digital Crossroads : Media, Migration and Diaspora in a Transnational Perspective, Utrecht University, Utrecht, Netherlands, 2012/6

Okada, Masashi, "The Trade in Vietnamese Cinnamon and the Circulation of Herbs in Japan during from the 17th to the 19th Centuries", 2nd Congress of the Asian Association of World Historians, the Asian Association of World Historians, Ewha Womens University, Seoul, Korea, 2012/4

#### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし



## 2-9 西洋史学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 4 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：江川 温、竹中 亨、秋田 茂、藤川 隆男

准教授：中野耕太郎、栗原 麻子

助教：水田 大紀

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
41	9	1	0	0	7	0	2

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	15	5	0	2
2013	16	2	1	2
計	31	7	1	4

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

今日の西洋史学では、「世界史」を視野に入れた西洋文明のインパクトとレスポンスを相互的過程として考察することが求められている。そのためには、特定の地域や時代を超えた多様な世界の歴史を知り、また他の人文・社会諸科学の成果を活用できなくてはならない。学部と大学院の教育では、そうした広範な研究領域の中に、個々の学習と研究を適切に位置づけられるように講義・演習を構成する。また同時に、卒業・修了後、専門職業人として活躍できる基礎的な実務能力を身に付けられるように、特に、高度の論理力・分析力と、高い外国語能力の養成を重視する。具体的には、学部においては、①ディベート演習、リサーチ演習によって、英語の活用能力や口頭発表・論文執筆能力を向上させること、②パワーポイントを使ったプレゼンテーションを実践させること、大学院においては、①論文作成に向けてのモデル・タイムスケジュールを提案する等、修士、博士論文の効率的な作成指導を徹底すること、②文学研究科内外の他

専修との共同授業、「歴史学のフロンティア」を実施し、学際的かつ領域横断的な思考を涵養すること、③研究ジャーナルの刊行を通して、出版事業の編集・渉外等の実務を習得させることを目標とした。

## 2. 研究

西洋史研究室は、学会の運営や定期刊行物の発行、さらには各種共同研究の結節点となって、日本の西洋史研究の中核を担うことを目指している。教員は個人として積極的に単著論文を刊行するだけでなく、世界史・各国史、歴史事典類の編集、執筆など、学界の共有財産の形成や基礎的研究の充実のために尽し、あわせて研究室の主催・協賛による国際研究集会の企画・運営をとおした研究の国際化に寄与することを目標とした。また、大学院生には外部の研究資金への応募や海外での研究機会の活用を勧奨するとともに、査読つき学術雑誌への投稿、学会での口頭報告を数多く行えるように支援することとした。

## 3. 社会連携

西洋史研究室は、研究成果を社会一般、とりわけ高等学校での世界史教育に広く還元することをめざしている。具体的には、①高校世界史教科書の執筆、②高等学校への出張授業、③大阪大学歴史教育研究会の共催（東洋史学専修と）、④世界史副読本の編集、⑤海外での講義の実施、⑥個人および研究室のホームページの充実を目標とした。

# Ⅲ. 活動の概要(2012年度～2013年度)

## 1. 教育

演習をディベート、リサーチ等に分化することによって、大学院、学部における論文作成指導などのシステムを効率的に整備した。また、パワーポイントを用いたプレゼンテーションや英語での演習を積極的に実施した。また、大学院では、他学部、他専修との共同授業「歴史学のフロンティア」の充実をはかり、加えて、研究ジャーナル『パブリック・ヒストリー』の刊行を通じた出版実務の習得、雑誌編集業務の実習も順調に進めた。

## 2. 研究

西洋史研究室は、雑誌『西洋史学』、『パブリック・ヒストリー』の編集やワークショップ西洋史・大阪を恒常的に主催するだけでなく、学会や研究会などの事務局や代表者を提供することで、西洋史学や他分野との共同研究の発展に貢献してきた。そのうえ、グローバルヒストリー・セミナーなど、海外からの招聘研究者との学術集会を恒常的に開催し、研究の国際化にも尽力した。教員個人も、総計 12 篇の学術論文を刊行するとともに、『戦争のつぼ——第一次世界大戦とアメリカニズム』（単著）や、『グローバルヒストリーと帝国』（共編著）・『アジアからみたグローバルヒストリー』（共編著）・『歴史的賠償と「記憶」の解剖』（共訳）などの専門学術書を出版するだけでなく、一般書においても（単著）『イギリス帝国の歴史—アジアから考える』は、「第 14 回読売・吉野作造賞」を受賞し、社会的に高い評価を受けた。さらに、日本学術振興会科学研究費補助金をはじめとする競争的外部資金の代表者として、外部資金の獲得も順調であった。大学院生等は、計 8 篇の学術論文（2010 年度 3 篇、2011 年度 5 篇）、16 本の学会報告（2010 年度 8 回、2011 年度 8 回）を公表した。

## 3. 社会連携

高等学校での世界史教育との連携に関しては、高校世界史の執筆に関わるとともに、高等学校への出張講義を実施した。また、東洋史学専修、文化動態論の共生文明論講座と協力して、高校の世界史教員をまじえた大阪大学歴史教育研究会を 2 年間で 19 回共催した。さらに、海外での講義や新しいデータベースの稼働など、海外への発信や社会一般への貢献も行った。それに加えて、地方公共団体主催の講演会などにも協力した。

# Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012年度～2013年度)

## 1. 教育

上記の活動をとおして、論文作成指導の体制が大きく改善された。卒業論文、修士論文ともに質が向上し、卒論では、S評価を受ける論文が初めて生まれた。また課程博士は目標を上回る4名に達した。加えて、論文博士も1名生まれた。さらに教職を中心に計7名の高度職業人を輩出しており、これらの点から目標は十分に達成されたと言える。

## 2. 研究

研究の項に掲げられた目標は達成された。教員、院生による学術論文の刊行、学会発表はいずれも十分な成果をあげることができた。また、グローバルヒストリー・セミナーなど国際学会議の継続的な開催は、日本での西洋史研究の国際化に一定の貢献をなすものであった。加えて、西洋史研究室が、枢要な学会、研究会の事務局を運営し、共同研究機関のような機能を果たしたことは、外部の研究者からの高い評価に裏打ちされたものと考えられる。

## 3. 社会連携

上記の活動をとおして、社会連携の項に掲げた目標は、十分に達成されたと自己評価できる。とりわけ高校世界史教育との連携には、東洋史学専修・日本史学専修との協力体制を構築した上で、充実した成果が得られたと考えられる。

# V. 基本情報(2012年度～2013年度)

## 1. 博士学位授与

### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	2	1	3
2013	2	0	2
計	4	1	5

### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

#### 【課程博士】

紫垣聡「14・16世紀ミュンヘンの都市社会と秩序形成の展開」2013/3

主査：江川温 副査：栗原麻子、秋田茂、田中俊之

森本慶太「マス・ツーリズムをめぐる葛藤——1930年代スイス観光業の危機と再編——」2013/3

主査：竹中亨 副査：藤川隆男、中野耕太郎

岩崎佳孝「アメリカ合衆国における先住民「ネーション」の形成

——18世紀末～19世紀中葉のチカソー成員概念／規定から」2014/3

主査：中野耕太郎 副査：藤川隆男、秋田茂

安井倫子「アメリカにおけるアフターマティブ・アクションの展開——歴史的考察から見る国民の境界線の再編成——」

2014/3

主査：藤川隆男 副査：中野耕太郎、秋田茂

#### 【論文博士】

平山篤子『スペイン帝国と中華帝国の邂逅：十六・十七世紀のマニラ』（法政大学出版社，2012年2月刊）2012/9

主査：秋田茂 副査：桃木至朗、江川温、関哲行

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	3(3)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(3)
2013	4(4)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	5(5)
計	7(7)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	8(8)

括弧内は査読付き論文数。

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	1	7	0	0	0	8
2013	2	2	4	0	0	8
計	3	9	4	0	0	16

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (1)論文

【2012年度】

〔博士後期〕

石田真衣「総論 紛争への視角」『パブリック・ヒストリー』〈特集 紛争〉(大阪大学西洋史学会), 10, pp. 93-96, 2013/2

石田真衣「ヘルミアスの嘆願—紛争処理にみる前2世紀エジプトの社会構造」『パブリック・ヒストリー』〈特集 紛争〉(大阪大学西洋史学会), 10, pp. 97-106, 2013/2

〔その他〕

大貫挙学・藤田智子, 「刑事司法過程における家族規範——DV被害女性による夫殺害事件の言説分析」『家族社会学研究』(日本家族社会学会), 第24巻1, pp. 72-83, 2012/4

【2013年度】

〔博士前期〕

村上広大「19世紀初期バーデンにおける領邦アイデンティティの形成と歴史叙述」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 11, pp. 36-52, 2014/2

堤亮介「元首政期ローマにおける「都市の健全性」と公衆浴場」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 11, pp. 17-35, 2014/2

〔博士後期〕

岩崎佳孝「20世紀のアメリカ先住民連合の新州創設構想——セコイア州憲法制定会議(1905)の考察」『アメリカ史評論』(関西アメリカ史研究会), 30, pp. 10-29, 2013/4

岩崎佳孝「南北戦争後の先住民ネーションと黒人奴隷解放—チカソー・ネーションの成員規定と「黒人解放民」処遇を巡る考察—」, 『同志社アメリカ研究』(同志社大学アメリカ研究所), 50, pp. 1-20, 2014/3

森新太「「他者」としての在外居留商人とその帰属意識——『在ボローニャ・フィレンツェ商人組合規約』の考察——」『待兼山論叢』〈史学篇〉(大阪大学文学会), 47, pp. 1-26, 2013/12

#### (2)口頭発表

【2012 年度】

〔博士前期〕

矢野涼子「支配の境界としての日付変更線——1892 年サモアにおけるアメリカ制度への変更注目して——」大阪大学西洋史学会第 23 回若手セミナー，大阪大学／豊中市，2012/11/29

権野友里江「12、13 世紀ビザンツ帝国における知識人たちのヘレネス意識」大阪大学西洋史学会第 23 回若手セミナー，大阪大学／豊中市，2012/11/29

〔博士後期〕

石田真衣「プトレマイオス朝エジプト在地社会の再編—紛争処理にみる社会的紐帯」平成 24 年度九州史学会大会，九州大学／福岡市，2012/12/9

岩崎佳孝「アメリカ連邦体制下における先住民主権の形成—先住民チカソーによる「ネーション」再建への道程」大阪大学西洋史学会第 20 回若手セミナー，大阪大学／豊中市，2012/5/16

岩崎佳孝「アメリカ連邦体制下における先住民主権の再形成—強制移住後の「チカソー・ネーション」再建を中心に」第 17 回ワークショップ西洋史・大阪，大阪大学／豊中市，2012/5/26

森新太「中世末期イタリア商人のアイデンティティ形成をめぐる考察」広島史学研究会 2012 年度大会西洋史部会，広島大学／東広島市，2012/10/28

〔その他〕

Fujita, Tomoko, “Familiar Manifestations: Australian Family Policy since the 1970s,” International Symposium on Designing Governance for Civil Society, 慶應義塾大学三田キャンパス, 2013/2/9

Fujita, Tomoko, “In the Best Interests of Children: Welfare Quarantining and its Logic,” International Australian Studies Association, Monash University, Australia, 2012/12/5

【2013 年度】

〔博士前期〕

郭湊寧・蒲谷和敏・高岡萌・松村悠也・山田耕一郎 「「国語」形成の比較史—スペインと中国を事例に一」，大阪大学歴史教育研究会，大阪大学／豊中市，2013/12/21

今井貴之・岡田陽平・清水香穂・西山真吾・福村一弥 「外交における「翻訳」—日本史を世界史から見直す—」，大阪大学歴史教育研究会，大阪大学／豊中市，2014/1/18

〔博士後期〕

石田真衣「プトレマイオス朝エジプトにおける嘆願と和解—テーベ地方を中心に—」，日本西洋史学会第 63 回大会，古代史部会 2，京都大学／京都市，2013/5/12

石田真衣「ヘレニズム期テーベ地方における紛争処理と社会変容」，第 36 回古代エジプト研究会，昭和女子大学／東京都，2013/6/22

〔その他〕

Fujita, Tomoko, “Planning Fertility: The Embryonic Stages of Medicalization in Australia,” 日本社会学会，慶應義塾大学三田キャンパス，2013/10/12

藤田智子「オーストラリアにおける家族政策の展開——問題の表象をめぐる——」，京都大学アジア研究教育ユニット次世代研究プロジェクト『日豪両国の家族観と家族政策の通時的把握と比較検討』研究会：「オーストラリアの政党政治と家族政策(2)——日本との比較を念頭に——」，立命館大学東京キャンパス，2014/1/18

Fujita, Tomoko, “Politics of (In)fertility and the Construction of the Modern Australian Family,” The Australian Sociological Association, Monash University, Australia, 2013/11/26

Fujita, Tomoko, “Looking Back At Australian Family Policy: Stronger Families and Communities?” Australian Institute of Family Studies (AIFS) Lunch Seminar, AIFS, Australia, 2014/2/10

(3)その他(書評・翻訳など)

## 【2012年度】

〔博士前期〕

矢野涼子〈新刊紹介〉「藤川隆男（編）『アニメで読む西洋史』（山川出版社，2011年）」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），10, pp. 157-159, 2013/2

権野友里江〈書評〉「根津由喜夫著『ビザンツ貴族と皇帝政権 コムネノス朝支配体制の成立過程』（世界思想社，2012年）」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），10, pp. 146-150, 2013/2

〔博士後期〕

石田真衣〈書評〉「Benjamin Kelly, *Petitions, Litigation, and Social Control in Roman Egypt* (Oxford, 2011)」『西洋古典学研究』（日本西洋古典学会），61, pp. 157-159, 2013/3

岩崎佳孝〈学会抄録〉「アメリカ先住民分科会」『アメリカ学会会報』（日本アメリカ学会），180, p. 10, 2012/11

## 【2013年度】

〔博士前期〕

山田耕一郎〈書評〉「Paola Tartakoff, *Between Christian and Jew - Conversion and Inquisition in the Crown of Aragon, 1250-1391* (Pennsylvania, 2012).」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会）11, pp. 124-128, 2014/2

郭湊寧・蒲谷和敏・高岡萌・松村悠也・山田耕一郎〈ノート〉「「国語」形成の比較史」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書』（大阪大学歴史教育研究会），10, pp. 21-45, 2014/3

松村悠也〈書評〉「玉木俊明著『近代ヨーロッパの形成——商人と国家の近代世界システム』（創元社，2012年）」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），11, pp. 133-137, 2014/2

西山真吾〈書評〉「上垣彰・田畑伸一郎編著『ユーラシア地域大国の持続的経済発展』（ミネルヴァ書房，2013年）」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），11, pp. 137-142, 2014/2

遠藤総史・川口敬義・渋谷武弘・永山愛・村上広大〈ノート〉「地名変遷にみる文字・言語——本質論を超えて」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書』（大阪大学歴史教育研究会），10, pp. 46-68, 2014/3

野村紅太〈翻訳〉「フォーラム 戦争はすべての父—民主政アテナイにおける戦争・帝国・自由のポリティクス—」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），11, pp. 53-85, 2014/2

矢野涼子〈新刊紹介〉「北原靖明『カリブ海に浮かぶ島トリニダード・トバゴ——歴史・社会・文化の考察——』」『西洋史学』（日本西洋史学会），250, pp. 75(151)-76(152), 2013/9

〔博士後期〕

岩崎佳孝〈新刊報告〉「エイミー・ヒル・ハース『アメリカ先住民女性の現代史——“ストロング・メディソン” 家族と部族を語る』」『アメリカ学会会報』（日本アメリカ学会），181, p.9, 2013/4

森新太〈書評〉「佐藤公美『中世イタリアの地域と国家——紛争と平和の政治社会史——』（京都大学学術出版会，2012年）」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），11, pp. 128-133, 2014/2

森新太〈講演〉「『結びつくユーラシア世界』——中世ヨーロッパを中心に——」NPO 法人大阪府高齢者大学校，2013年度「世界史から学ぶ科」リレー講座（第9回），2013/9/12

森新太〈講演〉「『一体化する世界：ヨーロッパ覇権への道』——ヨーロッパ近世前半を中心に——」NPO 法人大阪府高齢者大学校，2013年度「世界史から学ぶ科」リレー講座（第11回），2013/10/3

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD：1名 DC2：0名 DC1：0名（計1名）

2013年度 PD：1名 DC2：0名 DC1：0名（計1名）

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部：0名 大学院：0名（計0名）

2013年度 学部：0名 大学院：0名（計0名）

## 6. 専門分野出身の研究者

（大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について）

堀内真由美 博士後期課程，愛知教育大学・社会科教育講座，講師，2013/4

## 7. 専門分野出身の高度職業人

（2012年度～2013年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 7名

2012年度：4名 2013年度：3名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 5名  
その他 2名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2012年度：1名 2013年度：0名

## 9. 刊行物

2012年度 『西洋史学』245-248号 学術誌（日本西洋史学会）

『パブリック・ヒストリー』第10号 学術誌（大阪大学西洋史学会）

2013年度 『西洋史学』249-251号 学術誌（日本西洋史学会）

『パブリック・ヒストリー』第11号 学術誌（大阪大学西洋史学会）

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

グローバルヒストリー・セミナー	2008年度～現在に至る
日本西洋史学会『西洋史学』編集部	2008年度～現在に至る
大阪大学西洋史学会	2008年度～現在に至る
関西アメリカ史研究会	2008年度～現在に至る
東アジアブリテン史学会（E A A B H）事務局	2011年3月～現在に至る

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

2012年度

大阪大学西洋史学会若手セミナー 学内

第19回権野友里江・矢野涼子「卒論執筆に向けてのアドバイス」(2012/5/10)

第20回岩崎佳孝「アメリカ連邦体制下における先住民主権の形成—先住民チカソーによる「ネーション」  
再建への道程」(2012/5/16)

第21回鷺田睦朗「語／騙り継がれるカティリーナ——ローマ共和政「末期」没落論の再考に向けて——」  
(2012/6/7)

第22回森新太「読書会：エリック・ミラン（山下範久訳）『資本主義の起源と「西洋の没落」』（藤原書店，2011年）」(2012/8/1)

第 23 回 矢野涼子「支配の境界としての日付変更線——1892 年サモアにおけるアメリカ制度への変更注目して——」(2012/11/29)

権野友里江「12、13 世紀ビザンツ帝国における知識人たちのヘレネス意識」(2012/11/29)

大阪大学グローバルヒストリー・セミナー 学内

第 42 回 講師：Susan Pennybacker (ノースカロライナ大学・教授)

“Writing a transnational history-From Scottsboro to Munich: race and political culture in 1930s Britain”

コメント：堀内真由美 (近畿大学非常勤講師) (2012/6/4)

第 43 回 講師：James R. Barrett (イリノイ大学教授・大阪大学招聘教授・

日本学術振興会外国人招聘研究者プログラム (短期))

“How Race and Ethnicity Shaped an American City”

コメント：中野耕太郎 (大阪大学准教授) (2012/7/2)

第 44 回 講師：Dane Kennedy (ジョージ・ワシントン大学・教授)

“Imperialism Parasitism: British Explorers and African Empires” (2013/1/10)

第 45 回 講師：Tirthankar Roy (ロンドン大学政治経済学院・東京大学招聘教授)

“India in the World Economy from Antiquity to the Present” (2013/1/20)

“Labour-intensive Industrialization in India” (2013/1/20)

## 2013 年度

大阪大学西洋史学会若手セミナー 学内

第 24 回 山田耕一郎・野村紅太「卒論執筆に向けてのアドバイス」(2013/4/25)

第 25 回 宗村敦子「書評：G. ステッドマン・ジョーンズ『階級という言葉——イングランド労働者階級の政治社会史 1832-1982 年』(刀水書房, 2010 年)」(2013/5/16)

第 26 回 村上広大「論文紹介：竹中亨「西洋史学と実証」『西洋史学』第 191 号 (1998 年, 42-49 頁) ; 「フォーラム 21 世紀の西洋史学」『西洋史学』第 200 号 (2001 年, 46-62 頁) ; 「歴史研究とシステム論的権力・帝国」『パブリック・ヒストリー』第 1 号 (2004 年, 19-29 頁)」(2013/6/20)

第 27 回 堤亮介「書評：大戸千之『歴史と事実——ポストモダンの歴史学批判をこえて』(京都大学学術出版会, 2012 年)」(2013/7/18)

第 28 回 西山真吾「書評：秋田茂『イギリス帝国の歴史——アジアから考える』(中公新書, 2012 年)」(2013/10/24)

第 29 回 野村紅太「紀元前 4 世紀アテナイにおける過去像」(2013/11/14)

堤亮介「古代ローマにおける医学的言説と『都市の健全性』」(2013/11/14)

第 30 回 西山真吾「1930 年代英領インドにおける日本のプレゼンスの高まり——日印会商を通じて——」(2013/11/19)

村上広大「ドイツ・ナショナリズムにおける自由と統一——バーデン自由主義運動を中心に——」

(2013/11/19)

第 31 回 山田耕一郎「13 世紀後半～14 世紀アラゴン王国における「反ユダヤ的」異端審問とその背景」

(2013/11/21)

松村悠也「18 世紀スペイン領植民地の経済的自立——カリブ海域におけるスペインーイギリスの通商関係を通じて」(2013/11/21)

## 12. 教員の研究活動(2012 年度～2013 年度の過去 2 年間)



## 1. 江川 温 教授

1950 年生。京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)中退。文学修士(京都大学、1977 年)。大阪大学助手、同講師、同助教授を経て1996年、教授。2004年4月より2009年9月まで放送大学客員教授。2008年4月より2010年3月まで文学研究科長。2012年4月より2014年3月まで全学教育推進機構長。専攻:西欧中世史。

### 1-1. 論文

---

なし

### 1-2. 著書

---

なし

### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 1-4. 口頭発表

---

なし

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2011年度～2014年度、基盤研究(B) 一般、代表者:江川温

課題番号:23320159

研究題目:中世カトリック圏君主権の神話的・歴史的正当化

研究経費:2012年度 直接経費 3,600,000円 間接経費 1,080,000円

2013年度 直接経費 3,500,000円 間接経費 1,050,000円

研究の目的:

中世カトリック圏における君主権の神話的・歴史的正当化を、正当化の物語それ自体、表現形態、伝達形態の歴史的変化に注目しつつ考察する。またフランス、イングランドといった中核国家とカスティーリャ、ハンガリーといったフロンティア国家、王権と領邦君主権といった対比を重視する。さらにこのような君主権の正当化が西欧のエトニ形成に果たした役割を考察する。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日仏歴史学会・副会長, 2008年4月～現在に至る

日本西洋史学会・代表, 2004年4月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2004年4月～現在に至る

## 2. 竹中 亨 教授

1955年生。1983年、京都大学大学院文学研究科博士課程退学。博士(文学)(京都大学、1994年)。東海大学講師、同助教授、大阪大学教養部助教授を経て、1995年より現職。専攻:西洋史学。

## 2-1. 論文

---

竹中亨 「「近い国ドイツ」の神話——明治期日独関係の再考に向けて」『大阪大学大学院文学研究科紀要』54, pp. 1-23, 2013/3

竹中亨 “The Domestication of Universal History in Meiji Japan: Fukuzawa Yukichi and Nakae Chōmin,” *Saeculum* 63-1, pp. 119-142, 2013/6

## 2-2. 著書

---

なし

## 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

竹中亨(書評) 「鈴木楠緒子『ドイツ帝国の成立と東アジア——遅れてきたプロイセンによる「開国」』」『西洋史学』(日本西洋史学会), 249, 日本西洋史学会, pp. 58-60, 2013/6

竹中亨他(共訳)(翻訳) 「ドイツ社会保障の危機」ミネルヴァ書房, pp. 1-399, 2013/1

## 2-4. 口頭発表

---

竹中亨, 竹中 亨 「「近い国ドイツ」の神話——明治期日独関係の再考に向けて」九州史学会大会, 九州史学会, 九州大学, 2013/12

Takenaka, Toru, Toru Takenaka, (招待講演) “Rezeption universalhistorischen Denkens im modernen Japan”, Deutscher Orientalistentag, 32. Jahresversammlung, Deutscher Orientalistentag, Universität Münster, 2013/9

Takenaka, Toru, Toru Takenaka, (招待講演) “Listening to Music Through the Head: A Pattern of Western Music Reception in Modern Japan”, : Kommunikationschancen: Entstehung und Fragmentierung sozialer Beziehungen durch Musik im 20. Jahrhundert, Max-Planck-Institut für Bildungsforschung, Ordenshaus der Grossen Landesloge, 2013/1

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2013年度～2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者:竹中亨

課題番号:25370749

研究題目:音楽移転論による明治期の洋楽受容の研究

研究経費:2013年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

明治期における西洋音楽の受容を、文化移転の一形態としての音楽移転という理論的観点から把握する。これを通じて、日本での西洋音楽の受容のあり方を幅広い観点から把握するとともに、文化移転のメカニズムについて理論的貢献を行う。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 3. 秋田 茂 教授

1958年生。1985年、広島大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士(文学)(大阪大学)2003年。大阪外国語大学外国語学部助手、同講師、同助教授を経て、2003年10月より現職。専攻:イギリス帝国史・グローバルヒストリー。

### 3-1. 論文

秋田茂「ボンベイの建築様式とイギリス帝国」藤田治彦『アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる21世紀の地平』(日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」), 大阪大学文学研究科, pp. 10-16, 2013/3

秋田茂「亜洲国際経済秩序与大英帝国及英旁集团(1930—1950年代)」田中仁・江沛・許育銘、金晶 訳『現代中国変動与東亜新格局』社会科学文献出版社, pp. 3-12, 2012/8

### 3-2. 著書

秋田茂, 渡辺昭一他(共著)『コロombo・プランナー戦後アジア国際秩序の形成』法政大学出版局, pp. 271-298, 2014/3

秋田茂, 菅英輝他(共著)『冷戦と同盟—冷戦終焉の視点から』松籟社, pp. 53-79, 2014/3

秋田茂(編)『アジアからみたグローバルヒストリー』ミネルヴァ書房, 346p., pp. 1-22(序章「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ), pp. 197-224(第7章「経済援助・開発とアジア国際秩序」), 2013/11

秋田茂, 桃木至朗他(共編著)『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会, pp.9-43「序章 グローバルヒストリーと帝国」(桃木至朗と共著), pp. 239-267「第八章 綿業が紡ぐ世界史」(単著), 2013/3

秋田茂『イギリス帝国の歴史—アジアから考える』中央公論新社, 288p., 2012/6

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

秋田茂(翻訳・リヤ・V・ガイドゥク)「二つの戦争の間の平和攻勢—フルシチョフのアジア政策、1953—1964年」渡辺昭一(共著)『コロombo・プランナー戦後アジア国際秩序の形成』法政大学出版局, pp. 251-270, 2014/3

秋田茂「グローバルヒストリーから見るモンゴル帝国」堤一昭(共著)『2012年度大学研究助成アジア歴史研究報告書 モンゴル帝国と中世グローバル化の研究』, 公益財団法人JFE21世紀財団, pp. 20-23, 2013/3

秋田茂「アジア世界史学会(AAWH)第二回ソウル大会と世界史教育」『世界史のしおり』58, 帝国書院, pp. 10-11, 2013/1

Akita, Shigeru(書評・羽田正『新しい世界史へ』), “Book Review: “Atarashii Sekaishi e—Chikyu Shimin no tame no Kosou [Towards New World History: A Concept for Global Citizenship]”, *Asian Review of World Histories*, 1-1, Asian Association of World Historians, pp. 164-167, 2013/1

秋田茂「セッション企画1 Migration History around the Indian Ocean World since the Seventeenth Century」井上貴子編『南アジア研究』, 24, 日本南アジア学会, pp. 203-208, 2012/12

中村武司, 後藤敦史, 秋田茂他(共著)共同書評・羽田正『新しい世界史へ—地球市民のための構想』(岩波書店、2011年)「フォーラム:「新しい世界史の運動」と歴史学研究」(共著)『西洋史学』, 246, 日本西洋史学会, pp. 55-66, 2012/9

### 3-4. 口頭発表

Akita, Shigeru(招待講演)“The Aid-India Consortium, the World Bank and the International Order of Asia, 1958-1968”, Imperial and World History Seminar, Institute of Historical Research, University of London, London, 2014/3

Akita, Shigeru(招待講演)“Creating Global History from Asian Perspectives”, Academic Staff College Seminar, Jawaharlal Nehru University, New Delhi, India, 2014/2

秋田茂(招待講演)「綿業が紡ぐ世界史—日本郵船のボンベイ航路」第14回読売・吉野作造賞受賞者講演会, 吉野作造記念館, 2013/11

秋田茂他(招待講演)「利用されたイギリス帝国—アジアから考える世界史」財務省「職員セミナー」, 財務省総合政策研究所, 2013/11(『ファイナンス』49-10, pp. 63-71, 2013/11)

秋田茂(招待講演)「砂糖・紅茶・綿花とイギリス帝国」朝日カルチャーセンター、朝日JTB・交流文化塾、朝日カルチャーセンター

梅田教室, 3回シリーズ 2013/10, 11, 12

秋田茂 (招待講演)「利用されたイギリス帝国」PHP 研究所定例研究会, PHP 研究所東京本社, 2013/10

秋田茂 (招待講演)「利用されたイギリス帝国—アジアから考える世界史」ワシントン日本商工会(JCAW)研修会, Toyota Motor North America, Inc. , 2013/8

Akita, Shigeru(基調講演)“Japan in World History and the Emergence of Global History in Japan”, ‘Year of Japan’ Special Lectures Series, Department of History, Kennesaw State University, Georgia, USA, 2013/8

Akita, Shigeru(招待講演)“N.Y.K. Bombay Line, Osaka and International Economic Order of Asia”, Special Lecture of the Department of History, Kennesaw State University, Georgia, USA, 2013/8

秋田茂 (基調講演)「アジアから考えるグローバルヒストリー」第一学習社講演会, 名古屋プライムセントラルタワー, 東京工科大学, 2013/3

Akita, Shigeru(パネリスト)“Creating Global History from Asian Perspectives—From the ‘Long Eighteenth Century’ to ‘Economic Resurgence of East Asia’ ”, Workshop on Maritime Perspectives in Eurasian and Indian Ocean World History: Towards a Global History, Indian Ocean World Centre, McGill University, Canada, 2013/2

Akita, Shigeru(招待講演)“Re-presenting Asia on the Global Stage: The Rise of Global History Study in East Asia”, Special Lecture on Global History and International Relations, 南京大学・国際関係研究学院, 南京大学, 中国, 2012/12

Akita, Shigeru(招待講演)“Economic Diplomacy of Jawaharlal Nehru Administration after Decolonization of South Asia”, International Workshop on Reconsidering Empires and Decolonization, 南京大学・国際関係研究学院, 南京大学, 中国, 2012/12

Akita, Shigeru(招待講演) “The Rise of Indian Economic Nationalism and Collaborators at the turn of the 19–20th centuries—N.Y.K. Bombay Line and the British Empire ”, International Academic Conference: Science, Knowledge and the “Art of Governance” of the Periphery in Colonial and Continental Empires, Institute of World History of Russian Academy of Sciences; Russian State University of Humanities; French–Russian Center of Social Sciences and Humanities; German Historical Institute in Moscow, Moscow, Russia, 2012/11

Akita, Shigeru(パネリスト)「グローバル経済史研究からの濱下報告へのコメント」, 第12回日韓歴史家会議:世界史における中国, 日韓文化交流基金, ホテルアジア会館, 2012/10 (*Proceedings*, pp. 43–47, 2012/10)

秋田茂 (パネリスト)「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ」社会思想史学会第37回大会:グローバルヒストリーと思想史の位置—G.アリギ『北京のアダム・スミス』を手がかりに, 社会思想史学会, 一橋大学, 2012/10

秋田茂 (招待講演)「18世紀のアジア世界:南アジア産綿織物と世界史」2012年度研究会:18世紀アジア世界の再考, 神奈川県高等学校教科研究会・社会科部会・歴史分科会, 栄光学園, 2012/8

Akita, Shigeru(パネリスト)“Economic Diplomacy of Jawaharlal Nehru Administration after Decolonization of South Asia ”, The XVIth World Economic History Congress:Panel: “The Historical Origins of ‘East Asian Resurgence’: Economic Nationalism, Developmentalism and the International Order of Asia, 1950s–1970s”, International Economic History Association, University of Stellenbosch, South Africa, 2012/7

Akita, Shigeru(招待講演)“Osaka University and Creating Global History from Asian Perspectives”, Special Lecture on Global History, Department of English, Gwanju University, Korea, 2012/4

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

秋田茂 第14回讀賣・吉野作造賞, 讀賣新聞社、中央公論新社, 2013/7

秋田茂 第20回大平正芳記念賞, 大平正芳記念財団, 2004/6

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2013年度～2015年度、基盤研究(A) 一般、代表者:秋田茂

課題番号:25245048

研究題目:19世紀アジア世界における開発と経済発展—グローバルヒストリーの観点から

研究経費:2013年度 直接経費 8,000,000円 間接経費 2,400,000円

研究の目的:

従来の経済史研究が広めてきた欧米中心の「19世紀論」を全面的に批判し、グローバルヒストリーの観点から再考する。アジアでの農業開発や工業化が、アジア人自身の自立的でしたたかな動きの現われであり、それが20世紀後半からの「東アジアの経済的再興」の伏線(歴史的起源)であったことを、東アジア・東南アジア・南アジアでの現地の小農・商業資本を主体とした農業開発の展開、19世紀後半の南アジアや東アジアにおける消費財部門での近代的工業化の始動に着目して明らかにする。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

北海道大学スラブ研究センター・共同研究員, 2011年4月～現在に至る

東北学院大学ヨーロッパ文化研究所・共同研究員, 2011年4月～現在に至る

独立行政法人 日本学術振興会・グローバルCOEプログラム委員会専門委員, 2009年7月～2013年3月

社会経済史学会・理事, 2008年4月～現在に至る

日本南アジア学会・理事, 2006年10月～現在に至る

日本学術会議・連携会員(史学), 2006年10月～現在に至る

大阪歴史科学協議会・研究委員, 2006年6月～現在に至る

The Royal Historical Society (United Kingdom)・Fellow, 2002年10月～現在に至る

## 4. 藤川 隆男 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(大阪大学)、MA(ANU)。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻:西洋史、オーストラリアの歴史。

### 4-1. 論文

---

Fujikawa, Takao, “House of History: Academic History and History in Society”大阪大学西洋史学研究室(編)『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 11, pp. 106-116, 2014/2

藤川隆男「オーストラリアにおける歴史博物館の発達とポストモダンティ」日本西洋史学会(編)『西洋史学』(日本西洋史学会), 249, pp. 1-19, 2013/6

藤川隆男「オーストラリアにおける歴史博物館」大阪大学西洋史学研究室(編)『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 10, pp. 15-33, 2013/2

### 4-2. 著書

---

なし

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

藤川隆男他(共訳)(原著者 John Torpey, Making Whole What Has Been Smashed)『歴史的賠償と「記憶」の解剖』法政大学出版局, pp. 1-118, 161-200, 239-259, 2013/11

### 4-4. 口頭発表

---

なし

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

4-6-1. 2011年度～2013年度、基盤研究(C) 一般、代表者:藤川隆男

課題番号:23510312

研究題目:現代オーストラリアにおける「社会の歴史化」とナショナリズムの再編の研究

研究経費: 2012年度 直接経費 1,500,000円 間接経費 450,000円

2013年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

本研究の目的は、オーストラリアにおける従来の歴史学的な範囲における歴史ではなく、広く社会全般において歴史的なものに対する関心が高まり、それを展示、誇示したり、検証したり、利用したりする現象が拡大していることに着目し、その広がりおよびその原因、それが意味していることを明らかにすることである。とりわけ、歴史博物館の拡大や歴史教育の連邦レベルでの統一的カリキュラムの導入に注目し、それを検証する。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

オーストラリア学会・理事, 2004年4月～2013年6月

大阪大学西洋史学会・編集委員, 2003年6月～現在に至る

パブリック・ヒストリー・編集委員, 2003年6月～現在に至る

西洋史学・編集委員, 1996年4月～現在に至る

### 5. 中野 耕太郎 准教授

1967年生。1994年、京都大学文学研究科博士後期課程(西洋史学専攻現代史学)中退。文学修士(京都大学、1993年)。日本学術振興会特別研究員、大阪市立大学助手、同講師、同助教授を経て、2007年10月より現職。専攻:アメリカ現代史。

#### 5-1. 論文

---

なし

#### 5-2. 著書

---

中野耕太郎, 北米エスニシティ研究会(共著)『北米の小さな博物館 3—「知」の世界遺産』彩流社, pp. 60-68, 2014/1

中野耕太郎『戦争のるつぼ——第一次世界大戦とアメリカニズム』人文書院, 174p., 2013/9

中野耕太郎, 市野川容孝, 宇城輝人他(共著)『社会的なもののために』ナカニシヤ出版, 座談記録(第1章、第3章), 2013/2

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

中野耕太郎(辞典校閲・執筆)「アメリカ史関連項目複数」岩波書店辞典編集部編『岩波 世界人名大辞典』岩波書店, 2013/12

中野耕太郎(コメント)「「アメリカ史のなかの『市民』と自由」(シンポジウム)に寄せて——趣旨説明と討論者コメントを中心に」『アメリカ史評論』(関西アメリカ史研究会), 30, pp. 54-55, 2013/5

中野耕太郎(解説)「解説:ジェームズ・バレット史学と民衆のアメリカニゼーション」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会),

#### 5-4. 口頭発表

中野耕太郎 「衝撃都市シカゴの20世紀——統合と隔離の学知:1880s-1920s」現代ヨーロッパの都市と住宅に関する歴史的研究会, 共同研究「現代ヨーロッパの都市と住宅に関する歴史的研究」, 大阪市立大学 梅田サテライト, 2014/3

中野耕太郎 「コメント」京都大学人文研 ミニ・シンポジウム:国なき民と諸国民の戦争, 共同研究「第一次世界大戦の総合的研究」, 京都大学, 2013/10

中野耕太郎 「革新主義と社会的な平等」第 47 回アメリカ学会年次大会(シンポジウム):平等概念の多様性, アメリカ学会, 東京外国語大学, 2013/6

中野耕太郎 「コメント:アメリカ史の視点から」第 63 回日本西洋史学会大会(小シンポジウム):第一次世界大戦再考, 日本西洋史学会, 京都大学, 2013/5

中野耕太郎 「コメント:アメリカ史のなかの『市民』と自由」関西アメリカ史研究会 50 周年記念シンポジウム:アメリカ史のなかの『市民』と自由, 関西アメリカ史研究会, キャンパスプラザ京都, 2012/12

Nakano, Kotaro, "Comments on "How Race and Ethnicity Shaped American City"", Global History Seminar in Osaka:James R. Barrett Lecture, "How Race and Ethnicity Shaped American City", 日本学術振興会外国人招聘プログラム/大阪大学西洋史教室, 大阪大学, 2012/7

#### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

中野耕太郎 第 2 回齋藤眞賞, アメリカ学会, 2012/6

#### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2012 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:中野耕太郎

課題番号:24520830

研究題目:アメリカ現代史における国民形成と貧困問題—人種境界との関係を中心に

研究経費:2012 年度 直接経費 1,300,000 円 間接経費 390,000 円

2013 年度 直接経費 1,300,000 円 間接経費 390,000 円

研究の目的:

20 世紀初頭に社会問題としての貧困が「発見」されて以来、貧困対策は今日に至るまでアメリカ政治の最重要課題である。注目すべき点は、貧困問題の両義性である。社会保障制度などの貧困抑止策を梃子に、幅広く労働者層を含めて国民的包摂がなされる一方で、貧困を撲滅すべき社会病理とする思考は「貧しい人々」に社会スティグマを押し、それが同時代の人種主義と結びつく中で特定のエスニック集団の他者化現象を生んだ。本研究は 1910 年代から 20 年代のアメリカを主たる対象として、貧困問題と国民形成の相互関係を検証するものである。

#### 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

5-7-1. 2012 年度～2012 年度、6 : 研究助成、助成金獲得者:中野耕太郎

助成金名:日本学術振興会外国人招聘研究者(短期)

研究題目:近現代の米国多民族都市におけるアイルランド系とアメリカ化

助成団体名:日本学術振興会

助成金額:2012 年度 直接経費 542,000 円

研究の目的:

アメリカ移民史研究の泰斗、イリノイ大学シャンペーン・アーバナ校歴史学部のジェームズ・バレット教授を招聘し、約3週間にわたって日本各地で研究会、講演会を開催し、移民史の最新の研究状況を学ぶとともに、都市問題やエスニック問題全般についても意見交換を行った。

## 5-8. 外部役員等の引き受け状況

---

アメリカ学会・常務理事, 2012年6月～現在に至る

関西アメリカ史研究会・代表幹事, 2010年11月～2012年12月

大阪大学西洋史学会・理事, 2008年6月～現在に至る

アメリカ学会・評議員, 2008年6月～2012年6月

パブリック・ヒストリー・編集委員, 2008年6月～現在に至る

二十世紀研究・編集委員, 2008年4月～現在に至る

日本西洋史学会・編集委員, 2003年4月～現在に至る

アメリカ史評論・編集委員, 1995年11月～現在に至る

## 6. 栗原 麻子 准教授

1968年生。1995年、京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)指導認定のうえ退学。博士(文学)(京都大学、1998年)。日本学術振興会特別研究員、奈良大学講師を経て、2004年10月より現職。専攻:古代ギリシア史。

### 6-1. 論文

---

Kurihara, Asako, "Charis and Pity in the Classical Athenian Court" *JASCA* (Japan Society of Classical Studies), 2, pp. 67-88, 2014/3

### 6-2. 著書

---

なし

### 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

栗原麻子(書評)「Gabriel Herman ed., *Stability and Crisis in the Athenian Democracy* (Historia Einzelschriften Heft 220), Pp 164, Stuttgart, Franz Steiner Verlag, 2011. €46」『西洋古典学研究』61, 日本西洋古典学会, pp. 144-147, 2013/3

### 6-4. 口頭発表

---

Kurihara, Asako, "Vengeance and Community in Lysurgan Athens", ワークショップ: Lysurgus in Transition: Old and New, 科学研究費基盤研究(C)(代表 栗原麻子), 関西セミナーハウス(会場), 2014/3

栗原麻子「アテナイ民衆法廷の互酬的秩序 リュクルゴスを中心にして」西洋史研究会大会, 東北大学西洋史研究会, 立教大学, 2013/11

栗原麻子 (パネリスト)「アテナイ」第37回地中海学会大会: 地中海トーキング 都のかたち, 地中海学会, 同志社大学, 2013/6『月報』364, p. 2, 2013/11

Kurihara, Asako, "Pity and Charis in Athenian Popular Court", Classical Association Annual Conference, Classical Association, Exeter University, England, 2012/4

### 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

6-6-1. 2012年度～2014年度、基盤研究(C) 一般、代表者:栗原麻子  
課題番号:24520831



研究題目:アテナイ民主制と互酬性 リュクルゴス時代の再検討

研究経費: 2012 年度 直接経費 1,450,000 円 間接経費 362,500 円

2013 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

発展論的歴史理解においては、「互酬性」はアテナイの制度的発展によって克服されるべき要素として捉えられてきた。しかしながら、アテナイ社会の特質は、一見「近代的」ともみられる緻密な国制が、互酬的社会構成原理に支えられていたところにある。そこで公共奉仕、国家への寄付、法的秩序の互酬的要素、国家による顕彰行為がそれぞれ、市民共同体の紐帯形成において担った機能について、その歴史の変遷に留意しながら総合的にとらえていく。本研究では、とりわけヘレニズムへの移行期とされるリュクルゴス時代に注目する。研究代表者は、リュクルゴスの法廷戦略が、むしろ市民共同体の互酬的な協調原理にに基づいていたことを明らかにした。これは、リュクルゴスによるそのほかの政策とも符合しているようにおもわれる。本研究では碑文史料にも対象を広げ、リュクルゴス時代の互酬性の総合的理解を目指す。

## 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本西洋古典学会・委員(編集委員、書評委員), 2013年6月～現在に至る

日本西洋史学会・編集幹事, 2012年4月～現在に至る

古代文化協会・編集参与, 2011年4月～現在に至る

古代学協会・編集参与, 2009年4月～現在に至る

日本西洋史学会・編集委員, 2004年10月～現在に至る

## 7. 水田 大紀 助教

1977 年生。2010 年、大阪大学文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。Master of Philosophy (University of London, Institute of Historical Research, 2010) 取得。日本学術振興会特別研究員 PD を経て、2012 年 4 月より現職。専攻:イギリス近代史。

### 7-1. 論文

---

水田大紀 「近代化のもとでの日常——19 世紀後半イギリスの官僚生活史——」『つながりと権力の世界史』彩流社, pp. 115-131, 2014/2

水田大紀 「帝国のなかの官僚任用試験——19 世紀後半イギリスにおける人事委員会の発達——」『待兼山論叢(史学篇)』(大阪大学文学会), 46, pp. 27-47, 2012/12

水田大紀 「メリット大国イギリス——近現代におけるメリトクラシー観の変遷——」『千葉史学』(千葉史学会), 61, pp. 29-46, 2012/11

水田大紀 「帝国の中の「アングロ・アイリッシュ」—マルタの教育改革で P. J. キーナンが果たした役割について—」『エール』(日本アイルランド協会), 31, pp. 21-31, 2012/10

水田大紀 「パトロネジの「終焉」—近代イギリスにおける官僚制度改革と能力主義の浸透—」『パブリックヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 9, pp. 47-53, 2012/4

### 7-2. 著書

---

なし

### 7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

水田大紀(翻訳)「シアーン・ニコラス」第四章 イギリス人であること 信条と文化」キース・ロビンズ(編)鶴島博和(日本語監修) 秋田茂(監訳)『オックスフォード ブリテン諸島の歴史 10 20 世紀 1901 年-1951 年』慶應義塾大学出版会, pp. 122-166, 2013/8

水田大紀(書評)「三時眞貴子(著)『イギリス都市文化と教育——ウォリントン・アカデミーの教育社会史』(昭和堂, 2012 年)」『西洋史学』(日本西洋史学会), 249, pp. 56-58, 2013/6

### 7-4. 口頭発表

---

水田大紀 (招待講演)「能力主義の世界史」オムニバス講義:世界史から学ぶ科, 大阪高齢者大学校, 大阪市教育会館, 2013/12

### 7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 7-8. 外部役員等の引き受け状況

---

大阪大学西洋史学会・会計・編集事務, 2012 年 5 月～現在に至る

日本西洋史学会・編集委員, 2012 年 3 月～現在に至る

## 2-10 考古学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 1(兼任)

教授：福永 伸哉

准教授：高橋 照彦

助教：中久保辰夫(兼任)

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
10	7	1	0	0	2	0	1

※うち留学生 2 名、社会人学生 1 名

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	3	3	0	0
2013	2	1	0	0
計	5	4	0	0

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

学部・大学院の教育においては、考古学研究に必要な発掘調査、出土資料分析などの方法論や技術面に関する確実な基礎力の習得を重視している。そのために1988年の講座開設以来、毎年欠かさずフィールド調査を行い、成果を学術報告書にまとめる取り組みの継続を第一の目標としている。そして、フィールド調査をカリキュラムに取り入れた実践的かつ課題追求型の教育を行うとともに、遺跡や博物館を訪ねる臨地研修を実施し、授業の不足を補うようにつとめることも、全般的な教育目標としている。

また、大学院においては、①授業としての修士・博士論文作成演習にくわえ、投稿論文作成のための個別指導を強化すること、②研究室のプロジェクトにかかわる共同研究への参加を通じて、資料分析の方法を実践的に習得させること、③専門機関の採用情報の入手につとめ、専門職への就職を支援すること、などを目標とした。学部においては、①学部生向

けの講義を継続して開講し、専門基礎学力の充実をはかること、②出土資料の整理分析作業を通じて、考古資料の特性や扱い方を実践的に習得させること、③考古学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知して学習意欲を向上させること、などを目標とした。

## 2. 研究

研究面では、世界の考古学の研究動向に目を配りながら比較研究を積極的に進め、広い視野で日本考古学の研究に取り組むことを目指している。そして、一人平均で教員が2本、博士後期課程在籍生が1本以上の論文または研究ノート等を公表または投稿すること、さらに博士前期課程在籍生全員が発掘調査報告書などの分担執筆あるいは編集に携わること、に具体的な数値目標を置いている。また、①これまでに調査を行った遺跡の出土遺物を整理して、発掘調査報告書の刊行に向けた準備をすること、②継続のフィールド活動として、発掘調査や測量調査を行うこと、③科学研究費補助金などの外部資金を導入して研究活動を推進すること、なども目標とした。

## 3. 社会連携

社会連携としては、教育・研究活動を通じた社会との積極的なかかわりを重視しており、地域社会に入って地域の学校・生涯教育活動などにもかかわり、学問と社会とのあるべき関係の追求を目指している。特に、①フィールド調査の成果に関して、現地説明会の開催やHPでの情報発信を通じて社会への還元を行うこと、②大阪大学埋蔵文化財調査室が行う大学構内の発掘調査および文化財活用業務に協力すること、③考古学研究室所蔵あるいは保管の資料の社会的活用をはかるために、各地の博物館などからの貸出や写真提供、資料熟覧といった依頼に積極的に応じること、④教育委員会などの発掘調査や遺跡整備などで指導ならびに協力を行うこと、⑤地方自治体の出土品整理あるいは自治体史編纂への学術協力を通じて地域の文化行政を支援すること、などを目標にした。

# Ⅲ. 活動の概要(2012年度～2013年度)

## 1. 教育

まず、フィールド調査やその際に出土した資料の整理作業をカリキュラムに取り入れた演習などを継続的に実施した。また、学内での授業を補うために、大阪府、和歌山県、兵庫県、あるいは山口県や石川県などへの臨地研修も実施した。大学院生については個別の論文指導やプロジェクトにかかわる共同研究なども行うことができ、OVCプログラムの一環としてイギリスでの研究報告などにも結び付けた。学部生向けにも基礎的な講義を開講しており、授業などを通して、適宜展覧会などの情報提供も行った。就職支援については、大学院修了生などで、文化財行政にかかわる正規職員などとして就職する者がでている。

## 2. 研究

研究では、海外での調査・研究を行いつつも、広い視野で日本考古学の研究を行ってきており、教員・大学院生ともに、論文や報告書の執筆に取り組んだ。院生の投稿論文については、博士後期課程の在籍者が少なかつたため、以前に比べて総数はやや減少したものの、博士前期課程の在籍者でも1人1回程度の学会発表や論文発表などを行っており、概ね成果を挙げる事ができた。大阪大学構内の待兼山遺跡や京都府亀岡市の篠窯跡群の発掘調査を実施するとともに、新たな成果を得た。また、2013年度には前年度からの継続として大阪府藤井寺市の野中古墳出土品の保存修復に伴う整理検討などを行い、その成果は企画展「野中古墳と「倭の五王」の時代」ならびにその展示図録の刊行に生かす事ができた。このほか、教員は科学研究費補助金の助成を受けて、種々の研究を推進した。

## 3. 社会連携

大阪大学構内の待兼山遺跡や京都府亀岡市の篠窯跡群の発掘調査において、例年通りHPを利用する形で速やかに発掘成果の情報を発信した。また新たに、大阪府の野中古墳出土品の保存修復活動に伴う社会連携活動も、文化庁の補助金や

朝日新聞文化財団などの助成を受けながら事業を推進することもできた。文化庁の補助金では、企画展「野中古墳と「倭の五王」の時代」ならびにその展示図録の刊行し、社会への研究成果の還元に努めた。とりわけ企画展には、3700人を超える多くの観覧者を得て成功裡に終わることができた。展示に伴って開催した講演会も、やはり500人を超える多くの聴講希望者があり、さらにその資料などをHPなどに掲載することで、社会への情報発信を行った。さらに、阪大埋蔵文化財調査室の発掘調査や整理の業務にも引き続きの協力を行った。その一方で、所蔵保管資料については、大阪府立近つ飛鳥博物館などへの展示に出品するための協力など、各地からの閲覧や写真提供にも積極的に応じており、地方自治体に対する学術協力も行っている。

## IV. 自己点検・自己評価(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

前記の活動などの結果、学部生・大学院生とも実践的な技術の習得に効果をあげている。また、大学院修了生では、専門機関での採用が限られている厳しい状況のなかで、正規職員を含む就職の実績を残している。また、学部生に対しても、考古学の基礎知識の充実に向けた講義などにより、一定の成果を得た。このように、所期の目標は十分に達成することができた。

### 2. 研究

教員・大学院生ともに、論文などの執筆において数値目標を達成できた。また、フィールド調査の実施、既往発掘調査の出土遺物の整理なども、予定通りに行うことができた。当該年度の目標は十分に達成できたものと評価できる。

### 3. 社会連携

前記のような諸活動を行っており、野中古墳出土品の保存修復活動に伴う社会連携活動を進めるなど、社会連携の面において非常に充実した成果を出すことができた。

## V. 基本情報(2012年度～2013年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	0	0	0
2013	0	0	0
計	0	0	0

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	0(0)	0(0)	2(0)	0(0)	1(0)	3(0)
2013	1(1)	0(0)	2(0)	0(0)	3(0)	6(1)
計	1(1)	0(0)	4(0)	0(0)	4(0)	9(1)

括弧内は査読付き論文数。

## 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	2	0	2	0	0	4
2013	1	1	4	3	0	9
計	3	1	6	3	0	13

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

【2012年度】

〔博士前期〕

仲辻慧大「窯構造からみた初期須恵器窯築窯の背景」『明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』, 明治大学大学院文学研究科, pp. 34-41, 2013/3

上地舞「古墳における土製品祭祀の成立と展開」『明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』, 明治大学大学院文学研究科, pp. 18-33, 2013/3

〔博士後期〕

大庭重信「前期難波宮壁土について―難波宮東方地域の谷調査から―」『第18回 近畿ブロック埋蔵文化財研究会資料集 今、推したいこの成果』, 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議, pp. 19-24, 2012/11

【2013年度】

〔博士前期〕

橘 泉「野中古墳の形象埴輪」『野中古墳と「倭の五王」の時代』, 大阪大学出版会, pp. 80-83, 2014/1

三好裕太郎・竹内裕貴「野中古墳出土短甲の比較検討」『野中古墳と「倭の五王」の時代』, 大阪大学出版会, pp. 68-71, 2014/1

三好裕太郎「長頸鏃の導入過程」『明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』, 明治大学大学院文学研究科, pp. 27-32, 2014/3

上田直弥「粘土槨の成立と展開」『明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』, 明治大学大学院文学研究科, pp. 15-20, 2014/3

〔博士後期〕

大庭重信「近畿中部の弥生時代中期墓制の階層性と集落」『文化の十字路口』, 一般社団法人日本考古学協会, pp. 307-313, 2013/10

大庭重信「近畿地方における弥生時代の水利関係と水田構成の変遷」『待兼山論叢』第47号史学篇, pp. 27-44, 2013/12

### (2)口頭発表

【2012年度】

〔博士前期〕

NAKATSUJI Keita, "The introduction of Sue-ware technology from the Korean peninsula and its significance", Workshop on Current Research on the Archaeology of the Kofun period in an international perspective, UK, 2012/7/17

KAMIJI Mai and TACHIBANA Izumi, "Examples and Methods in Researching Ruling Lineages in the Kofun Period: A Case Study of the Inagawa Region", Workshop on Current Research on the Archaeology of the Kofun period in an international perspective: Poster Presentation, UK, 2012/7/17

仲辻慧大「貯蔵器種からみた初期須恵器生産の展開」明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学文学研究科, 2013/1/13-14

上地舞「古墳における土製品祭祀の成立と展開」明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学文学研究科, 2013/1/13-14

### 【2013 年度】

〔学部〕

岩越陽平「布留式土器の受容—摂津地域を中心に—」第 118 回京都弥生文化談話会例会, 京都弥生文化談話会, 長岡京市中央生涯学習センター, 2013/10/26

岩越陽平「畿内における古墳出現期土器の展開—摂津地域を対象として—」若き考古学徒論壇デビュー, 大阪府立弥生文化博物館, 2014/3/15

〔博士前期〕

橘 泉・竹内裕貴・三好裕太郎「西山 1 号窯測量調査成果報告」日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究研究会, 大阪大学文学研究科, 2013/5/7,

橘 泉「すごいぞ! 八尾の埴輪—埴輪から社会を考える」八尾市立しおんじ山古墳学習館講演会, しおんじ山古墳学習館, 2013/5/4

三好裕太郎「長頸鉢の導入過程」明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学文学研究科, 2014/1/13

桐井理揮「弥生時代後半期における地域間交流の動態—東部瀬戸内地域を対象として—」若き考古学徒論壇デビュー, 大阪府立弥生文化博物館, 2014/3/15

上田直弥「粘土槨の成立と展開」明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学文学研究科, 2014/1/13

Joseph RYAN "Warfare and State formation in Ancient Japan", New Perspectives on the Archaeology of State Formation in Japan, Boston University, Massachusetts, USA, 2013/11/1

〔博士後期〕

大庭重信「近畿中部の弥生時代中期墓制の階層性と集落」一般社団法人日本考古学協会 2013 年度長野大会, 長野市若里市民文化ホール, 2013/10/20

### (3)その他(書評・翻訳など)

#### 【2012 年度】

〔博士前期〕

上地舞「研究会のポスターセッションと博物館等の見学」『日本古墳文化研究の国際化に向けて—日欧ワークショップおよびフィールド調査による古墳文化研究の国際化推進事業—』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, p. 67, 2012/12

上地舞「野中古墳と古市古墳群 (1)古市古墳群出現前夜」『野中古墳と古市古墳群 文化庁/文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業』大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-2, 2013/3

上地舞・橘泉「出土品とその性格 (4)祭祀—埴輪と石製品—」『野中古墳と古市古墳群 文化庁/文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業』大阪大学大学院文学研究科, p. 13, 2013/3

上地舞・仲辻慧大「野中古墳の歴史的意義 (2)5 世紀という時代」『野中古墳と古市古墳群 文化庁/文化遺産を活かし

- た観光振興・地域活性化事業』大阪大学大学院文学研究科, p. 14, 2013/3
- 仲辻慧大「古墳時代ワークショップと遺跡見学」『日本古墳文化研究の国際化に向けて一日欧ワークショップおよびフィールド調査による古墳文化研究の国際化推進事業—』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, p. 66, 2012/12
- 仲辻慧大「出土品とその性格 (3) 外交—陶質土器の系譜—」『野中古墳と古市古墳群 文化庁/文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業』大阪大学大学院文学研究科, p. 12, 2013/3
- 橋 泉「博物館展示と町並み保存」『日本古墳文化研究の国際化に向けて一日欧ワークショップおよびフィールド調査による古墳文化研究の国際化推進事業—』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, p. 68, 2012/12
- 橋 泉「出雲地域の考古学」『日本古代文物を対象とした日本史学・美術史学・考古学の領域横断的研究 成果報告書』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室, p. 84, 2013/3
- 橋 泉「発掘調査は語る (2) 小さなカケラを追い求めて - 墳頂部上面の調査 - 」『野中古墳と古市古墳群 文化庁/文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業』, 大阪大学大学院文学研究科, p. 5, 2013/3  
〔研究生〕
- 竹内裕貴「野中古墳と古市古墳群 (3) 野中古墳の位置 - 百舌鳥・古市古墳群のなかの野中古墳 - 」『野中古墳と古市古墳群 文化庁/文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業』, 大阪大学大学院文学研究科, p. 4, 2013/3  
〔博士後期〕
- 大庭重信 (執筆・編集) 『難波宮址の研究』第十八, 大阪文化財研究所, 2012/6
- 大庭重信 (執筆) 『矢田遺跡 B 地点発掘調査報告』, 大阪文化財研究所, 2012/12
- 大庭重信 (執筆・編集) 『長原遺跡発掘調査報告』第 25 冊, 大阪文化財研究所 2012/12
- 大庭重信 (執筆・編集) 『長原遺跡発掘調査報告』第 27 冊, 大阪文化財研究所 2013/3
- 大庭重信「上本町遺跡で見つかった 2 条の大溝」『葦火』157, 大阪文化財研究所 2012/4
- 大庭重信「難波宮東方地域のガラス玉生産」『葦火』158, 大阪文化財研究所 2012/6
- 【2013 年度】  
〔博士前期〕
- 橋 泉「野中古墳と墓山古墳」『野中古墳と「倭の五王」の時代』, 大阪大学出版会, p. 45, 2014/1
- 橋 泉・桐井理揮「「倭の五王」の時代と考古学」『野中古墳と「倭の五王」の時代』, 大阪大学出版会, p. 5, 2014/1
- 三好裕太郎「甲冑」『野中古墳と「倭の五王」の時代』, 大阪大学出版会, pp. 9-23, 2014/1
- 三好裕太郎「鉄鏃」『野中古墳と「倭の五王」の時代』, 大阪大学出版会, pp. 27-29, 2014/1
- 竹内裕貴「新式農工具の出現と大開発の時代」『野中古墳と「倭の五王」の時代』, 大阪大学出版会, pp. 30-32, 2014/1
- 中久保辰夫・竹内裕貴「検出された遺構」『大阪大学埋蔵文化財調査年報』3, 大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp. 4-6, 2014/3
- 桐井理揮・中久保辰夫「土師器」『野中古墳と「倭の五王」の時代』, 大阪大学出版会, pp. 34-35, 2014/1
- 桐井理揮・佐伯郁乃・中久保辰夫「出土遺物」『大阪大学埋蔵文化財調査室年報』3, 大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp. 6-8, 2014/3
- 上田直弥「石製品・土製品」「古市古墳群出現前夜」『野中古墳と「倭の五王」の時代』, 大阪大学出版会, pp. 39-40・41-44, 2014/1
- 佐伯郁乃「陶質土器・初期須恵器」『野中古墳と「倭の五王」の時代』, 大阪大学出版会, pp. 32-34, 2014/1
- ライアン・ジョセフ「鉄刀・鉄剣・鉄鉾」「墓山古墳・誉田御廟山古墳とその陪冢」『野中古墳と「倭の五王」の時代』, 大阪大学出版会, pp. 27-28・46-47, 2014/1  
〔博士後期〕
- 大庭重信「木棺・土器棺」『事典 墓の考古学』, 土生田純之編, 吉川弘文館, pp. 101-102, 2013/6
- 大庭重信 (執筆・編集) 『三宝寺跡伝承地 D 地点発掘調査報告』, 大阪文化財研究所, 2013/12
- 大庭重信 (執筆) 『崇禅寺遺跡発掘調査報告』Ⅲ, 大阪文化財研究所, 2014/3



### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2013年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2013年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

仲辻 慧大 博士課程前期, 和歌山県教育委員会, 専門職員, 2013/4

上地 舞 博士課程前期, 和歌山県教育委員会, 専門職員, 2013/4

橘 泉 博士課程前期, 甲賀市教育委員会, 嘱託専門職員, 2014/4

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2012年度:0名 2013年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名  
その他 0名

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2012年度:0名 2013年度:0名

### 9. 刊行物

2012年度 大阪大学文学研究科『野中古墳と古市古墳群』, 2013/1

2013年度 大阪大学文学研究科『野中古墳と「倭の五王」の時代』, 大阪大学出版会, 2014/1

### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」の実施、2013  
「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」の実施、2014

### 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

「考古学・古代史合同研究会」第8回、2012/5/14

「考古学・古代史合同研究会」第9回、2012/6/13

「考古学・古代史合同研究会」第10回、2012/7/9

「考古学・古代史合同研究会」第11回、2012/10/10

- 「考古学・古代史合同研究会」第12回、2012/11/14
- 「考古学・古代史合同研究会」第13回、2012/12/12
- 「考古学・古代史合同研究会」第14回、2013/2/13
- 「21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信」研究集会（第3回）、2012/12/15・16
- 「21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信」研究集会（第4回）、2013/3/8
- 「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」研究会（第1回）、2012/5/28
- 「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」研究会（第2回）、2012/8/24
- 「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」研究会（第3回）、2012/12/26
- 「日本古代文物を対象とした日本史学・美術史学・考古学の領域横断的研究」「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」（第4回）合同研究会、2013/3/6
- 「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」、2013/1/13・14
- 「考古学・古代史合同研究会」第15回、2013/5/22
- 「考古学・古代史合同研究会」第16回、2013/6/6
- 「考古学・古代史合同研究会」第17回、2013/7/10
- 「考古学・古代史合同研究会」第18回、2013/11/13
- 「考古学・古代史合同研究会」第19回、2013/12/12
- 「21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信」研究集会（第5回）、2013/12/14・15
- 「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」研究会（第5回）、2013/5/7
- 「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」研究会（第6回）、2012/7/30
- 「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」研究会（第7回）、2012/8/17
- 「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」研究会（第8回）、2013/12/26
- 「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」、2014/1/12・13

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 福永 伸哉 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学博士(大阪大学、2005年)。大阪大学埋蔵文化財調査室助手、大阪大学文学部助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授をへて、2005年より現職。専攻:日本考古学。

#### 1-1. 論文

福永伸哉, 近藤勝義「突線鈕式銅鐸破碎プロセスの金属工学的検討とその考古学的意義」『纏向学研究センター紀要』2, 桜井市纏向学研究センター, pp. 1-10, 2014/3

福永伸哉「近江の古墳時代史と雪野山古墳」『古墳時代前期の王墓』サンライズ出版, pp. 6-36, 2014/2

福永伸哉「前方後円墳の成立」『岩波講座日本歴史』1, 岩波書店, pp. 169-202, 2013/11

福永伸哉「前方後円墳成立期の吉備と畿内」『吉備と邪馬台国—靈威の継承—』大阪府立弥生文化博物館, pp. 80-85, 2013/10

福永伸哉「漢中期の鏡と表六甲の前期古墳」『菟原』II, 『菟原』刊行会, pp. 375-386, 2012/5

福永伸哉「副葬品」広瀬和雄、和田晴吾『講座日本の考古学』8, 青木書店, pp. 430-453, 2012/5

#### 1-2. 著書

福永伸哉(編)『古墳時代の考古学』10, 同成社, pp. 1-7, 2014/3

和田正巳, 福永伸哉(共著)『姫谷焼の陶片資料』真陽社, pp. 21-79, 2013/3

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 福永伸哉 「古市古墳群成立の背景を考える」高橋照彦、中久保辰夫『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学出版会, pp. 50-51, 2014/2
- 福永伸哉 「検証河内勢力、新王権の成立はあったのか」『歴史読本』2013-12, KADOKAWA, pp. 80-85, 2013/10
- 福永伸哉 「三角縁神獣鏡」「竪穴式石室」土生田純之『事典 墓の考古学』吉川弘文館, pp.148-149, pp.128-131, 2013/6
- 福永伸哉 『三角縁神獣鏡および共伴銅鏡集成』大阪大学文学研究科, pp. 1-188, 2013/3
- 福永伸哉 「ヤマト政権の成立と東アジア外交」『やまとみち』125, 東海旅客鉄道株式会社, p. 10, 2012/12
- 福永伸哉 「前方後円墳の世紀ー日本海の雄としてー」京丹後市史編纂委員会『京丹後市史本文編 図説京丹後の歴史』京丹後市, pp. 11-20, 2012/10

#### 1-4. 口頭発表

- 福永伸哉 (パネリスト)「古墳時代の成立と箸墓古墳」桜井市立埋蔵文化財センター開館 25 周年記念シンポジウム:箸墓再考, 桜井市文化遺産活性実行委員会, 桜井市市民会館(桜井市), 2014/3
- 福永伸哉, 近藤勝義 「突線鈕式銅鐸破碎プロセスの金属工学的検討とその考古学的意義」纏向学研究センター平成 25 年度研究集会, 桜井市纏向学研究センター, 桜井市纏向学研究センター(桜井市), 2014/2
- 福永伸哉 「考古学と古代史研究の架け橋ー吉田晶氏の古代国家形成論をめぐってー」大阪歴史科学協議会1月例会:吉田晶氏と古代史研究・戦後歴史学, 大阪歴史科学協議会, 大阪歴史博物館(大阪市), 2014/1
- 福永伸哉 (パネリスト)「畿内からみた城の山古墳」第2回城の山古墳シンポジウム:城の山古墳の謎に迫る, 新潟県胎内市教育委員会, 胎内市産業文化会館(胎内市), 2013/12
- 福永伸哉 (基調講演)「世界の墳丘墓と前方後円墳」考古学研究会関西例会 30 周年記念シンポジウム:新資料で問う古墳時代成立過程とその意義, 考古学研究会関西例会, 大阪歴史博物館(大阪市), 2013/11 (『新資料で問う古墳時代成立過程とその意義』 pp. 47-58, 2013/11)
- Fukunaga, Shinya, “Keyhole-Shaped Tombs and the State Formation of Japan”, Special Workshop on Japanese Archaeology: New Perspectives on the Archaeology of State Formation in Japan, Boston University, Harvard University, Osaka University, Harvard University Asia Center, 2013/10
- 宗田好史, 西村幸夫, 福永伸哉他 (パネリスト)「古墳のある街のまちづくり」第3回百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進国際シンポジウム, 百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推本部会議, 藤井寺市立市民総合会館(藤井寺市), 2013/10 (『第3回百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進国際シンポジウム報告書』 pp. 13-25, 2014/3)
- 福永伸哉 (パネリスト)「邪馬台国時代の主流派ー摂津三地域と播磨ー」兵庫県立考古博物館ふるさと発掘展・川西市文化財資料館開館 20 周年記念シンポジウム:邪馬台国時代の摂津と播磨, 兵庫県立考古博物館・川西市教育委員会, 川西市立中央公民館, 2013/8
- 福永伸哉 (パネリスト)「銅鏡から見た邪馬台国連合」兵庫県立考古博物館開館 5 周年シンポジウム:卑弥呼がいた時代, 兵庫県立考古博物館, 2012/9 (『卑弥呼がいた時代』 pp. 47-58, 2012/9)
- Fukunaga, Shinya, “A brief introduction to the Kofun period: social change during the transition from a hunter-gathering society to the archaic state in Japan”, Workshop on Current Research on the Archaeology of the Kofun period in an international perspective, セインズベリー日本藝術研究所, 2012/7

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 福永伸哉 第 19 回濱田青陵賞, 岸和田市、朝日新聞社, 2006/9
- 福永伸哉 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2003/12
- 福永伸哉 第6回雄山閣考古学特別賞(編著書に対して), 雄山閣出版, 1997/9

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

- 1-6-1. 2011 年度～2014 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:福永伸哉

課題番号:23242048

研究題目:21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信

研究経費:2012年度 直接経費 7,600,000円 間接経費 2,280,000円

2013年度 直接経費 6,300,000円 間接経費 1,890,000円

研究の目的:

研究対象の細分化が著しい古墳時代研究において、その最先端の個別成果をいま一度統合し、明確な研究戦略のもとに企画するフィールド調査を加えながら、21世紀初頭における到達点として向後数十年の検討・吟味に足るだけの総括的な古墳時代歴史像を提示するとともに、わが国の古墳時代研究の成果としては初めての体系的な海外発信を行うことによって、古墳時代研究の国際的認知と国際比較研究テーマへの発展をはかり、次世代の古墳時代研究の新たな道筋を切り開く。

1-6-2. 2011年度～2012年度、挑戦的萌芽研究、代表者:福永伸哉

課題番号:23650570

研究題目:結晶構造解析に基づく弥生時代の青銅器破砕行為のプロセス復元

研究経費:2012年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

「邪馬台国時代」とも呼ばれる弥生時代終末期(3世紀前半)の遺跡から、銅鐸や青銅鏡などが長さ数cmの小さな破砕断片となって出土する例が急増している。本研究は、青銅器の結晶構造と破砕の特徴が関連しているのではないかと新しい着想のもとに、結晶構造解析による青銅の冷却速度と破壊靱性値の相関説明という従来試みられなかった方法を用いて、もとの完形青銅器から破砕青銅器片が生じたプロセスを復元的に解明し、弥生時代から古墳時代への転換を示す象徴的な現象として注目されつつある青銅器破砕行為の実態とその歴史的意義について、実証的かつ独創的な理解提示を行う。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推薦書作成検討委員会・委員, 2014年1月～現在に至る

大垣市昼飯大塚古墳保存活用委員会・委員, 2013年10月～現在に至る

大阪大学接合科学研究所・共同研究員, 2013年7月～現在に至る

日本考古学協会・原稿査読委員, 2013年6月～2014年3月

兵庫県立考古博物館運営委員会・委員, 2013年3月～現在に至る

日本学術振興会科学研究費委員会・専門委員, 2012年12月～現在に至る

高槻市(仮称)安満遺跡公園整備構想検討委員会・委員, 2012年12月～2014年3月

桜井市纏向学研究センター・共同研究員, 2012年11月～現在に至る

国立歴史民俗博物館外部評価委員会・委員, 2012年7月～現在に至る

百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議・委員, 2012年7月～現在に至る

百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録有識者会議・委員, 2012年7月～現在に至る

文化庁国有文化財等(美術工芸品)保存修理事業協力者会議・協力者, 2012年7月～2013年3月

文化庁重要考古資料に関する懇談会(近畿地区)・委員, 2012年7月～2013年3月

考古学研究会・代表委員, 2012年4月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2011年10月～現在に至る

桜井市纏向遺跡調査委員会・委員, 2011年10月～現在に至る

公益財団法人大阪市博物館協会・理事, 2011年4月～現在に至る

宝塚市長尾山古墳整備委員会・委員, 2011年4月～2013年3月

公益財団法人大阪府文化財センター・理事, 2011年4月～現在に至る  
豊中市文化財審議委員会・委員, 2010年4月～現在に至る  
鹿児島県唐仁古墳群発掘調査指導委員会・委員, 2009年1月～現在に至る  
日本考古学協会研究環境検討委員会・委員, 2008年5月～現在に至る  
文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査検討委員会・委員, 2008年5月～現在に至る  
杵築市市内遺跡にかかる調査指導委員会・委員, 2008年5月～現在に至る  
考古調査士資格認定機構・資格審査専門委員, 2007年12月～現在に至る  
京丹後市網野銚子山古墳発掘調査委員会・委員, 2007年10月～現在に至る  
川西市文化財審議委員会・委員, 2006年6月～現在に至る  
大阪府立近つ飛鳥博物館運営協議会・委員, 2006年6月～現在に至る  
鹿児島県塚崎古墳群発掘調査指導委員会・委員, 2006年1月～現在に至る  
京丹後市史編纂委員会・委員, 2005年6月～現在に至る  
大垣市昼飯大塚古墳調査整備委員会・委員, 1994年12月～2013年9月  
考古学研究会関西例会・世話人, 1980年4月～現在に至る

## 2. 高橋 照彦 准教授

1966年生。1992年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(京都大学、1991年)。国立歴史民俗博物館考古研究部助手、奈良国立博物館学芸課研究員を経て、2002年より大阪大学大学院助教授、2007年より現職。専攻:日本考古学、東アジア考古学。

### 2-1. 論文

- 
- 高橋照彦「日本古代における新銭の発行契機について」『出土銭貨』33, 出土銭貨研究会, pp. 7-16, 2013/12
- 高橋照彦「首長墳の被葬者像」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆(共編)『古墳時代の考古学』6, 同成社, pp. 22-31, 2013/10
- 高橋照彦「遼寧省朝陽出土三彩等に関する検討—金属製品や陶製品を中心に—」独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・中国遼寧省文物考古研究所(共編)『朝陽地区隋唐墓の整理と研究』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所, pp. 223-247, 2013/3
- 高橋照彦「唐代の琵琶とその遡源」『待兼山論叢』46, 大阪大学文学会, pp. 1-26, 2012/12
- 高橋照彦「仏教の流入と古墳文化」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆(共編)『古墳時代の考古学』7, 同成社, pp. 183-197, 2012/10
- 高橋照彦「古代・中世の酒杯」松永和浩(編)『ものづくり 上方“酒”ばなし—先駆・革新の系譜と大阪高等工業学校醸造科—』(大阪大学総合学術博物館), 大阪大学出版会, p. 43, 2012/10
- 高橋照彦「遼寧省唐墓出土文物的調査と朝陽出土三彩枕的研究」遼寧省文物考古研究所・日本奈良文化財研究所(共編)『朝陽隋唐墓葬発現と研究』科学出版社, pp. 221-242, 2012/6

### 2-2. 著書

- 
- 高橋照彦, 中久保辰夫他(共編著)『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学出版会, pp. 84-85, 2014/1
- 高橋照彦, 橘泉(共編著)『日本古墳文化研究の国際化に向けて—日欧ワークショップおよびフィールド調査による古墳文化研究の国際化推進事業—』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp. 1-4, 2012/12
- 福永伸哉, 榎木謙周, 高橋照彦他(共著)『図説京丹後市の歴史—日本の「ものづくりのふるさと」京丹後市—』京丹後市史編さん委員会, pp. 44, 47-48, 53, 2012/10

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

高橋照彦「コメント—陶棺の歴史背景等をめぐって—」『古代学研究』198, 古代学研究会, pp. 20-21, 2013/6

高橋照彦(書評)「栄原永遠男著『日本古代銭貨研究』」『市大日本史』15, 大阪市立大学日本史学会, pp. 190-197, 2012/5

## 2-4. 口頭発表

高橋照彦「施釉陶器からみた備後国府跡」ふちゅう歴史フォーラム, 広島県府中市文化センター, 2014/3

高橋照彦「緑釉陶器の生産と流通をめぐる諸問題」遺物調査検討過程『緑釉陶器』, 鳥取県埋蔵文化財センター, 鳥取県埋蔵文化財センター, 2014/3

高橋照彦「篠窯跡群大谷3号窯の発掘調査成果」第20回京都府埋蔵文化財研究会, 京都府埋蔵文化財研究会, 京都大学文学部, 2014/1

高橋照彦「古墳築造の終焉—その背景をめぐって—」「21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信」研究集会, 大阪大学大学院文学研究科, 2013/12

高橋照彦「篠窯跡群西山1号窯の調査とその成果」窯跡研究会第10回研究会, 窯跡研究会, 亀岡市篠町, 2013/9

高橋照彦「楽器にかかわる技術・文化の受容」日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究, 大阪大学文学研究科, 2013/8

高橋照彦「古代における新銭の発行契機について」2013年出土銭貨報告会, 出土銭貨研究会, 尼崎市立小田公民館, 2013/2

高橋照彦「北東北における緑釉陶器出土のあり方」六ヶ所村歴史フォーラム 2012, 六ヶ所村「尾駁の牧」歴史研究会, 六ヶ所村文化交流プラザ・スワニー, 2012/12

高橋照彦「中心周辺関係からみた律令期と古墳期」「21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信」研究集会, 大阪大学, 2012/12

高橋照彦「丹波篠窯跡群大谷3号窯の発掘調査とその成果」考古学談話会大会, 京都大学文学部考古学研究室, 京都大学文学部, 2012/11

高橋照彦, 中久保辰夫「大谷3号窯の発掘調査と篠窯跡群」丹波・篠窯跡群の最新成果—分布調査と発掘調査—検討会, 立命館大学アート・リサーチセンター, 2012/10

高橋照彦, 中久保辰夫「考古学からみた王宮・王陵と地域社会」日本史研究会古代史部会, 日本史研究会, 機関誌会館, 2012/9

田中由理, 高橋照彦「平安期緑釉陶器の色彩学的検討—機械計測と目視同定—」日本考古学協会第78回総会, 日本考古学協会, 立正大学, 2012/5(『一般社団法人日本考古学協会第78回総会研究発表要旨』pp. 50-51, 2012/5)

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2012年度～2015年度、基盤研究(B) 一般、代表者:高橋照彦

課題番号:24320156

研究題目:日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究

研究経費:2012年度 直接経費 2,900,000円 間接経費 870,000円

2013年度 直接経費 3,100,000円 間接経費 930,000円

研究の目的:

本研究では、日本古代の手工業生産について、3つの分野横断的な比較を試みる。すなわち、①窯業製品、金属製品や織物など手工業部門を越えて検討すること、②日本の宮都周辺域を核に朝鮮半島や中国などとの比較を進めること、③考古学に文献史学や分析化学などの成果や手法を取り入れて協業をすること、である。このために、各種分野を専門とする研究者により大局を議論する研究会と、特定フィールドの重点的調査の2つを支柱として、研究現状を総括し、展望を示したい。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

東洋陶磁学会・常任委員, 2009年5月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2005年11月～現在に至る

## 3. 中久保 辰夫 助教

1983年3月12日生。2011年3月大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)(2011年、大阪大学)。2009年4月～2011年3月:日本学術振興会特別研究員。2011年4月より現職。専攻:日本考古学。

### 3-1. 論文

---

中久保辰夫「渡来系集団の定着過程と河内地域の集落展開」『古代学研究』(古代学研究会), 第199号, pp. 17-24, 2013/10

中野咲, 中久保辰夫(共著)「韓半島系土器のあり方からみた集落分類」『古代学研究』(古代学研究会), 第199号, pp. 3-8, 2013/10

中久保辰夫「古墳時代前半期の摂津と播磨」『前期古墳からみた播磨』(播磨考古学研究集会実行委員), pp. 15-29, 2013/1

中久保辰夫「河内地域」『集落から探る古墳時代中期の地域社会 ―渡来文化の受容と手工業生産―』(古代学研究会), pp. 23-38, 2012/12

中久保辰夫他(共著)「韓半島系土器のあり方からみた集落分類」『集落から探る古墳時代中期の地域社会 ―渡来文化の受容と手工業生産―』(古代学研究会), pp. 3-6, 2012/12

中久保辰夫「渡来人がもたらした新技術」『古墳時代の考古学』7, 同成社, pp. 159-169, 2012/10

中久保辰夫「渡来文化受容の二波 ―古墳時代中期の北河内を中心として―」『韓式系土器研究』(韓式系土器研究会), 12, pp. 11-28, 2012/8

中久保辰夫「古墳時代前期～中期の九州出土朝鮮半島系土器と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』(九州前方後円墳研究会), pp. 123-129, 2012/6

### 3-2. 著書

---

高橋照彦, 中久保辰夫(共編著)『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学大学院文学研究科, 96p., 2014/1

中久保辰夫(編)『野中古墳と古市古墳群 文化庁／文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業』大阪大学大学院文学研究科, 18p., 2013/3

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 3-4. 口頭発表

---

中久保辰夫「野中古墳の発掘調査と出土品の保存修理」講演会「河内政権への道」, 大阪大学大学院文学研究科, 2014/3

中久保辰夫「おいしいごはんの考古学」アカデミックッキング, 大阪ガスクッキングスクール千里, 2014/3

Nakakubo, Tatsuo, "Pottery of the Kofun Period: Resonance, Innovation, and Core-Periphery Relations", Special Workshop on Japanese Archaeology: New Perspectives on the Archaeology of State Formation in Japan, Int'l Center for East Asian Archaeology, Boston University(アメリカ), 2013/11

中久保辰夫「考古学からみた4・5世紀の摂津とヤマト政権」土曜の考古学 日本古代史の争点 謎の4, 5世紀を探る, 大阪・よみうり天満橋文化センター, 2013/5

中久保辰夫 「倭王権の交易」朝日カルチャーセンター，朝日カルチャーセンター，兵庫・朝日カルチャーセンター芦屋教室，2013/1

中久保辰夫 「河内地域」古代学研究会 2012 年度拡大例会シンポジウム，古代学研究会，大阪・大阪歴史博物館，2012/12(『古代学研究会 2012 年度拡大例会シンポジウム資料集 集落から探る古墳時代中期の地域社会 ―渡来文化の受容と手工業生産―』pp. 23-38, 2012/12)

中久保辰夫 「渡来文化受容にみる中心周辺関係」科学研究費基盤(A)「21 世紀初頭における古墳時代像の総括的提示とその国際発信」研究集会，大阪大学文学研究科，大阪・大阪大学大学院文学研究科，2012/12

中久保辰夫 「考古学からみた4・5世紀の播磨とヤマト政権」豊中歴史同好会8月例会，豊中歴史同好会，大阪・ルシオーレ 6 階教育センター，2012/8 (『つどい』298, pp. 1-11, 2012/10)

Nakakubo, Tatsuo, “Two types of intercultural interactions in the development of the Yamato government”, Workshop on Current Research on the Archaeology of the Kofun period in an international perspective, Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, 2012/7(『日本古墳文化研究の国際化に向けて―一日欧ワークショップおよびフィールド調査による古墳文化研究の国際化推進事業―』pp. 5-13, 2012/12)

中久保辰夫 「ハソウの共有と渡来人の系譜」韓式系土器研究会例会，韓式系土器研究会，大阪・大阪文化財研究所 東淀川調査事務所，2012/6

中久保辰夫 「古墳時代前期～中期の九州出土朝鮮半島系土器と対外交渉」第 15 回九州前方後円墳研究会北九州大会，九州前方後円墳研究会，福岡・北九州市立いのちのたび博物館，2012/6(『第 15 回九州前方後円墳研究会北九州大会発表要旨・資料集 沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』pp. 123-139, 2012/6)

中久保辰夫 「選別と廃棄過程からみる平安時代窯業生産の特質」日本考古学協会 第 78 回研究発表会，日本考古学協会，東京・立正大学，2012/5(『日本考古学協会第 78 回総会 研究発表要旨』pp. 52-53, 2012/5)

中久保辰夫 「待兼山遺跡の発掘調査成果 ～旧制浪速高等学校の足元から古代史を発掘する～」旧制浪速高等学校同窓会第 491 回，旧制浪速高等学校同窓会，大阪・大阪大学全学総合教育棟 I，2012/4

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2013 年度～2015 年度、若手研究(B)、代表者:中久保辰夫

課題番号:25770276

研究題目:韓半島系土器の受容実態からみた古墳時代対外交流の時期的地域的展開

研究経費:2013 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、土器使用痕跡の観察といった新しい観察視点により土器資料を分析することによって、日本列島から出土した韓半島系土器の器種構成の変遷およびその受容・浸透過程が、時期によって変化することを実証し、その背後にある日韓交流の質的变化を明らかにすることにある。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

考古学研究会・常任委員，2009 年 4 月～現在に至る



## 2-11 人文地理学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 1 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：堤 研二

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
25	3	3	0	0	2	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 1 名

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	6	2	0	0
2013	6	1	0	0
計	12	3	0	0

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

学部・大学院の教育においては、広い視野の中に自己の学習や研究を位置付けられるよう、講義・演習を構成することとし、卒業・修了時までには実社会で要請される基礎的スキルを習得できるよう講義・演習・論文発表などを配置することを目標とした。大学院においては、①能率的な研究の進行にむけて、研究計画の立案から指導すること、②GIS などデジタル処理手法の習得につとめさせ、その応用を推進すること、③TA・RAなどの機会を積極的に利用し、コミュニケーションや指導の能力を養成することなどを目標とした。学部においては、①人文地理学の基礎を、その応用を意識させつつ身につけさせること、②地図学、統計解析などの実習を通じて基礎的手法を習得させること、③卒業論文作成を機会に、企画からプレゼンテーションまで、総合的な能力の養成をはかる、ということなどを目標とした。

#### 2. 研究

教員・大学院生は毎年最低 1 回の学会発表等をおこなうとともに、国内・国外の審査つき学術誌・学術書等への投稿

に努力し、あわせて紀要・報告書の執筆も推進することとし、教員全員が代表者として科学研究費補助金の申請をおこなうだけでなく、他の競争的外部資金の獲得にも努めるようにすることを目標とした。大学院生には、日本学術振興会の特別研究員への応募をすすめるほか、機会があれば、他の研究資金の獲得にも努めさせることとした。また、不断に研究室の設備・備品を点検し、研究環境の維持・改善に努力し、学内外の共同研究に積極的に参加し、研究の視野と可能性を拡大することなども目標とした。

### 3. 社会連携

研究成果に関する報道機関の取材、執筆依頼等には積極的に協力することとし、教室ならびに個人の HP を充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とした。また、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることとし、学会の研究グループ・研究ワークショップでの活動や博物館などの展示企画には積極的に参加し、研究成果の普及を図るよう努力することとした。さらに、研究成果を社会に還元する書物の刊行を、出版助成金などを得ながら積極的に推進することも目標とした。

## Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

### 1. 教育

講義・演習では、基礎から先端、応用までの手法・スキルの習得を意識した教育をおこなった。大学院生の研究計画・研究報告については、通常の授業時間ではスケジュールや研究テーマの絞込みをはじめ、研究テーマに即した事項を中心にディスカッションを行い、年度の初めと終わりに演習で発表させ、指導するほか、学会発表や論文の執筆に際しても綿密な指導をおこなってきた。

### 2. 研究

教員 1 名は、科学研究費での助成研究を続けつつ、研究を継続して実施し、スウェーデンにおける国際研究集会での発表と、ドイツ南部林業地域の調査を行った。また院生は学会等における 5 本の口頭発表を実現した。教員による科学研究費、民間の財団への研究費の申請のほか、大学院生の日本学術振興会特別研究員への応募も毎年おこなっている。このほか、研究室の設備・備品は定期的に点検し、メンテナンスをおこなうとともに、旧式化したものは更新している。学内外の共同研究にも積極的に参加してきている。目標はほぼ達成されたと考える。

### 3. 社会連携

教室ならびに個人の HP でその公開に努めている。さらに日本地理学会、人文地理学会の代議員・評議員・協議員など学外の職務にも積極的に応じた。大阪大学サステイナビリティ研究機構について、教員 1 名が兼任教員となって環境史関係の研究・教育をすすめた。また、国際学会の準備委員や複数の国際研究ワークショップの実行委員として準備・開催等に従事した。

## Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

### 1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。卒業学生・修了大学院生以外の学生たちに関しても、種々の地理学的スキルや思考の基礎に関する授業その他の教育実践が可能であった。掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

### 2. 研究

教員・大学院生の全員が学会発表をおこなうという目標はほぼ達成された。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

### 3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

## V. 基本情報(2012年度～2013年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	0	0	0
2013	0	0	0
計	0	0	0

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2013	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

括弧内は査読付き論文数。

#### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	2	0	0	0	2
2013	0	1	2	0	0	3
計	0	3	2	0	0	5

#### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

##### (1)論文

なし

##### (2)口頭発表

【2012年度】

〔博士前期〕

石川真理子「本州四国連絡橋完成に伴う四国地方の旅客流動の変化」日本地理学会秋季学術大会, 神戸大学鶴甲キャンパ

ス(神戸市), 2012/10/6

森野友介『『スクリーンステイプ』の視点からみたビデオゲームの空間表現』日本地理学会秋季学術大会, 神戸大学鶴甲  
キャンパス(神戸市), 2012/10/6

#### 【2013年度】

[博士前期]

佐々木敏光「ダム建設に伴う山村過疎地域における人々のくらしの変遷」島根大学・大阪大学・専修大学合同ゼミ, 島根  
大学(松江市), 2013/9/5

[博士後期]

藤森衣子「居住者移動からみたニュータウンの形成—神戸市鶴甲団地を例として—」島根大学・大阪大学・専修大学合同  
ゼミ, 島根大学(松江市), 2013/9/5

藤森衣子「ニュータウン居住者のファミリー・サイクル—神戸市鶴甲団地を例として—」人文地理学会大会, 大阪市立大  
学(大阪市), 2013/11/10

### (3)その他(書評・翻訳など)

なし

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2013年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2013年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤  
職員として就職が決まった者について)

なし

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通  
訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2名

2012年度: 1名 2013年度: 1名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名  
その他 0名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2012年度: 0名 2013年度: 0名

## 9. 刊行物

なし

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 堤 研二 教授

1960年福岡県大牟田市生れ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士(九州大学、1986)・博士(文学)(九州大学、2009)。佐世保工業高等専門学校助手・講師、島根大学法文学部講師・助教授、大阪大学文学研究科助教授・准教授を経て、2009年11月より現職。地域地理科学学会賞(1997)、昭和シェル石油環境研究助成財団環境研究課題賞(2005)、大阪大学教育・研究功績賞(2006)、大阪府スポーツ少年団優良団表彰(2012)。専攻:人文地理学、とくに社会経済地理学。

#### 1-1. 論文

---

Tsutsumi, Kenji, "Mountainous Areas in Japan and Forest Town Management Model (FTMM)" Westerdaal, S., Westlund, H. and Kobayashi, K.(編) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (Marginal Areas Research Group), 8, Center for Entrepreneurship and Spatial Economics), Jönköping International Business School of Jönköping University, Sweden, pp. 245-254, 2013/12

堤研二 「地域社会学と『地域社会学会会報』の意義」『会報』刊行世話人会(監修)『復刻 地域社会学会会報 別冊(解説)』近現代資料刊行会, pp. 9-11, 2012/10

#### 1-2. 著書

---

堤研二, 人文地理学会他(編)『人文地理学会事典』丸善出版, 761p., (編集委員として参画) 2013/9

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 1-4. 口頭発表

---

Tsutsumi, Kenji, "Forestry Revitalization and Regional Marginality at Mountainous Areas in Japan", IGU (International Geographical Union) 2013 Kyoto Regional Conference, IGU (International Geographical Union) 2013 Kyoto Regional Conference, Kyoto International Conference Center (ICC Kyoto), Kyoto, Japan, 2013/8

Tsutsumi, Kenji, (基調講演) "Thinking from Japan beyond the four "D"s, concerning with Social Capital: Diversity, Disparity, Depopulation and Deprivation (A Plenary Lecture)", The Japan-Korea-China Joint Conference on Geography, The 8th Japan-Korea-China Joint Conference on Geography, Kyushu University, Fukuoka, Japan, 2013/7

Tsutsumi, Kenji, "Marginality and Sustainability of Mountainous Village and Forestry", The 10th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Marginal Areas Research Group, Amakusa Treasure Island International Exchange Hall "Porto," Amakusa, Japan, 2013/5

堤研二 「林業・森林管理・地域システム: 山間地域の持続システム」2012年日本地理学会秋季学術大会 シンポジウム「日本の山

村の非限界性と村立基盤」, 日本地理学会, 神戸大学、神戸市灘区鶴甲第1キャンパス, 2012/10

堤研二 (招待講演)「人口流出と地域変化:山村と炭鉱地域の調査から見えてきたこと」日本村落研究学会 2012 年度九州・中国・四国地区研究会, 日本村落研究学会, 九州大学、福岡市東区箱崎キャンパス, 2012/8

Tsutsumi, Kenji, “Mountainous Areas in Japan and the Forest Town Management Model”, The 9th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Marginal Areas Research Group, Blasingsborgs Conference Hotel, Österlen, Sköne, Sweden, 2012/5

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

堤研二 市民スポーツ・レクリエーション指導者表彰, 豊中市民体育振興協議会, 2012/10

堤研二 大阪府スポーツ少年団優良団表彰, 大阪府スポーツ少年団本部, 2012/2

堤研二 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 国立大学法人大阪大学, 2006/2

堤研二 昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9

堤研二 地域地理学会賞, 地域地理学会, 1997/7

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2011 年度～2013 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:堤研二

課題番号:23320182

研究題目:中山間地域における林業・森林環境と住民生活に関するマネジメント=モデルの構築

研究経費: 2012 年度 直接経費 5,800,000 円 間接経費 1,740,000 円

2013 年度 直接経費 2,200,000 円 間接経費 660,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、中山間地域における基幹産業である林業の再生と森林環境の維持管理とを結びつけ、林業を支える兼業形態と地域生活機能の持続可能性を高めるための「フォーレストタウン=マネジメント=モデル (FTMM)」を構築する目的でのパイロット研究を実施することにある。具体的には、(1)森林環境保全のための管理モデル、(2)林業再生のための合理的方策に関するモデル、(3)中山間地域における産業・兼業と生活のリーズナブルな持続性を可能にするモデルを設計し、(4)それらを統合的にアレンジして、中山間地域に適用可能な具体的な総体的社会経済モデルとしての“FTMM”のパイロット=モデルを試験的に構築しつつ、並行して、あるいはそれに沿って調査研究を実行し、成果の社会への発信と政策提言を行っていく。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

人文地理学会・学会賞候補者選考委員会委員(一般図書部門), 2013 年 12 月～現在に至る

人文地理学会・法人化問題検討委員会委員, 2012 年 12 月～2013 年 4 月

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・外部評価委員, 2012 年 10 月～現在に至る

人文地理学会・将来構想検討委員, 2012 年 4 月～2013 年 3 月

豊中市スポーツ少年団本部・本部委員、副本部長, 2012 年 4 月～現在に至る

豊能地区スポーツ少年団連絡協議会・役員・事務局担当, 2012 年 4 月～現在に至る

人文地理学会・人文地理学事典編集委員, 2011 年 8 月～現在に至る

国際地理学連合京都国際地理学会議・組織委員・巡検委員長, 2011 年 8 月～2014 年 3 月

人文地理学会・評議員, 2010 年 11 月～現在に至る

日本地理学会・代議員, 2010 年 4 月～現在に至る

# 2-12 日本文学

## I. 現在の組織

### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 3 准教授 1 講師 1 助教 1

教授：出原 隆俊、飯倉 洋一、加藤 洋介

准教授：斎藤 理生

講師：合山林太郎

助教：箕浦 尚美

### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
43	13	13	0	2	1	3	0

\*うち留学生 11名、社会人学生 2名

\*\*日本文学・国語学専修として

### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	22	1	5	5
2013	21	8	1	3
計	43	9	6	8

\*日本文学・国語学専修として

## II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

学部・大学院の教育においては、学問的な連携体制を形成するために、学部・大学院共通の講義を設定し、また学部演習への大学院生の参加を促している。日本文学には留学生も多数在籍しており、TA・RAの機会を与えることで、コミュニケーションや教育指導の能力を高めることにも努めている。大学院においては、①修士・博士論文作成演習の授業に連動して、学会発表、投稿論文作成等のための個別指導を行い、院生が研究進捗状況を報告・発表しあう研究発表会を開催する、②専門機関の採用情報等の入手につとめ、専門職への就職を積極的に支援する、また日本学術振興会特別研究員

(PD/DC2/DC1)に関する学生への情報提供とともに、積極的な応募を促す、③『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』など、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促す。また研究分野に関連する学会での口頭発表や学会誌への投稿を促す、などを目標とした。学部においては、①卒業論文作成演習の授業に連動して、個別指導を行うほか、卒業論文中間発表会を開き、学生の卒業論文完成に導く、②日本文学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知するとともに参加を促す、③『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』など、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促す。また研究分野に関連する学会での口頭発表や学会誌への投稿を促す、などを目標とした。

## 2. 研究

教員は科学研究費補助金を中心とした競争的外部資金の獲得に努め、継続中の科学研究費および諸プロジェクトに関わる研究を行う。また学生・卒業生・修生とともに研究活動を促進するために、「大阪大学国語国文学会」を開催し、学会機関誌『語文』を刊行する。教員および大学院生を中心とした研究会活動として、「大阪大学古代中世文学研究会」「大阪大学近代文学研究会」「上方読本の会」ほかの研究会活動を行い、合わせて研究誌『詞林』『阪大近代文学研究』を刊行し、国内外の関係者・機関に送付することなどを目標とした。

## 3. 社会連携

所蔵保管資料の社会的活用を図るため、各方面からの閲覧複写依頼に応じ、資料の一部を年 1 回解題を付して展示公開し、またウェブ上で画像データベースとして公開することを目標とした。そのほかにも、懐徳堂記念会による「懐徳堂古典講座」など、一般の方を対象とする講座から派遣依頼のあった場合、あるいは高校教員の国語研究会や高校生を対象とする講座からの講師派遣依頼などにも積極的に対応する、などを目標とした。

# Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

授業形態においては、学部・大学院共通の講義を設定し、学部演習への大学院生の参加を促した。論文作成のための演習授業に加え、7月、11月に院生発表会を、10月に修士論文・卒業論文中間発表会を行い、卒業・修士・博士論文執筆に向けての指導を行った。また学会発表・投稿論文作成のための個別指導も発表会とは別に行った。なお、大学院では、学振特別研究員に2名(DC2)採用された。

『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』などの、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促した結果、学会誌等も含めて30の論文が掲載され、学会・研究会での研究発表も57本を数えるという状況にある。

## 2. 研究

科研費による研究プロジェクトとしては「近世上方文壇における人的交流の研究」(～2013)、「定家本伊勢物語・源氏物語の形成と展開に関する総合的研究」(～2013)、「森槐南を中心とする幕末・明治期日本漢文学の研究」(～2012)、「明清詩論の受容に関する考察を中心とした、近世・近代日本漢文学史の再検討」(2013～)、「本地物語の研究—菩薩行と誓願を視座として—」(在籍2013～)等を行った。

2013年1月および2014年1月に「大阪大学国語国文学会」を開催し、機関誌『語文』98(12年6月)、99(12年12月)、100・101(13年12月)輯を刊行した。また詳細は10の研究会開催の状況を参照していただきたいが、各研究会も活発に開催され、それぞれの研究誌である『詞林』51号(12年4月)・52号(12年10月)・53号(13年4月)・54号(13年10月)、『阪大近代文学研究』第11号・12号(13年3月・14年3月)を刊行した。

## 3. 社会連携

各方面からの閲覧複写依頼に応じるとともに、データベースを公開中。「懐徳堂古典講座」に教員が講師として出講し



た(4月～12月：加藤)。また、大阪市立中央図書館公開講座(7月：飯倉)、大阪歴史博物館翠曜塾(8月：加藤)、放送大学大阪学習センター(12月：加藤)に講師として参加するなど、積極的な対応に努めた。

## IV. 自己点検・自己評価(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

活動の概要の項、前掲の「修了生・卒業生」の実績および後掲の「大学院生等による論文発表等」の項にまとめたところからすれば、当初の目標を概ね達成できていると思われる。

### 2. 研究

科研費を中心とした各種の研究プロジェクトは順調に遂行され、また教員および大学院生による研究成果も着実に積み上げられており、目標は充分達成できていると判断してよいと思われる。

### 3. 社会連携

活動の概要の項にその実績をまとめたが、社会連携の目標についても十分に達成できたと考えられる。

## V. 基本情報(2012年度～2013年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	5	0	5
2013	3	1	4
計	8	1	9

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

ホルカ・イリナ「島崎藤村の身辺書き小説—〈個人〉から〈社会〉への回路—」2012/9

主査：出原隆俊 副査：清水康次、合山林太郎

張 麗静「谷崎潤一郎作品の研究—寓意としての母性をめぐって—」2013/3

主査：出原隆俊 副査：加藤洋介、合山林太郎

田 泉「大江健三郎初期作品の研究—「学生もの」を中心に—」2013/3

主査：出原隆俊 副査：加藤洋介、合山林太郎

モハマッド・モインウッディン「志賀直哉の大正時代の作品研究—〈自己〉と〈他者〉を中心に—」2013/3

主査：出原隆俊 副査：清水康次、飯倉洋一

荘 千慧「明治期の文芸作品における心霊学の影響—漱石・鷗外の文芸作品を中心に—」2013/3

主査：出原隆俊 副査：清水康次、飯倉洋一

ルーンピロム カナパット「中世軍記物語における女性と仏教—苦悩と救済の様相をめぐって—」2014/3

主査：加藤洋介 副査：飯倉洋一、合山林太郎

康 盛国「雨森芳洲の文事」2014/3

主査：飯倉洋一 副査：加藤洋介、合山林太郎

ウィリヤエナワット ピヤヌット「夏目漱石作品の研究—対照的に描かれる男性たちを中心として—」2014/3  
主査：出原隆俊 副査：清水康次 合山林太郎

【論文博士】

福田 安典「平賀源内の研究 大坂篇」2013/9  
主査：飯倉洋一 副査：加藤洋介、合山林太郎

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	1(1)	2(0)	14(3)	0(0)	2(0)	19(4)
2013	2(2)	0(0)	7(4)	1(0)	1(0)	11(6)
計	3(3)	2(0)	21(7)	1(0)	3(0)	30(10)

括弧内は査読付き論文数。

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	9	5	17	0	0	31
2013	4	3	19	0	0	26
計	13	8	36	0	0	57

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (1)著書

【2012年度】

〔博士後期〕

Mohammad Moinuddin, “Exploring the Idea of Self in Modern Japanese Literature –Reading the Masterpiece of Shiga Naoya “Waka”–”, LAP Lambert Academic Publishing (Germany), 2012/10

#### (2)論文

【2012年度】

〔博士前期〕

藤崎裕子「能《歌占》考—その構造を中心に—」『上方文藝研究』(上方文藝研究会), 9, pp. 69-79, 2012/6

村岡聖「志賀直哉「雨蛙」論—変貌する女・惑乱する男—」,『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 11, pp. 34-51, 2013/3

〔博士後期〕

ウィリヤエナワット・ピヤヌット「夏目漱石『野分』論—自分の世界に閉ざされている青年たち—」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 11, pp. 1-17, 2013/3

康盛国「雨森芳洲の漢詩観—『橘窓茶話』を中心に—」『近世文藝』(日本近世文学会), 96, pp.1-12, 2012/7

康盛国「朝鮮通信使の日本漢詩批評—『梅所詩稿』の申維翰序文をめぐって—」『語文』(大阪大学国語国文学会), 99, pp.16-26, 2012/12

浅見洋二・伊川健二・小野順子・康盛国・岸田文隆・金聲振・許秀美・合山林太郎・酒井裕美・高山大毅・横山恭子「李

- 學達「草梁倭館詞」訳注稿—19世紀の朝鮮実学者が詠った倭館・日本—『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 53, pp.41-66, 2013/3
- 金起台『枕草子』の日記回想的章段に表れた執筆方法の変化—「宮仕え初期の章段」と「宮仕え晩年期の章段」を中心に—『日本研究論集』(チューラーロンコーン大学・大阪大学), 6, pp. 1-12, 2012/10
- 金侖姫「樋口一葉『ゆく雲』論—「心かよは」ない文—」『語文』(大阪大学国語国文学会), 98, pp. 12-26, 2012/6
- 莊千慧『琴のそら音』—「法学士」の不安—『日本文学論集』(チューラーロンコーン大学・大阪大学), 6, pp.86-100, 2012/10
- 莊千慧「鷗外の怪奇小説—明治期の心霊学の流行との関連をめぐって—」『待兼山論叢 文学篇』(大阪大学大学院文学研究科), 46, pp.17-31, 2012/12
- 莊千慧「漱石の文芸観と心霊学」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 11, pp. 18-33, 2013/3
- 張麗静「谷崎潤一郎『少将滋幹の母』論 —〈母恋い〉の語りに秘められたもの—」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 11, pp. 67-81, 2013/3
- 田泉「大江健三郎「死者の奢り」論—「奢り」について—」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 11, pp. 82-100, 2013/3
- 高橋忠彦・松本大「国立国会図書館蔵色葉字尽翻字本文」『日本語と辞書』(古辞書研究会), 17, pp. 133-156, 2012/5
- 松本大『花鳥余情』『伊勢物語愚見抄』の後人詠注記—歌学から物語注釈への一過程—『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 52, pp. 39-62, 2012/10
- 宮川真弥『枕草子春曙抄』における類書の利用とその隠匿—『円機活法』『事文類聚』を中心に—『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 51, pp. 25-39, 2012/4
- 宮川真弥「板本『枕草子春曙抄』の諸本系統—板木の利用状況の考察を中心に—」『語文』(大阪大学国語国文学会), 99, pp. 1-15, 2012/12
- モハマド・モインウッディン「志賀直哉『大津順吉』における「私」の心理」『第36回国際日本文学研究集会会議録』(国文学研究資料館), pp.101-120, 2013/3
- ルーンピロム カナパット「延慶本『平家物語』における平維盛北の方—愛する者を救済する・愛する者に救済される存在—」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 52, pp. 25-38, 2012/10
- 【2013年度】**
- 〔博士前期〕
- 有澤知世「江戸文芸における〈善の髑髏模様〉」『日本研究論集』(チューラーロンコーン大学・大阪大学), 8, pp.105-122, 2013/10
- 村岡聖「小杉天外『はやり唄』論」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 12, pp. 1-18, 2014/3
- 〔博士後期〕
- 瓦井裕子『源氏物語』における季節矛盾の再検討『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 53, pp.17-31, 2013/4
- 瓦井裕子『和泉式部日記』における時間表現—日次矛盾と「かくいふほどに」の機能をめぐって—『日本研究論集』(チューラーロンコーン大学・大阪大学), 8, pp.33-48, 2013/10
- 康盛国「曲亭馬琴『括頭巾縮緬紙衣』의 考察—『羈旅漫録』『蓑笠雨談』의 椀久考証内容의 利用을 中心으로 —」『日本研究』(韓国外語大学校日本研究所), 59, pp.55-74, 2014/3
- 仲沙織「「執心」への対処をめぐる物語—『新可笑記』巻四の「舟路の難義」考—」『語文』(大阪大学国語国文学会), 100・101, pp.113-126, 2013/12
- 仲沙織『新可笑記』の描く「油断」—巻五の二「見れば正銘にあらず」考—『近世文藝』(日本近世文学会), 99, pp. 13-28, 2014/1
- 松本大『河海抄』巻九論—諸本系統の検討と注記増補の特徴—『中古文学』(中古文学会), 91, pp.67-81, 2013/5
- 松本大「東北大学図書館蔵旧制第二高等学校旧蔵『河海抄』をめぐって」河添房江編『古代文学の時空』(翰林書房), pp.288-321, 2013/10
- 松本大『湖月抄』の注記編集方法—『岷江入楚』利用と『河海抄』引用について—『詞林』(大阪大学古代中世文学研

究会), 54, pp.21-40, 2013/10

松本大『河海抄』の『うつほ物語』引用—音楽関係記事を中心に— 原豊二・劉曉峰編『東アジアの音楽文化—物語と交流と—』(アジア遊学・勉誠出版), 170, pp.68-72, 2014/1

### (3)口頭発表

【2012年度】

〔博士前期〕

有澤知世「京伝と三馬—合巻における趣向の相互利用—」日本近世文学学会平成24年度秋季大会, 2012/10/28

有澤知世「江戸文芸における〈善の髑髏模様〉—戯作・演劇・浮世絵の作品から—」大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会第4回, 2013/3/21

池田弘明『斜陽』の時間について」近代文学研究会, 2013/3/23

村岡聖「子どもを持たない三千代に注目して見る『それから』の特異性」近代文学研究会, 2012/12/15

山中晋也「人形浄瑠璃における生さぬ仲の親子の描かれ方について—『摂州合邦辻』の考察—」大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会第4回, 2013/03/21

楊也『枕草子』の「をかし」「めでたし」「笑ひ」について—日記的章段を中心に—」大阪大学古代中世文学研究会第239回例会, 2012/5/19

〔博士後期〕

ウィリヤエナワット・ピヤヌット「The Study of Young men Characters in The Autumn Wind (『野分』) by Natsume Soseki」The 6th Conference for Japanese Studies Network-Thailand, Faculty of Humanities, Kasetsart University Thailand, 2012/10/11-12

瓦井裕子『源氏物語』正編における季節表現の構想的利用」大阪大学古代中世文学研究会第238回例会, 2012/4/28

瓦井裕子「取り合わせられる菊と紅葉—一条朝前後の趣向の反映として—」大阪大学古代中世文学研究会第243回例会, 2013/1/27

瓦井裕子「和泉式部日記における時間表現」第4回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 2013/3/21

康盛国「論朝鮮文人申維翰對日本文人唐金梅所的评价—18世紀朝鮮・日本漢文學交流之一例—」“東亞文明視野下的中國文學”國際博士生論壇, 南京大學, 2012/10/14

金起台『枕草子』の日記回想的章段に表れた執筆方法の変化—「宮にはじめてまゐりたるころ(一七七段)」、「大進生昌が家に(六段)」を中心に—」第3回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 2012/6/2

金起台『枕草子』自賛譚の一考察」大阪大学古代中世文学研究会第241回例会, 2012/8/25

金起台『枕草子』の一考察—日記回想的章段の分類形態を中心に—」大阪大学古代中世文学研究会第243回例会, 2013/1/27

金 命姫「樋口一葉『暁月夜』論」第3回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 2012/6/2

高嶋 藍『『とはずがたり』二条への視線—「我ながら」に着目して—」大阪大学古代中世文学研究会第242回例会, 2012/12/22

張 麗静「『予覚』する夢に託されたもの—谷崎潤一郎『母を恋ふる記』をめぐって—」平成25年度大阪大学国語国文学会総会, 2013/1/12

田泉「大江健三郎『奇妙な仕事』論—「審判」の吠え声—」近代文学研究会, 2012/5/19

仲沙織『新可笑記』と『続太平記狸首編』—巻五の二「見れば正銘にあらず」考—」第122回日本近世文学学会大会, 明星大学, 2012/6/24

松本大『河海抄』巻九における諸本異同とその特徴」大阪大学古代中世文学研究会第240回例会, 2012/6/30

松本大『河海抄』の成長—巻九の諸本異同から見えるもの—」平成24年度中古文学会秋季大会, 2012/11/4

松本大『河海抄』の『宇津保物語』引用—音楽関係記事を中心に—」第4回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文

学国際研究交流集会, 2013/3/21

松本大「『河海抄』巻十一における諸本系統再考」大阪大学古代中世文学研究会第 245 回例会, 2013/3/30

宮川真弥「板本『枕草子春曙抄』の諸本系統—整版本における版種弁別法確立のために—」大阪大学古代中世文学研究会第 242 回例会, 2012/12/22

宮川真弥「『湖月抄』における諸注集成の基準について—『細流抄』『孟津抄』を中心に—」大阪大学古代中世文学研究会第 244 回例会, 2013/2/23

宮本正章「与謝野晶子「源氏物語礼讃」歌—「宇治十帖」の歌の考察—」大阪大学古代中世文学研究会第 244 回例会, 2013/2/23

村山識「『続千載和歌集』「誹諧歌」を読む—二条家撰者の勅撰集編集術—」大阪大学古代中世文学研究会第 238 回例会, 2012/4/28

モハマド・モインウッディン「志賀直哉『大津順吉』における「私」の心理」第 36 回国際日本文学研究集会, 国文学研究資料館, 2012/8/17

ルーンピロム カナパット「真名本『曾我物語』における曾我兄弟の母—出家と女人往生の様相—」大阪大学古代中世文学研究会第 240 回例会, 2012/6/30

ルーンピロム カナパット「『平治物語』における常葉—母子救済の様相をめぐって—」平成二五年度大阪大学国語国文学会総会, 2013/1/12

ルーンピロム カナパット「『義経記』における静—子供の死と女人往生の様相をめぐって—」大阪大学古代中世文学研究会第 243 回例会, 2013/1/27

【2013 年度】

〔博士前期〕

有澤知世「江戸戯作における上方読本『垣根草』受容」第 130 回京都近世小説研究会, 同志社女子大学今出川校地栄光館 1 階 E104 号室, 2013/02/22

川那邊依奈「太宰治『葉桜と魔笛』について—「愛」の表現に着目して—」大阪大学近代文学研究会, 京都府立大学, 2013/5/18

黒田翔子「『大納言公任集』試論—「常ならぬ」歌をめぐって—」大阪大学古代中世文学研究会第 247 回例会, 2013/5/18

ナカエマ・オリビヤユミ「『古今和歌集』における見立て」大阪大学古代中世文学研究会第 249 回例会, 2013/7/20

ナカエマ・オリビヤユミ「『古今和歌集』享受の研究—『日本大文典』をめぐって—」大阪大学古代中世文学研究会第 254 回例会, 2014/2/15

村岡聖「太宰治『姥捨』論—かず枝に注目して—」第 5 回大阪大学・チュラローンコーン大学交流発表会, 大阪大学アセンブリーホール, 2014/3/28

森由依子「『枕草子』類聚的章段における叙述の特徴—助動詞「き」の使用をめぐって—」大阪大学古代中世文学研究会第 246 回例会, 2013/4/21

楊也「『枕草子』における「泣く」表現」大阪大学古代中世文学研究会第 248 回例会, 2013/6/29

楊也「『枕草子』における「も」の表現について」大阪大学古代中世文学研究会第 252 回例会, 2013/11/17

楊也「『枕草子』における形容詞の表現手法」第 5 回大阪大学・チュラローンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 2014/3/28  
〔博士後期〕

瓦井裕子「『源氏物語』における哀傷表現—和歌史の観点から—」大阪大学古代中世文学研究会第 249 回例会, 2013/7/20

瓦井裕子「一条朝女房歌人の歌語—贈答を通じた伝播をめぐって—」大阪大学古代中世文学研究会第 253 回例会, 2014/1/25

瓦井裕子「一条朝における菊紅葉表現—『源氏物語』を端緒として—」, 中古文学会関西西部会第 34 回例会, 同志社大学, 2013/6/22

康盛国「雨森芳洲と『莊子』—三教合一論へのつながりを中心に—」第 37 回国際日本文学研究集会, 国文学研究資料館, 2013/11/30

- 康盛国「雨森芳洲文庫蔵『三宅滄溟筆談集』の考察—三宅家三代の通信使接応時の類似性を中心に—」平成26年度大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2014/1/11
- 金起台「『枕草子』における自讃譚の一考察—章段別の役割を中心に—」大阪大学古代中世文学研究会第247回例会, 2013/5/18
- 金起台「『枕草子』「第一三七段 殿などのをはしまさでのち」の解釈をめぐる一考察」大阪大学古代中世文学研究会第253回例会, 2014/1/25
- 仲沙織「「人は虚実の入物」—『新可笑記』試論—」第128回京都市近世小説研究会, 同志社女子大学今出川校地栄光館1階E104号室, 2013/10/12
- 仲沙織「『新可笑記』巻三の五「取やりなしに天下徳政」考」第130回京都市近世小説研究会, 同志社女子大学今出川校地栄光館1階E104号室, 2014/2/22
- 仲沙織「狐の芸尽し—西鶴『懷硯』巻二の五「椿は生木の手足」考—」第5回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 大阪大学会館アセンブリーホール, 2014/3/28
- 松本大「東北大学附属図書館蔵旧制第二高等学校旧蔵『河海抄』について」, 大阪大学古代中世文学研究会第246回例会, 2013/4/21
- 松本大「『湖月抄』の『河海抄』引用」, 大阪大学古代中世文学研究会第248回例会, 2013/6/29
- 松本大「『河海抄』の注記形成と二条良基—『年中行事歌合』との接点から—」, 中古文学会関西部会第35回例会, 2013/9/21
- 松本大「『三源一覽』と三条西実隆の初期源氏学」, 大阪大学古代中世文学研究会第255回例会, 2014/3/29
- 宮川真弥「『枕草子』の人物呼称再考」大阪大学古代中世文学研究会第250回例会, 2013/9/28
- 宮川真弥「枕草子「五月ばかり月もなういとくらきに」と王子猷伝」大阪大学古代中世文学研究会第254回例会, 2014/2/15

#### (4)その他(書評・翻訳など)

【2012年度】

〔博士前期〕

池田弘明「徳永光展『城山三郎『素直な戦士たち』論』『語文』(大阪大学国語国文学会), 99, p. 40, 2012/12

〔博士後期〕

康盛国「紹介 三浦和尚・福田安典編『三輪田米山日記を読む』『語文』(大阪大学国語国文学会), 98, pp. 57-58, 2012/6

合山林太郎著・康盛国訳「近世・近代日本漢詩文に描かれた壬辰戦争」『慶南学』(韓国慶尚大学校慶南文化研究院), 33, pp.47-63, 2012/12

宮川真弥「紹介 岩坪健著『ウラ日本文学—古典文学の舞台裏—』『語文』(大阪大学国語国文学会), 98, p.53, 2012/6

張麗静・田泉「翻訳 中国語(簡体字)」大阪大学大学院文学研究科日本文学・国語学研究室多言語翻訳チーム『多言語翻訳 太宰治『黄金風景』』(大阪大学大学院文学研究科 日本文学・国語学研究室日本文学多言語翻訳プロジェクト), pp. 8-9, 2012/11

莊千慧・李雅婷「翻訳 中国語(繁体字)」同上『多言語翻訳 太宰治『黄金風景』』, pp. 10-13, 2012/11

モハンマド モインウッディン「翻訳 英語」同上『多言語翻訳 太宰治『黄金風景』』, pp. 14-17, 2012/11

モハンマド モインウッディン「翻訳 ヒンディー語」同上『多言語翻訳 太宰治『黄金風景』』, pp. 18-21, 2012/11

康盛国・金倫姫「翻訳 韓国語」同上『多言語翻訳 太宰治『黄金風景』』, pp. 22-25, 2012/11

テンアリナ「翻訳 ロシア語」同上『多言語翻訳 太宰治『黄金風景』』, pp. 26-29, 2012/11

ルーンピロム カナパット「翻訳 タイ語」同上『多言語翻訳 太宰治『黄金風景』』, pp. 30-33, 2012/11

モハンマド モインウッディン「翻訳 ウルドゥー語」同上『多言語翻訳 太宰治『黄金風景』』, pp. 34-37, 2012/11

平井華恵「参考図版および解説(英語・日本語)」同上『多言語翻訳 太宰治『黄金風景』』, pp. 38-42, 2012/11

【2013年度】

〔博士前期〕

有澤知世「紹介 福田安典著『平賀源内の研究 大坂篇—源内と上方学界—』『語文』(大阪大学国文学会), 100・101, pp. 152-153, 2013/12

- 川那邊依奈「紹介 斎藤理生著『太宰治の小説の〈笑い〉』『語文』(大阪大学国語国文学会), 100・101, pp.154-155, 2013/12
- 中井陽一「紹介 飯倉洋一著『上田秋成 絆としての文芸』』『語文』(大阪大学国語国文学会), 100・101, p. 157, 2013/12
- 山中晋也「紹介 信多純一著『現代語訳 完本浄瑠璃物語』』『語文』(大阪大学国語国文学会), 100・101, p. 156, 2013/12 [博士後期]
- 松本大「書評 前田雅之『古典的思考』, 『物語研究』(物語研究会), 13号, pp.160-162, 2013/3
- 松本大「紹介 岩坪健著『源氏物語の享受 注釈・梗概・絵画・華道』, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 100・101, pp.150-151, 2013/12
- 宮川真弥「紹介 後藤昭雄著『本朝漢詩文資料論』』『語文』(大阪大学国語国文学会), 100・101, pp.146-147, 2013/12

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD:1名 DC2:1名 DC1:0名 (計2名)  
2013年度 PD:0名 DC2:2名 DC1:0名 (計2名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)  
2013年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

- 坂井二三絵 博士後期課程, 大阪府立高専, 講師, 2013/4  
田泉 博士後期課程, 天津外国語大学, 2013/4  
浜田泰彦 博士後期課程, 佛教大学, 講師, 2013/4  
水野亜紀子 博士後期課程, 大阪大学日本語日本文化教育センター, 講師, 2013/4  
川崎佐知子 博士後期課程, 立命館大学, 准教授, 2013/4  
ウィリヤエナワット・ピヤヌット 博士後期課程, タマサート大学, 常勤講師, 2014/4  
田中キャサリン 外国人招へい研究員, 大手前大学, 講師, 2014/4

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業等で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 6名  
2012年度:4名 2013年度:2名  
<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 2名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 3名  
その他 1名(公益財団法人・文化芸術関係)  
\*学部卒業者については国語学との合計で記載。

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 5名  
2012年度:1名 2013年度:4名

## 9. 刊行物

- 2012年度 『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会)第11号  
『語文』(大阪大学国語国文学会)第98輯・第99輯  
『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会)第51号・第52号  
『上方文藝研究』(上方文藝研究会)第9号
- 2013年度 『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会)第12号  
『語文』(大阪大学国語国文学会)第100・101合併輯  
『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会)第53号・第54号  
『上方文藝研究』(上方文藝研究会)第10号

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

[国内学会の開催]

2012年度

大阪大学国語国文学会総会 2013年1月12日

2013年度

大阪大学国語国文学会総会 2014年1月11日

[国際研究集会の開催]

第3回大阪大学・チュラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会 2012年6月2日

ワークショップ 異言語環境において日本近代小説を読むー太宰治『黄金風景』を例にー 2012年6月2日

第4回大阪大学・チュラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会 2013年3月21日

第5回大阪大学・チュラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会 2014年3月28日

[研究会の開催]

大阪大学古代中世文学研究会

2012年度：第238回4月28日 第239回5月19日 第240回6月30日

第241回8月25日 第242回12月22日 第243回1月27日

第244回2月23日 第245回3月30日

2013年度：第246回4月21日 第247回5月18日 第248回6月29日

第249回7月20日 第250回9月29日 第251回10月20日

第252回11月17日 第253回1月25日 第254回2月15日

第255回3月29日

上方読本を読む会

2012年度：5月12日 7月7日 9月8日 11月17日 2月2日

2013年度：4月20日 6月22日 10月5日 12月7日 2月9日

近代文学研究会

2012年度：5月19日 7月21日 9月15日 12月15日 3月23日

2013年度：5月18日 7月27日 9月28日 12月21日 3月1日

[事務局]

日本近世文学会事務局(～2012年5月)

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

\* (国語学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会 (1月 1日間)

研究誌「語文」を年2回編集・発行



\* (国語学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会 (10月 2012年度3日間、2013年度4日間)

大学院研究発表会 (7月・11月 各年度各2日間)

専門分野主催の研究会等の活動については、10.に詳述した。

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 出原 隆俊 教授

1951年生。京都大学大学院博士後期課程中退。博士(文学)。県立広島女子大学講師・助教授・京都教育大学助教授・大阪大学助教授を経て現職。専攻: 日本近代文学。

#### 1-1. 論文

出原隆俊 『『鼠坂』の周辺』『文学』隔月刊14巻1号, 岩波書店, pp. 87-98, 2013/1

出原隆俊 「〈傍観者〉の系譜」『語文』(大阪大学国語国文学会), 98, pp.27-39, 2012/06

#### 1-2. 著書

なし

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 1-4. 口頭発表

なし

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本近代文学会・評議員, 1994年4月～現在に至る

### 2. 飯倉 洋一 教授

1956年生。1985年九州大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学)(九州大学、1998年)。九州大学助手・山口大学専任講師・同助教授・同教授・大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻: 日本近世文学。

#### 2-1. 論文

飯倉洋一 「西鶴読解の壁—「ワークショップ 西鶴をどう読むか」報告を兼ねて」『リポート笠間』(笠間書院), 55, 笠間書院, pp.

21-28, 2013/11

柏木加代子, 飯倉洋一(共著), “La Manga de Hokusai conservee Au Musee Cheret de Nice”(共著)『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』57, 京都市立芸術大学, pp. 59-62, 2013/3

飯倉洋一 「近世文学の一領域としての「奇談」」『日本文学』(日本文学協会), 61-10, 日本文学協会, pp. 24-35, 2012/10

## 2-2. 著書

---

飯倉洋一 『上田秋成 絆としての文芸』大阪大学出版会, 258p., 2012/12

飯倉洋一他(共編) 『なにわ古書肆 鹿田松雲堂 五代のあゆみ』和泉書院, 250p., pp. 40-42, 96-99, 2012/11

## 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

飯倉洋一(その他) 「江戸文・雅俗・上文—研究同人誌と私」『雅俗』11, 雅俗の会, pp. 105-107, 2012/6

## 2-4. 口頭発表

---

飯倉洋一 (招待講演) 『「雨月物語」と江戸奇談」アスニー・セミナー, 京都市生涯学習総合センター(京都アスニー), 京都アスニー, 2013/8

飯倉洋一 (招待講演) 「上田秋成が大坂で出会った人々」講演会, 大阪市立図書館, 大阪市立図書館, 2013/7

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

飯倉洋一, 大谷俊太, 加藤弓枝他 第6回ゲスナー賞 目録・索引部門 銀賞, 雄松堂書店, 2010/10

飯倉洋一 柿衛賞(第3回), 財団法人柿衛文庫, 1993/6

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2010年度～2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者:飯倉洋一

課題番号:22320048

研究題目:近世上方文壇における人的交流の研究

研究経費: 2012年度 直接経費 1,600,000円 間接経費 480,000円

2013年度 直接経費 2,200,000円 間接経費 660,000円

研究の目的:

本研究は、近世上方(京都・大坂)文壇におけるさまざまな人的交流について、従来の個々の人物研究・文壇史研究を総合的に把握した上で、「近世上方文壇の人物相互交流データベース」・「近世上方文壇における人的交流年表」の作成を基盤としながら、上方と江戸、上方と地方、京都と大坂、堂上と地下、文学と書画、雅文壇と俗文壇などの越境的交流にとくに注目し、多角的な視点からこれを分析・検討し、近世文学史・近世文化史へのあらたな視座を提示することを目的とする。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

国文学研究資料館古典籍データベース研究事業センター拠点連携委員会・委員, 2013年4月～現在に至る

人間文化研究機構国文学研究資料館・調査収集委員会委員, 2012年4月～現在に至る

公益財団法人柿衛文庫・理事, 2012年3月～現在に至る

日本近世文学会・広報企画委員会委員, 2011年8月～現在に至る

園田学園女子大学近松研究所・評議員, 2009年4月～現在に至る

公益財団法人柿衛文庫・柿衛賞選考委員, 2007年6月～現在に至る

財団法人関西・大阪21世紀協会上方文化芸能運営委員会・運営委員, 2007年4月～現在に至る  
財団法人上方文化芸能協会・運営委員, 2005年7月～現在に至る  
人間文化研究機構国文学研究資料館・共同研究員, 2004年4月～2013年3月  
財団法人懐徳堂記念会・運営委員, 2003年4月～2014年3月  
日本近世文学会・常任委員, 2002年6月～現在に至る  
日本近世文学会・委員, 2000年6月～現在に至る  
柳川市・専門委員, 1996年4月～現在に至る  
柳川市・柳川市史専門研究員, 1995年4月～現在に至る  
人間文化研究機構国文学研究資料館・文献資料調査員, 1993年4月～現在に至る  
人間文化研究機構国文学研究資料館・調査収集委員, 1984年4月～現在に至る

### 3. 加藤 洋介 教授

1962年生。1989年名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。国文学研究資料館助手、愛知県立女子短期大学・愛知県立大学講師、同助教授、同教授、大阪大学准教授を経て、2010年10月より現職。専攻：日本平安文学。

#### 3-1. 論文

---

加藤洋介「三条西家源氏学の本文環境」日向一雅(編)『源氏物語注釈史の世界』青簡舎, pp. 71-91, 2014/2  
加藤洋介「本文系統の認定をめぐる諸問題-書陵部蔵三条西家本源氏物語について-」大阪大学古代中世文学研究会(編)『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 52, pp. 12-24, 2012/10

#### 3-2. 著書

---

なし

#### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

加藤洋介(学会時評)「学会時評 中古」笠間書院『レポート笠間』54, 笠間書院, pp. 13-15, 2013/6  
加藤洋介(学会時評)「学会時評 中古」笠間書院『レポート笠間』53, 笠間書院, pp. 83-85, 2012/11  
加藤洋介(書評)「書評 高田信敬著『源氏物語考証稿』」『名古屋大学国語国文学』(名古屋大学国語国文学会), 105, 名古屋大学国語国文学会, pp. 193-199, 2012/11

#### 3-4. 口頭発表

---

加藤洋介「承久三年定家本伊勢物語の復原」中古文学会関西部会 第三十六回例会, 中古文学会関西部会, 武庫川女子大学, 2013/11  
加藤洋介(パネリスト)「文学研究科の研究推進の取り組み」大阪大学URAシンポジウム, 大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室, 大阪大学, 2013/8

#### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2011年度～2015年度、基盤研究(B) 一般、代表者:加藤洋介  
課題番号:23320052  
研究題目:定家本伊勢物語・源氏物語の形成と展開に関する総合的研究

研究経費: 2012年度 直接経費 2,500,000円 間接経費 750,000円  
2013年度 直接経費 2,000,000円 間接経費 600,000円

研究の目的:

本研究は、定家本伊勢物語と源氏物語の展開の様相を横断的に検証することによって、唯一の定家自筆本を復原するのではない、新たな定家本伊勢物語・源氏物語の本文形成史を構築しようとするものである。既刊の校本である池田亀鑑『源氏物語大成校異篇』、および池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 校本篇』・大津有一『伊勢物語に就きての研究 補遺篇』・山田清市『伊勢物語校本と研究』のデータを修正し、これまで等閑視されてきた室町期写本のデータを新たに加え、「表記・改行・音便」といった新たな視点を導入することによって、定家本伊勢物語・源氏物語の形成と展開の実相に迫ることを目的としている。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

中古文学会・常任委員、編集委員, 2011年5月～現在に至る

和歌文学会・委員, 2007年4月～現在に至る

## 4. 齋藤 理生 准教授

1975年生。2004年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。群馬大学教育学部講師、同准教授を経て、2014年4月より現職。専攻: 日本近現代文学。

### 4-1. 論文

---

齋藤理生 「織田作之助『夫婦善哉』の「形式」―「系譜小説」を手がかりに」『日本近代文学』(日本近代文学会), 89, pp. 108-122, 2013/11

齋藤理生 「『二十世紀旗手』評釈(一)」山内祥史『太宰治研究』21, 和泉書院, pp. 279-304, 2013/6

齋藤理生 「織田作之助『それでも私は行く』論―「京都日日新聞」を手がかりに」『国語と国文学』(東京大学国語国文学会), 89-10, pp. 33-47, 2012/10

齋藤理生 『『八十八夜』の〈笑い〉』『太宰治スタディーズ』(太宰治スタディーズの会), 4, pp. 140-151, 2012/6

### 4-2. 著書

---

齋藤理生 『太宰治の小説の〈笑い〉』双文社出版, 280p., 2013/5

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 4-4. 口頭発表

---

なし

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

齋藤理生他 群馬大学ベストティーチャー賞 優秀賞(平成24年度), 群馬大学, 2013/5

齋藤理生他 群馬大学ベストティーチャー賞 優秀賞(平成22年度), 群馬大学, 2011/5

齋藤理生他 群馬大学ベストティーチャー賞(平成19年度), 群馬大学, 2008/5

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

昭和文学会・編集委員, 2012年8月～現在に至る

### 5. 合山林太郎 講師

1977年生。2009年、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位修得退学。博士(文学)(東京大学、2010年)。国立国会図書館勤務を経て、2009年4月より現職。専攻:日本漢文学(近世・近代)。

#### 5-1. 論文

合山林太郎 「「鞭声粛粛」の明治—頼山陽「題不識庵擊機山図」詩と詩吟・劍舞—」『アナホリッシュ国文学』3, 響文社, pp. 14-21, 2013/6

合山林太郎 「夏目漱石『吾輩は猫である』縫田針作の材源—小出新次郎の女子裁縫高等学院経営—」『待兼山論叢』46, 大阪大学文学会, pp. 1-15, 2012/12(本論には、以下の訂正記事あり。合山林太郎「前号「夏目漱石『吾輩は猫である』縫田針作の材源—小出新次郎の女子裁縫高等学院経営—」についての訂正」『待兼山論叢』47, 大阪大学文学会, pp. 17-19, 2013/12)

合山林太郎, 康盛国(翻訳)(共著), “근세・근대일본한시문에 나타나는 임진전쟁(壬辰戦争)(近世・近代日本漢詩文に描かれた壬辰戦争)”『경남학(慶南学)』33, 韓国慶尚大学校慶南文化研究院, pp. 47-63, 2012/12

合山林太郎 「森槐南と呉汝綸—1900年前後の日中唱和—」浅見洋二・堀川貴司(編)『東アジア海域叢書第13巻・蒼海に交わされる詩文』汲古書院, pp. 325-348, 2012/10

合山林太郎 「性靈論以降の漢詩世界—近世漢詩をどう捉えるか—」『日本文学』61-10, 日本文学協会, pp. 67-76, 2012/10

合山林太郎 「幕末京撰の漢詩壇—広瀬旭莊・河野鉄兜・柴秋村を中心に—」中野三敏・楠元六男(編)『江戸の漢文脈文化』竹林舎, pp. 103-118, 2012/4

#### 5-2. 著書

合山林太郎 『幕末・明治期の日本漢詩文研究』和泉書院, 342p., 2014/2

大阪大学大学院文学研究科日本文学・国語学研究室日本文学多言語翻訳チーム, 合山林太郎(共著), 『多言語翻訳 太宰治『黄金風景』』, 大阪大学大学院文学研究科日本文学・国文学研究室, 72p., 2012/10

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

合山林太郎 「適塾をめぐる詩と書(第3回)事に臨んで為すこと無きは賤丈夫なり 篠崎小竹」『適塾』(適塾記念会), 46, pp. 148-150, 2013/12

浅見洋二, 伊川健二, 合山林太郎他(共著)「李學遠「草梁倭館詞」訳注稿—19世紀の朝鮮実学者が詠った倭館・日本—」『大阪大学文学研究科紀要』53, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 41-66, 2013/3

合山林太郎 「藤井竹外「芳野」小考—龍草廬「題山崎妙喜菴」詩との類似について—」『混沌』36, 混沌会, pp. 31-34, 2012/12

合山林太郎 「適塾をめぐる詩と書 第2回 懺雨 迷雲 劫後の天 緒方拙斎」『適塾』(適塾記念会), 45, pp. 115-117, 2012/12

#### 5-4. 口頭発表

合山林太郎 「近世・近代日本漢詩文に描かれた壬辰戦争」壬辰戦争 420周年国際専門家学術会議, 韓国・慶尚大学校,

### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

5-6-1. 2011年度～2012年度、若手研究(B)、代表者:合山林太郎

課題番号:23720104

研究題目:森槐南を中心とする幕末・明治期日本漢文学の研究

研究経費:2012年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

明治期を代表する漢詩人・漢学者である森槐南の業績全体を整理し、また、槐南の詩論や詩作から、近世・近代の日本漢文学に関して新たな見取り図を呈示した。さらに、槐南と清の文人などとの唱和を分析することで、明治期の東アジア文化交渉についても考察した。

5-6-2. 2013年度～2015年度、若手研究(B)、代表者:合山林太郎

課題番号:25770081

研究題目:明清詩論の受容に関する考察を中心とした、近世・近代日本漢文学史の再検討

研究経費:2013年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

近世期の日本漢文学に、中国明清時代の詩文についての議論は大きな影響を与えている。本研究では、中国及び日本の詩論を網羅的に調査し、詩学上の主要な用語について、中国と日本の間での認識の相違や、詩人ごとの理解の有り様を具体的に把握し、17世紀以降の東アジアの漢文学研究を行うための基盤を構築する。

### 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 5-8. 外部役員等の引き受け状況

---

和漢比較文学会・編集委員, 2013年9月～現在に至る

日本近世文学会・委員, 2012年月～現在に至る

和漢比較文学会・常任委員, 2011年9月～現在に至る

## 6. 箕浦 尚美 助教

1972年生。大阪大学大学院博士後期課程修了。博士(文学)(大阪大学)。国際仏教学大学院大学研究員(PD)、大谷大学任期制助教、国際日本文化センタープロジェクト研究員を経て、2013年4月より現職。専攻:日本中世文学。

### 6-1. 論文

---

箕浦尚美「早離・速離(観音・勢至)の菩薩行―初期本地物を考えるために―」大阪大学国語国文学会(編)『語文』(大阪大学国語国文学会), 100・101, 大阪大学国語国文学会, pp. 63-74, 2013/12

### 6-2. 著書

---

なし

### 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 6-4. 口頭発表

---

箕浦尚美 「早離速離説話(観世音菩薩前生譚)における誓願と孝養」国際シンポジウム:東アジアにおける孝の文化(孝文化在東  
亞地域の傳播和發展), 清華大学, 清華大学(中国・北京), 2013/11

### 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

6-6-1. 2011年度～2014年度、若手研究(B)、代表者:箕浦尚美

課題番号:23720124

研究題目:本地物語の研究—菩薩行と誓願を視座として—

研究経費: 2012年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

2013年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

お伽草子「本地物」のうち、仏や菩薩の前世を描いた『阿弥陀の本地』や『日月の本地』などの原形は、平安中期に撰述された偽経として存在しているが、その成立には、既存の物語(経典)に満足しなかった人々の要求があり、新たな物語には、当時の菩薩行や誓願観が反映されたと考えられる。本研究は、その思想と影響を解明することを目的とする。また、主人公の苦難と転生がテーマである室町期の「本地物」について、菩薩行や誓願の視点からの見直しを図り、中世の「本地物」の構造を解明する。

### 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-13 比較文学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：清水 康次

准教授：橋本 順光

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
20	3	4	0	1	0	1	2

※うち留学生 6名、社会人学生 1名

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	8	0	2	1
2013	7	1	1	0
計	15	1	3	1

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

学部・大学院の教育においては、講義・演習で、比較文学の基礎的概念および文学批評の主要な分析方法が吸収できることを目標とする。その際に、とりわけ英語文献を中心にして、文学史・歴史の流れを押さえたうえで、小説を精読し、関連の外国語文献を参照しながら、レポート、レビュー、論文が執筆できるよう心がける。関連して、学術的な口頭発表と質疑応答の習得も視野に入れ、論文執筆に必要な先行研究の整理、問題の発見、調査、執筆にかかわる総合的な能力を涵養する。

大学院においては、上記に加えて、研究計画の立案と実行をできるかぎり院生同士で議論しながら確認を行い、TA・RAなどの機会も積極的に利用することで、コミュニケーションや指導にかかわる総合的な能力の養成を目標とする。研



研究室においては、比較文学の入門や教育に資する文献を広く収集・紹介し、講読を奨励する。

## 2. 研究

教員は毎年最低 1 本の論文を執筆、大学院生は毎年最低 1 回の学会発表をおこなうとともに、教員・大学院生は、国内・国外での研究発表および論文投稿に努力し、あわせて紀要・報告書の執筆も推進することとを目標とする。大学院生には、日本学術振興会研究員のほか、機会に応じて学内・学外の研究資金や渡航奨励プログラムへの応募を奨励するとともに、教員も適宜、共同プロジェクトの企画応募を努力するよう心がける。また、研究室の設備と備品の点検に留意するとともに、とりわけ図書について研究に支障のないよう収集に心がけ、研究環境の維持・改善に努力し、研究の視野と可能性を拡大することとを目標とする。

## 3. 社会連携

研究成果や資料を広く一般に公開するよう努力し、研究成果を社会に還元する書物の刊行も積極的に推進するよう心がける。学会や各種団体の委員などの依頼や、学会・研究会などの開催校としての受け入れ依頼にも、できるかぎり応じ、研究成果の普及を図るよう、一般向けの公開講座や研究会などにおいても積極的に発表に努力することとを目標とする。

# Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

講義・演習では、主として英語圏と明治大正期の資料を使用し、適宜、現代の大衆文化の事例に言及しながら、比較文学の基礎から応用までの教育を行った。その際には、文学批評の基本概念と応用の習得を徹底した。学部生向けの授業でも英書を中心に外書講読の演習を必ず受講するよう奨励した。学部・大学院ともに口頭発表と論文をできるかぎり各受講生同士で論評するよう徹底させ、質疑応答の練習を行った。また博士論文作成演習の一部では一コマ多く延長して、その後半部分で卒業論文作成演習を合同で行い、基礎的な技術や知識の共有とともに、院生の指導能力の涵養に努めた。

## 2. 研究

院生は、ほぼ全員が 1 本以上の論文を執筆し、学会発表や研究会での発表を行い、積極的に学会に参加した。この 2 年で教員は、多数の論文を執筆した。科学研究費助成を新規に獲得し、研究分担者として 4 つの共同研究に参加した。教員による科学研究費の申請のほか、大学院生の日本学術振興会の研究員、学内外の助成やプログラムなどにも毎年申請した。その結果、頭脳循環、卓越した大学院拠点形成支援補助金、RA プログラムなどで院生の多くが海外で調査および研究発表を行った。研究室の設備備品は定期的に点検し、メーリングリストを整備・更新した。それによって、比較文学に関係する内外の書籍を幅広く推薦・紹介しあい、収集と講読とともに、最新の研究動向をふまえるよう心がけた。

## 3. 社会連携

論文発表の項目にあるように、外部から講師を招き、RA プログラムや科研費の成果発表として一般に開かれた複数のワークショップを行い、研究報告書を刊行した。その際には院生、学部生、教員が積極的に協力し、発表を行った。この 2 年間で教員は、非会員にも開かれた学会や一般向けの会合で多数発表し、一般向けの論考を寄稿したほか、積極的に研究成果の還元を図った。さらに日本比較文学会、国際比較文学会 (ICLA)、ジャポニスム学会、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、日本英文学会の理事や編集委員など学外の職務に従事し、運営と社会還元努力した。

# Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

前記の活動の結果、所期の目標は十分に達成できたと考えられる。

## 2. 研究

前述の活動の結果、初期の目標は十分に達成されたと考えられる。

## 3. 社会連携

前述の活動の結果、初期の目標は十分に達成されたと考えられる。

# V. 基本情報(2012年度～2013年度)

## 1. 博士学位授与

### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	1	0	1
2013	0	0	0
計	1	0	1

### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

曾嶽 「堀田善衛と中国—上海体験」に始まる初期作品の形成と展開— 2012/9

主査：清水康次 副査：橋本順光、出原隆俊

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	0(0)	1(1)	6(0)	0(0)	0(0)	7(1)
2013	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	1(1)	6(0)	0(0)	0(0)	7(1)

括弧内は査読付き論文数。

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	3	3	12	0	0	18
2013	0	1	5	0	0	6
計	3	4	17	0	0	24

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

## (1)論文

【2012年度】

〔博士後期〕

小橋玲治「日英の雑誌に見られる女性教師表象の比較」『独立行政法人日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」「アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる21世紀の地平—」研究報告書』, 大阪大学大学院文学研究科, pp.100-110, 2013/3 (査読無)

小橋玲治「日本から海を渡った女教師たちとその表象」『卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究拠点」「世紀末転換期の日英における移動と衝突—課報と教育を中心に」報告・論文集』, 卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」・阪大比較文学会, pp.49-65, 2013/3 (査読無)

津田雅之 “Ivano Paccagnella e Elisa Gregori (a cura di), *Ernst Robert Curtius e l'identità culturale dell'Europa*, Esedra, Padova, 2011” (xx + 386 pp.), 『上智ヨーロッパ研究』第5号, 上智大学ヨーロッパ研究所, pp.179-184, 2013/2 (査読有)

内藤貴夫「ブルワー=リットンの『ポール・クリフォード』に見る犯罪者と流刑」『卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究拠点」「世紀末転換期の日英における移動と衝突—課報と教育を中心に」報告・論文集』, 卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」・阪大比較文学会, pp.39-48, 2013/3 (査読無)

山田晃子「20世紀初頭の英国における日本製室内着の流行とそれを支えた日英の百貨店—高島屋と Harrods を中心に—」『アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる21世紀の地平—研究報告論文集』, 大阪大学大学院文学研究科, pp.83-99, 2013/3 (査読無)

吉田大輔「幸田露伴と北の海—実兄・郡司成忠の千島入植との関係を軸に—」『卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究拠点」「世紀末転換期の日英における移動と衝突—課報と教育を中心に」報告・論文集』, 大阪大学, pp.66-83, 2013/3 (査読無)

吉田大輔「ポンティング日本滞在記にみる明治新興工芸への評価軸—錦光山、並河靖之をめぐる言及の検討を中心に—」『日本学術振興会「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム平成22年度公募」大阪大学大学院文学研究科採択「アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる21世紀の地平—」報告・論文集』, 大阪大学, pp.135-140, 2013/3 (査読無)

## (2)口頭発表

【2012年度】

〔博士後期〕

小橋玲治「Mrs. Henry Wood, *East Lynne* の翻案における改変—伊原青々園『恋の闇』(1905)、『子煩悩』(1906)における妻/母としての主人公」日本比較文学会第74回全国大会, 大正大学, 2012/6

小橋玲治 “Nagai Kafu's *Jigoku no Hana* (1902) in the light of the governess novel”, Pacific Ancient and Modern Language Association 2012, Seattle University, United States, 2012/10

小橋玲治「日本から海を渡った女教師たちとその表象」卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」「世紀末転換期の日英における移動と衝突—課報と教育を中心に」, 卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」・阪大比較文学会, 大阪大学, 2013/2

小橋玲治「日英の雑誌に見られる女性教師表象の比較」独立行政法人日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」「アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる21世紀の地平—」研究報告会, 大阪大学大学院文学研究科, 大阪大学, 2013/3

津田雅之「クラウドディオ・マグリスと宮本輝—ドナウ川の表象をめぐる—」日本比較文学会第48回関西大会, 立命館大学, 2012/11

津田雅之 “Deux grands fleuves en géopolitique européenne : Curtius et Magris”, Extraterritoriality of languages,

- literatures and civilizations: assessments and prospects, Paris 12 Val de Marne University, 2012/10
- 津田雅之 "Curtius's Awareness of a European Citizen through his Relationship with Unamuno and Ortega", International Euroculture Conference 2012, How does Europe engage with cultural citizenship?, University of Deusto, Bilbao, 2012/6
- 津田雅之「クルティウスとローマの関係をめぐって—同時代人との交友を手がかりに—」大阪大学文学研究科共同研究「ヨーロッパ文化としてのグランドツアー」シンポジウム, 北海学園大学, 2013/3
- 津田雅之「ノーベル文学賞受賞に備えて—知識人作家クラウディオ・マグリスの生涯と作品—」MCE 研究会, 大阪大学, 2012/12
- 内藤貴夫「明治文学へ受け継がれたブルワー・リットンの小説論—『花柳春話』を中心に—」大阪大学大学院文学研究科比較文学研究室主催ワークショップ「20世紀初頭の英語圏におけるジャポニズム」, 大阪大学, 2012/8
- 内藤貴夫「坪内逍遙におけるブルワー＝リットンの影響—Paul Cliffordを中心に—」日本比較文学会 第48回関西大会, 立命館大学, 2012/11
- 内藤貴夫「ブルワー＝リットンの『ポール・クリフォード』に見る犯罪者と流刑」卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」「世紀転換期の日英における移動と衝突—諜報と教育を中心に」, 卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」・阪大比較文学会, 大阪大学, 2013/2
- 山田晃子「20世紀初頭のイギリスにおけるファッションのジャポニズムと、それを支えた日英の百貨店について—高島屋と Harrods を中心に—」シンポジウム『着物？キモノ？KIMONO？おしゃれのモダン化と百貨店～着物をめぐる、デザインと着装の東西交流～』, 文化学園大学, 2012/9
- 山田晃子「20世紀初頭のイギリスのファッションにおけるキモノブームと、それを支えた日英の百貨店について—高島屋と Harrods を中心に—」シンポジウム『英国、インド、日本をめぐるアジア主義とジャポニズム』, 大阪大学, 2012/10
- 山田晃子 "Dilute to Taste: Japanese Fashion for the British Market at the Beginning of the 20<sup>th</sup> Century", *Global Perspectives on Colour Symposium*, Royal College of Art, London, UK, 2013/2
- 吉田大輔「雲の見方を習う三四郎 —漱石、ラスキン、ボードレール—」大阪大学大学院文学研究科比較文学研究室主催ワークショップ「20世紀初頭の英語圏におけるジャポニズム」, 2012/8
- 吉田大輔「ポンティング日本滞在記にみる明治新興工芸への評価軸—錦光山、並河靖之をめぐる言及の検討を中心に—」日本学術振興会「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム平成22年度公募」大阪大学大学院文学研究科採択「アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる21世紀の地平—」研究成果報告集会, 大阪大学, 2013/3
- 吉田大輔「北進論文学者としての幸田露伴」卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」「世紀転換期の日英における移動と衝突—諜報と教育を中心に」, 卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」・阪大比較文学会, 大阪大学, 2013/2
- 【2013年度】
- 〔博士後期〕
- 吉田大輔『『新公論』における「雑誌之雑誌」欄をめぐって—方法としての *Review of Reviews*—」大阪大学大学院文学研究科比較文学研究室主催ワークショップ「世紀転換期の日英における図像の往還—拡散する *Review of Reviews*—」, 大阪大学, 2013/6
- 吉田大輔「露伴とうずまき—「ねじくり博士」を中心として—」第5回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 大阪大学, 2014/3
- 山田晃子「20世紀初頭の英国におけるキモノ姿の女性の図像比較—キモノブームとキモノイメージの変化—」大阪大学大学院文学研究科比較文学研究室主催ワークショップ「世紀転換期の日英における図像の往還—拡散する *Review of Reviews*—」, 大阪大学, 2013/6
- 内藤貴夫「19世紀イギリスにおける犯罪・貧困問題と奴隷制度廃止運動—ディケンズの「望遠鏡の博愛」との関連を中心に—」大阪大学大学院文学研究科比較文学研究室主催ワークショップ「世紀転換期の日英における図像の往還—拡散

する *Review of Reviews*」, 大阪大学, 2013/6

内藤貴夫「明治下層社会記録文学におけるイギリスの貧困表象受容—ウィリアム・ブース『最暗黒の英国とその活路』と松原岩五郎『最暗黒の東京』との関連を中心に—」日本比較文学会第49回関西大会, 徳島大学, 2013/11  
内藤貴夫「明治下層社会記録文学における貧民への視線—桜田文吾と松原岩五郎の対比を中心に—」第5回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 大阪大学, 2014/3

### (3)その他(書評・翻訳など)

山田晃子 展覧会レビュー「「お洒落な」洋服が着たい男たちの物語」(『日本の男服—メンズ・ファッションの源泉—』展評), 京都芸術センター通信, vol.165, p.3, 2014/2

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)  
2013年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)  
2013年度 学部:2名 大学院:0名 (計2名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2012年度:0名 2013年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名  
その他 0名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2012年度:0名 2013年度:0名

## 9. 刊行物

2013年度 『卓越した大学院拠点形式支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」「世紀転換期の日英における移動と衝突—課報と教育を中心に」報告・論文集』, 阪大比較文学会, 2013年2月  
『阪大比較文学』第7号, 阪大比較文学会, 2013年3月

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2012年8月2日 ワークショップ「20世紀初頭の英語圏におけるジャポニスム」主催

2013年2月6日 ワークショップ「世紀転換期の日英における移動と衝突—諜報と教育を中心に—」主催

2013年6月13日 ワークショップ「世紀転換期の日英における図像の往還—拡散する *Review of Reviews*—」主催

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 清水 康次 教授

1954年生まれ。京都大学文学部(国語学国文学専攻)卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程(国語学国文学専攻)修了。博士(文学)(京都大学、1995)。大阪女子大学助教授、京都光華女子大学教授等を経て、2009年10月より現職。専攻:日本近代文学、書誌出版文化研究。

#### 1-1. 論文

清水康次 「書誌学的研究の地平」日本近代文学会編集委員会『日本近代文学』(日本近代文学会), 89, 日本近代文学会, pp. 218-222, 2013/11

清水康次 『『白樺』に先行する芸術運動—『明星』『スバル』『方寸』とその時代状況—』大阪大学大学院文学研究科『大阪大学大学院文学研究科紀要』53, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 47-107, 2013/3

#### 1-2. 著書

なし

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

清水康次 日本近代文学会関西支部京都近代文学事典編集委員会(共著)『京都近代文学事典』和泉書院, (辞典項目) 「上野英信」「小泉菱三」「三枝和子」「志賀直哉」「広瀬寿子」, 2013/5

清水康次(研究展望) 「翻訳文学の興隆から日本の近代の文学状況を探る」阪大比較文学会『阪大比較文学』(阪大比較文学会), -7, 阪大比較文学会, pp. 174-177, 2013/3

#### 1-4. 口頭発表

なし

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2012年度～2014年度、基盤研究(C) 一般、代表者:清水康次

課題番号:24520212

研究題目:雑誌『白樺』における文学の営為についての総体的な研究

研究経費: 2012年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2013年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

明治40年代から大正期にかけて刊行された同人雑誌『白樺』における文学と美術の共存、文壇および画壇への提起や提言、

同人たちの意識、さまざまな情報の受信と発信、メディアとしての側面などに注目しながら、文学者たちの営みを外部との関わりの中で総体的に捉え、広く当時の時代状況の中での位置づけをはかる。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2. 橋本 順光 准教授

1970 年生。大阪大学文学部英文学専攻卒業(1994)、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究修士課程修了(1997)、ランカスター大学大学院歴史研究科博士課程修了 Ph.D., (2008)。2001 年 4 月より横浜国立大学教育人間科学部講師、2009 年 4 月より現職。専攻:比較文学・英国地域研究。

### 2-1. 論文

---

橋本順光 「境界を越える義経ジンギスカン伝説 大陸雄飛論から冒険小説まで」北海道大学スラブ研究センター(編)『ライブ・イン・ボーダースタディーズ』13, 北海道大学スラブ研究センター, pp. 2-17, 2014/1

Hashimoto, Yorimitsu, "Toward a Theory of "Artist Manga": Manga Self-Consciousness and the Transforming Figure of the Artist" *Mechademia*, 8, University of Minnesota Press, pp. 155-171, 2013/12

橋本順光 「アーネスト・ハートとアリス・ハートのジャポニスム」藤田治彦(編) 科研基盤研究 A 研究調査中間報告書『アーツ・アンド・クラフツと民藝—ウィリアム・モリスと柳宗悦を中心とした比較研究—』, pp. 21-29, 2013/3

橋本順光 「アイルランド神智学徒のアジア主義? ジェイムズ・カズンズの日本滞在(1919-1920)とその余波」藤田治彦(編)日本学術振興会頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム研究報告書『アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる 21 世紀の地平—』, pp.27-43, 2013/3

橋本順光 「日露戦争期の英国における武士道と柔術の流行」阪大比較文学会(編)『阪大比較文学』7, pp. 178-198, 2013/3

橋本順光 「日英における移動と衝突—柳、柳田、スコット、リーチの交錯の例から—」橋本順光(編) 科研基盤研究 C「20 世紀初頭のインド旅行記におけるアジア主義と黄禍論の日英比較研究」報告・論文集『世紀転換期の日英における移動と衝突—諜報と教育を中心に—』, pp. 3-13, 2013/3

橋本順光 「鹿子木員信のインド追放とその影響」橋本順光(編) 科研基盤研究 C「20 世紀初頭のインド旅行記におけるアジア主義と黄禍論の日英比較研究」報告・論文集『世紀転換期の日英における移動と衝突—諜報と教育を中心に—』, pp. 84-91, 2013/3

### 2-2. 著書

---

Hashimoto, Yorimitsu (ed.), *Yellow Peril, a Collection of Historical Sources, 4vols.*, Edition Synapse, 2018p., 2012/7(Introduction 78pages; 日本語別冊解題 21 頁)

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

橋本順光 「体内旅行と『オスカー・ビル』」『産経新聞』関西版, 産経新聞社, pp. 1-1, 2014/3/27

橋本順光 「マンガやアニメも、古典の伝統を受け継いでいる！」夢ナビ編集部『夢ナビ』(フロムエー), 講義 No.06224, フロムエー, pp. 1-1, 2014/3

橋本順光 「比較することで見えてくる文学の面白さ」夢ナビ編集部『夢ナビ』(フロムエー), 講義 No.06225, フロムエー, pp. 1-1, 2014/3

- 橋本順光 「魂の入れ替わりと『秘密』」『産経新聞』関西版, 産経新聞社, pp. 1-1, 2014/2/27
- 橋本順光 「宝探しと『ワンピース』」『産経新聞』関西版, 産経新聞社, pp. 1-1, 2014/1/30
- 橋本順光(監修) ニーアル・ファーガソン『BBC 中国—超大国の光と影—』DVD 全 3 巻監訳および紹介文, 丸善出版株式会社, 2013/12
- 橋本順光 「十九世紀奇想小説の連鎖と系譜」ヴィクトリア朝文化研究会(編)『ヴィクトリア朝文化研究』11, pp. 112-114, 2013/11
- 橋本順光 「初恋小説の系譜」『産経新聞』関西版, 産経新聞社, p. 1, 2013/8/22
- 橋本順光(書評) 「松村昌家『文豪たちの情と性へのまなざし』」『ヴィクトリア朝文化の世代風景』日本比較文学会(編)『比較文学』55, pp. 215-220, 2013/3
- 橋本順光 「唯美主義者たちのテーブルで」ヴィクトリア朝文化研究会(編)『ヴィクトリア朝文化研究』10, pp. 101-102, 2012/11
- 橋本順光 「2011 年度第五回例会報告」ジャポニスム学会(編)『ジャポニスム研究』32, pp. 31-36, 2012/11
- 橋本順光(監修) ニーアル・ファーガソン『文明の進化史』DVD 全 6 巻, 監訳および解説書, 丸善出版株式会社, 2012/8

#### 2-4. 口頭発表

- 橋本順光 「さがしものは何ですか? 宝探しの物語」大学生活入門:2014/3/9, 大阪大学生協, 大阪大学, 2014/3
- 橋本順光 「手塚治虫にみる映画『王様と私』の援用—『孔雀貝』から『火の鳥』へ—」第5回大阪大学・チューラーロンコーン大学 日本文学国際研究交流集会:2014/3/28, 大阪大学, 2014/3
- 橋本順光 (招待講演)「さがしものは見つかりません! 泉鏡花の「金時計」からクールボの「七つのダイヤモンド」までの宝探しの系譜」阪大比較文学会卒論修論発表会:2014/2/5, 阪大比較文学会, 大阪大学, 2014/3
- Hashimoto, Yorimitsu, (招待講演)“The Rise and Fall of Morning Glory: the Contrasting Reception of Chiyo’s Haiku in the 20th Century”, Trajectories of ‘Japanese’ Texts in the Early Twentieth Century:2014/3/8, Sophia University Institute of Comparative Culture, Sophia University, 2014/3
- Hashimoto, Yorimitsu, “20 世紀前半の日本人インド旅行者への監視とそのインド表象との相関: 鹿子木員信と吉田博を中心に (Japanese Tourists under Surveillance in India? Kanokogi Case (1919) and Hiroshi Yoshida’s Woodblock Prints)”, Buddhism and Theosophy in Modern Asia: Aspects of Modern Cultural Exchange between India and Japan:2013/11/2, Jawaharlal Nehru University, India, 2013/11
- Hashimoto, Yorimitsu, (招待講演)“Universal Brotherhood Revisited: James H. Cousins’ Theosophical and Transnational Networks in the 1920s Japan”, International Colloquium ‘The Future of Comparative Literature’:2013/11/29, University of Tokyo, 2013/11
- 橋本順光 (招待講演)「欧州航路と異文化交流 大英帝国・横浜・『風土』」阪神シニアカレッジ:2013/9/6, 阪神シニアカレッジ, 2013/9
- Hashimoto, Yorimitsu, “A Medium for New India and New Japan? James H. Cousins’ Appreciation of Tami Koume and Gurcharan Singh”, Enchanted Modernities: Theosophy, Modernism and the Arts: c.1875-1960:2013/9/26, University of Amsterdam, 2013/9
- 橋本順光 (招待講演)「タイ表象の日英比較—児童文学にみる「ひよこ星」の再話と傘作りの主題の二例を中心に—」阪大比較文学会ワークショップ「日タイ比較文学の試み」:2013/7/11, 阪大比較文学会, 大阪大学, 2013/7
- 橋本順光 (招待講演)「20 世紀初頭にみる日英印の宣伝活動とその錯綜—神智学・アジア主義・黄禍論—」神戸学院大学人文学会第一回学術講演:2013/7/17, 神戸学院大学, 2013/7
- Hashimoto, Yorimitsu, “A Modern Symposium? Goldsworthy Lowes Dickinson and Letters from and to a Chinese Official (1901)”, The International Comparative Literature Association Congress Paris 2013:2013/7/20, Sorbonne University, 2013/7
- 橋本順光 (基調講演)「『黄禍』のプロパガンダとパロディークナックフスの図像とその流用—」阪大比較文学会シンポジウム「世紀転換期の日英における図像の往還—拡散する Review of Reviews—:2013/6/13, 大阪大学, 2013/6
- 橋本順光 (招待講演)「触手と食指—日英の風刺画におけるタコの表象—」阪大比較文学会シンポジウム「世紀転換期の日英における図像の往還—拡散する Review of Reviews—:2013/6/13, 大阪大学, 2013/6



- 橋本順光 (招待講演)「欧州航路と異文化交流 大英帝国・横浜・『風土』」阪神シニアカレッジ:2013/6/25, 2013/6
- 橋本順光 (招待講演)「義経ジギスカン伝説—絵画・冒険小説・能—」阪神シニアカレッジ:2013/5/21, 2013/5
- 橋本順光 (招待講演)「『サマセット・モームの『九月姫とウグイス』(1922)にみるタイ—光吉夏弥の翻訳(1954)との比較を中心に—」第4回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会—新たなる沃野—:2013/3/21, 大阪大学, 2013/3
- 橋本順光 (基調講演)「世紀転換期の日英における旅行記と外交の相克」阪大比較文学会シンポジウム「世紀転換期の日英における移動と衝突—諜報と教育を中心に—」:2013.2/6, 大阪大学, 2013/2
- 橋本順光 (招待講演)「大英帝国の航路からみた横浜居留地—人種衝突と美術交流の間で—」阪神シニアカレッジ:2013/1/25, 2013/1
- Hashimoto, Yorimitsu, (招待講演)“‘Cultural Unity of Asia? Gurcharan Singh’s Rediscovery of the Lotus Pattern in Korea’”, Intercultural Competence and Interaction:2012/12/16, Shanghai Normal University, China, 2012/12
- 橋本順光 (基調講演)「鹿子木員信の仏蹟巡礼と国外退去について」阪大比較文学会シンポジウム「英国、インド、日本をめぐるアジア主義とジャポニスム」:2012/10/2, 大阪大学, 2012/10
- 橋本順光 (招待講演)「アイルランド人神智学者のアジア主義—ジェームズ・カズンズの滞日活動とその余波—」阪大比較文学会シンポジウム「英国、インド、日本をめぐるアジア主義とジャポニスム」:2012/10/2, 大阪大学, 2012/10
- 橋本順光 (招待講演)「世紀転換期の英国における松山鏡の受容と土着化」阪大比較文学会ワークショップ「西洋から見た日本の「近代化」—英語圏を中心に—」:2012/8/2, 大阪大学, 2012/8

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010年度～2012年度、基盤研究(C) 一般、代表者:橋本順光

課題番号:22520361

研究題目:20世紀初頭のインド旅行記におけるアジア主義と黄禍論の日英比較研究

研究経費:2012年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

日露戦争以降、日本でのアジア主義の高まりとインドへの波及を警戒し、英国では黄禍論(小説)が盛んになる。神智学や仏教を媒介にした日印英のネットワークは、インド独立運動の扇動や幫助を疑われ、特に日本人インド旅行者は英国の官憲に監視されていた。本研究では、仏蹟巡礼の途上にあつた鹿子木員信が1919年に英国政府によって強制送還された事件をめぐって、日英印の各種外交史料を照合することで、その実態を明らかにし、後代への影響を探る。あわせて1910年代から1930年代にかけて流行した日英のインド旅行記を発掘し、アジア主義という同床異夢に翻弄された人々の交錯と交流に光をあて、黄禍論小説という表象との相関を明らかにする。

2-6-2. 2013年度～2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者:橋本順光

課題番号:25370413

研究題目:世紀転換期の英国における黄禍論とその図像に関する比較文学的研究

研究経費:2013年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

研究の目的:

本研究は、世紀転換期の英国における黄禍論について従来の研究を総合し、以下の3つの作業を通じて、論説、小説、図像の相互交渉を解明する。(1)黄禍論をめぐる日英の外交文書の発掘と照合を行う。これにより、過大にあるいは過小に評価されてきた日本の対外宣伝の成果について実態を明らかにし、英国の検閲や政策との関連を探る。(2)大アジア主義と黄禍論(小説)の相関を指摘する。日本とインドの接近にともなうアジア主義を極度に警戒した英国では、詳細な外務省報告と関連報道があり、それらと黄禍論小説との共通点を探る。(3)黄禍の寓意図をめぐる受容と転用を発掘する。幾度となく書き換えられたクナックフスによる

「黄禍」の寓意画は、宣伝が政府の意図に反して逆用される最初期の例であり、日英における受容史を発掘すると同時に、黄禍論をめぐる日英の工作と錯綜との連続性を指摘する。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

International Comparative Literature Association (国際比較文学会)・理事, 2013年7月～現在に至る

日本比較文学会・理事, 2013年6月～現在に至る

日本比較文学会・関西支部庶務委員, 2013年6月～現在に至る

日本比較文学会・国際活動委員, 2013年6月～現在に至る

日本英文学会・編集委員, 2013年4月～現在に至る

日本比較文学会・編集委員, 2011年4月～現在に至る

ジャポニスム学会・理事, 2011年4月～現在に至る

日本ヴィクトリア朝文化研究学会・編集委員, 2009年4月～現在に至る

日本比較文学会・関西支部幹事, 2009年4月～現在に至る

# 2-14 中国文学

## I. 現在の組織

### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：高橋 文治、浅見 洋二

### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
4	2	2	0	0	3	0	0

※うち留学生3名、社会人学生0名

### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	0	0	1	0
2013	1	0	1	0
計	1	0	2	0

## II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

本専門分野は、主に清朝時代以前の漢語文献について、文言体と白話体の別なく、文献学的手法を用いて正確な訓詁を与える点に教育の主眼が置かれている。また、研究室内の教育・研究活動をより活性化するために、カリキュラムとは別に、教員スタッフを中心に研究会も組織されている。

こうした体制の成果として、近年、大学院生の学力はかなり向上し、学外からも一定の評価を受けるに至っている。たとえば、大学院生の論文は学会誌にも掲載されるようになってきている。

だが、一方で、学部・MC・DCの学力に合わせた、段階的なカリキュラム編成は必ずしも十分には整備されていない。これは主にスタッフの不足による。

今後は、大学院生、学部生ともに学生数を増やし、学年別に近いカリキュラム編成を取れるよう、努力したい。

### 2. 研究

教室構成員はそれぞれの分野で研究をすすめ、大学院生の論文の学会誌への掲載も見られる。ただし、大学院生に関しては在籍者の減少により、論文掲載の数は減少している。

海外、学外の研究者との連携も維持しており、教員の海外出張も行われている。ただ、2012年度、2013年度の大学院生、学部生の海外留学は所属学生の減少の結果0件であった。

また、科学研究費の取得にもつとめ、教員スタッフは2012年度、2013年度に「基盤研究(C)」等を取得している。

研究活動という面においては、本教室の教員は十分活性化されていると言えよう。今後もこの方向を維持できるよう努力し、学生獲得にも努力したい。

### 3. 社会連携

研究成果に関する報道機関の取材、執筆依頼等には積極的に協力することとし、研究室のHPを充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とした。また、研究室編著の学術的一般書等を刊行し、教員等が公開講座や講演会等に積極的に対応することによって、研究成果や専門知識の社会への還元を図りたい。その他、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼にも、積極的に対応したい。

## Ⅲ. 活動の概要(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

演習においては、基礎的な語学力の習得を意識した教育をおこない、講義においては、専門的知識の習得とその応用に主眼を置いた教育を行った。大学院生の研究計画・研究報告については、通常の授業時間ではスケジュールや研究テーマの絞込みをはじめ、研究テーマに即した事項を中心にディスカッションを行い、年度の初めと終わりに演習で発表させ、指導するほか、学会発表や論文の執筆に際しても綿密な指導をおこなってきた。

### 2. 研究

教員は科学研究費を取得して国内外の学会で研究発表を行ったほか、国内外の学術誌に論文を発表した。また、教員は日本中国学会や東方学会で専門委員等をつとめるなど、各学会において主導的活動を行った。

### 3. 社会連携

教員が年間で10回程度の公開講座・講演会を実現した。

## Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標はおおむね達成できたと考えている。卒業学生・修了大学院生以外の学生たちに関しても、中国学にかかわる基礎的知識、思考法について、教育実践によって一定の成果を獲得していると判断し得る。掲げた目標はおおむね達成できたと自己評価できる。

### 2. 研究

教員・博士後期課程の大学院生については、目標はほぼ達成された。特に教員の研究活動については、この十年、一貫して高い水準を保っている。

### 3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

## V. 基本情報(2012年度～2013年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	0	0	0
2013	0	0	0
計	0	0	0

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)
2013	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
計	3(3)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(3)

括弧内は査読付き論文数。

#### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	0	1	0	0	1
2013	0	0	0	0	0	0
計	0	0	1	0	0	1

#### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

##### (1)論文

〔博士後期〕

西川幸宏「則天武后と母の恩」『中国研究集刊』54, 大阪大学中国学会, pp. 16-35, 2012/6

山上恵「蘇軾詩における自注」『待兼山論叢』文学篇 46, 大阪大学文学会, pp. 33-48, 2012/12

【2013年度】

〔博士後期〕

趙蕊蕊「黄州時代の蘇軾における悲哀表現」『待兼山論叢』文学篇 47, 大阪大学文学会, pp. 1-16, 2013/12

##### (2)口頭発表

【2012年度】

〔博士後期〕

山上恵「蘇軾詩における自注」第11回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会, 大阪大学文学部, 2012/11/24

### (3)その他(書評・翻訳など)

なし

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2013年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

2013年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2012年度:0名 2013年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 0名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2 名

2012年度:1名 2013年度:1名

## 9. 刊行物

なし

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

元典章文書の語学史的研究

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 高橋 文治 教授

1953年生。1982年、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学。文学修士(京都大学、1979年)。追手門学院大学講師、同助教授、同教授を経て、2000年10月現職。専攻:白話文学史。

#### 1-1. 論文

高橋文治 「モンゴルが見た道教」堀池信夫 辛賢『知のユーラシア』4, 明治書院, pp. 207-236, 2014/1

高橋文治 「枕上のユートピア」(編)『アジア学科年報』(追手門学院大学アジア学会), 7, 追手門学院大学国際教養学部アジア学科, pp. 50-60, 2013/12

高橋文治 「孤山を論じて古楽府に及ぶ」なし『アジア学科年報』(追手門学院大学アジア学会), 6, 追手門学院大学国際教養学部アジア学科, pp. 40-69, 2012/12

#### 1-2. 著書

なし

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 1-4. 口頭発表

高橋文治 「宋金元期の墓内に見る伎楽と祭祀」日本道教学会第59回大会, 日本道教学会第59回大会, 早稲田大学, 2013/11

高橋文治 「孤山を論じて古楽府に及ぶ」中国古典小説研究会関西大会, 中国古典小説研究会, 京都キャンパスプラザ 龍谷大学サテライト教室, 2013/2

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2012年度～2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者:高橋文治

課題番号:24520396

研究題目:宋金元期の墳墓と戯曲文学

研究経費: 2012年度 直接経費 1,900,000円 間接経費 570,000円

2013年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

結婚や葬送、出産や相続、親族殺人といった家族に関わる諸問題が元朝期の戯曲文学にどのように描かれており、それが当時の墓制や法制度とどのように関連しているのかを分析することによって、元朝期の戯曲文学が「宗族」をめぐるいかなる社会通念を背景に生み出され、その上演が血族集団や共同体においてどのような機能を果たしたかを考察する。

#### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

## 2. 浅見 洋二 教授

1960年生。東北大学大学院文学研究科博士課程中途退学。文学博士(京都大学、2009年)。東北大学助手、山口大学講師、同助教授、大阪大学助教授、同准教授を経て、2009年4月、現職。専攻:中国古典詩学。

### 2-1. 論文

浅見洋二「眼中に歴歴として翳風を見る—陸游の詩にうたわれた楽土としての農村」『懷徳』(懷徳堂記念会), 82, 懷徳堂記念会, pp. 35-45, 2014/1

### 2-2. 著書

浅見洋二他(共編著)『詩僧皎然集注』汲古書院, 350p., 2014/3

浅見洋二, 堀川貴司(共編)『蒼海に交わされる詩文』汲古書院, 351p., 2012/10

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

浅見洋二(翻訳)「周裕鍇「恵洪の文字禅について—その理論と実践および後世への影響」堀川貴司・浅見洋二(共編)『蒼海に交わされる詩文』東アジア海域叢書』第十三巻』汲古書院, pp. 3-40, 2012/10

浅見洋二(翻訳)「クリスチャン・ド・ペー「言葉の区画—北宋の洛陽における地誌記述と都市空間」須江隆(編)『碑と地方志のアーカイブズを探る』東アジア海域叢書』第六巻』汲古書院, pp. 147-176, 2012/4

### 2-4. 口頭発表

浅見洋二「楊万里与“詩債”」第8回宋代文学国際学術研討会, 中国宋代文学学会, 贛州師範学院, 2013/9

浅見洋二「童年的回憶、児童的情景—中国古典詩歌中從杜甫到陸游、楊万里的轉變」国科会訪問学人系列講座, 暨南国際大学中文系, 暨南国際大学中文系, 2013/5

浅見洋二「唐宋詩学的転型—中国文集編纂の唐宋轉型」「跨国界的文化伝承」計画, 台湾大学中文系, 台湾大学中文系, 2013/5

浅見洋二「經典確立与改定—宋代文集編纂与解釈」「国際学者人文經典閱讀与詮釋」論壇, 東華大学中文系, 東華大学中文系, 2013/5

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2010年度~2013年度、基盤研究(C)一般、代表者:浅見洋二

課題番号:22520358

研究題目:宋代における蘇軾・黄庭堅集の整理・編纂と注釈に関する総合的研究

研究経費: 2012年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2013年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

中国宋代における別集の整理・編纂、および別集に附された注釈をめぐる諸問題について、北宋の蘇軾・黄庭堅の詩文集を主たる対象としつつ、総合的な考察を加える。



## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本宋代文学学会・会長, 2013年6月～現在に至る

日本中国学会・理事, 2013年4月～現在に至る

日本中国学会・評議員, 2011年4月～現在に至る

中国社会文化学会・評議員, 2006年4月～現在に至る

# 2-15 国語学

## I. 現在の組織

### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：金水 敏、岡島 昭浩

准教授：矢田 勉

助教：大田垣 仁

### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
43	5	9	1	3	0	2	0

\*うち留学生 10名、社会人学生 0名

\*\*日本文学・国語学専修として

### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	22	2	0	1
2013	21	1	0	2
計	43	3	0	3

\*日本文学・国語学専修として

## II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

修士・博士論文作成演習の授業に連動して、学会発表、投稿論文作成等のための個別指導を行う。また院生が研究進捗状況を報告・発表しあう研究発表会を開催する。卒業論文作成演習の授業に連動して、個別指導を行うほか、卒業論文中間発表会を開き、学生の卒業論文完成に導く。専門機関の採用情報の入手につとめ、専門職への就職を積極的に支援する。国語学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知する。学部生と大学院生の学問的な連携体制を形成するために、授業形態等に工夫を行う。『待兼山論叢』『語文』等の学内雑誌及び学会誌への投稿を促す。

## 2. 研究

継続中の科学研究費に関わる研究を行うとともに、新たに科学研究費を申請する。研究を促進するために「大阪大学国語国文学会」を開催し、学会機関誌「語文」を刊行する。研究を促進し、近隣大学の研究者と連携を深めるために、「国語語彙史研究会」「国語文字史研究会」「土曜ことばの会」を開催する。

## 3. 社会連携

「Handai-Asahi 中之島塾」その他の社会連携講座に講師として参加する。

# Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

■学部：卒業論文発表会を 2012 年 10 月に実施した。日本文学・国語学専修で 22 名(うち国語学 10 名)の学生が卒論を提出、卒業した。ポスター掲示、メーリングリストその他の手段を通じて、展示会・学外研究会等の情報を広く周知した。■大学院・共通：研究発表会を 2012 年 7 月および 11 月に実施した。2 名が博士前期課程修了、1 名が博士学位申請論文を提出し、その 1 名に博士の学位を授与した。学部・大学院合同の講義を半期 4 コマ実施した。大学院生の論文が、学会誌等へのべ 5 本掲載され、研究発表が 9 本行われた、という状況である。(以上、2012 年度)

■学部：卒業論文発表会を 2013 年 10 月に実施した。日本文学・国語学専修で 21 名(うち国語学 5 名)の学生が卒論を提出、卒業した。ポスター掲示、メーリングリストその他の手段を通じて、展示会・学外研究会等の情報を広く周知した。■大学院・共通：研究発表会を 2013 年 7 月および 11 月に実施した。1 名が博士前期課程修了、2 名が博士学位申請論文を提出し、その 2 名に博士の学位を授与した。学部・大学院合同の講義を半期 4 コマ実施した。大学院生の論文が、学会誌等へのべ 4 本掲載され、研究発表が 8 本行われた、という状況である。(以上、2013 年度)

## 2. 研究

科学研究費に関わる研究では、引き続き「役割語の総合的研究」および「文字史・表記史的現象としての書体・書風に関する基礎的実証的研究」(矢田の着任に伴い神戸大学より移管)が行われた。また、「大阪大学国語国文学会」を 2013 年 1 月に実施、学会機関誌『語文』の第 98(6 月)・99 号(12 月)を刊行した。「国語語彙史研究会」を 3 回、「土曜ことばの会」を 4 回開催した。(以上、2012 年度)

科学研究費に関わる研究では、引き続き「役割語の総合的研究」および「文字史・表記史的現象としての書体・書風に関する基礎的実証的研究」が行われたほか、新たに「イロハ韻等の作詩用韻書を辞書史的に記述するための基礎研究」が開始された。また、「大阪大学国語国文学会」を 2014 年 1 月に実施、学会機関誌『語文』の第 100・101 号(12 月)を刊行した。「国語語彙史研究会」を 3 回、「土曜ことばの会」を 4 回開催した。(以上、2013 年度)

## 3. 社会連携

金水教授が、「大阪弁ぼちぼち講座～「オマエハアホカ」のメロディの秘密」(Handai-Asahi 中之島塾)、「大阪弁と小説のいい関係」(ナカノシマ大学 2013 年 3 月講座)等に、岡島教授が「ことばを拾う、ことばを残す」(国立国会図書館データベースフォーラム)に、それぞれ出講した。(以上、2012 年度)

金水教授が、「大阪弁ぼちぼち講座～大阪弁とオノマトペ～」(Handai-Asahi 中之島塾)、「役割語とは何か」(京都府立高等学校国語科研究会講演)、「役割語研究の 10 年」(藤女子大学公開講演会)、「役割語から見た大阪弁」(かんかん会・クラブ関西)、「脱・「作法」としての日本語」(フェリシモ日本語勉強会)、「大阪弁ぼちぼち講座～変わりゆく大阪弁～」(Handai-Asahi 中之島塾)、「オマエハアホカの秘密—大阪弁のアクセントを知らう—」(寝屋川市民大学講座)、「UNLIMITED: 科学の新たな地平をひらく— vol. 1 「声を語る／言語を聴く」 ヴォイスパフォーマーと言語学者の対

話」(大阪大学 21 世懷徳堂)、「マンガカフェ 22 「今年のマンガ界をふり返るぞ! 2013」」(アートエリア B1)、「大阪弁はいつ大阪弁になったか〜大阪弁ばちばち講座〜」(Handai-Asahi 中之島塾)、トークイベント「日本語を衆議する/日本語で衆議する」(大阪大学大学院文学研究科国語学研究室)等に、矢田准教授が「日本語表記の構造概説」(NINJAL セミナー・TUG チュートリアル 2013 を日本語で聞く会)に、それぞれ出講した。(以上、2013 年度)

## IV. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

### 1. 教育

学生は、多くの口頭発表を行い、多くの論文を学術誌に載せ、目標通りの達成と言える。

### 2. 研究

科学研究費で、「役割語の総合的研究」・「文字史・表記史的現象としての書体・書風に関する基礎的実証的研究」および「イロハ韻等の作詩用韻書を辞書史的に記述するための基礎研究」を行った。それを含めて、目標通りの達成と言える。

### 3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

## V. 基本情報(2012 年度～2013 年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	1	0	1
2013	2	0	2
計	3	0	3

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

竹村 明日香	「ローマ字本キリシタン資料に基づく日本語拗音節の研究」2013/3 主査：岡島昭浩 副査：金水敏、矢田勉
坂井 美日	「日本語準体構造の通時的変化—歴史研究と方言研究からの展開—」2014/3 主査：金水敏 副査：岡島昭浩、矢田勉
清田 朗裕	「日本語における複合指示詞の歴史的研究」2014/3 主査：金水敏 副査：岡島昭浩、矢田勉

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
----	-----	----	------------	------------	-----	---

2012	1(1)	0(0)	2(1)	0(0)	2(0)	5(2)
2013	2(2)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	3(3)
計	3(3)	0(0)	3(2)	0(0)	2(0)	8(5)

括弧内は査読付き論文数。

## 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	1	3	5	0	0	9
2013	0	4	4	0	0	8
計	1	7	9	0	0	17

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)著書

【2012年度】

〔博士後期〕

松繁弘之・兪鳴蒙（共著）『外教社日語 無師自通 下冊』, 2012/5

### (2)論文

【2012年度】

〔博士後期〕

清田朗裕「中古語トカクの意味的特徴—現代語との対照—」『待兼山論叢 文学篇』（大阪大学文学会）, 46, pp. 1-17, 2012/12

坂井美日「宮古島語城辺方言における準体助詞準体句の発達」『平成 24 年度国際沖縄研究所事業報告書』, 琉球大学, pp.258-270, 2013/3

坂井美日「現代熊本市方言の主語表示」『阪大社会言語学ノート』（大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室）, 11, pp.66-83, 2013/3

山田昇平「コリャード『さんげろく』の“～”」『語文』（大阪大学国語国文学会）, 99, pp. 1-15(横書), 2012/12

岡島昭浩・森勇太・金暁泳・竹村明日香・坂井美日「電子化が望まれる近代語資料探索—日本語史を研究する大学院生の報告から—」『近代語コーパス設計のための文献言語研究成果報告書』, 国立国語研究所共同研究報告 12-03, pp.27-35, 2012/10

【2013年度】

〔博士後期〕

清田朗裕「トニカクの語史—複合辞用法の成立過程—」『語文』（大阪大学国語国文学会）, 100・101, pp.100-112, 2013/12

坂井美日「日本語における準体述語文と人魚構文の歴史—上代から中世末にかけて—」『待兼山論叢 文学篇』（大阪大学文学会）, 47, pp.75-92, 2013/12

松繁弘之「宮澤賢治「注文の多い料理店」の語用論的解釈」『人文学部研究論集』（中部大学人文学部）, 31, pp.33-59, 2014/1

### (3)口頭発表

【2012年度】

〔博士後期〕

- 坂井美日「城辺方言の準体助詞準体句と連体形準体句」土曜ことばの会, 大阪大学, 2012/4/14
- 坂井美日「宮古島方言における準体助詞準体句の発達—宮古島城辺方言のデータを中心に—」第七回「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」研究発表会, 国立国語研究所, 2012/6/24
- 山田昇平「言便名義考」第 293 回日本近代語研究会春季大会, 千葉大学, 2012/5/18
- 山田昇平「ロドリゲス『日本大文典』の濁音前鼻音記述—"sonsonete" の解釈を中心に—」土曜ことばの会, 大阪大学, 2013/1/26
- 巴雅尔都楞「日本語とモンゴル語の指示詞の対照研究—直示用法におけるモンゴル語の近称 E- と日本語のソ・ア系の対応を中心に—」第 15 回日本語日本文化教育研究会, 大阪大学 CJLC 多目的ホール (箕面キャンパス), 2012/9/22
- Masayoshi Shibatani, Sung Yeo chung and Bayaerduleng, "Genitive modifiers—GA/no conversion revisited—", The 22nd Japanese/Korean Linguistics Conference, National Institute for Japanese Language and Linguistics, 2012/10/12-14
- 清田朗裕「中古語の指示副詞トカクの意味・用法—現代語との対照の観点から—」日本語学会 2012 年度春季大会, 千葉大学, 2012/5/20
- 清田朗裕「トニカク (ニ)・トモカク (モ) の語史—近世・近代を中心に—」平成 25 年度大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学, 2013/1/12
- 竹村明日香「硬口蓋化の非対称性—九州方言から再検討する中世日本語のエ段音—」土曜ことばの会, 大阪大学, 2012/4/14
- 【2013 年度】
- 〔博士後期〕
- 清田朗裕「ソコソコの語史」第 249 回筑紫日本語研究会, 九州大学, 2013/6/29
- 河野光将「係り結び研究史上における橘守部の位置—助詞「の」と「変格」の扱いをめぐる—」土曜ことばの会, 大阪大学, 2014/1/25
- 坂井美日「甌島方言の格配列—日本語方言の類型論的展開の可能性」日本語学会 2013 年度秋季大会ワークショップ, 「甌島方言から考える方言類型論と方言接触論」, 静岡大学, 2013/10
- 坂井美日「準体述語文の衰退について」平成 26 年度大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2014/1
- 坂井美日「甌島方言の格配列」, 琉球諸語研究会, 九州大学, 2013/8
- 巴雅尔都楞「モンゴル語の *one* について—日本語のアノとの対照—」日本言語学会 147 回大会, 神戸市外国語大学, 2013/11/23
- 巴雅尔都楞「指示詞の融合型・対立型について—モンゴル語と日本語の対照—」土曜ことばの会, 大阪大学, 2013/7/20
- 巴雅尔都楞「モンゴル語の *naγa* と *čaγa* 語根をもつ語について—日本語の「手前」「向こう」との対照—」第 18 回日本語日本文化教育研究会, 大阪大学, 2013/9/21

#### (4) その他(書評・翻訳など)

【2013 年度】

〔博士前期〕

- 久田行雄「紹介 茅島篤編著『日本語表記の新地平—漢字の未来・ローマ字の可能性—』『語文』(大阪大学国語国文学会), 100・101, p.163, 2013/12

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)  
 2013 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部：0名 大学院：0名（計0名）

2013年度 学部：0名 大学院：0名（計0名）

## 6. 専門分野出身の研究者

（大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について）

森 勇太 博士後期課程、関西大学、助教、2013/4（2014/4より准教授）

大田垣 仁 博士後期課程・特任研究員、大阪大学、助教、2014/3

岩田 美穂 博士後期課程・特任研究員、就実大学、講師、2014/4

藤本 真理子 博士後期課程・特任研究員、尾道市立大学、講師、2014/4

竹村 明日香 博士後期課程・特任研究員、お茶の水女子大学、助教、2014/4

## 7. 専門分野出身の高度職業人

（2012年度～2013年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 6名

2012年度：4名 2013年度：2名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 2名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 3名  
その他 1名

\*学部卒業者については日本文学との合計で記載。

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2012年度：1名 2013年度：0名

## 9. 刊行物

\*(日本文学専門分野とともに)

2012年度 『語文』（大阪大学国語国文学会）第98輯・第99輯

2013年度 『語文』（大阪大学国語国文学会）第100・101輯

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

事務局	国語語彙史研究会	2002年度以前から現在に至る
	国語文字史研究会	2002年度以前から現在に至る
	土曜ことばの会	2002年度以前から現在に至る
学会開催	日本近代語研究会	2013年5月31日
	日本語学会	2013年6月1日～2日

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

\*(日本文学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会（1月 1日間）

研究誌「語文」を年2回編集・発行

\*(日本文学、比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会 (10月 3日間)

大学院研究発表会 (7月・11月 各2日間)

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 金水 敏 教授

1956年生。1982年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。博士(文学)(大阪大学、2006年)。東京大学助手、神戸大学教養部講師、大阪女子大学助教授、神戸大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。専攻:国語学/言語学。

#### 1-1. 論文

廣坂直子, 金水敏(共著)「国際仏教学大学院大学本『摩訶止観』巻第一 解題」国際仏教学大学院大学日本古写経研究所 文科省戦略プロジェクト実行委員会(編)『国際仏教学大学院大学蔵 金剛寺蔵 摩訶止観 巻第一』国際仏教学大学院大学日本古写経研究所 文科省戦略プロジェクト実行委員会, pp. 9-20, 2014/3

廣坂直子, 金水敏(共著)「国際仏教学大学院大学本『摩訶止観』巻第一 影印・訓読」国際仏教学大学院大学日本古写経研究所 文科省戦略プロジェクト実行委員会(編)『国際仏教学大学院大学蔵 金剛寺蔵 摩訶止観 巻第一』, 国際仏教学大学院大学日本古写経研究所 文科省戦略プロジェクト実行委員会, pp. 21-147, 2014/3

竹村明日香, 金水敏(共著)「中世日本語資料の疑問文-疑問詞疑問文と文末助詞との相関-」金水 敏(編)『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書』1, 国立国語研究所, pp. 3-19, 2014/3

金水敏 「役割語研究の10年—日本大学国文学会講演記録—」『語文』(日本大学国文学会), 147, pp. 1-94, 2013/12

金水敏 「日本語の正しさとは何か」 *BATJ Journal*, 14, 英国日本語教育学会, pp. 11-16, 2013/9

金水敏 「役割語研究の10年」『台湾日本語文学報』(台湾日本語学会), 33, pp. 25-44, 2013/6

金水敏 「役割語研究の10年」『日本研究』14, 釜山大学校・日本研究所, pp. 21-43, 2013/6

金水敏 「日本語語彙史とは何か—言語を階層的な資源と見る立場から—」韓美卿(編)『日本語学・日本語教育』, J&C, pp. 357-369, 2013/6

Kinsui, Satoshi, “일본어 어휘사란 무엇인가—언어를 계층적인 자원의 시각에서 보는 입장에서—” 韓美卿(編)『日本語学・日本語教育』J&C, pp. 71-86, 2013/6

金水敏 「日本語の疑問詞疑問文と「の」の有無」『語文』(大阪大学国語国文学会), 99, pp. 45-57, 2013/3

廣坂直子, 金水敏(共著)「国仏本『摩訶止観 巻第一』について」『いとくら』8, 国際仏教学大学院大学古写本研究所, pp. 3-4, 2012/12

金水敏 「疑問文のスコープと助詞「か」「の」」『国語と国文学』(東京大学国語国文学会), 89-11, 明治書院, pp. 76-89, 2012/11

#### 1-2. 著書

金水敏(編)『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書』1, 国立国語研究所, 2014/3

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 1-4. 口頭発表

金水敏 (パネリスト)「古典文献調査の立場から」JLVC2014: 日本語調査をデザインする—やってみようよ、やるときゃよかったことばの調査—, 国立国語研究所 時空間変異研究系, 国立国語研究所, 2014/3

Kinsui, Satoshi, (基調講演) “The State of Art in Role Language Research”, :Fiction and Practice in Japanese: “Virtual Language” and “Gender in Language”, University of Hawaii at Manoa, University of Hawaii at Manoa, 2014/2

金水敏 (パネリスト)「日本語疑問文研究の課題」韓国日語日文学会 2013 年冬季国際学術大会:シンポジウム「日本語の文法研



究の現況と課題」, 韓国日語日文学会, 韓国外語大学校, 2013/12

金水敏 (招待講演)「日本語疑問文の問題点」日本歴史言語学会 2013 年大会, 日本歴史言語学会, 東北大学, 2013/11

金水敏 「役割語とは何か」日本心理学会 77 回大会: 言語行動研究の魅力—心理学にもたらすインパクトについて考える, 日本心理学会, 札幌コンベンションセンター, 2013/9

金水敏 (招待講演)「英語の多様性、あるいは非正規的英語と役割語」関西大学英米文学英語学会第 2 回大会, 関西大学英米文学英語学会, 関西大学, 2013/9

Kinsui, Satoshi, (基調講演) “The State of Art in Role Language Research”, NAJAKS 2013, Nordic Association of Japanese and Korean Studies, ベルゲン大学(ノルウェー), 2013/8

金水敏 (招待講演)「役割語研究の 10 年」藤女子大学講演会, 藤女子大学, 藤女子大学, 2013/7

金水敏 (招待講演)「役割語研究の 10 年」平成 25 年度 日本大学国文学会大会, 日本大学国文学会, 日本大学, 2013/6

金水敏 (招待講演)「役割語研究の現在」台詞や小説における役割語, パラツキ大学(チェコ), パラツキ大学(チェコ), 2013/5

金水敏 (招待講演)「役割語研究の現在」言語処理学会 第 19 回年次大会, 言語処理学会, 名古屋大学, 2013/3

金水敏 (招待講演)「日本語疑問文研究の課題」NUNJAL Typology Festa 2013, 国立国語研究所, 国立国語研究所, 2013/3

金水敏 (招待講演)「役割語研究の現在」2012 年度台湾日本語学会大会, 台湾日本語学会, 淡江大学淡水キャンパス, 2012/12

Kinsui, Satoshi, (基調講演) “The Status Quo of the Role Language’ Research”, The 22nd Japanese/Korean Linguistics Conference, Japanese/Korean Linguistics Conference, 国立国語研究所, 2012/10

金水敏 (パネリスト)「言語系学会連合から計量国語学会に望むこと」計量国語学会第 56 回大会: シンポジウム「計量国語学に望むもの」, 計量国語学会, 名古屋大学, 2012/9

金水敏 (基調講演)「日本語の正しさとは何か—言語を資源と見る立場から—」第 15 回 BATJ 大会, 英国日本語教育学会 (British Association for Teaching Japanese as a Foreign Language), The University of Manchester, 2012/8

金水敏 (招待講演)「役割語研究の現在」第 15 回 BATJ 大会, 英国日本語教育学会 (British Association for Teaching Japanese as a Foreign Language), The University of Manchester, 2012/8

金水敏 (パネリスト)「日本語の「正しさ」とは何か—言語を資源として見る立場から—」日本語学会 2012 年度春季大会: シンポジウム「グローバル市民社会の日本語学」, 日本語学会, 千葉大学教育学部, 2012/5

## 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

金水敏 第25回新村出賞, 新村出版記念財団, 2006/11

原口裕, 南出康世, 金水敏他 豊田賞, 日本英学史学会, 1992/10

金水敏, 田窪行則 日本認知科学会論文賞, 日本認知科学会, 1991/7

## 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2011 年度～2015 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 金水敏

課題番号: 23320087

研究題目: 役割語の総合的研究

研究経費: 2012 年度 直接経費 3,200,000 円 間接経費 9,600,000 円

2013 年度 直接経費 3,200,000 円 間接経費 9,600,000 円

研究の目的:

「役割語」とは、特定の人物像(キャラクタ)と心理的に結びついた話し方(スピーチスタイル)である。本研究では、日本語を中心に役割語の研究を 1)理論、2)起源・歴史、3)対照、4)応用、5)獲得・発達の 4 つの観点に分け、それぞれについて相互連携的に研究を推進しようとするものである。2)では個別の役割語構成要素についてその起源と発達過程を明らかにし、また 3)では欧米語および東アジア諸言語を中心に、文化差についても勘案しながら、類型論的に考察する。また 4)では日本語教育、人文学入門の分野における教育プログラム等の開発について検討する。また 5)では 4 歳児～成人まで、成長の各段階での役割語知識の獲得過

程について実証的に研究する。これらを総合し、1)として役割語の総合的な理論の構築を目指す。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本語学会・副会長, 2013年10月～現在に至る

日本語学会・理事, 2012年6月～現在に至る

日本言語学会・会計監査委員, 2012年4月～現在に至る

日本語文法学会・会長, 2010年4月～2013年3月

日本語学会・評議員, 2009年4月～現在に至る

日本言語学会・評議員, 2009年4月～現在に至る

訓点語学会・委員, 2009年4月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2008年10月～現在に至る

関西言語学会・運営委員, 2000年4月～現在に至る

## 2. 岡島 昭浩 教授

1961年生。1987年、九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(九州大学、1986年)。九州大学文学部助手、京都府立大学女子短期大学部講師・助教授、福井大学教育学部(教育地域科学部)助教授、本研究科助教授・准教授を経て2010年現職。専攻:国語学。

### 2-1. 論文

---

岡島昭浩「明治中期の回覧雑誌「共栄会文章会」—附 魚住折蘆・和辻哲郎遺文」『大阪大学大学院文学研究科紀要』54, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-71, 2014/3

### 2-2. 著書

---

なし

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 2-4. 口頭発表

---

岡島昭浩「ことばを拾う・ことばを残す」国会図書館データベースフォーラム, 国立国会図書館関西館, 国立国会図書館関西館, 2012/9

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2013年度～2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡島昭浩

課題番号:25370517

研究題目:イロハ韻等の作詩用韻書を辞書史的に記述するための基礎研究

研究経費: 2013 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、イロハ韻等の作詩用韻書を国語学的に研究するための、また辞書史に位置付けるための基礎的な研究にある。どのような異本があり、それらの関係はどのようなものか、また、イロハ韻本体以外の部分として、どのような性格のものが増補されたのか(どのような資料から引用されたのか)、などについて調査研究を行い、イロハ韻の諸本の姿を示すとともに、イロハ韻の全体像と他の類似書との違い・共通性を確認するために行うものである。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本語学会・電子化委員, 2013 年 5 月～現在に至る

日本歴史言語学会・理事, 2011 年 12 月～現在に至る

日本語学会・評議員, 2009 年 6 月～現在に至る

国語文字史研究会・委員, 2008 年 4 月～現在に至る

国語語彙史研究会・委員, 2003 年 4 月～現在に至る

## 3. 矢田 勉 准教授

1969 年生。1994 年東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。博士(文学)(東京大学、2012 年)。東京大学助手、清泉女子大学講師、白百合女子大学助教授、神戸大学大学院人文学研究科准教授等を経て、2012 年 10 月より現職。専攻: 国語学、特に文字・表記史、文字意識史。

### 3-1. 論文

---

矢田勉 「十一世紀中頃における平仮名字体—実用的資料と美的資料との連関について—」『語文』(大阪大学国語国文学会), 100・101, pp. 23-37, 2013/12

矢田勉 「カタカナとひらがな」『日本語学』32-12, 明治書院, pp. 82-91, 2013/10

### 3-2. 著書

---

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 3-4. 口頭発表

---

矢田勉 (招待講演)「日本語表記の構造概説」TUG2013 チュートリアルを日本語で聞く会, 国立国語研究所・TUG(共催), 国立国語研究所, 2014/2

矢田勉 (パネリスト)「文字・表記史叙述の方法」日本語学会 2013 年度秋季大会: 日本語史はいかに叙述されるべきか, 日本語学会, 静岡大学, 2013/10

Yada, Tsutomu, (招待講演)“An Introduction to the Structure of the Japanese Writing System”, TUG2013(第 34 回 TeX Users Group 年次大会), The TeX Users Group (TUG), 東京大学(駒場キャンパス), 2013/10

矢田勉 (パネリスト)「手紙—文字・表記史の観点から」東京大学国語国文学会, 東京大学国語国文学会, 東京大学(本郷キャンパス), 2013/4

矢田勉 (招待講演)「国語文字・表記の通史的記述の方法」平成 25 年度大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2013/1

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2009 年度～2013 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:矢田勉

課題番号:21520471

研究題目:文字史・表記史的現象としての書体・書風に関する基礎的実証的研究

研究経費: 2012 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

2013 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

文字・表記に関わる歴史的・通時的現象のうち、これまで主として書道史学的に扱われてきた書体・書風の問題を日本語文字・表記史の問題として、記号史的に捉え直そうとするものである。

文字の機能的側面の史的変遷の記述的研究を補完し、日本語文字・表記史の総体的通史記述に向けての重要な作業になるとともに、通史的記述のための重要な支柱となる、個別資料生産の場となった文字社会の性格把握の指標ともなり得べきものである。即ち、「日本語文字・表記通史」記述の完成に向けての一側面を実際的に担うことを目的とするとともに、その理論的枠組みの構築・強化に寄与することを目的とする。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本語学会・大会企画運営委員, 2013 年 6 月～現在に至る

日本語学会・常任査読委員, 2010 年 6 月～2013 年 5 月

国語文字史研究会・委員, 2008 年 4 月～現在に至る

## 4. 大田垣 仁 助教

1980 年生。2012 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)(大阪大学、2012 年)。大阪大学特任研究員、花園大学非常勤講師、京都学園大学非常勤講師等をへて、2014 年 3 月より現職。専攻:国語学(名詞句意味論。メンタル・スペース理論)。

### 4-1. 論文

---

大田垣仁 「換喩もどきの指示性について」『語文』(大阪大学国語国文学会), 100・101, pp. 1-14, 2013/12

大田垣仁 「換喩と名づけ—換喩とエポニムの定着の比較からみた—」『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 31, 和泉書院, pp. 109-125, 2012/4

### 4-2. 著書

---

なし

#### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

大田垣仁「紹介 宮脇弘幸監修・前田均解説『南洋諸島國語讀本』補遺」大阪大学国語国文学会『語文』(大阪大学国語国文学会), 99, pp. 41-41, 2012/12

#### 4-4. 口頭発表

---

大田垣仁「換喩におけるカテゴリーの境界と意味変化について」第 105 回国語語彙史研究会, 国語語彙史研究会, 天理大学, 2013/12

伊藤遊, ミトミツエ, 大田垣仁「第 21 回マンガカフェ「この翻訳海外マンガがすごい!『ガイマン賞 2013』結果発表」第 21 回マンガカフェ, 大阪大学 21 世紀懐徳堂, アートエリア B1, 2013/11

大田垣仁「オキナワン・ナイトー沖繩ポピュラーカルチャーにおけるウチナー・ヤマトウグチ、琉神マブヤー、ハルサー・エイカーを中心に」第 5 回役割語研究会, 役割語研究会, 大阪大学, 2013/6

大田垣仁「名詞述語文における換喩の叙的用法について—換喩と換喩もどきとの比較を中心に—」日本語文法学会第 13 回大会, 日本語文法学会, 名古屋大学, 2012/10

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本語学会・庶務委員, 2012 年 6 月～2013 年 3 月

言語系学会連合・事務委員, 2012 年 6 月～2013 年 3 月

## 2-16 英米文学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 3 准教授 2 外国人教師 1 助教 1

教授：森岡 裕一、服部 典之、片渕 悦久

准教授：石割 隆喜、山田 雄三

外国人教師：ポール・ハーヴィ

助教：好井 千代

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
54	9	7	0	0	2	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

\*\* 英米文学・英語学専修として

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	21	0	1	0
2013	20	2	0	1
計	41	2	1	1

\* 英米文学・英語学専修として

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

大学院・学部の教育においては、広い視野で学生が自己の学習や研究を位置づけられるよう、講義・演習を構成し、卒業・修了時までには社会で要請される基礎的能力を習得できるよう講義・演習・論文指導などを配置することを目標とした。大学院生については、①修士論文作成演習、博士論文作成演習の授業をより活性化し、論文執筆能力をつけさせる。②文

学テキストを読解し、分析する力の増進をはかり、プレゼンテーション能力の涵養をはかる。③各種学会での口頭発表の申し込み、各種学術誌への投稿を積極的に勧めることを目標とした。また学部学生については、①英米文学全般についての幅広い知識と教養を身につけさせる。②卒業論文の作成に向けて積極的な指導を行う。③英語の総合的力をつけ自己表現技術を身につけさせることを目標とした。さらに、大学院生と学部生の交流を図り、教育の面で相互に協力し刺激しあう態勢をつくることも、大学院・学部双方にわたる目標とした。

## 2. 研究

教員・大学院生は毎年最低 1 回の研究成果を、各種学会で口頭および論文の形で行うよう積極的に研究活動を継続する。また、教員全員が代表者として科学研究費補助金を中心とした競争的外部資金の獲得に努めるようにすることを目標とした。教員は大学院生、学部学生の研究意欲を高めるために学外研究者と協力して、院生執筆者を含む共同の研究書・書物の刊行を心がける。また、同窓の研究者と連携して、阪大英文学会、阪大英文学会叢書のいっそうの充実をめざすことも目標とした。

## 3. 社会連携

卒業生との連携を密にして、その多彩な才能を多方面に活用するためのシステムの立ち上げを考える。また、出版社と共同企画をし、英米文学を専攻する大学院生および学部学生のための教科書やガイドブック等の編集・刊行を実現する。さらに、大学院生に国際的感覚を付けさせるために英米の大学に派遣するプロジェクトを模索することを目標とした。

# Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

講義・演習では基礎から応用までのスキルの習得がなされ、ほぼ当初の計画どおりの成果があがっている。大学院・学部ともにテキストの読解力は向上してきている。また、論文作成に関する指導が細やかに行われた結果、研究発表も活発で、大学院生の学会での口頭発表や学会誌への論文発表などが活発に行われていることがそのことを実証している。研究室の物理的整備などを工夫したこともあり、院生・学部生間の交流も進み、研究室の雰囲気はきわめて良好な状態を保っていると言える。

## 2. 研究

当該年度中は教員のほぼ全員が科学研究費補助金を獲得し、著書・論文を刊行するなど目覚ましい活躍を続けている。また執筆者に大学院生を含む阪大英文学会叢書はすでに第 6 巻まで出版を終えているが、2013 年度中には第 7 巻が新たに出版される予定である。なお叢書の今後の出版計画は第 8 巻まで進んでいる。この時期の課程博士号提出者は 2 名となっている。院生の研究発表については 1. においてもふれたように、口頭・論文ともに堅調を維持しており、目標は十分に達成されたと言える。

## 3. 社会連携

2012 年度には卒業生を非常勤講師として継続的に招聘し、大きな教育的成果を挙げた。大学院生を活用した教科書・ガイドブックはすでに刊行され好評を得ているが、さらなる出版計画を考慮中である。また海外派遣計画については、今後も長期的展開が望めるように新たなプロジェクトを模索中である。

# Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

学部学生については日頃のクラス内での取組や卒業論文の出来から判断して比較的水準の高い成果が出ている。また、

このところ内部から大学院進学者が出ているのは教育面での成果の表れであると自負している。大学院生については、すでに述べた学会活動などで外部から高い評価を得ており、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

## 2. 研究

教員・大学院生の全員が口頭・論文・著書等で成果を世に問うという目標は達成できた。その他の活動も含め、外部から高い評価を得ている点を考慮しても目標は達成されたと考えられる。

## 3. 社会連携

同窓生との連携、海外との連携などに代表されるように、この面でも社会連携の責任はほぼ達成できたと考えられる。

# V. 基本情報(2012年度～2013年度)

## 1. 博士学位授与

### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	0	0	0
2013	1	0	1
計	1	0	1

### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

[2013年度]

田中和也 “From Skepticism to Self-Parodies: The Transition in Joseph Conrad's Works.” 2013/9  
主査：服部典之 副査：森岡裕一、片渕悦久、石割隆喜

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	1(1)	0(0)	6(0)	0(0)	0(0)	7(1)
2013	1(1)	2(2)	1(1)	0(0)	0(0)	4(4)
計	2(2)	2(2)	7(1)	0(0)	0(0)	11(5)

括弧内は査読付き論文数。

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	11	0	0	0	11



2013	0	9	0	0	0	9
計	0	20	0	0	0	20

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

【2012年度】

〔博士前期〕

中嶋彩佳(Nakajima, Ayaka) “Disordering Fiction’s Order: Irony underneath Homage in Ian McEwan’s *Atonement*.” *Osaka Literary Review* 第 51 号, pp.67-82, 2013/1

林日佳理(Hayashi, Hikari) “Travels in the Multilayered Fictional World: Paul Auster’s Requiem for his Characters.” *Osaka Literary Review* 第 51 号, pp.83-98, 2013/1

〔博士後期〕

ガーリントン、イアン(Garlington, Ian) “Super Syphilitics or Alchemical Acid Heads? On the Nature of Genius in Thomas M. Disch’s *Camp Concentration*” 『待兼山論叢』(文学編) 第 46 号, pp.37-52, 2012/12

田中和也「収集される収集家たち：ジョウゼフ・コンラッド『密告者』における語りの構造、中国陶器の不明瞭な表象、ブルジョワ階級の『因習』」日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」報告書, pp. 117-27, 2013/3

林智之「過去の再構築: *Waverley* における救済としての絵画」『日本英文学会第 84 回大会 Proceedings』, 日本英文学会, pp. 49-50, 2012/9

林智之(Hayashi, Tomoyuki) “The Early Practice of Home Tourism: Thomas Pennant’s Voyage to the Hebrides in 1772.” 『待兼山論叢』(文学篇) 第 46 号, pp.19-35, 2012/12

水田博子(Mizuta Hiroko) “From ‘Speaking about Sex’ to ‘Speaking Sex’: The Restoration of the ‘Voice’ in *Lady Chatterley’s Lover*.” 『D. H. ロレンス研究』第 23 号, 日本ロレンス協会, pp.1-15, 2013/3

【2013年度】

〔博士前期〕

井上和義(Inoue Kazuyoshi) “O’Neill’s Alter Ego: Seth’s Role as the Chorus.” *Osaka Literary Review* 第 52 号, pp.17-35, 2014/1/31

〔博士後期〕

上里友子(Uezato Yuko) “Earnest Irony and Un-Committed Attitude in *The Pickwick Papers*.” 『関西英文学研究』第 7 号, 日本英文学会関西支部, pp19-27, 2014/1/20

水田博子(Mizuta Hiroko) “Postmodern Salvation through Mythopoeia in *The Man Who Died*” 『待兼山論叢』(文学篇) 第 47 号, pp. 105-20, 2013/12/25

吉井麻里子(Yoshii Mariko) “The Realm of Holgrave’s Mesmerism and the Narrative Strategy in *The House of the Seven Gables*.” 『待兼山論叢』(文学篇) 第 47 号, pp.93-104, 2013/12/25

### (2)口頭発表

【2012年度】

〔博士前期〕

林日佳理「ポール・オースターの多層的物語世界—キャラクターへの<sup>レクイエム</sup>鎮魂歌としての『写字室の中の旅』」日本英文学会関西支部第七回大会、京都大学、2012/12/22

〔博士後期〕

上里友子「*The Pickwick Papers* のユーモアのレトリックと曖昧化効果」日本英文学会関西支部第 7 回大会、京都大学、

2012/12/22

ガーリントン、イアン “On the Nature of Genius in Thomas M. Disch’s *Camp Concentration*.” 日本アメリカ文学会全国大会、名古屋大学、2012/10/13

ガーリントン、イアン(Garlington, Ian) “The Anti-ideological Function of Utopia in the Superhero Narratives of Alan Moore.” 阪大英文学会第 45 回大会、大阪大学、2012/10/20

ガーリントン、イアン(Garlington, Ian) “A Stuttering or Tripping Art? A Comparison of Semantic Structures in Underground Comix and Art Comics.” 日本英文学会関西支部第 7 回大会、京都大学、2012/12/22

米田亮一 「表象の盲目性—*A Passage to India* の Marabar Cave における事件」 日本英文学会第 83 回全国大会、専修大学生田キャンパス、2012/5/27

林智之 「過去の再構築: *Waverley* における救済としての絵画」 日本英文学会第 84 回大会、専修大学、2012/5/27

林智之 「思い出のわが家: アン・グラントにおける幼少期の樂園喪失」 東北大学・東北学院大学・大阪大学合同研究発表会第 4 回、東北大学、2012/8/12

水田博子 「<性を語る>から<性が語る>へ—*Lady Chatterley’s Lover* における身体と言語」 日本ロレンス協会第 43 回大会、成城大学、2012/6/16

水田博子 『『アポカリプス論』における「見者」の表象と文学の政治性』 東北大学・東北学院大学・大阪大学合同研究発表会第 4 回、東北大学、2012/8/12

水田博子 「D. H. Lawrence の *The Man Who Died* における神話再創造によるポストモダンの救済」 日本英文学会関西支部第七回大会、京都大学、2012/12/22

【2013 年度】

〔博士後期〕

上里友子 「*David Copperfield* におけるステレオタイプの人物描写と語りに隠されたアイロニー」 ディケンズ・フェロウシップ日本支部、駒澤大学、2013/6/22

Garlington, Ian Stuart “The Function of Fragmentation in the *Illuminatus!* Trilogy.” 日本アメリカ文学会第 52 回大会、明治学院大学、2012/10/13

米田亮一 「*The Longest Journey* の象徴的瞬間における反復と脱構築」 日本英文学会関西支部第 8 回大会、龍谷大学大宮キャンパス、2013/12/22

中嶋彩佳 「言語の仮面・語りの迷宮—*When We Were Orphans* における自己劇化」 東北大学・東北学院大学・大阪大学合同研究会発表会第 3 回、大阪大学豊中キャンパス、2013/8/10

中嶋彩佳 「Kazuo Ishiguro の迷宮—*When We Were Orphans* における語りの曖昧性」 日本英文学会関西支部第 8 回大会、龍谷大学大宮キャンパス、2013/12/22

水田博子 「D. H. Lawrence と現代の黙示録—*Apocalypse* における見者の表象と文学の「政治性」 日本英文学会全国大会、東北大学、2013/5/26

水田博子 「Nudity: ロレンスにおける小説的美学とその政治性」 日本ロレンス協会第 44 回大会、北九州市立大学、2013/6/22

水田博子 “Nudity: Political Activism in Novelistic Aesthetics of D. H. Lawrence.” 国際美学会、ポーランド、クラクフ、ヤゲェウォ大学、2013/7/21-26

水田博子 「思考不可能なもの詩学—*The Plumed Serpent*(1926)における残酷の表象」 日本英文学会関西支部第 8 回大会、龍谷大学大宮キャンパス、2013/12/22

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2012 年度】

〔博士後期〕

米田亮一 『フォースター文学の諸相—小説と小説論—』(共著) 英宝社, pp. 61-98, 2012/8/20

米田亮一「表象の盲目性—A Passage to India の Marabar Cave における事件」、日本英文学会(大会 Proceedings), pp. 60-62, 2012/9/15

林智之「研究書紹介: Juliet Shields, *Sentimental Literature and Anglo-Scottish Identity, 1745-1820.*」(書評)『日本ジョンソン協会年報』第36号, pp.27-28, 2012/5

【2013年度】

〔博士後期〕

Garlington, Ian Stuart (翻訳) プレット・ド・バリー「ジェンダー・空間的实践・惑星思考—森崎和江の筑豊」『「帰郷」の物語／「移動」の語り』伊豫谷登土翁・平田由美(編) pp. 223-66, 2014/1

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

水田博子、西村孝次賞、日本ロレンス協会、2013/3

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2013年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2013年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2012年度: 0名 2013年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名  
その他 0名

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2012年度: 0名 2013年度: 0名

### 9. 刊行物

2012年度 *Osaka Literary Review (OLR)* No. 51, 2012/12

2013年度 *Osaka Literary Review (OLR)* No. 52, 2014/1

### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会第45回大会 2012/10/20  
阪大英文学会第46回大会 2012/10/19

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 森岡 裕一 教授

1950年生。1979年、大阪大学大学院修士課程修了。文学修士(大阪大学、1979年)文学博士(大阪大学、2006年)。大阪大学助手、講師、奈良女子大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。専攻:アメリカ文学。

#### 1-1. 論文

森岡裕一他(共著)「シャーウッド・アンダーソン」今村楯夫(共著)『ヘミングウェイ大事典』勉誠出版, pp. 591-593, 2012/7

Morioka, Yuichi et al.,(共著),“Sherwood Anderson”Simon Bronner(共著) *Encyclopedia of American Studies Online*, Johns Hopkins University Press, 2012

#### 1-2. 著書

森岡裕一『アメリカ文化のサプリメントー多面国家のイメージと現実』大阪大学出版会, 271p., 2014/1

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 1-4. 口頭発表

なし

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

森岡裕一 大阪大学共通教育賞(2005年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2005/11

森岡裕一 大阪大学総長奨励賞, 大阪大学, 2005/11

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2012年度～2014年度、基盤研究(C) 一般、代表者:森岡裕一

課題番号:24520282

研究題目:アメリカ禁酒小説研究

研究経費:2012年度 直接経費 1,600,000円 間接経費 480,000円

2013年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

研究の目的:

19世紀のアメリカ禁酒小説に関する包括的研究。とくに作家のジェンダー差に着目し、それが作品内のジェンダー表象のどのような違いを生み出しているかを探る。また、禁酒小説と家庭小説の関連を考察し、とくに「離婚」をめぐる議論の取り扱いを検討することで、19世紀アメリカの家庭の問題を禁酒運動、女権拡張運動の文脈で研究する。

#### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

阪大英文学会・会長, 2012年10月～現在に至る

日本英文学会関西支部・評議員, 2012年4月～現在に至る

日本ヘミングウェイ協会・運営委員, 2001年4月～現在に至る

日本アメリカ文学会関西支部・評議員, 1997年4月～現在に至る

## 2. 服部 典之 教授

1958年生。1981年大阪大学文学部(英文学専攻)卒業。1983年大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。同博士課程中途退学。文学博士(大阪大学、2003年)。和歌山大学教育学部助手、大阪大学言語文化学部講師、同助教授を経て、2000年10月文学研究科助教授、2008年4月現職。専攻:英文学。

### 2-1. 論文

---

服部典之「香料・漆・金—アンボイナ事件表象を巡って—」藤田治彦『アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究——日英間に広がる21世紀の地平』(大阪大学大学院文学研究科), pp. 17-26, 2013/3

### 2-2. 著書

---

服部典之他(共編著)『移動する英米文学』英宝社, 298p., pp. 18-36, 2013/12

服部典之他(共著)『『ガリヴァー旅行記』徹底注釈』岩波書店,(共同執筆) 615p., 2013/8

服部典之他(共編著)『<アンチ>エイジングと英米文学』英宝社, 176p., pp. 123-156, 2013/4

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

服部典之(書評)「原英一『<徒弟>たちのイギリス文学——小説はいかに誕生したか』」『図書新聞』3107, 株式会社・図書新聞, 2013/4

服部典之(書評)「Dennis Todd, *Defoe's America*」『日本18世紀学会年報』(日本18世紀学会), 27, pp. 90-92, 2012/6

### 2-4. 口頭発表

---

服部典之他(パネリスト)「ガリヴァー旅行記の愉楽」, 岩波書店, リプロ池袋店, 2013/12

服部典之他(パネリスト)「ロマンスとポリティクスが交錯するところ——『トム・ジョーンズ』におけるジャコバイトの反乱とソファイアの遁走」日本英文学会東北支部第68回大会:フィクションのポリティクス, 日本英文学会東北支部, 東北工業大学, 2013/11

服部典之(招待講演)「小人と巨人と馬のユートピア」第124回懐徳堂秋期講座『ヨーロッパ文学入門——ユートピアとディストピア——』, 懐徳堂記念会, 大阪大学中之島センター, 2012/11

服部典之(招待講演)「ジャマイカと女たち——サリー、コン、バーサ、アントワネット」日本ブロンテ協会関西支部, 日本ブロンテ協会, 関西大学, 2012/7

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

服部典之 大阪大学共通教育賞(2003年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2004/1

### 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2012年度～2014年度、基盤研究(C) 一般、代表者:服部典之

課題番号:24520283

研究題目:スキャンダラス・メモアリスト女性作家と異国トポス

研究経費:2012年度 直接経費 1,600,000円 間接経費 480,000円

2013年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

18世紀英国で、自らの性生活をも含めた赤裸々な自伝を出版して世間を騒がせた女性作家 T.C. Phillips や Laetitia Pilkington らは、近年〈スキャンダラス・メモアリスト〉と呼ばれ注目を集め始めている。男性中心的「小説の勃興」の潮流に棹されたこと、扇情的な自己表現のあまり respectable な読者の生理的反感をかかったため二百年以上等閑視されていた〈スキャンダラス・メモアリスト〉たちを、本研究は自伝文学の先駆けとして再評価する。さらに、彼女たちの「自伝」が「小説」ジャンルとの往還によって、18世紀英国文化活性に大きく寄与したことを、活発な海外旅行者でもあった彼女たちの「異国トポス」表象に着目することで、初めて解明する。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本英文学会機関誌『英文学研究』編集委員会・委員, 2013年4月～現在に至る

日本英文学会関西支部・副支部長, 2013年4月～現在に至る

文部科学省大学設置分科会 文学専門委員会・主査, 2013年4月～2014年3月

日本英文学会関西支部理事会・理事, 2011年4月～現在に至る

## 3. 片淵悦久 教授

1965年生。1995年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(大阪大学、1991年)。博士(文学)(大阪大学、2007年)。北陸大学講師、同志社女子大学講師、助教授を経て、2003年4月現職。専攻:アメリカ文学。

### 3-1. 論文

---

片淵悦久 「リメイクかアダプテーションか? —物語更新の境界領域—」『FILAMENT』(大阪大学アニメーション研究会), 37, pp. 135-143, 2013/12

### 3-2. 著書

---

片淵悦久他(共著)『ゴーレムの表象—ユダヤ文学・アニメ・映像』南雲堂, pp. 147-187, 2013/1

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

広瀬佳司, 佐川和茂, 片淵悦久他(共訳)「レオ・ロステン『新イディッシュ語の喜び』」大阪教育図書, pp. 99-126, 2013/3

片淵悦久, 鴨川啓信, 武田雅史他(共訳)「リンダ・ハッチオン『アダプテーションの理論』」晃洋書房, pp. 1-227, 2012/4

### 3-4. 口頭発表

---

片淵悦久 「ゴーレム伝説とアメリカン・スーパーヒーロー —Michael Chabon, *The Amazing Adventures of Kavalier & Clay* をめぐって」日本アメリカ文学会関西支部例会, 近畿大学, 2013/7

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2011年度～2013年度、基盤研究(C) 一般、代表者:片淵悦久

課題番号:23520430

研究題目:アダプテーション理論を発展させたメディア横断的物語更新理論の構築

研究経費: 2012 年度 直接経費 1,300,000 円 間接経費 390,000 円

2013 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

研究の目的:

さまざまなメディア・ジャンルを横断して物語が作り直される広範な文化的現象を対象とし、各メディアやジャンルに対応した物語変換の原理や法則性を体系化する「アダプテーション理論」を発展させながら、主流文化からサブカルチャーまでを射程に収めた「メディア横断的物語論」の新たな展開形としての動態的分析方法論を開発し、「物語更新理論」として体系化することをめざす。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本アメリカ文学会関西支部・評議員, 2013 年 4 月～現在に至る

日本英文学会関西支部・大会準備委員, 2011 年 4 月～2013 年 3 月

日本アメリカ文学会関西支部・編集委員, 2009 年 4 月～2013 年 3 月

日本ソール・ベロー協会・代表理事, 2009 年 4 月～現在に至る

関西英語英米文学会・理事, 2008 年 4 月～現在に至る

## 4. 石割 隆喜 准教授

1970 年生。大阪外国語大学外国語学部(英語学科)卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程(英文学専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、1999)。大阪外国語大学助手・講師・助教授・准教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科准教授。日本英文学会第 22 回新人賞(1999)。専攻:アメリカ文学。

### 4-1. 論文

---

Ishiwari, Takayoshi, "Rainbow's Light: Or, 'Illuminations' in Thomas Pynchon's *Gravity's Rainbow*" *The Japanese Journal of American Studies*, (アメリカ学会), 24, pp. 185-201, 2013/6

### 4-2. 著書

---

なし

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

石割隆喜(書評)「武田悠一『読みの抗争——現代批評のレトリック』」『英文学研究』(日本英文学会), 90, pp. 101-105, 2013/12

### 4-4. 口頭発表

---

なし

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞, 日本英文学会, 1999/12

### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

4-6-1. 2010 年度～2012 年度、若手研究(B)、代表者:石割隆喜

課題番号:22720101

研究題目:「小説」論的観点からのピンチョン研究

研究経費:2012年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

本研究は、トマス・ピンチョンの代表作『重力の虹』のイラストレーション化がピンチョン文学のみならず今日の文学世界全体の中でどのような意味をもつのかを明らかにするために、現代アート作家ザック・スミスによる『重力の虹』イラスト作品全 755 枚を、所蔵するウォーカー・アート・センター(アメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリス市)へ赴き現地調査し、「小説」論的ポストモダニズム研究というべき観点からのピンチョン研究を実践的側面から推進してゆこうとするものである。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本アメリカ文学会関西支部・評議員, 2011年4月～現在に至る

日本英文学会関西支部・編集委員, 2011年4月～2013年3月

### 5. 山田 雄三 准教授

1968年生。1990年大阪大学文学部卒業。1995年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。1995-2013年、大阪大学言語文化部、同大学院言語文化研究科講師、助教授、准教授を経て、2013年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:英米文学／文化理論研究

#### 5-1. 論文

---

山田雄三「文通するモダニストたち—1980年代の核兵器・核エネルギー問題をめぐって」言語文化共同研究プロジェクト「ポストコロニアル・フォーメーションズ」『ポストコロニアル・フォーメーションズ』8, 大阪大学言語文化研究科, pp. 37-41, 2013/5

森祐司, 山田雄三, 小口一郎(共著)「『実践英語 e-learning』一試行(錯誤)の2年間、そして今後の展望」大阪大学サイバーメディア・センター『大阪大学サイバーメディア・フォーラム』13, 大阪大学サイバーメディア・センター, pp. 63-65, 2012/9

Yamada, Yuzo, "Far West after Industrialization: Gwyn Thomas and Ishimure Michiko" Raymond Williams Kenkyu-kai *Raymond Williams Kenkyu Special Issue: Proceedings (Fiction as Criticism/ Criticism as a Whole Way of Life): Raymond Williams in Transit II*, (Raymond Williams Kenkyu-kai), Special issue, pp. 23-38, 2012/7

#### 5-2. 著書

---

山田雄三『ニューレフトと呼ばれたモダニストたち—英語圏モダニズムの政治と文学』松柏社, 269p., 2013/6

山田雄三, 安達まみ, 中野春夫他(共著)『シェイクスピアと演劇文化—日本シェイクスピア協会創立50周年記念論集』研究社, pp. 100-118, 2012/8

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

山田雄三(書評)「Lois Potter, *The Life of William Shakespeare: A Critical Biography*」『関西シェイクスピア研究会会報』34, 関西シェイクスピア研究会, p. 7, 2013/4

山田雄三(書評)「大貫隆史・河野真太郎・川端康雄共編『文化と社会を読むキーワード辞典』」『週刊読書人』3015, 週刊読書人, p. 7, 2013/11

山田雄三(対談)「我々は歴史の中に生きている—『ニューレフトと呼ばれたモダニストたち』(松柏社)をめぐって」(共著)『図書新聞』3126, 図書新聞社, pp. 1-2, 2013/4



山田雄三他(討議)「「モダニズムはいつだったのか—山田雄三著『ニューレフトと呼ばれたモダニストたち』討議」(共著)『レイモンド・ウィリアムズ研究』(レイモンド・ウィリアムズ研究会), 4, レイモンド・ウィリアムズ研究会, pp. 57-114, 2013/4

#### 5-4. 口頭発表

Yamada, Yuzo, (パネリスト) “*Commentary for Sons and Friends: Emyr Humphreys and the Novels of Growth in the 1950s*” (Shintaro Kono)”, Raymond Williams in Transit IV: Culture as a Whole Complex/ (Re)Action to Industrialism and Laissez-Faire, Raymond Williams Kenkyukai, 日本女子大学, 2014/3

#### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

山田雄三, 森祐司, 小口一郎 大阪大学共通教育賞(2011年度後期), 大阪大学共通教育機構, 2012/5

#### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2010年度～2013年度、基盤研究(C) 一般、代表者:山田雄三

課題番号:22520240

研究題目:カルチュラル・スタディーズと呼ばれたモダニズム

研究経費: 2012年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2013年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

1960年代から1970年代に継承されたモダニズム政治学の諸相を明らかにすることを目的としている。それが1930年代の南ウエールズに起きたソーシャリズムをかなりの程度、継承していることを示そうとしている。

#### 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部機関誌『関西英文学研究』編集委員会・編集委員, 2012年4月～2014年3月

### 6. ポール・ハーヴィ 外国人教師

1961年生。1980年9月、Oriental College, Oxford University 入学。1986年6月 Oriental College, Oxford University 卒業退学(MA, MPhil 取得)。1986年10月、京都大学教養部招聘研究員(1年間)。1988年4月、大阪大学言語文化学部講師。1990年4月、カナダ商工会議所専務理事(1年間)。1991年4月、大阪大学言語文化学部講師。1999年10月、大阪大学文学部・大阪大学大学院文学研究科外国人教師に着任し現在に至る。専攻:シェイクスピア/イギリスルネッサンス/英文学。

#### 6-1. 論文

なし

#### 6-2. 著書

HARVEY, A. S. Paul, *Hagios Paulos Book Two*, 山口書店, 293p., poetry on the theme of Saint Paul focusing on the Letter to the Romans, 2013/11

HARVEY, A. S. Paul, *Monday Songs 5*, pdf, 83p., pdf of English Songs for teaching poetry, Folk Pop Literary Musical Sacred Songs, 2013/9

HARVEY, A. S. Paul, *Great China 3*, Yamaguchi Shoten, 165p., translations and adaptations of ancient Chinese poetry and

philosophy, 2013/7

HARVEY, A. S. Paul, *Saint Mary 365 Book Two*, Yamaguchi Shoten, 214p. , Calendar of poems on the theme of Saint Mary on a variety of topics, religious poetry, 2013/7

HARVEY, A. S. Paul, *Songs 365*, Yamaguchi Shoten, 400p. , 2013/2

HARVEY, A. S. Paul, *Monday Songs 4*, pdf, 70p. , pdf of English Songs for teaching poetry, Folk Pop Literary Musical Sacred Songs, 2013/1

HARVEY, A. S. Paul, *Hagios Paulos*, Yamaguchi Shoten, 218p. , 2012/12

HARVEY, A. S. Paul, *Pashsongs*, Yamaguchi Shoten, 176p. , 2012/11

HARVEY, A. S. Paul, *Great China 2*, Yamaguchi Shoten, 154p. , 2012/9

HARVEY, A. S. Paul, *Suffsongs*, Yamaguchi Shoten, 93p. , 2012/9

HARVEY, A. S. Paul, *Kongzi 136 (Confucius)*, Yamaguchi Shoten, 147p. , 2012/4

HARVEY, A. S. Paul, *Saint Mary 365*, Yamaguchi Shoten, 185p. , 2012/4

### 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 6-4. 口頭発表

---

なし

### 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

ポール・ハーヴェイ 大阪大学共通教育賞(2008年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

### 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 7. 好井 千代 助教

1959年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。1987年大阪大学文学部助手。専攻:アメリカ文学。

### 7-1. 論文

---

なし

### 7-2. 著書

---

なし

### 7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

**7-4. 口頭発表**

---

なし

**7-5. 受賞歴(年度を限定しない)**

---

好井千代 第一回福原賞, 福原記念英米文学研究助成基金, 1993/2

**7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)**

---

なし

**7-7. その他の外部資金の受け入れ状況**

---

なし

**7-8. 外部役員等の引き受け状況**

---

なし

# 2-17 ドイツ文学

## I. 現在の組織

### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 1 准教授 1 特任講師 1 助教 1

教授：三谷 研爾

准教授：吉田耕太郎

特任講師：テレーザ・シュペヒト

助教：赤尾 光春

### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
6	3	1	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	2	4	2	0
2013	2	1	2	0
計	4	5	4	0

## II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

本専門分野は、テキストの精密な読解という文学研究の基本姿勢を堅持しつつ、国内外の新しい研究状況をにらんで、中東欧を対象とした文化史的なアプローチによる教育プログラムを提供する。また、卒業論文・修士論文・博士論文の作成プロセスを重視し、課題発見から論文執筆までの工程をできるかぎり丁寧にフォローする、所属の学生全員参加の演習 *Forschungskolloquium* を開講するとともに、オフィスアワーを利用した個別指導を充実させる。

ドイツ語の実際の運用能力の涵養にあたっては、ネイティブ・スピーカー教員による授業を提供するとともに、現教員では十分にカバーできない研究テーマや研究方法に関して、学外非常勤講師の来講を得て、学生の知的関心の拡大に努める。

## 2. 研究

教員は、個人研究の維持発展に努めるとともに、プロジェクト研究や共同研究に積極的に参加して、コンスタントに成果発表をおこない、またレベルの高い学術専門誌などに論文を公刊する。同じく大学院学生も、プロジェクト研究や共同研究に参加して研究交流と成果発表に努めるとともに、積極的に留学や海外調査をおこなう。これらの活動により、従来の研究の枠組に拘束されない、新たなテーマ設定やアプローチの開拓に取り組む。

## 3. 社会連携

教員は、本専門分野修了者を主体として組織された大阪大学ドイツ文学会をはじめ、関係する学会・研究会などにおいて各自の研究活動の公開に努めるとともにその運営に積極的に参画し、また本専門分野にかかわる公共団体あるいは NGO などにたいして、積極的な専門知識の提供をおこなう。また、一般読者をも想定した著書・翻訳書の刊行に努め、研究成果の社会還元を図る。

# Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

学部においては、大半の学生にとってドイツ語が初修外国語であることを考慮し、グレードの異なる演習を開講、また講義においては本分野にかかわる基礎的な知識および研究方法論を習得させるとともに、新しい研究動向の紹介にも努めた。シュペヒト特任講師は、実践的なドイツ語運用力の向上につとめた。2013 年度より、赤尾光春助教がスタッフに加わり、ユダヤ文化史に関連する授業を担当している。大学院では、より高度な内容の文献演習を開設するとともに、個別の論文指導をおこなった。また、研究室所属の学生全員が参加する演習 *Forschungskolloquium* を開講し、プレゼンテーションとディスカッションを重ねることで知識と問題意識の共有化を図った。学外からは、赤尾光春（2012 年度）と阪井葉子（2012 年度、2013 年度）を講師として招き、多彩かつ充実した授業を提供した。

## 2. 研究

三谷教授はグローバル COE プログラム「コンフリクトの人文学」（2011 年度で終了）および科研費基盤研究(C)「ボヘミア文学史・民俗記述におけるローカリズムの位相」の交付を受けて研究活動を展開し、その成果を著書ならびに論文として発表した。吉田准教授は、科研費基盤研究(C)「18 世紀ドイツの印刷メディアとしての児童文学の成立」の交付を新たに受けて、研究活動をおこなった。またシュペヒト特任講師も、科研費基盤研究(C)「ドイツ語圏におけるクルド移民文学の現状」の交付を受けて研究活動、とりわけトルコでのフィールドワークを実施した。大学院博士後期課程学生は、それぞれ博士論文の完成を目指して、口頭発表と論文発表を重ねた。

## 3. 社会連携

三谷教授と吉田准教授は、日本独文学会、日本 18 世紀学会、日本ゲーテ協会、大阪大学ドイツ文学会などの学術団体、また関西チェコ/スロバキア協会などの国際文化交流 NGO の運営に役員として積極的に参画し、研究成果の社会への発信・還元を図った。

# Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

授業をとおしてできるだけバラエティに富んだ、幅広いトピックについて知見を提供したことで、新しい意欲的なテーマに取り組む卒業論文や修士論文が作成されるなど、所期の教育目標はおおむね達成された。*Forschungskolloquium* の開講は、学生のあいだで問題意識や研究方法の共有だけでなく、プレゼンテーション技術の向上という点で、効果を挙げ

ている。論文作成の工程管理についても、全ての学生に共通の問題として指導をおこなった。

大学院博士後期課程修了者の研究者としての就職状況の悪化を背景に、同前期課程学生の進路は多様化しつつあり、それに対応して教育プログラムを漸進的に改編するという状況が続いている。結果として、前期課程では恒常的に入学者を確保できているが、後期課程への進学者の確保とそのキャリア形成について、今後さらなる工夫と努力が欠かせないと考える。

## 2. 研究

三谷教授、吉田准教授、シュペヒト特任講師は、それぞれ研究代表者として科研費を獲得するとともに、学内外のプロジェクト研究や共同研究にも参画し、積極的な研究活動を展開して論文を発表した。シュペヒト特任講師は、2013年度には、ドイツからトルコ生まれのカバレティストを招き、公演ならびに討論会を主催した。また2013年度に着任した赤尾光春助教は、研究会の主催や研究論文の発表など研究活動をすすめている。大学院学生は、学会発表や論文投稿・公開を着実に重ねるとともに、学内外の各種の資金援助制度・交換留学制度を活用して、海外での研究(短期調査を含む)を展開、また日本学術振興会特別研究員にも採用された(1件)。今後とも、国内外のさらにレベルの高い学術誌への投稿・執筆が望まれる。

## 3. 社会連携

阪神地区を代表するドイツ語・ドイツ文学研究の拠点として、本専門分野に期待されている学会や研究会等の運営支援はけっして小さなものではなく、そうした責務に関して従来と変わらない水準を維持することができた。また、研究成果の社会への還元については、著書・翻訳書の出版のみならず、市民向けの講座・講演などをとおして、目標レベルが達成されたといえる。

# V. 基本情報(2012年度～2013年度)

## 1. 博士学位授与

### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	0	0	0
2013	0	0	0
計	0	0	0

### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
2013	0(0)	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)

計	0(0)	3(3)	0(0)	0(0)	0(0)	3(3)
---	------	------	------	------	------	------

括弧内は査読付き論文数。

## 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	1	0	0	0	1
2013	0	4	0	0	0	4
計	0	5	0	0	0	5

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

【2012年度】

〔博士前期〕

島田淳子「失われた「黄金時代」を求めて——ライネロヴァー『あるプラハ人の夢のカフェ』における言語選択」、『待兼山論叢（文学篇）』46号，大阪大学文学会，pp.77-93, 2012/12（査読有）

【2013年度】

〔博士後期〕

奥山裕介「境界人の詩学としての『あれか=これか』——セーアン・キェルケゴールのユラン旅行と1840年代コペンハーゲンにおける遊歩者像の形成」、『独文学報』29号，大阪大学ドイツ文学会，pp.27-55, 2013/11（査読あり）

奥山裕介「ヘアマン・バング『化粧漆喰』におけるシュレースヴィヒ戦争の記憶——1880年代コペンハーゲンの娯楽スペクタクル文化と北欧地域像の関係——」、『比較文化研究』102号，比較文化学会，pp. 13-29, 2013/6（査読あり）

### (2)口頭発表

【2012年度】

〔博士後期〕

奥山裕介「19世紀コペンハーゲンの娯楽スペクタクル文化と北欧地域像の関係——ヘアマン・バング『化粧漆喰』におけるティヴォリ遊園をめぐって」、『日本比較文化学会関西支部・関東支部合同例会，同志社大学，2012/12/8

【2013年度】

〔博士後期〕

奥山裕介「内なる「異境」の発見——19世紀デンマーク文学・芸術におけるユラン半島ヒース文化の美的表象」、『第35回日本比較文化学会全国大会，同志社大学，2013/6/8

奥山裕介「周縁人の詩学としての『あれか・これか』——セーアン・キェルケゴールのユラン半島旅行と周縁ヨーロッパ都市コペンハーゲンにおける観察者の自己成型」、『第14回キェルケゴール協会学術大会，大谷大学，2013/7/7

奥山裕介「不滅の物語」を求めて——デンマーク文学における「教養」の脱領域化とユダヤ文化の関係，神戸・ユダヤ文化研究会，2013/8/24

別府陽子「トーマス・ブッデンブロークの『ショーペンハウアー体験』——『ブッデンブローク家の人々』における『悲劇の誕生』受容——」、『日本ショーペンハウアー協会第26回全国大会，立正大学，2013/11/30

### (3)その他(書評・翻訳など)

なし

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

奥山裕介、第2回世界文学会研究奨励賞受賞、世界文学会、2012年度

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)

2013年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部:0名 大学院:5名 (計5名)

2013年度 学部:1名 大学院:3名 (計4名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2012年度:0名 2013年度:1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名  
その他 1名

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2012年度:0名 2013年度:0名

### 9. 刊行物

2012年度 『独文学報』28号

2013年度 『独文学報』29号

### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

大阪大学ドイツ文学会総会・研究発表会 2012年9月

大阪大学ドイツ文学会総会・研究発表会 2013年11月

### 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

院生研究発表会 2012年6月、7月、10月

院生研究発表会 2013年6月、7月、10月

ムッシン・オムルジャ氏の公演ならびに討論会 2013年7月

### 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)



## 1. 三谷 研爾 教授

1961 年生。1987 年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、大阪大学)。大阪府立大学助手、講師、大阪大学准教授をへて 2008 年 4 月から現職。専攻:ドイツ、オーストリア文学および文化研究。

### 1-1. 論文

---

なし

### 1-2. 著書

---

三谷研爾, 『境界としてのテキスト カフカ・物語・言説』鳥影社, 253p, 2014/3

### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

三谷研爾(書評)「大津留厚、水野博子、河野淳、岩崎周一(編)『ハプスブルク史研究入門 歴史のラビリンスへの招待』, 『ドイツ文学論攷』(阪神ドイツ文学会), 55, 阪神ドイツ文学会, pp. 78-80, 2014/3

三谷研爾(書評)「阿部賢一『複数形のプラハ』, 『オーストリア文学』(日本オーストリア文学会), 30, 日本オーストリア文学会, pp. 42-44, 2014/3

三谷研爾(書評)「平田達治著『放浪のユダヤ人作家ヨーゼフ・ロート』, 『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 29, 大阪大学ドイツ文学会, pp. 99-103, 2013/11

三谷研爾(辞書項目執筆)「項目名:「カフカ」「ムージル」「ブレヒト」「異化」, 『現代社会学事典』弘文堂, 2012/12

三谷研爾, 三谷研爾(解説)「グスタフ・ヤノーホ『カフカとの対話』みすず書房, pp. 353-368, 2012/11

### 1-4. 口頭発表

---

Mitani, Kenji, “Literaturforschung als moderne Wissenschaft im Meiji-Japan”, Institut für Japanologie der Universität Heidelberg, Universität Heidelberg, 2013/7

三谷研爾, 「阪神間モダニズム:ドイツ文化の受容と拡散」, Institut für Japanologie der Universität Heidelberg, Universität Heidelberg, 2013/7

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2011 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:三谷研爾

課題番号:23520379

研究題目:ボヘミア文学史・民俗誌記述におけるローカリズムの位相

研究経費: 2012 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

2013 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

本研究課題は、中欧の典型的な多言語・多文化地域だったボヘミアを対象とし、ナショナリズム対立がきわめて深刻化した 1890 年代～両大戦間期に、ドイツ系知識人によって蓄積された、この地域の文学史・民俗誌的な学術情報のディスクリブル分析をおこなう。それによって、彼らがボヘミア周縁地域の文化伝統をいかに理解・表象していたかを検証するとともに、ナショナリズムに並行・拮抗するローカリズムの思考特性を明らかにし、ナショナルなものとローカルなものが相関する知の位相に光を当てる。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本独文学会・学会賞審査委員, 2013年6月～現在に至る

関西チェコ/スロバキア協会・会長, 2009年4月～現在に至る

大阪大学ドイツ文学会・会長, 2008年1月～現在に至る

## 2. 吉田 耕太郎 准教授

1970年生まれ。東京外国語大学外国語学部(ドイツ語学科)卒。2007年、東京外国語大学地域文化研究科博士後期課程単位修得退学。学術修士(東京外国語大学)。京都外国語大学、立命館大学、京都大学人文科学研究所等での非常勤講師を経て、2009年4月より現職。専攻:ドイツ文化史・思想史。

### 2-1. 論文

---

吉田耕太郎「化粧室の子どもたち」、『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 28, pp. 61-83, 2012/11

### 2-2. 著書

---

なし

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

吉田耕太郎(共訳)(Guenther G. Bauer, Mozart - Glueck, Spiel und Leidenschaft, Bad Honnef, 2004.)「ギュンター・G・パウアー『ギャンブラー・モーツァルト』春秋社, pp. 1-437, 2013/7

### 2-4. 口頭発表

---

吉田耕太郎「都市と郊外 旅行記のひとつのトポスをめぐって」, 西欧近代における旅と風景のディスコース, 文学研究科共同研究, 北海学園大学, 2014/3

吉田耕太郎「田舎の誕生—18世紀ドイツの文化都市の形成とその余波をたどる」, 文化都市形成のダイナミズム—ブレスラウ、ドレスデン、ライプツィヒから考える, 京都大学白眉センター・京都大学人文科学研究所, 京都大学人文科学研究所, 2014/3

吉田耕太郎「狂気—イタリア旅行のひとつのトポスをめぐって」, 大阪大学文学研究科共同研究「グランドツアー」, 大阪大学文学研究科, 北海学園大学, 2013/3

吉田耕太郎「管理空間としてのユートピア—理想郷における平等と性愛」懐徳堂秋季講座, (財)懐徳堂記念会, 大阪大学中之島センター, 2012/11

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2012年度～2017年度、基盤研究(C) 一般、代表者:吉田耕太郎

課題番号:24520352

研究題目:18世紀ドイツの印刷メディアとしての児童文学の成立—『子どもの友』を例に

研究経費:2012年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2013年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

18世紀ドイツにおける児童文学というジャンルの成立を、子どもの読書環境、教育環境という点から跡付ける研究

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本独文学会・企画委員, 2011年6月～現在に至る

ゲーテ協会・関西支部理事, 2011年6月～現在に至る

## 3. テレーザ・シュペヒト 特任講師

Geboren 1979. 1989 - 1998 Schulbildung und Abitur am König-Wilhelm-Gymnasium Höxter; 1999 - 2005 Studium des Internationalen Informationsmanagements an der Universität Hildesheim (Schwerpunkt: Angewandte Sprachwissenschaft und Literatur); 2007 - 2010 Mitarbeiterin am Lehrstuhl für Neuere deutsche Literatur und Literaturtheorie von Prof. Dr. Dieter Burdorf an der Universität Leipzig; 2011 Promotion zum Thema "Transkultureller Humor in der türkisch-deutschen Literatur der Postmigration" 専攻: ドイツ文学。

### 3-1. 論文

---

SPECHT, Theresa, "Komische Aspekte in Erwin Einzingers Gedichtband", 『独文学報』28号, 大阪大学ドイツ文学会, pp. 7-20, 2012/11

### 3-2. 著書

---

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 3-4. 口頭発表

---

SPECHT, Theresa, "Leseindrücke zum Grünen Anker", オーストリア現代文学ゼミナール, オーストリア現代文学ゼミナール組織委員, 野沢温泉, 2013/11

SPECHT, Theresa, "Transcultural Humour in Contemporary Turkish-German Literature", Workshop: „Shifting Paradigms? How the Humanities and Social Sciences Approach Cultural and Social Changes in the Age of Globalisation“, ヘキサゴン大学コンソーシアム, 大阪大学, 2013/5

SPECHT, Theresa, "Kurdische Exilliteratur im deutschsprachigen Kontext", 2013年度春季研究発表会, 日本独文学会, 東京外国語大学, 2013/5

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2012年度～2014年度、基盤研究(C) 一般、代表者: テレーザ・シュペヒト

課題番号: 24520354

研究題目: ドイツ語圏におけるクルド移民文学の現状

研究経費: 2012年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円  
2013年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

As research on Kurdish literature in exile is still very scarce, the purpose of my investigation is, first, to provide a basic overview of the topics, positioning and literary traditions these texts deal with.

The second aim is to contribute to the temporal and regional extension of investigation of literature in exile, and to disclose new perspectives in exile studies reflecting discussions of cultural transformation in the last decades.

亡命クルド人文学についての研究は非常に限られているので、私の研究の目的は、第一に、この問題に関する基礎的な概観を用意するとともに、それらのテキストが扱う文学的伝統を位置づけることにある。第二の目的は、亡命文学の研究の時間的・空間的拡大に貢献するとともに、過去数十年間における文化的変容の議論を反映しつつ亡命研究の新たな展望を発見することである。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 4. 赤尾 光春 助教

1972年生。2005年総合研究大学院大学博士後期課程（地域文化学）修了、博士（学術）。北海道大学スラヴ研究センター研究員、大阪大学人間科学研究科特任助教を経て、2013年より現職。専攻：ユダヤ文化研究。

### 4-1. 論文

---

赤尾光春 「「シオン愛好家」としてのショレム・アレイヘム——シオニストとイディシストのはざままで」、『待兼山叢書』47, pp.19-38, 2013/12

赤尾光春 「シオニストのユートピア小説の系譜と「他者」の不在」、『CISMOR ユダヤ学会議』6, 同志社大学—神教学際研究センター, pp. 55-78, 2013/6

### 4-2. 著書

---

赤尾光春(共編著) 『ディアスポラの力を結集する——ギルロイ・ボヤールン兄弟・スピヴァック』松籟社, 352p. ,執筆 pp.8-14「はじめに」, pp101-153「ユダヤ・ディアスポラとブラック・アトランティックの出会い形」, pp. 237-306「シオンと格闘する者たち」および全体の編集, 2012/6

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

赤尾光春 「アーレントのシオニスト的遺産?」, 『図書新聞』, 3141号, p. 1, 2013/12

### 4-4. 口頭発表

---

赤尾光春 「シオニストとしてのショレム・アレイヘム」立命館大学国際言語文化研究所・2012年度研究所重点研究プロジェクト: カタストロフィと正義, 立命館大学国際言語文化研究所, 立命館大学 衣笠キャンパス 末川記念会館, 2013/3

Akao, Mitsuharu, "Russia as the Land of the 'Exile of Exiles': The Survival of Russian Jewry in the Geotheological Imagination of Chabad-Lubavitch Hasidism", Religion and Jewish Identity in Contemporary Russia, Slavic Reserch Center, Hokkaido University / Russian and Eurasian Studies Center, St Antony's College, Oxford University, St Antony's College, Oxford University, 2013/2

Akao, Mitsuharu, "Russia as the Land of the 'Exile of Exiles': Commemoration of the Survival of Judaism in Soviet-Russia in the

Geo-Theology of Chabad-Lubavitch Hasidism”, The 44th Annual Conference of the Association for Jewish Studies, the Association for Jewish Studies, Chicago, Sheraton Hotel, 2012/12

赤尾光春 「イスラエル建国以前のヘブライ文学におけるユートピア的想像力」Annual Conference on Jewish Studies: “The Revival of Hebrew Culture in the Context of Modern Judaism and in Relation to Japan”, The CISMOR(同志社大学一神教学際センター), 同志社大学, 2012/10

**4-5. 受賞歴**(年度を限定しない)

---

なし

**4-6. 科学研究費補助金の獲得状況**(研究代表者となったもの)

---

なし

**4-7. その他の外部資金の受け入れ状況**

---

なし

**4-8. 外部役員等の引き受け状況**

---

なし

# 2-18 フランス文学

## I. 現在の組織

### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 1 准教授 1 外国人教師 1 助教 0

教授：和田 章男

准教授：山上 浩嗣

外国人教師：アニエス・ディソン

### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
8	3	6	0	1	6	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	1	1	0	0
2013	0	2	1	0
計	1	3	1	0

## II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

(大学院)

- ・フランス文学作品の高度な読解力および分析力を養うとともに、フランス語による論文作成力を身につける。
- ・修士論文・博士論文作成演習を開講し、学生による研究発表をもとに論文作成の指導を行う。
- ・学会、研究会での口頭発表、論文投稿を支援し、特に研究成果を海外に発信すべく、フランス語による執筆を指導する。

(学部)

- ・フランス文学の概説の講義などを通じて基礎知識を吸収するとともに、講読、作文、会話など応用力を養う。
- ・卒業論文作成に向けて、研究発表、個人面談など段階的に指導を行う。
- ・交換留学生制度を積極的に活用するよう支援し、国際的感覚を学ばせる。

(共通)

- ・フランスより学者、作家、詩人等を招聘し、日仏学術交流を通して、国際的視野を獲得するとともに、実作者との直接的交流により文学研究へのさらなる興味を持たせる。
- ・研究会、卒論中間発表などには大学院生、学部生ともに参加し、質疑応答、討論を通して、研究のテーマ設定、分析法を学べるようにする。

## 2. 研究

- ・教員、大学院生ともに研究会、学会等で積極的に口頭発表、論文執筆に努める。またフランス語による執筆を推進する。
- ・学術誌『ガリア』を刊行する。これまで同様、フランス語による執筆を推進し、国内のみでなく、国外へも発送し、研究成果をより広く知らせよう努力する。
- ・大阪大学フランス語フランス文学会研究会を年 2 回開催し、研究成果の発表の場とするとともに、討論を通して研究を促進する。
- ・日仏の学術交流を積極的に推進し、国際的レベルの研究を促進する。
- ・フランス文学研究室のホームページおよび「ウェブ・ガリア」を充実させ、研究成果をより広く公開する。

## 3. 社会連携

- ・朝日カルチャーセンター大阪教室で講座「パリ 歴史風景を探る」を担当し、一般市民を対象としてフランスの文学、芸術、文化を紹介する。
- ・放送大学テレビ番組「フランス語入門 1」担当の主任講師を務め、フランス語・フランス文化の一般への普及に貢献する。

# Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

- ・講義・演習では、中世から現代にかけての幅広い文学テキストを教材としながら、基礎知識および作品分析方法の習得をめざした教育を行った。
- ・卒業論文作成のために、卒論ガイダンス、個人面談、中間発表と段階を追った指導を行った。2012 年度は 1 本の卒業論文が提出され、優れた内容の論文となった。
- ・大学院生の研究指導においては、各セメスターに 1 回の研究成果の発表を行い、修士論文・博士論文および学会発表を目標とした教育を実施した。2012 年度の博士前期課程修了者 1 名は、博士後期課程には進学せず、奈良県の公立中学校の教員に採用された。2013 年度博士前期課程修了者 2 名は、博士後期課程に進学し、研究を継続している。
- ・2012 年度には学部生 3 名が、2013 年度には学部生 2 名が、それぞれ大阪日仏センター＝アリアンス・フランセーズの暗唱大会に参加。フランス語実践能力研鑽の良い機会となった（2012 年度も 2013 年度も、参加者は全員本選に進んだ）。
- ・2012 年度には、女優のヴァンダ・ベネス氏と作家・詩人のクリスチャン・ブリジャン氏によるフランス語朗読劇、詩人アンヌ・ポルチュガル氏の講演会、詩人関口涼子氏の講演会、パスカル没後 350 年記念シンポジウムを開催した。
- ・2013 年度には、パリ第十大学教授のドミニック・ヴィアール氏を招いて講演会を開催した。

## 2. 研究

- ・2011 年度より継続して、博士後期課程学生の 1 名が、フランスの大学に留学中である。
- ・2012 年度、日本フランス語フランス文学会の関西支部会誌に博士後期課程学生 1 名の論考が掲載された。
- ・2013 年度、日本フランス語フランス文学会の全国大会にて、博士後期課程学生の 1 名が発表した。
- ・2013 年度より、博士後期課程学生の 1 名が、学術振興会特別研究員に採用された。

- ・2013年度より、博士後期課程学生の1名が、フランスの大学に留学中である。
- ・2012年度は、大阪大学フランス語フランス文学会として9月と3月に研究会を開催した。会誌『ガリア』52号を「原亨吉名誉教授追悼号」として刊行、6本の学術論文（うち4本はフランス語で）および、原亨吉先生を偲ぶエッセー19本を収めた。
- ・2013年度は、大阪大学フランス語フランス文学会として9月と3月に研究会を開催した。会誌『ガリア』53号を発刊、8本の学術論文（うち2本はフランス語で）を収めた。
- ・『ガリア』所収論文は発刊の1年後に「ウェブ・ガリア」に掲載されるが、サイトへのアクセス数も順調に伸びている。

### 3. 社会連携

- ・教員1名が朝日カルチャーセンター大阪教室で講座「パリ 歴史風景を探る」を担当し、2週間に1回約20名の市民受講生を対象にして、フランス文学、芸術、文化を紹介した。
- ・教員1名が放送大学客員准教授としてテレビ講座「フランス語入門Ⅰ」を担当した。

## IV. 自己点検・自己評価(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

卒業論文・修士論文はいずれも優秀な論文であり、段階を踏まえた教育・指導の成果であると思われる。2013年度の修士課程修了生1名が文学研究科賞を受賞したことは特筆に値する。

この2年間に5人の学者、詩人、小説家の講演会や朗読劇を開催し、日仏交流を推進するとともに、学生たちから活発な質問が出されたことは、フランス語による発言能力の向上として高く評価できる。実作者との交流は文学研究を行う者にとって大きな刺激となっている。

### 2. 研究

教員・大学院生はともに活発に学会発表を行った。研究成果を積極的に公表するという点で目標は達成できたと思われる。

博士後期課程の学生1名が日本学術振興会特別研究員（DC2）に採用された。

博士後期課程の学生1名が「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」の補助金を得てフランスで資料調査を行った。

### 3. 社会連携

教員の1名が朝日カルチャーセンターおよびその他の市民向けの講座で、フランス文学、芸術、文化を紹介し、別の1名が放送大学客員准教授として2012年開講のテレビ講座「フランス語入門Ⅰ」を担当することにより、社会連携の目標も達成している。また研究室のホームページおよび「ウェブ・ガリア」のアクセス数は着実に伸びており、研究成果の公開という面においても成果を挙げている。

## V. 基本情報(2012年度～2013年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	0	1	1
2013	0	0	0



計	0	1	1
---	---	---	---

## 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

### 【論文博士】

金崎春幸 「フローベール作品の生成と構造」 2012/12

主査：和田章男 副査：森岡裕一、柏木加代子、山上浩嗣

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	4(3)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	4(3)
2013	6(5)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	6(5)
計	10(8)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	10(8)

括弧内は査読付き論文数。

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	0	6	0	1	7
2013	0	2	3	0	0	5
計	0	2	9	0	1	12

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (1)論文

##### 【2012年度】

〔博士後期〕

青木佑介 「マルグリット・デュラスの対話—映画的的手法と集団の表象」『西洋文学研究』（大谷大学西洋文学研究会），32，pp.17-45，2012/6

青木佑介 「マルグリット・デュラスの『音』と『境界』 —『モデラート・カンタービレ』を中心に—」，『待兼山論叢』文学編，46，pp.95-111，2012/12

太田晋介 «L'otage et sa représentation : une critique pongienne émanant des circonstances d'après-guerre», *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会)，52，pp. 61-80，2013/3

黒川彩子 «L'effet de rire dans *Le rois s'amuse*», *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会)，52，pp. 31-40，2013/3

##### 【2013年度】

〔博士前期〕

川上紘史『パンセ』における邪欲の現世への影響，*GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会)，53，pp. 1-10，2014/3

松川みゆう「ルソーにおける立法者モーセ」，*GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会)，53，pp. 11-20，2014/3

安達孝信「ユイスマンスの芸術批評と小説創造—『現代芸術』から『さかしま』へ—」，*GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会)，53，pp. 31-40，2014/3

〔博士後期〕

太田晋介「Le logos et sa fabulation : Francis Ponge pendant son moment critique」, *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 53, pp. 51-60, 2014/3

青木佑介「*Hiroshima mon amour*の生成研究—「一度きり」または「唯一の」物語を巡って—」, *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 53, pp. 71-80, 2014/3

山本健二「ランボーのカリカチュア的技法—科学用語の使用を中心に—」, 『待兼山論叢』文学編, 47, pp.121-133, 2013/12

## (2)口頭発表

【2012年度】

〔学部生〕

安達孝信「ユイスマンスの芸術観の変遷—『近代芸術』を中心に—」 関西マラルメ研究会, 京都大学文学部, 2013/3/28

〔博士前期〕

川上紘史「ブレーズ・パスカルにおける盲目」 関西学生フランス文学研究会, 大阪大学文学部, 2012/8/31

川上紘史「パスカルにおける神の概念」, パスカル没後 350 年シンポジウム, 大阪大学文学部, 2013/3/23

〔博士後期〕

青木佑介「*Hiroshima mon amour*の時間に関する考察」 大谷大学西洋文学研究会, 大谷大学, 2012/7/21

太田晋介「詩人とその栄光—フランシス・ポンジュの「蝸牛」と「蜘蛛」詩篇をめぐって」 関西学生フランス文学研究会, 大阪大学文学部, 2012/8/31

太田晋介「フランシス・ポンジュの詩法における戦後の美術批評活動の影響について—生成研究の視点から—」 OVC プログラム平成 24 年度横断的研究視察・個人リサーチ報告会, 大阪大学文学部, 2012/11/2

太田晋介「全てが同じ時に読みとられうる」—静物画を観るポンジュ, 関西マラルメ研究会, 京都大学文学部, 2013/3/28

【2013年度】

〔博士前期〕

松川みゆう「ルソーにおける立法者モーゼ」 関西学生フランス文学研究会, 京都大学, 2013/8/31

松川みゆう「ルソーにおける立法者像」, 大阪大学フランス語フランス文学会第 74 回研究会, 2014/3/8

川上紘史「パスカル『パンセ』における盲目の意味」, 大阪大学フランス語フランス文学会第 74 回研究会, 2014/3/8

川上紘史「Pascal et Jansénius : Une étude comparative de la valeur d'une notion d'aveuglement」, Réunion d'étude de Philosophie et de Littérature de l'Université d'Osaka, 2014/3/29

〔博士後期〕

太田晋介, 「フランシス・ポンジュと静物画 : 『静物画とシャルダンについて』を中心に」, 日本フランス語フランス文学会, 国際基督教大学, 2013/6/1

## (3)その他(書評・翻訳など)

なし

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2013年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部：0名 大学院：1名（計1名）

2013年度 学部：1名 大学院：2名（計3名）

## 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

足立和彦、博士後期課程単位修得退学、大谷大学、助教、2013/4

廣田大地 博士後期課程単位修得退学、神戸大学、専任講師、2013/4

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2012年度：1名 2013年度：0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名  
その他 0名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2012年度：0名 2013年度：0名

## 9. 刊行物

2012年度 *GALLIA*(機関誌：大阪大学フランス語フランス文学会) n°52

2013年度 *GALLIA*(機関誌：大阪大学フランス語フランス文学会) n°53

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

Réunion d'étude de Philosophie et de Littérature de l'Université d'Osaka(第一回)(国内研究会)	2014年3月29日
大阪大学フランス語フランス文学会(第74回)(国内学会)	2014年3月8日
大阪大学フランス語フランス文学会(第73回)(国内学会)	2013年9月28日
パスカル研究会(第151回)(国内学会)	2013年11月16日
Dominique Viart 講演会 «L'Histoire dans le roman contemporain»	2013年12月2日
パスカル没後350年記念シンポジウム	2013年3月23・24日
大阪大学フランス語フランス文学会(第72回)(国内学会)	2013年3月2日
関口涼子講演会「固有名詞を味わう」	2012年11月12日
Anne Portugal 講演会 « Poésie, image, photographie »	2012年10月15日
大阪大学フランス語フランス文学会(第71回)(国内学会)	2012年9月29日
関西学生フランス文学研究会(第一回)(国内研究会)	2012年8月31日
Vanda Benes, Christian Prigent フランス詩朗読劇 « La Belle Parleuse » 公演	2012年5月14日
大阪大学フランス語フランス文学会(第70回)(国内学会)	2012年3月10日

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 和田章男 教授

1954年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。パリ第四大学第三課程博士(文学)。大阪大学文学部助手、言語文化部講師、助教授を経て、1993年大阪大学文学部助教授、1999年文学研究科助教授、2004年より現職。専攻:フランス文学。

#### 1-1. 論文

Wada, Akio, "Les écrivains réels dans les Cahiers de Proust", *Gallia*, (大阪大学フランス語フランス文学会), 53, pp. 41-50, 2014/3

和田章男「プルーストと「ゴンクール日記」」『ステラ』(九州大学フランス語フランス文学研究会), 31, pp. 87-102, 2012/12

Wada, Akio, "Proust et Balzac : la méthode de travail des deux écrivains", *Balzac et allii, génétiques croisées. Histoire d'éditions*, (Groupe international des études balzacienes), Université Paris-Diderot, pp. 1-7, 2012/11

Wada, Akio, "Proust face à l'histoire de la critique sur Flaubert", *Proust face à l'héritage du XIX<sup>e</sup> siècle, Tradition et métamorphose*, Presses Sorbonne Nouvelle, pp. 51-59, 2012/6

#### 1-2. 著書

Wada, Akio, *La création romanesque de Proust : la genèse de "Combray"*, Honoré Champion, 204p., 2012/9

Wada, Akio(共著), *Proust face à l'héritage du XIX<sup>e</sup> siècle, Tradition et métamorphose*, Presses Sorbonne Nouvelle, pp. 51-59, 2012/6

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

和田章男「フランス文学散歩の楽しみ」『理(コトワリ)』(関西学院大学出版会), 35, pp. 2-3, 2013/6

Wada, Akio, "Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, traduction japonaise de Kazuyoshi Yoshikawa", *Bulletin Marcel Proust*, (Société des Amis de Marcel Proust et des Amis de Combray), 62, pp. 113-114, 2012/12

#### 1-4. 口頭発表

和田章男「プルーストとショパン」, 関西プルースト研究会, 京都大学, 2014/3

Wada, Akio, (招待講演) "Illiers dans la genèse de "Combray": la photographie et la mémoire", :1913: la transgression des genres, パリ第3大学、プルースト友の会, Salle des Fêtes (Illiers-Combray), 2013/11

和田章男「『スワン家のほうへ』生成研究の現状と課題—「コンプレー」を中心に—」, 日本プルースト研究会, 国際基督教大学, 2013/6

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2010年度～2012年度、基盤研究(C) 一般、代表者:和田章男

課題番号:22520312

研究題目:草稿資料に基づくプルーストと同時代文学事象の研究

研究経費:2012年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究課題は、作家の文学観の形成および小説創造に同時代の文学事象がどのように影響したかを明らかにすることを目的と

する。主なる観点は二つある。ひとつは、作家の草稿帳 75 冊に見られる同時代の作家・作品への言及を網羅的に抽出し、新聞・雑誌等の文芸ジャーナリズムや出版状況の調査によって、ブルーストの言及や引用の源泉を実証的に跡付けるとともに、作品生成への関与の有様を考察する。二つ目は、過去の作家に対するブルーストの見方を、受容史・批評史の中に位置づけ、同時代批評との関係を明瞭にすることである。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

大阪大学フランス語フランス文学会・会長, 2008 年 4 月～現在に至る

日本ブルースト研究会・幹事, 2006 年 4 月～現在に至る

関西ブルースト研究会・世話役, 2005 年 9 月～現在に至る

## 2. 山上 浩嗣 准教授

1966 年生。京都大学文学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位修得退学。パリ・ソルボンヌ大学にて文学博士号取得(2010 年)。東京大学助手、関西学院大学専任講師、同准教授、同教授を経て、2010 年より現職。放送大学客員准教授も務める(2005 年～)。専攻: フランス文学・思想。

### 2-1. 論文

---

山上浩嗣 「ラ・ボエシ『自発的隷従論』における「友愛」の諸相」『待兼山論叢』47 号 文学篇, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-18, 2013/12

山上浩嗣 「パスカルと三つの無知」『大阪大学大学院文学研究科紀要』53, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 67-104, 2013/3

### 2-2. 著書

---

春木仁孝, 井元秀剛, 山上浩嗣他(共著)『新・フランス語文法(新訂版)』朝日出版社, pp. 79-82, 88-91, 2013/1

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

山上浩嗣, 浜名優美(共訳)(翻訳)『『叢書アナーレ 1929-2010—歴史の対象と方法』エマニュエル・ル＝ロワ＝ラデュリ、アンドレ・ビュルギエール監修、第 III 巻「1958-1968」アンドレ・ビュルギエール編 浜名優美(監訳)藤原書店, pp. 35-78, 2013/12

山上浩嗣, 西谷修(訳)(翻訳)「エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ『自発的隷従論』」ちくま学芸文庫, pp. 5-223, 2013/11

### 2-4. 口頭発表

---

山上浩嗣 「モンテーニュの旅と「気をそらすこと」」「西欧近代における旅と風景のディスコース」研究会, 平成 25 年度大阪大学文学研究科共同研究, 北海学園大学, 2014/3

山上浩嗣 「フランス語・フランス文学超入門」平成 25 年度三丘(さんきゅう)セミナー, 大阪府立三国丘高校, 大阪府立三国丘高校, 2013/12

山上浩嗣 「パスカルと此岸の生—「病」の象徴的価値と身体の両義性」第 150 回例会, パスカル研究会, 国際基督教大学, 2013/6

山上浩嗣 (パネリスト)「パスカルと繊細の精神」第 72 回大阪大学フランス語フランス文学会研究会: 原亨吉先生追悼シンポジウム「パスカルと 17 世紀の科学・哲学」, 大阪大学フランス語フランス文学会, 大阪大学豊中キャンパス, 2013/3

山上浩嗣 「モンテーニュのパイデアー—書物と旅による「判断」の形成」平成 24 年度大阪大学文学研究科共同研究「ヨーロッパ文化としてのグランドツアー」研究会, 北海学園大学, 2013/3

山上浩嗣 「パスカルと三つの無知」パスカル没後 350 年記念シンポジウム, 山上浩嗣・武田裕紀共同開催, 大阪大学豊中キャンパス, 2013/3

山上浩嗣 「パスカル『パンセ』の人間論—「中間」者としての人間、「神あり」への賭け」平成 24 年度第2回大阪大学研究活動等実地研修(文学研究科), 大阪大学豊中キャンパス, 2012/12

山上浩嗣 「野蛮なる楽園—フランス近代文学にみる文明の自己批判」第 124 回懐徳堂秋季講座:ヨーロッパ文学入門—ユートピアとディストピア, 懐徳堂記念会, 大阪大学中之島センター, 2012/11

山上浩嗣 「パスカルにおける人間の尊厳」第 48 回ラブレール・モンテーニュ研究フォーラム, ラブレール・モンテーニュ研究フォーラム, 神戸大学六甲キャンパス, 2012/10

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

山上浩嗣 平成 25 年度「科研費」審査委員表彰者, 日本学術振興会, 2013/10

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2011 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:山上浩嗣

課題番号:23520377

研究題目:パスカルの人間学およびその起源と影響の研究

研究経費: 2012 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

2013 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

本研究課題「パスカルの人間学およびその起源と影響の研究」は、1)パスカルの人間学を、草稿資料をも用いて、彼自身のテキストに即して総合的に観察すること、2)パスカルの人間学の「起源」の局面を、とりわけモンテーニュからの影響を通じて検討すること、3)パスカルの人間学の「影響」の諸相を、同時代およびやや後年の著者たちの思想との比較を通じて考察すること、を主たる目的とする。これら三つの方向性は、近年飛躍的に発展してきたパスカルおよびポール＝ロワイヤル研究の動向に対応している。伝統的な研究主題に対して新たな知見と方法を適用することで、多角的にパスカル文献学の進展を図るものである。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

## 3. アニエス・ディソン 外国人教師

1951 年生。ブザンソン大学、パリ第四大学にて言語学、文学を学ぶ。近代文学の大学教授資格、記号学・言語学博士。パリの言語学研究所(BELC)に勤めた後、イタリア、モロッコ、日本で教鞭をとる。1982 年より現職。専攻:フランス文学・語学。

### 3-1. 論文

DISSON, Agnès 他, “Anne Portugal : Pour un comité de salut public” *Cahier critique de Poésie*, CCP 26, CIPM, pp. 241-241, 2013/12

DISSON, Agnès 他, “Ryoko Sekiguchi : sur L’ astringent et Manger Fantôme” *Cahier critique de Poésie*, 25, CIPM Marseille, pp. 96-97, 2013/3

DISSON, Agnès 他, “Ryoko Sekiguchi, trois essais : Dix quartiers de Shinjuku / Écrire double / Ce n’est pas un hasard” *Cahier critique de Poésie*, 24, CIPM Marseille, pp. 112-113, 2012/10

DISSON, Agnès 他, “Jacques Roubaud, poète et prosateur : jeux de langage et création lexicale” *Bulletin d’Études de Linguistique Française*, 46, Japanese Society of French Linguistics, pp. 107–110, 2012/6

### 3-2. 著書

---

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 3-4. 口頭発表

---

DISSON, Agnès, “Ryoko Sekiguchi : spéculations fantômes”, (国際学会) “Money/ L’argent” 20th/21st Century French and Francophone Studies International Colloquium, New York University, CUNY, Columbia University, USA, 2014/3

DISSON, Agnès, “Jacques Roubaud, Tokyo infra-ordinaire”, Séminaire (研究会) « Quotidien et littérature », Bard College, NY, USA, 2014/3

DISSON, Agnès, “Jacques Roubaud, Tokyo infra-ordinaire : transferts et transports”, Colloque international (国際学会) “La réception du Japon en France après 1945”, Maison Franco-Japonaise de Tokyo, 2013/9

DISSON, Agnès, “Ecocritique et poésie contemporaine”, Colloque international (国際学会) “Les possibles de la création contemporaine”, University Laval, Quebec City, Canada, 2013/9

DISSON, Agnès, “Le cinéma autrement : Pierre Alféri”, Séminaire (研究会での講演) Cinéma français et québécois, University Mc Gill, Montréal, Canada, 2013/9

DISSON, Agnès, (招待講演) “Anne Portugal : la poésie française au féminin aujourd’hui”, Séminaire “Figures de femmes dans la littérature française”, San Francisco University, USA, 2012/4

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

DISSON, Agnès, Chevalier de l’Ordre des Arts et des Lettres, Le Ministre de la Culture et de la Communication, 2003/12

DISSON, Agnès, Chevalier dans l’Ordre des Palmes Académiques, Le Ministre de l’Éducation Nationale, 2001/2

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2011年度～2013年度、基盤研究(C) 一般、代表者:アニエス・ディソン

課題番号:23520378

研究題目:フランス現代詩研究—総合的および分析的見地から

研究経費: 2012年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2013年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

In-depth analysis of historical context, formal and technical procedures of Contemporary French poetry today, in order to draw an extensive and comprehensive diagram of its recent developments in the 20th and 21st century (influences, filiations, common ground and divergences) and to attempt a scientific definition of the new notion of “Extrême contemporain” (extreme contemporary literature).

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし



# 2-19 英語学

## I. 現在の組織

### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 3 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：岡田 禎之、加藤 正治、神山 孝夫

### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
54	2	4	0	1	2	0	0

\*うち留学生 2 名、社会人学生 1 名

\*\* 英米文学・英語学専修として

### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	21	1	1	2
2013	20	1	1	1
計	41	2	2	3

\* 英米文学・英語学専修として

## II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

大学院に関しての目標は、(1)意味論、機能文法、語用論、認知言語学、言語変化論、生成文法、比較言語学などに関わる研究論文を読み、内容理解と高度な分析方法を教育・指導すること、(2)修士論文作成演習と博士論文作成演習の授業を開講し、年数回の研究発表と本の書評を課し、これらの論文が書けるよう教育・指導すること、(3)国内学会あるいは国際学会での口頭発表と論文投稿のための教育・指導を行うことである。学部に関しては、(1)意味論、機能文法、語用論、認知言語学、音声学、言語変化論、生成文法、比較言語学などの領域において、基本的な知識が習得できるよう教育・指導すること、(2)卒業論文作成演習の授業を開講し、年間予定をたてそれに沿って卒業論文が書けるように教育・指導すること、(3)中学校、高等学校の英語教員や英語に関わる職業に携わる学部生もいるので、英語の基礎学力を高めるよう教育・指導をすることである。また学部生と大学院生の学問的な連携体制を形成するために、研究室や授業形態等

に工夫を行うことや、研究室の活動報告書を兼ねている HLC News を編纂してホームページに掲載することで、卒業論文と修士論文の題目と要旨、授業計画、院生の研究活動、就職状況等の情報を学部卒業生、大学院修了生に連絡することも目標としている。

## 2. 研究

教員は、各自の予定・計画に合わせて論文を発表し、科学研究費の研究を年次計画に沿って行い、研究成果をあげるよう努める。大学院生には、国内学会あるいは国際学会においてできるだけ多くの口頭発表と論文発表等ができるように指導する。学術雑誌 *Osaka University Papers in English Linguistics* を刊行し、国内外の関係者・大学等に合わせて約 400 部を発送する。大学院生の研究を促進するために、「待兼山ことばの会」と「阪大英文学会」を開催する。

## 3. 社会連携

研究成果に関する執筆依頼等には積極的に協力することとし、教室の HP を充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とする。また、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることとし、学会活動などにも積極的に参加し、研究成果の普及を図るよう努力する。

# Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

学部では、学校文法、機能文法、意味論、語用論、音声学、生成文法、歴史言語学関係の講義と演習のほか卒業論文作成演習を行い、一定の成果がえられた。大学院では、理論言語学、機能文法理論、意味論、語用論関係の講義と演習、論文書評の演習、博士論文作成演習、修士論文作成演習などを行なった。また、HLC News を編纂し、英語学研究室や院生の研究活動、就職状況等を同窓生の方々に報告した。

## 2. 研究

教員は各自の計画に合わせて論文を発表し、科学研究費の研究も各自の年次計画に沿って実行している。大学院学生の研究活動は、論文が 11 本、口頭発表が 10 本と活発に行われた。*OUPEL* についても予定通り刊行し、国内外の研究者、大学図書館などに送付した。また、「待兼山ことばの会」と「阪大英文学会」も当初の予定通りに開催した。

## 3. 社会連携

教室の HP は逐次更新し、常に最新の情報が提供できるように努めている。また教員は、日本英語学会、日本英文学会（関西支部）などの各種学会の理事、評議員、編集委員、運営委員、事務局長等の職務を遂行しており、学会活動にも積極的に対応している。

# Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。

## 2. 研究

教員・大学院生の研究活動は活発に行われ、研究会や学会の開催も予定通り行われた。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

### 3. 社会連携

前記の通り、教員は、日本英語学会、日本英文学会などの各種学会の理事、評議員、編集委員、運営委員、事務局長等の職務を遂行しており、学会活動にも積極的に対応している。また、教室のHPでは、教員・大学院生の研究活動や講演会開催等の最新情報を逐次更新しており、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

## V. 基本情報(2012年度～2013年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	2	1	3
2013	1	0	1
計	3	1	4

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

本田隆裕 “The Syntax of Passive Constructions” 2013/3

主査：大庭幸男 副査：岡田禎之、加藤正治、神山孝夫

吉本真由美 “The Syntax and Semantics of Clausal Comparative Constructions” 2013/3

主査：大庭幸男 副査：岡田禎之、加藤正治、神山孝夫

黒川尚彦 “Oppositeness and Relevance” 2013/9

主査：岡田禎之 副査：加藤正治、神山孝夫

##### 【論文博士】

大森文子 “Metaphor of Emotions in English: With Special Reference to the Natural World and the Animal Kingdom as Their Source Domains” 2012/9

主査：大庭幸男 副査：岡田禎之、河上誓作

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	2(1)	2(0)	1(1)	0(0)	0(0)	5(2)
2013	0(0)	0(0)	6(2)	0(0)	0(0)	6(2)
計	2(1)	2(0)	7(3)	0(0)	0(0)	11(4)

括弧内は査読付き論文数。

#### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	3	1	0	0	4
2013	1	5	0	0	0	6
計	1	8	1	0	0	10

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

【2012年度】

〔博士前期〕

亀山里津子 「否定疑問文に対する応答のゆれ」『英語語法文法研究』（英語語法文法学会), pp. 177-182, 2012/12/25

〔博士後期〕

Shimamura, Koji and Lyn Tieu “When We Can and Can’t See the Double: Revisiting Focus Doubling in ASL,”  
*University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 19.1, pp. 189-196, 2013/1

Tanaka, Hideharu “Feature Inheritance to Inner Aspect,” *KLS* 32 (関西言語学会), pp. 169-180, 2012/6/2

Tanaka, Hideharu “Categorial Duality of Particles,” *Osaka Literary Review* 51 (OLR 同人会), pp. 1-18, 2013/1/31

Yamaguchi, Maiko “An Argument for the Movement Analysis of SHIKA-NPI Licensing in Japanese,”  
*Machikaneyama Ronso* 46, The Literary Society Osaka University, pp. 53-75, 2012/12/25

【2013年度】

〔博士前期〕

Kikuchi, Yuki “A Study of Japanese Onomatopoeia in Literature Works: Through the Works of Niimi Nankichi,”  
*Essays & Studies* 59, The English Literary Society of Kyoto Women’s University, pp. 1-13, 2014/3/14

Yamaguchi, Masashi “A Syntactic Approach to the Resultative Construction,” *Osaka Literary Review* 52, Osaka  
University Graduate School of Letters English Literature and Linguistics, pp. 53-69, 2014/1/31

〔博士後期〕

Hirakawa, Kimiko “Semantic Explications for the Sentence-final Particles Bai and Tai of the Japanese Hakata  
Dialect,” *Osaka Literary Review* 52, Osaka University Graduate School of Letters English Literature and  
Linguistics, pp. 1-15, 2014/1/31

Shimamura, Koji “On Long-Distance Movement of Subject in Japanese,” *MIT Working Papers in Linguistics* 66,  
*Proceedings of Formal Approach to Japanese Linguistics* 6, pp. 179-190, 2013/4

Tanaka, Hideharu “Internal Merge to the Phase Edge in Pseudo-gapping,” *Osaka University Papers in English  
Linguistics* 16, pp.187-206, 2013/9/12

Tsuakamoto, Ami “A Comparison of the Speech Patterns between Japanese and English Speakers in Discussions,”  
*Machikaneyama Ronso (Literature)* XLVII, Graduate School of Letters Osaka University, pp. 135-144, 2013/12/25

### (2)口頭発表

【2012年度】

〔博士前期〕

亀山里津子 「「ナイカ」と「ナイノカ」—日本語否定疑問文におけるノダの語用論的機能」, 日本語用論学会第 15 回大  
会 大阪学院大学, 2012/12/2

〔博士後期〕

Shimamura, Koji “An Argument against Argument Ellipsis,” ECO5, University of Connecticut, 2013/3/30

田中秀治 「焦点助詞の複数共起とその統語論的帰結」, 関西言語学会第 37 回大会, 甲南女子大学, 2012/6/2

吉田亜美 「討論における日本語話者と英語話者のスピーチアクトの違い」,社会言語科学会第 30 回大会, 東北大学, 2012/9/2

【2013 年度】

〔博士前期〕

水谷 謙太 「量化の副詞と個体レベル述語」日本言語学会第 147 回大会, 神戸市外国語大学, 2013/11/23

〔博士後期〕

嶋村 貢志 “Reconsidering Scrambling in terms of Agree,” 関西言語学会第 38 回大会 (ワークショップ代表者として), 同志社大学, 2013/6/9

田中 秀治 “Distribution of Adjuncts in Japanese: Some Consequences for Scrambling,” 関西言語学会第 38 回大会, 同志社大学, 2013/6/9

Tanaka, Hideharu “The Derivation of Soo-su: Some Implications for the Architecture of Japanese VP,” The 23rd Japanese/Korean Linguistics Conference, Massachusetts Institute of Technology, 2013/10/13

塚本亜美 “A Comparison of the Speech Acts between Japanese and English Speakers in Discussions,” 社会言語科学会第 33 回研究大会, 神田外国語大学, 2014/3/15

山口麻衣子 “An Individually Catered Scalar approach to the Personal Variation in Perceiving the Binding Relation in Japanese,” 関西言語学会第 38 回大会, 同志社大学, 2013/6/8

### (3)その他(書評・翻訳など)

なし

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 1 名 (計 1 名)

2013 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 1 名 (計 1 名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012 年度 学部 : 0 名 大学院 : 1 名 (計 1 名)

2013 年度 学部 : 2 名 大学院 : 1 名 (計 3 名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2012 年度～2013 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

塚本亜美 博士後期課程 新居浜工業高等専門学校 講師 2014/4

吉本真由美 博士後期課程 実践女子大学文学部 助教 2014/4

吉本圭祐 博士前期課程 関西外国語大学 講師 2014/4

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012 年度～2013 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 6 名

2012 年度 : 4 名 2013 年度 : 2 名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 6名  
その他 0名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2012年度：0名 2013年度：0名

## 9. 刊行物

2012年度 OLR (*Osaka Literary Review*) No. 51 2012/12

2013年度 OUPEL (*Osaka University Papers in English Linguistics*) Vol. 16 2013/9

OLR (*Osaka Literary Review*) No. 52 2013/12

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

岡田禎之 日本英語学会 事務局長 2013年9月～現在に至る

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会 45回大会	2012年10月20日
阪大英文学会 46回大会	2013年10月19日
第90回待兼山ことばの会	2013年7月5日
第91回待兼山ことばの会	2013年12月20日

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 岡田 禎之 教授

1965年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程(英語学専攻)中途退学。文学博士(大阪大学、2001年)。第37回市河賞(2003年)。大阪大学助手、岡山大学講師、金沢大学助教授、神戸市外国語大学助教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2010年4月より現職。専攻:英語学。

#### 1-1. 論文

岡田禎之「名詞の語彙概念拡張に認められる非対称性」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 47-文化動態論篇, 大阪大学文学研究科, pp. 41-62, 2013/12

Okada, Sadayuki, "(Ir)regularity of Conceptual Expansions in Adjunct Nominals," Sadayuki Okada(ed.) *Osaka University Papers in English Linguistics*, 16, 大阪大学文学研究科英語学研究室, pp. 161-185, 2013/9

#### 1-2. 著書

Okada, Sadayuki(ed.), *Osaka University Papers in English Linguistics*, 16, 大阪大学文学研究科英語学研究室, 228p., 2013/9

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 1-4. 口頭発表

岡田禎之「日英語の名詞概念拡張と項・付加詞の非対称性」大阪市大英文学会, 大阪市立大学, 2013/11

岡田禎之「語彙概念拡張に関する一考察」蜚池認知言語学研究会, 大阪大学, 2013/9

岡田禎之「名詞の語彙概念拡張について」福岡言語学会 2012 年 12 月例会, 福岡言語学会, 九州大学, 2012/12

岡田禎之「名詞の語彙概念拡張と項・付加詞の非対称性」日本英文学会関西支部大会シンポジウム, 日本英文学会関西支部, 京都大学, 2012/12

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

岡田禎之 10 papers selection, Annual Report of Osaka University Academic Achievement 2009-2010, Osaka University, 2010/12

岡田禎之 第 37 回市河賞, 財団法人語学教育研究所, 2003/10

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2010 年度～2012 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田禎之

課題番号:22520496

研究題目:語彙概念拡張の認可条件

研究経費:2012 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

名詞句の概念拡張がどのような条件下で認可されるのかを考察することを目的とした研究である。当初は、比較表現に認められる通言語的な差異を通して、この問題にアプローチしていたが、そのほかの場合として、因果関係的な文脈における例外的な概念拡張事例の検証や、N like N 型の定型表現などの事例を検証することで、より広く一般的な認可条件を特定していくことを目指した。

1-6-2. 2013 年度～2017 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田禎之

課題番号:25370551

研究題目:語彙概念拡張の非対称性と意味変化

研究経費:2013 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

名詞の語彙概念拡張に認められる、項位置と付加詞位置における解釈の非対称性を、コーパスデータや、内省判断に基づいて検証していくと同時に、語彙概念拡張が項位置に置いて創発する可能性が高いことを、具体的な事例からの歴史的な検証を少しずつ積み重ねていくことで検証できるか、検討する。この語彙概念拡張は、メトニミーに限らず、メタファー解釈に関しても同様の傾向が認められるかどうか検討していきたいと考えている。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本英語学会・事務局長, 2013 年 9 月～現在に至る

日本英文学会関西支部・理事, 2013 年 4 月～現在に至る

日本英語学会・評議員, 2013 年 4 月～現在に至る

日本語用論学会・外部査読委員, 2012 年 9 月～2012 年 10 月

日本英文学会関西支部・編集委員, 2012 年 4 月～2014 年 3 月

日本英語学会・編集委員, 2011 年 10 月～2013 年 9 月

阪大英文学会・幹事, 2010 年 4 月～現在に至る

## 2. 加藤 正治 教授

1955年生。名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程修了(英語学講座)。文学修士(名古屋大学、1979)。名古屋大学助手、甲南女子大学講師、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:英語学。

### 2-1. 論文

---

加藤正治「vP-raising について — Biberauer & Roberts (2005/2006)に対する短評 —」中村未樹『英米研究』(大阪大学 英米学会), 38, 大阪大学 英米学会, pp. 21-30, 2014/3

### 2-2. 著書

---

なし

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 2-4. 口頭発表

---

加藤正治「古い時代の英語の文字について——古英語を中心に」サイエンスカフェ, 大阪大学総合学術博物館, 大阪大学, 2012/8

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本英文学会関西支部・編集委員, 2013年4月～現在に至る

## 3. 神山 孝夫 教授

1958年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:歴史言語学、音声学、ヨーロッパ文化史。

### 3-1. 論文

---

神山孝夫「堀井令以知著『言語文化の深層をたずねて』(書評)」日本歴史言語学会(編)『歴史言語学』(日本歴史言語学会), 2, 日本歴史言語学会, pp. 65-74, 2013/12

### 3-2. 著書

---

神山孝夫『ロシア語音声概説』研究社, 259p., 2012/7

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等



なし

#### 3-4. 口頭発表

---

なし

#### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

神山孝夫 大阪大学共通教育賞(2008 年前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

#### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

#### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本歴史言語学会・理事, 2011 年 12 月～現在に至る

大阪言語研究会・世話人, 2007 年 1 月～現在に至る

# 2-20 日本語学

## I. 現在の組織

### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 5 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：工藤真由美、青木 直子、石井 正彦、田野村忠温、渋谷 勝己

准教授：マシュー・バーデルスキー、高木 千恵

助教：中井 好男

### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
49	12	17	2	3	5	2	1

※うち留学生 18名、社会人学生 2名

### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	7	7	1	1
2013	8	5	0	2
計	15	12	1	3

## II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

1. 大学院、学部ともに、論文作成演習を開講するとともに、専門分野全体の中間発表会を開いて、分野内での議論の活性化をはかる。
2. 大学院については、各種学会で口頭発表を行ったり学術雑誌に論文を投稿したりするための個別指導を充実させる。
3. 学部については、日本語学や日本語教育学をめぐる基本的な知識や技能を幅広く習得できるよう、授業を組織する。あわせて、日本語や日本語教育をめぐるさまざまな言語的・社会的問題を自発的に発見し、的確に把握しつつ、初歩的な分析を行える能力を養成する。
4. また、大学院、学部ともに、フィールド調査やコーパスの作成、言語データの分析、教育実習等を取り入れた実践的

な課題追求型の演習科目を開講し、指導を行う。

5. 大学院生と学部生との共通演習を開講し、両者の学問的連携体制を維持する。

## 2. 研究

1. 1人平均で、教員は2本の研究論文を執筆し、博士後期学生は1本の研究論文の執筆と1件の口頭発表を行う。教員はまた、個人で行う研究のほか、外部の研究者や学生との、科学研究費その他による共同研究プロジェクトに従事する。
2. 博士前期学生は、今後、学会での口頭発表・研究論文の執筆を行うことを視野に入れた研究を推進する。
3. 研究室全体で研究雑誌『阪大日本語研究』を刊行し、日本語研究界に専門分野の研究成果を発信する。

## 3. 社会連携

1. フィールド調査、言語分析、教育実践研究等の結果を速やかにまとめ、資料を現地等に還元する。また印刷物やHPによって、一般に公開する。
2. 高校生等の自主研究や公開講演会に積極的に協力することなどを通して、研究成果を社会に還元することにつとめる。
3. 地域の外国人の日本語学習支援活動、各種日本語教育機関の企画などに、積極的に協力する。

# Ⅲ. 活動の概要(2012年度～2013年度)

## 1. 教育

設定した目標を達成するべく、活動を行った。具体的には、

1. 大学院、学部ともに、論文作成演習や専門分野全体の論文中間発表会をとおして、専門分野内での議論を活性化した。
2. 引き続き、学部開講科目について、配当年次を明示した資料をガイダンス時に配布する等により、科目間の有機的なつながりが学生の目に明らかになるように配慮した。
3. 大学院については、各種学会の口頭発表や査読雑誌への論文投稿にあたって、個別指導を行った。
4. 学部については、日本語学の基本的な知識や技能を幅広く習得できる講義を開講した。また、演習において、日本語や日本語教育をめぐるさまざまな言語的・社会的問題を自発的に発見し、初歩的な調査と分析を行ったり、参加型の授業で協働的学習を行う機会を提供した。
5. 大学院、学部ともに、フィールド調査やコーパスの作成、言語データの分析、日本語教育実習等を取り入れた実践的な課題追求型の演習科目を開講し、指導を行った。
6. 大学院生と学部生との共通演習を開講し、研究室内において調査・研究の手法等の教育が効果的に行われるようにした。

## 2. 研究

1. 教員、大学院生ともに、目標とした数の研究論文をほぼ執筆した。各教員はまた、科学研究費その他による共同研究プロジェクトに従事した。特に、2012年度は、日本学術振興会の「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」の資金を得て文学研究科が行なった、「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」により、複数の大学院生、招へい研究員、助教が海外の学会で発表したり、研究活動を行ったりした。また、卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」により、RAとして研究に従事した後期課程学生もいる。
2. 博士前期学生は、演習で研究成果の発表を行いつつ、学会での口頭発表・研究論文の執筆を行うことのトレーニングを重ねた。
3. 『阪大日本語研究』を2年とも刊行し、研究成果を学界に発信した。

## 3. 社会連携

1. NPO 法人「翠曜塾」主催の公開講座や言語系学会連合主催の「ことばカフェ」等で公演を行い、研究成果を社会に

広めることにつとめた。

2. 地域の外国人の日本語学習支援活動、各種日本語教育機関の企画などに、積極的に協力した。具体的には、文化庁「生活者としての外国人のための日本語教育事業」への協力、中間支援団体「兵庫日本語ボランティアネットワーク」の相談役、NPO 法人「神戸定住外国人支援センター」主催の日本語ボランティア研修会の講師などをつとめた。
3. その他、学会の事務局や委員を積極的に引き受けた。

## IV. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

### 1. 教育

個人差はあるものの、演習等での活発な議論をとおして、比較的水準の高い博士論文、修士論文、卒業論文が提出されている。

また講義や低学年配当の演習をとおして、学生の基礎体力を築くことができている。

以上、所期の目標はおおむね達成できたと思われる。

### 2. 研究

目標はおおむね達成できたと思われる。

### 3. 社会連携

社会連携の目標についてもほぼ達成されたと思われる。

## V. 基本情報(2012 年度～2013 年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	1	0	1
2013	2	0	2
計	3	0	3

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

末吉朋美 「日本語学校で働く教師たちとのナラティブ的探究—教師の悩みからわかること—」 2013/3

主査：青木直子 副査：石井正彦、マシュー・バーデルスキー

脇坂真彩子「E タンデムにおける動機づけのメカニズム—日本語学習者とドイツ語学習者のケース・スタディー—」2014/3

主査：青木直子 副査：渋谷勝己、高木千恵

金妹伶「形態素の結合用法（語構成）と自立用法（句構成）」 2014/3

主査：石井正彦 副査：青木直子、渋谷勝己

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	0(0)	3(1)	4(4)	0(0)	4(0)	11(5)
2013	3(3)	2(0)	5(5)	0(0)	6(1)	16(9)
計	3(3)	5(1)	9(9)	0(0)	10(1)	27(14)

括弧内は査読付き論文数。

## 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	7	13	4	0	0	24
2013	8	9	5	0	0	22
計	15	22	9	0	0	46

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

【2012年度】

〔博士前期〕

白坂千里、カッターバーバラ、韓娥凜「高知県四万十市西土佐におけるスタイル切換え—フォリナー・トークの観点から—」『阪大社会言語学研究ノート』11, pp. 42-56, 2013/3

〔博士後期〕

野間純平「高知県四万十市西土佐方言における準体助詞」『阪大社会言語学研究ノート』11, pp. 5-14, 2013/3

野間純平「高知県四万十市西土佐方言における逆接表現」『阪大社会言語学研究ノート』11, pp. 15-27, 2013/3

野間純平「大阪方言におけるノダ相当表現—ノヤからネンへの変遷に注目して—」『阪大日本語研究』25, pp. 53-73, 2013/2

脇坂真彩子「E タンデムにおいてドイツ人日本語学習者の動機を変化させた要因」『阪大日本語研究』25, pp. 105-135, 2013/2

酒井雅史「滋賀県長浜市における待遇表現の記述—日本語諸方言の待遇表現記述にむけて—」『待兼山論叢 日本学篇』46, pp. 81-96, 2012/12

酒井雅史「高知県四万十市西土佐大宮の行為指示表現」『阪大社会言語学研究ノート』11, pp. 28-41, 2013/3

〔その他〕

末吉朋美「日本語教師のキャリア形成—日本の社会構造における性別役割—」『待兼山論叢 日本学篇』46, pp. 97-114, 2012/12

末吉朋美「教師の悩みはどこから来るのか?—日本語教師たちとのナラティブ探究を通して—」『阪大日本語研究』25, pp. 75-104, 2013/2

〔招へい研究員〕

朴秀娟「副詞『ちょっと』と『呑 (com)』についての一考察」『北研学刊』9, pp. 95-105, 2013/1

朴秀娟・森幸一・工藤真由美「沖縄系エスニックコミュニティにおける日本語と沖縄方言の継承意識—ブラジル及びボリビアの言語生活調査から—」『阪大日本語研究』25, pp. 1-29, 2013/2

【2013年度】

〔学部生〕

福居亜耶「京都府福知山市方言における命令表現」『阪大社会言語学研究ノート』12, pp. 51-70, 2014/3

〔博士後期〕

- 原田走一郎「福岡市若年層方言における 2 つのゴトの形態統語的違い」『阪大社会言語学研究ノート』12, pp. 14-23, 2014/3
- 原田走一郎「南琉球八重山黒島方言における形容詞のサブグループ—接辞 *ku* が続く形式に注目して—」『阪大日本語研究』26, pp. 71-85, 2014/2
- 野間純平「近畿方言におけるネン・テンの成立—昔話資料を手がかりに—」『阪大日本語研究』26, pp. 51-69, 2014/2
- 野間純平「大阪方言における準体助詞ン・ノ・ノン—ノンの分布を中心に—」『阪大社会言語学研究ノート』12, pp. 24-36, 2014/3
- 白坂千里「携帯メールの世代差—大阪中年層の携帯メールから—」『待兼山論叢 日本学篇』47, pp. 57-50, 2013/12
- Carter Barbara、白坂千里「高知県四万十市西土佐におけるジャ・ヤとその周辺」『阪大社会言語学研究ノート』12, pp. 1-13, 2014/3
- 山口悠紀子「補習授業校における漢字指導のケース・スタディー—漢字指導ストラテジーに注目して—」『日本学刊』16, pp. 57-74, 2013/6
- Lixian Ou “Learning Japanese beyond the classroom with internet resources: A case study of a Japanese major university student in Mainland China,” In M. Hobbs and K. Dofs (eds), *ILAC Selections 5th Independent Learning Association Conference 2012* (pp. 72-74), 2013/11
- 欧 麗賢「目標言語話者との E メールのやりとりを通じた教室外の日本語学習」『阪大日本語研究』26, pp. 113-137, 2014/2
- 全紫蓮「副詞「もう」の意味と機能—明治期と現代の比較研究—」『日語日文学研究』88, pp. 97-120, 2014/2
- 酒井雅史「兵庫県神戸市方言における条件言いさし形による行為指示表現」『阪大社会言語学研究ノート』12, pp. 37-50, 2014/3
- 酒井雅史「滋賀県長浜市方言における待遇表現形式の使い分け—面接調査による使い分けの意識から—」『阪大日本語研究』26, pp. 87-112, 2014/2
- 〔その他〕
- 青木直子・脇坂真彩子・小林浩明「日本語教育と芸術学のコラボレーション—大阪大学文学部における CLIL の試み」『第二言語としての日本語の習得研究』16, pp. 91-106, 2013/12
- 荻川恵理子「『日本語教育の現状と課題』の実践報告—日本語教育の諸相を知る・見る—」『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』34, pp. 55-60, 2014/3
- 〔招へい研究員〕
- 朴秀娟・森幸一・工藤真由美「沖縄系 2 世における言語生活史と日本語保持に関わる要因—ブラジルとボリビアの沖縄系移民社会の場合—」『阪大日本語研究』26, pp. 1-32, 2014/2

## (2) 口頭発表

【2012 年度】

〔学部生〕

- 笠松祐介「上富田方言における存在動詞とアスペクト形式の動態」日本語文法学会第 13 回大会, 名古屋大学, 2012/10/2
- 〔博士前期〕
- 欧麗賢 “Learning Japanese Beyond the Classroom with Internet Resources: A Case Study of a Japanese Major University Student in Mainland China” The 5th Independent Learning Association Conference 2012, Victoria University of Wellington (Wellington, New Zealand), 2012/8/31
- Yoko Sei “How women in a cross-linguistic marriage reconstruct and redefine their identities: Two case studies from the Japanese context” The 5th Independent Learning Association Conference 2012, Victoria University of Wellington (Wellington, New Zealand), 2012/8/31
- 欧麗賢「日本のドラマを利用した教室外の日本語学習のケース・スタディ: 文脈と学習者オートノミーの相互作用」第九回日本語教育・日本研究シンポジウム, 香港城市大学 (香港), 2012/11/24

- 青木直子、脇坂真彩子、欧麗賢「日本の大学キャンパスにおける自主的参加を基本としたタンデム学習プロジェクトの試み」第九回日本語教育・日本研究シンポジウム，香港城市大学（香港），2012/11/24
- 白坂千里「大阪中年層女性が使用する携帯メールのスタイル—話しことばと対照して—」第149回変異理論研究会，大阪大学，2013/1/26
- 白坂千里「大阪府中年層女性の携帯メールの特徴—話しことばと対照して—」第31回社会言語科学会研究大会，国立国語研究所・統計数理研究所，2013/3/16
- Carter Barbara Leanne “First Person Pronoun Use in Everyday Talk by Japanese Gay Men” The 22nd Japanese/Korean Linguistics Conference (2012)，国立国語研究所，2012/10/13  
〔博士後期〕
- 原田走一郎「南琉球八重山黒島方言における主題標識の二重使用の機能について」日本言語学会第145回大会，九州大学，2012/11/24
- 全紫蓮「副詞『もう』の意味と機能—明治期と現代の比較研究—」韓国日語日文学会2012年冬季国際学術大会，崇実大学（韓国），2012/12/15
- 野間純平「大阪方言におけるノダ相当表現『ノヤ』『ネヤ』『ネン』」日本方言研究会第94回研究発表会，日本方言研究会，千葉大学，2012/5/18
- 野間純平「近畿方言におけるネン・テンの成立過程について—昔話資料を手がかりに—」国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会 JLVC2013，国立国語研究所，2013/3/20
- 東条佳奈「助数詞・準助数詞・擬似助数詞—名詞と同形の助数詞をめぐって—」日本語学会2012年度春季大会，日本語学会，千葉大学，2012/5/20
- 青木直子、脇坂真彩子、欧麗賢「日本の大学キャンパスにおける自主的参加を基本としたタンデム学習プロジェクトの試み」第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム，香港城市大学（香港），2012/11/24
- Masako Wakisaka “How Tandem Learning Changes Attitude Towards Learning English: A Case Study of a Japanese Learner” The 5th Independent Learning Association Conference 2012，Victoria University of Wellington (Wellington, New Zealand)，2012/8/31
- Miki Kitazawa “Taking Control of One’s Own Learning of Japanese: A Case Study of a Korean Youth on Working Holiday Programme” The 5th Independent Learning Association Conference 2012，Victoria University of Wellington (Wellington, New Zealand)，2012/8/31
- 北澤美樹「韓国人ワーキング・ホリデー参加者の日本語習得—実践コミュニティにおける自己効力感と学び」2012世界日本語教育大会，名古屋大学，2012/8/19
- 酒井雅史「滋賀県長浜市における待遇表現—複数の待遇表現形式が使用される地域における運用—」日本方言研究会第94回研究発表会，千葉大学，2012/5/18
- 酒井雅史「ロールプレイ会話からみる敬語運用の地域差」国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会 JLVC2013，国立国語研究所，2013/3/20
- 大河内瞳「海外で教える日本人日本語教師が求めるアイデンティティとそれに影響を与える要因」2012年度日本語教育学会秋季大会，北海学園大学，2012/10/14  
〔その他〕
- 蓑川恵理子「商品名の命名メカニズム—『進化型』家電製品と『累加型』清涼飲料—」計量国語学会，名古屋大学，2012/9/29  
〔招へい研究員〕
- 範玉梅「第二言語で生きる一人の在日中国人女性の学び」第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム，香港城市大学（香港），2012/11/24
- Fan Yumei “A life story of a Chinese woman living in Japan: A trajectory of learning through living in a foreign culture and the acquisition of an L2 speaking self” The 5th Independent Learning Association Conference 2012，Victoria University of Wellington (Wellington, New Zealand)，2012/8/31

中井好男「協働学習から自律学習へ導く教師の役割についての一考察」2012 世界日本語教育大会, 名古屋大学, 2012/8/19  
Yoshio Nakai “How do learners change their attitude towards learning through collaborative learning? A report from a Japanese as a second language classroom” The 5th Independent Learning Association Conference 2012, Victoria University of Wellington (Wellington, New Zealand), 2012/8/31

【2013 年度】

〔博士後期〕

- 小田佐智子「自然習得者の談話にみられる確認要求表現 —関西在住の外国人配偶者を事例として—」第 25 回第二言語習得研究会全国大会, 広島大学, 2013/12/15
- 原田走一郎「南琉球八重山黒島方言における形態音韻的双方向母音同化について」日本方言研究会第 97 回研究発表会, 日本方言研究会, 静岡大学, 2013/10/25
- 原田走一郎 “On the property stem forming suffix in Kuroshima Ryukyuan” Japanese and Korean Linguistics 23, Massachusetts Institute of Technology(Cambridge, USA), 2013/10/13
- 野間純平「方言におけるノダ相当形式の文法化—大阪方言と加賀地方若年層方言を対照して—」日本語学会 2013 年度秋季大会, 静岡大学, 2013/10/27
- 野間純平「ノニ節内に現れるノダ相当形式—西土佐方言と甕島方言を例に—」日本語文法学会第 14 回大会, 早稲田大学, 2013/12/1
- 野間純平「方言におけるノダ相当形式の文法化—大阪方言と加賀方言を中心に—」麗澤大学言語研究センター主催研究会「名詞化とモダリティをめぐって」, 麗澤大学, 2014/1/12
- 白坂千里「携帯メールのこぼれにおける世代差—大阪中年層女性の携帯メールから—」Urban Language Seminar (都市言語国際セミナー) 11, 広島文化交流会館, 2013/8/19
- 白坂千里「関西若年層の携帯メールの話しこぼれ性・書きこぼれ性—ロールプレイ調査における電話とメールの対照から—」国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会 JLVC2014, 国立国語研究所, 2014/3/21
- 大河内瞳「タイで教える日本人日本語教師にとっての職場の意義」日本教師教育学会第 23 回研究大会, 佛教大学, 2013/9/16
- 大河内瞳「日本語学科というコミュニティでの日本人日本語教師の経験」タイ国日本語教育研究会第 26 回年次セミナー, タイ国日本語教育研究会, 国際交流基金バンコク日本文化センター, 2014/3/22
- 瀬尾匡輝, 米本和弘, 青山玲二郎, 山口悠希子「日本語学習の商品化—教師の文化紹介を通じた一考察—」2013 年度日本語教育学会春季大会, 立教大学, 2013/5/26
- 米本和弘・鬼頭夕佳・佐野香織・瀬尾匡輝, 山口悠紀子「多様化する日本語学習における教育目標・学習目的・評価を探る—余暇活動と娯楽としての外国語学習の観点から—」CAJLE2013, トロント大学, 2013/8/25
- 有森丈太郎・青山礼二郎・鬼頭夕佳・佐野香織・瀬尾匡輝・橋本拓郎・米本和弘・山口悠紀子「オンラインでの繋がりがもたらす教師たちの変容—教師の自分史を通して—」2013 年度日本語教育学会秋季大会, 関西外国語大学, 2013/10/13
- Naoko Aoki, Masako Wakisaka, Lixian Ou “Spoken tandem learning discourse: A case study of a Japanese learner of English” IATEFL Learner Autonomy Special Interest Group (LASIG) 2013, Leibniz Universität Hannover (Hannover, Deutschland), 2013/9/28
- 青木直子・脇坂真彩子・欧麗賢「タンデム学習のサポート・システムの構築」JALT2013 年次国際大会, 神戸国際会議場および国際展示場, 2013/10/25
- 欧麗賢「外国語環境における言語学習と学習者の個人成長との関係の探究」JALT 学習者ディベロプメント研究会, 学習院大学, 2013/11/24
- 酒井雅史「ロールプレイ会話における丁寧語使用と談話展開」「方言談話の地域差と世代差に関する研究」研究発表会, 関西大学, 2013/9/15
- 酒井雅史「待遇表現運用の実態にみるわきまへの動態—滋賀県長浜市方言の自然談話データから—」日本語学会 2013 年



度秋季大会, 静岡大学, 2013/10/27

酒井雅史「若年層の敬語運用の類型化の試み—ロールプレイ会話データを用いて—」国立国語研究所時空間変異研究系  
合同研究発表会 JLVC2014, 2014/3/20

[その他]

Naoko Aoki, Masako Wakisaka, Lixian Ou “Spoken tandem learning discourse: A case study of a Japanese learner of English” IATEFL Learner Autonomy Special Interest Group (LASIG) 2013, Leibniz Universität Hannover (Hannover, Deutschland), 2013/9/28

脇坂真彩子・欧麗賢・青木直子「タンデム学習のサポート・システムの構築」JALT2013 年次国際大会, 神戸国際会議場  
および国際展示場, 2013/10/25

[招へい研究員]

朴秀娟「バイリンガルはどのように形成されるのか—ブラジルとボリビアの沖縄系エスニックコミュニティにおける言語生活調査から—」社会言語科学会第 32 回大会, 信州大学, 2013/9/7

瀬井陽子、久野弓枝、範玉梅、青木直子「移住女性の文化資本としての言語」JALT2013 年次国際大会, 神戸国際会議場  
および国際展示場, 2013/10/26

### (3) その他(書評・翻訳など)

【2013 年度】

[博士後期]

野間純平「大阪府方言」『2009-2013 年度 科学研究費補助金 基盤研究(B)「日本語諸方言の文法を総合的に記述する『全国方言文法辞典』の作成とウェブ版の構築」(課題番号: 21320089・研究代表者: 日高水穂) 研究成果報告書 全国方言文法辞典資料集(2) 活用体系』 pp. 102-111, 2014/3

酒井雅史「リーグ戦式ロールプレイ会話: 場面 1「出欠確認談話」『国立国語研究所共同研究報告 13-04 方言談話の地域差と世代差に関する研究成果報告書』 pp. 69-83, 2014/3

酒井雅史「滋賀県長浜市方言」『2009-2013 年度 科学研究費補助金 基盤研究(B)「日本語諸方言の文法を総合的に記述する『全国方言文法辞典』の作成とウェブ版の構築」(課題番号: 21320089・研究代表者: 日高水穂) 研究成果報告書 全国方言文法辞典資料集(2) 活用体系』 pp. 82-89, 2014/3

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2013 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 1 名 (計 2 名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012 年度 学部 : 0 名 大学院 : 1 名 (計 1 名)

2013 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2012 年度～2013 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

朴 秀娟 招へい研究員、神戸大学留学生センター、講師、2013/10

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012 年度～2013 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2012 年度：1 名 2013 年度：0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名  
その他 0 名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 10 名

2012 年度：5 名 2013 年度：5 名

## 9. 刊行物

『阪大日本語研究』（機関誌・年 1 回）定期刊行物

1989 年度～現在に至る

『阪大社会言語学研究ノート』（論文集・年 1 回）逐次刊行物

1999 年度～現在に至る

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

【事務局の引き受け】

変異理論研究会（研究会）事務局

1989 年～現在に至る

[2012 年度の研究会開催状況]

第 147 回 2012 年 4 月 14 日 於 奈良大学

第 148 回 2012 年 5 月 19 日 於 千葉大学

第 149 回 2013 年 1 月 26 日 於 大阪大学

[2013 年度の研究会開催状況]

第 150 回 2013 年 5 月 11 日 於 奈良大学

第 151 回 2013 年 6 月 1 日 於 大阪大学

第 152 回 2013 年 10 月 26 日 於 静岡大学

第 153 回 2013 年 12 月 14 日 於 大阪府立大学

土曜ことばの会（研究会）事務局

1980 年～2012 年

日本方言研究会（研究会）事務局

2012 年～2013 年

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大日本語学研究会 2012年9月29日 於 大阪大学豊中キャンパス 待兼山会館 2 F 会議室

講演：高木 千恵先生（大阪大学）「同意要求を表す否定疑問文について—関西方言を中心に—」

マッシュー バーデルスキー先生（大阪大学）「家庭内外および保育所における言語社会化」

現場報告：別府俊之さん（97B）「飛び出してみた世界での物語（ストーリー）—クボタの農業機械事業の海外展開の紹介と中国駐在中の取り組み—」

阪大日本語学研究会 2013 年 9 月 14 日 於 大阪大学豊中キャンパス 待兼山会館 2 F 会議室

研究発表：全 紫蓮さん（D3）「現代日本語における副詞の意味・機能—感動詞的用法の派生を中心に—」

講演：李 吉鎔さん（05D、韓国 中央大学校）「現代韓国社会事情報告—対日意識と社会構造を中心に—」

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 工藤 眞由美 教授

1949年生。東京大学大学院人文科学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学)(大阪大学、1999年)。横浜国立大学教育学部講師、同助教授を経て、1998年4月より現職。専攻:現代日本語文法論、言語接触論。

#### 1-1. 論文

工藤眞由美 「動詞と日本語の多様性」日中言語研究と日本語教育編集委員会『日中言語研究と日本語教育』6, 好文出版, pp. 1-9, 2014/3

朴秀娟・森幸一・工藤眞由美(共著)「沖縄系2世における言語生活史と日本語保持に関わる要因」『阪大日本語研究』26, 文学研究科日本語学講座, pp. 1-32, 2014/3

工藤眞由美 「テンポラルな意味とモーダルな意味」日語学習と研究編集委員会『日語学習と研究』3-166, 対外経済貿易大学(北京), pp. 1-8, 2013/6

#### 1-2. 著書

工藤眞由美 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房, 674p., 2014/2

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 1-4. 口頭発表

工藤眞由美 (基調講演)「日本語教育研究のこれまでとこれから」中・日・韓日本言語文化研究国際フォーラム:グローバル化と言語教育研究, 大連大学, 2013/9

工藤眞由美 (招待講演)「現代日本語ムード・テンス・アスペクト論」日本語研究国際シンポジウム, 韓国外国語大学日本研究所・日本語文学会共同主催, 韓国外国語大学校, 2013/6

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2013年度～2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者:工藤眞由美

課題番号:25370518

研究題目:方言の統語構造に関する記述的研究

研究経費:2013年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 36,000円

研究の目的:

これまでの方言文法研究は、語形の調査研究が中心であり、統語構造(文構造)についてはほとんど手つかずであった。今後の方言文法研究の深化のためにも、統語構造研究は必要不可欠である。本研究は、方言における述語の構造的多様性と、主語や補語表示の単調さとの関係を実証的に明らかにすることを目的とするものである。

1-6-2. 2013年度～2013年度、研究成果公開促進費、代表者:工藤眞由美

課題番号:255073

研究題目:現代日本語ムード・テンス・アスペクト論

研究経費:2013年度 直接経費 1,800,000円

研究の目的:

本書は、標準語、東北から沖縄に至る諸方言、及びブラジル・ボリビアの日系移民社会における日本語のバリエーションを対象にして、述語の中核をなすムード・テンス、アスペクトを中心に、その多様なあり様を考察したものである。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本学術会議・連携会員, 2012年9月～現在に至る

大阪大学出版会・理事, 2011年10月～現在に至る

人間文化研究機構 国立国語研究所・運営委員, 2009年10月～現在に至る

日本語学会・評議員, 2005年5月～現在に至る

日本語学会・評議員, 1997年6月～現在に至る

## 2. 青木 直子 教授

1954年生。1983年、上智大学外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了。PhD(Trinity College Dublin, 2003)。産能短期大学助教授、静岡大学教育学部助教授、大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻:第二言語教育学。

### 2-1. 論文

---

青木直子, 脇坂真彩子, 小林浩明(共著)「日本語教育と芸術学のコラボレーションー大阪大学文学部における CLIL の試み」清水崇文、峯布由紀、小柳かおる(共編著)『第二言語としての日本語の習得研究』(第二言語習得研究会), 16, 凡人社, pp. 91-106, 2013/12

Aoki, Naoko, “Learner autonomy for personal autonomy” Dofs, K. & Hobbs, M. (eds.) *ILA Selections 2012*, (Independent Learning Association), Independent Learning Association, pp. 165-167, 2013/11

Course, S., Lamb, T., Aoki, Naoko et al., (共著), “Promoting teacher/learner autonomy and improving praxis” Barfield, A. & Alvarado, N. D. (eds.) *Autonomy in Language Learning: Stories of Practice*, (IATEFL), IATEFL, pp. 140-149, 2013/5

Aoki, Naoko, “The role of stories in teacher development” W. M. Chan, K. N. Chin, S. K. Bhatt & I. Walker (eds.) *Perspectives on individual characteristics and foreign language education*, De Gruyter Mouton, pp. 241-254, 2012/10

Aoki, Naoko, “Can-do Statements for advisors” C. Ludwig & J. Mynard (eds.) *Autonomy in language learning: Advising in action*, IATEFL, pp. 154-163, 2012/5

### 2-2. 著書

---

なし

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 2-4. 口頭発表

---

Aoki, Naoko, “Stories to take home”, 20th Anniversary Conference JALT Learner Development SIG, 全国語学教育学会学習者ディベロプメント研究部会, 学習院大学, 2013/11

青木直子「経験という権威:教師教育のツールとしてのタンデム学習」20th Anniversary Conference JALT Learner Development SIG, 全国語学教育学会学習者ディベロプメント研究部会, 学習院大学, 2013/11

瀬井陽子, 久野弓枝, 範玉梅, 青木直子「Language as cultural capital for female L2 users」全国語学教育学会年次国際大会, 全国語学教育学会, 神戸市国際会議場, 2013/10

脇坂真彩子, 欧麗賢, 青木直子「Developing a support system for tandem learning」全国語学教育学会年次国際大会, 全国語学教育学会, 神戸市国際会議場, 2013/10

Aoki, Naoko, “Spoken tandem learning discourse: A case study of a Japanese learner of English”, Learner autonomy in second language pedagogy and research – challenges and issues, Learner Autonomy SIG, International Association for Teaching English as a Foreign Language, University of Hanover, 2013/9

青木直子, 脇坂真彩子, 欧麗賢「日本の大学キャンパスにおける自主的参加を基本としたタンデム学習プロジェクトの試み」第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム, 香港日本語教育研究会, 香港城市大学, 2012/11

Aoki, Naoko, “Learner autonomy for personal autonomy: An alternative view informed by women’s experiences”, Independent Learning Association Conference 2012, Independent Learning Association, Victoria University of Wellington, 2012/9

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2013年度～2015年度、挑戦的萌芽研究、代表者:青木直子

課題番号:25580114

研究題目:タンデム学習を行う日本語学習者の学びの諸相に関する探索的研究

研究経費:2013年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

タンデム学習は、異なる言語を母語とする2人がパートナーとなり、互いの得意な言語を学び合うという学習方法である。本研究の目的は、タンデム学習を行う日本語学習者の学習活動の録音データを、言語コミュニケーション能力のどのような要素がどのように学ばれているのかという視点で、ヨーロッパ共通言語参照枠(以下 CEFR)の理論的枠組みに従って探索的に分析するケーススタディを行うことである。それによって、様々な利点があるとされているタンデム学習における学びの諸相をより具体的に明らかにし、タンデム学習研究を第二言語習得研究の文脈に結びつけることを目指す。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

International Association of Applied Linguistics Research Network for Learner autonomy・Convenor, 2011年11月～現在に至る  
“Innovation in Language Learning and Teaching” Routledge・Editorial Board Member, 2006年1月～現在に至る

## 3. 石井 正彦 教授

1958年生。東北大学文学部卒、東北大学大学院文学研究科修了。博士(文学)(東北大学)。国立国語研究所研究員、同室長、大阪大学准教授を経て、2009年4月より現職。専攻:現代日本語学。

### 3-1. 論文

---

石井正彦「“臨時一語”の研究と教育—文章とのかかわりを中心に—」『高知大学留学生教育』8, 高知大学国際・地域連携センタ

—国際連携部門, pp. 13-42, 2014/3

石井正彦 「マルチメディア・コーパスの作成と分析」『日本語学』32-14, 明治書院, pp. 148-161, 2013/11

石井正彦 「探索的データ解析による言語変化研究—蛇行箱型図によるS字カーブの発見—」相澤正夫(編)『現代日本語の動態研究』おうふう, pp. 129-150, 2013/10

石井正彦 「和語・漢語・外来語—基本語彙に見る攻防—」『日本語学』32-11, 明治書院, pp. 80-92, 2013/9

石井正彦 「臨時的な四字漢語の形成—文章論的な視点から—」野村雅昭(編)『現代日本漢語の探究』東京堂出版, pp. 146-166, 2013/7

石井正彦 「「不良債権処理」ができるまで—新聞にみる語彙化現象の動態—」『日本語学』31-14, 明治書院, pp. 50-61, 2012/9

### 3-2. 著書

---

石井正彦, 孫栄爽(共著) 『マルチメディア・コーパス言語学—テレビ放送の計量的表現行動研究—』大阪大学出版会, 204p., i /viii, 1-64, 157-182, 2013/2

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 3-4. 口頭発表

---

石井正彦 (招待講演) 「“批判的コーパス言語学”の試み—単語の「イデオロギー的意味」の発見—」中京大学文学会秋季大会, 中京大学文学会, 中京大学, 2013/11

石井正彦 (招待講演) 「“臨時一語”の研究と教育—文章とのかかわりを中心に—」2013 年度高知大学国際・地域連携センター国際連携部門講演会&ワークショップ, 高知大学国際・地域連携センター, 高知大学, 2013/6

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2012 年度～2012 年度、研究成果公開促進費、代表者:石井正彦

課題番号:245069

研究題目:マルチメディア・コーパス言語学

研究経費:2012 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

学術図書『マルチメディア・コーパス言語学』の刊行

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本語学会・大会企画運営委員長・評議員, 2012 年 6 月～現在に至る

## 4. 田野村 忠温 教授

1958 年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学(言語学専攻)。文学修士(京都大学、1984)。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:言

語学・日本語学。

#### 4-1. 論文

---

Tanomura, Tadaharu, "A corpus-based analysis of some time-related aspects of contemporary Japanese", Giuliana Diani, Julia Bamford and Silvia Cavalieri(eds.) *Variation and Change in Spoken and Written Discourse: Perspectives from Corpus Linguistics*, Amsterdam: John Benjamins, pp. 255-267, 2013/11

田野村忠温 「日本語研究論文作成支援ツール——例文番号の付け直しほか——」『日本語学』32-14, 明治書院, pp. 216-223, 2013/11

田野村忠温 「『代わり』の意味分析」藤田保幸(編)『形式語研究論集』和泉書院, pp. 61-85, 2013/10

田野村忠温 「日本語のコロケーション」堀正広(編)『これからのコロケーション研究』ひつじ書房, pp. 193-226, 2012/12

田野村忠温 「BCCWJ に収められた新種の言語資料の特性について——データ重複の諸相とコーパス使用上の注意点——」『待兼山論叢』第46号文化動態論篇, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 59-82, 2012/12

田野村忠温 「日本語研究の観点から見た昨今のサーチエンジン事情——Google と Yahoo!の技術提携の結果——」『計量国語学』28-5, 計量国語学会, pp. 186-193, 2012/6

#### 4-2. 著書

---

荻野綱男, 田野村忠温(共編)『講座 IT と日本語研究8 質問調査法と統計処理』明治書院, 2012/6

荻野綱男, 田野村忠温(共編著)『講座 IT と日本語研究4 Ruby によるテキストデータ処理』明治書院, 274p., 2012/4

#### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 4-4. 口頭発表

---

田野村忠温 「日本語コーパスの現在——BCCWJ の資料的特性を中心に——」第一回中南地域日本語教育研究シンポジウム, 湖南大学(中国・長沙市), 2013/10

田野村忠温 「日本語研究とコーパス——コーパスの概念と利用の基礎——」, 華中科技大学(中国・武漢市), 2013/9

田野村忠温 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』——その概要、用法、使用上の注意——」, 華中科技大学(中国・武漢市), 2013/9

田野村忠温 「日本語のコロケーション——概念の考察とコーパスに基づく分析——」, 華中科技大学(中国・武漢市), 2013/9

田野村忠温 「コーパスの種類と特徴」, 元智大学(台湾・中壢市), 2013/5

田野村忠温 「BCCWJ の資料的特性と利用上の注意」, 元智大学(台湾・中壢市), 2013/5

田野村忠温 「BCCWJ の有効利用の方法」, 元智大学(台湾・中壢市), 2013/5

田野村忠温 「BCCWJ に含まれるウェブデータの特性について——データ重複の諸相と BCCWJ 使用上の注意点——」第2回コーパス日本語学ワークショップ, 国立国語研究所, 2012/9(『第2回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp. 265-274, 2012/9)

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

4-6-1. 2012年度～2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者:田野村忠温

課題番号:24520425

研究題目:コーパス日本語研究の高度化と基盤形成のための実践的総合研究

研究経費: 2012 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円  
2013 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

本研究は、応募者が従来継続的に行ってきた研究に基づき、コーパス(電子媒体の言語研究資料)を用いた日本語研究の新たな領域と手法を開拓し発展させ、それを通じてコーパスに基づく日本語研究の高度化を推進することを主たる目的とする。併せて、学界におけるコーパス日本語研究の基盤形成に寄与することをも重要な目的とし、研究成果の国内外での発表(論文・口頭)のみならず、各種コーパス関連ソフトウェアの開発・公開や、講演や執筆などの形での啓発活動にも積極的に取り組む。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本学術振興会・特別研究員等審査会専門委員、国際事業委員会書面審査員, 2012 年 8 月～2013 年 7 月

日本言語学会・常任委員, 2006 年 4 月～現在に至る

日本言語学会・評議員, 2000 年 4 月～現在に至る

### 5. 渋谷 勝己 教授

1959 年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授、大阪大学准教授等を経て、2009 年 4 月より現職。専攻: 日本語学。

#### 5-1. 論文

---

渋谷勝己「歴史社会言語学の(再)構想」『明海日本語』18, 明海大学外国語学部日本語学科, pp. 313-321, 2013/12

渋谷勝己「多言語・多変種能力のモデル化試論」片岡邦好・池田佳子(編)『コミュニケーション能力の諸相』ひつじ書房, pp. 29-51, 2013/3

#### 5-2. 著書

---

渋谷勝己, 簡 月真(共著)『旅するニホンゴ—異言語との出会いが変えたもの—』岩波書店, pp. 1-30, 77-104, 129-186, 2013/9

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

渋谷勝己(書評論文)「川村大著『ラル形述語文の研究』」『日本語文法』(日本語文法学会), 14 巻 1 号, 日本語文法学会, pp. 142-150, 2014/3

#### 5-4. 口頭発表

---

渋谷勝己 (パネリスト)「話すことと文法を創り出すこと」第8回日本語実用言語学国際会議特別パネル: コーパスと日本語教育研究, 日本語実用言語学国際会議, 国立国語研究所, 2014/3

#### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

5-6-1. 2010 年度～2012 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 渋谷勝己



課題番号:22520466

研究題目:日系人日本語変種の成立過程に関する言語生態論的研究

研究経費:2012年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

世界各地において、母語話者や非母語話者によって使用されるさまざまな日本語変種のなかから、日系人日本語変種を取り上げて、言語生態論的な立場から分析を行うことを目的とする。具体的には、次の3点を課題とする。(1)日系人日本語変種の文法事象を中心に記述作業を進める。(2)その結果をつきあわせ、日系人日本語変種をより包括的に記述するための分析枠を構築する。(3)各地日系人日本語変種の相違点を生み出した、言語生態論的な要因を明らかにする。

5-6-2. 2013年度～2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渋谷勝己

課題番号:25370516

研究題目:江戸後期の著作者を対象とするスタイル能力の歴史社会言語学的研究

研究経費:2013年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

さまざまなスタイルを用いてさまざまなジャンルの文章を書いた江戸後期の著作者たち(本居宣長、大田南畝、山東京伝など)の、各ジャンルでのスタイルとその使用の実態を、スタイル習得、スタイル切換えといった観点のもと、変異理論等の枠組みを用いて記述する。また、ことばの複数のスタイルをどのようなかたちで頭のなかにストックしていたのか、そのスタイル能力のモデルを帰納的に構築する。

## 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・編集委員, 2010年6月～2013年5月

日本語学会・評議員, 2009年4月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2008年10月～現在に至る

日本方言研究会・世話人, 2008年4月～現在に至る

日本語文法学会・評議員, 2006年7月～現在に至る

## 6. マシュー・バーデルスキー 准教授

1967年生。2006年UCLA大学院東アジア言語文化科PhD修了。カリフォルニア州立大学ロングビーチ校非常勤講師、スワスモア大学(米ペンシルバニア州)客員助教授・メロン財団ポストドックフェロー、同准教授を経て、2011年10月より現職。専攻:日本語学。

### 6-1. 論文

マシュー・バーデルスキー「言語社会化の過程—親子3人の会話における謝罪表現を中心に—」『阪大日本語研究』26, 大阪大学文学研究科日本語学講座, pp. 33-49, 2014/2

Burdelski, Matthew, "Early experiences with food: Socializing affect and relationships in Japanese" Polly Sztatrowski *Language and food: Verbal and nonverbal experiences*, John Benjamins Publishing Company, pp. 233-255, 2014/1

Yamazaki, Akiko, Yamazaki, Keiichi, Ikeda, Keiko, Burdelski, Matthew, et al., "Interactions between a quiz robot and multiple participants: Focusing on speech, gaze and bodily conduct in Japanese and English speakers" Frank Broz(共編) *Interaction Studies*, 14-3, John Benjamins Publishing Company, pp. 366-389, 2013/12

Burdelski, Matthew, "Socializing children to honorifics in Japanese: Identity and stance in interaction" Richard Watts(共編) *Multilingua*, 32-2, De Gruyter Mouton, pp. 247-273, 2013/3

Burdelski, Matthew, "I'm sorry, flower": Socializing apology, empathy, and relationships in Japan" Jacob Mey(共編) *Pragmatics and Society*, 4-1, John Benjamins Publishing Company, pp. 54-81, 2013/2

Burdelski, Matthew and Cook, Haruko M. (共著), "Formulaic language in language socialization" Charlene Polio *Annual Review of Applied Linguistics*, (American Association for Applied Linguistics), 32, Cambridge University Press, pp. 173-188, 2012/9

## 6-2. 著書

---

なし

## 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

## 6-4. 口頭発表

---

Burdelski, Matthew, (基調講演) "Multimodal affect socialization", 国際ワークショップ: 保育・育児の相互行為分析: 保育・育児の相互行為分析, 子どもの相互行為研究会, 筑波大学東京キャンパス, 2013/3

マシュー・バーデルスキー (基調講演) 「謝罪の言語的社会的形成」養育者-子ども間相互行為における責任の文化的形成, 京都大学 CCI(養育者-子ども間相互行為)研究グループ, 京都大学, 2012/3

Burdelski, Matthew, (パネリスト) "Assessment activity, affect, gender, and morality in Japanese language socialization", American Association for Applied Linguistics Annual Conference, American Association for Applied Linguistics, Sheraton Hotel, Dallas, Texas, USA, 2013/3

マシュー・バーデルスキー (招待講演) 「家庭内外および保育所における言語社会化」2012年阪大日本語学同窓会: 日本語学, 阪大日本語学同窓会, 大阪大学, 2012/9

## 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

## 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 7. 高木 千恵 准教授

1974年生。大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻修了、博士(文学)。神戸松蔭女子学院大学非常勤講師、京都光華女子大学非常勤講師、関西大学専任講師、同准教授を経て、2010年10月より現職。専攻: 社会言語学・方言学。

### 7-1. 論文

---

高木千恵 「ネオ方言: 標準語と伝統方言のあいだ」『日本語学』33-1, 明治書院, pp. 60-70, 2014/1

高木千恵 「紀伊半島南部における「疲れた」という意味を表す語の変遷について」岸江信介・太田有多子・中井精一・鳥谷善史  
(共編著)『都市と周縁のことば 紀伊半島沿岸グロットグラム』和泉書院, pp. 205-214, 2013/5

高木千恵 「談話資料からみる日系カナダ人 3 世の会話スタイル」渋谷勝己『日系人日本語変種の成立過程に関する言語生態論  
的研究』(科学研究費補助金(基盤研究 C)研究成果報告書), pp. 44-50, 2013/3

高木千恵, 小西いずみ, 前田直子(共著)「方言研究 日本語文法学界の展望」『日本語文法』(日本語文法学会), 13-1, 日本語  
文法学会, pp. 166-173, 2013/3

高木千恵 「日本語の攻防 言語接触: 方言と標準語」『日本語学』31-8, 明治書院, pp. 72-80, 2012/7

## 7-2. 著書

---

なし

## 7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

## 7-4. 口頭発表

---

高木千恵 「ネット関連若者ことばの使用意識—関西の大学に通う学生とその親に対するアンケート調査結果から—」第 1 回アジア  
未来会議, 渥美国際交流財団関ログローバル研究会, Cebtara Grand at Central Plaza Ladprao Bangkok (タイ・バンコク市),  
2013/3

高木千恵 「男孫を表す新語『孫息子』の広がり—新聞記事を資料として—」変異理論研究会第 149 会研究発表会, 変異理論研  
究会, 大阪大学, 2013/1

高木千恵 「関西大都市圏のなかの伊賀方言」伊賀の方言講座 第 3 回「伊賀の言葉, その暮らしと 60 年の変化」, 三重県伊賀市,  
上野公民館, 2012/12

高木千恵 「方言からみる同意要求のタイプ」日本語文法学会第 13 回大会パネルセッション(三宅知宏・松丸真大・高木千恵)「確  
認要求的表現と対照方言学」, 日本語文法学会, 名古屋大学, 2012/10

## 7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

7-6-1. 2009 年度～2012 年度、若手研究(B)、代表者: 高木千恵

課題番号: 21720165

研究題目: 日本語諸方言における否定疑問形式の終助詞化に関する記述的研究

研究経費: 2012 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

否定疑問形式に由来する日本語諸方言のモダリティ形式に焦点を当て、各形式の用法を包括的に記述し、それぞれを対照さ  
せることで「否定疑問形式の終助詞化」という文法化現象の一類形を提示しようとする。

## 7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 7-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本方言研究会・事務局, 2013 年 1 月～2013 年 12 月

変異理論研究会・事務局, 2010 年 4 月～2013 年 5 月

## 8. 中井 好男 助教

1973 年生。2009 年大阪大学文学研究科文化表現論(日本語学)修了、博士(文学)。龍谷大学、大阪大学、関西大学の非常勤講師を経て、2013 年より現職。専攻:日本語教育学/学習者オートノミー。

### 8-1. 論文

---

Nakai, Yoshio, "How do learners change their attitude towards learning through collaborative learning?: A report from a Japanese as a second language classroom" Dofs, K. & Hobbs, M. (eds.) *ILA Selections 2012* (Independent Learning Association), Independent Learning Association, pp. 13,62-64, 50-57,81, 2013/11

中井好男 「How do learners change their attitude towards learning through collaborative learning?:A report from a Japanese as a second language classroom」『日本学術振興会 組織的な若手研究者等海外派遣プログラム「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」共同プロジェクト成果報告書 グローバルな文脈の中の日本語教育研究 第二言語教育における学習者オートノミーに関する学会参加と日本語学習者向けワークショップの共同企画』(大阪大学文学研究科日本語学講座), 2013/3

### 8-2. 著書

---

なし

### 8-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 8-4. 口頭発表

---

中井好男 「ピア・リスニングにおける学習者オートノミーの促進」日本語教育学会第 10 回研究集会, 日本語教育学会, 園田学園女子大学, 2014/3

毛利貴美, 中井好男 「eポートフォリオを利用した作文指導の実践—「気づきシート」の活用による自律学習能力の習得を目指して—」日本語教育学会第 10 回研究集会, 日本語教育学会, 園田学園女子大学, 2014/3

中井好男 「ピア・リスニングの実践がもたらす学習者オートノミーの育成と自律学習」学習者ディベロプメント研究部会創設 20 周年記念大会, 学習者ディベロプメント研究部, 学習院大学, 2013/11

Nakai, Yoshio, "How do learners change their attitude towards learning through collaborative learning?:A report from a Japanese as a second language classroom", ILA2012New Zealand Conference, ILA, Victoria University of Wellington (Wellington, New Zealand), 2012/9

中井好男 「協働学習から自律学習へ導く教師の役割についての一考察」2012 世界日本語教育大会, 日本語教育学会, 名古屋大学, 2012/8

### 8-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 8-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 8-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 8-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-21 美学・文芸学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 3 准教授 3 講師 0 助教 2

教授：上倉 庸敬、藤田 治彦、内田 次信

准教授：加藤 浩、三宅 祥雄、田中 均

助教：渡辺 浩司、竹内 有子

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
48	9	9	0	1	1	2	0

※うち留学生 8名、社会人学生 0名

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	10	3	2	2
2013	9	4	3	2
計	19	7	5	4

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

学部の教育においては、基礎的な講義、重要な個別の主題について探究する講義、原典講読の能力を養う演習を開講することによって、基礎的な知識の定着を図るとともに、自ら問題を探究する能力を育成する。卒業論文作成のための演習では、研究経過のプレゼンテーションとそれについての議論を通じて、卒業論文執筆へ向けて個々の学生の問題関心を深める。

大学院の教育においては、最新の研究動向を踏まえた講義・演習を開講し、美学・文芸学研究の視野を広げることを目指す。また、修士論文作成演習、博士論文作成演習を開講し、学会での口頭発表にも耐える専門的な研究報告を行い、それについて、教員と大学院生が互いの観点を尊重し討論を行う。

学部・大学院を通じて、オフィスアワーその他の機会において、指導教員による個別指導を充実させる。

加えて、芸術学講座の他の専門分野、芸術史講座、および文化動態論専攻アート・メディア論講座との連携をはかるとともに、ティーチング・アシスタント制度を通じて、大学院生に対する教育指導能力についてのトレーニングの場を提供し、学部教育や博士前期課程教育を充実させる。

## 2. 研究

本学では美学と文芸学が一つの専修・専門分野を構成しており、これは全国的に見ても特色のあることだが、古代以来の修辞学の伝統から美学が生まれた歴史的経緯に即したものである。

美学分野は哲学の一分野として、美や崇高などのカテゴリー、芸術の概念、感性の働きなどを原理的に考察するが、美術、デザイン、映画などの個別領域を専門とする芸術学とも密接な関係を保ち、理論的な深みと実証的な堅実さのどちらも重視して、多様化する美的・芸術的諸現象を探究する。

文芸学分野は、現代文芸学と西洋古典学との統一を理念とする。すなわち、研究の地歩を豊饒なる古典作品の世界に仮託しつつ、精力的に古今東西の文芸作品の研究も行う。

上記の専修・専門分野の特質を踏まえて、各教員は、期間中に2点以上の著書または論文を執筆すること、また翻訳、書評を積極的に執筆することを目標とする。博士後期課程の各大学院生は、積極的に国内外の学会で研究成果を発表し、期間中に1点以上の査読付き論文を執筆することを目標とする。また研究推進のため、科学研究費補助金その他の競争的外部資金、および日本学術振興会特別研究員に積極的に応募する。

研究に関してはさらに以下の目標を設定する。紀要『文芸学研究』、『美学研究』を継続的に刊行すること。美学会、意匠学会、民族芸術学会、映像学会など関係学会、および学内の文学会、待兼山芸術学会の運営に協力するほか、文芸学研究会、ギリシア・ローマ神話学研究会を開催し、学内外の共同研究に積極的に参画すること。また海外から研究者を招聘する、国際的な研究集会に参加するなど、国際的な学術交流を推進すること、以上である。

## 3. 社会連携

国・地方公共団体の文化行政、博物館・美術館の運営、芸術祭の開催などに、専門的な知見を生かして協力する。各種学会の運営に参画する。

研究会を広く公開して研究成果の普及を図るほか、ウェブサイト等を通じて研究室の活動内容を外部に発信する。また各種メディアを通じた芸術批評を行う。こうした活動を通じて、美学・文芸学という学問分野の社会的認知度の向上に努める。

# Ⅲ. 活動の概要(2012年度～2013年度)

## 1. 教育

「Ⅱ. 掲げた目標」に対応する授業を開講した。ティーチング・アシスタント制度も積極的に活用し、教育の充実に努めた。

美学分野で特記すべき点は以下の通りである。上倉教授の担当する授業で実施するインターンシップに学生1名が参加した。藤田教授がG30(グローバル30)の英語授業「日本の美学」を提供した。また非常勤講師として、宇佐美文理、桑島秀樹、萱のり子、近藤存志の各氏が授業を担当した。

文芸学研究室では、古代ギリシア語ならびにラテン語の教育に力を入れた。文学部の外国語科目にギリシア語とラテン語がなく、文学部において西洋の古典語を学ぶ機会が少なくなっている現状を考えると、当研究室が提供する古典語の教育はますます重要になると思われる。

渡辺助教は、ドイツ語と英語の文献講読を担当し、竹内助教は、2013年度から英語の文献講読を担当した。

## 2. 研究

各教員の著書、論文等の刊行の実績、および科学研究費補助金の採択状況は、「V. 基本情報」の「12. 教員の研究活動」のとおりである。また大学院生の研究業績は、「2. 大学院生等による論文発表等」のとおりである。

美学分野では以下の点が特筆される。藤田教授が中心になって推進した頭脳循環プログラム「アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる 21 世紀の地平—」に大学院博士後期課程の学生が積極的に応募し、国外の研究機関でそれぞれの研鑽に励んだ。また日本学術振興会特別研究員（DC2）に 1 名が採用された。

文芸学研究室はギリシアとローマの喜劇・悲劇を中心とする研究を行った。内田次信教授は、古代ギリシアの喜劇と悲劇、ギリシア神話を研究し、加藤准教授はプラトンの文芸論やプロクロスの詩学などを、また渡辺助教がアリストテレスの悲劇論、ローマの弁論術などをそれぞれ研究した。文芸学研究会では、機関誌として『文芸学研究』が順調に定期刊行されてきている。この研究会は本研究室を事務局兼活動母体としながらも、広く西日本の他大学の多くの研究者、学生とも連携したものであり、研究発表会を年 3 回開催すると共に、機関誌を年 1 冊発行し、そのたびごとに合評会を催すなど、活発な活動を継続した。また日本学術振興会特別研究員（PD）を 1 名受入れている。

また文学研究科共同研究に関して、内田教授は「ギリシア・ローマ神話のアレゴリー —その表現・解釈・理論に関する研究」（2012 年度）および「ヨーロッパ芸術におけるギリシア・ローマ神話の水脈に関する分野横断的研究」（2013 年度）を、田中准教授は「芸術における「参加」の問題—美学理論と演劇研究からのアプローチ」（2013 年度）を、それぞれ研究代表者として推進した。

国際的な学術交流に関しては、「各種共同研究の補助」の助成を受けた陳望衡教授（武漢大学）講演会、第 9 回ギリシア・ローマ神話学研究会における D. Boedeker 教授（ブラウン大学）講演会、藤田教授が研究代表者の科研費で Raffaele Milani 教授（ボローニャ大学）らを招聘したワークショップ「都市のアート・アンド・クラフツ」、および Jos de Mul 教授特別講演会を開催した。教員の国際学会での発表は下記「教員の研究活動」のとおりである。

### 3. 社会連携

外部役員等の引き受け状況および芸術評論の活動については、下記「教員の研究活動」および「大学院生等の業績」に挙げたとおりである。

文芸学研究室は facebook ページを開設して、研究・教育活動の発信に努めた。

また文化庁補助金「大学を活用した文化芸術推進事業」の助成を受け、文学研究科を中心として運営された「アート・フェスティバル人材育成プログラム」に、田中准教授は事業担当者として、渡辺助教は事務局として参画した。

## IV. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

### 1. 教育

教育については全体として目標を達成したと自己評価する。学生の自由な発想を重視しつつ、学問の基礎的な知識の確実な定着を図る取り組みを今後も継続する。

### 2. 研究

研究については、目標を上回る成果を上げたとして自己評価する。大学院生については、国内外の学会における口頭発表および学会誌への論文の投稿に向けた研究指導を今後も充実させる。

### 3. 社会連携

社会連携活動は全体として目標を達成したと自己評価する。専門的知見に基づく社会連携活動を今後も継続する。

## V. 基本情報(2012 年度～2013 年度)



## 1. 博士学位授与

### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	2	0	2
2013	2	0	2
計	4	0	4

### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

#### 【課程博士】

土田 耕督 「中世和歌における古歌再利用意識の展開とその芸術学的射程」 2013/3

主査：上倉庸敬 副査：藤田治彦、加藤洋介、三宅祥雄、田中均

斐 泰秀 「北野武の映画における暴力の様相」 2013/3

主査：上倉庸敬 副査：藤田治彦、三宅祥雄、田中均

佐々木 優 「多重化された行為としての即興演奏：オーネット・コールマンの音楽をモデルに」 2013/9

主査：上倉庸敬 副査：藤田治彦、三宅祥雄、田中均、田ノ頭一知

井上 由里子 「ヴァレール・ノヴァリナの詩学：未知の共同体へ」 2014/3

主査：上倉庸敬 副査：藤田治彦、永田靖、三宅祥雄、山上浩嗣

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	2(0)	0(0)	0(0)	0(0)	4(0)	6(0)
2013	1(0)	0(0)	2(0)	1(0)	1(0)	5(0)
計	3(0)	0(0)	2(0)	1(0)	5(0)	11(0)

括弧内は査読付き論文数。

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	2	8	0	0	10
2013	2	4	3	2	0	11
計	2	6	11	2	0	21

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)著書

【2012 年度】

〔博士後期〕

町田理樹、「アスファルト的」、『詩と思想 詩人集 2012』所収、土曜美術社出版販売、p.554、2012/8/31

### (2)論文

【2012 年度】

〔博士前期〕

Sara SATOH, “The Meaning and Significance of Water in Generalife” 『グローバル化時代の芸術と美学 ART AND AESTHETICS IN THE AGE OF GLOBALIZATION』大阪大学美学研究室, pp.83-90, 2012/8/22

Chisako YONEDA, “chelfitsch's Five Days in March: The end of fiction” 『グローバル化時代の芸術と美学 ART AND AESTHETICS IN THE AGE OF GLOBALIZATION』大阪大学美学研究室, pp.91-96, 2012/8/22

〔博士後期〕

Kosuke TSUCHIDA, “DESIGN AS MANOEUVRED SYMBOLISM: Names of Tea Utensils in Japanese Chanoyu” 『グローバル化時代の芸術と美学 ART AND AESTHETICS IN THE AGE OF GLOBALIZATION』大阪大学美学研究室, pp. 62-69, 2012/8.

Kayo MATSUOKA, “Representation of Mechanical Device in Hans Bellmer’ s works” 『グローバル化時代の芸術と美学 ART AND AESTHETICS IN THE AGE OF GLOBALIZATION』大阪大学美学研究室, pp.46-51, 2012/8/22

土田耕督「再構成される〈詞〉と拡張される〈心〉—藤原為家の歌論と実践に見る「古歌」再利用意識—」『待兼山論叢』第 46 号 (美学篇), 大阪大学文学会, pp. 55-79, 2013/1

横道仁志「ボナヴェントゥラの感覚論」『フィロカリア』第 30 号, 待兼山芸術学会, pp.1-36, 2013/3

【2013 年度】

〔博士前期〕

橘昭成「芥川龍之介の文芸観——クローチェ美学からの影響関係を中心に——」『待兼山論叢』第 47 号 (美学篇), 大阪大学文学会, pp. 51-75, 2013/12

〔博士後期〕

横道仁志「バウムガルテンの「詩に関係する無では無いもの」についての考察」『美学研究』第 8 号, 大阪大学美学研究室, pp.44-68, 2013/8

Yuriko MIZUTA, “L’univers cinématographique créé par le montage - Meshes of the Afternoon (1943) de Maya Deren” 『美学研究』第 8 号, 大阪大学美学研究室, pp.1-11, 2013/8

福元崇志「工藤哲巳の政治性」『あなたの肖像—工藤哲巳回顧展』, 国立国際美術館, pp.422-430, 2013/11/1

横道仁志「ボナヴェントゥラの三位一体論神学における弁論術の意義」『弁論術から美学へ—美学成立における古典弁論術の影響』平成 23 年度～平成 25 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 成果報告書, pp.38-47, 2014/3

### (3)口頭発表

【2012 年度】

〔博士前期〕

中澤菜見子「近世初期障壁画の空間性-『間(ま)』のダイナミクス-」意匠学会第 54 回大会, 京都工芸繊維大学, 2012/7/22

米田千佐子「接点」評論を書くことを考えてみる会, Gallery AMI & KANOKO, 2012/7/28

新宮隆「版画について考える」評論を書くことを考えてみる会, Gallery AMI & KANOKO, 2012/9/15

〔博士後期〕

松岡佳世「写真からみるハンス・バルメール-初期写真からユニカ・チュルン緊縛写真まで-」日本映像学会関西支部第 66 回研究会, 京都造形芸術大学, 2012/5/26

小田昇平「たわいないものの集積 身体表現としての指揮から類比へ」第 35 回大阪教育大学藝術学研究会, 大阪府立羽衣青少年センター, 2012/5/26

裴 泰秀「北野武の映画『3-4X10 月』における暴力の様相」美学会西部会第 289 回研究発表会, 同志社大学, 2012/7/28  
久保美枝「エドワード・バーン＝ジョーンズ作《ペルセウス・シリーズ》にみるキリスト教世界」第 63 回美学会全国大会, 京都大学, 2012/10/7

里中俊介「プラトン『国家』におけるムーシケー論」文学研究科共同研究「ギリシア・ローマ神話のアレゴリー—その表現・解釈・理論に関する研究—」研究発表会, 大阪大学, 2012/10/10

水田百合子「ジャン・コクトーの映画『詩人の血』(1930) にみるデッサンからの変容」日本映像学会関西支部第 67 回研究会, 神戸学院大学, 2012/12/8

土田耕督「中世和歌における「本歌取」的方法の実相—新古今時代の言説と実践を中心として」美学会西部会第 292 回研究発表会, 関西学院大学, 2013/3/9

#### 【2013 年度】

〔博士前期〕

橘昭成「芥川龍之介『歯車』の構造」第 24 回待兼山芸術学会, 大阪大学, 2014/3/29

〔博士後期〕

松岡佳世「マルセル・デュシャンの《ロト・レリーフ》(1935) —非ユークリッド空間における視覚の問題を中心に」第 23 回待兼山芸術学会, 大阪大学, 2013/5/28

水田百合子「ジャン・コクトーにおける自画像の変容 —オルフェウス物語の軌跡—」美学会西部会第 293 回研究発表会, 京都大学, 2013/6/1

福元崇志「工藤哲巳とヨーゼフ・ボイス—エコロジーをめぐる—」「あなたの肖像—工藤哲巳回顧展」プレ・イベント, 国立国際美術館, 2013/6/15

小田昇平「イエイツと能 松村みね子訳『鷹の井戸』」文語の華, 大阪教育大学, 2013/7/7

Yuriko MIZUTA, Orphée (1950) of Jean Cocteau : An adaptation of a play to the screen - Orphée (1950) de Jean Cocteau : une adaptation d'une pièce de théâtre à l'écran, 19th International Congress of Aesthetics, The Jagiellonian University, 2013/7/24

Hitoshi YOKOMICHI "The important role of beauty in Bonaventure's theory of sensation", 19th International Congress of Aesthetics, Jagiellonian University, 2013/7/26

小田昇平「メビウスの輪」第 10 回評論を書くことを考えてみる 建築を評論する, Gallery AMI & KANOKO, 2013/11/1

小田昇平「コンディヤック『人間認識起源論』における行動言語と類比—身体表現の解釈を通して—」神戸女学院大学大学院文学研究科 比較文化学総合演習 (I) (II) 主催 後期講演会, 神戸女学院大学, 2014/1/10

小田昇平「コンディヤック『人間認識起源論』における方法としての分析—類比が続べるわけのこととむすぶこと—」2014 年度大阪教育大学藝術学研究会, 大阪教育大学, 2014/3/15

福元崇志「芸術と社会—ヨーゼフ・ボイスと工藤哲巳を例に—」札幌国際芸術祭トーク&レクチャー第 4 回『アートと社会の新しい関係—21 世紀における<社会彫刻>とは?』, 札幌市資料館, 2014/3/16

#### (4)その他(書評・翻訳など)

##### 【2012 年度】

〔博士前期〕

米田千佐子「植松奎二作「赤いかたち—垂」」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2012/5/1

新宮隆「震災に思いはせる契機『サン・チャイルド、ヤノベケンジ』阪急南茨城駅前」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2012/5/22

佐藤紗良「大阪から発信、たゆまぬ進化と遊び心—大阪ステーションシティ」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2012/6/5

中澤菜見子「どこにもない唯一無二 「佐伯祐三とパリ ポスターのある街角」展」『大阪日日新聞』関西美術探訪,

2012/6/26

中澤菜見子「KIM, CHEOL-KYU 展覧会評」『KIM, CHEOL-KYU The scenery of the human body -The transmigration of emptiness and fullness』展（於 Gallery AMI & KANOKO（大阪・日本橋）,2012/6/25-30）カタログ

米田千佐子『〈私〉の解体へ：柏原えつとむの場合』展『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2012/9/25

中澤菜見子「短期間で消えた輸出品の花形 企画展「京薩摩」」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2012/10/23

新宮隆「不規則な形状で得られる自然『大阪富国生命ビル、Dominique Perrault』阪急梅田東地区」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2012/10/9

米田千佐子『「鉄道芸術祭 vol.2 やなぎみわプロデュース 駅の劇場」展』『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2012/11/13

新宮隆「異国と身近つなぐ枝垂桑『型絵染 三代澤本寿展』神戸ファッション美術館」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/3/19

〔博士後期〕

町田理樹「Aesthetik、あるいはモデル歩き」『詩と思想4月号』, p.48, 2012/4/1

瀧波崇「パフォーマー、デカルコ・マリィ」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2012/5/15

松岡佳世「20世紀少女のあこがれ心つかむ『Kyoto MaGiC 展覧会：「少女マンガとファッション;中原淳一と高橋真琴の世界』」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2012/6/12

町田理樹「人工物の隙間から」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2012/8/21

水田百合子「2012 イタリア・ボローニャ国際絵本原画展－物語想像する豊かな楽しみ方」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2012/9/11

松岡佳世「銅版画の可能性を追求『2012年度コレクション展II 特集 新収蔵品による S.W. ヘイター展 55WORKS』」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2012/10/22

瀧波崇「手塚治虫記念館『マジンガーZ』」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2012/12/25

久保美枝「中山玲佳『A stellar hill－星の丘－ 粘土像を巡る小さな旅』」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/1/15

瀧波崇「オブジェ『生』第二弾」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/1/22

水田百合子「WHAT WE SEE 夢か、現か、幻か－現実と虚構を行き来する」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/2/5

松岡佳世「比較検討に意味あり『コレクション ウラがもれる』展」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/2/12

【2013年度】

〔博士前期〕

米田千佐子「サーチプロジェクト vol.2 山本キノコシアター～DIY の視点でみつめる、ファッション・身体・こどもの創造性～」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/4/23

佐藤紗良「伊丹空港展望デッキ」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/5/28

佐藤紗良「京都、先斗町」、『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/6/25

新宮隆「絵師たちの想像力味わう『北斎・広重の名所と風景－日本を巡る－』久保惣記念美術館」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/7/2

米田千佐子「堂島リバービエンナーレ 2013」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/8/6

兪悦「日々楽しめる空間－細見美術館」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/8/13

佐藤紗良「露天神社」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/8/20

鶴田悦子「旧西本組本社ビル－米寿迎え今も現役バリバリ」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/9/10

新宮隆「パリの寵児、自由への憧憬『藤田嗣治展』山王美術館」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/10/1

小林朋世「「読む」気持ちで鑑賞する（映画をめぐる美術 マルセル・ブロータースから始める 京都国立近代美術館）」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/10/22

米田千佐子『「犬と歩行視 part・2-実験と演習:Goh Hayashi + Hiroko Nakatsuka』展 京都市立芸術大学ギャラリー・アーク」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/10/26

兪悦「山海に映えるアートな空間－港で出会う芸術祭「神戸ビエンナーレ」」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/11/12

- 鶴田悦子「2013 伊丹国際クラフト展 Jewellery-多様化し広がる定義」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/12/17
- 米田千佐子「正木美術館 45 周年記念 秋季展『物黒無 モノクローム』」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/12/31
- 王鋸嘉「うめきた広場「滝の階段」:水流の五線譜で踊る音符たち」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2014/1/28
- 佐藤紗良「熊野古道・大門坂から那智の滝へ」、『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2014/2/25
- 新宮隆「近代写真の鮮やかな刷新『アンドレアス・グルスキー展』国立国際美術館」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2014/3/11  
〔博士後期〕
- 小田昇平「試論：想像力に関する文語を通じた実践」『「文語の苑」大阪シンポジウム報告書』, 大阪教育大学教養学科藝術講座・文語の苑, pp.30-31, 2013/4
- 横道仁志「飛浩隆 〈父〉はここにいない——非の神学としての SF——」『S F マガジン』, 早川書房, pp.217-224, 2013/5
- 久保美枝「『ゴッホ展』作品みつめ丁寧に再評価」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/5/14
- 松岡佳世「泥臭く暑苦しい“戦後関西”パワー 『オオサカがとんがっていた時代—戦後大阪の前衛美術 焼け跡から万博前夜まで—』展」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/6/11
- 松岡佳世「写真と版画—マン・レイのクリシェ・ヴェールから」『映像試論 100』第 1 号, 2013/6
- 瀧波崇「類似記号と図像記号について」『美学研究』大阪大学大学院美学研究室、第 8 号, pp.88-92, 2013
- 瀧波崇「特別展『リヒテンシュタイン 華麗なる侯爵家の秘宝』」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/6/4
- 水田百合子「奇跡のクラーク・コレクション—ルノワールとフランス絵画の傑作—クラーク夫妻の感性に敬服」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/7/9
- 久保美枝「京都国立近代美術館平成 25 年度第 2 回コレクション・ギャラリー 作品と美術館の歴史に触れる」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/8/27
- 松岡佳世「イメージは動く状態にある—ハンス・ベルメールの人形写真」『映像試論 100』第 2 号, 2013/10
- 福元崇志「写真的二元論を超えて—アンドレアス・グルスキーの場合」『映像試論 100』第 2 号, pp.69-71, 2013/10/10
- 久保美枝「画家・木村英輝 壁や障子に直接描く躍動感」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/11/26
- 谷百合子「ミュシャが見たパリ 時代を映すポスター —消費者の購買意欲をかきたてるデザイン」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2013/12/10
- 小田昇平「沖晋吾展」(2kw Gallery)『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2014/1/14
- 福元崇志「平田洋一×福岡道雄 対談「すっかり駄目になった僕たち」(書き起こし)『「信濃橋画廊」インタビュー集』, 兵庫県立美術館, pp.26-47, 2014/3/28

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2013 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 1 名 (計 1 名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012 年度 学部 : 0 名 大学院 : 3 名 (計 3 名)

2013 年度 学部 : 0 名 大学院 : 1 名 (計 1 名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2012 年度～2013 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

春木有亮、助教、北見工業大学、准教授、2012/9

竹内有子、招へい研究員、大阪大学、助教、2013/4

中澤菜見子、博士前期課程、石川県立美術館、学芸員、2014/4

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012 年度～2013 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2012 年度：1 名 2013 年度：0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名  
その他 1 名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2012 年度：0 名 2013 年度：0 名

## 9. 刊行物

2012 年度 『文芸学研究』17 号

2013 年度 『文芸学研究』18 号 『美学研究』8 号

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

### 【学会等の開催】

美学会西部会第 290 回研究発表会	2012 年 9 月 29 日
美学会西部会第 295 回研究発表会	2013 年 9 月 28 日
日本映像学会関西支部第 70 回研究会	2013 年 12 月 14 日
第 23 回待兼山芸術学会	2013 年 5 月 18 日
第 24 回待兼山芸術学会	2014 年 3 月 29 日
国際シンポジウム「都市のアーツ・アンド・クラフツ」	2012 年 9 月 23 日
陳望衡教授特別講義「仰韶文化の意味するもの」	2012 年 10 月 18 日
ヨス・デ・ムル教授特別講演会、「デジタル再合成時代の芸術作品」	2013 年 10 月 24 日

### 【事務局等の引き受け】

民族芸術学会事務局	2012 年度～2013 年度
待兼山芸術学会事務局	2012 年度～2013 年度
意匠学会事務局	2013 年度～2013 年度

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

文芸学研究会	2012 年度～2013 年度
第 48 回文芸学研究会（第 6 回ギリシア・ローマ神話学研究会との合同研究会）	2012 年 7 月 14 日
第 49 回研究発表会・『文芸学研究』第 16 号合評会	2012 年 7 月 14 日
第 50 回研究発表会	2012 年 12 月 22 日
第 51 回研究会・『文芸学研究』第 17 号合評会	2013 年 6 月 22 日
第 52 回研究発表会	2013 年 9 月 21 日
第 53 回研究発表会	2013 年 12 月 21 日
ギリシア・ローマ神話学研究会	
第 6 回講演会・研究会（第 48 回文芸学研究会との共同研究会）	2012 年 7 月 14 日

第7回講演会・研究会	2012年12月22日
第8回研究会（第3回文学研究科共同研究会と共催）	2013年2月16日
第9回講演会・研究会	2013年3月29日
第10回研究会	2013年7月27日
第11回研究会	2013年11月30日
第12回研究会	2014年3月1日

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 上倉 庸敬 教授

1949年、横浜市生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程(美学美術史学専攻)単位修得退学。京都大学文学部助手、神戸学院女子短期大学専任講師、大阪樟蔭女子大学助教授、大阪大学助教授を経て、96年より教授。2007年、大阪大学より博士(文学)。専攻:美学/芸術学/映画学。

#### 1-1. 論文

なし

#### 1-2. 著書

なし

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 1-4. 口頭発表

なし

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

### 2. 藤田 治彦 教授

1951年生。大阪市立大学大学院生活科学研究科博士課程修了。学術博士(大阪市立大学、1983年)。京都工芸繊維大学工芸学部助教授、ルーヴェン・カトリック大学客員教授、大阪大学大学院文学研究科助教授などを経て、現職。専攻:美学/芸術学。

## 2-1. 論文

---

Fujita, Haruhiko, "Nature and Architecture: in the City of God and the Land of the Gods" Jale Erzen and Raffaele Milani(共編) *YEARBOOK OF THE INTERNATIONAL ASSOCIATION FOR AESTHETICS*, (THE INTERNATIONAL ASSOCIATION FOR AESTHETICS), 17, pp. 37-48, 2013/3

藤田治彦 「「伝統色」の誕生—グローバル化する世界と「日本の色」—」藤田治彦(編)『頭脳循環を加速する若手研究者挑戦的海外派遣プログラム—アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる21世紀の地平—(報告書)』pp. 4-9, 2013/3

藤田治彦 「ウィリアム・モリスとJ・A・M・ホイッスラー」藤田治彦(編)『「アーツ・アンド・クラフツと民藝」調査研究中間報告集』pp. 1-9, 2013/3

Fujita, Haruhiko, "NATURE AND JAPANESE ART: Focusing on James Jackson Jarves" Haruhiko Fujita, Raffaele Milani, Saverio Marchignoli(共編著) *ART AND AESTHETICS IN THE AGE OF GLOBALIZATION*, (Italy/Japan Research Workshops in Bologna), pp. 6-13, 2012/8

## 2-2. 著書

---

なし

## 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

## 2-4. 口頭発表

---

Fujita, Haruhiko, "Art as a Way of Life and Life as a Way of Art", XXIII World Congress of Philosophy: Philosophy as Inquiry and Way of Life, The International Federation of Philosophical Societies, University of Athens, 2013/8(*XXIII World Congress of Philosophy Abstracts*, pp. 215-216, 2013/8)

Fujita, Haruhiko, "William Morris: The Arts and Crafts versus the Aesthetic Movement", 19th International Congress of Aesthetics: Aesthetics in Action, The International Association for Aesthetics, Cracow, Poland, 2013/7(*19th International Congress for Aesthetics Book of Abstract*, p. 105, 2013/7)

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

藤田治彦 大阪大学共通教育賞(2003年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2003/11

藤田治彦 意匠学会賞, 意匠学会, 2002/11

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2011年度～2014年度、基盤研究(A) 一般、代表者:藤田治彦

課題番号:23242014

研究題目:アーツ・アンド・クラフツと民藝—ウィリアム・モリスと柳宗悦を中心に—

研究経費:2012年度 直接経費 5,900,000円 間接経費 1,770,000円

2013年度 直接経費 5,400,000円 間接経費 1,620,000円

研究の目的:

イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動と日本の民藝運動は、ともに芸術文化史上重要な動向で、いまでは世界的に認知されているが、歴史的には難しい関係にある。民藝運動の指導者柳宗悦が、アーツ・アンド・クラフツ運動の先駆者ウィリアム・モリスに大きな刺激を受けながらも、それを否定的に乗り越えようとしたからである。この複雑な関係は現代にまで及び、両者の関係が、それぞれの専門家グループによって徹底的に論議されたことはない。本研究は、アーツ・アンド・クラフツ運動とウィリアム・モリスの研究者と、民藝運動と柳宗悦の研究者が互いに協力して、両運動の思想上および実践上の関係を解明するとともに、その徹底的比較



を通じて初めて見えてくる事実を踏まえ、それぞれの運動の世界史的意味を明らかにすることである。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

美学会・委員, 2013年10月～現在に至る

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会・委員, 2008年4月～現在に至る

Journal of Modern Craft・editorial board member, 2007年1月～現在に至る

Design and Culture・editorial board member, 2007年1月～現在に至る

神戸ビエンナーレ組織委員会・委員, 2006年4月～現在に至る

意匠学会・会長, 2005年4月～現在に至る

国立国際美術館作品購入委員会・委員, 2004年4月～現在に至る

大阪美しい景観づくり推進会議・アドバイザー, 2004年4月～現在に至る

大阪21世紀協会・企画委員, 2003年4月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 1999年4月～現在に至る

日本デザイン学会・評議員, 1999年4月～現在に至る

## 3. 内田 次信 教授

1952年生。京都大学大学院文学研究科西洋古典文学専攻博士課程修了。博士(文学)。2006年より現職。専攻:西洋古典文学／文芸学。

### 3-1. 論文

---

内田次信 「ルキアノス第五篇」『2012年度大阪大学大学院文学研究科共同研究成果報告書』大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-20, 2013/3

### 3-2. 著書

---

内田次信 『ヘラクレスは繰り返し現われる』大阪大学出版会, 213p., 2014/3

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

内田次信(共同執筆) 『岩波世界人名大辞典』岩波書店, 2013/12

内田次信(訳) 「古代ホメロス論集」京都大学学術出版会, pp. 1-439, 2013/10

内田次信(共訳) 『偽預言者アレクサンドロス』京都大学学術出版会, pp. 87-118, 2013/2

### 3-4. 口頭発表

---

なし

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 4. 加藤 浩 准教授

1960 年生。大阪大学文学部美学科(美学・文芸学)卒。大阪大学大学院文学研究科博士課程(芸術学)単位修得退学。文学修士。岡山大学文学部助手・講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻:文芸学／神話論。

### 4-1. 論文

---

加藤浩 「16世紀イタリアにおけるアリストテレス『詩学』受容の一局面－「三統一の規則」を中心にして－」『2013 年度大阪大学大学院文学研究科共同研究成果報告書「ヨーロッパ芸術におけるギリシア・ローマ神話の水脈に関する分野横断的研究」』(大阪大学大学院文学研究科), 2014/3

加藤浩 「プラトンにおけるポイエシス理論の一局面」内田次信『2012 年度大阪大学大学院文学研究科共同研究成果報告書「ギリシア・ローマ神話のアレゴリー－その表現・解釈・理論に関する研究－」』(大阪大学大学院文学研究科), pp. 97-118, 2013/3

### 4-2. 著書

---

なし

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 4-4. 口頭発表

---

加藤浩 「ギリシア・ローマ神話への招待」サイエンスカフェ@待兼山, 大阪大学博物館, 大阪大学博物館修学館, 2014/3

加藤浩 (招待講演)「悲劇の王妃『メデイア』を読む/観る」大阪大学 21 世紀懐徳堂 i-spot 講座, 大阪大学 21 世紀懐徳堂、大阪市, アイ・スポット(淀屋橋 odona), 2012/6

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 4. 三宅 祥雄 准教授

1951 年生。岡山大学法文学部哲学科哲学哲学史専攻卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学、1977)。大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同准教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:現代フランス哲学/映像論。

### 4-1. 論文

---

三宅祥雄「イメージと想像力のために」『Arts & Media』編集委員会 *Arts & Media*, 4, 大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論コース, pp. 8-9, 2014/3

三宅祥雄「映画の視点とその変容(二)」大阪大学大学院文学研究科美学研究室『美学研究』8, pp. 1-24, 2013/8

三宅祥雄「フランス風「ダーティハリー」、あるいはアクションするカメラ」『Arts & Media』編集委員会『Arts & Media』3, 大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論コース, pp. 222-226, 2013/3

### 4-2. 著書

---

なし

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 4-4. 口頭発表

---

なし

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本映像学会関西支部・幹事, 2011 年 10 月～現在に至る

## 5. 田中 均 准教授

1974 年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了(美学芸術学、2007 年)。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員(PD、2005 年から 2008 年)、山口大学人文学部講師(2008 年から 2011 年)、同准教授(2011 年から 2012 年)を経て現職。専攻:美学。

### 5-1. 論文

---

田中均「芸術と死—ベンヤミン『ドイツ悲哀劇の根源』における悲哀劇と悲劇—」『待兼山論叢 美学篇』(大阪大学文学会), 46, pp. 1-28, 2012/12

## 5-2. 著書

---

大阪大学ショセキカプロジェクト, 松村真宏, 田中均他(共著)『ドーナツを穴だけ残して食べる方法 越境する学問——穴からのぞく大学講義』大阪大学出版会, pp. 37-55, 2014/2

保坂一夫, 森田團, 田中均他(共著)『〈過去の未来〉と〈未来の過去〉 保坂一夫先生古稀記念論文集』同学社, pp. 398-410, 2013/3

## 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

田中均(講義録)「誰のために劇を「使う」のか？」羽鳥嘉郎(編)『2013 フリンジ企画 使えるプログラム 記録集 劇は使える』KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2013 フリンジ企画 使えるプログラム, pp. 14-15, 2014/3

田中均(批評)「F/T 総評 「黄昏」を生き延びるために」フェスティバル／トーキョー実行委員会(編)『フェスティバル／トーキョー12 ドキュメント』フェスティバル／トーキョー実行委員会事務局, pp. 78-82, 2013/5

田中均(批評)「到来し、過ぎ去る「わたしたち」—イェリネク三作連続上演について」『現代詩手帖』56-4, 思潮社, pp. 120-123, 2013/3

## 5-4. 口頭発表

---

田中均「近代美学の基礎概念としての「参加」芸術における「参加」の問題——美学理論と演劇研究からのアプローチ 第1回研究会, 大阪大学大学院文学研究科共同研究「芸術における「参加」の問題——美学理論と演劇研究からのアプローチ」, 大阪大学, 2013/12

田中均「誰のために劇を「使う」のか？」フリンジ企画 使えるプログラム [批評講座]理論編1, KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2013, GACCOH, 2013/9

Tanaka, Hitoshi, ““Emancipation” in Art: Aesthetics and Politics in Jacques Rancière”, 19th International Congress of Aesthetics, International Association of Aesthetics, クラクフ大学, 2013/7

## 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

田中均 日本シェリング協会第7回研究奨励賞, 日本シェリング協会, 2011/7

## 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

5-6-1. 2010年度～2012年度、若手研究(B)、代表者:田中均

課題番号:22720062

研究題目:「ツアー・パフォーマンス」の独自性と意義——調査と分析による解明

研究経費: 2012年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究の目的は、現代芸術の新たな現象である「ツアー・パフォーマンス」(以下 TP と略す)の独自性と意義を解明することである。そのために、①平成22年度から24年度までの公演とその制作過程、関連するインスタレーション等を調査し、②調査結果および収集した資料に基づいて、TP の一つのジャンルとしての特性を明らかにするとともに、通時的な変容の過程を分析する。③さらに、類似する海外とりわけドイツ語圏の事例との比較を通じて、日本社会において TP が展開されることの意義を明らかにする。

## 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 5-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本シェリング協会・理事, 2008年10月～現在に至る

## 6. 渡辺 浩司 助教

1962年生。1994年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。1994年より現職。博士(文学、大阪大学、1998年)。専攻:文芸学/西洋古典学。

### 6-1. 論文

渡辺浩司(共編著)「エクフラシス——ローマ帝政期における弁論教育——」渡辺浩司(共編著)『弁論術から美学へ 美学成立における古典弁論術の影響 平成23年度～平成25年度科学研究費補助金基盤研究(C) 研究成果報告書』pp. 7-15, 2014/3

### 6-2. 著書

なし

### 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渡辺浩司(共訳)(Mae J. Smethurst, Dramatic Action in Greek Tragedy and Noh)『ギリシア悲劇と能における「劇展開」の比較研究に向けて』(共訳)法政大学能楽研究所, pp. 1-171, 2014/3

渡辺浩司他『岩波 世界人名大事典』岩波書店, 2013/12

渡辺浩司「名は体を表すか?」『図書』769, 岩波書店, pp. 34-34, 2013/3

渡辺浩司「古くて新しいルキアノス」(西洋古典学会), 西洋古典学会, 2013/3

渡辺浩司他(共訳)(ルキアノス原著)『ルキアノス全集 4』(共訳)京都大学学術出版会, pp. 1-342, 2013/2

### 6-4. 口頭発表

渡辺浩司「古代ギリシア悲劇と「参加」」文学研究科共同研究「芸術における「参加」の問題—美学理論と演劇研究からのアプローチ」第1回研究会, 大阪大学, 2013/12

### 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2011年度～2013年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渡辺浩司

課題番号:23520121

研究題目:弁論術から美学へ—美学成立における古代弁論術の影響

研究経費:2012年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2013年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

美学は18世紀半ばにバウムガルテンによって創建されたが、美学成立において弁論術が果たした役割は大きいと言われている。しかしこれまで美学成立における弁論術の役割を具体的に解明した研究は少ない。本研究課題は、美学成立における弁論術が与えた影響を、古代ギリシア・ローマの弁論術理論のうちのいくつかのテーマに絞って、西洋古典学ないし美学・芸術学の観点から解明することを目指す。さらにこれからの美学・芸術学の在り方についても何らかの指針ないし展望を与えることを目指す。

### 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

民族藝術学会・庶務委員, 1994年4月～現在に至る

## 7. 竹内 有子 助教

1972年生。2009年大阪大学 文学研究科文化表現論(美学)修了、博士(文学)。大阪工業大学、大阪産業大学、京都造形芸術大学大学院の非常勤講師を経て、2013年より現職。専攻:芸術学/デザイン史。

### 7-1. 論文

竹内有子 「明治期における英国の色彩論の輸入と伝播:クリストファー・ドレッサーの理論の受容をめぐって」大阪大学大学院文学研究科『アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究－日英間に広がる 21世紀の地平』(日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者挑戦的海外派遣プログラム」), pp. 71-82, 2013/3

竹内有子 「久保田米僊とデザインークリストファー・ドレッサーのデザイン論の受容をめぐって」『デザイン理論』(意匠学会), 61, pp. 63-76, 2013/1

### 7-2. 著書

---

なし

### 7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 7-4. 口頭発表

---

Takeuchi, Yuko, "The Importation of Colour Theory from Britain to Japan: Focusing on the Relationship Between Christopher Dresser and Kubota Beisen", Global Perspectives on Colour, Royal College of Art, Royal College of Art, 2013/2

### 7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 7-8. 外部役員等の引き受け状況

---

意匠学会・委員/事務局担当, 2013年7月～現在に至る

## 2-22 音楽学・演劇学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 2 准教授 2 講師 0 助教 2(兼任 1)

教授：永田 靖、伊東 信宏

准教授：輪島 裕介、中尾 薫

助教：須川 渡、横田 洋

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
43	11	18	0	1	5	2	4

※うち留学生 4 名、社会人学生 1 名

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	17	3	3	2
2013	17	4	1	3
計	34	7	4	5

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

教育の中心となるのは学部レベル、大学院レベルそれぞれで開講されている各種演習である。ここでは、卒業論文、修士論文、博士論文の主題、研究手法、論文構成などについて真剣な討議を行う。これに加えて、年 1 回開催されている合宿でも、学位論文についての中間報告会を行う。さらにオフィスアワーその他の個人指導の機会を通じて、よりきめ細かい指導を行う。また、複数の音楽ホールや劇場における音楽実務や演劇制作に関するインターンシップを実施し、文学研究科のインターンシップ報告書に掲載される報告集を作成する。

#### 2. 研究

音楽学研究室・演劇学研究室ともに、開設から 40 年近くを経たが、今も我が国の総合大学における専攻分野としては極めて稀な存在でありつづけている。そのことも意識しながら、音楽学研究室は、芸術大学や教育大学音楽科における音

楽学研究とは異なる問題を志向しており、いわゆる歴史的美学的探究、作曲学的分析法、民族学的なフィールドワーク、カルチュラルスタディーズ的アプローチなど、様々な方法を組み合わせながら音楽が文化の中でどのような意味を持っているか、ということについて取り組み続けてきた。また演劇学研究室も、西欧演劇史や日本演劇史一般の基礎教育や演劇学一般理論に加えて、文化研究やパフォーマンス・スタディーズなどの接触領域との学際性をも意識しつつ、演劇の現代世界の中での役割を解明し続けている。こういった特色を堅持しながら、教員は、学術的報告 2 本以上の発表を目標とする。院生においては、博士予備論文提出時に論文 2 本以上を発表していることを目標とする。また研究室が主催する『阪大音楽学報』『演劇学論叢』の刊行を継続する。さらに科学研究費補助金、および他の競争的外部資金の獲得、日本学術振興会の特別研究員への応募を積極的に推し進める。また、各種大型プロジェクト研究、学内外の共同研究に積極的に参加し、研究の視野と可能性を拡大することなども目標とした。

### 3. 社会連携

音楽学研究室主催の「コレギウム・ムジクム」を年に1~2回程度開催し、本研究室で行われている多様な研究活動をレクチャー・コンサートという形で広く一般に還元する。また、演劇学研究室では博物館での企画展や共催する映画祭関連講演会などを積極的に開催する。21世紀懐徳堂やCSCDのイベントに協力し、全学的な社会貢献にも参加している。さらに、各種学会には委員等として積極的に参加し、研究会、研究グループなどの活動にも参加して、研究成果の普及を図るよう努力することとした。

## Ⅲ. 活動の概要(2012年度~2013年度)

### 1. 教育

講義・演習では、卒業論文、修士論文、博士論文に向けてそれぞれのテーマに応用可能な方法論や論理構成を意識した教育を行った。さらに個別の指導において、より具体的な問題設定、先行研究の検討、各種調査方法の検討などについて議論を行い、綿密な指導をおこなってきた。インターンシップも予定通り実施され、文学研究科刊行のインターンシップ報告書に受講学生の報告を寄稿した。

### 2. 研究

音楽学研究室では、輪島准教授が平成25年度の総長奨励賞を受賞したほか、伊東教授が学位論文に基づく著書を刊行するなど多くの成果を挙げた。演劇学研究室では教員3名による著書、論文、博物館展覧会図録などが刊行され、学界で高く評価された。また教員の多くは、科学研究費での助成研究を続けている。また院生は国内外の多くの学会での発表、および学会誌ないし研究書への掲載を実現した。とりわけ国際的な研究集会での外国語による発表が増加しており、音楽学研究室では2014年2月にロンドン大学ゴールドスミス校と共催で国際シンポジウムを開催し、院生4名、特別研究員1名が口頭発表を行ったほか、演劇学研究室では、2013年11月に韓国藝術総合学校演劇院と共催で国際シンポジウムを開催し、院生5名が口頭発表を行った。また音楽学研究室の教員は、民族芸術学会、日本ポピュラー音楽学会の委員、理事としての活動を続けており、学会活動の拠点としての存在感を示している。演劇学研究室も、日本演劇学会の事務局を務めている。教員、招へい研究員による科学研究費、民間の財団への研究費の申請のほか、大学院生の日本学術振興会特別研究員への応募なども毎年おこなっている。卓越した大学院拠点や文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」など、文学研究科がかかわる大型資金においても各教員は中心的な役割を果たし、多くの院生がこれらの制度を活用して海外での調査や研究発表などを行った。さらに研究室が主催する『阪大音楽学報』『演劇学論叢』も予定通り出版された。

### 3. 社会連携

教員の多くが新聞、雑誌などへの批評寄稿、放送での解説などを定期的に行っており、研究成果の社会還元を果たしている。また院生も、音楽学、演劇学のそれぞれについて、新聞の大きい誌面を割いて月1回の寄稿の場が与えられ、自らの関心を幅広い読者に向けて発信する訓練ともなっている。また教員は、民族芸術学会、日本ポピュラー音楽学会などの



委員、理事、日本演劇学会における理事、事務局長などを務め、さらに各種財団の専門委員、選考委員などを務めて学外の職務にも応じている。「コレギウム・ムジクム」や 21 世紀懐徳堂の行事を含む各種レクチャー・コンサートや、ラボカフェ、大阪大学シンポジウム、大阪大学総合学術博物館企画展などを学内外で企画立案運営また協力し、研究室を発信源とする社会連携に努めた。

## IV. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

### 1. 教育

卒業論文、修士論文とも、例年どおりの水準を維持した。博士論文についても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

### 2. 研究

教員、大学院生による研究成果の発表、刊行は極めて盛んであり、大きな成果を挙げたと評価できる。『阪大音楽学報』は、引き続き多くの論文を掲載し、学会でも評価が定着しつつある。2013 年 2 月にはロンドン大学ゴールドスミス校との共催で国際シンポジウム *Safeguarding the Intangible: Cross Cultural Perspectives on Music and Heritage International Symposium, including film screenings and concerts* をロンドンで開催した（日本学術振興会の助成）。これと並行して両大学の大学院生レベルでのフォーラムが開催され、博士前期課程の大学院生 4 名などがロンドン大で英語の発表を行った（大阪大学国際シンポジウム助成）。2014 年 3 月 15 日～16 日に国際コロキウム “International Colloquium “Modernization of Asian Theatre”” では、海外から 19 名研究者を招聘するなどして、大学院生の将来的な国際的活躍への意識をうながした。また、2013 年 11 月には国際シンポジウム *International Korean-Japanese Theatre Conference: “New Landscapes of Contemporary Asian Theatre”* を開催し、韓国藝術総合学校演劇院の教授 2 名、大学院生 5 名とともに演劇学から教員 2 名、大学院生 4 名が英語での研究発表にのぞんだ。

### 3. 社会連携

上記のとおり、新聞雑誌への寄稿、演奏会や企画展の企画などの活動を通じての社会還元、民間財団委員や公立劇場企画運営委員としての専門知識の提供、学会活動への寄与など、多方面に渡って社会連携を達成できたと考えられる。

## V. 基本情報(2012 年度～2013 年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	2	0	2
2013	3	0	3
計	5	0	5

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

山口真季子「1920 年代ベルリン・サークルによるシューベルト・ルネッサンス」 2013/3

主査：伊東信宏 副査：輪島裕介、市川明

クララ・フルヴァティン “Sōgetsu Art Movement and Tōru Takemitsu”（草月芸術運動と武満徹） 2013/3

主査：伊東信宏 副査：輪島裕介、永田靖

重川 真紀「オペラ《ルッジェロ王》の成立史 - 資料研究と文脈研究の視座から -」2013/9

主査：伊東信宏 副査：三谷研爾、輪島裕介、関口時正（東京外大名誉教授）

小林 ひかり「近代日本におけるグリーグの音楽の受容」2014/3

主査：伊東信宏 副査：藤田治彦、輪島裕介、根岸一美（同志社大学教授）

橋場 夕佳「「明和の改正」についての研究」

主査：永田靖 副査：市川明、中尾薫

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	3(3)	5(5)	3(2)	0(0)	0(0)	11(10)
2013	2(2)	3(3)	4(3)	0(0)	4(4)	13(12)
計	5(5)	8(8)	7(5)	0(0)	4(4)	24(22)

括弧内は査読付き論文数。

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	1	5	5	0	0	11
2013	9	7	4	0	0	20
計	10	12	9	0	0	31

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (1) 論文

【2012年度】

〔博士後期〕

（音楽学）

奥村京子「G. リゲティの《サンフランシスコ・ポリフォニー》：霧の情景描写とクラスターの形成手法」『阪大音楽学報』第10号, pp.1-18, 2012/9

久岡加枝「ガルモニ音楽にみる地域アイデンティティ形成—北東グルジアトゥシェティ地方の事例から—」『阪大音楽学報』第10号, pp.41-56, 2012/9

山口真季子「E. クルシェネクによるシューベルトのハ長調ソナタD八四〇補完 —ベルリン・サークルにおけるシューベルト解釈—」『美学』240号, pp.145-156, 2012/6

山口真季子「アルトゥール・シュナーベルのシューベルト演奏解釈—《楽興の時》D780への書き込みから—」『日本ピアノ教育連盟紀要』第28号, pp.77-89, 2013/1

クララ・フルヴァティン「映画『おとし穴』における武満徹と協力者たち—冒頭場面を中心に—」『フィロカリア』第30号, pp.37-49, 2013/3

（演劇学）

- 須川渡「日本占領期における「円形劇場」の試み—C I Eによる普及活動を手がかりに—」『演劇学論叢』第12号、大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp.45-66, 2012/7
- 須川渡「大阪円型劇場研究会・月光会（1951～62）の理論と実践」『フィロカリア』第30号、待兼山芸術学会, pp. 51-72, 2013/3
- 神崎舞「ロベール・ルパージュ演出『ドラゴンズ・トリロジー』におけるケベコワのアイデンティティの変遷」『カナダ研究年報』第32号、日本カナダ学会, pp.1-17, 2012/9
- 神崎舞「ジェンダーからの逸脱—『エオンナガタ』におけるシュヴァリエ・デオン像—」『待兼山論叢』第46号、大阪大学文学部, pp.1-22, 2012/12
- 戸田健太郎「狂言における「地謡」の変遷（その二）—初期台本から現行台本への変化とその意味するものをめぐって—」『演劇学論叢』第12号、大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp.67-91, 2012/7
- 岡田蒔子「アジアのインターカルチュラル上演『デズデモーナ』の諸問題—戯曲と演出の対照研究を通じて—」『演劇学論叢』第12号、大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp.92-116, 2012/7
- 【2013年度】
- 〔博士前期〕
- (演劇学)
- Yubin KIM "ACHARAKA-ness" in Koki Mitani's The Last Laugh, 연극 포럼 (Forum of Theatre and Drama) , Korea National University of Arts, pp.256-263, , 2013/12
- Masaki KAKO "On New Methods of a Contemporary Japanese Experimental Company MAMAGOTO", 연극 포럼 (Forum of Theatre and Drama) , Korea National University of Arts, pp.229-239, 2013/12
- 〔博士後期〕
- (音楽学)
- 奥村京子「リゲティの《ナンセンス・マドリガルズ》におけるジグソーパズルの構造——〈第六番 長く悲しいお話〉にみる『不思議の国のアリス』の音楽化」『美学』第242号, pp. 83-94, 2013/6
- 久岡加枝「「イアヴナナ」の旋律が意味するもの：グルジア音楽学のエピステーメー」『阪大音楽学報』第11号, pp. 35-51, 2013/9
- 戸田直夫「吹奏楽史における阪急少年音楽隊—職業訓練としての洋楽受容—」『フィロカリア』第31号, pp. 17-32, 2014/3
- 樋口騰迪「高木東六のピアノ作品：その特徴的性格」『待兼山論叢（美学篇）』第47号, pp. 27-49, 2013/12
- 樋口騰迪「高木東六の作曲理論とその実作：シャンソンとのかかわりを中心に」『阪大音楽学報』第11号, pp. 17-33, 2013/9
- (演劇学)
- 岡田蒔子「『糸地獄』（岸田理生作・和田喜夫演出）のクロノトポス—初演・オーストラリア公演を中心に—」『近現代演劇研究』4号, pp.28-50, 2013/9
- Fukiko OKADA "Theatre Beyond the Border" by KISHIDA Rio - Two concepts of kyoyu and Bunyu in Sora Haneul Langit(Sky Sky Sky)-" 연극 포럼 (Forum of Theatre and Drama) , Korea National University of Arts, pp.294-303, 2013/12
- 戸田健太郎「狂言における「地謡」の変遷（その三）—能の地謡との関係をめぐって—」『演劇学論叢』第13号, pp. 80-93, 2013/7
- 西恵野「女人成仏と太鼓—似我与左衛門国広伝書における「菩薩の能」をめぐる考察—」『フィロカリア』第31号, pp. 33-63, 2014/3
- Tomiko NAKAGAWA "A multilingual Production of Ionseco's 'The Bald Soprano' directed by Mattia S. Giorgetti, at International SCOT, Toga, 2013" 연극 포럼 (Forum of Theatre and Drama) , Korea National University of Arts, pp.322-329, 2013/12
- Mai Kanzaki, and Jennifer Wise, "The Japanese-Garden Aesthetics of Robert Lepage: Shukukei, Mitate, and Fusuma-e in Seven Streams of the River Ota and Other Works," Theatre Research International, Cambridge

## (2) 口頭発表

【2012 年度】

〔博士前期〕

(演劇学)

中川菜月「幸若舞曲成立期の女性たち ―演舞記録に見る曲目と演者の関係性―」咄半分芝居半分の会、高槻市現代劇場、2012/10/13

〔博士後期〕

(音楽学)

Hisaoka Kae "Construction of Authenticity of Polyphony and Musical Practices in Georgia" The sixth International Symposium on Traditional Polyphony, Tbilisi State Conservatoire, 2012/9/28

樋口騰迪「高木東六と近現代フランス音楽の受容―芸術音楽と大衆音楽のあわいに―」日本音楽学会西日本支部・東洋音楽学会西日本支部合同例会、大阪：大阪市立大学梅田サテライト文化交流センター、2012/6/2

藪田郁「近代における（非義太夫節）の展開―甚目寺人形（説教源氏節）を例に―」東洋音楽学会西日本支部第257回定例研究会、京都：京都教育大学、2012/ 7/21

藪田郁「猿倉人形における語りの役割―フシと大衆芸能の関係―」、東洋音楽学会第63回全国大会、東京：国立音楽大学、2012/11/10

藪田郁「語り物の「朗誦」を考察する―近代・地方の人形芝居を事例に―」日本音楽学会第63回全国大会、京都：西本願寺聞法会館、2012/11/24

奥村京子「リゲティ《アトモスフェール》の原風景とその作曲行程」日本音楽学会第 63 回全国大会、京都：西本願寺聞法会館、2012/11/24

(演劇学)

須川渡「大阪円型劇場研究会・月光会による「詩劇」の実践」近現代演劇研究会、大阪大学、2012/8/4

神崎舞「ロベール・ルパージュ演出『エオナナガタ』におけるジェンダーとパフォーマンス」日本カナダ文学会 30 周年記念研究大会、明治大学、2012/7/29

戸田健太郎「天理本《蟹山伏》の「かにそろそろと地謡の方へのく」の「地謡」をめぐる」六麓会12月例会、神戸女子大学古典芸能研究センター、2012/12/26

岡田蒔子「岸田理生作『糸地獄』における劇的時間の構造」近現代演劇研究会、大阪大学、2012/12/15

【2013 年度】

〔博士前期〕

(音楽学)

青嶋絢 “The New York School-Interaction among the new music composers and the abstract expressionists between 1950-55” 国際シンポジウム「音楽文化遺産を守る～文化の垣根を越えて～」(Safeguarding the Intangible: Cross-Cultural Perspectives on Music and Heritage) Graduate Workshop、ロンドン：ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ、2014/2/19

秋山良都 “Der evangelischer Posaunenchor in Dresden: its practice, performance, and identity” 国際シンポジウム「音楽文化遺産を守る～文化の垣根を越えて～」(Safeguarding the Intangible: Cross-Cultural Perspectives on Music and Heritage) Graduate Workshop、ロンドン：ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ、2014/2/19

西東壮一 “The influence of a temp track Carmina Burana on the making 2001: A Space Odyssey” 国際シンポジウム「音楽文化遺産を守る～文化の垣根を越えて～」(Safeguarding the Intangible: Cross-Cultural Perspectives on Music and Heritage) Graduate Workshop、ロンドン：ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ、2014/2/19

室達人 “Reconsideration of Live House – the conception of “live house” and the present situation in Japanese music

culture” 国際シンポジウム「音楽文化遺産を守る～文化の垣根を越えて～」(Safeguarding the Intangible: Cross-Cultural Perspectives on Music and Heritage) Graduate Workshop、ロンドン: ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ、2014/2/19

(演劇学)

Yubin KIM “ACHARAKA-ness” in Koki Mitani’s The Last Laugh” 연극 포럼 (Forum of Theatre and Drama) , International Korean-Japanese Theatre Conference;“New Landscapes of Contemporary Asian Theatre”,Osaka University, 2013/11/11

Masaki KAKO "On New Methods of a Contemporary Japanese Experimental Company MAMAGOTO", International Korean-Japanese Theatre Conference;“New Landscapes of Contemporary Asian Theatre”,Osaka University, 2013/11/11

[博士後期]

(音楽学)

奥村京子 “Ligeti’s Atmosphères: A crystallization of his multicolored association’ Ligeti and Hungary—Rootedness and cosmopolitanism”, International symposium on the 90th anniversary of György Ligeti’s birth, Hungary: Szombathely Savaria University, 2013/7/13

家田恭 「19世紀のプラハ音楽社会における軍楽隊のポピュラリティ」日本音楽学会第64回全国大会 東京:慶應義塾大学三田校舎 2013/11/3

奥村京子「G・リゲティ往復書簡集の調査より——システムの設定と崩壊」日本音楽学会第64回全国大会、東京:慶應義塾大学、2013/11/2

久岡加枝「スターリン期グルジアにおける地方の合唱団をモデルとした民族文化の形成」民族芸術学会 第132回研究例会、大阪:大阪大学待兼山修学館、2013/11/24

樋口騰迪「イヴェット・ギルベールと『シャンソン』に於ける民謡発見・中世回帰」第24回待兼山芸術学会、大阪大学/大阪府豊中市、2014/3

(演劇学)

西恵野「女人成仏と太鼓—似我与左衛門国広伝書の「菩薩の能」をめぐる考察—」待兼山芸術学会、大阪大学、2013/5/18

Fukiko OKADA “Theatre Beyond the Border” by KISHIDA Rio·Two concepts of Kyoyu(Common Ownership) and Bunyu(Partial Ownership) in Sora Haneul Langit(Sky Sky Sky)-、International Korean-Japanese Theatre Conference;“New Landscapes of Contemporary Asian Theatre”,Osaka University, 2013/11/11

Tomiko NAKAGAWA "A Multilingual Production of Ionesco’s The Bald Soprano, directed by Mattia S. Giorgetti, at International SCOT, Toga, 2013"、International Korean-Japanese Theatre Conference;“New Landscapes of Contemporary Asian Theatre”,Osaka University, 2013/11/11

松本俊樹「宝塚少女歌劇・国民座における堀正旗の活動 —1930年代の作品を中心に—」近現代演劇研究会11月例会、大阪大学、2013/11/9

戸田健太郎「『世阿弥自筆本』における間狂言についての一考察 —狂言と能の関係という観点から—」藝能史研究会、同志社大学、2013/4/12

戸田健太郎「能「山姥」のアイをめぐる—通常の間と替間「卵胎湿化」はどちらが先にできたか、など—」六麓会、神戸市勤労会館、2013/7/21

戸田健太郎「虎明はどのようにして狂言を能に近づけていたか —『わらんべ草』の記事から—」、六麓会、神戸女子大学、2013/12/25

神崎舞「ロベール・ルパージュ作品における映像術」日本ケベック学会、関西学院大学、2013/10/12

神崎舞「カナダのストラットフォード『ロミオとジュリエット』(1989)の上演に付加された多角的視座—」言語文化研究会、宝塚大学、2014/3/1

### (3) その他(書評・翻訳など)

【2012年度】

〔博士前期〕

(音楽学)

肥後楽「関西の音と人 22—大阪フィルハーモニー交響楽団第 465 回定期演奏会—」『大阪日日新聞』2013/2/27

青山祥子「関西の音と人 23—レクチャーコンサート『音楽の力、音楽の無力』」『大阪日日新聞』2013/3/27

(演劇学)

中川登美子「錯乱する父親が醸し出す狂気の色気—T Factory『騙り。』—」『大阪日日新聞』2012/6/13

中川菜月「仙台と尼崎の劇団新たな交流—兵庫県立ピッコロ劇団オフシアターvol.27・せんだい演劇工房10-BOX開箱10  
周年記念特別公演「扉を開けて、ミスターグリーン」」『大阪日日新聞』2012/10/10

加古雅樹「生きとし生けるもの達への賛歌—劇団「柿喰う客」公演『無差別』—」『大阪日日新聞』2012/11/14

金裕彬「ミヤコ蝶々と向き合う—一人芝居—「なにわバタフライN.V.」—」『大阪日日新聞』2012/8/8

〔博士後期〕

(音楽学)

菌田郁「関西の音と人 12—異なる芸術共存の不思議空間—」『大阪日日新聞』2012/4/25

菌田郁「無形文化遺産の行く末—アジア太平洋無形文化遺産研究センターの試み」『民族藝術』、第 29 号、民族藝術学会、  
2013/3

山口真季子「関西の音と人 13—京都フィルハーモニー室内合奏団 第 183 回定期演奏会—」『大阪日日新聞』2012/5/23

家田恭「関西の音と人 17—オクトーバーフェスト in 新梅田シティ 2012 飲んで、騒いで「伝統」の中—」『大阪日日新聞』  
2012/9/26

奥村京子「関西の音と人 19—ジョン・ケージ生誕 100 周年記念カウントダウン・イベント 2007-2012 ファイナル—」  
『大阪日日新聞』2012/11/28

戸田直夫「関西の音と人 15—大阪市音楽団たそがれコンサート 2012—」『大阪日日新聞』2012/7/25

樋口騰迪「鈴木陽子作品展 vol.4 演奏会批評」『明倫 art』7月号、2012/6/20

樋口騰迪「京都市交響楽団第 560 回定期演奏会 演奏会批評」『明倫 art』10月号、2012/9/20

樋口騰迪「三原剛が語る『イノック・アーデン』 演奏会批評」『明倫 art』1月号、2013/1/20

樋口騰迪「関西の音と人 21—京都観世会『謡初式』—」『大阪日日新聞』2013/1/23

(演劇学)

須川渡「投影される村山知義の居場所—やなぎみわ演劇プロジェクト『1924人間機械』—」『大阪日日新聞』2012/4/11

須川渡「開かれる「地域演劇」—劇団ぶどう座と出会って」『第20回銀河ホール地域演劇祭パンフレット』第20回銀河  
ホール地域演劇祭実行委員会、pp.8-9、2012/9

神崎舞「アウトローたちの抱く幻想—カナダ演劇『ハイライフ』—」『大阪日日新聞』2012/7/11

神崎舞「カラスへの招待—『カラス/Les Corbeaux』—」『act』22号、2012/8/31

戸田健太郎「大槻能楽堂自主公演能《松浦佐用姫》—気になった後シテの男装演出—」『大阪日日新聞』2012/12/12

岡田路子「「真景累ヶ淵」土台に、深層心理刺激—劇団少年王者館公演『累—かさね—』—」『大阪日日新聞』2012/9/12

西恵野「四季彩能～世阿弥生誕650年～ 世阿弥生誕記念祭の序章」『大阪日日新聞』2013/2/13

【2013年度】

〔博士前期〕

(音楽学)

室達人「関西の音と人 25—日本最古のライブハウス『拾得』—」『大阪日日新聞』2013/5/22

室達人「関西の音と人 33—銭湯で楽しむライブ演奏—」『大阪日日新聞』2014/1/22

青嶋絢「関西の音と人 31—Exhibition as media 蓮沼執太展 音的→神戸 Shuta Hasunuma WORKS 《soundlike2》—  
音楽メディアとしての展覧会の可能性」『大阪日日新聞』2013/12/27

- 秋山良都「関西の音と人 23—インターナショナル・トロンボーン・アンサンブル日本ツアー伊丹公演—」『大阪日日新聞』  
2013/8/26
- 西東壯一「関西の音と人 34—現役活動弁士・井上陽一の思い—無声映画の生きた音を聴く—」『大阪日日新聞』2014/2/26  
(演劇学)
- 金裕彬「劇団イキウメ『獣の柱 まとめ\*図書館的人生(下)』自分と社会の価値観見直す」『大阪日日新聞』2013/7/10
- 加古雅樹「清流劇場『WOYZECK version FUKUSHIMA』現代に甦るヴォイツェクの叫び」『大阪日日新聞』2013/11/13  
〔博士後期〕  
(音楽学)
- 奥村京子「リゲティを消化しよう！」サントリー芸術財団サマーフェスティバル 2013 プログラムノート (リゲティ《ピアノ・エチュード第1巻、第2巻、第3巻》《カプリッチョ第1番、第2番》《インヴェンション》の楽曲解説)、pp.35-41、  
2013/9/8
- 奥村京子「サントリーホール国際作曲家委嘱シリーズ No.36 (監修:細川俊夫)、テーマ作曲家(細川俊夫)」サントリー  
芸術財団サマーフェスティバル 2013 プログラムノート (リゲティ《ミステリーズ・オブ・ザ・マカーブル》の楽曲解  
説)、pp.74-76、2013/9/5
- 山本耕平「関西の音と人 29—室内楽コンサートシリーズ フレンチはいかがー」『大阪日日新聞』2013/9/25
- 戸田直夫「関西の音と人 35—大阪市音楽団「第107回定期演奏会」—」『大阪日日新聞』2014/3/26
- 戸田直夫「大阪市音楽団の系譜」『日本の吹奏楽史』青弓社、2013/12
- 戸田直夫 第13回尼信プラスフェスティバルプログラムノート、2014/1
- 戸田直夫 尼崎市吹奏楽団定期演奏会プログラムノート、2013/6
- 樋口騰迪「大阪交響楽団第176回定期演奏会 演奏会批評」『明倫 art』、7月号、p.3、2013/6/20
- 樋口騰迪「大阪フィルハーモニー交響楽団第470回定期演奏会 演奏会批評」『明倫 art』、10月号、p.3、2013/9/20
- 樋口騰迪「大阪フィルハーモニー交響楽団第471回定期演奏会 演奏会批評」『大阪日日新聞』、朝刊18面、2013/10/23
- 樋口騰迪「イリーナ・メジューエワ ピアノ・リサイタル 演奏会批評」『明倫 art』、1月号、p.3、2013/12/20
- 樋口騰迪「日本センチュリー交響楽団第188回定期演奏会 演奏会批評」『明倫 art』、4月号、p.3、2014/3/20
- 久保愛 「関西の音と人 32—ピアニスト金澤攝ヒストリカル・コンサート「ショパンと親友たち」」『大阪日日新聞』  
2013/12/25
- 内藤多寿子「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン 2013」東京、2013/5/3-5、歌詞対訳
- 内藤多寿子 学会報告書作成(山村磨喜子「日本のフラメンコ受容——明治期から昭和初期における先駆者たちの活動」  
日本音楽学会西日本支部第13回例会、2013/5/25)
- 内藤多寿子「関西の音と人 27——『音楽の祭日』——」『大阪日日新聞』2013/7/24
- 内藤多寿子「フェデリコ・モンポウ・コンサート——演奏とお話でたどる生涯と作品——」モンポウ生誕120周年記念、  
Corazón de Música スペイン音楽研究会第一回研究発表会、企画、構成、歌詞対訳、レクチャー、2014/2/16  
(演劇学)
- 黄資絜「『ホロヴィッツとの対話』—家族劇の伝統を受け継ぎ、新境地へ—」『大阪日日新聞』2013/4/10
- 中川登美子「不条理土台に Let's パーティー!?—KUNIO08『椅子』ファイナル— 原作昇華する「生」への賛美」『大  
阪日日新聞』2013/5/8
- 神崎舞「『春琴』光に満ちた現代に訴える陰翳の世界」『大阪日日新聞』2013/8/14
- 神崎舞「『ポリグラフ—うそ発見器』—消化から昇華へ—」『act』第24号、国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関  
西支部、2013/8/31
- 神崎舞「パフォーミング・アーツが繋ぐ日本とケベック」『遠くて近いケベック—日ケ40年の対話とその未来—』日本  
ケベック学会日ケ交流40周年記念事業編集委員会編、御茶ノ水書房、pp.281-283、2013/10
- 西恵野「第57回大阪薪能 猛暑と篝火に熱気あふれる演者の陰影」『大阪日日新聞』2013/9/11
- 戸田健太郎「平安・鎌倉の面影探る「序破急」」『大阪日日新聞』2013/10/9

黄資梨「燐光群『ここには映画館があった』——これまでの全作品俯瞰」『大阪日日新聞』2014/1/8

松本俊樹「宝塚歌劇団星組公演『眠らない男・ナポレオン・愛と栄光の涯に-』100周年に、従来型への自信」『大阪日日新聞』2014/2/12

岡田蒔子「エイチエムピー・シアターカンパニー2014年新作公演『櫻姫』現代日本演劇のルーツ 声なき者と声ある者」『大阪日日新聞』2014/3/12

藤本百々子（資料紹介）「大英図書館 近代歌舞伎番付目録」『演劇学論叢』13号, pp.109-128, 2013/7

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2013年度 PD: 1名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計2名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

2013年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2012年度～2013年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

須川渡、博士後期課程、大阪大学、助教、2013/4

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012年度～2013年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2012年度: 0名 2013年度: 1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名  
その他 0名

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2名

2012年度: 1名 2013年度: 1名

### 9. 刊行物

2012年度 『阪大音楽学報』第10号 『演劇学論叢』第12号

2013年度 『阪大音楽学報』第11号 『演劇学論叢』第13号

### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際日韓演劇会議 New Landscapes of Contemporary Asian Theatre を国立韓国芸術総合学校と共催、2013年11月

国際シンポジウム *Safeguarding the Intangible: Cross Cultural Perspectives on Music and Heritage International Symposium, including film screenings and concerts* をロンドン大学ゴールドスミス校と共催 2014年2月



国際シンポジウム *International Colloquium “Modernization of Asian Theatre”*を開催 2014年3月

日本演劇学会事務局

2012年度・2013年度

近現代演劇研究会事務局

2012年度・2013年度

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

(音楽学)

伊東信宏教授、輪島裕介准教授、山田高誌助教(2012年度まで)は、いずれもきわめて活発な研究活動を展開した。伊東教授は、サントリー文化財団助成、および科学研究費基盤(B)にもとづくバルカンの大衆音楽に関する研究会を「東欧演歌研究会」と称して主催しており、その成果はセルビアにおける国際研究集会での発表(2013年9月)などにより国際的に発信されている。輪島准教授は各種研究会での報告、雑誌への連載などによって、日本の大衆音楽史にかかわる多くの成果を発表した。新聞への寄稿や一般向けの講座など、アウトリーチ活動も活発に行っている。山田助教は18世紀のオペラ研究を中心に、国内外の様々な研究集会で報告を行った。また、各教員は科学研究費の研究課題の代表、および分担研究者などとしても多様な課題に取り組んでいるほか、民族芸術学会、日本ポピュラー音楽学会などで理事や委員を務めている。さらに卓越した大学院拠点や文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」など、文学研究科がかかわる大型資金においても、各教員は中心的な役割を果たし、結果的に多数の大学院生がこれらの制度を活用して海外での調査、国際学会での発表などを行った。また、2013年2月にはロンドン大学ゴールドスミス校との共催で国際シンポジウム *Safeguarding the Intangible: Cross Cultural Perspectives on Music and Heritage International Symposium, including film screenings and concerts* をロンドンで開催した(日本学術振興会の助成)。これと並行して両大学の大学院生レベルでのフォーラムが開催され、博士前期課程の大学院生4名などがロンドン大で英語の発表を行った(大阪大学国際シンポジウム助成)。また、研究室主宰のコンサートシリーズ、大阪大学コレギウム・ムジクムも年2回程度開催しているが、2012、2013年度は特にマグレブ、ハワイ、北欧といった海外からのゲストを招いて盛況となった。これらに加えて、外部査読を取り入れた『阪大音楽学報』は、従来どおりの規模で刊行されたが、内容的には「大阪日日新聞」における院生による連載(「関西の音と人」)も転載することになり、一層の充実を見せた。これらを総合すると、阪大音楽学研究室は日本における音楽学研究の拠点の一つとして、確かな存在感を示したといえる。

(演劇学)

永田靖教授、市川明教授、中尾薫講師、須川助教とも、いずれも多くの論文や著書、また学会等への出席、会議運営などきわめて活発に研究活動を行っている。本研究室には、永田教授が理事・事務局長、市川教授が理事を務める日本演劇学会の事務局がおかれており、全国大会や研究集会の開催に中心的に関わっている。またその分科会の近現代演劇研究会は実質的に永田教授が主宰して、毎年5回ほどの研究会を行い、関西圏における数少ない演劇研究者の定期的な研究発表の機会を提供して関西での演劇研究の拠点となっている。永田教授は近年国際会議への出席が頻繁となっており、FIRT国際演劇学会を始め、主催する研究会「国際演劇学会アジア演劇ワーキング・グループ」毎年2回世界諸都市で開催し、アジア諸国における演劇研究との連携を図っている。市川教授もブレヒト研究や現代演劇研究を軸にドイツばかりではなく、アジアを含む海外との接触が多く、活発に国際会議での研究活動を行い、その顕著な成果のひとつとして、ドイツ、日本、アメリカとの映像を通じた合同演劇公演「ブレヒト・ハイスリー」、ドイツ海外公演を実現させるなど、国際的に活躍した。中尾講師は、一般向け講座の講師を依頼される機会が増え、研究成果を積極的に公開し社会学連携に努めているほか、早稲田大学演劇映像学連携研究拠点事業の公募研究、テーマ研究の研究分担者として、国内外の研究者間の国際共同研究に積極的に参加している。演劇学研究室では、永田教授の企画で2013年11月11日に国際シンポジウム *International Korean-Japanese Theatre Conference: “New Landscapes of Contemporary Asian Theatre”* を開催し、国立韓国芸術総合学校の教授2名、大学院生5名とともに演劇学の大学院生4名が英語での研究発表にのぞんだ。また、同じく永田教授が開催した2014年3月15日～16日に国際コロキウム *“International Colloquium “Modernization of Asian Theatre”* では、海外から19名研究者を招聘するなどして、大学院生の将来的な国際的活躍への意識をうながした。永田教授、市川教授、中尾講師、須川助教はそれぞれ、複数の科研グループの代表者や分担者、早稲田大学映像学演劇学国際的研究拠点事業の共同研究者などとなって研究会や研究を組織しており、これらの成果は科研費成果報告書ばかりではなく、個別の論文や学会発表に反映されている。このことは大学院生らの研究活動の活発化につながっており、その評価は

上記「教育活動」において触れた。これらのことを通して、日本伝統演劇と西欧近代演劇とを相互に参照しつつ多様で活発な研究を展開し、日本のみならず国際的にも評価されている演劇研究拠点として評価されている。

【研究会等実施状況】

- 音楽学オープンセミナーシリーズ 阪大コレギウム・ムジクム Vol.13「お箏と尺八『今と昔』」、出演：片岡りサ（お箏）、小林鈴純（尺八）、大阪大学会館アセンブリーホール 2012年11月15日
- 音楽学オープンセミナーシリーズ 阪大コレギウム・ムジクム Vol.14「グナワ音楽の新しい魅力」、出演：Seddik Qannarouch、津嶋としひと他、大阪大学会館 21世紀会徳堂スタジオ 2012年12月12日
- 平成24年度大学院自主企画セミナー「西洋音楽受容における土着化とコンフリクト 日本の西洋音楽受容史—研究とその問題点—幕末の鼓笛隊は音楽だったのか？」ゲスト：奥中康人、細川周平、文法経講義棟文13教室（卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」助成）、2013年2月20日
- 演劇学研究室講演会 Patrice Pavis (Kent University) “Intercultural Theatre Today” 2012年5月18日
- 近現代演劇研究会 5月特別講演会 Patrice Pavis (Kent University) “The New Functions of the Dramaturge in Contemporary Theatre” 2012年5月19日
- 近現代演劇研究会 8月例会 研究発表：須川渡（大阪大学大学院）「大阪円型劇場研究会・月光会による「詩劇」の実践」、譲原晶子（千葉商科大学）「テキスト舞踊に読むバレエ構成法の変遷と不変—二〇世紀視点から俯瞰する フィエからフォーサイス」 2012年8月4日
- 演劇学研究室講演会 Chua Soo Pong (Chinese Opera Institute, Singapore) “Creating New Opera and Innovative Interpretation of Classics as a Strategy to Recruit New Audience” 2012年10月12日
- 近現代演劇研究会 10月特別講演会 Chua Soo Pong(Chinese Opera Institute, Singapore) “Creating New Opera and Innovative Interpretation of Classics as a Strategy to Recruit New Audience” 2012年10月13日
- 近現代演劇研究会 12月例会 研究発表：岡田蒞子（大阪大学大学院）「岸田理生作『糸地獄』における劇的時間について」、坂元敦子（京都大学）『欲望という名の電車』に見られる狂気—ブランチを取り巻く人々を中心に」、畑律江（毎日新聞学芸部編集委員）「2012年関西の演劇事情」 2012年12月15日
- 近現代演劇研究会 3月例会 研究発表：井上千香子（サンケイホールブリーゼ）「大阪の民間劇場事情—サンケイホールブリーゼの場合」、沖野真理香（神戸大学研究員）「ミュージカル next to normal が内包するセクシュアリティの問題—アメリカ演劇における「天使」に注目して」 2013年3月24日
- 音楽学オープンセミナーシリーズ 阪大コレギウム・ムジクム Vol.15「ウクレレが語るもの：ハワイの歴史と音楽」出演：ハープ・オオタ（ウクレレ奏者）本田正文（ハワイ・ジャパニーズセンター館長/ハワイ大学教授）会場：大阪大学会館アセンブリーホール 2013年5月30日
- 音楽学オープンセミナーシリーズ 阪大コレギウム・ムジクム Vol.16「巻上公一 +FOOD featuring Christian Fennesz 特別公演」出演：巻上公一、”FOOD” (Iain Ballamy, Thomas Stronen)、Christian Fennesz 会場：大阪大学会館アセンブリーホール 2013年11月23日
- 近現代演劇研究会 5・7月合同例会 研究発表：戸高和弘（大阪大学）「ルソーのカタルシス批判—18世紀のカタルシス解釈」稲山訓央（北陸大学）「石川県の大学における演劇教育について」、瀬戸宏（摂南大学）「中国伝統演劇によるシェイクスピア上演—昆劇『血手記』と越劇『十二夜』を中心に」 2013年7月6日
- 近現代演劇研究会 11月例会、松本俊樹（大阪大学大学院）「宝塚少女歌劇・国民座における堀正旗の活動—1930年代の作品を中心に—」、椋平淳（大阪工業大学）「住民参加劇と‘公共性’—京都・琴似・土別—」会場：大阪大学文学研究科中庭会議室 2013年11月9日
- 近現代演劇研究会 2月例会、佐々木英子（ロンドン大学ロイヤルセントラル校修士課程修了）「エジンバラ演劇祭における『福島朗読劇』」、張偉品（上海戯劇学院副教授、京劇史）「京劇的界定与形成（「京劇の定義と形成）」通訳；黄資黎（大阪大学大学院生）会場：大阪大学文学研究科芸術研究棟芸2講義室 2014年2月15日
- 市川明教授最終講義「ブレヒトと能—『谷行』から『イエスマン/ノーマン』へ—」大阪大学 文41教室 2014年2月21日

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 永田 靖 教授

1957年生。1981年上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位修得退学。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究所客員研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：演劇学。

#### 1-1. 論文

Nagata, Yasushi, “Returning to Asia: An Overview from a Japanese Perspective” *Forum of Theatre and Drama*, (Korean National University of Arts), pp. 212–221, 2013/12

Nagata, Yasushi, “Rear- Garde Theater in/from Japanese Context-Theatre Company ISHINHA and its performance” *Where does theatre go after the Post Avant-Garde?*, (Korean Theatre Association), Korean Theatre Association, pp. 289–300, 2012/10

#### 1-2. 著書

Nagata, Yasushi 他(共著), *Adapting Chekhov: The Text and its Mutations*, Routledge, pp. 261–273, 2012/9

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖 『『犬の心臓』のこと』『犬の心臓』名取事務所, pp. 2–2, 2014/3

永田靖 「芸術祭と社会学連携」『懐徳』82, 懐徳堂記念会, pp. 2–5, 2014/1

永田靖 「「国際化」と伝統の大坂」『懐徳堂だより』92, 懐徳堂記念会, pp. 2–3, 2012/4

#### 1-4. 口頭発表

Nagata, Yasushi, “General Discussion; Modernization of Asian Theatre”, International Colloquium “Modernization of Asian Theatre”, Theatre Studies Section, Osaka university,, Osaka University, 2014/3

Nagata, Yasushi, “Returning to Asia: An Overview from a Japanese Perspective”, New landscape of Contemporary Asian Theatre, International Japanese Korean Theatre Research Symposium, Osaka University, 2013/11

Nagata, Yasushi, “Adapting Asia- Some Ventures of Kaoru Morimoto”, International Federation for Theatre Research Barcelona Conference, International Federation for theatre Research, Institute del Teatre, 2013/7

Nagata, Yasushi, “Some Aspects of Meyerhold Impact on Japanese Modern Theatre”, IFTR Asian Theatre WG Beijing Meeting: Modernization of Asian Theatre, IFTR Asian Theatre Working Group, National Academy of Drama, China, 2013/3

永田靖 「ロシア・アヴァンギャルド演劇—メイエルホリドとエイゼンシュテイン」維新派講演会, 劇団維新派, 維新派稽古場, 2013/3

永田靖 「大阪のアヴァンギャルド演劇とは何だったのか」シンポジウム 大阪のアヴァンギャルド芸術, 大阪大学, 大阪大学中之島センター, 2012/11

永田靖 他 「アジアの中の日本と韓国-演劇研究の未来」演劇の未来—日本と韓国, 日本演劇学会, 漢陽女子大学, 2012/11

永田靖 「アヴァンギャルド、異文化接触、アジア」ラボカフェスペシャル&鉄芸トークシリーズ1, 大阪大学, 大阪大学アートエリア B1, 2012/10

Nagata, Yasushi, “Rear- Garde Theater in/from Japanese Context-Theatre Company ISHINHA and its performance”, International Symposium “Where does theatre go after the Post Avant-Garde?”, Korean Theatre Association, Korea National University of Arts, 2012/10

永田靖 「香港話劇団について」現代中国語演劇の現状と課題, 日本演劇学会近現代演劇研究会, 大阪大学, 2012/10

Nagata, Yasushi, “An Initial Trans-cultural Lesson of Modern Nationality of Theatre: On the First Overseas Performance of Grand Kabuki to Soviet Union in 1928”, International Federation for Theatre Research Santiago Conference, International Federation

## 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2010年度～2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者:永田靖

課題番号:22320035

研究題目:アジアにおける近現代演劇の国際的比較共同研究

研究経費: 2012年度 直接経費 3,500,000円 間接経費 1,050,000円

2013年度 直接経費 2,800,000円 間接経費 840,000円

研究の目的:

現代のグローバリゼーションの進行する中で演劇史・演劇学の在り方を再考することは急務の課題である。従来は西欧演劇中心の概念や演劇史観で研究されてきたが、20世紀のアジア演劇が西欧演劇に与えた根源的な影響はまだ正確に反映されているとは言い難い。またポスト植民地主義的なアジア諸国の自立を背景にした、自国演劇の再検討の機運の高まりは演劇学全般への大きな反省を呼び覚ましている。このような研究は個々の個人的研究にのみ依存するのではなく、アジアの研究者のネットワークの構築を進めながら行う比較共同研究がより効果的である。個々の研究は優れた成果を上げ始めているアジアの研究者間の、世界演劇史的視野に立った比較共同研究によって近現代演劇のアジア的特徴を明確にするのが目的である。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

1-7-1. 2013年度～2013年度、5: その他補助金、助成金獲得者:永田靖

助成金名:研究大学強化促進費補助金(大阪大学国際シンポジウム助成)

研究題目:International Colloquium “Modernization of Asian Theatre”

助成団体名:大阪大学

助成金額:2013年度 直接経費 1,984,000円

研究の目的:

この共同研究グループ Asian Theatre Working Group は2008年に韓国藝術総合学校演劇院、国立台北藝術大学戯劇系、国立中央戯劇学院を主たる相手校として創設したものである。これはヨーロッパ演劇研究の領域に比べて、研究的にまとまることのなかったこの少なかったアジアにおける演劇研究の連携的推進を目的とするものである。アジアの近現代演劇は西欧演劇の影響を被っているために西欧演劇との対照によって研究がなされてきた。アジアの各国の演劇研究者もそれぞれに西欧との関係で研究してきたために、相互のアジア諸国内での関係はほとんど研究されていない。他方で近現代の演劇実践はアジア域内での相互交流によって積極的に進められた経緯がある。具体的には、日本と韓国、中国、台湾、マレーシア、シンガポールの近現代演劇の影響関係を、上演、ドラマツルギー、演出理念、演劇政策について検討を加え、アジア域内での演劇的相互関係の多様性と不即不離の関係を明らかにすることができると考えられる。またアジア演劇の歴史や様式についての概念的な整理を行うことである。アジア演劇史は西欧演劇史とは異なる背景を持ち記述のされ方も異なる。演劇についての概念の多くも西欧演劇のそれらとは基本的に異なる。本研究ではアジア演劇特有の概念(美的性質、制作実施理念、訓練方法、社会的機能、批評言語など)について西欧の演劇概念と比較対照してその独自性を明らかにし、西欧演劇中心の演劇学・演劇史学を相対化し、アジアの演劇概念の共有化を目指すことに繋がる。

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

大阪国際児童青少年アートフェスティバル・実行委員長, 2012年4月～現在に至る

兵庫県立ピッコロ劇場企画運営委員会・運営委員, 2011年3月～現在に至る

University Malaya Panel of External Assessors・Member of Panel, 2011年3月～現在に至る

International Federation for Theatre Research Asian Theatre Working Group・Convenor, 2009年7月～現在に至る  
国立台北藝術大学戯劇系戯劇学刊 Taipei Theatre Journal・Editorial Board, 2009年6月～現在に至る  
International Federation for Theatre Research ・Executive Committee, 2005年7月～現在に至る  
芸術学関連学会連合・委員, 2005年6月～現在に至る  
日本演劇学会・理事, 2002年6月～現在に至る  
日本演劇学会・事務局長, 2002年6月～現在に至る  
日本映像学会関西支部・幹事, 2002年4月～現在に至る  
日本演劇学会近現代分科会・主宰, 2000年11月～現在に至る

## 2. 伊東 信宏 教授

1960年、京都市生まれ。大阪大学文学部美学科(音楽学)卒業。同大学院修了。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員、リスト音楽院(ハンガリー)客員研究員などを経て、1993年、大阪教育大学助教授。2004年、大阪大学助教授(後、准教授)、2010年4月より現職。専攻:音楽学。

### 2-1. 論文

---

Ito, Nobuhiro, "Bartók's Slovak Folksong Arrangements and Their Relationship to Stravinsky's *Les noces*" *Studia Musicologica*, (The Hungarian Academy of Sciences), Vol. 53-no.1-3, Akadémiai Kiadó, pp. 311-322, 2013/8  
伊東信宏 「作曲された悪夢:リゲティ『アバリツィオン』をめぐって」『文学』2012年11/12月号, 岩波書店, pp. 71-87, 2012/11  
伊東信宏 「中欧の作曲家としてのリゲティ:「規範」とのこじれた関係」『思想』1056, 岩波書店, pp. 262-277, 2012/4  
Ito, Nobuhiro, "Where chalga was born: a geopolitical sketch of Bulgaria's pop-folk music", Proceedings of the International Workshop OSAKA-PRAHA 2011, Between "National" and "Regional" Reorientation of Studies on Japanese and Central European Cultures, pp. 56-60, 2012/4

### 2-2. 著書

---

伊東信宏 『バルトークの民俗音楽編曲』大阪大学出版会, 213p., 2012/9

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

伊東信宏 「アンドラーシュ・シフ」朝日新聞文化欄(平成26年3月24日夕刊), 2014/3  
伊東信宏 「小澤征爾指揮、水戸室内管弦楽団」朝日新聞文化欄(平成26年1月27日夕刊), 2014/1  
伊東信宏 「ククターグ+リゲティ/バルトーク:三人の作曲家の生地を巡る」中部大学『アリーナ』16, 風媒社, pp. 302-308, 2013/12  
伊東信宏 「ゴツェ・デルチェフの楽師市場」日本室内楽振興財団機関誌『奏』40, pp. 13-14, 2013/11  
伊東信宏 「ラドゥ・ルプー」朝日新聞文化欄(平成25年10月28日夕刊), 2013/10  
伊東信宏 「権代敦彦さんの仕事」サントリー芸術財団「作曲家の個展:権代敦彦」パンフレット, 2013/10  
伊東信宏 「ジョルディ・サバル」朝日新聞文化欄(平成25年9月30日夕刊), 2013/9  
伊東信宏 「広上淳一指揮、京都市交響楽団」朝日新聞文化欄(平成25年9月2日夕刊), 2013/9  
伊東信宏 「ヘレヴェツヘ指揮、コレギウム・ヴォカール、シャンゼリゼ管弦楽団」朝日新聞文化欄(平成25年6月17日夕刊), 2013/6  
伊東信宏 「大野和士指揮、ウィーン交響楽団」朝日新聞文化欄(平成25年5月27日夕刊), 2013/5  
伊東信宏 「フェニーチェ歌劇場『オテロ』新装フェスティバルホール」朝日新聞文化欄(平成25年4月18日夕刊), 2013/4  
伊東信宏 「シェルシとジョシポヴィッチ」日本室内楽振興財団機関誌『奏』39, pp. 13-14, 2013/4  
伊東信宏 「榎本大進+コンスタンティン・リフシツ」朝日新聞文化欄(平成25年2月4日夕刊), 2013/2

- 伊東信宏 「東欧演歌研究会について」神戸・ユダヤ文化研究会『ナマール』17, pp. 12-14, 2012/12
- 伊東信宏 「バルトーク作曲『ヴァイオラ協奏曲』」名古屋フィルハーモニー管弦楽団第 397 回定期演奏会曲目解説, 2012/12
- 伊東信宏 「トゥガン・ソヒエフ指揮、トゥルーズ・キャピトル国立管弦楽団」朝日新聞文化欄(平成 24 年 12 月 17 日夕刊), 2012/12
- 伊東信宏 「ボロディン作曲、交響曲第2番、ほか」大阪フィルハーモニー管弦楽団第 464 回定期演奏会曲目解説, 2012/12
- 伊東信宏 「演奏すること」日本室内楽振興財団機関誌『奏』38, pp. 13-14, 2012/11
- 伊東信宏 「ドゥセック、そしてウィーン・ピアノ四重奏団」西脇市アピカホール情報誌『ボナンタゴン』pp. 2-3, 2012/10
- 伊東信宏 「ロリン・マゼール指揮、NHK 交響楽団」朝日新聞文化欄(平成 24 年 10 月 22 日夕刊), 2012/10
- 伊東信宏 「リゲティと20世紀: 亡命以前の傷跡」東京フィルハーモニー交響楽団第 73 回オペラシティ定期演奏会パンフレット, 東京オペラシティ, 2012/10
- 伊東信宏 「断想」『吉田秀和』音楽之友社, pp. 132-135, 2012/10
- 伊東信宏 「秋山和慶指揮、広島交響楽団「トゥーランガリラ」」朝日新聞文化欄(平成 24 年 9 月 24 日夕刊), 2012/9
- 伊東信宏 「クセナキス『オレスティア』」朝日新聞文化欄(平成 24 年 9 月 10 日夕刊), 2012/9
- 伊東信宏 「西洋芸術音楽」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』丸善出版, 2012/7
- 伊東信宏 「東京クワルテットの室内楽 vol.7」朝日新聞文化欄(平成 24 年 7 月 23 日夕刊), 2012/7
- 伊東信宏 「ヘンゲルブロック指揮、ハンブルク北ドイツ放送交響楽団」朝日新聞文化欄(平成 24 年 6 月 11 日夕刊), 2012/6
- 伊東信宏 「バルトーク《管弦楽のための協奏曲》」スコア解説」音楽之友社, 2012/6
- 伊東信宏 「リリヤ・ジルベルシュタイン」朝日新聞文化欄(平成 24 年 5 月 7 日夕刊), 2012/4
- 伊東信宏 「『東欧演歌』?」日本室内楽振興財団機関誌『奏』37, pp. 11-12, 2012/4

## 2-4. 口頭発表

- Ito, Nobuhiro, "The Ecology of Folklore: The Case of Balkan Brass in Japan", Safeguarding the Intangible: Cross Cultural Perspectives on Music and Heritage International Symposium, including film screenings and concerts., Music Department, Goldsmiths, University of London Hosted by The Asian Music Unit (ASMU), Music Department, Goldsmiths, University of London Hosted by The Asian Music Unit (ASMU), 2014/2
- Ito, Nobuhiro, "Chalga and Enka: parallel phenomena on both sides of Eurasia", International Conference 'Beyond the East-West Divide: Rethinking Balkan Music's Poles of Attraction', Institute of Musicology of the Serbian Academy of Sciences and Arts, et. al., Institute of Musicology of the Serbian Academy of Sciences and Arts, et. al., 2013/9
- 伊東信宏 「バルトークのヴァイオリン音楽: 民俗音楽の採譜と作品の記譜」楽譜を読むチカラ, 国立音楽大学音楽研究所, 国立音楽大学, 2013/6
- 権代敦彦, 伊東信宏, 北村朋幹他 (パネリスト)「音楽の力、音楽の無力」, 大阪大学21世紀懐徳堂, 大阪大学会館, 2013/3
- 伊東信宏 (パネリスト)「東欧のポップフォーク: ブルガリアのチャルガを中心に」第128回支部例会, 民族芸術学会, 大阪大学, 2012/12
- 伊東信宏 「音楽におけるナショナリズムの発現形態: ラプソディの歴史と第一次大戦」第1次世界大戦研究会, 京都大学人文科学研究所, 京都大学人文科学研究所, 2012/12
- 伊東信宏 (招待講演)「伊東信宏と聞く『ジプシーの恋』」, ザ・フェニックスホール, 2012/9

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 伊東信宏 木村重信民族芸術学会賞, 民族芸術学会, 2010/5
- 伊東信宏 大阪大学教育研究功績賞, 大阪大学, 2010/2
- 伊東信宏 サントリー学芸賞, サントリー文化財団, 2009/12
- 伊東信宏 吉田秀和賞, 吉田秀和芸術振興財団, 1997/11
- 伊東信宏 アリオン賞奨励賞(音楽評論部門), アリオン音楽財団, 1990/10

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2012年度～2015年度、基盤研究(B) 一般、代表者:伊東信宏

課題番号:24320039

研究題目:旧東欧地域における「演歌型」大衆音楽の比較研究

研究経費:2012年度 直接経費 2,700,000円 間接経費 810,000円

2013年度 直接経費 2,500,000円 間接経費 750,000円

研究の目的:

1989年の体制転換以降、旧東欧諸国には欧米の情報が流れ込み、文化の面でも急速な変化が起こった。その中でも注目すべき現象は、「演歌型」大衆音楽ともいべき新ジャンルの登場である。「演歌型」大衆音楽とは、欧米のポップスの基本語彙であるベース&ドラムスを基礎としながら、発声、楽器法などの点で、民俗音楽の要素を暗示しつつ、テレビなどの媒体により大衆に浸透したジャンルで、ブルガリアの「チャルガ」、ルーマニアの「マネレ」、旧ユーゴスラヴィアの「ターボフォーク」などがその代表である。

欧米のポピュラー音楽に接した大衆が、単にそれらの虜になるだけでなく、独自の新しいジャンルを生み出したことは注目される。本研究は、これら旧東欧諸国における「演歌型」大衆音楽の生成と展開(または不在)について比較し、文化の接触と変容の問題に新しい視座を提供することを目的としている。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2011年8月～2013年7月、1: 研究助成、助成金獲得者:伊東信宏

助成金名:サントリー文化財団研究助成

研究題目:旧東欧地域における「演歌型」大衆音楽の生成と展開

助成団体名:サントリー文化財団

助成金額:2011年度 直接経費 1,200,000円

2012年度 直接経費 1,500,000円

研究の目的:

1989年の体制転換以降、旧東欧諸国には欧米の情報が流れ込み、文化の面でも急速な変化が起こった。その中でも注目すべき現象は、「演歌型」大衆音楽ともいべき新ジャンルの登場である。「演歌型」大衆音楽とは、1)欧米のポップスの基本語彙であるベース&ドラムスを基礎としながら、2)発声、歌い回し、楽器法などの点で、民俗音楽の要素を暗示しつつ、3)テレビやカセットテープといった媒体により大衆に浸透したジャンルで、ブルガリアの「チャルガ」、ルーマニアの「マネレ」、旧ユーゴスラヴィアの「ターボフォーク」などがその代表である。

欧米のポピュラー音楽に接した大衆が、単にそれらの虜になるだけでなく、独自の新しいジャンルを生み出したことは興味深い。本研究は、旧東欧諸国を対象とする研究者の協同により、これら諸国における「演歌型」大衆音楽の生成と展開(または不在)について比較し、文化の接触と変容の問題に新しい視座を提供する。

2-7-2. 2013年度～2013年度、5: その他補助金、助成金獲得者:伊東信宏

助成金名:研究大学強化促進費補助金(大阪大学国際シンポジウム助成)

研究題目:Safeguarding the Intangible: Cross-Cultural Perspectives on Music and Heritage の開催とそれに伴う院生フォーラムの実施

助成団体名:大阪大学

助成金額:2013年度 直接経費 1,200,000円

研究の目的:

上記シンポジウムは、大阪大学大学院文学研究科音楽学研究室とロンドン大学ゴールドスミス校音楽学部および同アジア音楽ユニットとが計画し、日本学術振興会の助成を得て、ロンドン大学ゴールドスミス校において2014年2月19日～21日の3日間を中心として開催されたものである。このシンポジウム開催を機に、大阪大学国際シンポジウム助成を得て、本学の大学院生5名および日本学術振興会特別研究員1名を派遣し、同シンポジウムの枠内で開催された院生シンポジウムおよびトレーニング・セッション

ンに参加した。院生シンポジウムでは、上記6名の他、ゴールドスミス側から修了生、院生など3名が発表をおこなった。また、それら発表に先立ち、T.Perchard 博士から、「論を構築する」Building Arguments と題したレクチャーを受けた。

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

文化庁「次代を担う子供の文化芸術体験事業」・選考委員, 2013年4月～現在に至る

日本芸術文化振興会・音楽専門委員, 2013年4月～現在に至る

ザ・フェニックスホール・プログラム・アドバイザー, 2011年4月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 2008年4月～現在に至る

アリオン音楽財団・柴田南雄賞選考委員, 2006年4月～現在に至る

サントリー音楽財団・専門委員／音楽賞選考委員, 2000年6月～現在に至る

朝日新聞音楽懇話会・委員, 2000年4月～現在に至る

## 3. 輪島 裕介 准教授

1974年生。東京大学大学院人文社会系研究科(美学芸術学)博士課程単位修得退学。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員、国立音楽大学ほか非常勤講師を経て、2011年4月より現職。専攻:音楽学。

### 3-1. 論文

輪島裕介 「カタコト歌謡の近代(7) 脱植民地化の中で標的にされたカタコト歌謡—「トンコ節」と「ゴメンナサイ」」『アルテス』アルテス・パブリッシング, pp. 113-126, 2014/3

輪島裕介 「カタコト歌謡の近代(6) 「モシモシアノネ」と「カム・カム・エブリボディ」から始まる戦後」『アルテス』アルテス・パブリッシング, pp. 122-129, 2013/12

輪島裕介 「藤圭子という神話—アイドルとしての藤圭子」『文藝別冊 総特集藤圭子』河出書房新社, pp. 81-88, 2013/10

輪島裕介 「カタコト歌謡の近代(5) 人はなぜデタラメな歌をうたうのか?」『アルテス』アルテス・パブリッシング, pp. 104-114, 2013/9

輪島裕介 「演歌と日本海」『読売新聞』読売新聞, 2013/5

輪島裕介 「カタコト歌謡の近代(4)—ジェリー藤尾のやけっぱちソングは占領者アメリカへの抵抗的实践だった?」『アルテス』4, アルテス・パブリッシング, pp. 172-181, 2013/3

輪島裕介 「ニュー・ウェイブとヤンキーの不思議な関係—地方都市で BOOWY はどう聴かれたか?」『ミュージック・マガジン』45-3, ミュージック・マガジン, pp. 56-57, 2013/3

輪島裕介 「昭和の歌を生んだ「中之島教養主義」」『月刊島民』55, 月刊島民プレス, pp. 6-8, 2013/2

輪島裕介 「カタコト歌謡の近代(3)—トニー谷のインチキ英語は戦後アメリカニズムの B 面だった?」『アルテス』3, アルテス・パブリッシング, pp. 148-158, 2012/10

輪島裕介 「「演歌」と「カタコト歌謡」東谷護『2011 年度シンポジウム報告書 日本のポピュラー音楽をどうとらえるか—グローバルとローカルの相克』(成城大学研究機構グローバル研究センター), 成城大学研究機構グローバル研究センター, pp. 69-85, 2012/7

輪島裕介 「カタコト歌謡の近代(2)—二世歌手とニセ二世」『アルテス』2, アルテス・パブリッシング, pp. 133-142, 2012/4

輪島裕介 「歌謡曲は、いかに作られ、語られてきたか?」『en-taxi』35, 扶桑社, pp. 38-41, 2012/4

### 3-2. 著書

---

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---



- 輪島裕介(書評)「マイケル・ボーダッシュ『さよならアメリカさよならニッポン』』『ポピュラー音楽研究』(日本ポピュラー音楽学会), 17, 日本ポピュラー音楽学会, pp. 64-67, 2013/10
- 輪島裕介(書評)「書評 ルース・フィネガン著 湯川新訳『隠れた音楽家たち: イングランドの町の音楽作り』』『ポピュラー音楽研究』(日本ポピュラー音楽学会), 16, 日本ポピュラー音楽学会, pp. 43-45, 2012/10
- 輪島裕介(書評)「桑田佳祐『やっぱり、ただの歌詞じゃねえかこんなもん』』『共同通信』2012/10
- 輪島裕介(映画評)「映画『スケッチ・オブ・ミヤーク』』『ラティーナ』703, ラティーナ, p. 81, 2012/9

### 3-4. 口頭発表

- Wajima, Yusuke, "Min'yo in the 'Showa 30s' Period in Japan: The Left-wing, Bars and Music Industry the Music Industry", Safeguarding the Intangible: Cross-Cultural Perspectives on Music and Heritage: Safeguarding the Intangible: Cross-Cultural Perspectives on Music and Heritage, Goldsmith, London University, Goldsmith, London University, 2014/2
- 輪島裕介「Jazz からはじまるニッポンの大衆音楽」歴史街道推進協議会共催講座: 五感で体感! にほん文化シリーズ, 近鉄文化サロン, 近鉄文化サロン, 2014/2
- 輪島裕介 (パネリスト)「戦後日本大衆音楽におけるエキゾティシズムと自己エキゾティシズム」日本ポピュラー音楽学会 第25回全国大会シンポジウム: エキゾティシズムとその向こうにあるもの——ポピュラー音楽の(非)嫡出子たち, 日本ポピュラー音楽学会, 関西学院大学, 2013/12
- 輪島裕介 (招待講演)「近代関西の大衆音楽」大阪・京都文化講座: 古きものと新しきもの——大阪京都の芸術, 大阪大学大学院文学研究科、大阪大学 21世紀懐徳堂、立命館大学文学部、立命館大阪オフィス、立命館大阪キャンパス, 2013/11
- 輪島裕介 (招待講演)「大衆音楽におけるミナミとキタ」大阪大学公開講座: 大阪学の「ひと・まち」, 大阪大学 21世紀懐徳堂, 大阪大学中之島センター, 2013/9
- 輪島裕介 (招待講演)「中之島の歌 ザ・ベストテン」月刊島民ナカノシマ大学, 21世紀の懐徳堂プロジェクト, ブルックリン・ロースティング・カンパニー, 2013/4
- 輪島裕介「東欧演歌は演歌か?」民族芸術学会第128回研究例会: 特集・旧東欧地域の大衆音楽, 民族芸術学会, 大阪大学, 2012/12
- 輪島裕介 (招待講演)「カタコト歌謡」から「演歌」へ」サントリー文化財団フォーラム, サントリー文化財団, サントリー文化財団, 2012/7
- 輪島裕介 (招待講演)「近代日本の大衆音楽と大阪」浪高午餐会, 旧制浪速高校同窓会, 大阪中央電気倶楽部, 2012/5

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 輪島裕介 第33回サントリー学芸賞 芸術・文学部門, サントリー文化財団, 2011/11
- 輪島裕介 The 2011 IASPM Book Prize for a book written in a language other than English, International Association for the Study of Popular Music, 2011/8

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2013年度~2015年度、若手研究(B)、代表者: 輪島裕介

課題番号: 25770064

研究題目: 戦後日本大衆文化における放送と音楽: 〈家庭〉の表象を中心に

研究経費: 2013年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

本研究は、戦後大衆音楽において放送が果たした役割について、〈家庭〉イメージの変遷という観点から読み解くことを目指す。放送はその草創期以来、レコード産業及び映画産業とは一線を画し、一種の啓蒙主体として「健全」で「国民的」な文化を創出し普及しようとしてきた。その志向は、戦後初期においては健全で明るい(なおかつ「洋風」の)〈家庭〉イメージを強調する「ホームソ

ング」という音楽形態に表現された。さらに、昭和 40 年代以降、既存のレコード・映画産業の制作方式の解体と、対抗文化的な潮流の影響下に新たな大衆娯楽の形態が形成される。その代表的な存在が、「お茶の間」に適合的な「素人っぼさ」を人工的に強調する「アイドル歌謡」であり、その歴史的な特質を、音楽番組のみならず「ホームドラマ」との関連において明らかにする。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本ポピュラー音楽学会・理事, 2012 年 12 月～現在に至る

## 4. 中尾 薫 准教授

1978 年生。2001 年、奈良女子大学文学部言語文化学科日本アジア言語文化学卒業、2008 年、大阪大学大学院文学研究科(演劇学)博士後期課程修了。博士(文学)。2009 年、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館助手。2011 年、大阪大学大学院文学研究科専任講師を経て、2014 年 4 月より現職。専攻:演劇学、能楽研究。

### 4-1. 論文

---

中尾薫 「能楽の近代化と高木半—その履歴と能楽改良論への能役者の対応をめぐる—」大阪大学文学会『待兼山論叢』47, 大阪大学文学会, pp. 1-25, 2013/12

中尾薫 「能楽の近代化と池内信嘉—能楽の改良し得らるゝや否や—」大阪大学大学院演劇学研究室『演劇学論叢』12, 大阪大学大学院演劇学研究室, pp. 7-23, 2013/7

### 4-2. 著書

---

なし

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

中尾薫 「柳生・八坂神社のスモウの舞、ササラの舞、ヨーガの舞」奈良県教育委員会編『奈良県の民俗芸能』pp. 273-286, 2014/3

中尾薫 「月ヶ瀬桃香野・八幡神社の能楽」奈良県教育委員会編『奈良県の民俗芸能』pp. 399-409, 2014/3

中尾薫 「観世元章関係書目と年譜」『観世元章研究基礎資料』科学研究費助成研究「観世文庫所蔵能楽関係資料のデジタル・アーカイブを活用した新しい能楽史の構築」報告書』pp. 53-152, 2014/3

中尾薫 「「観世元章関連用語集(加藤枝直, 烏鷲籠, 観世元章, 国学, 古事記詳説, 田安宗武, 藤林権左衛門, 目玉観世, 元章好み, 爐雪集)」」『観世元章研究基礎資料』科学研究費助成研究「観世文庫所蔵能楽関係資料のデジタル・アーカイブを活用した新しい能楽史の構築」報告書』pp. 9-49, 2014/3

中尾薫 「世界無形文化遺産「能楽」と『霊戯—The Sprits Play—』の道のり—能に与える可能性、能が与える可能性—」『早稲田大学演劇映像学連携研究拠点「能、昆劇の比較研究—日中伝統演劇の現在と未来」記録文集』pp. 7-12, 2014/2

中尾薫 「谷行における「孝」と「法」」『Brecht3「谷行／イエスマン」上演プログラム』p. 3, 2014/2

中尾薫 「室町末期における能《望月》と獅子の舞」『民族藝術学会会報』83, 民族藝術学会, pp. 1-2, 2013/9

中尾薫 「ケレン味のある趣向の数々—復曲『橋姫』夜討曾我—十人斬—」『観世』80-8, 檜書店, p. 55, 2013/8

中尾薫 「観世文庫の文書47 観世元章筆『二曲三体集』」『観世』80-2, 檜書店, p. 1, 2013/2

中尾薫 「世界無形文化遺産「能楽」と「昆劇」の現在」『能』647, 京都観世会, p. 1, 2012/4

### 4-4. 口頭発表

---

- Nakao, Kaoru, "Noh-gaku Theatre: The Problem and Its Current Situations", 国際日韓演劇会議:「現代アジア演劇の新しい風景」, 大阪大学, 大阪大学, 2013/11
- 中尾薫 「桃香野の能楽と京都観世流の能役者との交流」芸能史研究会11月例会:共同発表「奈良県民俗芸能緊急調査の成果と課題」, 芸能史研究会, 同志社大学, 2013/11
- 中尾薫 「伝統芸能における異性配役一世阿弥の能を中心に―」第52回シェイクスピア学会:セミナー1「シェイクスピアの「異性配役」を再考する」, 日本シェイクスピア学会, 鹿児島大学, 2013/10
- 中尾薫 「能楽研究とアーカイブ」2013年度日本演劇学会秋の研究集会:演劇とアーカイブ―集積から構築へ―「シンポジウムⅡ 演劇学におけるアーカイブの運用」, 日本演劇学会, 椛山女学園大学, 2013/10
- 中尾薫 「近代能楽の一事象・続考」2013年度第1回研究会、国際高等研究所研究プロジェクト:東アジア古典演劇の「伝統」と「近代」―伝統の相対化と文化の動態把握の試み―, 国際高等研究所, 国際高等研究所, 2013/8
- 楊慧儀, 中尾薫 「能・昆劇の動態調査研究報告」記録論文集発行記念シンポジウム:「能・昆劇の比較研究―日中伝統演劇の現在と未来」, 早稲田大学演劇映像学連携研究拠点, 早稲田大学, 2013/2
- 中尾薫 「近代能楽の一事象 ―「夢幻能」という用語の成立過程試論―」「東アジア古典演劇の「伝統」と「近代」―「伝統」の相対化と「文化」の動態把握の試み―:2012年度第2回研究会, 国際高等研究所, 国際高等研究所, 2013/2
- Ingham, Mike, Nakao, Kaoru, "But O what form . . . can serve my Turn? Japanese Classical Noh Theatre and its Aptness for Formal/Cultural Adaptation of Shakespeare", Shakespeare and Japan: Shakespeare and Japan, デモントフォーフォド大学, デモントフォーフォド大学, 2013/2
- 中尾薫 「能の歩みにおける象徴的意味」能と昆劇、現在と未来 シンポジウム:能の体、昆劇の体, 早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点, 座・高円寺, 2012/10

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2011年度～2013年度、若手研究(B)、代表者:中尾薫

課題番号:23720091

研究題目:能楽の近代化の研究―明治・大正期能楽上演記録データベースの構築を中心とする―

研究経費:2012年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

2013年度 直接経費 100,000円 間接経費 30,000円

研究の目的:

明治維新によって壊滅的危機をむかえた能楽を強力に支え、明治・大正期にかけて能楽の存続と復活を実現した「能楽社」「能楽会の活動について、その能楽へのはたらきかけや理念は、当時の能楽の実情にどの程度則してしたのか、その程度実現されたのかといった問題を明らかにする。そのために重要なデータとして明治・大正期能楽上演データベースを構築する。最終的には「能楽社」「能楽会」など能楽支援者の活動を、能楽の「近代化」という視点でとらえ、その実情を分析し論じることを目的とする。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本演劇学会・幹事, 2012年6月～現在に至る

能楽学会・総務実行委員, 2012年5月～現在に至る

能楽学会・企画実行委員, 2010年5月～2012年5月

芸能史研究会・事務局, 2003年6月～現在に至る

## 5. 須川 渡 助教

1984年京都府生まれ。2006年、滋賀県立大学人間文化部地域文化学科卒業。2008年、大阪大学大学院文学研究科文化表現論(演劇学)博士前期課程修了。2013年、大阪大学大学院文学研究科文化表現論(演劇学)博士後期課程単位取得退学。2013年4月より現職。専攻:演劇学。

### 5-1. 論文

---

須川渡 「よみがえる〈故郷〉—秋浜悟史『啄木伝』(1983)の中の〈岩手〉」民族藝術学会『民族藝術』(民族藝術学会), 30, pp. 64-68, 2014/3

須川渡 「大阪・円型劇場研究会「月光会」による理論と実践」待兼山芸術学会『フィロカリア』(待兼山芸術学会), 29, pp. 51-72, 2013/3

須川渡 「日本占領期における「円形劇場」の試み —CIEによる普及活動を手がかりに」大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 12, pp. 45-56, 2012/7

### 5-2. 著書

---

なし

### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

須川渡 「人間とロボットの共生をめぐる旅—大阪大学ロボット演劇プロジェクト×吉本興業『銀河鉄道の夜』」『大阪日日新聞』, 2013/5

### 5-4. 口頭発表

---

須川渡 「日本のコミュニティ・シアターにおける「観客参加」」大阪大学文学研究科共同研究「芸術における「参加」の問題—美学理論と演劇研究からのアプローチ」第一回研究会, 大阪大学, 2013/12

須川渡 「大阪・円型劇場研究会月光会による「詩劇」の実践」近現代演劇研究会8月例会, 近現代演劇研究会, 大阪大学, 2012/8

### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 5-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 6. 横田 洋 助教

1976年生まれ。2002年大阪大学文学部人文学科卒業。2005年大阪大学文学研究科博士前期課程修了。2008年大阪大学文学

研究科博士後期課程単位修得退学。2010年博士(文学)号取得。2008年大阪大学総合学術博物館研究支援推進員。2011年6月より現職。専攻:演劇学。

#### 6-1. 論文

---

なし

#### 6-2. 著書

---

なし

#### 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

#### 6-4. 口頭発表

---

横田洋 (パネリスト)「日本近代演劇の資料と研究」日本演劇学会 2013年度研究集会:演劇学におけるアーカイブの運用, 日本演劇学会, 椋山女学園大学, 2013/10

横田洋 (パネリスト)「映画と演劇と見世物の間—浅草公園六区の芸能史の一側面—」東洋音楽学会東日本支部 第66回定例研究会:庶民が楽しんだ芸能の諸相—明治から対象へ, 東洋音楽学会, 国際基督教大学, 2012/7

#### 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

6-6-1. 2012年度~2015年度、若手研究(B)、代表者:横田洋

課題番号:24720068

研究題目:日本の初期映画の制度的環境に関する研究

研究経費: 2012年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

2013年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

本研究は日本の初期映画のさまざまな環境について特に法制度的側面からの検証を試みるものである。映画が人々の間でつまり社会の中でいかなる役割を持ち、いかに位置づけられたか、という問題を検証しようとする時、映画に関わる法制度を理解することはきわめて重要である。検閲の問題のみならず、映画館の構造、上映の形態や時間、興行を行う上でのさまざまな制度の検証を通して、初期の映画の置かれた環境を明らかにする。

#### 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-23 美術史学

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 4(兼任 1) 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：奥平 俊六、圀府寺 司、橋爪 節也(兼任)、藤岡 穰

准教授：岡田 裕成、桑木野幸司

助教：河内 華子

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
33	12	21	0	1	7	1	0

※うち留学生 2 名、社会人学生 2 名

#### 3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2012	5	5	3	1
2013	10	6	1	1
計	15	11	4	2

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

学部の教育においては、初歩的な講義・演習により専門基礎学力の充実をはかるとともに、美術作品を観察し、記述する能力を養う演習、専門分野の論文を批判的に読む能力、美術史に関わる史料講読の能力を養う演習を開講し、基礎能力の育成に努める。また、卒業論文作成のための演習では、研究経過の発表を通じてプレゼンテーション能力の向上をはかり、かつ相互に批判する能力を培う。

大学院の教育においては、最新の研究動向を踏まえた講義・演習を開講し、専門学力の充実をはかるとともに、美術作品の調査を指導あるいは奨励し、実証的な作品研究能力を養い、隣接領域への関心を喚起し、美術史研究の新たな視点をひらくことを目指す。また、修士論文作成演習、博士論文作成演習を開講し、さらに個別に論文指導を行う。加えて、文

化動態論専攻アート・メディア論との連携をはかり、日本学術振興会特別研究員制度、TA や RA、美術館や博物館でのインターンシップなどの積極的利用を促進する。

## 2. 研究

教員は、一人平均で年間 1 本以上の論文を執筆し、他に作品解説、書評、調査報告書等を執筆することを目標とする。かつ、科学研究費などの外部資金の獲得につとめ、研究を遂行する。博士後期課程の大学院生は、積極的に国内外の学会で口頭発表し、1 人平均で年間 1 本以上の論文、作品解説等を執筆することを目標とする。この他、研究を促進するため、学外においては美術史学会をはじめとする関係学会等の運営に協力し、学内においては待兼山芸術学会の運営、開催に協力する。また、外国人研究者の招聘、受け入れ等を通じて、研究室の国際性を高める。

## 3. 社会連携

国、地方公共団体、博物館・美術館等の美術作品に関わる学術調査およびその成果報告に協力するとともに、国、地方公共団体の文化行政、博物館・美術館の運営等に協力する。また、国、地方公共団体、博物館・美術館等が必要とする美術作品の評価に協力する。研究室のホームページを運営し、活動内容を外部に発信する。

# Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

## 1. 教育

目標に定めた通りの美術史の講義、演習を開講し、十分な教育効果をあげた。また、教育実践センターにおける教育に協力し、2012 年度は 5 セメ分、2013 年度には 4 セメ分の授業を担当した。

日本・東洋美術史においては、伝統の授業である見学演習を継続し、美術史学の基礎となる作品の観察、記述能力の育成に効果をあげた。また、オプションとして日本画実習を行い、素材に直接触れ、自ら技法等を確認する機会を提供した。大学院生には、科研に関わる、あるいは博物館、地方自治体が実施する作品調査、種々の研究会への参加を促し、所期の目標を達成した。2012 年度には大学院生 1 名が、2013 年度には大学院生 1 名が大阪市立美術館でのインターンシップを修了した。西洋美術史においては、学部レベルでは論文を読むための授業が定着し、ゼミにおける研究発表、質疑応答を通じて、大学院、学部ともに論文作成にいたる過程を着実に定着させた。この間 2 名が欧米に留学し、高度な語学力を養いつつ、本格的な実地調査、研究を行うとともに、大学院授業を受けている。

なお、非常勤講師については、室町絵画（相澤正彦・成城大学教授）、江戸絵画（古田亮・東京芸術大学教授）、聖像・聖遺物研究論（秋山聰・東京大学教授）、イタリア都市祝祭文化論（赤松加寿江・東京大学特任助教）の専門家をお招きし、専任教員ではカバーができない範囲の、そして最も先進的な研究についての講義を提供し、大きな教育効果をあげた。

## 2. 研究

各教員とも、著書、論文、作品解説等をおよそ目標通り、あるいは目標以上に発表することができた。また、5 人の専任教員が科学研究費の助成を受け、当該の研究を推進した（1 人が基盤研究(A)、1 人が基盤研究(B)、1 人が基盤研究(C)の研究代表者）。教員 1 名は "Between East and West: Reproductions in Art" CIHA Colloquium at the Otsuka Museum of Art in Naruto, Japan にチェアの一人として参加協力した。なお、この間、美術史学会常任委員、民族芸術学会理事などの役職をつとめ、学会の運営にも協力した。

博士後期課程の学生は、論文等 10 件、口頭発表 8 件と、美術史学の専門分野の大学院として、めざましい研究成果を挙げることができた。

## 3. 社会連携

国、地方公共団体および私立の博物館、美術館の研究員、評議員などをつとめ、さらに地方史の編纂事業、文化財審議委員会などにも参画し、それぞれの事業に協力した。

## IV. 自己点検・自己評価(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

前記の活動の結果、学部生、大学院生ともに水準以上の成績を残すことができた。2010年度には修了生が文学研究科賞を受賞した。なお、学内からの大学院進学者が2010年度4名、2011年度3名を数え、こうした点でも、教育については十分に目標が達成できたと自己評価できる。

### 2. 研究

前記の活動の通り、著書、論文等の執筆や学会発表については、教員・大学院生ともに目標をほぼ達成した。加えて、5人の専任教員が科学研究費の助成を受けるなど、研究については十分に目標が達成できたと自己評価できる。

### 3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

## V. 基本情報(2012年度～2013年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2012	0	0	0
2013	0	0	0
計	0	0	0

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	2(2)	3(3)	0(0)	1(0)	0(0)	6(5)
2013	8(8)	1(1)	0(0)	0(0)	1(1)	10(10)
計	10(10)	4(4)	0(0)	1(0)	1(1)	16(15)

括弧内は査読付き論文数。

#### 2-2. 口頭発表



年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	2	1	0	1	4
2013	0	8	6	0	0	14
計	0	10	7	0	1	18

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

【2012年度】

〔博士後期〕

曾田めぐみ「河鍋暁斎筆『地獄極楽めぐり図』と勝田家菩提寺」『待兼山論叢』第46号、大阪大学文学会、pp. 29-53, 2012/12

曾田めぐみ「三代歌川廣重 一その画業と人物一」『復刻版 大日本物産図会 解題』雄松堂書店、pp. 19-22, 2013/1

李鎮栄 「統一新羅時代の十二神将像—韓国と日本の十二神将像の比較研究の一環として—」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第34集、pp. 69-86, 2012/12

鈴木慈子「具体ニューヨーク展と吉原治良」『兵庫県立美術館研究紀要』7号、pp.4-11, 2013/3

鈴木慈子「ある時代の精神」『民族藝術』29号、pp.226-227, 2013/3

中野悠「藤田嗣治の壁画制作」『フィロカリア』第30号、pp.73-94, 2013/3

【2013年度】

〔博士前期〕

佐藤由季「十六世紀における都市ヴィチェンツァの自己意識と理想像」*Arts and Media* vol.4, pp. 98-117, 2014/2

〔博士後期〕

西谷功「鎌倉時代における泉涌寺流の道場荘厳について—仏画の宗教的機能」『密教図像』32, pp. 38-61, 2013/12

西谷功「新出資料『南山北義見聞私記』発見の意義」『仏教学研究』70, pp. 73-108, 2014/3

西谷功「智積院新文庫蔵『十卷抄』について」『根来寺聖教の基礎的研究—智積院聖教を中心として—』(宇都宮啓吾代表)、科学研究費助成金(基盤研究B)研究成果報告書、pp.88-101, 2014/3

曾田めぐみ「河鍋暁斎筆『地獄極楽めぐり図』再考—幕末明治の表象と追善供養のかたち—」『美術史』第175号、pp. 53-67, 2013/10

高志緑「南宋時代の水陸画に関する復元的考察—個人蔵「諸尊降臨図」と知恩院蔵「羅漢集会図」を中心に—」『美術史』第175号、pp. 36-52, 2013/10

曾田めぐみ「河鍋暁斎筆『地獄極楽めぐり図』について(一) —勝田家菩提寺」『暁斎』第112号、pp.3-6, 2014/3

曾田めぐみ「河鍋暁斎筆『地獄極楽めぐり図』について(二) —勝田家と五代目尾上菊五郎」『暁斎』第112号、pp.7-9, 2014/3

曾田めぐみ「小田富彌旧蔵・月岡芳年下絵について」、『フィロカリア』第31号、pp.65-92, 2014/3

金岡直子「新たな審判図—ギュスターヴ・モロー作《天界を観想する大神パン》について—」『フィロカリア』第31号、pp.93-117, 2014/3

### (2)口頭発表

【2012年度】

〔博士前期〕

袴田舞「与謝蕪村筆《十二神仙図屏風》について」大阪教育大学芸術学研究会、大阪教育大学、2013/3/15

〔博士後期〕

- 曾田めぐみ「河鍋暁斎筆「地獄極楽めぐり図」に見る転換期の追善供養—法隆寺天保出開帳、極楽行き列車、そして五代目尾上菊五郎—」第 65 回美術史学会全国大会, 國學院大學, 2012/5/18
- 高志緑「南宋時代の水陸画について—水陸儀軌の変遷を手掛かりに—」第 65 回美術史学会全国大会, 國學院大學, 2012/5/19
- 高志緑「京都・清凉寺蔵釈迦如来立像旧厨子扉絵にみる宋代仏画の影響」日本美術に関する国際大学院生会議 (JAWS), 東京藝術大学美術学部附属古美術研究施設, 2012/8/21
- 【2013 年度】
- 〔博士後期〕
- 藤本真名美「谷口香嶺にみる絵画と工芸の交錯—美術染織品下絵・図案集を中心に」美術史学会西支部例会、京都工芸繊維大学 60 周年記念館, 2013/11/16
- 橋本遼太「絵巻諸作例の奥書について」第三回松崎天神縁起絵巻研究会、防府天満宮, 2014/2/15
- 高志緑「宋元時代の水陸画をめぐる」神仏習合研究会、京都大学, 2013/7/13
- 高志緑「泉涌寺蔵「諸天像」をめぐる考察—諸天の構成と配置に着目して—」美術史学会西支部例会、大和文華館, 2014/3/15
- 鏡山智子「法輪寺の薬師如来像と伝虚空蔵菩薩像について」第 66 回美術史学会全国大会、関西大学, 2013/5/12
- 西谷功「南宋時代の臨安・明州・台州周辺の諸寺院について—泉涌寺僧の参学寺院を中心に」、「東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態」第 1 回ワークショップ、京都大学人文科学研究所 本館大会議室, 2014/3/22
- 李鎮栄「統一新羅の十二神将像について」東方学会、日本教育会館, 2013/05/24
- 曾田めぐみ「河鍋暁斎筆『地獄極楽めぐり図』に見る勝田家菩提寺と五代目尾上菊五郎」、第 33 回暁斎研究会 蔵眼科レクチャーラーム (河鍋暁斎記念美術館), 2013/6/30
- 曾田めぐみ「歌川国芳筆『源頼光公館土蜘蛛妖怪図』再考—妖怪の図像源泉と五雲亭貞秀作品との関わりをめぐる—」、美術史学会西支部例会、大阪市立東洋陶磁美術館 (美術史学会), 2013/9/21
- 曾田めぐみ「河鍋暁斎筆『地獄極楽めぐり図』について (三) —「賽の河原」に描かれた赤い欄干に注目して—」、第 34 回暁斎研究会、河鍋暁斎記念美術館 (河鍋暁斎記念美術館), 2014/2/23
- 金岡直子「ギュスターヴ・モローの諸神混淆的作品—19 世紀末の宗教情勢からのアプローチ—」民族藝術学会第 29 回大会、郡山女子大学, 2013/4/28
- 鈴木慈子「学会誌『民族藝術学の現場』執筆／編集の方向性」民族藝術学会 第 131 回研究例会、国立国際美術館, 2013/9/28
- 中山龍一「市場戦略としての「パン・アメリカ主義」—リベラ作《この大陸にある北と南の芸術表現の結婚》(1940 年) とバレエ《H.P.》について—」スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会、早稲田大学戸山キャンパス, 2013/12/7
- 畑井恵「ピート・モンドリアンのアトリエ」第 24 回待兼山芸術学会、大阪大学豊中キャンパス, 2014/3/29

### (3) その他(書評・翻訳など)

- 【2012 年度】
- 〔博士前期〕
- 袴田舞『大阪大学総合学術博物館叢書 8 ものづくり上方“酒”ばなし—先駆・革新の系譜と大阪高等工業学校醸造科—』展覧会図録作品解説、大阪大学総合学術博物館, p. 15, 2012/10
- 袴田舞『大阪市史史料第 78 輯 小出権重の手紙—石濱純太郎宛書翰集—』翻刻補助・年譜作成、大阪市史料調査会発行, pp.28-159, 204-207, 2012/12
- 袴田舞『復刻版 大日本物産図会 解題』雄松堂書店, 表作成, p. 9, 13, 14, 2013/1
- 〔博士後期〕
- 鈴木慈子「EX ぎゃらりー カミュー・ピサロと印象派① 仏での出発点になった作品」SANKEI EXPRESS, 2012/7/2
- 鈴木慈子「EX ぎゃらりー カミュー・ピサロと印象派③ 空間の広がり表す構図」SANKEI EXPRESS, 2012/7/4
- 鈴木慈子「EX ぎゃらりー カミュー・ピサロと印象派⑤ 天候や光が生む無限の「効果」」SANKEI EXPRESS, 2012/7/6

鈴木慈子「カミーユ・ピサロと印象派—永遠の近代」『アート・ランブル』Vol.36, 兵庫県立美術館, p.4, 2012/9

鈴木慈子「コレクション展を味わう 赤鉛筆のアウトサイダー小幡正雄展」『Sea front シーフロント』Vol.64, 兵庫県立美術館「芸術の館友の会」, 2013/2

鈴木慈子『アート・ランブル』Vol.38「2012 年度コレクション展Ⅲ小企画「赤鉛筆のアウトサイダー 小幡正雄展」関連イベント」(p.7), 兵庫県立美術館, 2013/3

鈴木慈子「東アジアの近代美術調査」『アート・ランブル』Vol.38, 兵庫県立美術館, p.8, 2013/3

金岡直子「主要画家列伝」「人名・用語解説」巻末資料, 関野寺司監修・著『「ゴッホの夢」美術館：ポスト印象派の時代と日本』小学館, pp.182-187, 2013/3

**【2013 年度】**

〔博士前期〕

渡辺千尋『「ゴッホの夢」美術館：ポスト印象派の時代と日本』pp.178-179 ファン・ゴッホ関連年表, 小学館, 2013/3

笹野摩耶『重信房子メイ足立正生のアナバシス そして映像のない 27 年間』pp.3-8 翻訳担当, 京都国立近代美術館, 2013〔博士後期〕

鈴木慈子「赤鉛筆のアウトサイダー 小幡正雄」『アート・ランブル』Vol.39, 兵庫県立美術館, pp.2-3, 2013/6

鈴木慈子「いのちの色 美術に息づく植物」『アート・ランブル』Vol.40, 兵庫県立美術館, p.6, 2013/10

鈴木慈子 作家・作品解説『「東京・ソウル・台北・長春」展図録』, 兵庫県立美術館, pp.256-259, 2014/2

鈴木慈子「コレクションから 久保晃《カメラマン》」『アート・ランブル』Vol.42, 兵庫県立美術館, p.1, 2014/3

鈴木慈子「素晴らしい遊び場所」『民族藝術』Vol.30, 民族芸術学会, p.210-211, 2014/3

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2012 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)  
 2013 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2012 年度 学部 : 0 名 大学院 : 1 名 (計 1 名)  
 2013 年度 学部 : 0 名 大学院 : 1 名 (計 1 名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2012 年度～2013 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

中野悠	博士後期課程	愛知県立美術館	学芸員	2014/4
竹中哲也	博士後期課程	姫路市立美術館	学芸員	2014/4
河内華子	博士後期課程	大阪大学大学院文学研究科	助教	2013/4

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2012 年度～2013 年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2012 年度 : 0 名 2013 年度 : 0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名

その他 0名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2012年度：0名 2013年度：0名

## 9. 刊行物

2014年度 『フィロカリア』第30号

2015年度 『フィロカリア』第31号

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

美術史学会西支部例会 担当委員 圀府寺司

2013年9月21日

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

## 12. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 奥平 俊六 教授

1953年生。東京大学文学部(美術史)卒、同大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学。文学修士。國華社研究員、大阪府立大学総合科学部専任講師、大阪大学文学部助教授を経て現職。京都国立博物館客員研究員、大和文華館評議員など。専攻：日本美術史／中近世絵画史。

#### 1-1. 論文

奥平俊六 「カブキモノと阿国歌舞伎の図像」島根県立美術館『阿国歌舞伎展』島根県立美術館, pp. 6-18, 2013/9

奥平俊六 「山雪の受難、そして「雪汀水禽図」の画想」京都国立博物館『狩野山楽・山雪展』京都国立博物館, pp. 234-245, 2013/3

#### 1-2. 著書

奥平俊六 『屏風をひらくときどこからでも読める日本絵画史入門一』大阪大学出版会, 303p., 2014/3

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

奥平俊六(書評)「綿田稔『漢画師 雪舟の仕事』」『紫明』34, 紫明の会, p. 84, 2014/3

奥平俊六(書評)「泉武夫『竹を吹く人々—描かれた尺八奏者の歴史と系譜—』」『紫明』33, 紫明の会, p. 100, 2013/10

奥平俊六(監修)(特集)「洛中洛外図の歩き方」(監修)『サライ』2013年10月号, 小学館, pp. 72-83, 2013/9

奥平俊六(書評)「五十嵐公一著『京狩野三代生き残りの物語—山楽・山雪・永納と九条幸家—』」『紫明』32, 紫明の会, p. 88, 2013/3

奥平俊六(共編)(文献一覽)「参考文献」京都国立博物館(共編)『狩野山楽・山雪展』京都国立博物館, pp. 356-357, 2013/3

奥平俊六(巻頭エッセイ)「遺すこと、伝えること」懷徳堂記念会『懷徳堂だより』94, (財)懷徳堂記念会事務局, p. 1, 2013/2

奥平俊六(書評)「峰岸純夫・江田郁夫編『足利尊氏再発見—一族をめぐる肖像・仏像・古文書—』」『紫明』31, 紫明の会, p. 98, 2012/10

奥平俊六(番組監修)「超時空トラベル・秋 京都に恋!」NHK『BSプレミアム』NHK, 2012/10

奥平俊六(新聞)「今週の本棚・この3冊:風俗画」『毎日新聞』毎日新聞社, 2012/9

#### 1-4. 口頭発表

---

奥平俊六 (パネリスト)「江阿弥と若冲」若冲シンポジウム, 細見美術館・京都造形芸術大学, 京都造形芸術大学春秋座, 2013/11

奥平俊六 (招待講演)「カブキモノと歌舞伎の記憶—路上、舞台、そして絵の中—」島根県立美術館「阿国歌舞伎展」講演会, 島根県立美術館「阿国歌舞伎展」講演会, 島根県立美術館, 2013/10

奥平俊六 (招待講演)「山雪の受難、そして『雪汀水禽図』の画想」京都国立博物館「狩野山楽・山雪展」講演会, 京都国立博物館, 京都テルサ, 2013/4

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

奥平俊六 國華賞(第2回), 国華社・朝日新聞社, 1990/10

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

#### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

国際交流基金・フリーア美術館「SOTATSU 展(仮称)」日本側学術委員, 2013年8月～現在に至る

豊中市・文化財保護審議会委員, 2012年4月～現在に至る

丹波市・植野記念美術館運営委員, 2010年4月～現在に至る

社会福祉法人素王会アトリエインカーブ・評議員, 2006年5月～2014年3月

大和文華館・評議員, 2005年4月～現在に至る

丹波市・文化財保護審議会委員, 2005年4月～現在に至る

京都国立博物館・客員研究員, 1999年4月～現在に至る

山口県立美術館・収集審査委員, 1998年4月～現在に至る

## 2. 園府寺司教授

1957年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren(文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻: 西洋美術史・アート・メディア論

#### 2-1. 論文

---

なし

#### 2-2. 著書

---

園府寺司他(編)『「ゴッホの夢」美術館: ポスト印象派の時代と日本』小学館, 191p., 2013/3

#### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

#### 3-4. 口頭発表

---

園府寺司 (招待講演)「『日本の夢』を超えて ―ファン・ゴッホ最晩年のジャポニスム。浮世絵展、ルイ・デュムラン、ウォルポール・ブルックナー」ゴッホ展開催記念 国際シンポジウム, 広島県立美術館, 2013/7

Kodera, Tsukasa, (招待講演)“Van Gogh and Japan Visions of Utopia”, 単独講演, カナダ国立美術館 (オタワ), 2012/6

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

園府寺司 大阪大学共通教育賞(2009年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2009/11

園府寺司 Praemium Erasmunianum(エラスムス研究賞), Stichting Erasmusprijs エラスムス財団, 1989/2

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2009年度～2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者:園府寺司

課題番号:21320029

研究題目:イディッシュ語文化圏における芸術活動の研究

研究経費: 2012年度 直接経費 2,600,000円 間接経費 780,000円

2013年度 直接経費 2,200,000円 間接経費 660,000円

研究の目的:

本研究は、中東欧のイディッシュ語文化圏における芸術活動、ならびに19世紀末から20世紀初頭にかけてのボグロムによって西欧やアメリカに移住したイディッシュ語文化圏出身の芸術家たちの活動を主たる研究対象とし、この国家なき言語文化圏の芸術の様相を明確に浮き彫りにするとともに、それらが近代芸術史の中で果たしてきた役割を明確にすることを目的とする。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

独立行政法人 国立美術館・外部評価委員, 2010年4月～現在に至る

国際美術史学会 CIHA・国内委員, 2009年4月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 2000年4月～現在に至る

## 3. 橋爪 節也 教授

1958年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。東京芸術大学美術学部附属古美術研究施設助手、大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室主任学芸員。専攻:日本美術史/近世近代絵画史。

### 3-1. 論文

---

橋爪節也 「画家とポスターの緩やかな周辺 ―大阪モダニズムの画家三熊」美術フォーラム 21『美術フォーラム 21』27, 醍醐書房, pp. 79-85, 2013/5

橋爪節也 「木村兼葭堂のイメージについての三つのメモ

―知の巨人・視覚人間・若冲―」民族芸術学会『民族芸術』(民族芸術学会), 29, 民族芸術学会, pp. 54-59, 2013/3

橋爪節也 「小出檜重の石濱純太郎宛書翰 ―大正十年、十一年の渡米を中心に―」大阪市史編纂所『大阪市史史料』78, 大阪市史料調査会, pp. 4-26, 2012/12

### 3-2. 著書

---

橋爪節也, 加藤瑞穂(編)『大阪大学総合学術博物館叢書(9) 戦後大阪のアヴァンギャルド芸術 ―焼け跡から万博前夜まで―』大阪大学出版会, 2013/5

橋爪節也, 曾田めぐみ 『大日本物産図会』雄松堂書店, ケンシヨク本『大日本物産図会』から見えてくるもの —研究の現状と課題—, 2013/1

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

橋爪節也 「戦後の大阪文化テーマに講演会「おもしろいもの作っていた」『産経新聞』産業経済新聞社, 2014/3

橋爪節也 「おおさかKEYワード 第44回浪華は春も早く来るらし 一女性画家が切りとる子どもたちの日常—」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』377, 大阪市教育委員会, p. 3, 2014/3

橋爪節也 「大学博物館と美術展「オオサカがとんがっていた時代」展を通じて」『シンポジウム アートリソースの活用と大学附属美術館の設置』筑波大学芸術系, pp. 17-28, 2014/3

橋爪節也 (インタビュー)「館長インタビュー④ 橋爪節也」『吹田市立博物館だより』57, 吹田市立博物館, pp. 10-11, 2014/3

橋爪節也 「おおさかKEYワード 第43回初午祭りや神樹のある風景 庶民信仰の生きる街を歩く」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』376, 大阪市教育委員会, p. 3, 2014/2

橋爪節也 「「絵を飾る人のキモチ」第3回「モナリザ」がわが家にきたら……それと《香里風景》の謎解きとは」『SUMUFUMULAB COLUMN「いきかたのカタチ」』積水ハウス, Web 掲載, 2014/2

橋爪節也 「AS TIME GOES BY ～時の過ぎゆくまに～O Freunde, nicht diese Töne!——おお友よ、このような音ではない！」『WHOLE EARTH MAGAZINE FM COCOLO』4, MtS Publishing Factory, p. 36, 2014/1

橋爪節也 「「道頓堀プール」大正時代すでにあった”構想”、それより欲しいのは「博物館」…橋爪節也氏指摘」『msn 産経ニュースwest』産経デジタル, (Web 掲載) 2014/1

橋爪節也 「熱風の日本史 第19回 未来都市へ“民族大移動”(昭和)遠見卓見 万博経験者の聞き取り必要」『日本経済新聞』日本経済新聞社, 2014/1

橋爪節也 (コメント)「間奏曲「心ぶら」と共に消えた「カワチ」」『読売新聞』読売新聞社, 2014/1

橋爪節也 (イベント情報)「大阪を再発見する講座 企業家ミュージアム、受講募集」『毎日新聞』毎日新聞社, 2014/1

橋爪節也 「おおさかKEYワード 第42回なにわの輩はとこしえに 百人一首から現代芸術まで」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』375, 大阪市教育委員会, p. 3, 2013/12

橋爪節也 (インタビュー)「舞台の遺伝子 知的好奇心の源流 脈々と」『産経新聞』産業経済新聞社, 2013/11

橋爪節也 「特集 浪速なんでも大阪 名所探訪 いまむかし」『てんとう虫』589, (株)アダック, pp. 10-15, 18-22, 2013/11

橋爪節也 「おおさかKEYワード 第41回町の名が喚起するもの 山崎豊子と織田作之助の小説へ」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』374, 大阪市教育委員会, p. 3, 2013/11

橋爪節也 「AS TIME GOES BY ～時の過ぎゆくまに～ジャズるモダン大阪——二つの復刻版」『WHOLE EARTH MAGAZINE FM COCOLO』3, MtS Publishing Factory, p. 36, 2013/10

橋爪節也 (コメント)「話題を追う 誇りと郷土心 育む場に」『大阪日日新聞』新日本海新聞社, 2013/10

橋爪節也 「おおさかKEYワード 第40回 讃えよ地下鉄 スピード時代 — 大大阪地下鉄行進曲—」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』373, 大阪市教育委員会, p. 3, 2013/10

橋爪節也 「大阪市立工芸高等学校創立90年 デザイン教育研究所創立25周年記念 記念誌特別寄稿“大大阪”の申し子として—市立工芸の原点—」『2013年 芸草』大阪市立工芸高等学校、大阪市立デザイン教育研究所, pp. 124-125, 2013/10

橋爪節也 「近代大阪と女性画家の時代 一第三回 生田花朝—」『やそしま』7, (公財)関西・大阪21位世紀協会、上方文化芸能運営委員会, pp. 98-139, 2013/10

橋爪節也 「おおさかKEYワード 第39回 ここに泉あり 街に流れる大阪クラシック」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』372, 大阪市教育委員会, p. 3, 2013/9

橋爪節也 「「絵を飾る人のキモチ」第2回「夫婦善哉」の時代を飾った洋画家・小出檜重」『SUMUFUMULAB COLUMN「いきかたのカタチ」』積水ハウス, Web 掲載, 2013/9

橋爪節也 (コメント)「「具体美術協会」高まる再評価 大阪的個性 世界を魅了 型にはまらぬ集団生む」『読売新聞』読売新聞社, 2013/9

- 橋爪節也 「絵のなかの“大大阪”」オダサク倶楽部『織田作之助の大阪 生誕 100 年記念』株式会社平凡社, pp. 57-67, 2013/9
- 橋爪節也 「「大阪惜愛」複雑な郷愁」『読売新聞』読売新聞社, 提供資料掲載, 2013/9
- 橋爪節也 「「大大阪」時代の息吹を現代に。庶民的でモダンな『大大阪』夕刊『毎日新聞』株式会社 毎日新聞社, p. 7, 「大大阪」の時代を特集, 2013/9/28
- 橋爪節也 (イベント情報)「織田作之助と大大阪展 新資料 10 点公開「夫婦善哉」草稿も」『産経新聞』産業経済新聞社, 2013/9
- 橋爪節也 「おおさか KEY わーど 第 38 回 それでも私は行く 生誕 100 年 織田作之助」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』371, 大阪市教育委員会, p. 3, 2013/8
- 橋爪節也 「アートなる人々 芝川照吉の周辺 一竹本彌太夫、木谷蓬吟・千種、吉岡重三郎」『視る』466, 京都国立近代美術館, pp. 5-8, 2013/8
- 橋爪節也 「オダサク本の装釘家たち 時代の香りが書棚に燻って……」『織田作之助 昭和を駆け抜けた伝説の文士“オダサク”』河出書房新社, pp. 164-171, 2013/8
- 橋爪節也 「おださくが歩いた大阪」『産経新聞』産業経済新聞社, 2013/8
- 橋爪節也 (イベント情報)「ラボカフェ 織田作之助生誕 100 周年」(編)『日本経済新聞』日本経済新聞社, 2013/8
- 橋爪節也 「AS TIME GOES BY ～時の過ぎゆくまに～“アヴァンギャルド”の夢をみる。「大阪の秋 国際現代音楽祭」」『WHOLE EARTH MAGAZINE FM COCOLO』2, MtS Publishing Factory, p. 34, 2013/7
- 橋爪節也 「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く 5 スポーツあれこれ」『大阪春秋』151, 新風書房, pp. 101-103, 2013/7
- 橋爪節也 「おおさか KEY わーど 第 37 回“怪談” “お化け屋敷”で涼みましょ 今昔館で「肝だめし」」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』370, 大阪市教育委員会, p. 3, 2013/7
- 橋爪節也 「WHOOPEE! WHOOPEE! 大大阪!」『大大阪ジャズ JAZZ in The GREAT OSAKA ブックレット』(序文)ぐらもくらぶ, 2013/7
- 橋爪節也 「表紙解説 森 琴石『天神渡御之図』(銅版画)」『大阪天満宮社報 てんまてんじん』64, 大阪天満宮社務所, p. 2, 2013/7
- 橋爪節也 「座談 I 「道頓堀ジャズ」の可能性 ——ジャズの初期受容をめぐって」『ニッポンジャズ水滸伝 地之巻 ブックレット』華宙舎, pp. 30-42, 2013/6
- 橋爪節也 「おおさか KEY わーど 第 36 回 オオサカはとんがっていたか? アヴァンギャルド芸術がさかんだった大阪」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』369, 大阪市教育委員会, p. 3, 2013/6
- 橋爪節也 「踊る大道頓堀—DOUTONBORI—“道頓堀ジャズ”街のヴィジュアルを追体験する」ブックレット『ニッポンジャズ水滸伝 地之巻』華宙舎, pp. 21-29, 2013/6
- 橋爪節也 (イベント情報)「美術都市大阪 作品から感じて「パリ—大阪展」で解説」『読売新聞』読売新聞社, 2013/5
- 橋爪節也 「いまドキ関西 とんがっていた時代伝える 大阪の芸術・文化を再検証」『日本経済新聞』日本経済新聞社, 2013/5
- 橋爪節也 「おおさか KEY わーど 第 35 回 商売繁盛の神様、古代ローマより飛来す かしこくて素早い商都の守り神」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』368, 大阪市教育委員会, p. 3, 2013/5
- 橋爪節也 (コメント)「昭和時代 第 3 部 戦前・戦中期(1926～44 年) 第 7 回」『読売新聞』読売新聞社, 2013/4
- 橋爪節也 「AS TIME GOES BY ～時の過ぎゆくまに～ 二〇世紀少年、EXPO'70 の年にラジオに目覚める」『WHOLE EARTH MAGAZINE FM COCOLO』1, MtS Publishing Factory, p. 34, 2013/4
- 橋爪節也 「おおさか KEY わーど 第 34 回 “桜咲く国のカクテル”少女歌劇団のレビューに酔う」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』367, 大阪市教育委員会, p. 3, 2013/4
- 橋爪節也 「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く 4 追悼 藤本義一さんの思い出」『大阪春秋』150, 新風書房, pp. 97-99, 2013/4
- 橋爪節也 「「絵を飾る人のキモチ」第 1 回 絵のある最初は? —個人的記憶から」『SUMUFUMULAB COLUMN「いきたのカタチ」』積水ハウス, Web 掲載, 2013/4
- 橋爪節也 「おおさか KEY わーど 第 33 回 大阪名物つりがね物語 どこまで届くか、鐘にこめたメッセージ」大阪市教育委員会 『生涯学習情報誌「いちよう並木」』366, 大阪市教育委員会, p. 3, 2013/3
- 橋爪節也 「本のなかのモダン・オオサカ漂流 —文芸・アート編—」日本古書通信社『日本古書通信』1004, 日本古書通信社, pp.



4-6, 2013/3

- 橋爪節也 「『大阪市史史料』第78輯 一石濱純太郎宛小出檜重書翰の調査研究と資料集刊行一」大阪大学大学院文学研究科・共生文明論講座『平成24年度 大阪大学文学研究科共同研究 研究成果報告書「東洋学者・石濱純太郎をめぐる学術ネットワークの研究』』大阪大学大学院文学研究科・共生文明論講座, pp. 21-22, 2013/3
- 橋爪節也 「明治の気風 香る天井画(旧大阪府立博物館天井画)」『読売新聞』株式会社 読売新聞社, 2013/3
- 橋爪節也 「おおさか KEY わーど 第32回 “道頓堀ジャズ”の時代 一街にみなぎる音楽の活気ふたたび」大阪市教育委員会『生涯学習情報誌「いちょう並木」』365, 大阪市教育委員会, p. 3, 2013/2
- 橋爪節也 「語りだす表紙」リーガロイヤルホテル(監修)『The ROYAL』リーガロイヤルホテル, p. 6, (資料提供) 2013/2
- 栗本智代, 橋爪節也 (インタビュー記事)「アートなミナミを回遊する 心齋橋筋から法善寺界限を経て日本橋まで」株式会社 創元社『カリスマ案内人で行く 大阪まち歩き』株式会社 創元社, pp. 10-45, 2013/2
- 古川武志, 成瀬國晴, 橋爪節也 「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く 3 芸能・芸人あれこれ」大阪春秋 編集室『大阪春秋』149, 新風書房, pp. 83-85, 2013/1
- 橋爪節也 「おおさか KEY わーど 第31回 元禄時代の三文豪で年末年始 一井原西鶴、松尾芭蕉、近松門左衛門一」大阪市教育委員会『生涯学習情報誌「いちょう並木」』364, 大阪市教育委員会, p. 3, 2012/12
- 橋爪節也 「おおさか KEY わーど 第30回 “うどん屋の釜”ではあきまへんで 一浪花のしゃれ言葉は商都の潤滑油一」大阪市教育委員会『生涯学習情報誌「いちょう並木」』363, 大阪市教育委員会, p. 3, 2012/11
- 橋爪節也 「今昔探訪中之島 3 “知の聖堂”中之島にあり 一そこにも浪華大阪の個性が一」大阪国際フォーラム(監修)『大阪 中之島 今昔案内』3, 大阪国際フォーラム, 中之島の案内 MAP, 2012/10
- 橋爪節也 「近代大阪と女性画家の時代 一第二回 木谷千種一」財団法人 上方文化芸能協会(編)『やそしま』6, 財団法人 上方文化芸能協会, pp. 4-41, 2012/10
- 橋爪節也 「熱い時代の遊子ふたたび」財団法人 天門美術館(編)『思索する彫刻家 YUSHI』財団法人 天門美術館, pp. 5-8, 画集巻頭論文, 2012/10
- 古川武志, 成瀬國晴, 橋爪節也 「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く 2(特別編) スミカズの絵って、どない思います？」大阪春秋 編集室『大阪春秋』148, 新風書房, pp. 64-66, 2012/10
- 橋爪節也 「“大阪の夢二”こと、宇崎スミカズは大阪画壇のどこに立っていたのか」大阪春秋 編集室『大阪春秋』148, 新風書房, pp. 68-73, 2012/10
- 橋爪節也 「おおさか KEY わーど 第29回 “大阪の夢二”と呼ばれた画家 一宇崎スミカズ 忘れられた大阪の大正ロマン一」大阪市教育委員会『生涯学習情報誌「いちょう並木」』362, 大阪市教育委員会, p. 3, 2012/10
- 桂米団治, 橋爪節也 「上方芸能は大阪の原点 対談 落語家 桂米団治×大阪大教授 橋爪節也」『読売新聞』株式会社 読売新聞社, 2012/9
- 橋爪節也 「おおさか KEY わーど 第28回 “秋立つや何におどろく陰陽師” 蕪村から安倍清明、文楽、落語にいたる旅」大阪市教育委員会『生涯学習情報誌「いちょう並木」』361, 大阪市教育委員会, p. 3, 2012/9
- 橋爪節也 「浪花おもしろ図鑑 お奉行ごともイチビって」株式会社 産経新聞社『産経新聞』株式会社 産経新聞社, 2012/8
- 橋爪節也 「おおさか KEY わーど 第27回 八月の風物詩 四天王寺の《万灯供養法要》」大阪市教育委員会『生涯学習情報誌「いちょう並木」』360, 大阪市教育委員会, p. 3, 2012/8
- 橋爪節也 「おおさか KEY わーど 第26回 いとさん こいさん 船場の姉妹、美人画になる」大阪市教育委員会『生涯学習情報誌「いちょう並木」』359, 大阪市教育委員会, p. 3, 2012/7
- 橋爪節也 「特集 文楽を守れ！肩代わりしましょか」上方芸能 編集部(編)『季刊 上方芸能』184, 上方芸能 編集部, p. 57, 2012/6
- 橋爪節也 「浪花おもしろ図鑑 国民 1 日禁酒で爆撃機 20 台に」株式会社 産経新聞社『産経新聞』株式会社 産経新聞社, 2012/6
- 橋爪節也 (コメント掲載)「ナニワ文化の遺伝子 ——消滅か存続か 中」『産経新聞』株式会社 産経新聞社, 2012/6
- 橋爪節也 「おおさか KEY わーど 第25回 さても典雅な時代絵巻 住吉大社の御田植神事」大阪市教育委員会『生涯学習情報

誌「いちょう並木」』358, 大阪市教育委員会, p. 3, 2012/6

橋爪節也「幕末大坂の大ヒット錦絵！名所のことなら『浪花百景』に聞け。」(財)大阪市都市工学情報センター(編)『大阪人』66, (財)大阪市都市工学情報センター, pp. 22-41, 2012/5

橋爪節也(推薦文)「町田久美《山》2011年」日本経済新聞社(編)『第5回 東山魁夷記念 日経日本画大賞展 図録』日本経済新聞社, p. 58, 第5回 東山魁夷記念 日経日本画大賞推薦文, 2012/5

橋爪節也「浪花おもしろ図鑑 シュールな中之島」株式会社 産経新聞社『産経新聞』株式会社 産経新聞社, 2012/5

橋爪節也「宗像健一編著『田能村竹田基本画譜』『美術フォーラム 21』第25号, 特集:茶の湯——スキの芸術(熊倉功夫 編集), 醍醐書房, pp. 116-119, 2012/5

橋爪節也「おおさかKEYワード 第24回 美しき“都市美” モダニズムの中之島」大阪市教育委員会『生涯学習情報誌「いちょう並木」』357, 大阪市教育委員会, p. 3, 2012/5

橋爪節也「南北久宝寺町の文化史スケッチ —書肆、音楽、美術に触れて—」協同組合 大阪久宝寺町卸連盟(編)『設立五十周年記念誌』協同組合 大阪久宝寺町卸連盟, pp. 83-104, 2012/4

古川武志, 成瀬國晴, 橋爪節也「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く1」大阪春秋 編集室『大阪春秋』146, 新風書房, pp. 74-76, 2012/4

橋爪節也「おおさか KEY ワード 第23回 春風や堤長うして家遠し 与謝蕪村「春風馬堤曲」」大阪市教育委員会『生涯学習情報誌「いちょう並木」』356, 大阪市教育委員会, p. 3, 2012/4

### 3-4. 口頭発表

橋爪節也「「音楽・記号・光」—アートが街のデザインを変えた— きみはアストロメカニクールを知っていますか？ あなたはアストロメカニクールを憶えていますか！」(トークサロン)大阪大学 21世紀懐徳堂塾 OSAKAN CAFÉ, アートエリア B1, 大阪大学 21世紀懐徳堂, アートエリア B1, 2014/3

橋爪節也「～これらを知らずにオオサカを語るなかれ、大阪市中央公会堂の天井画・壁画とミネルバ、メルキュールの像～」サロン・ド・中之島 ～もっと好きになる公会堂 vol.4～:講演・交流会“大大阪”再発見, 大阪市中央公会堂指定管理者、サントリーパブリシティーサービス・グループ, 大阪市中央公会堂, 2014/3

橋爪節也「研究発表 5 旧そごう心齋橋本店・藤川勇造《飛躍》の像再考 —商都の象徴としてのメルクリウスとかわかって—」大正イマジュリイ学会 第11回全国大会, 大正イマジュリイ学会, 京都工芸繊維大学, 2014/3

橋爪節也「絵のある空間 その素敵な生活へのヒント」SUMUFUMULAB コラムニスト×研究員住ムフムセッション 第8回, 積水ハウス, 積水ハウス住ムフムラボ, 2014/2

橋爪節也「大阪の企業家、アートに遊ぶ —佐伯祐三を発見した蒐集家・山本發次郎と前衛美術団体『具体美術協会』の吉原治良—」講座・おおさかを知る ～昭和モダンから高度経済成長期まで～:第1回/大阪と美術, 大阪商工会議所 大坂企業家ミュージアム, 大阪企業家ミュージアム, 2014/1

橋爪節也「大阪大学博物館長賞、待兼山賞表彰」豊中市小・中学校理科展表彰式, 豊中市教育センター, 豊中市教育センター, 2013/12

成瀬國晴, 橋爪節也, 池上淳子「～歴史と賑わいをはしわたす～戎橋筋商店街の魅力」講演会&シンポジウム「賑わいとふれあいの街・戎橋筋—100年の歴史を未来にはしわたす」シンポジウム, 大阪市立中央図書館, 大阪市立中央図書館, 2013/11

橋爪節也 (基調講演)「歴史と記憶をつなぐ—「オオサカがとんがっていた時代」を通じて」大学博物館、街に出る これでいいのか？ 大阪のミュージアム —地域文化と学術研究の担い手を目指して—:第1部 基調報告, 大阪大学総合学術博物館、大阪商業大学商業史博物館, 大阪大学中之島センター, 2013/11

橋爪節也, 明尾圭造, 菅谷富夫 (パネリスト)「これでいいのか？ 大阪のミュージアム—それぞれの立場から—」大学博物館、街に出る これでいいのか？ 大阪のミュージアム —地域文化と学術研究の担い手を目指して—:第2部 ディスカッション, 大阪大学総合学術博物館、大阪商業大学商業史博物館, 大阪大学中之島センター, 2013/11

ピーター・ニズベット, 橋爪節也, 栗田秀法他 (パネリスト)「アート・リソースの活用と大学附属美術館の設置 —開学 50周年にむけたリサーチ・ユニヴァーシティ機能の拡充」筑波大学開学 40+101 周年記念事業 シンポジウム, 筑波大学芸術系、筑波大学

- 芸術学美術史学会、科学研究費補助金 基盤研究(B)「大学における『アート・リソース』の活用に関する基礎的研究」, 筑波大学, 2013/11
- 橋爪節也 「独談「大坂の知の巨人」木村兼葎堂を語る」ラボカフェスペシャル×鉄道芸術祭「上方本談、どこまでも話す年 其の五」, アートエリア B1[大阪大学+NPO 法人ダンスボックス+京阪電気鉄道(株)], アートエリア B1, 2013/11
- 橋爪節也 「オダサクと画家、そしてミナミ」第 34 回 文学碑記念の集い, 大阪市・大阪市文化振興事業実行委員会, 大平寺, 2013/10
- 橋爪節也 「近代大阪と南画」平成 25 年度秋季特別展 池田遊子と知られざる日本絵画 —近代南画の世界— 展 記念講演会, (財)天門美術館, 天門美術館, 2013/10
- 橋爪節也 「戦後大阪の”アバンギャルド芸術”再考 —戦前のモダニズムから読み直す—」第 45 回 大阪大学公開講座, 大阪大学, 大阪大学中之島センター, 2013/9
- 橋爪節也 「織田作之助と大大阪時代」大阪歴史博物館 特別企画展「生誕 100 年記念 織田作之助と大大阪」関連行事 講演会, 織田作之助生誕 100 周年記念事業推進委員会、大阪歴史博物館, 大阪歴史博物館, 2013/9
- 橋爪節也, 高橋俊郎, 出原隆俊他 (イベント情報)「織田作之助生誕 100 周年 おださくが歩いた大阪」大阪大学 21 世紀懐徳堂 塾 OSAKAN CAFÉ, アートエリア B1[大阪大学+NPO 法人ダンスボックス+京阪電気鉄道(株)](トークサロン)、大阪大学 21 世紀懐徳堂, アートエリア B1, 2013/8
- 五十殿利治, 小林俊介, 橋爪節也 (ディスカッサント)「大学とミュージアム」国際シンポジウム, 科研共同研究<<大学における「アート・リソース」の活用に関する基礎的研究>>, 九州大学創立五十周年記念講堂, 2013/8
- 橋爪節也 「「浪花百景」を読み解く -近世大坂観光への誘い-」潁川美術館 開館 40 周年記念 文化講座, 公益財団法人 潁川美術館, 潁川美術館, 2013/7
- 橋爪節也 「文楽座学」八丁目さしておちていく ～「浪花百景」にみる大阪と「夏祭浪花鑑」の周辺～, 国立文楽劇場 文楽劇場友の会, 国立文楽劇場, 2013/7
- 橋爪節也 「オオサカがとんがっていた時代 —戦後大阪のアヴァンギャルド芸術」『戦後大阪のアヴァンギャルド芸術』刊行記念トークイベント, 紀伊國屋書店グランフロント大阪店, 紀伊國屋書店グランフロント大阪店, 2013/7
- 橋爪節也 (案内人の一人として)「話題のリチウム電池船で行く 水都大阪スペシャルツアー」エクスカーション(第一部), 芸術工学会 2013 年度春期大会, 大阪～京都, 2013/6
- 橋爪節也 (案内人として)「ディープな大阪まち歩き」エクスカーション(第二部), 芸術工学会 2013 年度春期大会, 大阪～京都, 2013/6
- 橋爪節也 「探検! 発見! 関西の近代化遺産 2 ～アートと建築まち巡り～」地域文化創造セミナー:『関西の文化・芸能・まちづくりを考える』第 3 回, 追手門学院大学『地域文化創造機構』、明治安田生命『関西を考える会』, 追手門学院 大阪梅田サテライト, 2013/6
- 橋爪節也 「船場・島之内の街と芸術」大阪の地域文化を照射する 第 3 回, 追手門学院大学校友会, 追手門学院 大阪梅田サテライト, 2013/6
- 田中敏雄, 中谷伸生, 橋爪節也 「大坂画壇座談会」吹田市立博物館 平成 25 年度 第 1 回企画展「吹田村庄屋 気比家の絵画」座談会, 吹田市立博物館, 吹田市立博物館, 2013/6
- 橋爪節也 (案内人として)「屋外モニュメント探索ツアー 豊中・大阪編」街の風景にアヴァンギャルドを探る, 豊中市, 豊中市内～大阪市内, 2013/6
- 橋爪節也 「ディスプレイの力、展示装飾のパラダイス —江戸時代の大阪ディスプレイから EXPO'70 まで—」大阪ディスプレイ協同組合 創立 50 周年記念式典 記念講演会, 大阪ディスプレイ協同組合, ホテル日航大阪, 2013/5(『大阪ディスプレイ協同組合 創立 50 周年記念誌』pp. 12-17, 2014/3)
- 橋爪節也, 島田佳代子, 小栗一輝他 「医療文化財研究:生薬標本の統計的数値化による新規解析法の構築と応用」第 8 回博物科学会, 博物科学会, 宮崎大学農学部附属農業博物館, 2013/5
- 橋爪節也 「美術都市大阪発見 —ミラボー橋の下、セーヌが流れ、“大大阪”にはモダニズムが香る」パリー大阪 街と芸術をめぐる物語, 大阪市、読売新聞社、大丸松坂屋百貨店、大丸ミュージアム梅田, 2013/5

今村益三, 亀井茂, 橋爪節也他 「(座談会)」大阪大学 21 世紀懷徳堂塾 OSAKAN CAFÉ:大阪テレビは凄かった, アートエリア B1[大阪大学+NPO 法人ダンスボックス+京阪電気鉄道(株)], 大阪大学 21 世紀懷徳堂, アートエリア B1, 2013/3

橋爪節也 「(講演)」【Wao!Yao! 八尾の入り口】140B 発刊記念イベント, 隆祥館書店, 隆祥館書店, 2013/3

橋爪節也 「映像で見るモダン都市  
—映画「大大阪観光」と中之島、住吉、大阪の街—」平成 25 年 住吉大社 セミナー, 住吉大社, 住吉大社, 2013/3

橋爪節也 「明治 21 年、幻の天井画再発見！  
～大阪博物館と大阪画壇の画家たち～」コミュニケーションカフェ, 枚方市, 関西医科大学, 2013/3

伊東 雄, 河内 厚郎, 橋爪節也他 (審査員として)第 50 回 なにわ芸術祭新人賞選出, 新進落語家競演会, 上方落語協会、産経新聞社, 天満天神繁昌亭, 2013/1

橋爪節也 「近代大阪の女性画家」男女共同参画学習グループ講座, 堺市, サンスクエア堺, 2013/1

山田俊幸, 橋爪節也, 河村章代 (パネリスト)「大正ロマンのイメージ」大正イマジュリイ学会 第 27 回研究会(シンポジウム), 大正イマジュリイ学会, 高知県立文学館, 2012/12(『大正イマジュリイ』8, 2013/3)

橋爪節也 「大阪の文人画とは？  
—兼葎堂・米山人から琴石・鉄斎まで—」第 1 回聖光文庫文化講座 第 1 講, 鉄斎美術館、宝塚市立中央図書館(聖光文庫), 宝塚市立中央図書館, 2012/12

橋爪節也 「大阪の洋画家 小出檜重 —その人生と画業—」平成 24 年度史料でたどる「おおさか」講演会, 大阪市立中央図書館, 大阪市立中央図書館, 2012/12

橋爪節也 「『浪花百景』の絵に遊ぶ」摂南大学国際教養セミナー, 摂南大学外国語学部、大阪市立住まい情報センター, 大阪市立住まい情報センター, 2012/12

橋爪節也, 高橋亨, 熊田司他 (趣旨説明と司会)大阪大学総合学術博物館創立 10 周年記念シンポジウム:「オオサカがとんがっていた時代大阪のアヴァンギャルド芸術—焼け跡から万博前夜まで—」, 大阪大学総合学術博物館, 大阪大学総合学術博物館, 2012/11

橋爪節也 「大阪と文人画」大阪商業大学商業史博物館 平成 24 年秋季企画 展覧会  
連続講座 5, 大阪商業大学 商業史博物館, 大阪商業大学, 2012/10

橋爪節也, 小谷真功, 伊原セイチ他 (アートトーク司会として)第 1 回 高津宮 とこしえ秋まつり:アートトーク, 高津宮, 高津宮, 2012/10

角野幸博, 高田光雄, 橋爪節也他 (討論会論者として)「市政改革プランと住まい情報センター&住まいのミュージアム」:公開討論, 都市住宅学会関西支部、日本建築学会近畿支部住宅部会, 大阪市住まい情報センター, 2012/7

橋爪節也 「描かれたモダン都市 —小出檜重・佐伯祐三・池田遙邨が見た大大阪—」開館 40 周年記念 文化講座, 公益財団法人 颯川美術館, 颯川美術館, 2012/7

橋爪節也 「美術都市・大阪」大阪文化の深読み講座(第 4 回), 学校法人 追手門学院 大阪城スクエア, 追手門学院 大阪城スクエア, 2012/7

橋爪節也 (招待講演)「大阪久宝寺町の文化史」大阪久宝寺町卸連盟 50 周年記念式典, 協同組合大阪久宝寺町卸連盟, 大阪久宝寺町卸連盟会館, 2012/4

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なにわ芸術祭新人選出「新進落語家競演会」・審査員, 2013年11月～現在に至る

「移動博物館車」ラッピングデザイン審査委員会・審査委員, 2012年10月～現在に至る

美術史学会・西支部常任委員, 2012年5月～現在に至る

大阪市市民表彰審査会・臨時委員, 2012年4月～現在に至る

(仮称)今東光資料館基本構想に関する検討会・委員, 2012年4月～現在に至る

大正イマジユリ学会・常任委員, 2012年3月～現在に至る

(仮称)豊中市文化芸術センター開設準備チーム・建築設計アドバイザー, 2011年4月～現在に至る

## 4. 藤岡 穰 教授

1962年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。大阪市立美術館学芸員、大阪大学大学院文学研究科助教授、同准教授を経て、2009年4月より現職。1991年に第3回国華賞。専攻：東洋美術史。

### 4-1. 論文

---

藤岡穰 「關山神社蔵 菩薩立像」国華社『国華』1420, 国華社, pp. 20-26, 2014/2

Fujioka, Yutaka, "The mass-Production of Buddhist Sculptures in the Late Heian Period and a Buddhist Sculptor Jōchō" Verlag der Germanischen Nationalmuseums *The Challenge of the Object, 33rd Congress of the International Committee of the History of Art, Congress Proceedings*, (International Committee of the History of Art), 3, Verlag der Germanischen Nationalmuseums, pp. 20-26, 2013/12

藤岡穰 「飛鳥仏と中国・南朝様式」朝日新聞出版『週刊新発見！日本の歴史』3, 朝日新聞出版, pp. 34-36, 2013/7

藤岡穰 「興福寺南円堂四天王像の再検討－新たな運慶イメージの構築－」大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座『フイロカリア』(待兼山芸術学会), 30, 待兼山芸術学会, pp. 95-139, 2013/3

藤岡穰 「様式からみた新薬師寺薬師如来像」林温(共著)『様式論－スタイルとモードの分析』(仏教美術論集), 1, 竹林舎, pp. 32-55, 2012/10

### 4-2. 著書

---

なし

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 4-4. 口頭発表

---

藤岡穰 (パネリスト)「半跏思惟像科研における金銅仏の科学的調査の成果と課題」第1回公開セミナー:5～9世紀東アジア金銅仏の日韓共同研究, 日本学術振興会科学研究費助成金(基盤研究(A))「5～9世紀東アジア金銅仏の日韓共同研究」, 大阪大学文学研究科大会議室, 2013/10

藤岡穰 (パネリスト)「野中寺弥勒菩薩像調査報告」2012年度大阪大学文学研究科共同研究講演会:日本古代文物を対象とした日本史・美術史・考古学の領域横断的研究, 2012年度大阪大学文学研究科共同研究, 大阪大学文学研究科大会議室, 2013/3

藤岡穰 (招待講演)「東アジアにおける金銅仏の伝播と観松院菩薩半跏像」第5回百済文化国際シンポジウム, 奈良教育大学、公州大学校(韓国), 奈良教育大学大会議室, 2012/12

藤岡穰 (パネリスト)「美術史の眼－金銅仏研究の現在－」文化財公開シンポジウム:日本の大仏はなぜ“若々しいか”－美術史、

化学、修復から見た金銅仏の最新研究一，大阪大学総合学術博物館，大阪大学会館講堂，2012/9

藤岡穰 「興福寺鎌倉復興造像の経緯とその意味」奈良国立博物館第 41 回夏季講座：鎌倉時代の南都仏教，奈良国立博物館，奈良県新公会堂能楽ホール，2012/8

Fujioka, Yutaka, “The Mass-Production of Buddhist Sculptures in the Late Heian Period and a Buddhist Sculptor Jōchō”, 33rd Congress of the International Committee of the History of Art (CIHA2012): The Challenge of the Object, the International Committee of the History of Art, ニュルンベルク・メッセ, 2012/7

藤岡穰 (パネリスト)「6～7 世紀における東アジアの海域交流と仏像の伝播」国際シンポジウム：日本仏教研究の領域複合的解明の試み－宗派性の超克－，ハーヴァード大学ライシャワー日本研究所，ハーヴァード大学ライシャワー日本研究所，2012/5

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤岡穰 第3回国華賞，国華社，1991/10

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2009 年度～2012 年度、基盤研究(A) 一般、代表者：藤岡穰

課題番号：21242003

研究題目：科学的調査に基づく半跏思惟像の日韓共同研究

研究経費：2012 年度 直接経費 3,700,000 円 間接経費 1,110,000 円

研究の目的：

半跏思惟像や関連の金銅仏を対象に、科学的な調査(①レーザー三次元計測 ②X線透視撮影 ③蛍光X線分析)によって、各作例の製作の条件や技法を解明し、製作地を再検討することにより、新たな研究基盤を築くことを目指す。

また、近年実態が明らかになりつつある中国・南朝造像の存在に着目し、南朝を含む東アジア全域におけるグローバルな仏像の伝播の様相を把握し、そのうえで半跏思惟像の伝播について検討する。

4-6-2. 2013 年度～2016 年度、基盤研究(A) 一般、代表者：藤岡穰

課題番号：25244006

研究題目：5～9世紀東アジア金銅仏に関する日韓共同研究

研究経費：2013 年度 直接経費 10,300,000 円 間接経費 3,090,000 円

研究の目的：

5～9世紀東アジアの金銅仏および関連の金銅製品、青銅製品を対象として、蛍光X線分析、マイクロSCOPE撮影、X線CTスキャン等の科学的調査を実施し、時代や地域による成分の異同、鑄造や彫金技法等の特色を抽出する。また、美術史学と文化財科学の分野の交流を深め、相互に有効な研究方法の開発に努めるとともに、考古学や文献史学との領域横断的研究により、金銅仏をはじめとする文物の東アジアにおける伝播の様相について検討する。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

美術史学会・常任委員，2010 年 6 月～2012 年 5 月、2013 年 6 月～現在に至る

神戸市立博物館外部評価委員会・委員，2012 年 9 月～現在に至る

和歌山県文化財保護審議会・委員，2012 年 4 月～現在に至る

八尾市史編集委員会・編集委員，2011 年 4 月～現在に至る

八尾市文化財保護審議会・委員，2009 年 9 月～現在に至る

大阪歴史博物館・評価委員，2009 年 3 月～現在に至る

藤井寺市文化財審議会・審議員, 2008年9月～現在に至る  
奈良国立博物館・調査員, 2006年4月～現在に至る  
茨木市史編さん委員会・委員, 2000年4月～現在に至る

## 5. 岡田 裕成 准教授

1963年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。大阪大学文学部助手、福井大学教育地域科学部助教などを経て現職。専攻:西洋美術史。

### 5-1. 論文

岡田裕成 「エル・グレコ、歴史意識、マニエラ」『エル・グレコ再考 1541-2014 研究の現状と諸問題』エル・グレコ・シンポジウム事務局(早稲田大学), pp. 51-56, 2013/6

岡田裕成 「裸の彫刻／服を着た彫刻」『形』(日本文教出版), 299, pp. 14-15, 2013/5

### 5-2. 著書

岩波書店編集部, 岡田裕成他 『岩波世界人名大辞典』岩波書店, 「ビリャルパンド」他40項目を担当, 2013/12

Editors of Phaidon Press, Okada, Hiroshige 他, *The Atlas of Site-Specific Art. North and South America*, Phaidon Press, pp. 332-333, 2013/11

真鍋周三, 岡田裕成, 青木芳夫他(共著) 『ボリビアを知るための73章(第2版)』明石書店, pp. 318-329, 2013/3

### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

### 5-4. 口頭発表

岡田裕成 「連続講演「死と祈りの美術」」神戸女学院めぐみ会公開講座, 神戸女学院めぐみ会, 神戸女学院, 2013/11

岡田裕成 「「受容」から「操作」へ 征服後メキシコの先住民エリートと宣教の美術」シンポジウム「キリスト教の布教と文化」, 地中海学会, 同志社大学, 2013/6

岡田裕成 「イメージと戯れる作法:《ラス・メニーナス》と一人称の語り手としての観者」古典学と美術史のあいだ, エクフラシス研究会, 大阪大学, 2013/3

岡田裕成 「エル・グレコ、歴史意識、マニエラ」エル・グレコ没後400年記念 公開国際シンポジウム:エル・グレコ没後400年記念 公開国際シンポジウム, 早稲田大学美術史学会, 早稲田大学, 2013/1(『エル・グレコ再考 1541-2014:研究の現状と諸問題』 pp. 51-56, 2013/7)

岡田裕成 「植民地時代クスコ・ティティカカ湖地域のキリスト教聖堂装飾」アンデス文明研究会, アンデス文明研究会, 東京外国語大学本郷サテライト, 2012/11(『チャスキ』47, pp. 29-30, 2013/6)

岡田裕成 「連続講演「キリスト教聖堂:聖なる空間の美を解説する」(全3回)」神戸女学院めぐみ会公開講座, 神戸女学院めぐみ会, 神戸女学院, 2012/11

### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2011年度～2013年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田裕成  
課題番号:23520120

研究題目:大航海時代後の美術における他者像の類型・系譜とその象徴的機能

研究経費: 2012年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2013年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本研究は、スペイン植民地を中心とする新大陸の先住民像に焦点を当て、その類型と系譜を明らかにする。同時に、「発見」の対象となった他者の像として、あるいは征服者側から他者の役割をあたえられた自己の像として、それらの先住民像が、ヨーロッパ、植民地双方の受容空間において、どのような象徴的機能や意味を担ったのかを解明する。

## 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 5-8. 外部役員等の引き受け状況

---

民族藝術学会・理事, 2007年5月～現在に至る

## 6. 桑木野 幸司 准教授

1975年生。東京大学大学院工学研究科修士課程修了(西洋建築史)。ピサ大学大学院修了。Dottore di Ricerca in Storia delle arti visive e dello spettacolo(文学博士(美術史)・ピサ大学)。Kunsthistorisches Institut in Florenz 研究生を経て、2011年4月より現職。専攻:西洋美術・建築・庭園史。

### 6-1. 論文

---

桑木野幸司 「庭の掟(Lex hortorum):初期近代イタリアにおける庭園の公開について」*Arts and Media*, 4, 大阪大学アートメディア論講座, pp. 58-79, 2014/3

桑木野幸司 「記憶術の叡智の家:ルネサンスの黄昏における伝統の変容」ヒロ・ヒライ、小澤実(共編)『知のマイクロコスモス:中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』中央公論新社, pp. 42-68, 2014/3

桑木野幸司 「天国と地獄の想起:C・ロッセッリ『人工記憶の宝庫』における視覚芸術からの影響について」『西洋美術研究』17, 三元社, pp. 91-110, 2013/12

桑木野幸司 「思考の庭:知の編集空間としての初期近代イタリアの庭園」*Arts and Media*, 3, 大阪大学アートメディア論講座, pp. 26-46, 2013/3

Kuwakino, Koji, "The great theatre of creative thought: The Inscriptiones vel tituli theatri amplissimi ... (1565) by Samuel von Quiccheberg" *Journal of the History of Collections*, Volume 25, Number 3, 2013, Oxford University Press, pp. 303-323, doi: 10.1093/jhc/fhs025, 2013/1

### 6-2. 著書

---

桑木野幸司 『叡智の建築家:記憶のロクスとしての16-17世紀の庭園、劇場、都市』中央公論美術出版, 542p., 2013/12

### 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

桑木野幸司 「メディチ家のヴィッラと庭園—文化的景観のゆくえ」, *Arts and Media*, 4, 大阪大学アートメディア論講座, pp. 208-211, 2014/3

桑木野幸司 「Ut architectura poesis—テキストの中の建築」, *Arts and Media*, 3, 大阪大学アートメディア論講座, pp. 214-217, 2013/3

桑木野幸司(翻訳) 「ジョン・カナリー著、桑木野幸司訳、『古代ローマの肖像:ルネサンスの古銭収集と芸術文化』白水社, pp. 1-263(本文201ページ、索引・註63ページ), 2012/6



#### 6-4. 口頭発表

桑木野幸司 (パネリスト)「十六世紀イタリアの庭園における旅と風景のモチーフ」、文学部共同研究「西欧近代における旅と風景のディスクール」西欧近代における旅と風景のディスクール, 大阪大学文学研究科共同研究, 北海学園大学, 2014/3

桑木野幸司「記憶のかたち—コスマ・ロッセリ『人工記憶の宝庫』(1579年)における天国と地獄の表象」国際シンポジウム「かたち 再考」—開かれた語りのために—, 東京文化財研究所, 東京文化財研究所, 2014/1

桑木野幸司「庭園と記憶術:初期近代西欧の芸術文化と創造的記憶の関係をめぐり一考察」国際シンポジウム「かたち 再考」にかかる準備研究会, 東京文化財研究所, 東京文化財研究所, 2013/8

桑木野幸司「初期近代西欧の芸術文化における創造的記憶」藝術学関連学会連合第8回公開シンポジウム, 藝術学関連学会, 国立国際美術館講堂, 2013/6

桑木野幸司 (パネリスト)「庭の掟(Lex hortorum)—初期近代イタリア庭園の公開性について—」文学部共同研究「ヨーロッパ文化としてのランドツアー」, 大阪大学文学研究科, 北海学園大学, 2013/3

桑木野幸司 (招待講演)「ムネモシュネの宴:初期近代イタリアの文芸・視覚芸術におけるテキストとイメージの通底」エクフラシス研究会:古典学と美(術史)学の間, 科学研究費補助金基盤研究(C)「弁論術から美学へ—美学成立における古代弁論術の影響」(研究代表者:渡辺浩司), 大阪大学会館, 2013/3

桑木野幸司 (招待講演)「思考の庭:情報処理空間としての初期近代イタリアの庭園」研究教育フォーラム, 大阪大学文学研究科, 大阪大学文学研究科, 2012/11

桑木野幸司 (パネリスト)「Landscape Gardening」アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築 2012年度研究会, アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築 2012年度研究会, 国際高等研究所, 2012/11

桑木野幸司 (招待講演)「庭園と都市—イタリア庭園の歴史から現代日本の都市空間を再考する」i spot 講座, 大阪大学 21世紀 懐徳堂, アイ・スポット, 2012/8

桑木野幸司 (パネリスト)「記憶と方法:シェンケルの『記憶術の宝庫』(1610年)における叡智の家について」人知の営みを歴史に記す 中世・初期近代インテレチュアルヒストリーの挑戦, 立教大学, 立教大学, 2012/7

#### 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

桑木野幸司 大阪大学総長賞, 大阪大学, 2013/5

桑木野幸司 大阪大学総長奨励賞, 大阪大学, 2012/8

桑木野幸司 地中海学会「ヘレンド賞」, 地中海学会「ヘレンド賞」, 2012/6

桑木野幸司 日本学術振興会賞, 日本学術振興会, 2012/2

桑木野幸司 第五回美術に関する研究奨励賞, 公益財団法人 花王芸術・科学財団, 2011/3

#### 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2011年度～2012年度、研究活動スタート支援、代表者:桑木野幸司

課題番号:23820026

研究題目:十六世紀後半のトスカーナ大公国の視覚芸術文化における記憶術からの影響

研究経費:2012年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

初期近代に大流行を閲した知的方法論である記憶術が、単なる情報整理技術にとどまらず、同時代の視覚芸術や建築・庭園学においても様々なかたちで応用されていた点を、トスカーナ大公国を中心とした芸術史の展開を置くことで、具体例に即して解明する。

6-6-2. 2013年度～2015年度、若手研究(A)、代表者:桑木野幸司

課題番号:25704002

研究題目:テキストの中の建築:初期近代イタリアの芸術文化における文字、図像、空間の融合

研究経費:2013年度 直接経費 2,700,000円 間接経費 810,000円

研究の目的:

本研究は、テキストと建築の通底、というテーマを掲げることにより、いわゆる「姉妹芸術」、すなわち文学、視覚芸術、建築の各創作理論・実践を統一的な観点からとらえる視座の獲得を目指すとともに、初期近代の文芸・美術・哲学思想において、いかに文字と図像と空間が創造的な仕方と融合していたのかを、学際的なアプローチによって明らかにし、美術史学の新たな地平の開拓を目指す。

#### 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

地中海学会・事務局員, 2012年4月～現在に至る

### 7. 河内 華子 助教

1981年生。大阪大学文学部(美術史学)卒、同大学院文学研究科博士前期課程(美術史学)修了。同研究科博士後期課程単位取得退学。2009年より、ルーヴェン・カトリック大学(ベルギー)文学研究科博士後期課程在学中。文学修士。2013年4月より現職。専攻:西洋美術史。

#### 7-1. 論文

---

なし

#### 7-2. 著書

---

なし

#### 7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

#### 7-4. 口頭発表

---

なし

#### 7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

#### 7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 7-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-24 共生文明論

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：江川 温、堤 研二、堤 一昭

准教授：井本 恭子

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
8	0	0	0	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 2 名。

#### 3. 修了生(2012年度～2013年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2012	9
2013	4
計	13

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

教育においては、①本コースの教育・研究内容の特色を理解させるための「歴史的地域社会論講義」「地域文化構造論講義」などの講義科目を、また②高度専門職業人に向けた企画・調査・分析・プレゼンテーションなどの能力を養成するための「歴史的地域社会論演習」「地域文化構造論演習」などの演習科目を配置することを目標とした。さらに③本コース所属以外の教員とも協力して、専攻がカバーする分野についての全般的な知識を得る「人文学と社会」、歴史学研究各分野の最新状況を知る「歴史学のフロンティア」、教育に関わる高度専門職業人に向けた能力を養成するため「歴史教育論」といった共同授業科目を設けることを目標とした。

#### 2. 研究

教員全員により各年度合計4本の単著論文を執筆すること、加えて教員がメンバーである研究プロジェクト(科学研究費補助金等の研究)による国内・国際研究集会の開催に協力することを目標とした。

### 3. 社会連携

高等学校教員等の研修の場としての「大阪大学歴史教育研究会」月例研究会の開催に協力し、さらに教員の一部が市民教養講座に出講することによって、研究成果を社会に還元することを目標とした。

## Ⅲ. 活動の概要(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

各種の講義・演習により、コースの教育・研究内容の特色の理解をはじめとする目的はほぼ果たすことができた。高度職業人に向けた能力の育成を目指す演習のうち、特に歴史教育論では高等学校教員のリカレント教育にも協力するとともに、受講者が全員参加するグループ研究報告をおこない、成果を報告書としてまとめることで、プレゼンテーションや編集の能力育成をはかることができた。また通常の授業に加えて修士論文作成への中間報告の場を設け、指導・助言体制を強化した。

### 2. 研究

教員の研究活動の欄にあるように、各年度とも論文執筆の目標は達成され、科学研究費ほかの助成研究が複数行われた。教員がメンバーである研究プロジェクト(科学研究費補助金等の研究)による国内・国際研究集会の開催に協力するという目標については、複数の教員が科研チームのメンバーとして、国内・国外での研究集会などにおいて開催協力や発表をおこない、研究活動の国際化を図るとともに、国内集会(大阪大学歴史教育研究会月例会など)も頻繁に開催した。

### 3. 社会連携

本コースの教員1名が世話役の一人として「大阪大学歴史教育研究会」月例研究会開催に協力し、高等学校教員等の研修の場を提供することができた。また本コースの教員1名が市民教養講座に出講した。

## Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

修士論文提出による修了者は13名であった。そのうち4名が中学校・高等学校の教員となったことは、教育に関する高度専門職業人の養成をめざす本コースの趣旨にもかなうものである。修了大学院生以外の学生(長期履修制度を利用する学生、社会人学生を含む)も、授業以外に研究会での模擬授業準備/グループ研究および報告書作成などをも通じて、目標とする能力を伸ばし得たといえる。したがって、掲げた目標はおおよそ達成できたと考える。なお1学期に修士論文作成指導のための演習を設けて、入学時からの修士論文作成および進路についての指導・助言体制を強化した。

### 2. 研究

前記の活動をふまえると、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

### 3. 社会連携

前記の活動をふまえると、社会連携の項に掲げられた目標は達成されたといえる。

## V. 基本情報(2012年度～2013年度)

## 1. 大学院生等による論文発表等

### 1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	0(0)	3(0)	0(0)	0(0)	1(0)	4(0)
2013	0(0)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)
計	0(0)	4(0)	0(0)	0(0)	1(0)	5(0)

括弧内は査読付き論文数。

### 1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	1	2	0	0	3
2013	0	0	1	0	0	1
計	0	1	3	0	0	4

### 1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (1)論文

【2012年度】

坂倉美早紀・李希泉・福島邦久「暦から見る世界史—社会との関わりをとおして」『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書 シリーズ』7 (ISSN2186-9308), 大阪大学歴史教育研究会, pp.2-27, 2012/6

渡部玲子・鉄本麻由子・藤田弘晃・荒木陸「歴史人口学からみた日本の歩み」同上, pp.28-50, 2012/6

甲斐田純・宗村敦子・多賀良寛「身体観の東西—伝統的身体観とその変容」同上, pp.51-71, 2012/6

渡部玲子「[報告要旨]近代都市テヘランの変容—パフラヴィー朝レザー・シャー時代を中心に—」平成 23 年度「横断的研究視察」フランス国立図書館等派遣研究報告・報告会, 2011 年 9 月 29 日, 大阪大学文学研究科(『組織的な若手研究者等海外派遣プログラム 多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム派遣成果最終報告書(平成 21 年度～平成 24 年度)』, 大阪大学文学研究科, pp.48-49), 2013/3

【2013年度】

遠藤総史・川口敬義・渋谷武弘・永山愛・村上広大「地名の変遷に見る文字・言語——本質論を超えて」『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ』10 (ISSN2186-9308), 大阪大学歴史教育研究会, pp.46-67, 2014/3

#### (2)口頭発表

【2012年度】

渡部玲子「近代都市テヘランの変容—パフラヴィー朝レザー・シャー時代を中心に—」平成 23 年度「横断的研究視察」フランス国立図書館等派遣研究報告・報告会, 大阪大学文学研究科, 2012/9/29

藤森衣子「神戸市のニュータウンにおける居住者移動」2012 年日本地理学会秋季学術大会, 神戸大学 鶴甲第 1 キャンパス, 2012/10/6

糸川風太・小林卓磨・鉄本麻由子・福島彰人「東アジアの宗教—近世・近代を中心に」大阪大学歴史教育研究会第 65 回例会, 大阪大学文学研究科, 2012/12/15

【2013年度】

川口敬義・永山愛・遠藤総史・村上広大・渋谷武弘「地名変遷にみる文字・言語」大阪大学歴史教育研究会第75回例会，大阪大学文学研究科，2014/1/18

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2013年度】

渋谷武弘「地名研究 104：阪神間の地名散策 桑津(伊丹)と桑原(三田)：佳名と地名」『歴史と神戸』52巻6号(通巻301号)，神戸史学会，pp.40-45，2013/12

渋谷武弘「兵庫津の花柳街に佐比江という地名がつけられた理由は？」大國正美編著『神戸謎解き散歩』第7章地理・自然編，KADOKAWA/中経出版，新人物文庫299 (ISBN9784046001757) pp.257-259，2014/2

## 2. 大学院生等の受賞状況

なし

## 3. 大学院生等の留学

2012年度 大学院：0名 (計0名)

2013年度 大学院：0名 (計0名)

## 4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2012年度～2013年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4 名

2012年度：3名 2013年度：1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 4名  
その他 0名

## 5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2012年度：0名 2013年度：0名

## 6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

なし

## 7. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 江川 温 教授

1950年生。京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)中退。文学修士(京都大学、1977年)。大阪大学助手、同講師、同助教授を経て1996年、教授。2004年4月より2009年9月まで放送大学客員教授。2008年4月より2010年3月まで文学研究科長。2012年4月より2014年3月まで全学教育推進機構長。専攻：西欧中世史。

#### 1-1. 論文

なし

#### 1-2. 著書

なし

### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 1-4. 口頭発表

---

なし

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2011年度～2014年度、基盤研究(B) 一般、代表者:江川温

課題番号:23320159

研究題目:中世カトリック圏君主権の神話的・歴史的正統化

研究経費:2012年度 直接経費 3,600,000円 間接経費 1,080,000円

2013年度 直接経費 3,500,000円 間接経費 1,050,000円

研究の目的:

中世カトリック圏における君主権の神話的・歴史的な正統化を、正統化の物語それ自体、表現形態、伝達形態の歴史的变化に注目しつつ考察する。またフランス、イングランドといった中核国家とカスティール、ハンガリーといったフロンティア国家、王権と領邦君主権といった対比を重視する。さらにこのような君主権の正統化が西欧のエトニ形成に果たした役割を考察する。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日仏歴史学会・副会長, 2008年4月～現在に至る

日本西洋史学会・代表, 2004年4月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2004年4月～現在に至る

## 2. 堤研二教授

1960年福岡県大牟田市生れ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士(九州大学、1986)・博士(文学)(九州大学、2009)。佐世保工業高等専門学校助手・講師、島根大学法文学部講師・助教授、大阪大学文学研究科助教授・准教授を経て、2009年11月より現職。地域地理科学学会賞(1997)、昭和シェル石油環境研究助成財団環境研究課題賞(2005)、大阪大学教育・研究功績賞(2006)、大阪府スポーツ少年団優良団表彰(2012)。専攻:人文地理学、とくに社会経済地理学。

### 2-1. 論文

---

Tsutsumi, Kenji, "Mountainous Areas in Japan and Forest Town Management Model (FTMM)" Westerdaahl, S., Westlund, H. and Kobayashi, K.(編) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (Marginal Areas Research Group), 8, Center for Entrepreneurship and Spatial Economics), Jönköping International Business School of Jönköping University, Sweden, pp. 245-254, 2013/12

堤研二 「地域社会学と『地域社会学会会報』の意義」『会報』刊行世話人会(監修)『復刻 地域社会学会会報 別冊(解説)』近現

代資料刊行会, pp. 9-11, 2012/10

## 2-2. 著書

堤研二, 人文地理学会他(編)『人文地理学会事典』丸善出版, 761p., (編集委員として参画) 2013/9

## 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

## 2-4. 口頭発表

Tsutsumi, Kenji, “Forestry Revitalization and Regional Marginality at Mountainous Areas in Japan”, IGU (International Geographical Union) 2013 Kyoto Regional Conference, IGU (International Geographical Union) 2013 Kyoto Regional Conference, Kyoto International Conference Center (ICC Kyoto), Kyoto, Japan, 2013/8

Tsutsumi, Kenji, (基調講演) “Thinking from Japan beyond the four “D”s, concerning with Social Capital: Diversity, Disparity, Depopulation and Deprivation (A Plenary Lecture)”, The Japan-Korea-China Joint Conference on Geography, The 8th Japan-Korea-China Joint Conference on Geography, Kyushu University, Fukuoka, Japan, 2013/7

Tsutsumi, Kenji, “Marginality and Sustainability of Mountainous Village and Forestry”, The 10th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Marginal Areas Research Group, Amakusa Treasure Island International Exchange Hall “Porto,” Amakusa, Japan, 2013/5

堤研二 「林業・森林管理・地域システム: 山間地域の持続システム」2012年日本地理学会秋季学術大会 シンポジウム「日本の山村の非限界性と村立基盤」, 日本地理学会, 神戸大学, 神戸市灘区鶴甲第1キャンパス, 2012/10

堤研二 (招待講演) 「人口流出と地域変化: 山村と炭鉱地域の調査から見えてきたこと」日本村落研究学会 2012年度九州・中国・四国地区研究会, 日本村落研究学会, 九州大学, 福岡市東区箱崎キャンパス, 2012/8

Tsutsumi, Kenji, “Mountainous Areas in Japan and the Forest Town Management Model”, The 9th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Marginal Areas Research Group, Blasingsborgs Conference Hotel, Österlen, Sköne, Sweden, 2012/5

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 市民スポーツ・レクリエーション指導者表彰, 豊中市民体育振興協議会, 2012/10

堤研二 大阪府スポーツ少年団優良団表彰, 大阪府スポーツ少年団本部, 2012/2

堤研二 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 国立大学法人大阪大学, 2006/2

堤研二 昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9

堤研二 地域地理科学会賞, 地域地理科学会, 1997/7

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2011年度～2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 堤研二

課題番号: 23320182

研究題目: 中山間地域における林業・森林環境と住民生活に関するマネジメント=モデルの構築

研究経費: 2012年度 直接経費 5,800,000円 間接経費 1,740,000円

2013年度 直接経費 2,200,000円 間接経費 660,000円

研究の目的:

本研究の目的は、中山間地域における基幹産業である林業の再生と森林環境の維持管理とを結びつけ、林業を支える兼業形態と地域生活機能の持続可能性を高めるための「フォーレストタウン=マネジメント=モデル(FTMM)」を構築する目的でのパイロット研究を実施することにある。具体的には、(1) 森林環境保全のための管理モデル、(2) 林業再生のための合理的方策に関する



モデル、(3)中山間地域における産業・兼業と生活のリーズナブルな持続性を可能にするモデルを設計し、(4)それらを統合的にアレンジして、中山間地域に適用可能な具体的な総体的社会経済モデルとしての“FTMM”のパイロット=モデルを試験的に構築しつつ、並行して、あるいはそれに沿って調査研究を実行し、成果の社会への発信と政策提言を行っていく。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

人文地理学会・学会賞候補者選考委員会委員(一般図書部門), 2013年12月～現在に至る

人文地理学会・法人化問題検討委員会委員, 2012年12月～2013年4月

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・外部評価委員, 2012年10月～現在に至る

人文地理学会・将来構想検討委員, 2012年4月～2013年3月

豊中市スポーツ少年団本部・本部委員、副本部長, 2012年4月～現在に至る

豊能地区スポーツ少年団連絡協議会・役員・事務局担当, 2012年4月～現在に至る

人文地理学会・人文地理学事典編集委員, 2011年8月～現在に至る

国際地理学連合京都国際地理学会議・組織委員・巡検委員長, 2011年8月～2014年3月

人文地理学会・評議員, 2010年11月～現在に至る

日本地理学会・代議員, 2010年4月～現在に至る

## 3. 堤一昭教授

1960年生。京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科博士後期課程(東洋史学専攻)学修退学。文学修士(京都大学、1988)。大阪外国語大学外国語学部国際文化学科比較文化講座専任講師、同助教授、同准教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2013年6月より同教授。専攻:東洋史学。

### 3-1. 論文

---

堤一昭 「『中国歴代帝后像』と南薫殿の画像」武田佐知子(編)『交錯する知 衣装・信仰・女性』思文閣出版, pp. 60-74, 2014/3

堤一昭 「石濱文庫調査・研究の過程と展望—文庫資料のデータベース構築にむけて—」堤一昭(編)『東洋学者・石濱純太郎をめぐる学術ネットワークの研究』(平成24年度大阪大学大学院文学研究科共同研究研究成果報告書), pp. 23-34, 2013/3

堤一昭 「モンゴル帝国時代のグローバル化の実態」『2012年度 大学研究助成 アジア歴史研究報告書』公益財団法人JFE21世紀財団, pp. 14-19, 2013/3

堤一昭 「[資料紹介]石濱文庫所蔵の桑原隲藏書簡—マルコ・ポーロの「キンサイ=行在」説をめぐって—」『待兼山論叢 文化動態論篇』第46号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-20, 2012/12

### 3-2. 著書

---

堤一昭(共著) 『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会, pp. 44-70, 2013/3

堤一昭(編) 『東洋学者・石濱純太郎をめぐる学術ネットワークの研究』平成24年度文学研究科共同研究研究成果報告書, 56p., 2013/3

堤一昭(共著) 高洋訳 『現代中国変動と東亜新格局』第一輯, 北京・社会科学文献出版社, pp. 107-118, 2012/8

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

堤一昭 尾崎雄二郎、笠沙雅章、戸川芳郎ほか編『中国文化史大事典』大修館書店, 1493p. (事典項目) 「元一統志」p.307, 「元史」p.312, 「元史新編」p.313, 「元史訳文証補」pp.313-34, 「元朝名臣事略」p.318, 「朱思本」p.550, 「新元史」p.629, 「草木子」p.758, 「平

### 3-4. 口頭発表

堤一昭「石濱文庫資料のデータベース構築にむけてー調査・研究のこれまでとこれからー」関西大学アジア文化研究センター第13回研究例会, 関西大学アジア文化研究センター, 関西大学, 2012/6

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本モンゴル学会・理事、紀要編集委員, 2008年5月～現在に至る

## 4. 井本 恭子 准教授

1963年生。大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程(イタリア語学専攻)修了。文学修士(大阪外国語大学、1990)。大阪外国語大学外国語学部地域文化学科ヨーロッパⅢ講座助手、講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:人類学。

### 4-1. 論文

井本恭子「「ローカルなもの」の様相ーオルゴゾロの事例からー」『待兼山論叢』46, 大阪大学文学会, pp. 21-38, 2012/12

### 4-2. 著書

井本恭子他(共著)『交錯する知ー衣装・信仰・性』思文閣出版, pp. 266-281, 2014/3

井本恭子他(共著)『ヨーロッパのことばと文化ー新たな視座から考える』大阪大学出版会, pp. 103-115, 2013/10

井本恭子他(共著)『デイリーコンサイス 伊和・和伊事典』三省堂, pp. 863-1088, 2013/2

井本恭子他(共著)『着衣する身体と女性の周縁化』思文閣出版, pp. 112-125, 2012/4

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

### 4-4. 口頭発表

なし

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

地中海学会・常任委員, 2011年4月～2013年6月

イタリア学会・幹事・評議員, 2010年4月～2014年3月

地中海学会・事務局員, 2005年4月～2013年6月

# 2-25 アート・メディア論

## I. 現在の組織

### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 2 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：永田 靖、圀府寺 司

准教授：三宅 祥雄、桑木野幸司

助教：古後 奈緒子

### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
22	0	0	4	1	0

※うち留学生 2 名、社会人学生 4 名。

### 3. 修了生(2012年度～2013年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2012	10
2013	9
計	19

## II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

### 1. 教育

1. アート・メディア論に関する基礎的教育のシステムを構築するとともに、学生にそのような基礎的素養を身につけてもらうこと。
2. さまざまな〈現場〉で活動する専門職の人々と接触する機会をつくり、フィールド的な知のありかたを教育すること。
3. 学生各自が自身のフィールドを見つけ、選択し、そこでの活動を進めていけるような環境を作り出すこと。
4. サイバーメディアを中心としたメディアリテラシーを高めること。

### 2. 研究

従来の芸術、文化研究にはなかった新領域での研究を行う。萌芽的な研究の成果を徐々に出していければよいと考える。新領域の研究者との接点を増やしつつ、また、〈現場〉との接点も重視した研究を推進する。

### 3. 社会連携

劇場や博物館、美術館での芸術活動に積極的に参加し、芸術の実践を行い、また作家の創作活動を背後から支えることで、芸術の社会的意義を明確にし、社会に伝えていく。

## Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

### 1. 教育

授業においては全体演習において、各院生の研究テーマへの個別的、集中的な指導を行った。また、学外での実践的活動も推奨したので、院生の多くは学外のさまざまなフィールドで活動、研修を重ねている。具体的には美術館等における展覧会企画やその補助、芸術雑誌への寄稿、上演活動への参加等である。メディア実習は前後期に実施し、授業を通じて各自のメディア運用能力は着実に高まっている。

### 2. 研究

著書、論文、国内外での研究発表、上演活動、阪大総合学術博物館などにおける展覧会企画など、「書物」、「実践」ともに研究はまずまず順調に遂行されている。紀要『アート&メディア』を創刊した。

### 3. 社会連携

美術館における講演、演劇企画・展覧会企画への参加等、さまざまな社会連携活動を進めてきている。

## Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

### 1. 教育

上記 1～3 の諸項目についてはいずれもほぼ計画通りに遂行できている。各院生の個人研究はもちろん、研究室の HP、ブログの作成なども自発的に行うなど、院生は学内外で積極的に活動を進めており、基本方針の指導は浸透しているといっている。

### 2. 研究

成果の質・量にある程度の個人差はあるものの、教員、院生ともに各自の研究は着実に遂行している。紀要『アート&メディア』を創刊したことには大きな意義がある。

### 3. 社会連携

これも上記同様研究テーマによってある程度の個人差はあるが、社会との連携は教員、院生ともに十分に意識し、遂行できているといっている。

## Ⅴ. 基本情報(2012 年度～2013 年度)

### 1. 大学院生等による論文発表等

#### 1-1. 論文

---

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	0(0)	0(0)	10(10)	0(0)	0(0)	10(10)
2013	0(0)	0(0)	8(8)	0(0)	0(0)	8(8)
計	0(0)	0(0)	18(18)	0(0)	0(0)	18(18)

括弧内は査読付き論文数。

## 1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	0	0	0	0	0
2013	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0

## 1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

#### 【2012年度】

Arts & Media, 第3号, 大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室, 2013/3 (以下雑誌名すべて同じ)

植野美緒「重森三玲庭園の両義性—個人庭園を中心とした考察」 pp. 47-67

谷脇栗太「タワーと怪獣」 pp. 68-89

木羽康真「〈引き興し〉でみる、3.11の災害ボランティアから生まれるアート・イベントの表現」 pp. 90-103

中島由記子「幕末の写真における日本人の変化」 pp. 126-147

井上真央「終わらない26時間—NAMURA ART MEETING '04-'34 Vol.04 臨界の創造論」 pp. 148-157

山本夏海「成長し続ける大正建築『フジハラビル』」 pp.158-165

設楽里菜「TACT/FESTに見る児童青少年演劇の可能性」 pp. 166-171

董禱菲「中国同性愛映画についての一考察—道徳と検閲の二重抑圧の下で」 pp. 172-180

北條瞳「デュレンマットを探して」 pp. 181-192

ののだつや「いない いない ばあ！」 pp. 193-205

#### 【2013年度】

Arts & Media, 第4号, 大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室, 2014/3 (以下雑誌名すべて同じ)

北條瞳「非〈演劇人〉による演劇レポート—『谷行／イエスマン』ができあがるまで」 pp. 46-57

北條瞳「フリードリヒ・デュレンマットの喜劇観—ギリシア悲劇と『物理学者たち』」 pp. 80-97

山本知伽「演劇×創造—GEKI×SOU— (加藤登美子氏インタビュー)」 pp. 118-133

北岡志織「境界に立つトニーとクライスト—『聖ドミンゴ島の婚約』を読みながら」 pp. 134-141

木羽康真「私の学芸員体験記—大阪市立美術館・国立国際美術館・東京大学総合研究博物館のインターンを通じて見たことと感じたこと」 pp. 142-151

高木繭絹子「尺度の国のアリス—体をめぐるスケール」 pp. 164-173

吉田濤「ジュンとの隔たり」 pp. 174-181

片岡浪秀「ラジオとテレビ—その昨日、今日、明日」 pp. 182-195

## (2)口頭発表

なし

## (3)その他(書評・翻訳など)

【2012年度】

井上真央「奈良女子大学校舎」、『大阪日日新聞』「関西美術探訪」2012/7

北條瞳「異なる文化をつなぐ『こだわり』」(箕面観光ホテル取材)、『大阪日日新聞』「関西美術探訪」2012/7/17

北條瞳「国立文楽劇場『仮名手本忠臣蔵』筋金入り『エンタメ』見に行こう」、『大阪日日新聞』「関西美術探訪」2012/11/20

井上真央「大阪の表現人」、『OCOS』196号(大阪文化団体連合会発行)、2013/1

北條瞳「大阪発の『どきどき』を」、『OCOS』196号(大阪文化団体連合会発行)、2013/1

【2013年度】

北條瞳「あらゆる境界が揺らぐ快感:エイチエムピー・シアターカンパニー公演『アラビアの夜』」、『大阪日日新聞』「関西美術探訪」2013/5/21

北條瞳「明日、生きていくための『女子会』:iaku 公演『人の気も知らないで』」、『大阪日日新聞』「関西美術探訪」2013/9/17

北條瞳・久野はるな「山本智子―世界の取扱説明書―展」(パンフレット翻訳)、2013/11/30-12/14

## 2. 大学院生等の受賞状況

なし

## 3. 大学院生等の留学

2012年度 大学院:0名(計0名)

2013年度 大学院:1名(計1名)

## 4. コース出身の高度職業人・研究者

(2012年度～2013年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 9名

2012年度:4名 2013年度:5名

<内訳> 技術職 3名(コンピュータ・デザイナー) ジャーナリスト 2名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名 その他 3名

## 5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2012年度:0名 2013年度:0名

## 6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

2013年3月, Arts & Media (紀要) 第3号を刊行

2014年3月, Arts & Media (紀要) 第4号を刊行

## 7. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

## 1. 永田 靖 教授

1957年生。1981年上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位修得退学。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究所客員研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：演劇学。

### 1-1. 論文

---

Nagata, Yasushi, “Returning to Asia: An Overview from a Japanese Perspective” *Forum of Theatre and Drama*, (Korean National University of Arts), pp. 212–221, 2013/12

Nagata, Yasushi, “Rear- Garde Theater in/from Japanese Context-Theatre Company ISHINHA and its performance” *Where does theatre go after the Post Avant-Garde?*, (Korean Theatre Association), Korean Theatre Association, pp. 289–300, 2012/10

### 1-2. 著書

---

Nagata, Yasushi 他(共著), *Adapting Chekhov: The Text and its Mutations*, Routledge, pp. 261–273, 2012/9

### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

永田靖 『『犬の心臓』のこと』『犬の心臓』名取事務所, pp. 2–2, 2014/3

永田靖 「芸術祭と社会学連携」『懐徳』82, 懐徳堂記念会, pp. 2–5, 2014/1

永田靖 「『国際化』と伝統の大坂」『懐徳堂だより』92, 懐徳堂記念会, pp. 2–3, 2012/4

### 1-4. 口頭発表

---

Nagata, Yasushi, “General Discussion; Modernization of Asian Theatre”, International Colloquium “Modernization of Asian Theatre”, Theatre Studies Section, Osaka university,, Osaka University, 2014/3

Nagata, Yasushi, “Returning to Asia: An Overview from a Japanese Perspective”, New landscape of Contemporary Asian Theatre, International Japanese Korean Theatre Research Symposium, Osaka University, 2013/11

Nagata, Yasushi, “Adapting Asia- Some Ventures of Kaoru Morimoto”, International Federation for Theatre Research Barcelona Conference, International Federation for theatre Research, Institute del Teatre, 2013/7

Nagata, Yasushi, “Some Aspects of Meyerhold Impact on Japanese Modern Theatre”, IFTR Asian Theatre WG Beijing Meeting: Modernization of Asian Theatre, IFTR Asian Theatre Working Group, National Academy of Drama, China, 2013/3

永田靖 「ロシア・アヴァンギャルド演劇—メイエルホリドとエイゼンシュテイン」維新派講演会, 劇団維新派, 維新派稽古場, 2013/3

永田靖 「大阪のアヴァンギャルド演劇とは何だったのか」シンポジウム 大阪のアヴァンギャルド芸術, 大阪大学, 大阪大学中之島センター, 2012/11

永田靖 他 「アジアの中の日本と韓国-演劇研究の未来」演劇の未来—日本と韓国, 日本演劇学会, 漢陽女子大学, 2012/11

永田靖 「アヴァンギャルド、異文化接触、アジア」ラボカフェスペシャル&鉄芸トークシリーズ1, 大阪大学, 大阪大学アートエリア B1, 2012/10

Nagata, Yasushi, “Rear- Garde Theater in/from Japanese Context-Theatre Company ISHINHA and its performance”, International Symposium “Where does theatre go after the Post Avant-Garde?”, Korean Theatre Association, Korea National University of Arts, 2012/10

永田靖 「香港話劇団について」現代中国語演劇の現状と課題, 日本演劇学会近現代演劇研究会, 大阪大学, 2012/10

Nagata, Yasushi, “An Initial Trans-cultural Lesson of Modern Nationality of Theatre: On the First Overseas Performance of Grand Kabuki to Soviet Union in 1928”, International Federation for Theatre Research Santiago Conference, International Federation for Theatre Research, Pontificia Universidad Católica de Chile, 2012/7

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)



なし

## 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2010年度～2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者:永田靖

課題番号:22320035

研究題目:アジアにおける近現代演劇の国際的比較共同研究

研究経費: 2012年度 直接経費 3,500,000円 間接経費 1,050,000円

2013年度 直接経費 2,800,000円 間接経費 840,000円

研究の目的:

現代のグローバリゼーションの進行する中で演劇史・演劇学の在り方を再考することは急務の課題である。従来は西欧演劇中心の概念や演劇史観で研究されてきたが、20世紀のアジア演劇が西欧演劇に与えた根源的な影響はまだ正確に反映されているとは言い難い。またポスト植民地主義的なアジア諸国の自立を背景にした、自国演劇の再検討の機運の高まりは演劇学全般への大きな反省を呼び覚ましている。このような研究は個々の個人的研究にのみ依存するのではなく、アジアの研究者のネットワークの構築を進めながら行う比較共同研究がより効果的である。個々の研究は優れた成果を上げ始めているアジアの研究者間の、世界演劇史的視野に立った比較共同研究によって近現代演劇のアジアの特徴を明確にするのが目的である。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

1-7-1. 2013年度～2013年度、5: その他補助金、助成金獲得者:永田靖

助成金名:研究大学強化促進費補助金(大阪大学国際シンポジウム助成)

研究題目:International Colloquium “Modernization of Asian Theatre”

助成団体名:大阪大学

助成金額:2013年度 直接経費 1,984,000円

研究の目的:

この共同研究グループ Asian Theatre Working Group は2008年に韓国藝術総合学校演劇院、国立台北藝術大学戯劇系、国立中央戯劇学院を主たる相手校として創設したものである。これはヨーロッパ演劇研究の領域に比べて、研究的にまとまることのなかったこの少なかったアジアにおける演劇研究の連携的推進を目的とするものである。アジアの近現代演劇は西欧演劇の影響を被っているために西欧演劇との対照によって研究がなされてきた。アジアの各国の演劇研究者もそれぞれに西欧との関係で研究してきたために、相互のアジア諸国内での関係はほとんど研究されていない。他方で近現代の演劇実践はアジア域内での相互交流によって積極的に進められた経緯がある。具体的には、日本と韓国、中国、台湾、マレーシア、シンガポールの近現代演劇の影響関係を、上演、ドラマツルギー、演出理念、演劇政策について検討を加え、アジア域内での演劇的相互関係の多様性と不即不離の関係を明らかにすることができると考えられる。またアジア演劇の歴史や様式についての概念的な整理を行うことである。アジア演劇史は西欧演劇史とは異なる背景を持ち記述のされ方も異なる。演劇についての概念の多くも西欧演劇のそれらとは基本的に異なる。本研究ではアジア演劇特有の概念(美的性質、制作実施理念、訓練方法、社会的機能、批評言語など)について西欧の演劇概念と比較対照してその独自性を明らかにし、西欧演劇中心の演劇学・演劇史学を相対化し、アジアの演劇概念の共有化を目指すことに繋がる。

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

大阪国際児童青少年アートフェスティバル・実行委員長, 2012年4月～現在に至る

兵庫県立ピッコロ劇場企画運営委員会・運営委員, 2011年3月～現在に至る

University Malaya Panel of External Assessors・Member of Panel, 2011年3月～現在に至る

International Federation for Theatre Research Asian Theatre Working Group・Convenor, 2009年7月～現在に至る

国立台北藝術大学戯劇系戯劇学刊 Taipei Theatre Journal・Editorial Board, 2009年6月～現在に至る

International Federation for Theatre Research ・Executive Committee, 2005年7月～現在に至る

芸術学関連学会連合・委員, 2005年6月～現在に至る  
日本演劇学会・理事, 2002年6月～現在に至る  
日本演劇学会・事務局長, 2002年6月～現在に至る  
日本映像学会関西支部・幹事, 2002年4月～現在に至る  
日本演劇学会近現代分科会・主宰, 2000年11月～現在に至る

## 2. 園府寺司教授

1957年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren(文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻:西洋美術史・アート・メディア論

### 2-1. 論文

なし

### 2-2. 著書

園府寺司他(編)『「ゴッホの夢」美術館:ポスト印象派の時代と日本』小学館, 191p., 2013/3

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

### 2-4. 口頭発表

園府寺司(招待講演)「「日本の夢」を超えて ―ファン・ゴッホ最晩年のジャポニスム。浮世絵展、ルイ・デュムーラン、ウォルポール・ブルック―」ゴッホ展開催記念 国際シンポジウム, 広島県立美術館, 2013/7  
Kodera, Tsukasa, (招待講演)“Van Gogh and Japan Visions of Utopia”, 単独講演, カナダ国立美術館(オタワ), 2012/6

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

園府寺司 大阪大学共通教育賞(2009年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2009/11

園府寺司 Praemium Erasmianum(エラスムス研究賞), Stichting Erasmusprijs エラスムス財団, 1989/2

### 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2009年度～2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者:園府寺司

課題番号:21320029

研究題目:イディッシュ語文化圏における芸術活動の研究

研究経費: 2012年度 直接経費 2,600,000円 間接経費 780,000円

2013年度 直接経費 2,200,000円 間接経費 660,000円

研究の目的:

本研究は、中東欧のイディッシュ語文化圏における芸術活動、ならびに19世紀末から20世紀初頭にかけてのボグロムによって西欧やアメリカに移住したイディッシュ語文化圏出身の芸術家たちの活動を主たる研究対象とし、この国家なき言語文化圏の芸術の様相を明確に浮き彫りにするとともに、それらが近代芸術史の中で果たしてきた役割を明確にすることを目的とする。

### 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

独立行政法人 国立美術館・外部評価委員, 2010年4月～現在に至る

国際美術史学会 CIHA・国内委員, 2009年4月～現在に至る

民族藝術学会・理事, 2000年4月～現在に至る

## 3. 三宅 祥雄 准教授

1951年生。岡山大学法文学部哲学科哲学哲学史専攻卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学、1977)。大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:現代フランス哲学／映像論。

### 3-1. 論文

---

三宅祥雄「イマージュと想像力のために」『Arts & Media』編集委員会 *Arts & Media*, 4, 大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論コース, pp. 8-9, 2014/3

三宅祥雄「映画の視点とその変容(二)」大阪大学大学院文学研究科美学研究室『美学研究』8, pp. 1-24, 2013/8

三宅祥雄「フランス風「ダーティハリー」、あるいはアクションするカメラ」『Arts & Media』編集委員会『Arts & Media』3, 大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論コース, pp. 222-226, 2013/3

### 3-2. 著書

---

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 3-4. 口頭発表

---

なし

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本映像学会関西支部・幹事, 2011年10月～現在に至る

## 4. 桑木野 幸司 准教授

1975年生。東京大学大学院工学研究科修士課程修了(西洋建築史)。ピサ大学大学院修了。Dottore di Ricerca in Storia delle

arti visive e dello spettacolo(文学博士(美術史)・ピサ大学)。Kunsthistorisches Institut in Florenz 研究生を経て、2011年4月より現職。専攻:西洋美術・建築・庭園史。

#### 4-1. 論文

桑木野幸司「庭の掟(Lex hortorum):初期近代イタリアにおける庭園の公開について」*Arts and Media*, 4, 大阪大学アートメディア論講座, pp. 58-79, 2014/3

桑木野幸司「記憶術の叡智の家:ルネサンスの黄昏における伝統の変容」ヒロ・ヒライ、小澤実(共編)『知のマイクロコスモス:中世・ルネサンスのインテレチュアル・ヒストリー』中央公論新社, pp. 42-68, 2014/3

桑木野幸司「天国と地獄の想起:C・ロッセリ『人工記憶の宝庫』における視覚芸術からの影響について」『西洋美術研究』17, 三元社, pp. 91-110, 2013/12

桑木野幸司「思考の庭:知の編集空間としての初期近代イタリアの庭園」*Arts and Media*, 3, 大阪大学アートメディア論講座, pp. 26-46, 2013/3

Kuwakino, Koji, "The great theatre of creative thought: The Inscriptions vel tituli theatri amplissimi ... (1565) by Samuel von Quiccheberg" *Journal of the History of Collections*, Volume 25, Number 3, 2013, Oxford University Press, pp. 303-323, doi: 10.1093/jhc/fhs025, 2013/1

#### 4-2. 著書

桑木野幸司『叡智の建築家:記憶のロクスとしての16-17世紀の庭園、劇場、都市』中央公論美術出版, 542p., 2013/12

#### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

桑木野幸司「メディチ家のヴィッラと庭園—文化的景観のゆくえ」, *Arts and Media*, 4, 大阪大学アートメディア論講座, pp. 208-211, 2014/3

桑木野幸司「Ut architectura poesis—テキストの中の建築」, *Arts and Media*, 3, 大阪大学アートメディア論講座, pp. 214-217, 2013/3

桑木野幸司(翻訳)「ジョン・カナリー著、桑木野幸司訳、『古代ローマの肖像:ルネサンスの古銭収集と芸術文化』白水社, pp. 1-263(本文201ページ、索引・註63ページ), 2012/6

#### 4-4. 口頭発表

桑木野幸司(パネリスト)「十六世紀イタリアの庭園における旅と風景のモチーフ」、文学部共同研究「西欧近代における旅と風景のディスカール」西欧近代における旅と風景のディスカール, 大阪大学文学研究科共同研究, 北海学園大学, 2014/3

桑木野幸司「記憶のかたち—コスマ・ロッセリ『人工記憶の宝庫』(1579年)における天国と地獄の表象」国際シンポジウム「かたち 再考」—開かれた語りのために—, 東京文化財研究所, 東京文化財研究所, 2014/1

桑木野幸司「庭園と記憶術:初期近代西欧の芸術文化と創造的記憶の関係をめぐる一考察」国際シンポジウム「かたち 再考」にかかる準備研究会, 東京文化財研究所, 東京文化財研究所, 2013/8

桑木野幸司「初期近代西欧の芸術文化における創造的記憶」芸術学関連学会連合第8回公開シンポジウム, 芸術学関連学会, 国立国際美術館講堂, 2013/6

桑木野幸司(パネリスト)「庭の掟(Lex hortorum)—初期近代イタリア庭園の公開性について—」文学部共同研究「ヨーロッパ文化としてのグランドツアー」, 大阪大学文学研究科, 北海学園大学, 2013/3

桑木野幸司(招待講演)「ムネモシュネの宴:初期近代イタリアの文芸・視覚芸術におけるテキストとイメージの通底」エクフラシス研究会:古典学と美(術史)学の間, 科学研究費補助金基盤研究(C)「弁論術から美学へ—美学成立における古代弁論術の影響」(研究代表者:渡辺浩司), 大阪大学会館, 2013/3

桑木野幸司(招待講演)「思考の庭:情報処理空間としての初期近代イタリアの庭園」研究教育フォーラム, 大阪大学文学研究科, 大阪大学文学研究科, 2012/11

桑木野幸司 (パネリスト)「Landscape Gardening」アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築 2012 年度研究会, アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築 2012 年度研究会, 国際高等研究所, 2012/11

桑木野幸司 (招待講演)「庭園と都市—イタリア庭園の歴史から現代日本の都市空間を再考する」i spot 講座, 大阪大学 21 世紀 懐徳堂, アイ・スポット, 2012/8

桑木野幸司 (パネリスト)「記憶と方法:シエンケルの『記憶術の宝庫』(1610 年)における叡智の家について」人知の営みを歴史に 記す 中世・初期近代インテレクチュアルヒストリーの挑戦, 立教大学, 立教大学, 2012/7

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

桑木野幸司 大阪大学総長賞, 大阪大学, 2013/5

桑木野幸司 大阪大学総長奨励賞, 大阪大学, 2012/8

桑木野幸司 地中海学会「ヘレンド賞」, 地中海学会「ヘレンド賞」, 2012/6

桑木野幸司 日本学術振興会賞, 日本学術振興会, 2012/2

桑木野幸司 第五回美術に関する研究奨励賞, 公益財団法人 花王芸術・科学財団, 2011/3

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

4-6-1. 2011 年度～2012 年度、研究活動スタート支援、代表者:桑木野幸司

課題番号:23820026

研究題目:十六世紀後半のトスカーナ大公国の視覚芸術文化における記憶術からの影響

研究経費:2012 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

初期近代に大流行を閲した知的方法論である記憶術が、単なる情報整理技術にとどまらず、同時代の視覚芸術や建築・庭園学においても様々なかたちで応用されていた点を、トスカーナ大公国を中心とした芸術史の展開を置くことで、具体例に即して解明する。

4-6-2. 2013 年度～2015 年度、若手研究(A)、代表者:桑木野幸司

課題番号:25704002

研究題目:テキストの中の建築:初期近代イタリアの芸術文化における文字、図像、空間の融合

研究経費:2013 年度 直接経費 2,700,000 円 間接経費 810,000 円

研究の目的:

本研究は、テキストと建築の通底、というテーマを掲げることにより、いわゆる「姉妹芸術」、すなわち文学、視覚芸術、建築の各創作理論・実践を統一的な観点からとらえる視座の獲得を目指すとともに、初期近代の文芸・美術・哲学思想において、いかに文字と図像と空間が創造的な仕方で融合していたのかを、学際的なアプローチによって明らかにし、美術史学の新たな地平の開拓を目指す。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

地中海学会・事務局員, 2012 年 4 月～現在に至る

### 5. 古後 奈緒子 助教

1972 年生。2004 年大阪大学 文学研究科文化表現論(美学)修了、修士(文学)。京都造形芸術大学、大阪外国語大学、龍谷大

学、神戸市外国語大学、奈良大学、神戸女学院大学等の非常勤講師を経て、2014 年より現職。2001 年日本演劇批評家協会主催第 5 回「シアターアーツ賞」受賞。2001 年舞踊学会研究奨励賞。専攻：舞踊学

## 5-1. 論文

古後奈緒子「ドイツ語文献解題 C:抵抗と順応のドイツ・モダンダンス小史ーラバンとヴィグマン」『ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての〈1938 年問題〉』(早稲田大学『演劇研究基盤整備:舞台芸術文献の翻訳と公開』プロジェクト), 早稲田大学演劇博物館, 2014/3

## 5-2. 著書

なし

## 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

古後奈緒子(論文翻訳)「ルドルフ・フォン・ラバン「祝祭における祭儀教育」(1920)」『ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての〈1938 年問題〉(2013)』(早稲田大学『演劇研究基盤整備:舞台芸術文献の翻訳と公開』プロジェクト), 早稲田大学演劇博物館, 2014/3

古後奈緒子(論文翻訳)「マリー・ヴィグマン「現代の舞踊創作」(1926)」『ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての〈1938 年問題〉(2013)』(早稲田大学『演劇研究基盤整備:舞台芸術文献の翻訳と公開』プロジェクト), 早稲田大学演劇博物館, 2014/3

古後奈緒子(論文翻訳)「ルドルフ・フォン・ラバン「舞踊のコンポジションと記譜舞踊」(1928)」『ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての〈1938 年問題〉(2013)』(早稲田大学『演劇研究基盤整備:舞台芸術文献の翻訳と公開』プロジェクト), 早稲田大学演劇博物館, 2014/3

古後奈緒子(論文翻訳)「ルドルフ・フォン・ラバン「芸術作品としてのコロス」(1928)」『ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての〈1938 年問題〉(2013)』(早稲田大学『演劇研究基盤整備:舞台芸術文献の翻訳と公開』プロジェクト), 早稲田大学演劇博物館, 2014/3

古後奈緒子(論文翻訳)「第二回ドイツ舞踊家会議「舞踊形態＝舞踊言語＝舞踊記譜 アンケート」(抜粋)(1928)」『ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての〈1938 年問題〉(2013)』(早稲田大学『演劇研究基盤整備:舞台芸術文献の翻訳と公開』プロジェクト), 早稲田大学演劇博物館, 2014/3

古後奈緒子(論文翻訳)「ルドルフ・フォン・ラバン「ドイツのタンツビューネ ー前史と展望ー」(1936)」『ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての〈1938 年問題〉(2013)』(早稲田大学『演劇研究基盤整備:舞台芸術文献の翻訳と公開』プロジェクト), 早稲田大学演劇博物館, 2014/3

古後奈緒子(論文翻訳)「マリー・ヴィグマン「新しい芸術舞踊の本質」(1936)」『ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての〈1938 年問題〉(2013)』(早稲田大学『演劇研究基盤整備:舞台芸術文献の翻訳と公開』プロジェクト), 早稲田大学演劇博物館, 2014/3

古後奈緒子(舞台芸術作品字幕翻訳)「she she pop『Schubladenー引き出し』」(京都国際舞台芸術祭 2013), 京都芸術センター, 2013/10

## 5-4. 口頭発表

古後奈緒子, 田中均, 馬場朗他「ルドルフ・フォン・ラバンの祝祭論 ～舞踊コロスの構成と舞踊家の組織について～」文学研究科共同研究「芸術における『参加』の問題」第二回研究会:芸術における「参加」の問題ー美学理論と演劇研究からのアプローチ, 文学研究科共同研究, 大阪大学, 2014/2

石田佳子, 古後奈緒子「近代のフェスティバルー共同体の生成装置」リサーチとしてのワークショップ:モダニズムとファシズムー20 世紀初頭の芸術と政治について, 「劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業ーく声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声」芸術祭-, 大阪大学, 2014/2

市川明, 福島祥行, 古後奈緒子他「舞踊をめぐるネットワークと地域性」2012 年度日本演劇学会大会:関西の劇場, 日本演劇学

会, 近畿大学, 2012/6

**5-5. 受賞歴**(年度を限定しない)

---

古後奈緒子 舞踊学会研究奨励賞, 舞踊学会, 2002/12

古後奈緒子 第五回シアターアーツ賞, 国際演劇評論家協会日本センター, 2001/9

**5-6. 科学研究費補助金の獲得状況**(研究代表者となったもの)

---

なし

**5-7. その他の外部資金の受け入れ状況**

---

なし

**5-8. 外部役員等の引き受け状況**

---

国際演劇評論家協会日本センター関西支部・事務局長 『act』編集員, 2011年5月～現在に至る

京都国際舞台芸術祭 KYOTO EXPERIMENT・アドバイザー・ボード, 2010年5月～現在に至る

## 2-26 文学環境論

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：清水 康次、平田 由美、三谷研爾

准教授：石割 隆喜

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
6	0	0	0	1	0

※うち留学生 4名、社会人学生 0名。

#### 3. 修了生(2012年度～2013年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2012	3
2013	4
計	7

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

文学環境論コースでは、広い視野を持った研究を求めて、日本文学・東洋文学から欧米文学にわたる文学世界を広く研究領域とし、作品とそれを取り巻く外界(環境)との関わりを多角的に捉え、文学に対する根源的な問いを試みていくことをめざしている。そのために、教育においては、文学テキストの読解力、文学環境論にかかわる研究理論についての理解力、研究分野における基本的文献の分析力の増進を目標とした。同時にまた、高度専門職業人の養成のための基礎教育を充実させることを目標とした。

#### 2. 研究

本コースの研究は、多岐にわたる。1つの時代・地域のあり方や社会通念と文学作品との関係、異文化交流や他言語との接触、サブカルチャーの研究など、テーマが多く、領域横断的なアプローチや新しい研究理論も必要となり、翻訳も研



究の 1 方法となる。そのような文学環境論のディシプリンの確立をめざして、各方面で研究活動を積極的に進めていくことを目標とした。また、科研費等の外部資金の獲得をめざし、努力すること、大学院生については個々の研究課題にしっかりと取り組み、着実に進めていくこと、研究室態勢としても、設備・備品の充実と、研究環境の維持・改善に努めること、などを目標とした。

### 3. 社会連携

本コースは、今日的知見と広範な素養を修得し、ジャーナリズム・マスコミ・教職関係等での活動をはじめ、国際的環境において活躍できる高度な専門的職業人の養成をめざしている。国際化し、情報化していく現代社会について、またさまざまな問題を孕んで多様化していく現代文化について、視野の拡大や知識の拡充に努め、具体的には、翻訳や出版についての実際に触れ、実践を試みて、専門的な知識や知見を増強することを目標とした。

## Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

### 1. 教育

ほぼ当初の計画通りの成果があがっている。日本語文献と英語文献を中心に読解力と分析力の基礎学力を鍛えるトレーニングを行い、それらの諸力を増進させることによりかなりの進歩が見られた。修士論文の作成についても、コースの教員全員が参加する発表会を通して、院生の研究課題について真摯な討論を行ない、充実した指導と助言ができた。また、現在、イタリア・台湾・タイからの留学生が在籍しており、広く日本・東洋・西洋の文学を研究領域とすることの実が挙がってきている。

### 2. 研究

当該年度中の教員の著作、論文、翻訳などの刊行・出版等の点数は多数にのぼり、注目すべき活動が見られた。教員は、各種の研究発表大会への参加、海外出張による国際的学术交流への関与等に積極的に取り組んだ。院生は、2012 年度に 3 人、2013 年度に 4 人の修了生を出すことができ、在学生には学外での研究集会においてコメンテーターを務める者もあった。研究室の設備・備品についても、着実に充実してきており、研究環境もコース全体の活気も高い。

### 3. 社会連携

いくつかの講義・演習においてジャーナリズムや出版、文学翻訳をめぐる問題を取り上げて、専門的な知識を深めることに努めた。2012 年度には在日朝鮮人文学の英語への翻訳、1930 年代ロシアと日本との思想・文化交流を扱った修了研究があり、修了後はそれぞれ英語翻訳業や日ロ間の文化交流事業に携わっているほか、中学校の英語教員に採用された者もあった。

## Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

### 1. 教育

前記の活動の結果、2012 年度と 2013 年度に提出された計 7 本の修士論文は、いずれも充実した個性的な研究であり、高い評価が得られたばかりでなく、修了後の職業に直接する修了研究があったことも特筆するに足る。また、修了生以外の院生たちに関しても、読解力・理解力・分析力などが着実に向上し、個々の研究テーマについての考究も進み、年度目標は大いに達成できたと自己評価できる。

### 2. 研究

教員の論文発表や学術書の刊行、学会参加などの研究成果は十分に上がっており、大学院生の中にも論文等を発表する者があるなど、目標はほぼ達成されたと考えられる。

### 3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

## V. 基本情報(2012年度～2013年度)

### 1. 大学院生等による論文発表等

#### 1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2013	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	1(1)
計	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	1(1)

括弧内は査読付き論文数。

#### 1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	0	0	0	0	0
2013	0	0	1	0	0	1
計	0	0	1	0	0	1

#### 1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

##### (1)論文

【2013年度】

キアラ・コマストリ『希望 (エスポワール)』『われらの詩』と山代巴：戦後イタリアの文化状況との比較を念頭に『日本学報』33号、pp.133-138, 2014/3

##### (2)口頭発表

【2013年度】

キアラ・コマストリ「コメント2」第7回戦後文化運動合同研究会第3セッション「グローバル冷戦と文化—広島／日本／東アジアから考える—」, 奈良教育大学, 2013/11/3

##### (3)その他(書評・翻訳など)

なし

### 2. 大学院生等の受賞状況

なし

### 3. 大学院生等の留学

2012年度 大学院：0名（計0名）

2013年度 大学院：0名（計0名）

#### 4. コース出身の高度職業人・研究者

(2012年度～2013年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3名

2012年度：3名 2013年度：0名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名  
その他 1名

#### 5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2012年度：0名 2013年度：0名

#### 6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

なし

#### 7. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

##### 1. 清水 康次 教授

1954年生まれ。京都大学文学部(国語学国文学専攻)卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程(国語学国文学専攻)修了。博士(文学)(京都大学、1995)。大阪女子大学助教授、京都光華女子大学教授等を経て、2009年10月より現職。専攻：日本近代文学、書誌出版文化研究。

##### 1-1. 論文

清水康次 「書誌学的研究の地平」日本近代文学会編集委員会『日本近代文学』(日本近代文学会), 89, 日本近代文学会, pp. 218-222, 2013/11

清水康次 『『白樺』に先行する芸術運動—『明星』『スバル』『方寸』とその時代状況—』大阪大学大学院文学研究科『大阪大学大学院文学研究科紀要』53, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 47-107, 2013/3

##### 1-2. 著書

なし

##### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

清水康次 日本近代文学会関西支部京都近代文学事典編集委員会(共著)『京都近代文学事典』和泉書院, (辞典項目) 「上野英信」「小泉荃三」「三枝和子」「志賀直哉」「広瀬寿子」, 2013/5

清水康次(研究展望) 「翻訳文学の興隆から日本の近代の文学状況を探る」阪大比較文学会『阪大比較文学』(阪大比較文学会), -7, 阪大比較文学会, pp. 174-177, 2013/3

##### 1-4. 口頭発表

なし

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2012年度～2014年度、基盤研究(C) 一般、代表者:清水康次

課題番号:24520212

研究題目:雑誌『白樺』における文学の営為についての総体的な研究

研究経費: 2012年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2013年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

明治40年代から大正期にかけて刊行された同人雑誌『白樺』における文学と美術の共存、文壇および画壇への提起や提言、同人たちの意識、さまざまな情報の受信と発信、メディアとしての側面などに注目しながら、文学者たちの営みを外部との関わりの中で総体的に捉え、広く当時の時代状況の中での位置づけをはかる。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2. 平田 由美 教授

1956年生。大阪外国語大学外国語学研究科修士課程日本語学専攻修了。博士(文学)(京都大学、2002)。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:日本文学・文化研究/ジェンダー研究。

### 2-1. 論文

---

平田由美 「越境の語りに耳を傾ける」『日本学報』33, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 83-90, 2014/3

平田由美 「“他者”の場所——「半チョッパリ」という移動経験」伊豫谷・平田編『「帰郷」の物語／「移動」の語り』平凡社, pp. 27-55, 2014/1

### 2-2. 著書

---

伊豫谷登士翁, 平田由美(共編著) 『「帰郷」の物語／「移動」の語り——戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』平凡社, 333p., 2014/1

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

平田由美 (翻訳) テッサ・モーリス＝スズキ「越境する記憶——映画・植民地主義・冷戦」『「帰郷」の物語／「移動」の語り』平凡社, pp. 267-291, 2014/1

### 2-4. 口頭発表

---

平田由美 (招待講演)「メディア・民族・ジェンダー: 東アジアの《近代》と女性表象」日本研究人文講座, ソウル大学校人文大学, 2014/3

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 第15回女性史青山なを賞, 東京女子大学女性学研究所, 2000/11

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2013年度～2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者:平田由美

課題番号:25370414

研究題目:移動する作家たちの東アジア:交渉の場としての文学運動

研究経費:2013年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

本研究は、20世紀東アジアにおける文化活動を領土越境的な相互行為として調査分析し、国家や民族といった集团的帰属関係とは異なった、多様な社会関係から生まれる文学の可能性を開示することを目的とする。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

## 3. 三谷 研爾 教授

1961年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、大阪大学)。大阪府立大学助手、講師、大阪大学准教授をへて2008年4月から現職。専攻:ドイツ、オーストリア文学および文化研究。

### 3-1. 論文

なし

### 3-2. 著書

三谷研爾, なし『境界としてのテキスト カフカ・物語・言説』鳥影社, 253p., 2014/3

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

三谷研爾(書評)「大津留厚、水野博子、河野淳、岩崎周一(編)『ハプスブルク史研究入門 歴史のラビリンスへの招待』(編)『ドイツ文学論攷』(阪神ドイツ文学会), 55, 阪神ドイツ文学会, pp. 78-80, 2014/3

三谷研爾(書評)「阿部賢一『複数形のプラハ』(編)『オーストリア文学』(日本オーストリア文学会), 30, 日本オーストリア文学会, pp. 42-44, 2014/3

三谷研爾(書評)「平田達治著『放浪のユダヤ人作家ヨーゼフ・ロート』(編)『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 29, 大阪大学ドイツ文学会, pp. 99-103, 2013/11

三谷研爾(辞書項目執筆)「項目名:「カフカ」「ムージル」「ブレヒト」「異化」『現代社会学事典』弘文堂, 2012/12

三谷研爾, 三谷研爾(解説)「グスタフ・ヤノーホ『カフカとの対話』みすず書房, pp. 353-368, 2012/11

### 3-4. 口頭発表

Mitani, Kenji, なし, “Literaturforschung als moderne Wissenschaft im Meiji-Japan”, , Institut für Japanologie der Universität Heidelberg, Universität Heidelberg, 2013/7

三谷研爾, なし「阪神間モダニズム:ドイツ文化の受容と拡散」, Institut für Japanologie der Universität Heidelberg, Universität

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2011年度～2014年度、基盤研究(C) 一般、代表者:三谷研爾

課題番号:23520379

研究題目:ボヘミア文学史・民俗誌記述におけるローカリズムの位相

研究経費: 2012年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2013年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

本研究課題は、中欧の典型的な多言語・多文化地域だったボヘミアを対象とし、ナショナリズム対立がきわめて深刻化した1890年代～両大戦間期に、ドイツ系知識人によって蓄積された、この地域の文学史・民俗誌的な学術情報のディスクリール分析をおこなう。それによって、彼らがボヘミア周縁地域の文化伝統をいかに理解・表象していたかを検証するとともに、ナショナリズムに並行・拮抗するローカリズムの思考特性を明らかにし、ナショナルなものと同ローカルなものが相関する知の位相に光を当てる。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本独文学会・学会賞審査委員, 2013年6月～現在に至る

関西チェコ/スロバキア協会・会長, 2009年4月～現在に至る

大阪大学ドイツ文学会・会長, 2008年1月～現在に至る

## 4. 石割 隆喜 准教授

1970年生。大阪外国語大学外国語学部(英語学科)卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程(英文学専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、1999)。大阪外国語大学助手・講師・助教授・准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。日本英文学会第22回新人賞(1999)。専攻:アメリカ文学。

### 4-1. 論文

---

Ishiwari, Takayoshi, "Rainbow's Light: Or, 'Illuminations' in Thomas Pynchon's *Gravity's Rainbow*" *The Japanese Journal of American Studies*, (アメリカ学会), 24, pp. 185-201, 2013/6

### 4-2. 著書

---

なし

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

石割隆喜(書評)「武田悠一『読みの抗争——現代批評のレトリック』」『英文学研究』(日本英文学会), 90, pp. 101-105, 2013/12

### 4-4. 口頭発表

---

なし

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞, 日本英文学会, 1999/12

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

4-6-1. 2010年度～2012年度、若手研究(B)、代表者:石割隆喜

課題番号:22720101

研究題目:「小説」論的観点からのピンチョン研究

研究経費: 2012年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

本研究は、トマス・ピンチョンの代表作『重力の虹』のイラストレーション化がピンチョン文学のみならず今日の文学世界全体の中でどのような意味をもつのかを明らかにするために、現代アート作家ザック・スミスによる『重力の虹』イラスト作品全 755 枚を、所蔵するウォーカー・アート・センター(アメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリス市)へ赴き現地調査し、「小説」論的ポストモダニズム研究とすべき観点からのピンチョン研究を実践的側面から推進してゆこうとするものである。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本アメリカ文学会関西支部・評議員, 2011年4月～現在に至る

日本英文学会関西支部・編集委員, 2011年4月～2013年3月

## 2-27 言語生態論

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2014年4月現在)

教授 5 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：加藤 正治、田野村忠温、神山 孝夫、渋谷 勝己、岡田 禎之

#### 2. 在学生(2014年4月現在)

2014年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
6	0	0	0	0	0

※うち留学生 0名、社会人学生 0名。

#### 3. 修了生(2012年度～2013年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2012	0
2013	2
計	2

### II. 掲げた目標(2012年度～2013年度)

#### 1. 教育

従来の方法にとらわれない柔軟な姿勢で、より広い総合的な見地から言語を見る素地を養うべく、5名の教員が個々に担当する講義および演習等をとおして、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につけさせることを目標とした。

#### 2. 研究

院生各自が既存の枠組みにこだわらずに独自に研究課題を設定して、5名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、従来の言語研究の成果に立脚しつつ、新たな分析方法を模索して言語を分析するための実践的な研究能力を身につけることを目標とした。

#### 3. 社会連携



研究者を養成するばかりでなく、実際に言語教育に携わっている学校教員、新聞・雑誌、出版・宣伝広告等に関わっている社会人を高度専門職業人として養成し、その結果を社会に還元することを目標とした。

### Ⅲ. 活動の概要(2012 年度～2013 年度)

#### 1. 教育

院生は各自の関心に従い、教員が担当する言語生成論、言語接触論、言語変化論、言語分析論、比較言語学のそれぞれ講義と演習を選択・履修し、各自の研究のための基礎を養った。

#### 2. 研究

院生は各自の関心に従い、英語の同族目的語構文、英語の either の意味分析、古英語の硬口蓋化、日本語の指示詞の機能、日本語類義動詞の意味分析、大阪方言の推量などを表す文末形式などのさまざまな課題を独自に設定し、必ずしも既存の枠組みにとらわれない独自の方法で研究を進めた。その成果を教員と院生の全員が出席する演習において順次発表し、さまざまな議論を交わすなかで修士論文作成の準備を進めた。

#### 3. 社会連携

特筆すべき活動はなかった。2012～2013 年度入学者に社会人は含まれなかった。

### Ⅳ. 自己点検・自己評価(2012 年度～2013 年度)

#### 1. 教育

学生は各自の関心に従い、5名の教員が個々に担当する講義および演習を履修して、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につけた。よって掲げた目標はほぼ達成されたと考える。

#### 2. 研究

院生各自は既存の枠組みにとらわれずに、自由に実践的な課題を設定し、5名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、従来の言語研究の考え方に立脚しつつ、新たな分析方法を模索した。よって掲げた目標はほぼ達成されたと考える。

#### 3. 社会連携

特筆すべき活動はなかった。

### Ⅴ. 基本情報(2012 年度～2013 年度)

#### 1. 大学院生等による論文発表等

##### 1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2012	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2013	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
---	------	------	------	------	------	------

括弧内は査読付き論文数。

## 1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2012	0	0	0	0	0	0
2013	0	1	0	0	0	0
計	0	1	0	0	0	0

## 1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

なし

### (2)口頭発表

【2013年度】

山上洋平「古英語の硬口蓋化を生じた過程について」日本歴史言語学会 2013年大会，東北大学，2013/12/1

### (3)その他(書評・翻訳など)

なし

## 2. 大学院生等の受賞状況

富田美乃里，平成24年度（第7回）漢検漢字文化研究奨励賞，日本漢字能力検定協会，2013/3/28

## 3. 大学院生等の留学

2012年度 大学院：1名（計1名）

2013年度 大学院：1名（計1名）

## 4. コース出身の高度職業人・研究者

(2012年度～2013年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2012年度：0名 2013年度：1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名  
その他 0名

## 5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2012年度：0名 2013年度：0名

## 6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

2013年7月5日 第90回待兼山ことばの会を開催

講演者：今西祐介氏 (Massachusetts Institute of Technology)

講演タイトル："When ergative is default: Ergativity in Mayan and beyond"

2013年12月20日 第91回待兼山ことばの会を開催

講演者：高見健一氏 (学習院大学)

講演タイトル："日本語の数量詞遊離再考—韻律的・統語的要因か、意味的・機能的要因か?"

## 7. 教員の研究活動(2012年度～2013年度の過去2年間)

### 1. 加藤 正治 教授

1955年生。名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程修了(英語学講座)。文学修士(名古屋大学、1979)。名古屋大学助手、甲南女子大学講師、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:英語学。

#### 1-1. 論文

加藤正治 「vP-raising について — Biberauer & Roberts (2005/2006)に対する短評 —」中村未樹『英米研究』(大阪大学 英米学会), 38, 大阪大学 英米学会, pp. 21-30, 2014/3

#### 1-2. 著書

なし

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 1-4. 口頭発表

加藤正治 「古い時代の英語の文字について——古英語を中心に」サイエンスカフェ, 大阪大学総合学術博物館, 大阪大学, 2012/8

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部・編集委員, 2013年4月～現在に至る

### 2. 田野村 忠温 教授

1958年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学(言語学専攻)。文学修士(京都大学、1984)。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:言

語学・日本語学。

## 2-1. 論文

---

Tanomura, Tadaharu, "A corpus-based analysis of some time-related aspects of contemporary Japanese", Giuliana Diani, Julia Bamford and Silvia Cavalieri(eds.) *Variation and Change in Spoken and Written Discourse: Perspectives from Corpus Linguistics*, Amsterdam: John Benjamins, pp. 255-267, 2013/11

田野村忠温 「日本語研究論文作成支援ツール——例文番号の付け直しほか——」『日本語学』32-14, 明治書院, pp. 216-223, 2013/11

田野村忠温 「『代わり』の意味分析」藤田保幸(編)『形式語研究論集』和泉書院, pp. 61-85, 2013/10

田野村忠温 「日本語のコロケーション」堀正広(編)『これからのコロケーション研究』ひつじ書房, pp. 193-226, 2012/12

田野村忠温 「BCCWJ に収められた新種の言語資料の特性について——データ重複の諸相とコーパス使用上の注意点——」『待兼山論叢』第46号文化動態論篇, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 59-82, 2012/12

田野村忠温 「日本語研究の観点から見た昨今のサーチエンジン事情——Google と Yahoo!の技術提携の結果——」『計量国語学』28-5, 計量国語学会, pp. 186-193, 2012/6

## 2-2. 著書

---

荻野綱男, 田野村忠温(共編)『講座 IT と日本語研究8 質問調査法と統計処理』明治書院, 2012/6

荻野綱男, 田野村忠温(共編著)『講座 IT と日本語研究4 Ruby によるテキストデータ処理』明治書院, 274p., 2012/4

## 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

## 2-4. 口頭発表

---

田野村忠温 「日本語コーパスの現在——BCCWJ の資料的特性を中心に——」第一回中南地域日本語教育研究シンポジウム, 湖南大学(中国・長沙市), 2013/10

田野村忠温 「日本語研究とコーパス——コーパスの概念と利用の基礎——」, 華中科技大学(中国・武漢市), 2013/9

田野村忠温 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』——その概要、用法、使用上の注意——」, 華中科技大学(中国・武漢市), 2013/9

田野村忠温 「日本語のコロケーション——概念の考察とコーパスに基づく分析——」, 華中科技大学(中国・武漢市), 2013/9

田野村忠温 「コーパスの種類と特徴」, 元智大学(台湾・中壢市), 2013/5

田野村忠温 「BCCWJ の資料的特性と利用上の注意」, 元智大学(台湾・中壢市), 2013/5

田野村忠温 「BCCWJ の有効利用の方法」, 元智大学(台湾・中壢市), 2013/5

田野村忠温 「BCCWJ に含まれるウェブデータの特性について——データ重複の諸相と BCCWJ 使用上の注意点——」第2回コーパス日本語学ワークショップ, 国立国語研究所, 2012/9(『第2回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp. 265-274, 2012/9)

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2012年度～2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田野村忠温

課題番号: 24520425

研究題目: コーパス日本語研究の高度化と基盤形成のための実践的総合研究

研究経費: 2012年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円  
2013年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本研究は、応募者が従来継続的に行ってきた研究に基づき、コーパス(電子媒体の言語研究資料)を用いた日本語研究の新たな領域と手法を開拓し発展させ、それを通じてコーパスに基づく日本語研究の高度化を推進することを主たる目的とする。併せて、学界におけるコーパス日本語研究の基盤形成に寄与することをも重要な目的とし、研究成果の国内外での発表(論文・口頭)のみならず、各種コーパス関連ソフトウェアの開発・公開や、講演や執筆などの形での啓発活動にも積極的に取り組む。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本学術振興会・特別研究員等審査会専門委員、国際事業委員会書面審査員, 2012年8月～2013年7月  
日本言語学会・常任委員, 2006年4月～現在に至る  
日本言語学会・評議員, 2000年4月～現在に至る

## 3. 神山 孝夫 教授

1958年生。東京外国語大学大学院外国語学研究所修士課程修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻: 歴史言語学、音声学、ヨーロッパ文化史。

### 3-1. 論文

---

神山孝夫「堀井令以知著『言語文化の深層をたずねて』(書評)」日本歴史言語学会(編)『歴史言語学』(日本歴史言語学会), 2, 日本歴史言語学会, pp. 65-74, 2013/12

### 3-2. 著書

---

神山孝夫『ロシア語音声概説』研究社, 259p., 2012/7

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 3-4. 口頭発表

---

なし

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

神山孝夫 大阪大学共通教育賞(2008年前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本歴史言語学会・理事, 2011年12月～現在に至る

大阪言語研究会・世話人, 2007年1月～現在に至る

## 4. 渋谷 勝己 教授

1959年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日文学専攻中退。学術博士(大阪大学)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授、大阪大学准教授等を経て、2009年4月より現職。専攻:日本語学。

### 4-1. 論文

渋谷勝己「歴史社会言語学の(再)構想」『明海日本語』18, 明海大学外国語学部日本語学科, pp. 313-321, 2013/12

渋谷勝己「多言語・多変種能力のモデル化試論」片岡邦好・池田佳子(編)『コミュニケーション能力の諸相』ひつじ書房, pp. 29-51, 2013/3

### 4-2. 著書

渋谷勝己, 簡月真(共著)『旅するニホンゴ—異言語との出会いが変えたもの—』岩波書店, pp. 1-30, 77-104, 129-186, 2013/9

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渋谷勝己(書評論文)「川村大著『ラリル形述語文の研究』」『日本語文法』(日本語文法学会), 14巻1号, 日本語文法学会, pp. 142-150, 2014/3

### 4-4. 口頭発表

渋谷勝己(パネリスト)「話すことと文法を創り出すこと」第8回日本語実用言語学国際会議特別パネル:コーパスと日本語教育研究, 日本語実用言語学国際会議, 国立国語研究所, 2014/3

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2010年度～2012年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渋谷勝己

課題番号:22520466

研究題目:日系人日本語変種の成立過程に関する言語生態論的研究

研究経費:2012年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

世界各地において、母語話者や非母語話者によって使用されるさまざまな日本語変種のなかから、日系人日本語変種を取り上げて、言語生態論的な立場から分析を行うことを目的とする。具体的には、次の3点を課題とする。(1)日系人日本語変種の文法事象を中心に記述作業を進める。(2)その結果をつきあわせ、日系人日本語変種をより包括的に記述するための分析枠を構築する。(3)各地日系人日本語変種の相違点を生み出した、言語生態論的な要因を明らかにする。

4-6-2. 2013年度～2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渋谷勝己

課題番号:25370516

研究題目:江戸後期の著作者を対象とするスタイル能力の歴史社会言語学的研究

研究経費: 2013 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的:

さまざまなスタイルを用いてさまざまなジャンルの文章を書いた江戸後期の著作者たち(本居宣長、大田南畝、山東京伝など)の、各ジャンルでのスタイルとその使用の実態を、スタイル習得、スタイル切換えといった観点のもと、変異理論等の枠組みを用いて記述する。また、ことばの複数のスタイルをどのようなかたちで頭のなかにストックしていたのか、そのスタイル能力のモデルを帰納的に構築する。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本語学会・編集委員, 2010 年 6 月～2013 年 5 月

日本語学会・評議員, 2009 年 4 月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2008 年 10 月～現在に至る

日本方言研究会・世話人, 2008 年 4 月～2014 年 3 月

日本語文法学会・評議員, 2006 年 7 月～現在に至る

### 5. 岡田 禎之 教授

1965 年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程(英語学専攻)中途退学。文学博士(大阪大学、2001 年)。第 37 回市河賞(2003 年)。大阪大学助手、岡山大学講師、金沢大学助教授、神戸市外国語大学助教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2010 年 4 月より現職。専攻: 英語学。

#### 5-1. 論文

---

岡田禎之「名詞の語彙概念拡張に認められる非対称性」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 47-文化動態論篇, 大阪大学文学研究科, pp. 41-62, 2013/12

Okada, Sadayuki, "(Ir)regularity of Conceptual Expansions in Adjunct Nominals," Sadayuki Okada(ed.) *Osaka University Papers in English Linguistics*, 16, 大阪大学文学研究科英語学研究室, pp. 161-185, 2013/9

#### 5-2. 著書

---

Okada, Sadayuki(ed.), *Osaka University Papers in English Linguistics*, 16, 大阪大学文学研究科英語学研究室, 228p., 2013/9

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

#### 5-4. 口頭発表

---

岡田禎之「日英語の名詞概念拡張と項・付加詞の非対称性」大阪市大英文学会, 大阪市立大学, 2013/11

岡田禎之「語彙概念拡張に関する一考察」蛭池認知言語学研究会, 大阪大学, 2013/9

岡田禎之「名詞の語彙概念拡張について」福岡言語学会 2012 年 12 月例会, 福岡言語学会, 九州大学, 2012/12

岡田禎之「名詞の語彙概念拡張と項・付加詞の非対称性」日本英文学会関西支部大会シンポジウム, 日本英文学会関西支部, 京都大学, 2012/12

#### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

岡田禎之 10 papers selection, Annual Report of Osaka University Academic Achievement 2009-2010, Osaka University, 2010/12  
岡田禎之 第 37 回市河賞, 財団法人語学教育研究所, 2003/10

## 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

5-6-1. 2010 年度～2012 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田禎之

課題番号:22520496

研究題目:語彙概念拡張の認可条件

研究経費:2012 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

名詞句の概念拡張がどのような条件下で認可されるのかを考察することを目的とした研究である。当初は、比較表現に認められる通言語的な差異を通して、この問題にアプローチしていたが、そのほかの場合として、因果関係的な文脈における例外的な概念拡張事例の検証や、N like N 型の定型表現などの事例を検証することで、より広く一般的な認可条件を特定していくことを目指した。

5-6-2. 2013 年度～2017 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田禎之

課題番号:25370551

研究題目:語彙概念拡張の非対称性と意味変化

研究経費:2013 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

名詞の語彙概念拡張に認められる、項位置と付加詞位置における解釈の非対称性を、コーパスデータや、内省判断に基づいて検証していくと同時に、語彙概念拡張が項位置に置いて創発する可能性が高いことを、具体的な事例からの歴史的な検証を少しずつ積み重ねていくことで検証できるか、検討する。この語彙概念拡張は、メトニミーに限らず、メタファー解釈に関しても同様の傾向が認められるかどうかを検討していきたいと考えている。

## 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 5-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本英語学会・事務局長, 2013 年 9 月～現在に至る

日本英文学会関西支部・理事, 2013 年 4 月～現在に至る

日本英語学会・評議員, 2013 年 4 月～現在に至る

日本語用論学会・外部査読委員, 2012 年 9 月～2012 年 10 月

日本英文学会関西支部・編集委員, 2012 年 4 月～2014 年 3 月

日本英語学会・編集委員, 2011 年 10 月～2013 年 9 月

阪大英文学会・幹事, 2010 年 4 月～現在に至る



## 2-28 留学生専門教育

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

留学生専門教育では、留学生の勉学・研究をサポートするために、日本語の授業やオフィスアワーを設けている。日本語の授業では、論文作成法、発表や議論の仕方などを学ぶ。とくに論理的思考の訓練に重点をおき、質を落とさずにわかりやすく文章(論文)を書けるようにすることを目指している。

### 教員の研究活動(2012 年度～2013 年度の過去 2 年間)

#### 1. 鄭 聖汝 講師

1957年生。神戸大学大学院文化学研究科博士後期課程修了。博士(学術)。日本学術振興会外国人特別研究員を経て現職。専攻:日韓対照言語学, 類型論

##### 1-1. 論文

井川寿子, 鄭聖汝(共著)「中国語における消失を表す存現文について」『中日言語対照研究論叢』4, 中日言語対照研究会, pp. 58-71, 2013/8

鄭聖汝「済州方言の-nta と関連語末形式の対立について」『方言学』17, 韓国方言学会, pp. 105-141, 2013/6

鄭聖汝「非意図的な出来事と「損失構文」—使役構文との相違について—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』53, 大阪大学, pp. 105-122, 2013/3

鄭聖汝, 黒川尚彦(共著)「現代日本語における「人がある」存在文の成立条件」『待兼山論叢 日本学編』46, 大阪大学, pp. 1-22, 2012/12

鄭聖汝, 円山拓子(共著)「非意図性と「可能」—日本語と韓国語の観点から—」『日本語文化研究 第二輯(上)』延辺大学, pp. 453-460, 2012/8

##### 1-2. 著書

なし

##### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

##### 1-4. 口頭発表

鄭聖汝「済州方言の-nta について」韓日方言対照と言語の記述に関する国際シンポジウム—済州方言の記述とテンス・アスペクト・モダリティを中心に—, 科学研究費補助金基盤(B)、代表:金善美、課題番号 21320082, 京都大学, 2012/11

Shibatani Masayoshi, Chung Sung-Yeo, Bayaerduleng (招待講演) “Genitive Modifiers: Ga/No Conversion Revisited”, Japanese/Korean Linguistics Conference 22, Japanese/Korean Linguistics Conference, NINJAL, 2012/10

井川寿子, 鄭聖汝「中国語における消失を表す存現文について」第4回中日対照言語学シンポジウム, 中日対照言語学研究会, 湖南大学, 2012/8 (『第4回中日対照言語学シンポジウム予稿集』 p. 106, 2012/8)

##### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### **1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)**

---

1-6-1. 2012年度～2014年度、基盤研究(C) 一般、代表者:鄭聖汝

課題番号:24520426

研究題目:他動性のプロトタイプ理論と類型論的仮説に関する理論的・実証的研究

研究経費: 2012年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

2013年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

本研究は他動性に関する二つの仮説—他動性のプロトタイプ理論(普遍性)と類型論的仮説(スル型言語とナル型言語)—の関係に焦点をあて、両者の整合性の可否を検証し、より包括的な言語類型論の枠組みを構築しようとするものである。この目的の達成のために本研究では心理学的な実験手法を用い、実際の発話資料を調査する。調査対象の言語は、日本語(なる型)と英語(スル型)の他に、類型特徴の異なるアジア諸言語(韓国語、中国語、タイ語、マレー語、ヒンディー語、ウルドゥー語、テルグ語)である。

#### **1-7. その他の外部資金の受け入れ状況**

---

なし

#### **1-8. 外部役員等の引き受け状況**

---

関西言語学会・大会運営委員, 2011年4月～現在に至る

日本語文法学会・編集委員, 2010年4月～2013年3月

## 編集後記

ここに発刊する『年報 2014』は、文学研究科および文学部の 2012 年度および 2013 年度の 2 年間の教育・研究活動の記録である。

本書収録のデータの収集については、これまでと同様、全ての文学研究科所属教職員の多大な協力を賜った。また、データの統合と点検については、評価・広報室の小西智佳子さん・倉智聖子さんのご尽力によるものである。

「発刊の趣旨」でも述べたように、本『年報 2014』からは紙媒体による発行形態を取り止め、PDF ファイルのみでの発行とした。そのことにより、編集作業については、省力化できた部分も大きかった。しかし、そのことでデータ収集の手間が軽減されたわけではない。研究科の研究・教育活動が盛んになればなるほど、当然その成果についてのデータ収集や整理の労力も増大する道理であり、苦勞が多いことは一面では喜ぶべきことともいえようが、教育・研究により多くの力を傾注するためにも、広くアイデアを頂きつつ、この作業に関しては可能な限り合理化・効率化を図っていく必要があるだろう。

第 1 部には、研究科全体・各室・各種プロジェクト・各種委員会等の活動報告を収録した。基本的な編集方針や形式は、前刊『年報 2012』を踏襲し、それぞれ関係する教員や各事務部局にデータ収集と執筆をお願いしたものである。プロジェクトに関しては、「グローバル COE プログラム」の実施期間が満了した一方、新たに「卓越した大学院拠点形成支援プログラム」「劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業」が開始され、海外展開や社会との連携などを視座に入れた、多様な活動が行われている。

第 2 部は、各専門分野・コースの教育・研究活動に関するデータを収録した。教員個人のデータの収集は、本『年報 2014』もこれまでに引き続き、2007 年度より導入・活用された、入力用のエクセルシートを使用した。改善しうる点はなお存するが、基本的な方法は軌道に乗ってきたと言える。その他の情報、殊に大学院生の業績データの収集にあたっては、コースオーガナイザーを初めとする各専門分野の教員や、助教の方々を大いに煩わせた。学生の在学形態やキャリアパスの複雑化といった変化もデータ収集の難しさの一つの背景となっているが、そうしたことにも対応する形での作業の効率化について、今後特に検討を重ねたい。

繰り返しになるが、万事繁多な中、本『年報 2014』を遅滞なく計画通りに発行することが出来たのは、ひとえに、データの収集から校正に至るまで、快くご協力下さった関係の皆さまのおかげである。改めて厚く御礼申し上げ、結びの言葉としたい。

2015 年 1 月  
矢田勉、内田次信

---

大阪大学大学院文学研究科  
**年報 2014**  
教育・研究(2012-2013年度)

2015年3月発行

**編集** 大阪大学大学院文学研究科／評価・広報室  
**発行** 大阪大学大学院文学研究科  
〒560-8532 豊中市待兼山町 1-5  
TEL:FAX 06-6850-5107(評価・広報室)

---

聖德太子御書  
之御書也

後天為名用也

一 後天為名用也

一 後天為名用也

一 後天為名用也

一 後天為名用也

心

安永七年 戊戌六月